

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡 IV

2003

埼玉県熊谷市教育委員会

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一 ^{いっ} ^{ほん} ^ぎ ^{まえ} ^い ^{せき} 本 木 前 遺 跡 IV

2003

埼玉県熊谷市教育委員会



B区方形周溝墓群



B区2号方形周溝墓主体部出土勾玉·管玉



B区1号方形周溝墓底部破損土器出土狀況

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や中世の館跡等の埋蔵文化財が、数多く分布しております。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる、先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市を形成する礎としていかなければならないと考えております。

本書は、準用河川新奈良川の調節池の建設に伴い、平成13年6月から平成14年3月にかけて実施された、一本木前遺跡の第四次発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の発掘調査では、古墳時代の住居跡が多数と4基の方形周溝墓、さらには多数の畠跡が確認されました。大集落の中の生産地・墓域という、性格の異なる遺構が共存することが確認されたことは、きわめて注目すべき成果だと言えます。

本書の成果が、埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財保護思想の普及・啓蒙資料として、広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解、ご協力を賜りました熊谷市建設部河川課並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成15年3月








熊谷市教育委員会

教育長 飯塚 誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字東別府字一本木前1390番地他に所在する、一本木前遺跡第4次調査（平成13年度分）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、新奈良川第3調節池掘削工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成13年6月1日から平成14年3月29日であり、整理報告書刊行期間は、平成14年6月1日から平成15年3月31日である。
- 5 発掘調査は、寺社下博、加藤隆則、蔵持俊輔、小野寺弘光、整理報告書作成は寺社下博、松田哲がそれぞれ担当した。
- 6 発掘調査の写真撮影は寺社下、加藤、蔵持、小野寺、遺物の写真撮影は寺社下がそれぞれ担当した。
- 7 出土品の整理及び図版の作成は、寺社下、松田が行った。
- 8 本書の執筆・編集は、寺社下が行った。
- 9 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、(株)東京航業研究所に委託した。
- 10 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管する。
- 11 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。
埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県立埋蔵文化財センター
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、大里郡市町村文化財担当者会

凡 例

- 1 各遺構の番号は、発掘調査時に付した略号から、整理時にB・Cそれぞれの調査区において、北東隅を基点として、東から西へ、さらには北から南への順序で付け直した。またB区については、同一調査区の調査が2年度に亘ったため、平成12年度調査区に連続した名称を付している。
- 2 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。
遺跡分布図 1/50,000 遺構配置図 1/600
方形周溝墓平面図 1/80 方形周溝墓断面図 1/60 畠跡 1/100
住居跡・掘立柱建物跡・柵列・土坑・井戸跡・方形周溝遺構 1/60
溝跡平面図 1/400 溝跡断面図 1/60 遺構部分図 1/30、1/60
他の縮尺については、その都度示した。
- 3 方形周溝墓平面コンター図のうち、太い一点鎖線は上端線を示し、細い一点鎖線は下端線を示す。
- 4 遺構挿図中のレベル基準線は、全体でのレベル統一が不可能であったため、一図版内で統一できたものについてはスケール上位に数値を示したが、それもできなかった場合には、それぞれの基準線上に数値を示した。
- 5 遺構挿図中の略号及びスクリーントーンは、原則として次の内容を示す。
地山 =  炭化物・灰 =   焼土 =   骨 = ※
- 6 遺構覆土の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。
- 7 遺物挿図の縮尺は、原則として1/4である。他の縮尺については、その都度示した。
- 8 遺物挿図中、須恵器及び陶磁器については、断面を黒で塗りつぶして表示している。
- 9 遺物挿図中のスクリーントーンは、原則として次の内容を示す。
釉彩 =  赤彩 = 
- 10 遺物観察表中、番号に網目表示のある遺物は、写真図版掲載遺物であることを示す。
- 11 遺物観察表中の単位は、全てcmである。なお、実測できず推定復元した場合には、推定値として（ ）で括弧表示した。
- 12 遺物観察表中の胎土は、肉眼観察可能な次の包含物質について、多い順にその番号を示した。
① 白色粒子 ② 黒色粒子 ③ 赤色粒子 ④ 片岩粒子 ⑤ 白色針状物質 ⑥ 礫
- 13 遺物観察表中の焼成は、次のように3段階に区分して、該当する項目を番号で示した。
① 良好（良く焼きしまっている） ② 普通 ③不良（脆く、崩れやすい）
- 14 遺物観察表中の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例
目 次

I 発掘調査の概要	5 井戸跡	69
1 調査に至る経過	6 畠 跡	71
2 発掘調査・報告書作成の経過	7 溝 跡	76
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	8 遺構外出土遺物	80
II 遺跡の立地と環境	V C区の遺構と遺物	
III 遺跡の概要	1 住居跡	83
1 調査の方法	2 掘立柱建物跡	153
2 検出された遺構と遺物	3 土 坑	155
IV B区の遺構と遺物	4 畠 跡	168
1 方形周溝墓	5 溝 跡	184
2 住居跡	6 その他の遺構	186
3 柵 列	7 遺構外出土遺物	196
4 土 坑	VI まとめ	198

挿図目次

第 1 図 埼玉県の地形図	第 12 図 B区 1号方形周溝墓出土遺物	24
第 2 図 一本木前遺跡周辺遺跡分布図	第 13 図 B区 2号方形周溝墓	27、28
第 3 図 一本木前遺跡位置図	第 14 図 B区 2号方形周溝墓土層図	31
第 4 図 一本木前遺跡調査区全測図	第 15 図 B区 2号方形周溝墓出土遺物	34
第 5 図 調査区グリット配置図	第 16 図 B区 3号方形周溝墓	36
第 6 図 13年度調査区遺構配置図	第 17 図 B区 3号方形周溝墓土層図	38
第 7 図 基本土層図	第 18 図 B区 3号方形周溝墓出土遺物	40
第 8 図 B区遺構配置図	第 19 図 B区 4号方形周溝墓及び各方形周溝墓 遺物出土状況横断面	41、42
第 9 図 B区方形周溝墓配置図	第 20 図 B区 4号方形周溝墓土層図	45
第 10 図 B区 1号方形周溝墓	第 21 図 B区 4号方形周溝墓出土遺物	47
第 11 図 B区 1号方形周溝墓土層図		

第 22 图	B 区住居跡配置图	49	第 59 图	C 区 5 号住居跡出土遺物(1)	90
第 23 图	B 区 4 号住居跡	50	第 60 图	C 区 5 号住居跡出土遺物(2)	91
第 24 图	B 区 4 号住居跡出土遺物(1)	51	第 61 图	C 区 6 号住居跡	93
第 25 图	B 区 4 号住居跡出土遺物(2)	52	第 62 图	C 区 6 号住居跡出土遺物	93
第 26 图	B 区 22 号住居跡	54	第 63 图	C 区 7 号住居跡	94
第 27 图	B 区 22 号住居跡出土遺物(1)	55	第 64 图	C 区 7 号住居跡出土遺物	94
第 28 图	B 区 22 号住居跡出土遺物(2)	56	第 65 图	C 区 8 号住居跡	95
第 29 图	B 区 22 号住居跡出土遺物(3)	58	第 66 图	C 区 9 号住居跡	96
第 30 图	B 区 32 号住居跡	59	第 67 图	C 区 9 号住居跡出土遺物	98
第 31 图	B 区 38 号住居跡(1)	60	第 68 图	C 区 10 号住居跡	99
第 32 图	B 区 38 号住居跡(2)	61	第 69 图	C 区 10 号住居跡出土遺物	100
第 33 图	B 区 38 号住居跡出土遺物(1)	62	第 70 图	C 区 11 号住居跡	101
第 34 图	B 区 38 号住居跡出土遺物(2)	63	第 71 图	C 区 12 号住居跡	102
第 35 图	B 区 1 号・2 号柵列	65	第 72 图	C 区 12 号住居跡出土遺物	103
第 36 图	B 区 3 号柵列	66	第 73 图	C 区 13 号住居跡	105
第 37 图	B 区 49 号土坑出土遺物	67	第 74 图	C 区 13 号住居跡出土遺物(1)	106
第 38 图	B 区土坑	68	第 75 图	C 区 13 号住居跡出土遺物(2)	107
第 39 图	B 区井戸跡	69	第 76 图	C 区 14 号住居跡	109
第 40 图	B 区 19 号井戸跡出土遺物	70	第 77 图	C 区 14 号住居跡出土遺物	109
第 41 图	B 区 20 号井戸跡出土遺物	71	第 78 图	C 区 15 号住居跡	110
第 42 图	B 区 9 号畠跡	72	第 79 图	C 区 15 号住居跡出土遺物	110
第 43 图	B 区 10 号畠跡	73	第 80 图	C 区 16 号住居跡	111
第 44 图	B 区 11 号畠跡	74	第 81 图	C 区 16 号住居跡出土遺物	112
第 45 图	B 区 12 号畠跡	75	第 82 图	C 区 17 号住居跡	113
第 46 图	B 区溝跡	77	第 83 图	C 区 17 号住居跡出土遺物(1)	114
第 47 图	B 区 33 号溝跡出土遺物	79	第 84 图	C 区 17 号住居跡出土遺物(2)	115
第 48 图	B 区遺構外出土遺物	80	第 85 图	C 区 18 号住居跡	117
第 49 图	C 区遺構配置图	81、82	第 86 图	C 区 18 号住居跡出土遺物	117
第 50 图	C 区 1 号住居跡	84	第 87 图	C 区 19 号住居跡	118
第 51 图	C 区 1 号住居跡出土遺物	85	第 88 图	C 区 19 号住居跡出土遺物	119
第 52 图	C 区 2 号住居跡	85	第 89 图	C 区 20 号住居跡	120
第 53 图	C 区 2 号住居跡出土遺物	86	第 90 图	C 区 20 号住居跡出土遺物	121
第 54 图	C 区 3 号住居跡	87	第 91 图	C 区 21 号住居跡(1)	123
第 55 图	C 区 3 号住居跡出土遺物	87	第 92 图	C 区 21 号住居跡(2)	124
第 56 图	C 区 4 号住居跡	88	第 93 图	C 区 21 号住居跡出土遺物(1)	125
第 57 图	C 区 4 号住居跡出土遺物	88	第 94 图	C 区 21 号住居跡出土遺物(2)	126
第 58 图	C 区 5 号住居跡	89	第 95 图	C 区 22 号住居跡	128

第96図	C区22号住居跡出土遺物	129	第124図	C区1号畠跡	169
第97図	C区23号住居跡(1)	130	第125図	C区2号畠跡	170
第98図	C区23号住居跡(2)	131	第126図	C区3号畠跡	171
第99図	C区23号住居跡出土遺物	132	第127図	C区4号畠跡	171
第100図	C区24号住居跡	133	第128図	C区5号畠跡	173
第101図	C区24号住居跡出土遺物	134	第129図	C区6号畠跡	174
第102図	C区25号住居跡	135	第130図	C区7号畠跡	175
第103図	C区25号住居跡出土遺物	135	第131図	C区8号・9号畠跡	177
第104図	C区26号住居跡(1)	137	第132図	C区10号畠跡	178
第105図	C区26号住居跡(2)	139	第133図	C区11号畠跡	179
第106図	C区26号住居跡出土遺物(1)	140	第134図	C区12号畠跡	180
第107図	C区26号住居跡出土遺物(2)	141	第135図	C区13号畠跡	180
第108図	C区26号住居跡出土遺物(3)	143	第136図	C区14号畠跡	182
第109図	C区26号住居跡出土遺物(4)	144	第137図	C区15号畠跡	183
第110図	C区26号住居跡出土遺物(5)	145	第138図	C区畠跡出土遺物	183
第111図	C区27号住居跡(1)	147	第139図	C区溝跡	184
第112図	C区27号住居跡(2)	148	第140図	C区2号溝跡出土遺物	185
第113図	C区27号住居跡出土遺物(1)	149	第141図	C区1号方形周溝遺構・出土遺物	186
第114図	C区27号住居跡出土遺物(2)	151	第142図	C区土器集中No.1	188
第115図	C区27号住居跡出土遺物(3)	152	第143図	C区土器集中No.1出土遺物(1)	189
第116図	C区1号掘立柱建物跡	154	第144図	C区土器集中No.1出土遺物(2)	190
第117図	C区土坑(1)	156	第145図	C区土器集中No.1出土遺物(3)	191
第118図	C区土坑(2)	158	第146図	C区土器集中No.2・No.3・No.4	192
第119図	C区土坑(3)	160	第147図	C区土器集中No.2出土遺物	193
第120図	C区土坑(4)	162	第148図	C区土器集中No.3出土遺物	194
第121図	C区土坑(5)	164	第149図	C区土器集中No.4出土遺物	195
第122図	C区土坑(6)	166	第150図	C区遺構外出土遺物	197
第123図	C区土坑出土遺物	167			

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	7	第4表	B区3号方形周溝墓出土遺物観察表	40
第2表	B区1号方形周溝墓出土遺物観察表	24	第5表	B区4号方形周溝墓出土遺物観察表	47
第3表	B区2号方形周溝墓出土遺物観察表	35	第6表	B区4号住居跡出土遺物観察表	53

第7表	B区22号住居跡出土遺物觀察表……57	第30表	C区19号住居跡出土遺物觀察表 ……119
第8表	B区38号住居跡出土遺物觀察表……63	第31表	C区20号住居跡出土遺物觀察表 ……121
第9表	B区49号土坑出土遺物觀察表……67	第32表	C区21号住居跡出土遺物觀察表 ……124
第10表	B区19号井戸跡出土遺物觀察表……71	第33表	C区22号住居跡出土遺物觀察表 ……128
第11表	B区20号井戸跡出土遺物觀察表……71	第34表	C区23号住居跡出土遺物觀察表 ……132
第12表	B区33号溝跡出土遺物觀察表……79	第35表	C区24号住居跡出土遺物觀察表 ……134
第13表	B区遺構外出土遺物觀察表……80	第36表	C区25号住居跡出土遺物觀察表 ……136
第14表	C区1号住居跡出土遺物觀察表……84	第37表	C区26号住居跡出土遺物觀察表 ……142
第15表	C区2号住居跡出土遺物觀察表……86	第38表	C区27号住居跡出土遺物觀察表 ……150
第16表	C区3号住居跡出土遺物觀察表……87	第39表	C区土坑出土遺物觀察表 ……167
第17表	C区4号住居跡出土遺物觀察表……89	第40表	C区畠跡出土遺物觀察表 ……183
第18表	C区5号住居跡出土遺物觀察表……92	第41表	C区2号溝跡出土遺物觀察表 ……185
第19表	C区6号住居跡出土遺物觀察表……92	第42表	C区1号方形周溝遺構 出土遺物觀察表 ……187
第20表	C区7号住居跡出土遺物觀察表……94	第43表	C区土器集中No.1 出土遺物觀察表 ……………190
第21表	C区9号住居跡出土遺物觀察表……97	第44表	C区土器集中No.2 出土遺物觀察表 ……………193
第22表	C区10号住居跡出土遺物觀察表 ……101	第45表	C区土器集中No.3 出土遺物觀察表 ……………195
第23表	C区12号住居跡出土遺物觀察表 ……103	第46表	C区土器集中No.4 出土遺物觀察表 196
第24表	C区13号住居跡出土遺物觀察表 ……107	第47表	C区遺構外出土遺物觀察表 ……196
第25表	C区14号住居跡出土遺物觀察表 ……109		
第26表	C区15号住居跡出土遺物觀察表 ……110		
第27表	C区16号住居跡出土遺物觀察表 ……111		
第28表	C区17号住居跡出土遺物觀察表 ……113		
第29表	C区18号住居跡出土遺物觀察表 ……118		

図版目次

図版 1	一本木前遺跡全景 北西より、北東より	東溝土層断面 西溝土層断面、西溝隅土層断面	
図版 2	発掘調査風景	図版 7	B区1号方形周溝墓(3) 遺物出土状況1、遺物出土状況2 遺物出土状況3
図版 3	B区方形周溝墓(1) 1号方形周溝墓、2号方形周溝墓	図版 8	B区2号方形周溝墓(1) 全景1、全景2、全景3
図版 4	B区方形周溝墓(2) 3号方形周溝墓、4号方形周溝墓	図版 9	B区2号方形周溝墓(2) 北東溝、南西溝、南東溝
図版 5	B区1号方形周溝墓(1) 全景(検出時)、全景、北溝土層断面	図版 10	B区2号方形周溝墓(3)
図版 6	B区1号方形周溝墓(2)		

- 北溝土層断面、北東溝土層断面
東溝土層断面
- 図版 11 B区2号方形周溝墓(4)
東溝土層断面、南溝土層断面
西溝土層断面
- 図版 12 B区2号方形周溝墓(5)
主体部、主体部内管玉・齒出土状況(1)
主体部内管玉・勾玉・齒出土状況(2)
- 図版 13 B区2号方形周溝墓(6)
溝内焼土出土状況、溝内炭化物出土状況
遺物出土状況
- 図版 14 B区2号方形周溝墓(7)
遺物出土状況1、遺物出土状況2
遺物出土状況3
- 図版 15 B区3号方形周溝墓(1)
全景(北より)、全景(南より)
北西溝及び2号南東溝
- 図版 16 B区3号方形周溝墓(2)
周溝(北東隅部)、北溝土層断面
北東部遺物出土状況
- 図版 17 B区3号方形周溝墓(3)
東溝土層断面、西溝土層断面
北東溝隅土層断面
- 図版 18 B区3号方形周溝墓(4)
北西溝隅土層断面、主体部検出状況
周溝内焼土・灰出土状況
- 図版 19 B区3号方形周溝墓(5)
周溝(北西)内焼土出土状況
遺物出土状況1、遺物出土状況2
- 図版 20 B区4号方形周溝墓(1)
全景(南西より)、東溝、西溝
- 図版 21 B区4号方形周溝墓(2)
北溝土層断面
南溝土層断面、南西溝土層断面
- 図版 22 B区4号方形周溝墓(3)
遺物出土状況1、遺物出土状況2
遺物出土状況3
- 図版 23 B区4号方形周溝墓(4)
遺物出土状況4、遺物出土状況5
遺物出土状況6
- 図版 24 B区4号住居跡
全景、炭化物出土状況
炭化物出土状況拡大
- 図版 25 B区22号住居跡
全景、貯蔵穴周辺遺物出土状況
カマド周辺遺物出土状況
- 図版 26 B区32号・38号住居跡(1)
32号カマド
38号全景(南より)、38号全景(北より)
- 図版 27 B区38号住居跡(2)
カマド周辺遺物出土状況、カマド
柱穴内炭化物出土状況
- 図版 28 B区柵列
1号全景、2号全景、3号全景
- 図版 29 B区土坑(1)
45号、46号、47号
- 図版 30 B区土坑(2)
48号、49号、50号
- 図版 31 B区土坑(3)
51号、52号、53号
- 図版 32 B区土坑(4)
54号、55号、56号
- 図版 33 B区井戸跡(1)
18号、19号、19号(拡大)
- 図版 34 B区井戸跡(2)
20号、21号、22号
- 図版 35 B区畠跡(1)
9号北群、9号南群、10号
- 図版 36 B区畠跡(2)
11号南部、11号北部、12号東部
- 図版 37 B区畠跡(3)・溝跡(1)
12号畠跡全景
27号溝跡、28号溝跡
- 図版 38 B区溝跡(2)

- 29号、30号、溝発掘風景
- 図版 39 B区溝跡(3)
32号1、32号2、32号遺物出土状況
- 図版 40 B区溝跡(4)・遺構外
33号1、33号2、33号遺物出土状況
石斧出土状況
- 図版 41 B区1号方形周溝墓出土遺物
1、2、3、4、5、6穿孔部、6
- 図版 42 B区2号方形周溝墓出土遺物①
1、2、3、4、5、6、7
- 図版 43 B区2号方形周溝墓出土遺物②
8、9、10、11、12、13
- 図版 44 B区2号③・3号方形周溝墓出土遺物
2—14、15、16
3—1、2、3
- 図版 45 B区4号方形周溝墓出土遺物
1、2、3、4
- 図版 46 B区4号住居跡出土遺物①
1、2、3、4、5、6、7
- 図版 47 B区4号住居跡出土遺物②
8、9(口縁部)、9、14、15、16、17
- 図版 48 B区22号住居跡出土遺物①
1、5、6、7、8、9、13、14
- 図版 49 B区22号住居跡出土遺物②
15、16、18、19、21、22、23
- 図版 50 B区22号住居跡出土遺物③
27、28、30、31、32、34
- 図版 51 B区38号住居跡・19号井戸跡出土遺物
38—1、4、6
19—5、6
- 図版 52 B区33号溝跡・遺構外出土遺物
33—4、5、6、7、8、9
遺構外—1、2
- 図版 53 C区1号・2号住居跡
1号全景、1号炉址、2号全景
- 図版 54 C区3号・4号住居跡
3号全景、4号全景、4号炉址
- 図版 55 C区5号住居跡(1)
全景(北西より)、全景(南東より)
炉址
- 図版 56 C区5号(2)・6号・7号住居跡
5号遺物出土状況
6号全景、7号全景
- 図版 57 C区8号・9号・10号(1)住居跡
8号全景、9号全景、10号全景
- 図版 58 C区10号住居跡(2)
炉址、貯蔵穴、遺物出土状況
- 図版 59 C区11号・12号住居跡
11号全景、12号全景、12号炉址
- 図版 60 C区13号住居跡
全景、西側炉址、東側炉址
- 図版 61 C区14号住居跡
全景、炭化材出土状況、炉址
- 図版 62 C区15号・16号住居跡
15号全景、16号全景、16号炉址
- 図版 63 C区17号住居跡
全景、遺物出土状況1、遺物出土状況2
- 図版 64 C区18号住居跡(1)
全景、炉址、倒立台付甕出土状況
- 図版 65 C区18号(2)・19号(1)住居跡
18号・倒立台付甕内部1
18号・倒立台付甕内部2
19号全景
- 図版 66 C区19号(2)・20号住居跡
19号炉址、20号全景、20号炉址
- 図版 67 C区21号住居跡(1)
全景、炭化材検出状況
炭化材検出状況(東隅部)
- 図版 68 C区21号住居跡(2)
炭化材検出状況(西隅部)
遺物出土状況1、遺物出土状況2
- 図版 69 C区21号(3)・22号住居跡
21号カマド
21号カマド周辺遺物出土状況

	22号全景		21号、22号、23号・26号
図版 70	C区23号住居跡 全景、カマド周辺遺物出土状況 貯蔵穴周辺遺物出土状況	図版 84	C区土坑(7) 24号・25号、27号、28号
図版 71	C区24号住居跡(1) 全景、炭化材検出状況、炉址	図版 85	C区土坑(8) 29号、30号、31号
図版 72	C区24号(2)・25号(1)住居跡 24号遺物出土状況 25号全景、25号遺物出土状況	図版 86	C区土坑(9) 32号、33号、34号
図版 73	C区25号(2)・26号(1)住居跡 25号貯蔵穴 26号全景、26号遺物出土状況	図版 87	C区土坑(10) 35号、37号、38号
図版 74	C区26号住居跡(2) カマド・貯蔵穴周辺遺物出土状況 カマド周辺遺物出土状況 カマド前面遺物出土状況	図版 88	C区土坑(11) 40号、41号、42号
図版 75	C区26号(3)・27号(1)住居跡 26号カマド 27号全景、27号骨片出土状況	図版 89	C区土坑(12) 43号、44号、45号
図版 76	C区27号住居跡(2) カマド周辺遺物出土状況1、カマド カマド周辺遺物出土状況2	図版 90	C区土坑(13) 47号・48号・50号、49号、51号
図版 77	C区27号住居跡(3)・1号掘立柱建物跡 右拡大、27号住居跡遺物出土状況 1号掘立全景(北東より) 1号掘立全景(南西より)	図版 91	C区土坑(14) 52号、53号、54号
図版 78	C区土坑(1) 1号、2号、3号	図版 92	C区土坑(15) 55号、56号、58号
図版 79	C区土坑(2) 4号・5号、6号・7号、8号・9号	図版 93	C区土坑(16) 57号遺物・炭化物検出状況 57号最終面、59号
図版 80	C区土坑(3) 10号、11号、12号	図版 94	C区土坑(17) 60号、61号、62号
図版 81	C区土坑(4) 13号、14号、15号・16号	図版 95	C区土坑(18) 63号、64号、66号
図版 82	C区土坑(5) 17号、19号、20号	図版 96	C区畠跡(1) 1号、2号、3号
図版 83	C区土坑(6)	図版 97	C区畠跡(2) 4号、5号、6号
		図版 98	C区畠跡(3) 7号、8号・9号(東より)
		図版 99	C区畠跡(4) 8号・9号拡大
		図版 100	C区畠跡(5) 8号西北端部石鏟検出状況 10号北群、10号南群

- 11号東群、11号西群・14号西群
12号
- 図版101 C区畠跡(6)
13号、14号中群、14号東群
- 図版102 C区畠跡(7)・溝跡(1)
15号畠跡、1号溝跡、2号溝跡
- 図版103 C区溝跡(2)・1号方形周溝遺構
3号・4号溝跡
1号方形周溝遺構、同遺物出土状況
- 図版104 C区土器集中(1)
No.1 全景、No.1 遺物出土状況 1
No.1 遺物出土状況 2
- 図版105 C区土器集中(2)
No.1 遺物出土状況
No.2 全景、No.2 遺物出土状況
- 図版106 C区土器集中(3)
No.3 全景、No.3 遺物出土状況
No.4 全景
- 図版107 C区1号・4号住居跡出土遺物
1-1、3 (口縁部)、3、4
4-1、2、3
- 図版108 C区5号住居跡出土遺物①
1、2、4、6、7、8、12
- 図版109 C区5号住居跡出土遺物②
10 (口縁部)、10、11 (口縁部)、11
13、16
- 図版110 C区6号・7号・9号①
住居跡出土遺物
6-1、3、4
7-1、9-1、2
- 図版111 C区9号住居跡出土遺物②
3、4、5、6、7、8
- 図版112 C区10号住居跡出土遺物
5 (口縁部)、5、6 (口縁部)、6
7 (口縁部)、7、8、8 (底面)
- 図版113 C区12号・13号① 住居跡出土遺物
12-1、2、3、10
- 13-1 (上面部)、1、2
- 図版114 C区13号住居跡出土遺物②
9、11、14、15、16、17、18
- 図版115 C区13号③・14号・15号・16号
17号① 住居跡出土遺物
13-29、14-1、15-1
16-3、9、17-1、2
- 図版116 C区17号住居跡出土遺物②
9、14、軽石、19、21、28
- 図版117 C区18号住居跡出土遺物
3、4、5 (口縁部)、5、9
- 図版118 C区19号・20号住居跡出土遺物
19-1、3、4
20-2、3、8、9
- 図版119 C区21号住居跡出土遺物①
1、7、8、9、10、11、13、14
- 図版120 C区21号住居跡出土遺物②
15、17、18、20、23、27、29、30
- 図版121 C区21号住居跡出土遺物③
31、34、35、41、42、43
- 図版122 C区21号④・22号・23号・24号
住居跡出土遺物
21-44、45、22-1、23-2、5、11
24-1、2
- 図版123 C区25号・26号① 住居跡出土遺物
25-2、4、5
26-1、3、4、5
- 図版124 C区26号住居跡出土遺物②
6、7、8、9、10、11、12、13
- 図版125 C区26号住居跡出土遺物③
14、15、16、17、18、19、20
- 図版126 C区26号住居跡出土遺物④
21、24、25、27、28、29、31
- 図版127 C区26号住居跡出土遺物⑤
32、33、34、35
- 図版128 C区26号住居跡出土遺物⑥
36、37、39、41

- 図版129 C区26号住居跡出土遺物⑦
 42、43、44、46
 土坑10—1、31—2、54—2
 59—1、66—2、4
- 図版130 C区26号住居跡出土遺物⑧
 47、50、51、52、53、54
 溝2—3
- 図版131 C区26号住居跡出土遺物⑨
 55、56、57、58、59、60、61
- 図版132 C区27号住居跡出土遺物①
 1、2、3、4、7、8、9、10
- 図版133 C区27号住居跡出土遺物②
 12、14、15、16、17、19、20、21
- 図版134 C区27号住居跡出土遺物③
 22、23、24、25、26、27、31、35
- 図版135 C区27号住居跡出土遺物④
 36、37、38、40、41、42、43、44
- 図版136 C区27号住居跡出土遺物⑤
 46、47、50、52、53、54
- 図版137 C区27号住居跡出土遺物⑥
 55、56、59、60、63、65、66
- 図版138 C区土坑・2号溝出土遺物
 土坑10—1、31—2、54—2
 59—1、66—2、4
 溝2—3
- 図版139 C区土器集中No.1出土遺物①
 1、2、3、5、6、7
- 図版140 C区土器集中No.1出土遺物②
 8、10(口縁部)、10、11(口縁部)、11
 16(口縁部)、16
- 図版141 C区土器集中No.1出土遺物③
 12、13、17、19、20、21
- 図版142 C区土器集中No.2出土遺物
 1、2、3、4、5、6
- 図版143 C区土器集中No.3出土遺物①
 1、2、3、4、5、6
- 図版144 C区土器集中No.3出土遺物②
 7、8、9、10、11、12
- 図版145 C区土器集中No.4・遺構外出土遺物
 土器集中No.4—2、3
 遺構外—2、18、20

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成9年10月9日、熊谷市長から熊谷市教育委員会教育長に対して、熊谷市大字東別府1390番地他地内の、総面積61,280㎡に及ぶ、準用河川新奈良川第3調節池事業予定地内における文化財の所在及び取扱いについて協議があった。

この協議に対して、熊谷市教育委員会教育長から熊谷市長に対して、開発予定地が現時点では埋蔵文化財の所在は確認されていないものの、周知の遺跡（別府条里遺跡・遺跡番号59-49）の縁辺部にあたり、遺跡の存在する可能性の非常に高い地域であるため、事前に埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査を必要とする旨、平成9年10月15日付で回答した。

この回答に対し、熊谷市長から平成9年10月15日付で、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査の依頼を受けた。

平成9年12月1日から同月9日にかけて試掘調査を実施した結果、当該地が古墳時代から平安時代に及ぶ複合集落であることが確認された（一本木前遺跡・遺跡番号59-115）ため、開発予定地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい旨、平成9年12月19日付で回答した。

その後、両者において保存策について協議を重ねたが、開発事業に重要性・緊急性があり、工事の中止及び他所への変更は不可能である点を確認され、やむを得ず、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、対象が広範囲に及ぶため、A～F区の6区に区分された工区に合わせて分割し、第1次調査（平成10年度・A地区）、第2次調査（平成11年度・A地区の北地域、B地区の東端部、D・E地区）、第3次調査（平成12年度・B地区の中央部、E・F地区）、第4次調査（平成13年度・B地区西地域、C地区南地域、F地区西地域）、第5次調査（平成14年度・A地区北西地域、B地区北地域、C地区北地域）というように、平成10年度から平成14年度の5次・5ヵ年に亘って実施することとなった。

そして、報告は、第1次・平成10年度調査分は平成11年度にというように、発掘調査翌年に行うこととした。よって、今回報告するのは、第4次・平成13年度発掘調査分である。

発掘調査に先立って、熊谷市長から文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、平成13年9月4日付け熊河発第93号で提出された。これに対し、埼玉県教育委員会教育長から、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、平成13年12月31日付け教文第3-561号をもって、発掘調査実施の指示通知があった。

また、熊谷市教育委員会教育長は、文化財保護法第58条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告を、平成14年5月31日付け熊教社発第235号で提出した。

2 発掘調査・報告書作成の経過

第1次発掘調査は、平成10年5月27日より平成11年3月31日まで、第2次発掘調査は、平成11年6月1日より平成12年7月28日まで、第3次発掘調査は、平成12年6月1日より平成13年3月30日までそれぞれ実施された。

今回報告の第4次発掘調査は、平成13年6月1日より開始された。重機による遺構確認面までの掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、遺物取り上げ、実測、写真撮影と、一連の調査を繰り返し、平成14年3月29日をもって調査を終了した。調査対象面積は、総対象面積のうち17,100㎡である。

第1次・2次・3次発掘調査分についてはそれぞれ、「一本木前遺跡」「一本木前遺跡II」「一本木前遺跡III」として既に報告書を刊行済みである。

第4次調査分の整理・報告書作成作業は、平成14年6月1日より開始された。遺物の洗浄・注記・復元作業を行い、並行して遺構の図面・写真整理を行った。7月に入り遺物の実測・拓本取り、8月には遺構のトレース・版組みを開始していった。10月からは遺物のトレース・版組み、遺物の写真撮影、11月からは写真図版の作成、原稿執筆、割付を行い、1月に印刷業者を決定した。入稿後、3ヶ月に亘って構成を行い、本報告書の刊行に至ったものである。

なお、第4次調査の調査区であるF地区西区域については、平成13年度報告「一本木前遺跡III」に収録済みである。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査（平成13年度）

教育長	飯塚 誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	浅野 晴樹
課長補佐	藤原 清
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	加藤 隆則
発掘調査員	蔵持 俊輔
発掘調査員	小野寺 弘光

(2) 整理調査（平成14年度）

教育長	飯塚 誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	田中英司
課長補佐	藤原 清
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主査	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	船場 昌子
発掘調査員	渡邊 大士

II 遺跡の立地と環境

遺跡の立地 一本木前遺跡は、熊谷市大字東別府1390番地他に所在する。荒川と利根川の最も近接する地域(第1図)であって、荒川の北約5.2km、利根川の南約5.2kmに位置する。また JR 高崎線籠原駅からは、北約3.0kmにあたる。

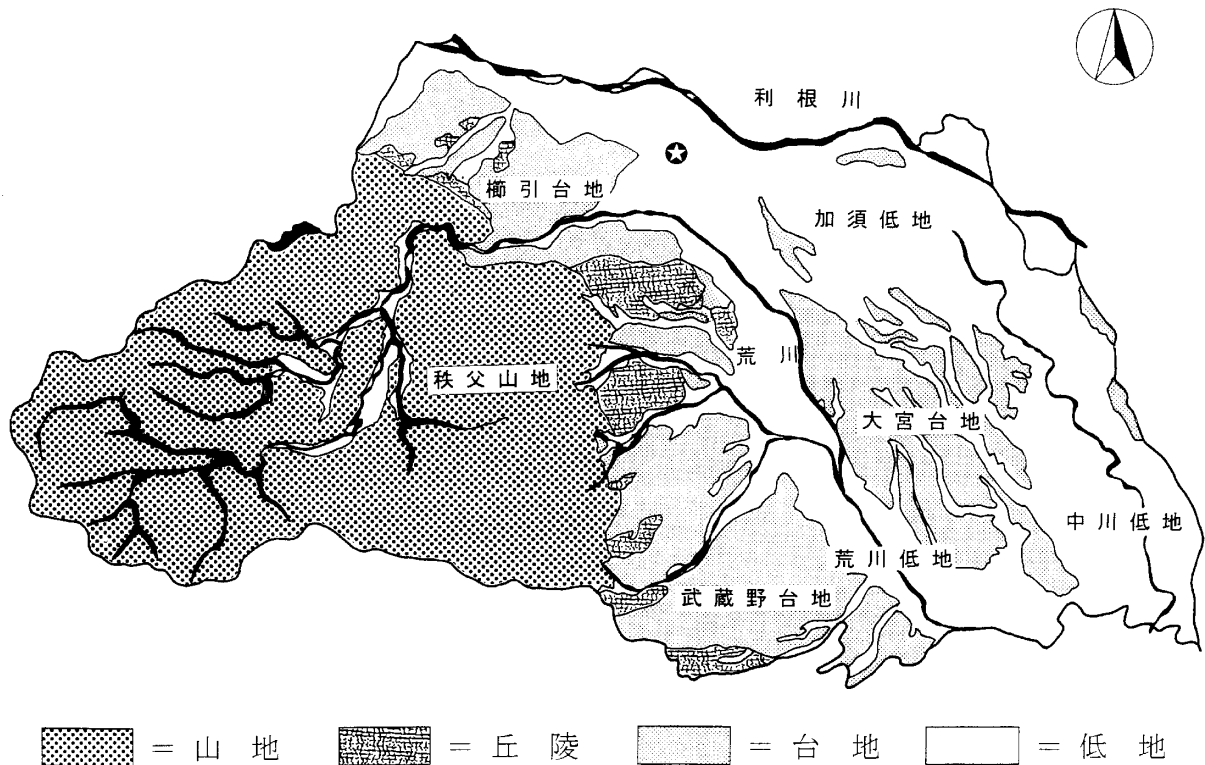
熊谷市域は、西部が櫛挽台地上、荒川以南が江南台地上に位置するほか、大半は新荒川扇状地(熊谷扇状地)上に含まれる。また市域の北縁から北東縁にかけては、利根川によって形成された妻沼低地がひろがっている。

本遺跡の所在する東別府地区は、熊谷市の北西部に当たり、旧集落が立地する櫛挽台地北東隅部と、その北部に広がる低地帯の両者が含まれている。櫛挽台地北東部の北面は、低地帯と1~2mの断崖をなすものの、東面は緩傾斜で低地帯に移行している。また低地帯は、熊谷扇状地末端地と妻沼低地末端地が錯綜する地に当たり、複雑入り組んだ湧水地、旧河道、自然堤防によって形成されている。

このような地域であるため、低地帯では、両河川の氾濫等によって砂・シルト・粘土層が幾重にも厚く堆積し、遺跡の発見を遅らせる原因ともなっている。

しかしこうした土壌であるため、現況では大規模に整理された麦畑あるいは水田として大いに利用されている所でもある。標高は、30.0m前後である。

こうした土地の性格上、本地域にはまだまだ未発見の遺跡が多数存在する可能性が高い。



第1図 埼玉県の地形図

歴史的環境 本遺跡を中心とした熊谷扇状地末端付近の荒川の古流路地域と、櫛挽台地北端と妻沼低地南端の接する地域では、低地上に弥生時代中期の初期稲作が展開されるのであるが、特

(第2図)

に櫛挽台地北端と妻沼低地南端の接する地域では、先行する縄文時代の遺跡も散見される。

現在までの段階で最古と考えられるのは、櫛挽台地東端の籠原裏遺跡(31)から発見された黒曜石製尖頭器(旧石器時代)である。縄文時代に入っては、櫛挽台地北端の深谷市東方城跡(70)から検出された尖頭器が、早期に該当すると考えられている。

前期に入ると、遺跡数も増加してくる。熊谷市西部の寺東遺跡(18)は、櫛挽台地北東端に位置し、前期(関山式)土器及び後期(称名寺式)の埋甕土坑が検出されている。寺東遺跡の北・妻沼低地上には、石田遺跡(8)・入川遺跡(4)や深町遺跡(3)が所在し、中期(加曾利E式)から後期(堀之内式)に及ぶ集落が確認されている。これらの遺跡の端部には別府沼(利根川旧河川)が蛇行し、いずれの遺跡も沼に向けての緩斜面上に展開されている。このうち石田遺跡の対岸には、後期(加曾利B式)の土器群が検出された横間栗遺跡(6)が所在している。

一方、熊谷市東部地域での縄文時代の遺跡は、諏訪木遺跡(未掲載)や北島遺跡(未掲載)で、土器や石器が検出されており、西部地域同様、旧河川の緩斜面上で集落が形成されていた可能性が高い。

縄文時代後期の集落跡が検出された横間栗遺跡はまた、弥生時代中期(須和田式期)の再葬墓16基が検出されていることでも知られている。こうした弥生時代中期の再葬墓は、熊谷市三ヶ尻遺跡内の上古遺跡(38)が櫛挽台地上に位置する他は、深谷市上敷免遺跡(82)、明戸東遺跡(65)、妻沼町飯塚遺跡(55)、飯塚南遺跡(54)等、横間栗遺跡の北側一帯に展開される妻沼低地上に集中的に所在しているのである。また、当該期の集落遺跡としては、やはり妻沼低地上に関下遺跡(5)、飯塚南遺跡等が知られている。

東部地域の北島遺跡では、再葬墓や土器棺墓・土坑墓が検出されている。また、近在する前中西遺跡(未掲載)、平戸遺跡(未掲載)でも当該期の土器群が検出されているが、前中西遺跡では再葬墓と方形周溝墓という、異なる二つの葬送形態が同居しており、異彩を放っている。これら前中西遺跡や北島遺跡の東に位置する行田市の小敷田遺跡(未掲載)では、関東地方で最古段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。あたかも、前中西遺跡を境に熊谷市の東部と西部で、再葬墓と方形周溝墓という異なった墓制が展開されているようである。そして、北島遺跡と小敷田遺跡の中間に位置する池上遺跡(未掲載)では大規模な環濠集落が展開されている。また、北島遺跡の西に接して小規模な集落が、天神遺跡(未掲載)で確認されている。

弥生時代後期に至ると、先の妻沼低地上に、深谷市明戸東遺跡、妻沼町弥藤吾新田遺跡(52)等が、東部の北島遺跡周辺では、北島遺跡、中条条里遺跡内(未掲載)の東沢遺跡、行田市池守遺跡(未掲載)等、大規模な集落遺跡が展開されてくる。弥藤吾新田遺跡では弥生町式土器が、他の遺跡では吉ヶ谷式土器が出土している。

このうち北島遺跡では、掘立柱建物跡や土坑と共に70軒に及ぶ住居跡が、さらに、堰・水路や5～8mの方形区画をもつ水田跡も検出されている。時期は中期から後期に及び、

装着されたままの打製石斧、大型蛤刃石斧、扁平片刃磨製石斧、磨製石鏃、弓・容器等の木製品等、大量の遺物が出土している。すでにこの時期に、湧水地を背景として低地を利用した、大規模で積極的な水田経営が行われていたことを明白に物語っている、といえよう。

古墳時代前期に入ると、熊谷市西部から深谷市にかけての妻沼低地上では、熊谷市域の中耕地遺跡(21)、根絡遺跡(7)、横間栗遺跡、一本木前遺跡、深谷市域の本郷前東遺跡、明戸東遺跡、東川端遺跡(66)、宮ヶ谷戸遺跡(67)、上敷免遺跡、妻沼町域の弥藤吾新田遺跡等で集落が営まれている。このうち一本木前遺跡、弥藤吾新田遺跡は大規模な集落が想定されている。また東川端遺跡や上敷免遺跡では、方形周溝墓群が検出されている。東川端遺跡第2号方形周溝墓からは、パレススタイルの大型壺が、一本木前遺跡2号方形周溝墓からは器台・埴等の土器群と共に、方台部中央に検出された主体部からは翡翠製勾玉・碧玉製管玉等が出土している。

熊谷市東部から行田市域の、熊谷扇状地末端から妻沼低地の錯綜地帯では、池上遺跡、池守遺跡、小敷田遺跡、皿尾遺跡(未掲載)、東沢遺跡、天神遺跡、北島遺跡、天神東遺跡(未掲載)、中条遺跡内の雷電塚遺跡(未掲載)等、多数の集落遺跡が知られている。このうち小敷田遺跡では、畿内や東海地方系の土器が出土し、雷電塚遺跡からは脚部穿孔高杯・器台・S字口縁台付甕と共に剣型をはじめとした多数の滑石製模造品が出土している。また小敷田遺跡、東沢遺跡、北島遺跡からは鋤・鍬等多数の木製農具が出土している。さらに北島遺跡、小敷田遺跡では、大規模な方形周溝墓群が検出されている。

このように、弥生時代中期に開始された低地帯での稲作農耕は、それぞれの地で継承され、規模等が発展・拡大し、定着してきた様相を呈しているのである。

中期の様相は、今ひとつ明確ではない。しかし、西部の深谷市東川端遺跡では、剣型の滑石製模造品を用いた集落内祭祀が確認されている。また東部の中条遺跡内の権現山遺跡(未掲載)では把手付大型甌を伴った出現期の竈を備えた住居跡が検出され、北島遺跡では須恵器瓦を模倣した土師器小型壺が出土している。さらに最近の調査では、藤之宮遺跡(未掲載)でも一括の土器群が検出されている。いずれも中期後半以降の所産であり、今後の調査に期待するところが大きい。

古墳の出現は、中期の後半、B種横刷毛埴輪をもつ前方後円墳・横塚山古墳をもってその嚆矢とする。西部地区では、妻沼低地上に立地する、この横塚山古墳を初めとして、その周辺部で埴輪盛期の古墳が群在している。横塚山古墳群(J)の南に位置し、熊谷低地上に立地する玉井古墳群(B)は、17基の円墳と、2基の方墳で構成されている。このうち調査された新ヶ谷戸1号墳は、円墳で川原石積み胴張り型の横穴式石室をもち、土師器・須恵器・直刀・鉄鏃等が出土している。熊谷低地を南下すると、薬師堂古墳(円墳・控積の横穴式石室、銅釧・耳環・直刀・鉄鏃・埴輪)を中心とする坪井古墳群(E)、埴輪をもつ8基の円墳からなる石原古墳群(D)と続き、上円下方墳・宮塚古墳、蕨手刀を出土した熊谷商業高校内古墳などで構成される、埴輪消滅以後に形成された広瀬古墳群(F)が所在している。また、櫛挽台地東縁部にも古墳群が形成されている。南端に位置してい



第2図 一本木前遺跡周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

〈熊谷市〉		30	在家遺跡	H	籠原裏古墳群	74	庁鼻和城跡
1	一本木前遺跡	31	籠原裏遺跡	I	在家古墳群	75	小台遺跡
2	別府条里遺跡	32	堂西遺跡	J	横塚山古墳群	76	桜ヶ丘組石遺跡
3	深町遺跡	33	樋の上遺跡	ア	奈良神社	77	深谷城跡
4	入川遺跡	34	下辻遺跡	〈妻沼町〉		78	社前遺跡
5	関下遺跡	35	上辻遺跡	52	弥藤吾新田遺跡	79	八日市遺跡
6	横間栗遺跡	36	三ヶ尻中学校遺跡	53	道ヶ谷戸遺跡	80	城西遺跡
7	根絡遺跡	37	三ヶ尻遺跡群	54	飯塚南遺跡	81	皿沼城遺跡
8	石田遺跡	38	上古遺跡	55	飯塚遺跡	82	上敷免遺跡
9	西別府館跡	39	天王遺跡	56	飯塚北遺跡	83	上敷免北遺跡
10	西方遺跡	40	林遺跡	K	上江袋古墳群	84	新屋敷東遺跡
11	西別府祭祀遺跡	41	若松遺跡	L	飯塚北古墳群	85	新田裏遺跡
12	西別府廃寺	42	黒沢館跡	〈深谷市〉		86	備前堀端遺跡
13	原遺跡	43	東遺跡	57	ウツギ内遺跡	M	上増田古墳群
14	No.4 遺跡	44	庚甲塚遺跡	58	砂田遺跡	N	木の本古墳群
15	No.10遺跡	45	松原遺跡	59	柳町遺跡	〈川本町〉	
16	別府城跡	46	臺遺跡	60	城北遺跡	87	山ノ腰遺跡
17	別府氏館跡	47	社裏北遺跡	61	居立遺跡	88	舟山遺跡
18	寺東遺跡	48	社裏遺跡	62	前遺跡	89	竹ノ花遺跡
19	稻荷東遺跡	49	社裏南遺跡	63	清水上遺跡	O	鹿島古墳群
20	天神下遺跡	50	不二ノ腰遺跡	64	原遺跡	〈江南町〉	
21	中耕地遺跡	51	高根遺跡	65	明戸東遺跡	90	新田裏遺跡
22	西通遺跡	96	万吉西浦遺跡	66	東川端遺跡	91	姥ヶ沢遺跡
23	東通遺跡	A	別府古墳群	67	宮ヶ谷戸遺跡	92	西原遺跡
24	新ヶ谷戸遺跡	B	玉井古墳群	68	堀之内遺跡	93	富士山遺跡
25	No.53遺跡	C	原島古墳群	69	城下遺跡	94	北方遺跡
26	土用ヶ谷戸遺跡	D	石原古墳群	70	東方城跡	95	権現坂遺跡
27	下河原上遺跡	E	坪井古墳群	71	杉本遺跡	P	姥ヶ沢古墳群
28	水押下遺跡	F	広瀬古墳群	72	根岸遺跡		
29	稻荷木上遺跡	G	三ヶ尻古墳群	73	常磐町東遺跡		

る三ヶ尻古墳群（G）は、二子山古墳・運派塚古墳という2基の前方後円墳と58基の円墳で構成されている。埴輪をもつ場合ともない場合があるが、石室は河原石使用の横穴式石室である。そのうち、やねや塚古墳は、全周する円筒埴輪列のほか、人物・馬・大刀・家形埴輪が検出されている。また石室内から頭椎大刀・鉄鏃・耳環・銅釧等が出土している。台地北東端では、前方後円墳1基、円墳16基で構成される別府古墳群（A）がある。このうち円墳・仲廓古墳が調査され、円筒埴輪列が検出されている。またヤス塚古墳では、農夫の埴輪が出土しているなど、形象を含む埴輪盛期の古墳が継続して造営されている。このような三ヶ尻古墳群と別府古墳群の間には、埴輪をもたず、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有し、一部の古墳に八角形や六角形の終末期古墳を含む籠原裏古墳群（H）

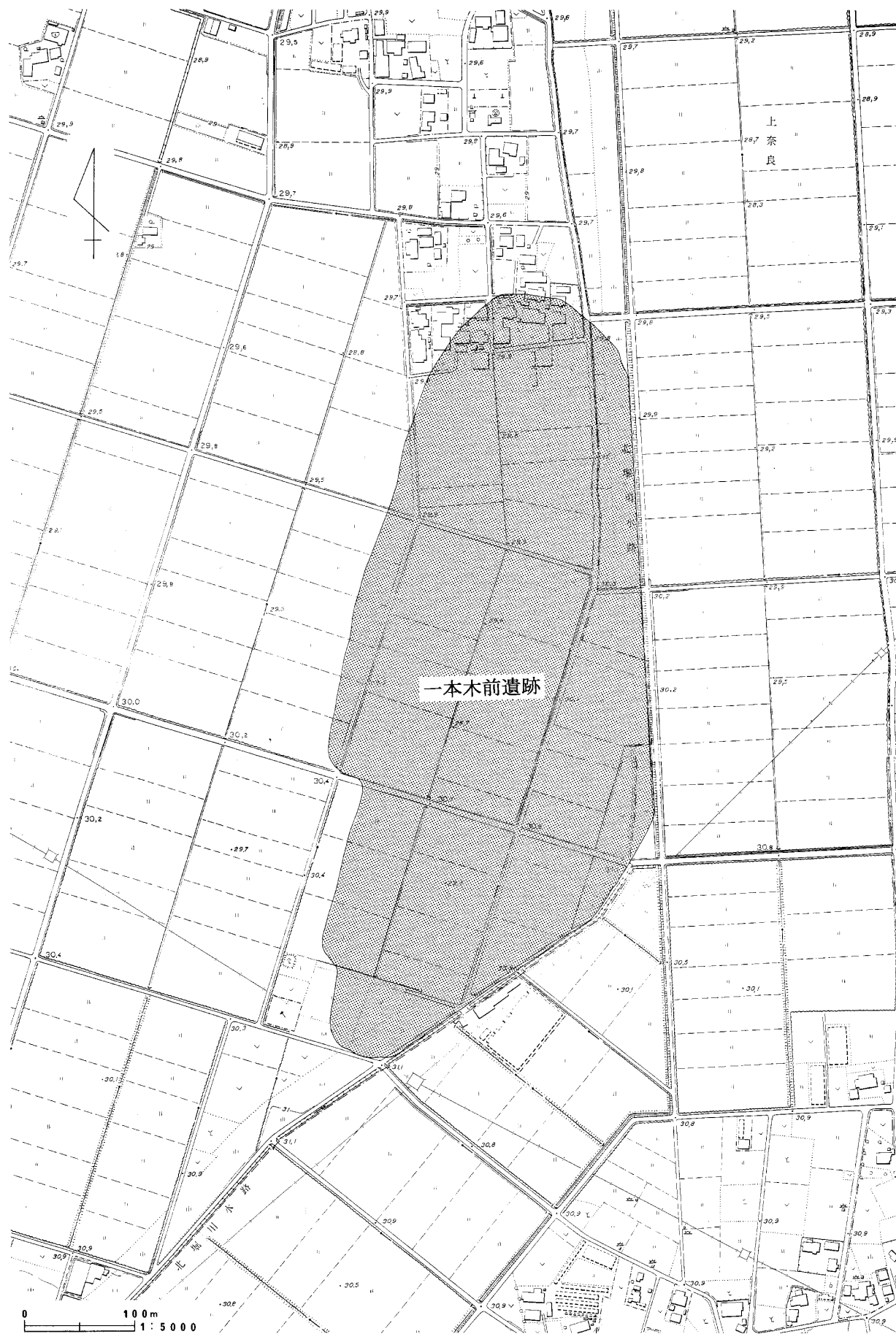
が築造されてくる。

一方、東部地区で出現した鎧塚古墳は、盾型の周溝をもち、前方部を西に向けた帆立貝式全前方後円墳で、全長43.8mを測る。須恵器高坏型器台を中心に土師器高坏・坏・甕をセットとした墓前祭祀土器群が2ヶ所検出されている。女塚1号墳は、二重周溝をもつが、やはり前方部を西に向けた帆立貝式前方後円墳で、全長46.0mを測る。前方部及び周溝外堤から盾持武人埴輪、太鼓を抱える人物埴輪等、多数の形象埴輪の出土が特徴的である。両古墳共5世紀末頃の築造と考えられている。また両古墳は、東西約200mの距離に位置し、周囲に円墳が群在する。そのうち2号墳では馬・鹿・猪等の動物や人物等の形象埴輪が出土し、4号墳では川原石使用の礫礮が検出されている。これらを含む中条古墳群(未掲載)では、国重要文化財の馬型・武人埴輪を出土した鹿那祇東古墳、最近の調査で検出された北島遺跡内の古墳群等の、埴輪最盛期の古墳から、側壁に切組積の角閃石安山岩、天井・奥壁に緑泥片岩を用いた大型の横穴式石室をもつ大型円墳・大塚古墳まで、5世紀の末頃から7世紀前半までの古墳が造営され続ける。こうした状況は、中条古墳群の南に位置する、東光寺古墳(未掲載)を中心とした上之古墳群、肥塚古墳群(未掲載)でも同様(開始時期は6世紀)である。肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積2種類の胴張型横穴式石室が確認されており、後者は利根川系、前者は荒川系の石材であり、両河川の相克によって作り出された当地の地形的特長と一致し、非常に興味深い様相を呈しているのである。

古墳時代後期における西部地域の集落遺跡は、樋の上遺跡(33)、上辻(35)・下辻遺跡(34)等の櫛挽台地東端部、妻沼低地の自然堤防上では、熊谷市域の一本木前遺跡、天神下遺跡(20)、根絡遺跡、深谷市域の原遺跡(64)、東川端遺跡、新屋敷東遺跡(84)、上敷免遺跡、砂田遺跡(58)、柳町遺跡(59)、城北遺跡(60)、妻沼町域の飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡(53)等、遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。特に一本木前遺跡では、現時点で300軒前後の住居跡が検出され、さらに今後の調査でその数が増加することが予想されており、その規模は群を抜いている。

また東部地域でも北島遺跡、諏訪木遺跡(未掲載)、中条遺跡内の中島遺跡(未掲載)・光屋敷遺跡(未掲載)・常光院東遺跡(未掲載)、行田市小敷田遺跡、池守遺跡等、やはり遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

古墳時代後期に櫛挽台地東端もしくは北東端、あるいは妻沼低地及び熊谷扇状地自然堤防上の微高地に形成された集落は、増減はするものの、そのほとんどが奈良・平安時代集落へと継続されていく。そして、櫛挽台地北東端部の幡羅郡衙の想定される西別府廃寺(12)、西別府祭祀遺跡(11)、深谷市幡羅遺跡(72)の櫛挽台地北東端部を中心として、北側妻沼低地上に展開される別府条里遺跡(2)、条里跡の東端に位置する一本木前遺跡への広がり、東部では北島遺跡、諏訪之木遺跡を中心として、その北・東に展開される中条条里遺跡(未掲載)への広がり、こうした東西の二つの拠点を核として、以後展開されることとなるのである。



第3図 一本木前遺跡位置図

III 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査は、調査区全体の北東を基点として、一辺10mのグリッド方式をとった。グリッド名は、北東の交点名を用い、北東隅グリッドをA-0グリッドとした。グリッドライン名は、順次南へB・C・D・E……、西へ1・2・3・4……とし、南へのZ以降の呼称は、AA・AB・AC・AD……とした。また、X-11グリッドポイントを国家座標X=21.000、Y=-42.500上に一致させて設定している。

調査区は、6区に区分された工事区画に合わせて、中央を東西行する道路の北側を、東から西へA～C区、道路の南側を東から西へD～F区とした。

第1次調査（平成10年度）区域は、全てA地区に含まれ、そのうち、中央部・南部・南東部が調査されたものである。グリッド範囲は、南北P～AEグリッド、東西2～10グリッドに及ぶ。

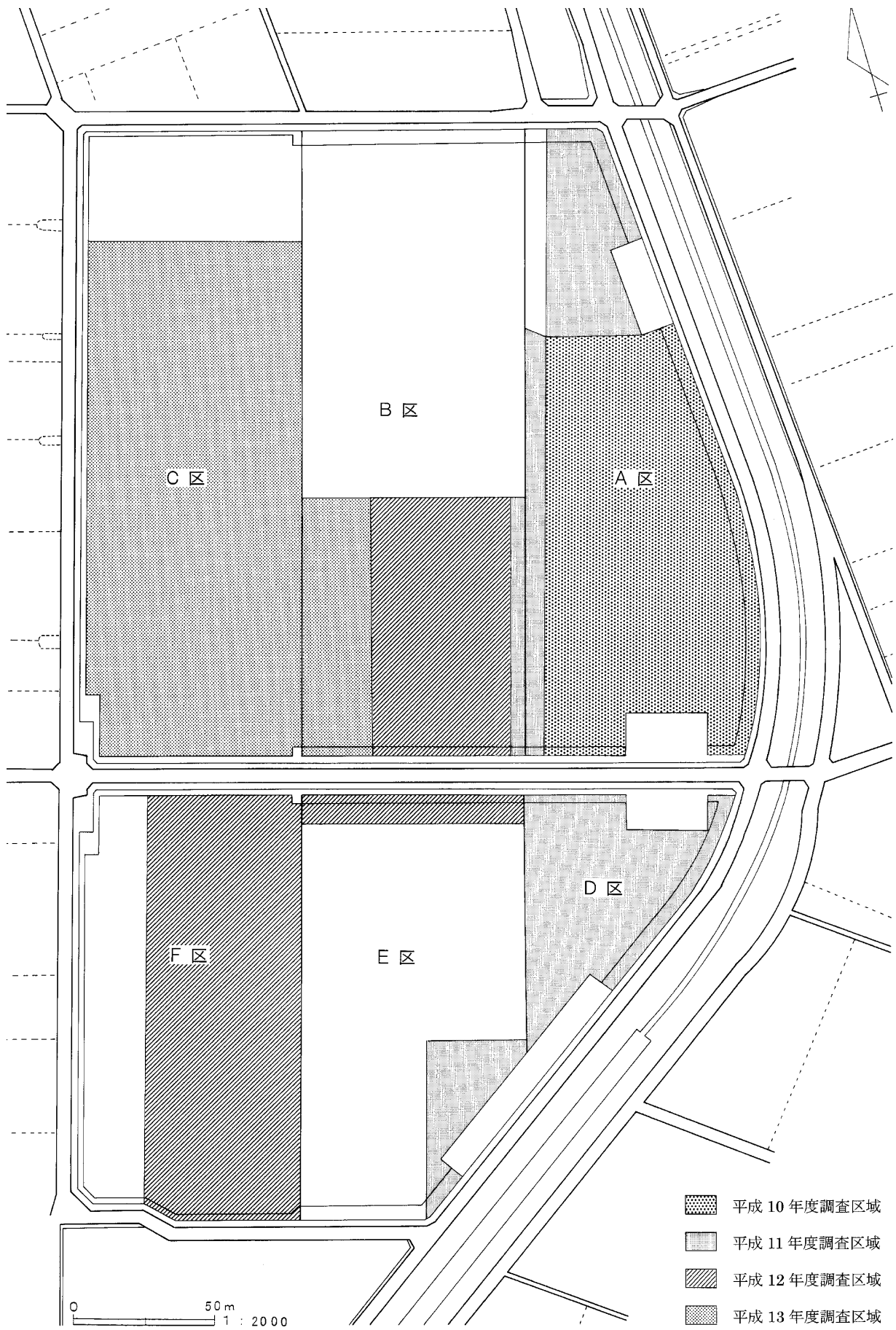
第2次調査（平成11年度）区域は、A地区・D地区・E地区に及ぶ。A地区調査は、第1次調査の残り北側・西側（北西部は第5次調査）に当たり、グリッド範囲は、南北H～ACグリッド、東西2～12グリッドに及ぶ。D地区は、全域が含まれている。グリッド範囲は、南北AD～APグリッド、東西5～15グリッドに及ぶ。E地区は、北端部と南東隅部のみが調査対象地域である。本年次は南東部が調査されており、グリッド範囲は、南北AK～APグリッド、東西15～20グリッドに及ぶ。なお、報告書（一本木前遺跡II）では、第2次調査分のD地区及びE地区を合体させ、D・E地区として扱っている。

第3次調査（平成12年度）区域は、B地区・E地区・F地区に及ぶ。B地区のグリッド範囲は、南北R～ACグリッド、東西9～17グリッドに及ぶ。E地区は、残された道路に接する北端部の調査が行われた。グリッド範囲は、南北AB～AEグリッド、東西12～19グリッドに及ぶ。F地区のグリッド範囲は、南北Z～APグリッド、東西19～30グリッドに及ぶ。なお、報告書（一本木前遺跡III）では、第3次調査分のE地区及びF地区を合体させ、E・F地区として扱っている。またF地区の西側については、第4次調査分である。

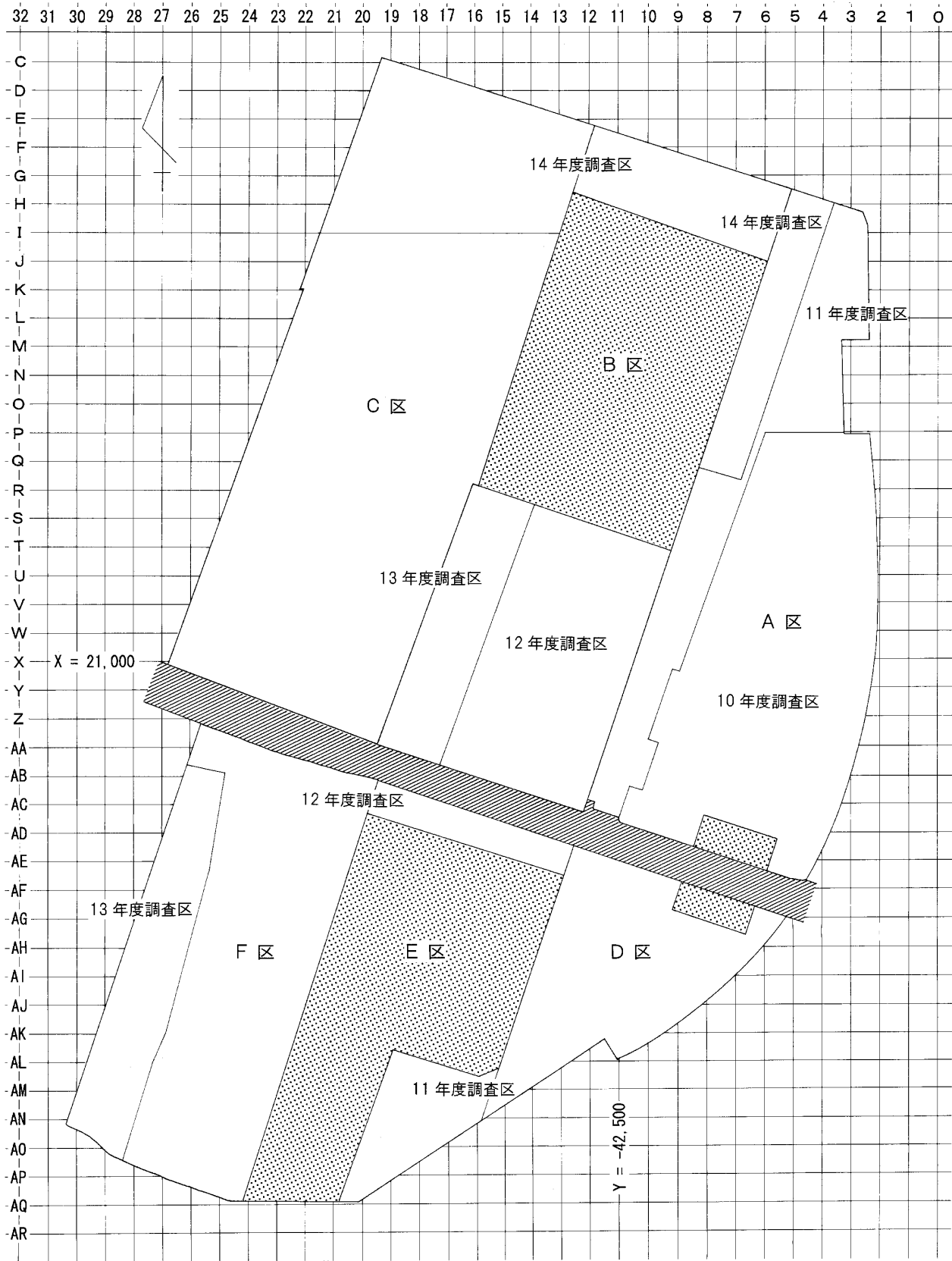
第4次調査（平成13年度）区域は、F地区・B地区・C地区である。F地区は、西側部分、グリッド範囲は、南北AA～AOグリッド、東西24～30グリッドに及ぶ。B地区は、南半部分の西側残り部分であり、グリッド範囲は、南北Q～AAグリッド、東西14～19グリッドに及ぶ。C地区は、南2/3、グリッド範囲は、南北K～Zグリッド、東西14～26グリッドに及ぶ。またこれより北部は、Iラインまでの範囲で、第1確認面の調査を実施している。

第4次発掘調査は、試掘調査及び第1次～第3次調査の成果により、遺構確認面の上位の保護土層を重機によって削除し、上記のグリッド設定から開始した。

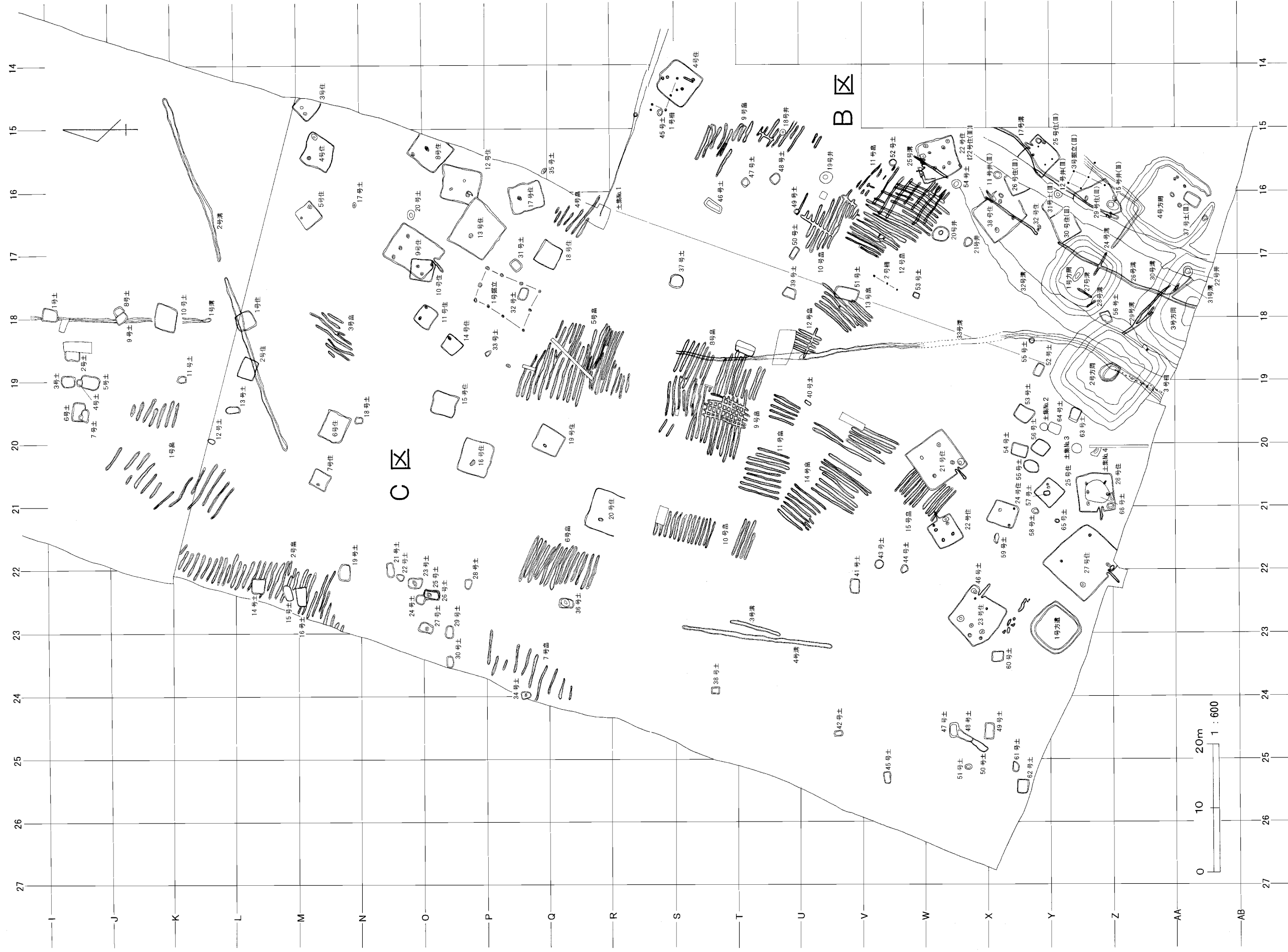
その後、人力によって遺構確認の精査を実施し、確認された各遺構の手掘りでの掘り下



第 4 図 一本木前遺跡調査区全測図



第5図 調査区グリッド配置図



第6图 13年度调查区遺構配置图

げを行った。途中、検出された土器等の遺物は、写真撮影・測量をした後、慎重に取り上げ、収納していった。また、遺構に対しても、掘り下げ途中で必要に応じて、あるいは完掘時に写真撮影・測量を実施した。遺物出土状況・遺構検出状況の測量実測は、グリッド基本杭を基準として、水系による1mメッシュを設定する、簡易遣り方の方法をとった。

なお、B区・C区は、他の調査区同様、遺構確認面が上下2面あったことから、上面を第1確認面、下面を第2確認面として、上記作業をそれぞれ繰り返し実施したものである。

最後に、遺跡全体の空中写真撮影を実施し、本調査を完了した。

2 検出された遺構と遺物

A地区 第1次・第2次調査によって検出された遺構は、住居跡85軒、土坑295基、井戸跡5基、溝跡69条、土器祭祀跡1基、道路状遺構1基等である。このうち、本調査区の過半を占める1号溝は、覆土中に浅間B軽石層（天仁元年—1108年—降下）の純層が堆積し、上端幅22m、深さ80cmに及ぶ大溝である。他の大部分の遺構は、この大溝の両岸に分布している状況である。

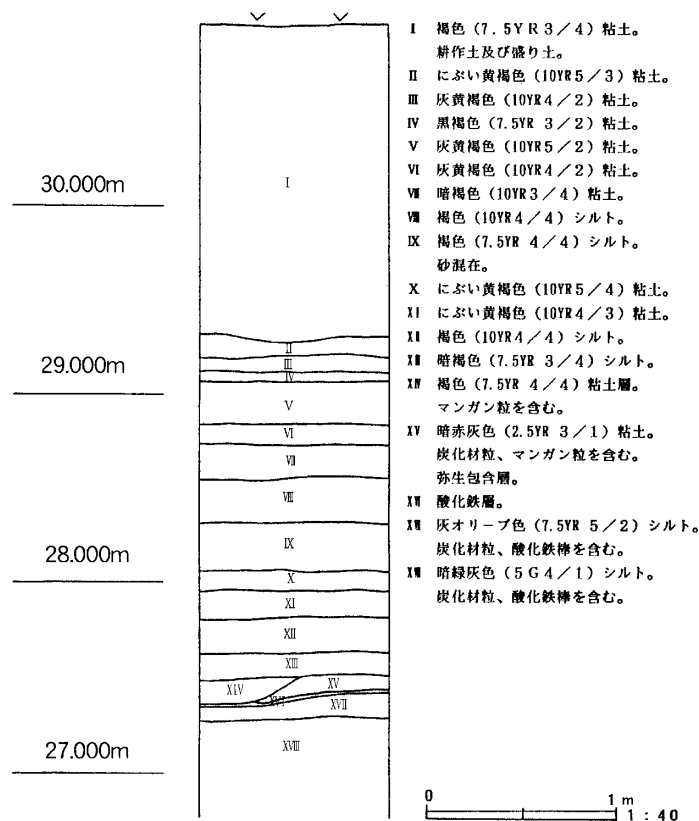
B・C地区 J-8、T-9、Q-16、G-12各グリッド内を結ぶ範囲は、未調査区である。詳細は、次章で述べる。

D・E地区 第2次調査によって、検出された遺構は、住居跡116軒、土坑150基、井戸跡14基、溝跡68条、その他11基等であり、D・E地区の境界付近では、弥生式土器の包含層が検出され

ている。116軒検出された住居跡の大部分は、古墳時代後期に属す。

E・F地区 第3次・第4次調査によって検出された遺構は、住居跡129軒、掘立柱建物跡5棟、土坑117基、井戸跡2基、溝跡15条、畝跡1ヶ所、その他であり、住居跡の大部分は、古墳時代後期に属している。

基本土層は、第7図のとおりである。VIII層以下に7世紀以前の遺物を包含している。第1確認面はVIII層であり、第2面はX層である。またIX層は1・2面の中間面とした。XV層は、弥生時代中期の遺物包含層である。VIII層とXV層の間には、古墳時代の遺物を包含するシルト層・粘土層が相克し、場所によって複雑な様相を呈している。



第7図 基本土層図

IV B区の遺構と遺物

B区の範囲は、南北約230m、東西74mに及ぶ。中央部は未調査区であり、南半分についてはその東側2/3を平成12年度(一本木前遺跡Ⅲとして平成13年度に報告済み)に、西側1/3を平成13年度に発掘調査を実施したものである。北端部分は、平成14年度発掘調査中である。

B区の13年度調査分における遺構の検出は、方形周溝墓4基、住居跡4軒、柵列3列、土坑12基、井戸跡5基、畠跡4箇所、溝跡10条に及ぶ。なお、遺構が西接するC区に及んでいる2号方形周溝墓、51号土坑、33号溝もB区所在遺構としている。この結果、B区南半部分の遺構数は、方形周溝墓4基、住居跡38軒、柵列3列、掘立柱建物跡3棟、土坑56基、井戸跡22基、畠跡12箇所、溝跡33条になる。

1 方形周溝墓

4基の方形周溝墓は、B区の南西隅、概ねYラインより南で、15・16ラインの中間より西側に菱形状に群在している(第9図)。このうち、上面を河川跡によって削平された4号を除いて、1号から3号方形周溝墓の方台部からは主体部が検出されている。3号方形周溝墓は、南半が道路部分に所在するため、北半部分のみの調査である。

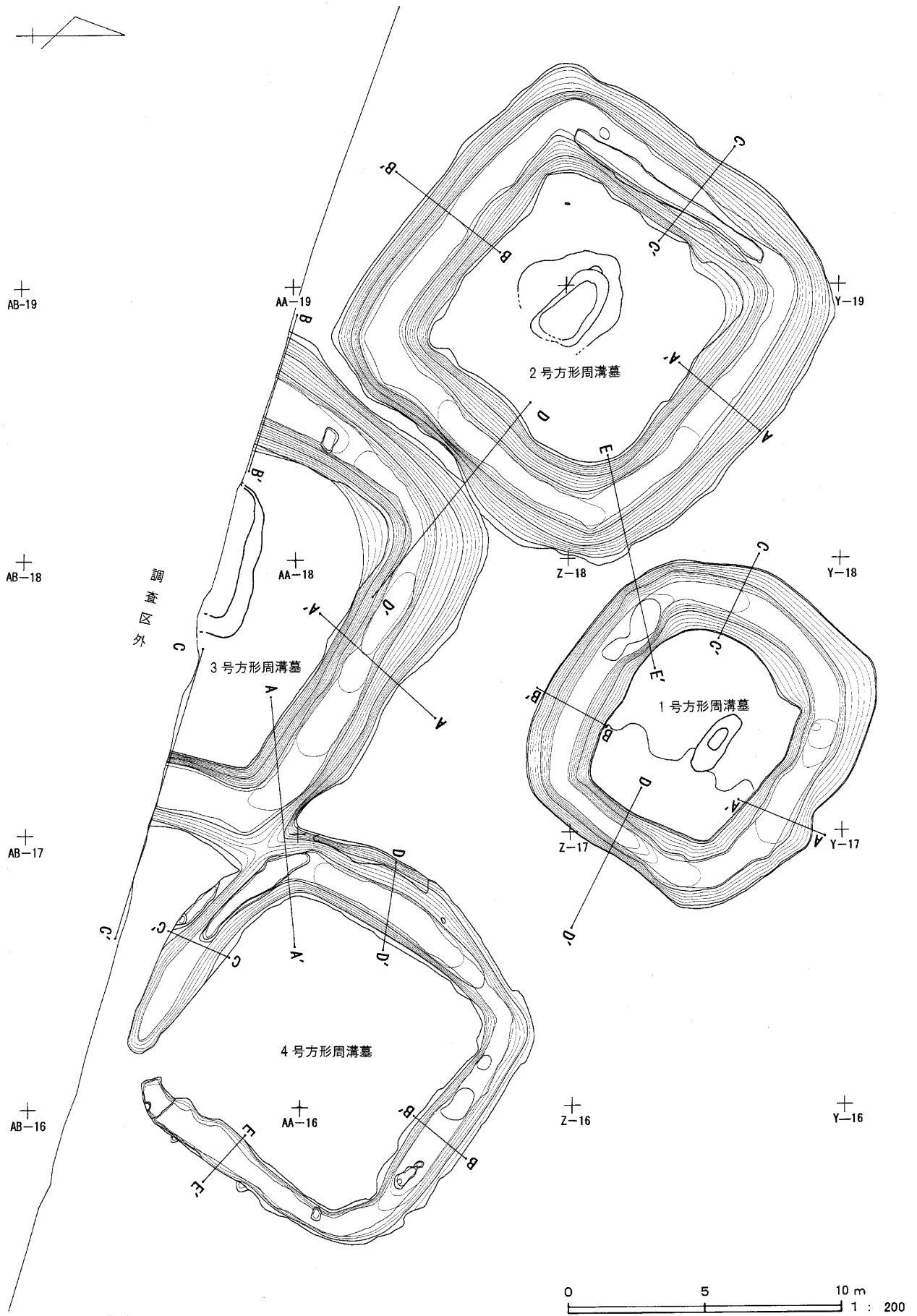
方形周溝墓は、当初、主体部である土坑が検出されたのみであったが、土坑周囲の一部で溝状のプランが確認され、周溝墓の存在が想起されたため、面を徐々に下げながらその全容の把握に努めた、しかし、土層の平面的変化が安定せず、プランとして連続が確認できなかつたため、土層確認トレンチを随所に配して、断面からの追求を行うこととした。

この結果、上層からA層=多量のマンガン粒を含む褐色シルト層、B層=少量のマンガン粒を含む褐色シルト層、C層=少量のマンガン粒を含む褐色シルト層(下位に浅間C軽石粒を含む)、D層=褐色シルト層(下位がE層と混在する部分がある)、E層=少量のマンガン粒を含む褐色オリブ褐色シルト層、F層=マンガン粒及び炭化物粒を含む褐色粘土層、G層=棒状の酸化鉄を含む黄褐色粘土層、H層=棒状の酸化鉄を含む黒色粘土層が基盤層を成していることが判明した。A層からE層がシルト層であり、このうち浅間C軽石粒を含む褐色層であるC層、オリブ褐色を呈するE層の2層が、覆土と区別する最も基本の層となった。またF層より下位は、全て粘土層である。なお、4基の方形周溝墓に共通する基盤層は、C層・E層・F層・G層・H層である。

溝の覆土のうち基本となるのは、上位の炭化物集積シルト層、中位のマンガン粒集積層及び、暗褐色粘土ブロック混在層(共に、シルト層と粘土層の両者がある)、覆土の下位に堆積する粘土層である。炭化物集積シルト層は、4基に共通するが、西側に位置する2号・1号周溝墓で特に厚い堆積がみられる。マンガン粒集積層は、2号・3号周溝墓で厚く堆積し、1号・4号周溝墓では特定の溝でのみ堆積している。暗褐色粘土ブロック混在層は、1号・2号周溝墓の特定の溝で堆積している。下位の粘土層は、位置によって色相はやや異なるが、全溝に堆積している(第11・第14・第17・第20図)。



第8図 B区遺構配置図



第9图 B区方形周溝墓配置图

1号方形周溝墓 Y-17グリッド全域を占め、四隅がX-17、Y-16、Y-18、Z-17各グリッドに及ぶ。西隅が2号方形周溝墓に近接するが、1mほどの間隔をもっている。上面には24号、26号、27号、28号、32号の各溝跡が位置しているものの、32号溝跡に北西溝覆土上面を僅かに削平されている以外は、直接の影響は受けていない。

形態は、溝全周型で、ほぼ直線となる南東辺を基本とした方形を呈すると思われるが、他の3辺が共に僅かに脹らむため、全体でやや脹らみをもつ隅円方形を呈するといえる。

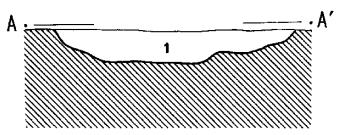
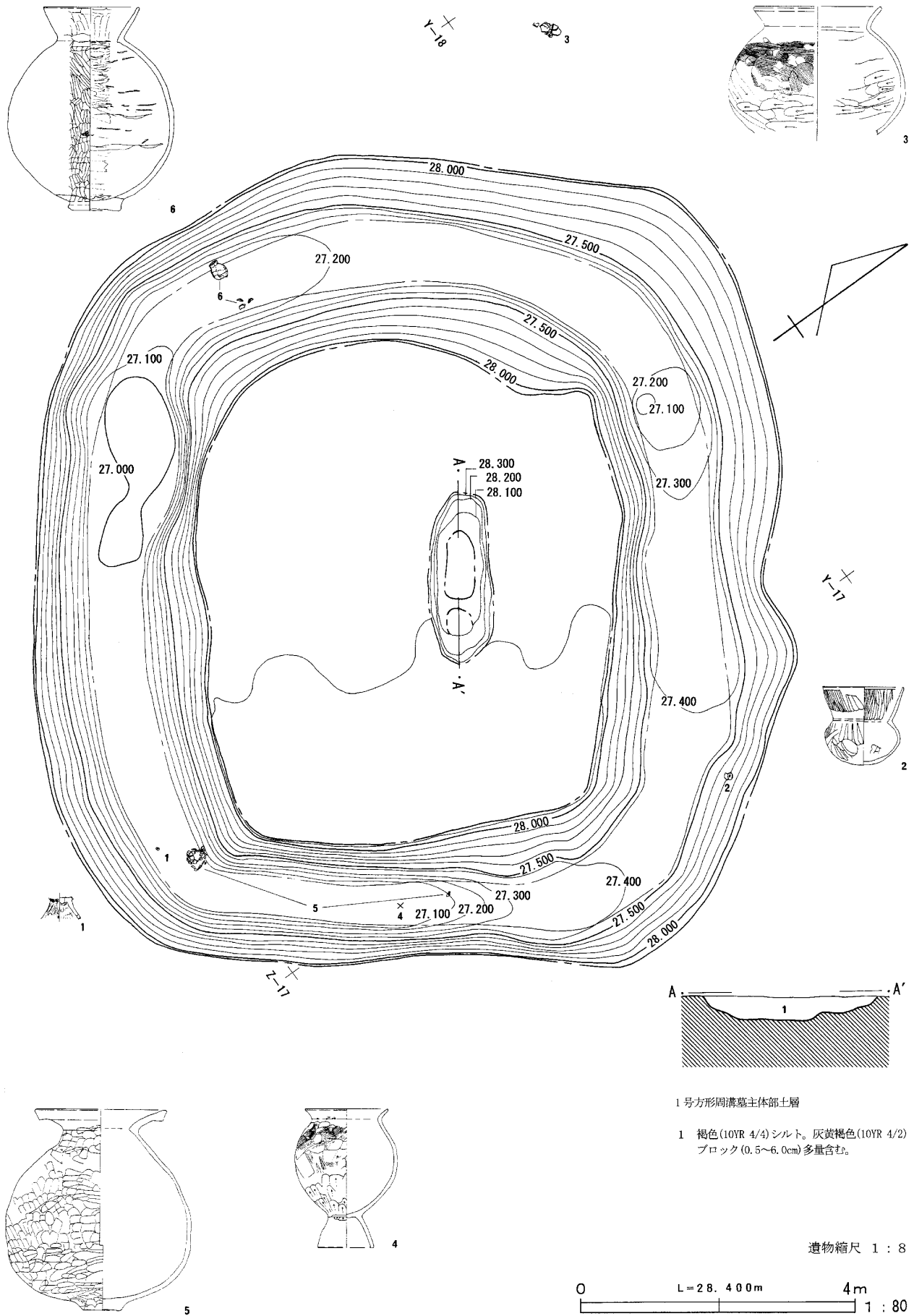
全体規模は上面で、北西辺中央-南東辺中央が11.72m、北東辺中央-南西辺中央が11.22mを計る。

方台部規模は、北西辺中央-南東辺中央が7.24m、北東辺中央-南西辺中央が6.00mを計る。西隅は丸みをもち、北隅から北西辺にかけては窪みをもつが、これらは崩落によるものであり、溝内のコンターによると、概ね隅円の長方形を呈するといえる。しかしながら、短辺側が中央部では6.00m、北西辺側が5.60m、南東辺側が5.00mという不規則な数値を示すため、北西-南東方向に長軸をもつ不整の隅円長方形を呈するといわざるを得ない。長軸の軸偏差角は、N-54°-Wである。

方台部側の周溝への落ち込みラインが確認されたのは、L=28.050m前後であるが、方台部中央やや北東寄りの、L=28.300mから28.400m前後の高さで、北西-南東方向に長軸をもつ長円形の土坑が検出されている。上端は、長軸2.51m、短軸0.96mを計る。長軸側の北東壁及び南西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、短軸側の北西壁及び南東壁は、上位がほぼ垂直なもの、下位が緩やかな傾斜となる。底面は、南東側では深さ20~25cmでフラットな面をもつが、北西側では長さ1.30m、幅0.63mの範囲で一段落ち込み、深さ35cmとなる。この底面も概ねフラットである。覆土は、全体に単一の灰黄褐色粘土ブロックを多量に含む褐色シルトであり、投入土の様相を呈していた。本周溝墓の主体部であると判断される。なお、長軸の軸偏差角は、周溝墓全体の軸偏差角と同一のN-54°-Wである。遺物は、検出されていない。

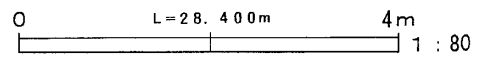
各溝の状況は、各隅部の幅が、北-3.15m、東-2.42m、南-2.24m、西-2.63mを計ることを初めとして、それぞれが大きく異なる。

北東溝は、外辺に大きな凹凸が見られ、全体として外に脹らみをもつ。幅は北部-(上端2.60m、下端0.92m)、中央最狭部-(上端2.08m、下端0.94m)、中央最広部-(上端2.80m、下端1.02m)、東部-(上端2.23m、下端0.77m)を計り不統一であるが、全体では、北側が広く東側が狭くなる傾向を示している。外面の壁は、北部が緩斜面であるのに対して、凹凸部から東部ではやや急斜面となる。方台部側の壁は、外面と逆で、北部が急斜面であるのに対して、凹凸部から東部ではやや緩斜面となる。全体では、外面の壁が緩傾斜であるのに対して方台部側の壁が急傾斜を示しているといえる。基盤層・C層の上面から掘り込まれ、深さは、北隅が97cmを計り最も深く、底面はH層上面に達している(L=27.080m)。そして、東に向けて徐々に浅くなり、東隅が最も浅くなる。底面はG層の上位に達し、深さ70cm前後を計る(L=27.420m)。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。



1号方形周溝墓主体部土層
 1 褐色(10YR 4/4)シルト。灰黄褐色(10YR 4/2)ブロック(0.5~6.0cm)多量含む。

遺物縮尺 1 : 8



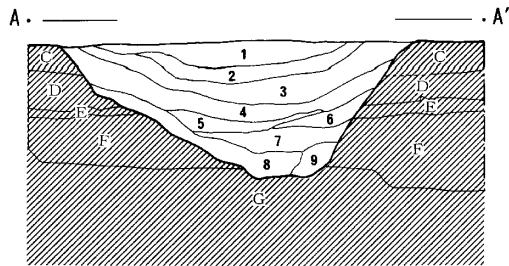
第10図 B区1号方形周溝墓

北東溝の覆土（第11図・A-A'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第2層、中位の暗褐色粘土混在層は第5層に相当する。第2層は、炭化物の中に黄褐色シルト粒を含んでいる。黄褐色シルトを主体として炭化物を含む、第3層及び第4層の上位に堆積し、これらの層とは逆の構成となっている。第2層の最も厚い部分は12cmを計る。この第2層の上面には、灰白色粘土ブロックを含むにぶい黄色シルト（第1層）が堆積している。第4層の下位が第5層である。本溝墓の溝内で黄褐色シルトと暗（黒）褐色粘土ブロックとの混在層が確認されたのは、この北東溝のみである。第5層より下位の第6層～第9層にはマンガン粒が含まれているが、いずれも少量であり、集積層とはならない。このうち第6・第7層中には少量の炭化物が含まれている。また、土層図作成位置ではシルト層のみであり、下位の粘土層が確認されていないが、北隅の深い部分では酸化鉄を含む黄褐色粘土の堆積が確認されている。

南東溝の幅は、東部一（上端2.50m、下端0.98m）、中央部一（上端1.66m、下端0.58m）、南部一（上端1.80m、下端0.60m）を計る。南半部は直線的に内外壁が平行するものの、東半部では内外壁がそれぞれ内外に広がり、やや不安定な形状を呈する。内外面の壁は、他の溝と比較すると、全体に急傾斜である。外面の壁は、中央部が最も急傾斜であり、南部・東部の順でやや緩斜面となる。方台部側の壁は、南半部が急傾斜であるのに対して東部ではやや緩斜面となる。全体では、外面の壁が緩傾斜であるのに対して、方台部側の壁が急傾斜を示す部分と、逆の様相を示す部分が相克しているといえる。方台部側は基盤層・C層の上面から、外面は基盤層・B層中から掘り込まれている。深さは、東隅が深さ70cm前後を計り（L=27.420m）最も浅く、底面はG層の上位に達している。南に向けて徐々に深くなり、南隅では深さ107cm前後を計る（L=27.050m）。底面は、H層を掘り込んでいる。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

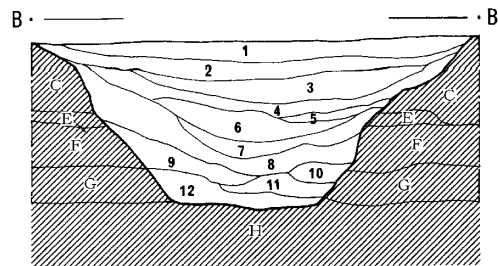
南東溝の覆土（第11図・D-D'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第1層、下位の粘土層は第8層～第11層に相当する。第1層は、非常に厚く堆積し、最も厚い部分は27cmを計るが、炭化物の含有量が他溝と比較して希薄である。中に黄褐色シルト粒を含んでいる。本層の下位に黄褐色シルトを主体にし、炭化物を含む第2層～第4層が堆積している。さらに下位の第5層は、にぶい黄褐色シルトの純層である。第6層は、第5層をベースに黄褐色シルト粒及び酸化鉄を含み、第7層は、暗灰黄色シルトをベースとして第6層を含有している。以上7層がシルト層であり、これより下位が粘土層である。第8層～第10層は、酸化鉄を含むにぶい黄褐色粘土であり、第9層には、黄褐色シルトも含んでいる。第11層が暗灰黄色粘土である。本溝内では黄褐色シルトと暗（黒）褐色粘土ブロックとの混在層及びマンガン集積層は確認されていない。

南西溝は、方台部側の壁と外面の壁がほぼ平行であるが、両角が丸まり、全体で脹らみをもつ感を呈する。幅は南部一（上端2.30m、下端0.65m）、中央最広部一（上端2.62m、下端0.80m）、最狭部一（上端2.32m、下端0.80m）、西部一（方台部側が崩落しており推定上端2.20m、下端0.72m）を計る。全体では、最も凹凸の少ない均整のとれた溝である。壁は内外面とも同様の傾斜を示しているが、方台部側では、中央最広部で緩斜面となり、最



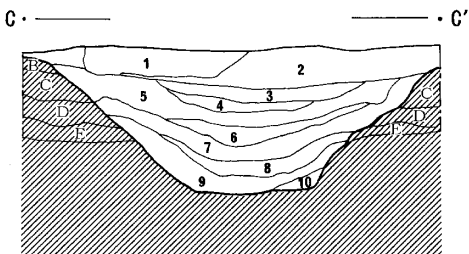
A-A'

- 1 にぶい黄色(5Y 6/3)シルト。灰白色(2.5Y 6/3)粘土ブロックを含む。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物集積層。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。炭化物ブロックを少量に含む。
- 4 黄褐色(10YR 5/8)シルト。炭化物を中量に含む。
- 5 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。黒褐色(2.5Y 3/2)粘土ブロックを多量に含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 3/3)シルト。マンガン、炭化物を少量に含む。
- 7 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。マンガン、炭化物粒を少量に含む。
- 8 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。マンガンを少量に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。マンガンを少量に含む。



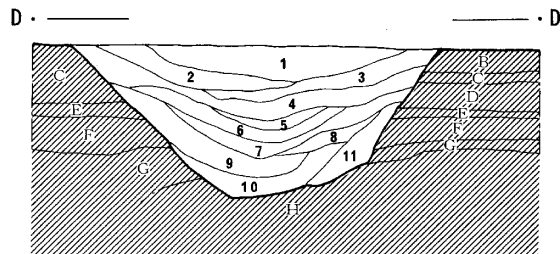
B-B'

- 1 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。灰白色(5Y 7/1)粘土ブロックを少量に含む。
- 2 炭化物集積層。
- 3 明黄褐色(10YR 6/6)シルト。炭化物を少量に含む。
- 4 黄褐色(10YR 5/8)シルト。炭化物を中量に含む。
- 5 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。炭化物を少量に含む。
- 6 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物を少量に含む。下層に黄色シルト、炭化物が層状に含まれ、酸化鉄を多量に含む。
- 7 灰黄褐色(10YR 4/2)シルト。酸化鉄を多量に、炭化物を少量に含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を少量に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄、黄色シルトを多量に含む。
- 10 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を少量に含む。
- 11 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 12 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を多量に含む。黄色シルトを少量に含む。



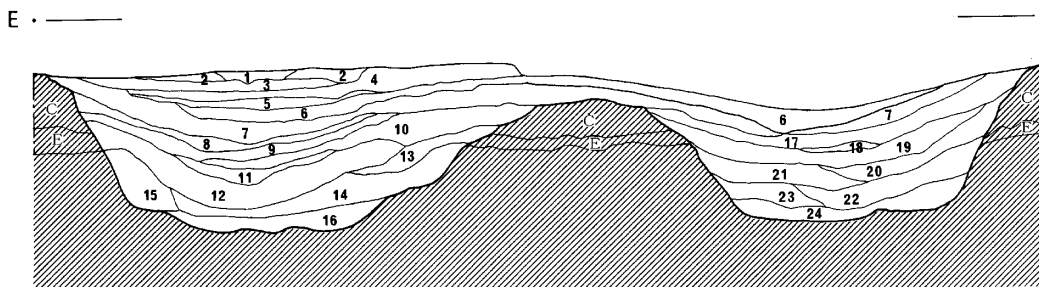
C-C'

- 1 灰オリーブ色(5Y 6/2)砂。灰色(7.5Y 6/1)粘土、ところどころ酸化している。
- 2 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。
- 3 炭化物集積層。
- 4 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガンを多量に炭化物粒を少量に含む。
- 5 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。マンガンを多量に含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガンを多量に含む。
- 7 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。酸化鉄を少量に含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを少量に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 10 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。酸化鉄、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを多量に含む。



D-D'

- 1 炭化物集積層。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物粒を微量に含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 3/3)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを少量、炭化物を微量に含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物を微量に含む。
- 5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。
- 6 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。黄褐色(2.5Y 5/4)シルトを多量、酸化鉄を少量に含む。
- 7 暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを多量、炭化物を少量に含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を少量に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを少量に含む。
- 10 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 11 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄を少量に含む。



E-E'

- 1 河川跡。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを多量に含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガンを多量に含む。下層はにぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。炭化物やや多量に含む。下層はにぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを含む。
- 5 炭化物混入層。黄褐色(2.5Y 5/3)シルトが主体である。下層はにぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを含む。
- 6 炭化物層。
- 7 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。下層には炭化物、全体的にはにぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを多量に含む。
- 8 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。下層にはにぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトをその下層には灰、旋土を含む。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを多量に含む。
- 9 にぶい黄色(10YR 5/4)シルト。マンガンを多量に炭化物、黄褐色(2.5Y 5/3)粘土を少量に含む。
- 10 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄をやや多量に炭化物粒を少量、下層には炭化物を含む。
- 11 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、マンガンをやや多量に炭化物を少量に含む。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを下層に含む。
- 12 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、炭化物を少量に含む。
- 13 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 14 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、マンガンを多量に、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを少量に含む。
- 15 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄を多量に、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト、炭化物、マンガンを少量に含む。
- 16 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。地山層をブロック状に酸化鉄を多量に含む。
- 17 褐色(10YR 5/4)シルト。マンガンを多量に含む。
- 18 マンガン集積層。
- 19 褐色(10YR 4/6)シルト。マンガンを多量に炭化物を少量に含む。
- 20 褐色(10YR 4/6)シルト。マンガンを多量に含む。
- 21 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄を少量に含む。
- 22 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 23 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄を多量に含む。
- 24 灰オリーブ色(5Y 4/2)粘土。酸化鉄を多量に炭化物を少量に含む。

0 L = 28.500 m 2 m 1 : 60

第11図 B区1号方形周溝墓土層図

狭部では急斜面となる。その結果、最狭部では底面が広くなり、幅130cmを計る。基盤層・C層の上面から掘り込まれ、深さは、南隅が107cmを計り最も浅く、底面はH層上面に達している(L=27.050m)。そして西に向けて徐々に深くなり、底面の最も広がった西隅付近が最も深くなる。底面はH層を掘り込み、深さは110cm前後を計る(L=26.950m)。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

南西溝の覆土(第11図・B-B')のうち、上位の炭化物集積シルト層は第2層に相当する。最も厚い部分は16cmを計る。第2層の上面には、北東溝同様、灰白色粘土ブロックを含む黄色シルト層(第1層)が堆積している。第2層の下位には、黄褐色シルトを主体とし炭化物を含む第3層～第7層が堆積している。第7層より下位、第8層～第12層が、酸化鉄を含む黄褐色粘土層である。本溝内では、黄褐色シルトと暗(黒)褐色粘土ブロックとの混在層及びマンガン集積層は確認されていない。

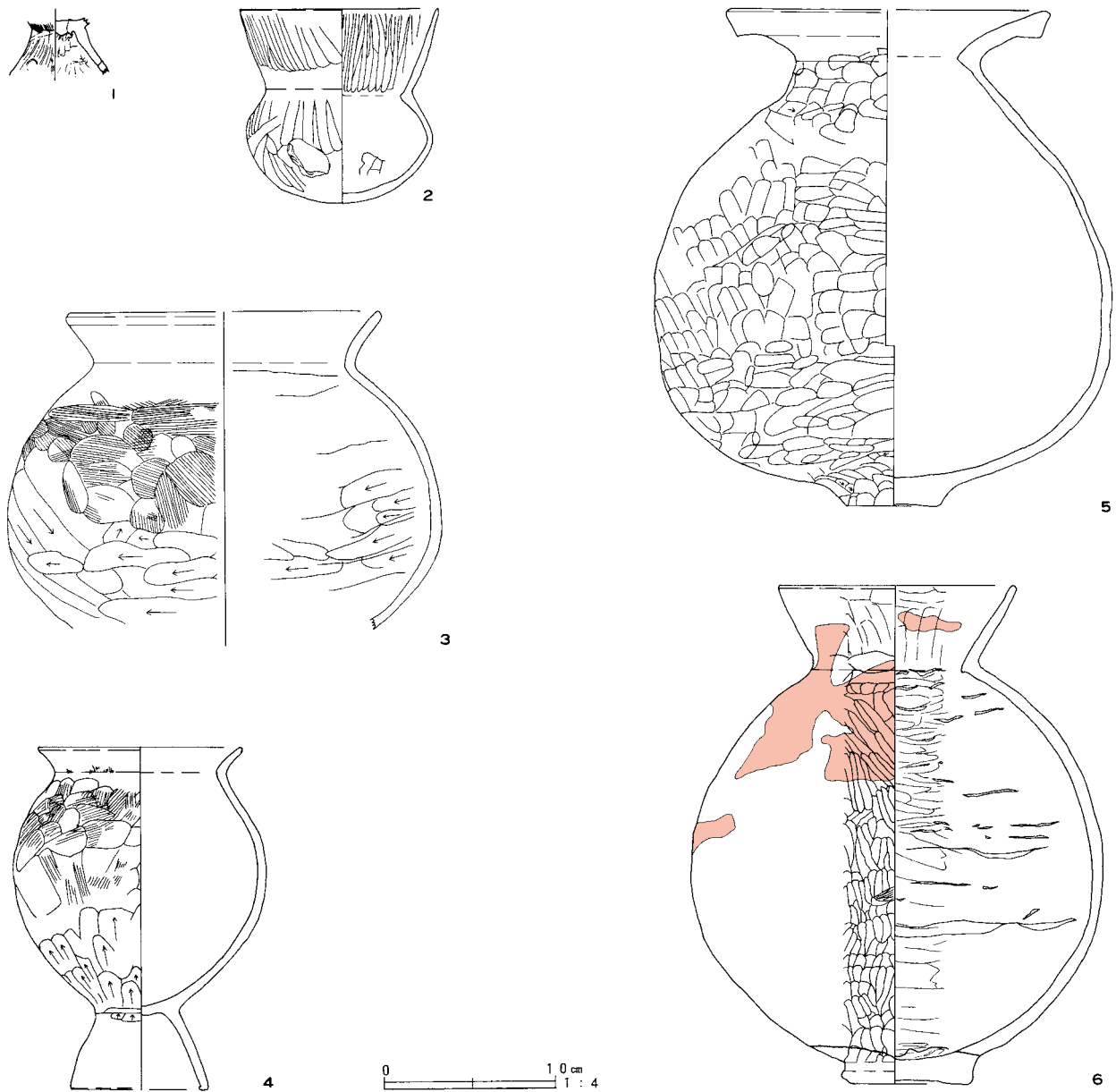
北西溝は、方台部側の壁と外面の壁が、共に、直線を成す部分と丸みをもつ部分がみられ、全体では北西方向に山形に突き出すような形態を示す。幅は西部一(方台部側が崩落しており推定上端2.20m、下端0.72m)、中央最広部一(上端2.70m、下端0.94m)、北部一(方台部側が崩落しており推定上端2.50m、下端0.92m)を計る。壁は、内外面とも同様の急斜面となるが、北へ移行するにつれ、外面の壁が緩斜面となり、全体では方台部側が急斜面、外側が緩斜面の観を呈する。外面は、基盤層・C層の上面から、方台部側は基盤層・B層中から掘り込まれている。深さは、西隅が92cmを計り最も深く、底面はH層上面に達している(L=27.120m)。そして北に向けて徐々に浅くなり、北隅付近で底面はG層を掘り込み、深さは83cm前後を計る(L=27.220m)。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

北西溝の覆土(第11図・C-C')のうち、上位の炭化物集積シルト層は第3層に相当する。最も厚い部分は14cmを計る。第3層の上面には、にぶい黄色シルト層(第2層)が堆積している。この第2層を掘り込んで堆積している第1層は、32号溝の覆土である。第3層の下位には、黄褐色シルトを主体とし、マンガン粒を多量に含むシルト層=第4層～第6層が堆積している。第7層より下位層には、多量の酸化鉄が含まれる。このうち第7層は、にぶい黄褐色シルト層である。第8層～第12層が、黄褐色粘土層である。また、第8層・第9層には、にぶい黄褐色シルト粒が含まれている。本溝内では、黄褐色シルトと暗(黒)褐色粘土ブロックとの混在層は確認されていない。

遺物は、溝内から器台(第12図-1)、埴(同一-2)、台付甕(同一-4)、壺(同一-5、6)、溝外では北西溝の約2m外側の基盤層・B層上面から甕(同一-3)が検出されている。溝内出土遺物は、いずれも覆土中からであり、南東溝を中心とした、北東溝東隅から南西溝南隅にかけて、埴(2)、台付甕(4)、壺(5)、器台(1)が、対辺の北西溝の西隅寄りで壺(6)が検出されたものである。

埴(2)は、北東溝東隅寄りの第3層(炭化物ブロックを含む黄褐色シルト層)中からの出土である。完形であり、胴部中央に2.7×1.8cmの不整形の孔が穿たれている。

台付甕(4)は、南東溝中央の、南東溝第7層(にぶい黄色シルトと炭化物を含む暗灰



第12図 B区1号方形周溝墓出土遺物

第2表 B区1号方形周溝墓出土遺物観察表 (第12図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	—	—	—	⑥②④①②	②	橙	脚部上位のみ	中央の円孔は下、上、横へとナデツケられている。脚部六方(?)透し(円孔)。
2	土師器・埴	11.8	11.5	—	④②⑥①	②	明赤褐	完形	体部中央下位に、1.8×2.8cmの孔が穿たれている。
3	土師器・甕	(18.2)	—	—	②①③④⑥	②	橙	1/3	胴部下位は内外面共剥離した部分が多い。二次加熱。
4	土師器・台付甕	12.2	20.3	(9.0)	④⑥②	②	明赤褐	一部欠	肩部以下表面剥離した部分が多い。ほぼ全面煤付着。二次加熱。
5	土師器・壺	(17.2)	29.5	5.5	①③⑥	②	橙	口縁部一部欠	全体に表面は磨滅し、調整は不明瞭な部分が多い。
6	土師器・壺	13.8	29.6	7.1	③①④	②	にぶい橙	完形	外面は全面に朱塗の痕跡が残る。底部は故意に破損されている。

黄色シルト層)中からの出土である。胴部下位の一部及び脚台部の一部を欠いている。

器台(1)は、受け台と脚の接合部のみであるが、南西溝南端の第2層(炭化物集積シルト層)最下面からの出土である。

壺(5)は、器台(1)に近接して、南西溝南端の第6層(全体には酸化鉄と炭化物を含み、下位には黄色シルトと炭化物を縞状に含む黄褐色シルト層)中からの出土である。破片の一部が南東溝中央部に及んでいる。口縁部の大半を欠いており、表面が剥離した部分が多い。

壺(6)は、北西溝の西端寄り、北西溝第7層(酸化鉄を含むにぶい黄褐色シルト層)からの出土である。ちょうど第8層(酸化鉄及びにぶい黄褐色シルトを含む黄褐色粘土層)の上面に載った格好を呈していた。打ち欠かれた底部は、80cm程離れて出土している。

甕(3)は、北西溝外の最上位基盤層上面から、上位1/3の出土である。本周溝墓に伴うものとは断定できないが、溝中出土の遺物がいずれも外側から転落した様相を呈していることから、一応、本周溝墓に伴うものとして扱った。

2号方形周溝墓 中心部やや西寄りにZ-19グリッドポイントが位置し、Y-18、Y-19、Z-18、Z-19各グリッドに及ぶ。東隅が1号方形周溝墓に近接するが、1mほどの間隔をもっている。また南東溝は、3号方形周溝墓と一部で接するが、重複を避けるように蛇行している。上面には29号、32号、33号の各溝跡が位置しており、29号、32号溝跡に南東溝を中心に北東溝・南西溝それぞれの東側部分の覆土上面を削平されている。また33号溝跡には、主体部土坑上段南東隅、北東溝・南西溝それぞれの中央部分の覆土上面を削平されている。

形態は、溝全周型で、北東辺・南東辺の2辺が脹らみをもったり、蛇行するが、ほぼ直線となる南西辺・北西辺を基本とした方形を呈するといえる。

全体規模は上面で、北西辺中央-南東辺中央が15.00m、北東辺中央-南西辺中央が15.10mを計る。

方台部規模は、北西辺中央-南東辺中央が8.42m、北東辺中央-南西辺中央が8.57mを計る。北隅及び南東溝中央は、崩落によって僅かに変形しているが、溝内のコンターによると、概ね正方形を呈するといえる。南西辺の軸偏差角は、N-49°-Wである。

方台部側の周溝への落ち込みラインが確認されたのは、L=28.020m前後であるが、方台部中央やや南西寄り、溝掘り込み面とほぼ同レベルで、北西-南東方向に長軸をもつ長円形の土坑が検出されている。上端は、長軸3.80m(南東端の上位が33号溝によって削平されているため残存の長さを示す)、短軸3.54mを計る。掘り込み面から急傾斜で15cm程落ち込み、中央部に向けて緩やかな傾斜をもつ。中央部では再び急傾斜で落ち込みをもつ。中央部の落ち込みは、北及び南隅部が崩落し、やや変形を呈してはいるものの、概ね長方形を呈するものといえる。規模は、長軸(上端2.98m、下端2.08m)、短軸(上端1.72m、下端北西部1.02m~南東部最大幅1.38m)を計る。底面は、多少凹凸がみられるものの、安定している。中段からの深さ20~25cm、全体の深さは、50~55cmを計る。覆土は、上層が灰黄褐色粘土ブロックを主体とし、マンガン粒を多量に含む褐色シルトブロックをも含む

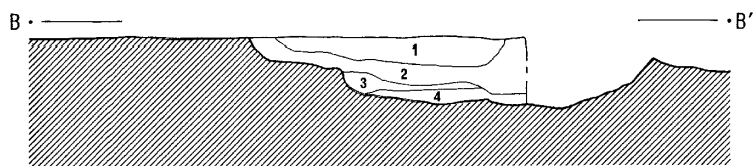
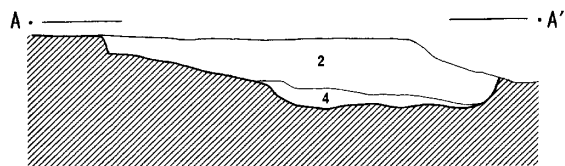
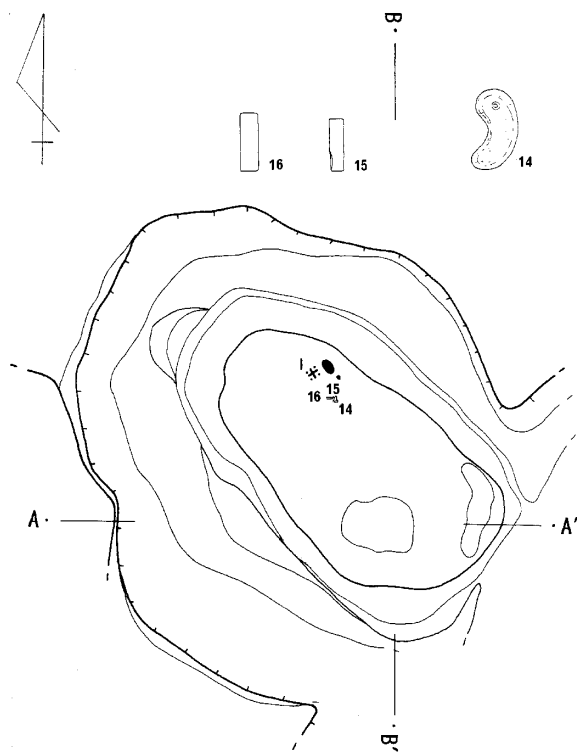
層（第2層）であり、下層が灰黄褐色粘土ブロックを主体とし、炭化物粒を含む層（第4層）である。場所によって、第2層の上位には、第2層をブロック状に、マンガン粒を多量に含む褐色シルト層（第1層）、第2層と第4層の間にオリーブ褐色シルト層（第3層）の堆積した部分もみられる。いずれも投入土の様相を呈していた。なお第1層は、1号方形周溝墓同様、L=28.300m付近で直径4m程の不整円形範囲で検出されており、本土坑がL=28.020m付近から存在していたことを示している。本周溝墓の主体部であると判断される。なお、長軸の軸偏差角は、周溝墓全体の軸偏差角と近似のN-46°-Wである。

中央部長方形土坑底面上、北西側短辺下端から60~72cm、北東側長辺下端から10~18cmの位置に、人の頭骨の一部と歯が検出されている（第13図・平面図中※1印部分）。いずれも残存状況が悪く、詳細は不明である。歯の南側18cmの底面上では、翡翠製勾玉1点（第15図-14）、緑色凝灰岩製管玉2点（同一-15、16）が集中して検出されている。勾玉は、腹の部分に研磨による光沢をよく残し、長さ4.3cmと大きく、重さも30.4gと重いものである。管玉は、勾玉の背に平行して接する状況で小型管玉（15）が、そこから2cm程離れて、これらと直交するような状況で大型管玉（16）が出土したものである。両管玉のうち前者は、長さ2.8cm、重さ2.7g、後者は、長さ3.1cm、重さ4.2gを計る。土器類は検出されていない。これらの配置から、本被葬者は、頭位を北西に、顔は北東に向けられていたとすることができる。

各溝の状況は、北東溝は脹らみをもち、南東溝は蛇行し、南西・北西溝はほぼ直線を成すなど、変化が大きい。

北東溝は、全体として外に脹らみをもつ。幅は北部（上端3.22m、下端0.60m）、中央部（上端3.44m、下端0.92m）、東部（上端3.24m、下端0.90m）を計り、やや不統一であるが、全体では、北側が狭く東側が広がる傾向を示している。これは、外面の壁が全体に丸みをもって脹らむのに対して、方台部側は、北側がほぼ直線を呈するために底部付近で狭くなり、東隅部では丸みをもって外壁と平行するために中央部からの広がりも継続されているためである。壁は、外面が緩斜面であるのに対して、方台部側は、急斜面である。外面及び方台部側ともに、基盤層・A層の上面から掘り込まれ、深さは、北隅が110cmを計り最も浅く、底面はG層最下面に達している（L=26.960m）。そして、東に向けて徐々に深くなり、東隅が最も深くなる。底面はH層に達し、深さ127cm前後を計る（L=26.780m）。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

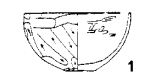
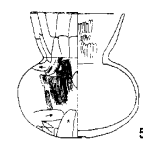
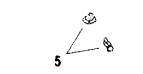
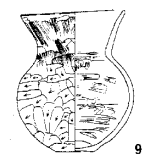
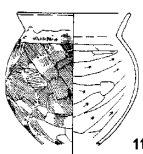
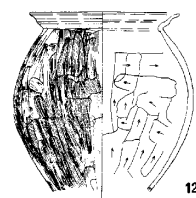
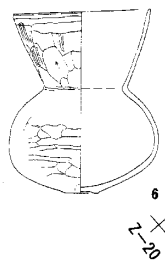
北東溝の覆土（第14図・A-A'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第3層、中位のマンガン集積層は第7層に相当する。第3層を中心として、第1層から第6層までは、褐色シルト・にぶい黄色シルトの混在層であり、第2層~第5層までが炭化物を含んでいる。このうち特に第3層に炭化物が顕著であり、第4層では縞状に含まれていることによる区分となっている。第3層は全体に厚く堆積し、最も厚い部分は15cmを計る。第7層のマンガン集積層は、少量の酸化鉄を含み、にぶい黄橙色粘土を主体としている。第7層より下位の第8層~第10層は、酸化鉄を多量に含む粘土層である。このうち第8層には、多量のにぶい黄色シルト及び炭化物が縞状に含まれている。暗褐色粘土混在層は確認されていない。



2号方形周溝墓主体部土層

- 1 褐色(10YR 4/1)シルト。マンガン粒多量、灰黄褐色(10YR 4/2)粘土ブロック少量含む。
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土ブロック主体層。1層がブロックの間に混じる。
- 3 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。灰黄褐色粘土ブロックはほとんど無い。
- 4 灰黄褐色(10YR 4/2)粘土ブロック主体層。炭化物粒少量含む。

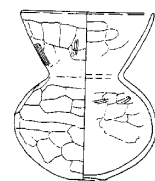
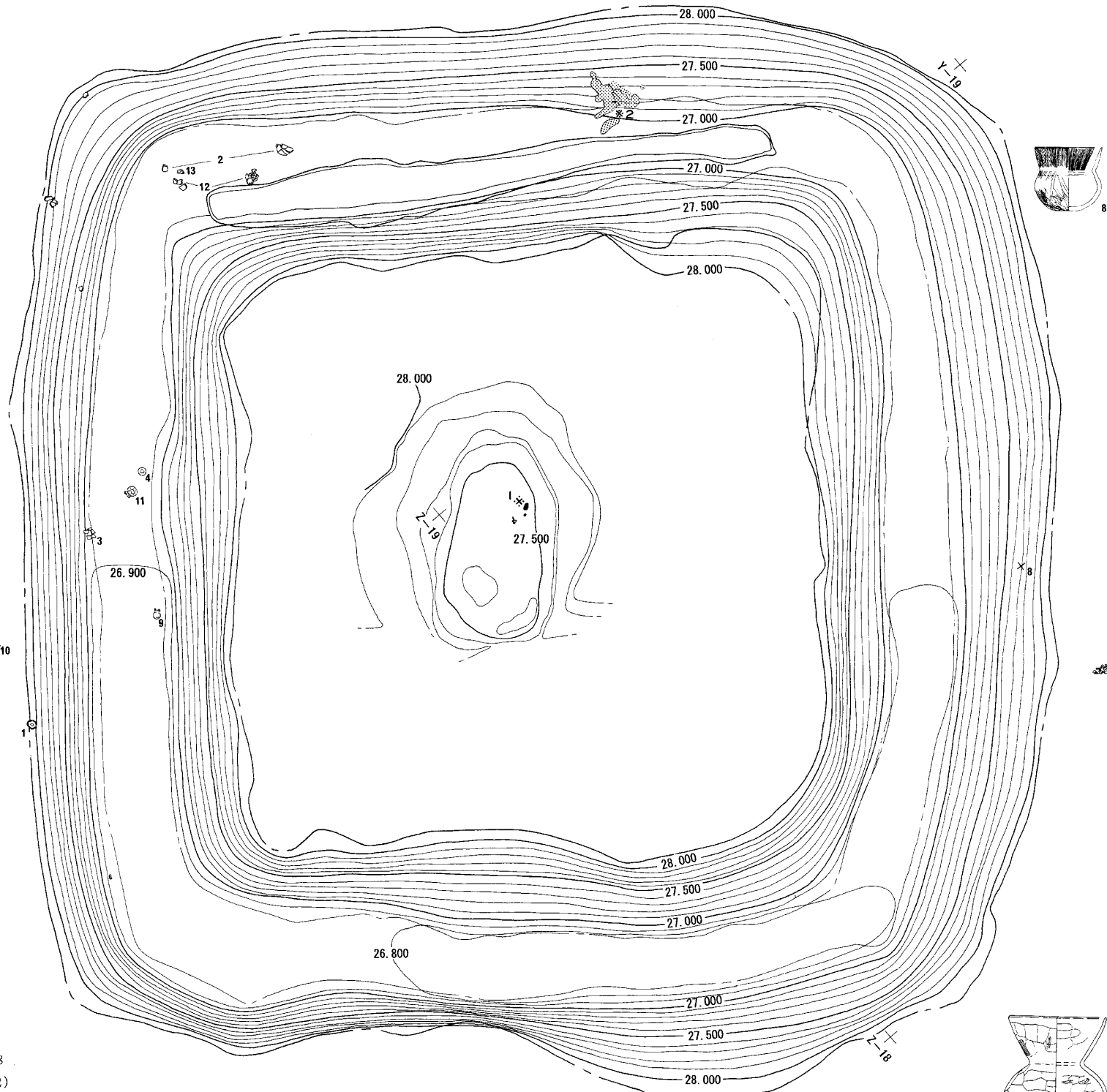
0 L = 28.100m 2m
1:60



遺物縮尺 1:8
(玉類縮尺 1:2)

0 4m
1:80

第13図 B区2号方形周溝墓



7

い。

北東溝と、近接する1号方形周溝墓南西溝との関連性(第11図・E-E')をみると、掘り込み面は共に、L=28.100m、基盤層はC層である。しかしながら、第14図A-A'ラインでみると、C層はL=28.000mを上端として、それより上位はA層が堆積している。実際、A層とC層は、マンガン粒の含有量の多少と、C層の下部に浅間C軽石粒が含まれていることによって区別されている。狭い範囲でB層が存在していない場合は、A層の下位でマンガン粒の含有量が少なくなってきた部分と、浅間C軽石粒が含まれていないC層の上位では、区別がつきづらく、A層とC層の区別ができなかったものとも考えられる。こうした状況であるが、両周溝墓の間の掘りこみ面基盤層は、レベル・土層の状況共にC層である。そして、C層の上面には、両溝に亘って、にぶい黄色シルトを多量に、下位に炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層(第7層)が堆積している。さらに、第7層の上面には、炭化物集積シルト層が、やはり両溝に亘って堆積している。また両溝とも、第7層の下位には1層挟んで、マンガン集積層が堆積している。1号周溝墓では褐色シルトを主体(18層)とし、2号周溝墓ではにぶい黄色シルトを主体にして少量の黄褐色粘土粒を含んで(9層)いる。マンガン集積層の下位は、1号周溝墓ではシルト層と酸化鉄を含む粘土層がみられるが、2号周溝墓では酸化鉄を含む粘土層のみが堆積している。このうち、1号周溝墓のシルト層(19・20層)と酸化鉄を含む粘土層の1層(22層)、2号周溝墓粘土層の1層(シルト・マンガン・炭化物・酸化鉄を含む=15層)は、それぞれ方台部からの崩落土である状況を示している。よって、両溝とも、炭化物集積シルト層—黄褐色シルト層—(1層)—マンガン集積層—酸化鉄を含む粘土層の層序は共通し、さらには炭化物集積シルト層—黄褐色シルト層が両溝に亘って堆積していることなど、土層から見た限りでは、時期差は見出せない。

南東溝の幅は、東部—(上端 3.48m、下端0.71m)、東側最広部—(上端3.64m、下端0.76m)、中央最狭部—(上端2.82m、下端0.82m)、南部—(上端3.00m、下端1.32m)を計る。東隅から3号周溝墓に接する地点までは、内外面とも脹らみをもち、方台部側がやや急斜面、外面がやや緩斜面という、北東溝での様相をそのまま推移させている。しかし3号周溝墓に接した地点からは、外面が大きく窪み、また張り出して蛇行し、壁面も急傾斜になる。逆に方台部側は、上位が窪み底面が張り出し、壁面も緩斜面を成すというように、両壁とも急変化する。この状況は、南隅まで連続するが、南に移行するにつれて、徐々に解除されてくる。基盤層・A層の上面から掘り込まれており、深さは、東隅が最も深く127cmを計り(L=26.780m)、底面はH層に達している。この深さは中央部まで継続し、そして南に向けて徐々に浅くなり、南隅では深さ120cmを計る(L=26.850m)。底面は、H層に達している。溝底は、東から南に向けて蛇行し、少しずつ幅を広げていく。底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

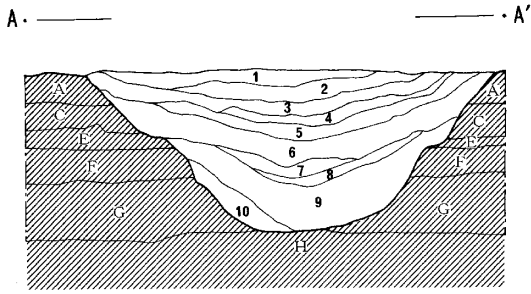
南東溝の覆土(第14図・D-D')のうち、上位の炭化物集積シルト層は第4層・第5層、中位のマンガン集積層は第10層、下位の粘土層は第17層～第19層に相当する。第4層・第5層は、本来同一層であるが、第4層には特に炭化物の量が多かったため、両層を区分し

たものである。また、本来の炭化物集積シルト層は、第4層を指している。非常に厚く堆積し、両層合わせると、最も厚い部分は22cmを計る。中にぶい黄褐色シルト粒を含んでいる。本層の上位には、黄褐色シルトを主体にし、炭化物を縞状に含む第2層・第3層が堆積している。第5層の下位には、褐色シルトを主体にして、炭化物を含む第6層～第9層が堆積している。このうち第7層～第9層までには、量は少ないものの、暗褐色粘土ブロックを含んでいる。マンガン集積層である第10層は、黄褐色粘土を主体として酸化鉄を含む。第11層～第16層は、再びシルトとなる。ただし、このうち第12層は、マンガン粒を多量に、下位に炭化物を層状に含む黄褐色粘土層である。第15層は、多量の炭化物を含み、下位の炭化物集積シルト層となっている。第17層～第19層は、酸化鉄を多量に含む粘土層であり、第17層は暗灰黄色、他の2層は黄灰色を呈する。また第19層には、基盤層・H層ブロックも含んでいる。

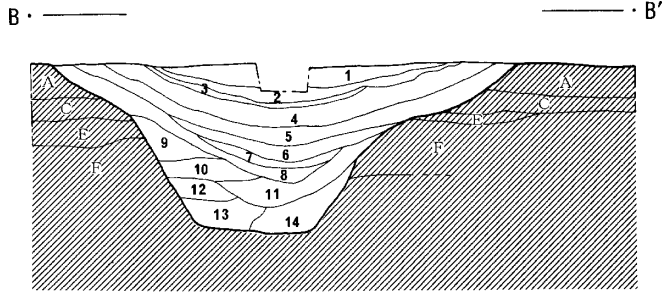
南東溝と接する3号方形周溝墓北西溝との関連性（第14図・D-D'）をみると、掘り込み面は、2号周溝墓方台部側が基盤層・A層であり、外面は両周溝墓とも基盤層・E層である。このE層をまたいで、炭化物・酸化鉄・暗褐色粘土ブロックを含む褐色シルト層（第8層）が、2号周溝墓から3号周溝墓に向けて、両溝に亘って堆積している。第8層の堆積は、3号周溝墓の西側に限られるものの、それより上位の第6層から第2層は、両溝に亘って満遍なく堆積（第5層は、第4層の一部）している。また、3号周溝墓の第8層以下の層は全て、2号周溝墓の第8層以下の各層に対比し得る層である。3号周溝墓の第21層は2号周溝墓の第9層、以下、第22層は第10層（マンガン集積層）、第23層は第12層、第24層は第17層、第25層は第18層、第26層は第19層（以上3層は酸化鉄を含む粘土層）に対応する。2号周溝墓にみられる中間層（第11、第13～第16層）は、この両溝の間においては、2号周溝墓のみに堆積する土層である。このように、第8層より上位層は、2号周溝墓方台部側からの同一層の流れ込みの様相を示し、中間のマンガン集積層、下位の酸化鉄を含む粘土層等は、僅かに様相を違えながらもそれぞれ対応する層として堆積している。これらのことから、土層堆積上からは、両者に前後関係は見出せない。

南西溝は、方台部側・外面共にほぼ直線を成して平行するが、西端部分で外面が僅かに丸みをもつ。幅は、南部一（上端3.02m、下端0.95m）、中央部一（上端3.14m、下端0.92m）、西部一（上端2.95m、下端0.80m）を計る。外面の壁は、南から北西に、やや急傾斜でほぼ均一に推移し、西隅に寄ったところでやや緩斜面を成す。方台部側の壁は、外面の壁とほぼ同じ傾斜で推移する。ただ、中央部やや西寄りの地点では、僅かに傾斜の緩む箇所がある。基盤層・A層の上面から掘り込まれており、深さは、南隅が最も深く120cmを計り（L=26.850m）、底面はH層に達している。そして、西に向けて徐々に浅くなり、南隅では深さ110cmを計る（L=26.940m）。底面は、H層に達している。溝底は、概ね両壁に平行するが、方台部側の壁が中央部やや西寄りの地点で張り出すためにやや蛇行し、西隅に向けて少しずつ幅を狭めていく。底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

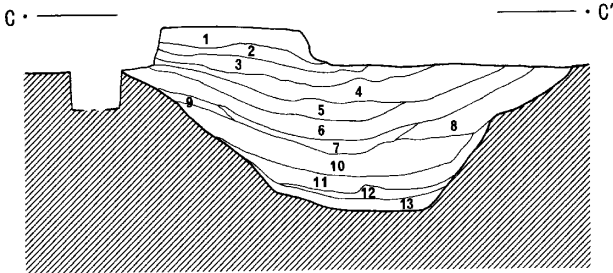
南西溝の覆土（第14図・B-B'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第2層・第3層、中位のマンガン集積層は第6層・第7層、黒褐色粘土ブロックを含むシルト層は第8層・



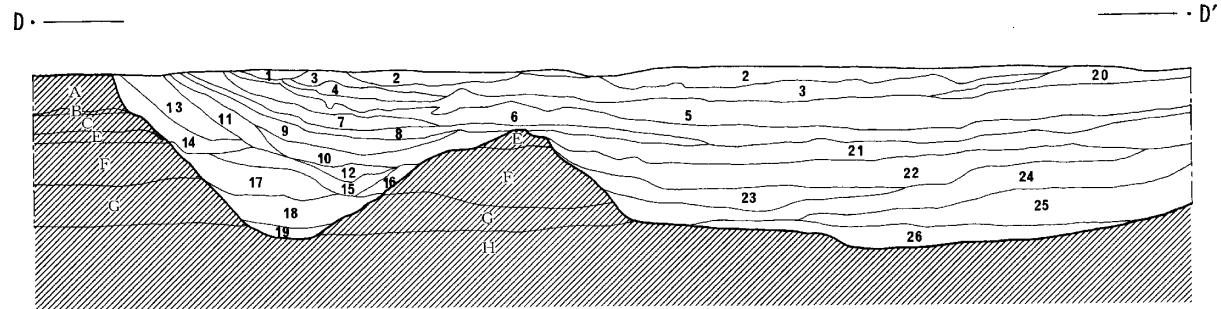
- A-A'
- 1 褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを少量含む。
 - 2 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。炭化物やや多量に含む。
 - 3 炭化物集積層。
 - 4 褐色(10YR 4/4)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト多量に含む。中に炭化物を層状に含む。
 - 5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。褐色(10YR 4/4)シルト多量、炭化物粒やや多量に含む。
 - 6 褐色(10YR 4/4)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト少量含む。
 - 7 にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘土。マンガン集積層。酸化鉄少量含む。
 - 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト多量に、下に炭化物を層状に含む。
 - 9 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄多量に含む。
 - 10 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量に含む。



- B-B'
- 1 褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物粒少量、にぶい黄褐色(10YR 4/4)シルトブロック少量含む。
 - 2 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物ブロック・粒多量に含む。炭化物集積層。下に炭化物堆積。
 - 3 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物ブロック・粒多量に含む。炭化物集積層。
 - 4 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物粒少量含む。
 - 5 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物粒少量含む。
 - 6 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。マンガン粒多量に含む。
 - 7 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。マンガン粒多量に含む。
 - 8 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。黒褐色(10YR 3/2)粘土ブロックを墳丘内側で多量に含む。
 - 9 褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物やや多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト少量、黒褐色(10YR 3/2)粘土ブロックを墳丘内側で多量に含む。
 - 10 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。酸化鉄多量、炭化物やや多量に含む。
 - 11 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 5/4)シルトやや多量に含む。
 - 12 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 5/4)シルトやや多量に含む。
 - 13 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘土。酸化鉄少量含む、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトが少量底部に沈着。
 - 14 暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘土。酸化鉄を多量、黄褐色(2.5Y 5/4)粘土少量含む。



- C-C'
- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物粒少量含む。
 - 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物粒少量含む。
 - 3 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物ブロック・粒多量に含む。
 - 4 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。
 - 5 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物少量含む。
 - 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。
 - 7 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。マンガン粒そばかす状に含む。
 - 8 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。黒褐色(10YR 3/2)粘土ブロックを多量に含む。
 - 9 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。
 - 10 にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘土。酸化鉄を少量含む。
 - 11 黄褐色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト多量に、下に炭化物を層状に含む。
 - 12 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄多量に含む。
 - 13 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量に含む。



- D-D'
- 1 河川跡。下に鉄分沈着。
 - 2 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物少量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 3 黄褐色(2.5Y 5/6)シルト。炭化物少量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。炭化物集積層。炭化物多量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 5 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。炭化物集積層。炭化物多量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 6 褐色(10YR 4/6)シルト。下に炭化物を層状に含む。
 - 7 褐色(10YR 4/6)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック少量、炭化物微量に含む。
 - 8 褐色(10YR 4/6)シルト。炭化物微量、酸化鉄少量含む暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロックを下位に層状に含む。
 - 9 褐色(10YR 4/4)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロックを少量、炭化物微量含む。黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロックを含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 10 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン集積層。酸化鉄を少量に含む。
 - 11 褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物微量含む。
 - 12 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。マンガン多量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 13 オリーブ褐色(10YR 4/4)シルト。炭化物微量に含む。
 - 14 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン多量含む。
 - 15 炭化物集積層。酸化鉄多量含む。
 - 16 褐色(10YR 4/4)シルト。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
 - 17 灰オリーブ色(5Y 4/2)粘土。酸化鉄少量含む。
 - 18 灰オリーブ色(5Y 4/2)粘土。棒状酸化鉄含む。
 - 19 灰オリーブ色(5Y 4/1)粘土。酸化鉄多量含む。地山H層をブロック状に含む。
 - 20 黄褐色(10YR 5/6)シルト。炭化物微量に含む。
 - 21 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン中量含む。下に炭化物を層状に含む。
 - 22 黄褐色(2.5Y 5/6)粘土。マンガン集積層。下に炭化物を層状に含む。
 - 23 褐色(10YR 4/6)粘土。黄褐色(2.5Y 5/3)粘土、マンガン、酸化鉄棒を多量に、ところどころ炭化物、H層ブロック少量含む。下に炭化物を層状に含む酸化鉄沈着。
 - 24 灰オリーブ色(5Y 4/2)粘土。少量の酸化鉄を含む。
 - 25 灰オリーブ色(5Y 4/2)粘土。少量の酸化鉄を含む。
 - 26 灰オリーブ色(5Y 4/1)粘土。H層ブロックを多量に、酸化鉄棒少量含む。

0 L = 28.500 m 2 m 1 : 60

第14図 B区2号方形周溝墓土層図

第9層、下位の粘土層は第11層～第14層に相当する。第2層・第3層は、多量の炭化物ブロック・粒を含む暗褐色シルトであり、ほぼ同一の様相を呈するが、第2層下面に炭化物の純層が存在するため、区分されたものである。この下位には、炭化物粒を含むオリブ褐色シルト（第4層）、暗褐色シルト（第5層）が堆積している。マンガン集積層である第6層・第7層は、ほぼ同様なにぶい黄褐色シルト層であるが、第7層は粘土に近いものである。黒褐色粘土ブロックを含むシルト層のうち第8層は、にぶい黄褐色シルト層であり、第9層は、炭化物粒もやや多量に含む褐色シルト層である。いずれも方台部側からの流れ込みである。同じく方台部側からの流れ込み状況は、第9層下位の第10層（酸化鉄・炭化物を多量に含むにぶい黄色シルト層）でもみられる。酸化鉄を含む粘土層のうち、上位は黄褐色（第11層・第12層）、下位は暗オリブ褐色（第13層・第14層）というような、色相の区別をみせている。

北西溝は、方台部側・外面共にほぼ直線を成して平行するが、北端部分で特に外面が丸みをもつ。幅は、西部一（上端 3.50m、下端1.26m）、中央部一（上端3.36m、下端1.16m）、北部一（上端3.10m、下端0.95m）を計る。外面の壁は、西から北東に、やや緩い傾斜で推移し、北隅に寄ったところでさらに緩さを増すが、北隅では再び元のやや緩い傾斜に戻している。方台部側の壁は、全体では外面より傾斜は急であり、変化の仕方は、外面の壁と軌をほぼ同じくしている。基盤層・A層の上面から掘り込まれており、深さは、西隅が110cmを計り（L=26.940m）、底面はH層に達している。そして、北東に向けてほぼ同レベルで推移し、北隅でも深さ110cmを計る（L=26.960m）。底面は、G層下面に達している。溝底は、概ね両壁に平行するが、両壁とも北隅寄りの地点で張り出すために、この部分で一気に幅を狭める。底面の方台部側は、幅30～64cm、深さ4～8cmで一段落ち込み、溝状となる。北東溝のほぼ全体に亘り、長さは8.24mを計る。ピット等、他の落ち込みはみられず、遺物も検出されていない。なお、北西溝全体の側壁中にも、ピット等の痕跡は検出されていない。

北西溝の覆土（第14図・C-C'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第3層、中位のマンガン集積層は第7層、黒褐色粘土ブロックを含む層は第8層、下位の粘土層は第10層～第13層に相当する。第3層より上位には、いずれも炭化物粒を少量含む黄褐色シルト（第1層）、オリブ褐色シルト（第2層）が堆積している。下位の第4層～第6層は、オリブ褐色を呈する。第4層はシルト層、第5層は少量の炭化物を含むシルト層、第6層は粘土層である。第7層のマンガン集積層は、黄褐色粘土層であり、第8層の黒褐色粘土ブロック含有層はにぶい黄褐色粘土層である。第8層の主体であるにぶい黄褐色粘土層の純層が第9層であり、第9層に酸化鉄を含む層が第10層である。以下、酸化鉄を含む粘土層はそれぞれ、黄褐色（第11層）、暗灰黄色（第12層）、黄褐色（第13層）を呈する。このうち第11層は、にぶい黄色シルトを多量に、下位に炭化物を縞状に含んでいる。本溝内覆土は、中位層が粘土質である点に特色がある。

遺物は、①北東溝中央、②南西溝中央、③西隅3箇所集中して、溝内及び外面から出土している。

① 北東溝中央部では、溝内から埴(第15図-8)、溝外面上端から45cmの地点から、埴(同一-7)が検出されている。両者の間隔は1.7mであり、(8)の原位置は、溝外面の(7)の周辺に求められる。

埴(7)は、大型である。口縁部の1/2、胴部の中位の一部を欠いている。表面は剝離した部分が多く、調整痕の不明な部分が多い。基盤・A層の上面から検出されている。

埴(8)は、小型であり、ほぼ完形である。北東溝第3層・炭化物集積褐色シルト層の下位から検出されている。

両者の間隔は1.7mであり、(8)の原位置は、それぞれの出土状況から、溝外面の(7)の周辺に求められる。

② 南西溝中央では、溝内から椀(第15図-1)、埴(同一-3、4、9)、台付甕(同一-11)が、溝外面から埴(同一-5、10)が検出されている。

椀(1)は、溝中央部南隅寄りの、南西溝第5層・暗褐色シルト層下位、外面掘り込み直下で、壁に接して検出されている。内面の大部分が表面剝離しており、正置の状況であったことを物語っている。ほぼ完形である。

埴(3)は、溝中央部、南西溝第5層下位から検出されている。小型であり、全体の1/3を欠いている。外面の一部が強烈な二次加熱によって表面が剝離している。

埴(4)は、溝中央部、南西溝第5層最下位から検出されている。小型で完形品である。

埴(5)は、溝中央部やや南隅寄りの、外面上端から100~110cmの地点で、基盤・A層上面、炭化物を僅かに含む暗褐色シルト層(溝内第5層)最下位から検出されている。中型であり、胴部上位1/2を欠いている。

埴(9)は、溝中央部、南西溝第5層中から検出されている。中型であり、口縁の一部を欠いている。

埴(10)は、溝中央部やや南隅寄りの、外面上端から32cmの地点で、基盤・A層上面、炭化物を僅かに含む暗褐色シルト層(溝内第5層)最下位から検出されている。埴(5)とは、90cmの間隔がある。大型であるが、胴部中位より上を欠いている。

台付甕(11)は、溝中央部、南西溝第5層中から検出されている。外面には全面に煤が付着し、使用頻度を窺わせる。底部から台部を欠いている。

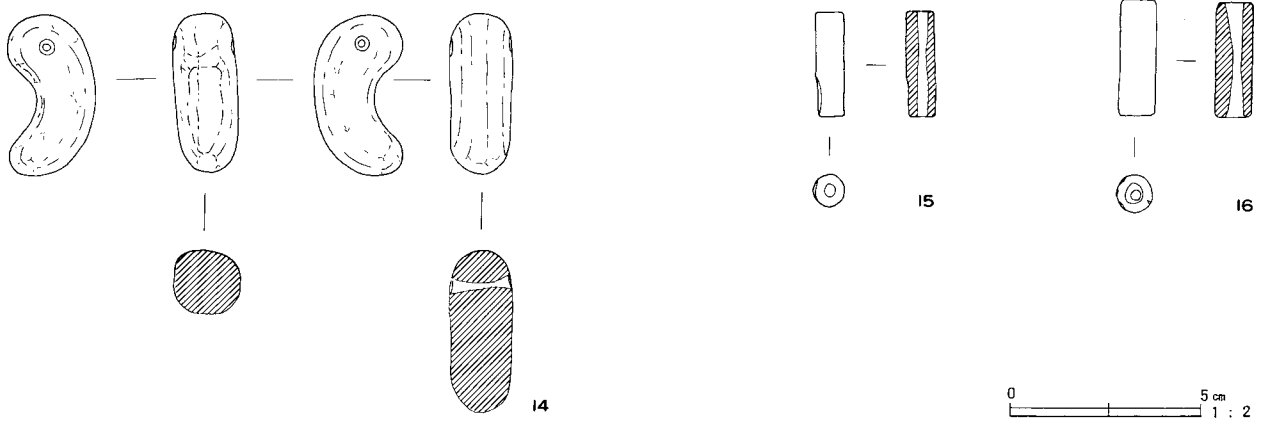
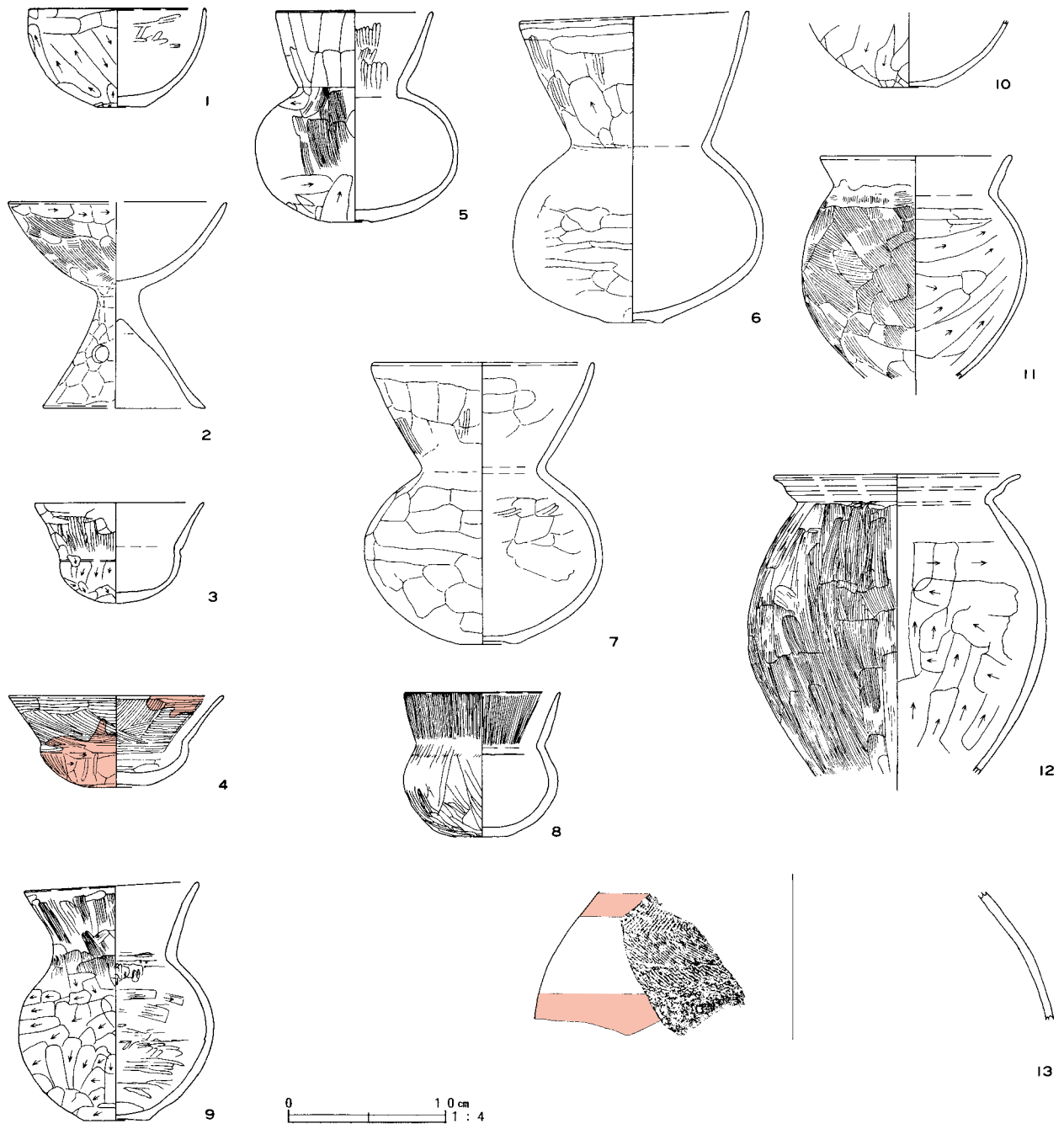
溝内出土の土器は、いずれも転落後に割れたもので、原位置は、(5)(10)の検出された位置から中央部にかけての溝外面(中央からやや南隅寄りの範囲)に求められる。

③ 西隅付近では、溝内から高杯(第15図-2)、台付甕(同一-12)、壺(同一-13)が、溝外面から埴(同一-6)が検出されている。

高杯(2)は、北西溝西隅及び西隅寄り、北西溝第6層(オリーブ褐色粘土層)中から検出されている。両端部1/2が欠けている。

埴(6)は、北西溝西隅付近の、西隅外面上端から140cmの地点で、基盤・A層上面、炭化物を僅かに含むオリーブ褐色シルト層(溝内第5層に相当)中から検出されている。大型である。

台付甕(12)は、北西溝西隅及び西隅寄り、北西溝第6層(オリーブ褐色粘土層)最下



第15图 B区2号方形周沟墓出土遗物

第3表 B区2号方形周溝墓出土遺物観察表 (第15図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・椀	11.2	6.2	2.9	②④①③⑥	②	明赤褐	完形	全体に丁寧な仕上がりで器面は密。口縁部1/4煤付着。
2	土師器・高坏	(13.7)	13.0	(10.2)	②⑥①④③	②	明赤褐	3/5	胎土に砂粒多い。口縁部1/2煤付着。二次加熱。脚部三方透し(円孔)。
3	土師器・埴	10.6	6.3	—	①②③④	②	にぶい赤褐	2/3	底面一部剝離。口縁部1/2煤付着。二次加熱。
4	土師器・埴	13.5	5.8	—	②⑥①④	①	赤	完形	朱塗。口縁部1/2煤付着。
5	土師器・埴	9.9	13.3	2.7	①④③②⑥	②	明赤褐	4/5	砂粒がやや多い。
6	土師器・埴	14.4	19.5	3.3	③⑥②①④	②	明赤褐	5/6	表面一部磨滅。
7	土師器・埴	14.0	17.8	3.7	⑥②③①④	②	赤	2/3	
8	土師器・埴	9.7	9.1	3.4	⑥①④③	②	明赤褐	完形	外底面黒斑。
9	土師器・埴	11.0	15.0	4.0	③①②④⑥	②	橙	口縁部一部欠	表面剝離した部分が多い。
10	土師器・埴	—	—	3.2	①④②③⑥	②	灰黄褐	底部のみ	内外面共吸炭部分が多い。
11	土師器・台付甕	12.0	—	—	②③①⑥④	②	明赤褐	4/5 底部欠	外面全面煤、内面中位～肩部煤付着。二次加熱。
12	土師器・台付甕	15.6	—	—	①②④⑥	②	褐	1/2	内外面ほぼ全面煤付着。二次加熱。
13	土師器・壺	—	—	—	⑥①④③②	②	にぶい橙	胴部一部のみ	文様帯上下位共朱塗。
14	翡翠製・勾玉	長さ 4.3	最大径 1.7	孔径 0.4	重さ 30.4g			完形	両方向からの穿孔。
15	緑色凝灰岩・管玉	長さ 2.8	最大径 0.7	孔径 0.3	重さ 2.7g			完形	両方向からの穿孔。
16	緑色凝灰岩・管玉	長さ 3.1	最大径 0.9	孔径 0.5	重さ 4.2g			完形	両方向からの穿孔。

位から検出されている。胴部下位1/2及び台部を欠いている。口縁部内外面、胴部外面に煤が、胴部内面には炭化物が付着し、強い二次加熱を受けている。

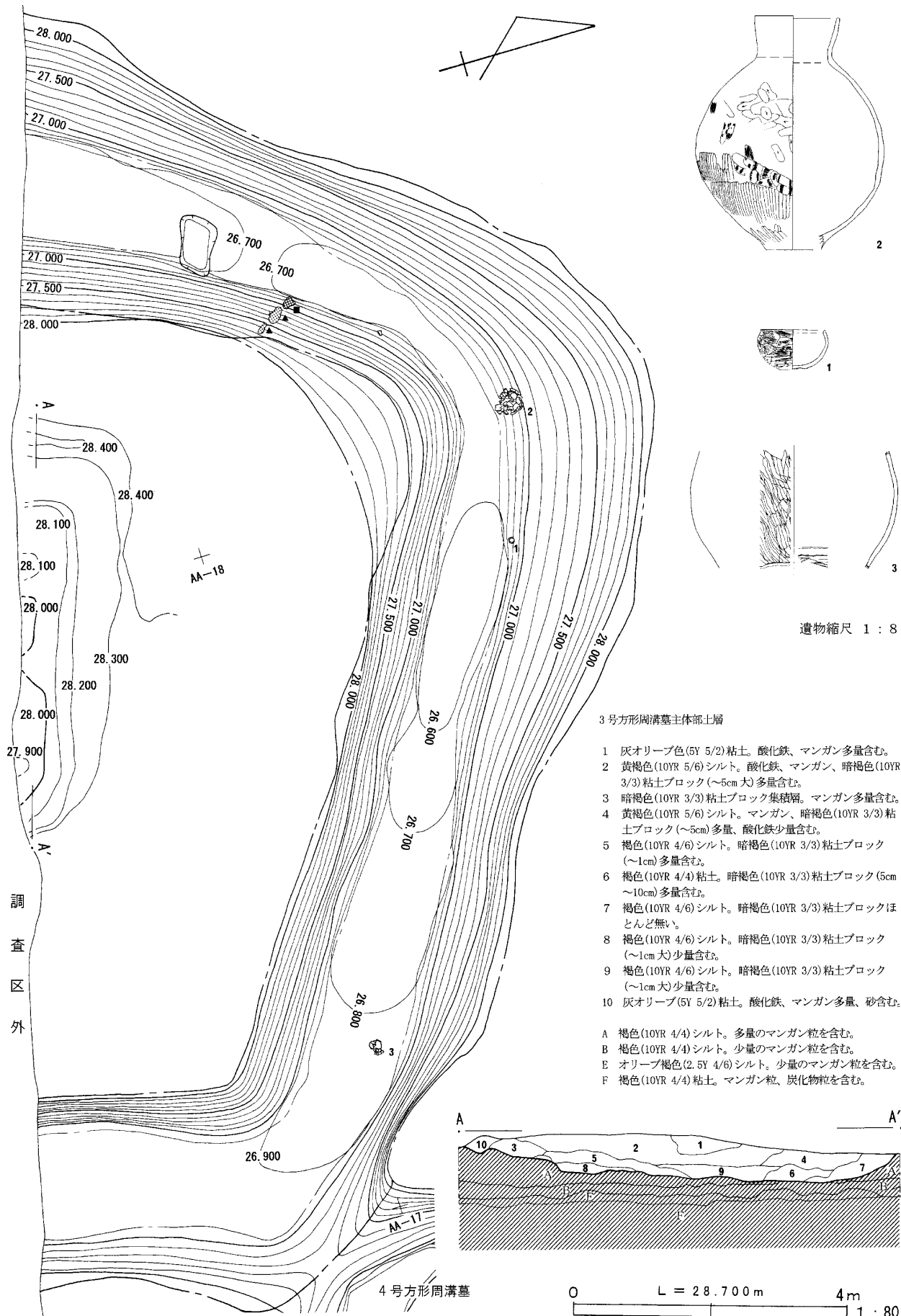
壺(13)は、北西溝西隅及び西隅寄り、北西溝第6層(オリーブ褐色粘土層)中から、台付甕(12)に近接して、肩部の一部が検出されている。

その他、南西溝の西端部分の炭化物を僅かに含むオリーブ褐色シルト層(北西溝第5層に相当)中から台付甕胴部破片が検出されている。(12)の一部と考えられるが、直接復元はできなかった。こうしたことから、③出土土器の原位置は、この西隅外面とすることができる。

④北西溝中央では、第3層・炭化物集積暗褐色シルト層の最下面から、骨粉・灰・焼土・炭化材が集中して検出されている(第13図※2印部分)。

3号方形周溝墓 Z-17・18グリッド、AA-16・17・18グリッドに位置している。南半分が調査区外になるため、北半分のみ調査であり、恐らく、南隅はAB-17グリッド、西隅はAA-19グリッドに及ぶと思われる。上面には、26号、29号、30号、31号、32号の各溝跡及び、22号井戸跡が位置しており、井戸跡が周溝東隅の覆土を掘り込んでいるものの、他は直接の影響を受けていない。しかしながら、東端から南東溝外面にかけては、B区を南北流する河川跡調査に際して、上面を削平している。

形態は不明であるが、調査部分の溝に切れ目はなく、恐らく、溝全周型であろうと思われる。方台部側縁辺の軸偏差角は、北東辺がN-57°-Wを示すのに対して、北西辺はN-150°-Wを示してほぼ直角となるものの、南東辺はN-165°-Wを示し、直交していない。方形を基本として、南東辺の脹らんだ形態が推定される。



遺物縮尺 1 : 8

3号方形周溝墓主体部土層

- 1 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土。酸化鉄、マンガン多量含む。
 - 2 黄褐色(10YR 5/6)シルト。酸化鉄、マンガン、暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(〜5cm大)多量含む。
 - 3 暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック集積層。マンガン多量含む。
 - 4 黄褐色(10YR 5/6)シルト。マンガン、暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(〜5cm)多量、酸化鉄少量含む。
 - 5 褐色(10YR 4/6)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(〜1cm)多量含む。
 - 6 褐色(10YR 4/4)粘土。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(5cm〜10cm)多量含む。
 - 7 褐色(10YR 4/6)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロックほとんど無い。
 - 8 褐色(10YR 4/6)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(〜1cm大)少量含む。
 - 9 褐色(10YR 4/6)シルト。暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロック(〜1cm大)少量含む。
 - 10 灰オリーブ(5Y 5/2)粘土。酸化鉄、マンガン多量、砂含む。
- A 褐色(10YR 4/4)シルト。多量のマンガン粒を含む。
 B 褐色(10YR 4/4)シルト。少量のマンガン粒を含む。
 E オリーブ褐色(2.5Y 4/6)シルト。少量のマンガン粒を含む。
 F 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン粒、炭化物粒を含む。

4号方形周溝墓

0 L = 28.700 m 4m 1 : 80

第16図 B区3号方形周溝墓

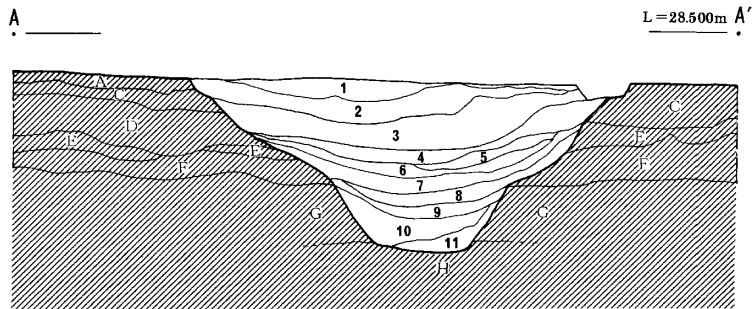
全体規模は知らないが、現状では、北東辺に平行した規模は、北西溝—南東辺で、外縁間17.40mを計る。また方台部北東辺長は、10.62mを計る。

方台部側の周溝への落ち込みラインが確認されたのは、 $L = 28.000 \sim 28.050\text{m}$ であるが、方台部の中央付近では、 $L = 28.350 \sim 28.450\text{m}$ の高さで、土坑が検出されている。北側の一部が調査されたのみで全容は知らないが、東西方向に長軸をもつ長方形（隅円）土坑であろうと思われる。東西の軸長は、上縁6.10mを計る。平面形は、西側が矩形、東側が円形を呈するが、東側でも底面付近では、丸みをもった矩形に近くなる。西側外縁から緩くおちこみ、120cm程のところで急傾斜となる。底面は、僅かに凹凸をもちながら少しずつ深くなり、390cmほど続く。そして、緩やかなカーブを描いて東側外縁に至る。底面の深さは、約40cmである。覆土は、近世遺構の覆土である第1層及び第10層を除いて、第2層～第9層には全て、暗褐色粘土ブロックが含まれて（第7層は極微量）おり、投入土の様相を示している。本周溝墓の主体部であると判断される。なお、本土坑北辺の軸偏差角は、 $N-72^\circ - W$ を示す。遺物は、検出されていない。

周溝は、北東溝及び、南東・北西溝それぞれの北側部分が調査されたのみである。

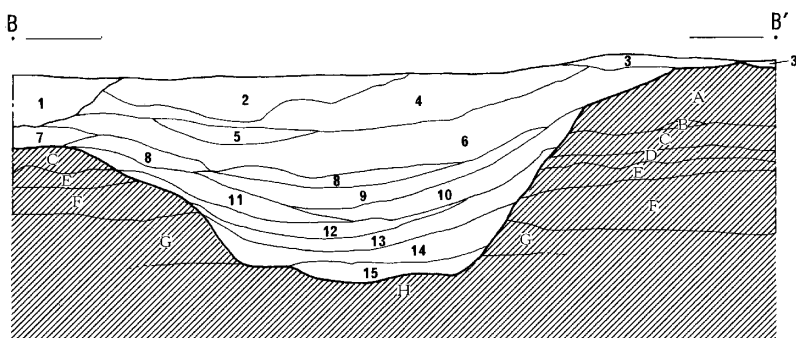
北東溝は、外辺に凹凸がみられ、東隅では4号方形周溝墓西隅と重複する。幅は、北部—（上端3.66m、下端0.57m）、北部最広部—（上端3.92m、下端0.90m）、中央部—（上端2.80m、下端1.00m）、東部最広部—（上端3.35m、下端1.32m）、東部—（上端2.56m、下端1.10m）を計り、上端は北から東に向けて徐々に幅を狭めるのに対して、下端は幅を広めていく。この変化は、方台部側の壁の傾斜がほぼ一定（北隅部の上位は崩落している）であるのに対し、外面の壁が、北側が緩やかな傾斜であるものの、東に向けて急になり、東隅部では最も急になるために生じたものである。しかし、外面の壁が方台部側の壁より傾斜が急になるのは東隅部のみであり、全体では、外面の壁が緩傾斜であるのに対して、方台部側の壁が急傾斜を示しているといえる。外面は基盤層・A層から、方台部側は基盤層・C層上面から掘り込まれ、深さは、北隅で1.40mを計り、底面はH層を掘り込んでいる（ $L = 26.650\text{m}$ ）。北隅から3mほど東の地点が最も深く1.50mを計り、やはり底面はH層を掘り込んでいる（ $L = 26.540\text{m}$ ）。ここから東に向けて徐々に浅くなり、東隅では最も浅く1.15mを計る。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

北東溝の覆土（第17図・A—A'）のうち、上位の炭化物集積シルト層は第4層、中位のマンガン集積層は第7層、下位の酸化鉄を含む粘土層は第9層～第11層に相当する。第4層は黄褐色シルト層であり、1号及び2号方形周溝墓の炭化物集積シルト層に比べて、含まれている炭化物量は圧倒的に少ない。上位には、少量の黄色シルト、炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第1層）、多量のマンガン粒、少量の炭化物を含む黄褐色シルト層（第2層）、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト層（第3層）、また下位には多量のマンガン、黄色シルトを含むにぶい黄褐色シルト層（第5層）、少量の黄色シルト、炭化物、マンガンを含み、下位に炭化物を層状に含む褐色シルト層（第6層）が堆積している。第7層（マンガン集積層）は、少量の黄色シルト、炭化物をも含む褐色シルト層である。第8層・第9層は、ともにオリーブ褐色粘土層であるが、上層の第8層には多量のマンガン、黄色



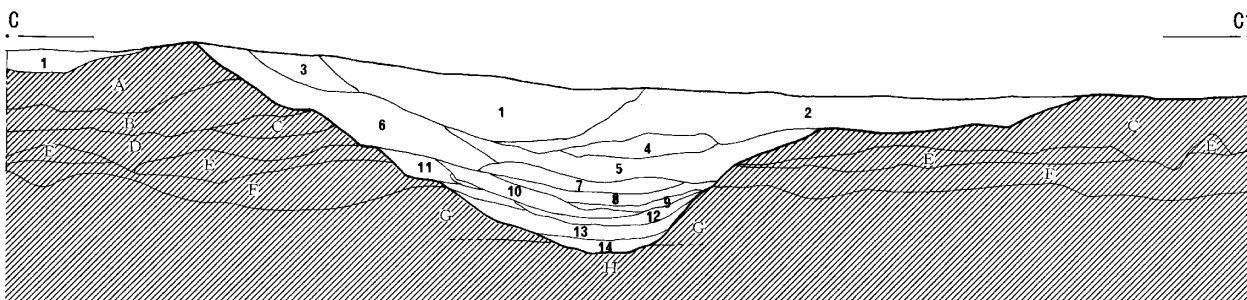
A-A'

- 1 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。炭化物少量、ところどころ黄色シルト含む。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン多量、炭化物少量含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。炭化物少量含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。炭化物少量含む。
- 5 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。マンガン、黄色シルト多量を含む。
- 6 褐色(10YR 4/4)シルト。黄色シルト、少量に炭化物、マンガンを含む。下位に炭化物を層状に含む。
- 7 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン多量、黄色シルト、炭化物少量含む。
- 8 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘土。マンガン多量、酸化鉄少量含む、下位に黄色シルトを含む。
- 9 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄、炭化物粒多量を含み、黄色シルトを層状に含む。
- 10 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。酸化鉄多量を含む。地山層がブロック状にふくまれる。
- 11 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。酸化鉄多量、炭化物少量含む。



B-B'

- 1 32号溝跡。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物、マンガン多量に含み、土器含む。
- 3 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン含み、土器含む。長石を多量含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。マンガン多量、炭化物少量含む。
- 5 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。炭化物少量含む。
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。マンガン多量含む。
- 7 褐色(10YR 4/4)粘土。炭化物少量含む。
- 8 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン集積層。下位に灰を層状に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。マンガン集積層。下位に灰と炭化物を層状に多量含む。
- 10 褐色(10YR 4/6)粘土。マンガン多量、炭化物少量含む。
- 11 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。マンガン集積層。下位に灰層を含む。
- 12 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。マンガン集積層。下位に灰と炭化物を層状に多量含む。
- 13 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄、マンガン、炭化物を多量含む。下位に炭化物を層状に含む。
- 14 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄棒、マンガンを多量含む。
- 15 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。地山F層をブロック状に含む。



C-C'

- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄多量、砂を層状に幾重にも含む。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。マンガン多量、黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック少量、酸化鉄微量含む。
- 3 褐色(10YR 4/4)シルト。マンガン多量含む。
- 4 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。マンガン、黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロックを多量、酸化鉄少量含む、下位に砂を層状に含む。
- 5 褐色(10YR 4/4)シルト。黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック、酸化鉄を多量、マンガン少量、炭化物微量、下位に炭化物を含む暗褐色(10YR 3/3)粘土ブロックを層状に含む。
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン多量含む。
- 7 褐色(10YR 4/6)シルト。黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック多量、砂、酸化鉄少量含む。下位に炭化物を層状に含む。
- 8 褐色(10YR 4/4)シルト。5層より明るい色を呈する。下位に炭化物を層状に含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。酸化鉄多量含み、下位に炭化物、灰を層状に含む。
- 10 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。酸化鉄多量に含む。下位に炭化物、灰を層状に含む。
- 11 褐色(10YR 4/4)シルト。酸化鉄、黄褐色(2.5Y 5/3)粘土ブロック多量に、炭化物微量に含む。
- 12 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄多量含む。
- 13 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
- 14 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、炭化物、H層ブロック少量含む。

0 L = 28.700 m 2 m
1 : 60

第17図 B区3号方形周溝墓土層図

シルトを含み、酸化鉄は少量であるのに対して、第9層は、酸化鉄、炭化物を多量に含み、下位では黄色シルトが層を成している。よって、各周溝に堆積する酸化鉄を含む粘土層は、第9層以下ということになる。第10層・第11層は、ともに暗灰黄色粘土であり、多量の酸化鉄の他に、第10層には基盤層・G層（黄褐色粘土）ブロックが、第11層には少量の炭化物が含まれている。

南東溝は、外面の東隅部で4号方形周溝墓西隅の外面と重複している。また溝上面から南東部にかけては、B区を南北に入り組んで流れる河川跡による削平及び、その調査（第3次調査の時点では、方形周溝墓の存在が確認されていなかった）に伴って、大きく削平されている。そのため外辺は、 $L=27.550\text{m}$ より下位が調査されたにすぎない。形態は、方台部側上位及び外面側共にほぼ直線を成して平行するのに対し、底面付近では多少凹凸がみられる。北東溝との交角が直角を成さず、南東に脹らみをもつ携帯を想定させる。幅は、東部一（上端 3.20m 、下端 1.52m ）、調査南端部一（上端 2.84m 、下端 1.54m ）を計る。下端底面幅は、北東溝の東への拡大化を受け継ぎ、東隅で最も広がった幅で南へと継続している。壁の傾斜は、方台部側が急であるのに対して、外面は緩やかである。方台部側からの深さは 1.10m で、ほぼ一定である（ $L=26.950\text{m}$ ）。掘り込み面を南端部でみると、方台部側が基盤層・A層（ $L=28.650\text{m}$ ）、外面がC層（ $L=28.200\text{m}$ ）であることが確認でき、本来の方台部側からの深さは、 1.70m であったことが知れる。底面は、H層を掘りこんでいる。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

南東溝の覆土（第17図・C-C'）のうち、第1層～第7層は、河川跡の覆土である。上位の炭化物集積シルト層、中位のマンガン集積層、暗褐色粘土ブロック混在層は存在せず、下位の酸化鉄を含む粘土層は第12層～第14層に相当する。第8層～第11層は、シルト層であり、それぞれの下位では、第8層が炭化物を層状に、第9層及び第10層が炭化物・灰を層状に、第11層が多量の黄褐色粘土ブロック及び少量の炭化物を含んでいる。また第8層以外では、多量の酸化鉄を含んでいる。酸化鉄を含む粘土層である第12層～第14層のうち第12層は、オリーブ褐色を呈する。第13層・第14層は、ともに黄褐色を呈し、少量の炭化物を含むが、第14層にはさらに、H層ブロックも含まれてくる。

北西溝は、2号方形周溝墓の南東溝、中央部から南隅にかけて隣接するが、これを避けるように外面が窪む形態を示す。幅は、北部一（上端 3.00m 、下端 0.40m ）、北側最狭部一（上端 2.80m 、下端 0.94m ）、調査西端部一（上端 4.48m 、下端 1.42m ）を計り、下端底面幅は、最も狭い北端から西に向けて大きく広がる。壁の傾斜は、総体的に、方台部側が急であるのに対して、外面は緩やかである。北隅では、外面が基盤層・C層から、方台部側は基盤層・A層上面から掘り込まれ、深さは 1.40m を計り、底面はH層を掘り込んでいる（ $L=26.650\text{m}$ ）。西端部では、方台部側が基盤層・A層（ $L=28.400\text{m}$ ）、外面がC層（ $L=27.600\text{m}$ ）からなので掘り込みであることが確認でき、底面は、H層を掘りこんでいる（ $L=26.650\text{m}$ ）ことから、本来の方台部側からの深さは、 1.75m であったことが知れる。北側最狭部の溝底には、 $82\times 48\text{cm}$ 、深さ 6cm の隅円長方形がみられるが、他の側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

北西溝の覆土(第17図・B-B')のうち、中位のマンガン集積層は第8層、第9層、第11層、第12層、下位の酸化鉄を含む粘土層は第13層・第14層に相当する。上位の炭化物集積シルト層、中位の暗褐色粘土ブロック混在層は存在していない。第1層は、32号溝跡の

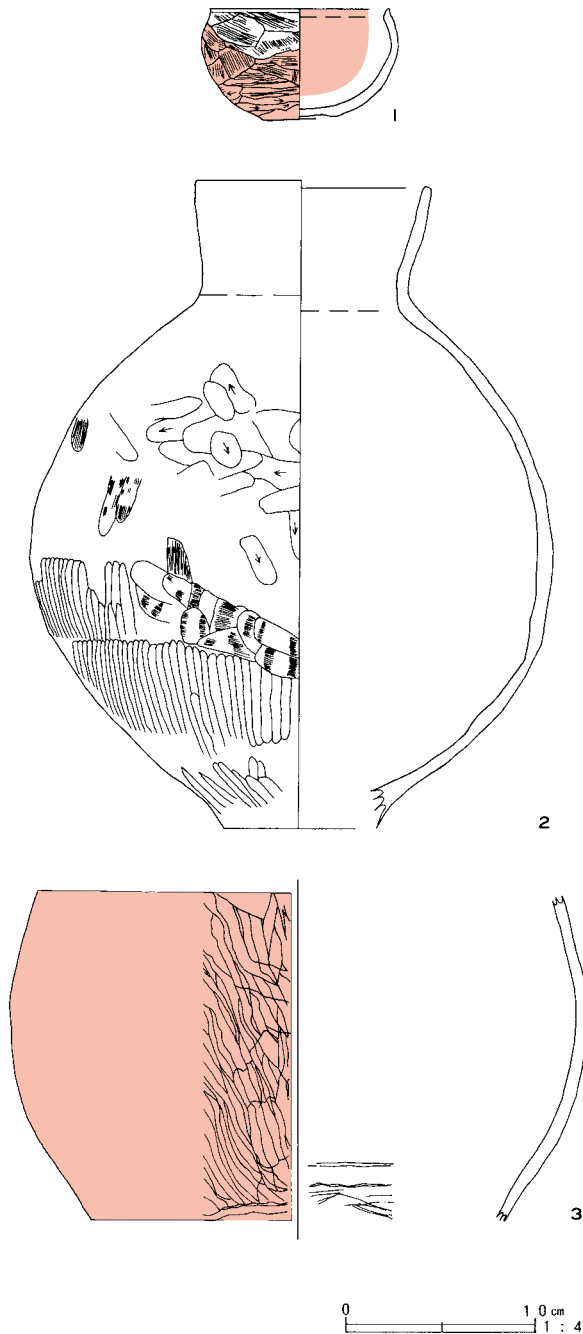
覆土である。第2層・第3層は、オリーブ褐色シルト層であり、前者には炭化物、マンガン粒、土器片、後者にはマンガン粒、土器片、長石粒をそれぞれ多量に含まれている。第4層・第5層は、少量の炭化物を含む黄褐色シルト層であり、第4層にはマンガン粒も多量に含まれている。第6層以下が粘土層となる。第6層は、多量のマンガン粒を含むオリーブ褐色層であり、第7層は少量の炭化物を含む褐色層である。マンガン集積層は、いずれも下位に灰層を含んでおり、順次褐色・黄褐色・オリーブ褐色・同色を呈している。中間の第10層は褐色を呈し、多量のマンガン粒を含むものの、集積層とはなり得ていない(少量の炭化物も含む)。第8層の上面には、焼土(第16図及び第19図中▲印)及び灰(同図中■印)が堆積している。酸化鉄を含む粘土層は、第13層がマンガン・炭化物を多量に、また下位に炭化物を層状に含むオリーブ褐色層、第14層がマンガンが多量に含むオリーブ褐色層である。最下層・第15層は、基盤層・F層ブロックを含む暗灰黄色層である。

遺物は北東溝から、盥(第18図—1)、壺(同一—2、3)が検出されている。

盥(1)は、北東溝第10層から、外壁の斜面に接して出土している。全面に朱塗されている。

壺(2)は、盥と同様な状況で出土しているが、やや上位である。底部の大半を欠いている。

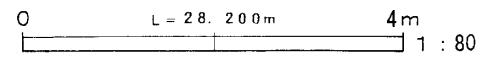
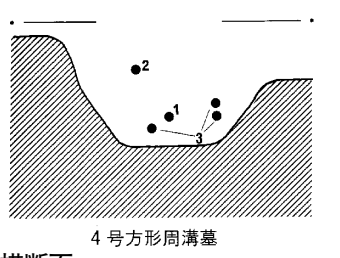
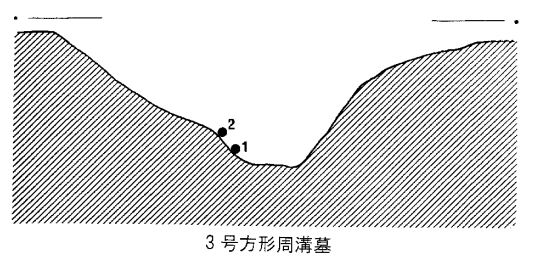
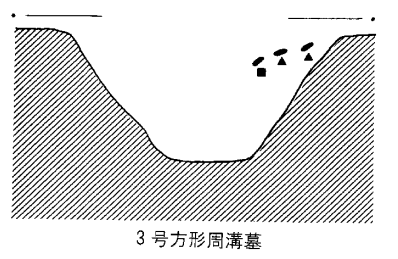
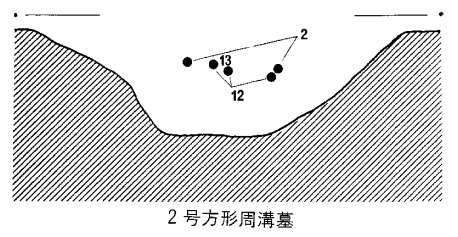
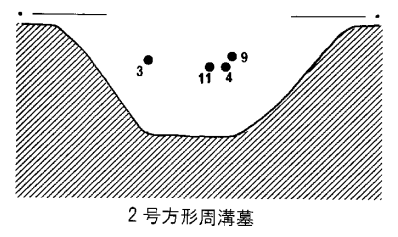
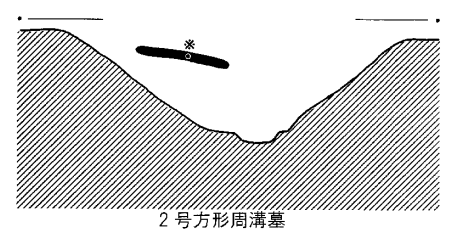
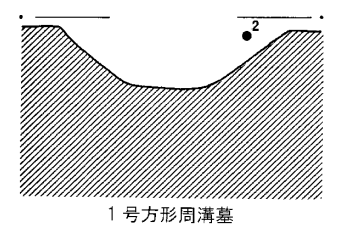
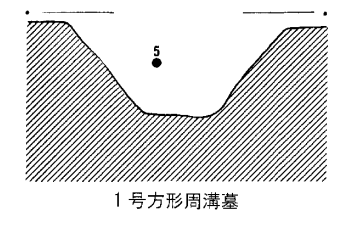
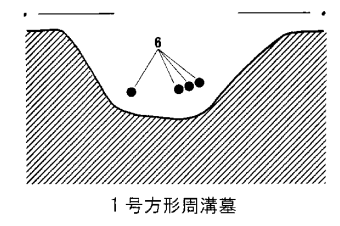
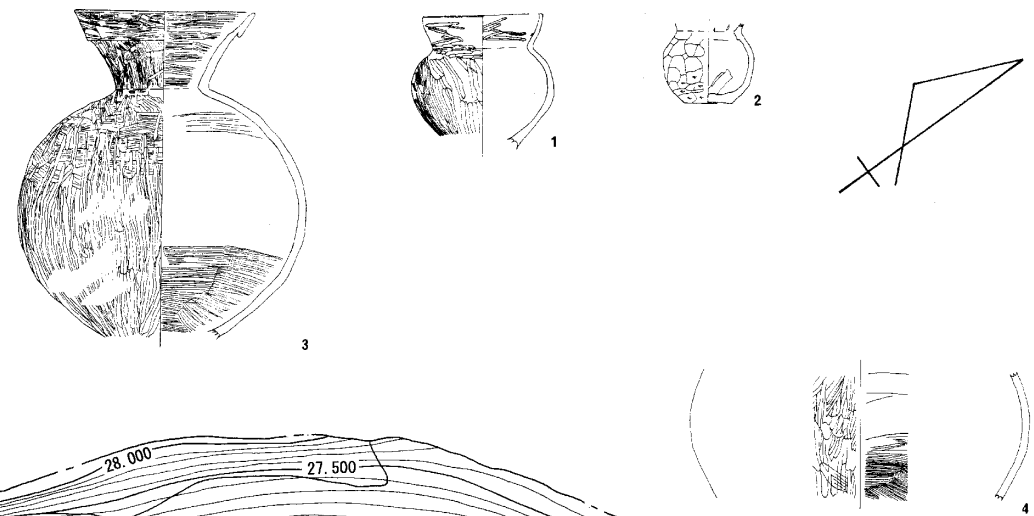
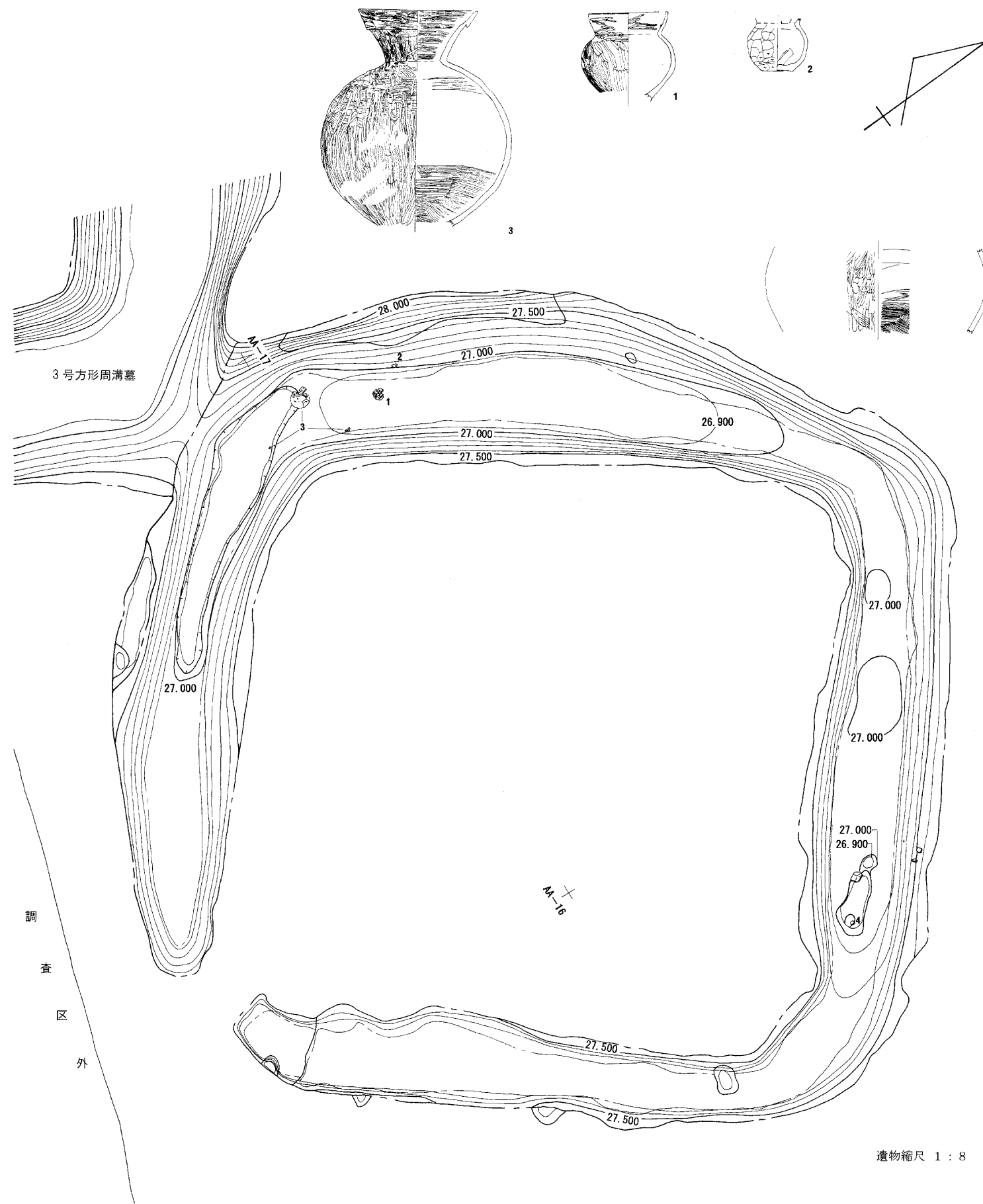
壺(3)は、北東溝東隅寄りの底面から出土している。外面に朱塗されている。



第18図 B区3号方形周溝墓出土遺物

第4表 B区3号方形周溝墓出土遺物観察表 (第18図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・盥	9.4	5.9	3.4	⑥④①②	②	にぶい橙	口唇部・体部一部欠	全面朱塗。
2	土師器・壺	12.3	34.3	—	③②④⑥	②	橙	3/4	底部は大部分が欠落している。
3	土師器・壺	—	—	—	⑥①③④	②	にぶい黄橙	胴部1/3	外面全体に朱塗。



第19図 B区4号方形周溝墓及び各方形周溝墓遺物出土状況横断面

4号方形周溝墓 Z-15・16グリッド、AA-15・16グリッドに位置している。大部分を、B区を南北流(第19図)する河川跡によって削平され、その後埋没した河川跡上に構築された29号・36号・37号住居跡、37号土坑、24号溝跡等が上面に位置している。これらのうち、本周溝墓に及ぼした(第20図)河川跡の影響は大きいものであった。(第21図)

河川跡及びその調査によって削平された状況は、3号方形周溝墓南東溝同様であり、東部ではさらに低位まで及んでいる。

外面の周溝への落ち込みライン確認レベルは、西側の一部で $L=28.050\text{m}$ であったものの、東へ推移するにつれ徐々に低くなり、南隅が最も低く $L=27.420\text{m}$ であった。

一方、方台部側の周溝への落ち込みは、南西溝の中央部で $L=27.800\text{m}$ 前後の面も観察されたが、大半は $L=27.550\text{m}$ 前後であり、南隅では外面同様 $L=27.420\text{m}$ であった。このためか、方台部上に土坑等は検出されていない。

形態は、南隅部一箇所陸橋をもつ型である。しかし、陸橋部の幅は90cm程であり、掘り込み面が $L=27.420\text{m}$ 前後であって両脇の周溝の深さが30~50cmしかなく、両側の壁面傾斜角を考え合わせれば、本来の掘り込み面($L=28.050\text{m}$ 付近)であれば、浅くはなるものの溝が全周していた可能性も高いと思われた。各隅及び北西・南西溝の外面に丸みをもつため、全体でやや脹らみをもつ隅円方形を呈するといえる。

全体規模は上面で、北西辺中央—南東辺中央が13.12m、北東辺中央—南西辺中央が13.40mを計る。

方台部規模は、北西辺中央—南東辺中央が8.92m、北東辺中央—南西辺中央が9.10mを計る。北・西隅では僅かに丸みをもち、東・南隅では屈曲して隅部が造り出されているが、全体では、概ね正方形を呈するといえる。北東溝の軸偏差角は、 $N-53^{\circ}-W$ を示す。

各溝の状況は、残存状況の違いもあって、それぞれの様相は大きく異なる。

北東溝は、上位を河川跡によって削平されている。外面は、ほぼ直線を成し隅部は丸みをもつ。方台部側は、北隅は丸みをもち、中央部は僅かに窪む。東隅は屈曲し、直線を成して隅部を造り出している。そのため、中央部でやや脹らみをもち、両隅部で幅が狭まる形態を呈することとなる。幅は、北隅—(上端2.00m、下端0.55m)、北側最狭部—(上端1.60m、下端0.64m)、中央部—(上端2.18m、下端1.02m)、東隅屈曲部—(上端1.40m、下端0.65m)、東隅部—(上端1.60m、下端0.80m)、を計る。壁の傾斜は、方台部側が急であるのに対して、外面はやや緩やかである。掘り込み確認面は、両側とも基盤層・C層中($L=27.600\text{m}$ 前後)であり、底面は、基盤層・G層を掘り込んでいる。深さは55cm程である($L=27.050\text{m}$)。しかし、東隅付近では急に浅くなり、東隅では35cm前後となる($L=27.260\text{m}$)。底面には、3箇所の窪みがみられる。北側は、 $60\times 38\text{cm}$ 、深さ8cmで長円形を呈する。中央は、 $116\times 63\text{cm}$ 、深さ6~8cmで瓢箪型を呈する。東側は、径20cm、深さ16cmの円形ピットと、 $106\times 40\text{cm}$ 、深さ15cm前後の不整長円形の落ち込みが連結した状況である。この東側の落ち込み以东から、底面が浅くなってくるのである。その他、壁にはピット等の痕跡は検出されていない。

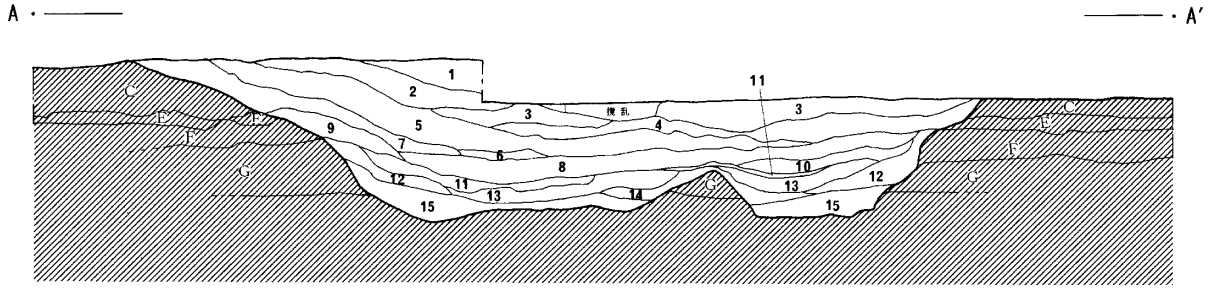
北東溝の覆土(第20図・B-B')のうち、第1層は、本溝に堆積する唯一のシルト層で

あり、下位に炭化物・灰・焼土を層状に含み、灰黄色を呈する。第2層は、少量の酸化鉄を含む淡黄色粘土層である。第3層は、少量の酸化鉄と多量の暗オリーブ褐色粘土ブロックを含む黄褐色粘土層である。第4層～第7層が酸化鉄を多量に含む粘土層であり、第4層・第6層には下位に黄色シルト、第6層・第7層にはにぶい黄色シルト・少量の炭化物、第7層にはさらに、H層ブロックも含んでいる。色相は、第5層がにぶい黄色である以外は、黄褐色を呈している。このように、第4層～第7層が他周溝墓の下位の酸化鉄を含む粘土層に相当することは明らかであるが、第1層が他周溝墓の炭化物集積シルト層、第3層が暗褐色粘土ブロック混在層に相当する様相を示すものの、色相、含有率等に差が見られ、中位のマンガン集積層と共に、本溝では検出されないものとした。

南東溝は、最も深い位置まで河川跡によって削平を受けており、そのため他の溝と比較して最も細くなっている。外面はほぼ直線を成すが、両隅は屈曲して隅部を作り出している(東隅は丸みを帯びる)。方台部側も両隅が屈曲し、隅部を作り出しているが、中間は凹凸がみられる。幅は、東隅屈曲部一(上端1.12m、下端0.54m)、中央部一(上端1.22m、下端0.62m)、南側最広部一(上端1.55m、下端1.14m)、南隅屈曲部一(上端1.16m、下端0.76m)、南隅部一(上端0.75m、下端0.50m)、を計る。掘り込み確認面は、東側では基盤層・C層最下位(L=27.550m前後)であり、南側では基盤層・E層下位(L=27.420m)である。底面は、基盤層・G層を掘り込んでいて、L=27.260m前後で安定するが、南隅の屈曲部では一段高くなり、L=27.320mを計る。南隅屈曲部の先端は、矩形を呈し、陸橋へと移行している。この屈曲部の存在も、陸橋部の存在を疑う一因である。残存部が低位のみであるため、壁の傾斜の比較はできないが、ほぼ同程度の傾斜を示すようである。東隅寄り方台部側底面には、52×32cm、深さ5cm前後で長方形を呈するピットが検出されている。その他、外面側壁中にピットが3穴検出されているが、いずれも覆土が、酸化鉄を含む砂礫層であり、河川跡に伴うものである。

南東溝の覆土(第20図・E-E')は、酸化鉄を含む粘土層2層が確認されたにすぎない。第1層は、黄色シルト、酸化鉄を多量に含む黄褐色粘土層であり、第2層は、多量の酸化鉄及びH層ブロックを含むオリーブ褐色粘土層である。

南西溝は、外面西隅以外を河川跡によって上位を削平されている。陸橋部から幅を広げながら中央部へ移行し、中央部で屈曲する。中央部からは、外面が窪み、方台部側が脹らみをもつことから、逆に幅を狭めて西隅部へ移行する。西隅は、もう一度屈曲して隅部を作り出し、さらに屈曲して北西溝へと連続する。西隅外面は3号方形周溝墓東隅外面と重複している。幅は、南隅部一(上端1.06m、下端0.34m)、中央屈曲部一(上端2.15m、下端1.78m)、西寄り最狭部一(上端1.68m、下端0.55m)、西隅屈曲部一(上端2.04m、下端0.70m)、西隅一(上端2.20m、下端0.72m)を計る。掘り込み確認面は、西側が基盤層・C層上位(L=27.800m前後)であり、南側では基盤層・E層下位(L=27.420m)である。底面は、基盤層・G層を掘り込んでいて、南半ではL=27.050m前後で安定するが、西半部では約20cm程落ち込み、L=26.850mを計る。最深部では、1.20mの深さを示している。この落ち込みは西半分の底面全体に及び、北西溝との接続点まで広がる。壁の傾斜は、両

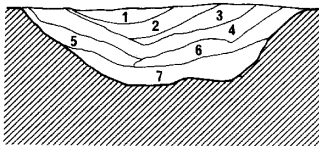


A-A'

- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、砂、礫を多量含む。
- 2 灰褐色(2.5Y 5/3)シルト。炭化物やや多量含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。酸化鉄少量含む。
- 4 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。酸化鉄少量含む。
- 5 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。酸化鉄多量、炭化物、オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘土ブロックを少量含む。ところどころにぶい黄色(2.5Y 5/3)シルト含む。下位に炭化物を含む灰、にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルトを層状に含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄多量、炭化物中量、下位ににぶい黄色シルト、灰、炭化物を層状に含む。
- 7 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄多量、炭化物中量、ところどころに黄色シルトを含む。下位に炭化物、灰、にぶい黄色シルトを層状に含む。

- 9 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。酸化鉄、炭化物少量含む。
- 10 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。酸化鉄、炭化物少量含む。下位に炭化物を層状に含む。
- 11 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄、炭化物やや多量に、にぶい黄色シルト含む。下位に炭化物、灰を層状に含む。
- 12 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土。酸化鉄多量含む。
- 13 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルトをところどころ含む。
- 14 灰黄色(2.5Y 6/2)粘土。酸化鉄多量含む。
- 15 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、H層ブロックやや多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト少量含む。

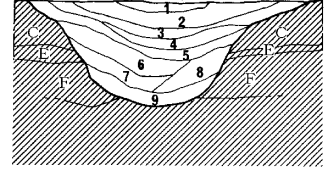
B. L=28.000m



B-B'

- 1 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト。下位に炭化物、灰、焼土を層状に含む。
- 2 淡黄色(2.5Y 8/4)粘土。酸化鉄少量含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)粘土ブロック多量、酸化鉄少量含む。
- 4 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、下位に黄色シルトを含む。
- 5 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土。酸化鉄多量含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色シルト中量、炭化物少量含む。下位に黄色シルトを含む。
- 7 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。にぶい黄色シルト、H層ブロック、酸化鉄多量に、炭化物少量を含む。

C. L=28.000m

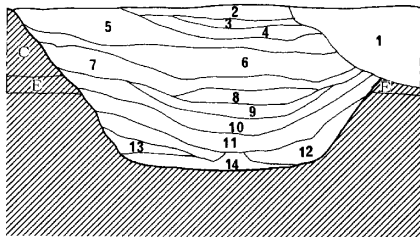


C-C'

- A 褐色(10YR 4/4)シルト。多量のマンガン粒を含む。
- B 褐色(10YR 4/4)シルト。少量のマンガン粒を含む。
- C 褐色(10YR 4/4)シルト。少量のマンガン粒を含む。下位に浅間C軽石層が見られる。
- D 褐色(10YR 4/4)シルト。下位にE層と混在する場合がある。
- E オリーブ褐色(2.5Y 4/6)シルト。少量のマンガン粒を含む。
- F 褐色(10YR 4/4)粘土。マンガン粒、炭化物粒を含む。
- G 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。棒状の酸化鉄を含む。
- H 黒褐色(2.5Y 3/2)粘土。棒状の酸化鉄を含む。

- 1 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。にぶい黄色シルト、炭化物粒少量に下位には炭化物、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトを層状に含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。酸化鉄微量含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/3)シルト。にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルトやや多量に酸化鉄少量含む。
- 5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。酸化鉄少量含む。下位に炭化物を層状に含む。
- 6 暗灰黄色(2.5Y 4/2)粘土。酸化鉄多量、炭化物中量含む。
- 7 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘土。酸化鉄多量含む。
- 8 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量含む。
- 9 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。酸化鉄多量、にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト中量、H層粘土ブロック少量含む。

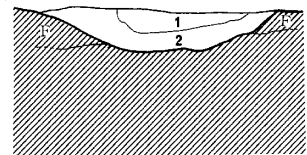
D. D-D'



D-D'

- 1 河川跡。
- 2 黄褐色(10YR 5/6)シルト。マンガン多量含む。
- 3 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。マンガン多量、下位に炭化物を含む。
- 4 灰褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン多量、炭化物少量含む。
- 5 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。マンガン多量、炭化物少量含む。
- 6 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン少量、下位に炭化物を層状に含む。
- 7 灰黄色(2.5Y 6/2)シルト。下位に炭化物、灰、焼土を層状に含む。
- 8 にぶい黄褐色(10YR 5/4)シルト。下位に黄色シルトを含む。
- 9 褐色(10YR 4/6)シルト。炭化物少量、下位に黄色シルトを含む。マンガン集積層。
- 10 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、マンガンを多量、炭化物少量、下位に黄色シルトを含む。
- 11 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、黄色シルト多量に、炭化物少量含む。
- 12 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、黄色シルト多量に、炭化物少量含む。
- 13 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。酸化鉄、黄色シルト多量に、炭化物少量含む。
- 14 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。H層多量、酸化鉄少量含む。

E. E-E'



E-E'

- 1 黄褐色(2.5Y 5/4)粘土。黄色シルト、酸化鉄多量含む。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土。酸化鉄多量、H層ブロックを含む。

0 L = 28.500m 2 m 1 : 60

第20図 B区4号方形周溝墓土層図

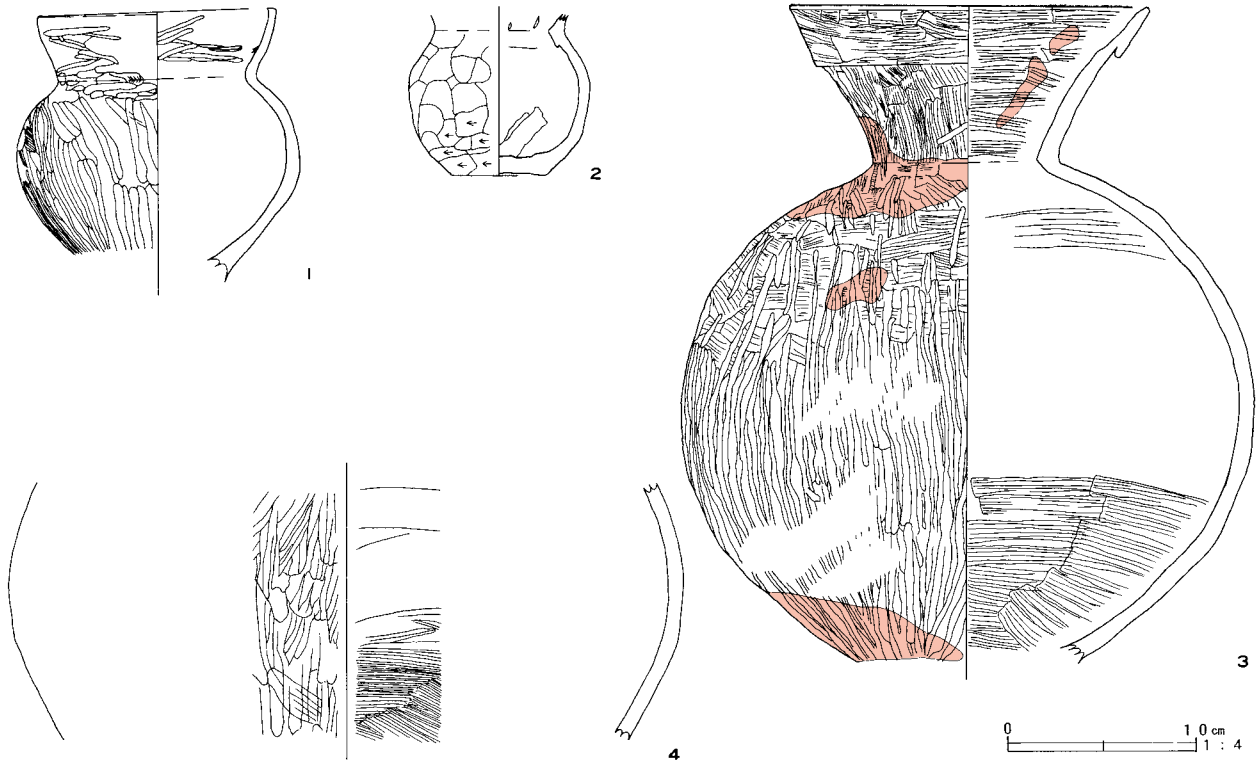
面ともほぼ同じであるが、西隅部では外面が緩く、方台部側が急になる。外面壁上位にはピットがみられるが、覆土が酸化鉄を含む砂礫層であり、河川跡に伴うものである。

南西溝の覆土（第20図・C-C'）は、第1層～第5層がシルト層、第6層～第9層が多量の酸化鉄を含む粘土層である。第1層・第5層は、にぶい黄色を呈し、第5層には少量の酸化鉄及び下位に層状の炭化物が含まれる。第2層・第3層・第4層は、にぶい黄褐色を呈する。このうち第2層・第4層には、にぶい黄色シルト粒が多量に含まれている。粘土層のうち第6層は、炭化物を含み暗灰黄色を呈する。第7層は、オリーブ褐色を呈する。第8層・第9層は、共に黄褐色を呈し、第9層には、にぶい黄色シルト粒及び基盤層・H層ブロックが含まれている。他周溝墓でみられた炭化物集積シルト層、暗褐色粘土ブロック混在層、マンガン集積層は共に、本溝では検出されていない。

北西溝は、外面の西側半分を除いて、河川跡によって上位を削平されている。両辺とも脹らみをもつが、外面のほうが膨らみが強い。幅は、西隅一（上端2.20m、下端0.72m）、中央最広部一（上端2.86m、下端1.00m）、北隅一（上端1.80m、下端0.56m）を計る。掘り込み確認面は、西隅が基盤層・C層上位～E層（L=28.200～27.750m前後）であり、北側では基盤層・E層下位（L=27.600m前後）である。壁の傾斜は、総体的に外面が緩やかであり、方台部側が急である。底面は、西側では基盤層・H層、北側ではG層を掘り込んでいる。西隅では南西溝西半の落ち込みの立ち上がりからL=27.000m前後の平坦面が僅か30cm程みられるものの、再び18～15cm落ち込み、L=26.820～26.850m前後の平坦面で北へ移行する。落ち込みは、中央部から北隅寄りにかけて徐々に立ち上がり、L=27.050mの平坦面となって北隅まで続く。最深部では、1.23mの深さをもっている。溝底及び側壁中にピット等の痕跡は検出されていない。

北西溝の覆土（第20図・D-D'）は、第2層～第9層がシルト層、第10層～第14層が酸化鉄を含む粘土層である。第1層は、酸化した砂礫を多量に含む河川跡覆土である。シルト層は、第2層から順次黄褐色、にぶい黄色、灰褐色、灰黄褐色、黄褐色、灰黄色、にぶい黄褐色、褐色を呈している。このうち、第4層・第5層は炭化物を含み、他周溝墓の炭化物集積シルト層に相当する様相を呈している。また、第3層・第6層・第7層・第8層の下位には、炭化物が層を成して含まれている。特に第7層には灰・焼土も層を成していた。第9層は、マンガン集積層であり、黄色シルトも含んでいる。粘土層は、全て黄褐色を呈する。そのうち第10層は、多量の酸化鉄・マンガン、少量の炭化物、また下位には黄色シルトを含んでいる。第11層～第13層は、多量の酸化鉄・黄色シルト及び少量の炭化物を含む。分層はそれぞれの粒の大小・含まれ方の僅かな差によっている。第14層は、酸化鉄の含有が僅かであるが、基盤層・H層ブロックを多量に含む。

本方形周溝墓西隅と3号方形周溝墓東隅の重複部分において、両墓の関係をみる（第20図・A-A'）と、両溝がほとんど同時進行で埋没していった様相が窺える。上位の第1層～第5層（シルト層）、第6層～第8層（粘土層）は、いずれも両溝に亘って堆積している。3号の第9層（灰黄色粘土層）、4号の第10層（灰黄色粘土層）も基本的には同一層であり、第10層下位に層状の炭化物が認められているにすぎない。これより下位の粘土層（第11層



第21図 B区4号方形周溝墓出土遺物

第5表 B区4号方形周溝墓出土遺物観察表 (第21図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	12.6	—	—	②③①⑥	②	橙	底部欠	内面上位吸炭。底部欠落。
2	土師器・壺	—	—	5.0	⑥①④②	②	にぶい褐	1/2	口縁部欠落。頸部内面は接合痕を残した状態。内面は明赤褐色。
3	土師器・壺	19.2	—	—	②①④⑥	②	浅黄橙	底部口縁一部欠	外面中位以上口縁部まで朱塗の痕跡。底部欠落。
4	土師器・壺	—	—	—	③②①④	②	橙	胴部1/4	外面上位は斜、中位以下は縦のミガキ、内面中位以上は横のナデ、下位は横の刷毛目。

層(第11層～第15層)も、両溝とも同一層序で堆積している。特に第14層は、両溝を跨いで堆積している。これらのことから、両周溝墓の間に、時期差はまったく存在しないといえる。

遺物は、西隅から北西溝西隅寄りにかけて甕(第21図—1)、小型壺(同一—2)、壺(同一—3)、北東溝東隅寄りから壺(同一—4)が検出されている。

甕(1)は、北西溝西隅寄りの酸化鉄を多量に含むにぶい黄色粘土層(A—A'第12層)中から出土している。底部を欠いている。

小型壺(2)は、灰黄色シルト層(D—D'第7層)中からの出土で、口縁部を欠く。

壺(3)は、西隅の甕(1)と同一土層中からの出土であり、やはり底部を欠いている。

壺(4)は、北東溝東隅寄りの、黄褐色粘土層(B—B'第4層)中から、胴部中央のみが検出されている。

2 住居跡

B区において、平成12年度に検出された住居跡は37軒であり、そのうち34軒については調査が終了し、既に報告している。北側の4号住居跡、西側中央部の22号住居跡、南西の32号住居跡については、平成12年度においては所在が確認されたに過ぎず、本調査は13年度に実施したものである。そして、平成13年度に新たに検出・調査された38号住居跡を加えて、今回報告するものである。

その結果、B区における住居跡総数は38軒(第22図)、うち13軒が古墳時代前期、20軒が古墳時代後期、5軒が平安時代の構築である。

平安時代に属する住居跡は、全て第1確認面(上面)から検出されており、A区とまたがって1軒(A区84号住居跡)、これに近在してB区北東隅に4軒が調査されている。A区からの広がり西端を示しているといえる。そして、土器類は検出されていないものの、カマドの状況から当該期と考えられる住居跡(28号)が1軒、調査区南西部に位置していた。なお、今回報告分に当該期は含まれていない。

古墳時代後期に属する住居跡は、第1確認面で土層の変化は確認できたものの、第1確認面を若干下げた面もしくは、第2確認面に近づいた段階でプランが確認されたものが多い。特に調査区南西部に、18軒(今回報告の22号・32号・38号を含む)が集中しているが、重複する例が少ないという特色を示している。また、北東隅でも2軒が位置している。いずれも、B区を南北流する河川埋没後の構築である。このうち、4号方形周溝墓と重複する位置にある29号・36号・37号各住居跡は、河川によって4号方形周溝墓が削平され、さらに河川自体が埋没した後に構築されている。河川の影響を受けていない1号～3号方形周溝墓との重複は、まったくみられない。

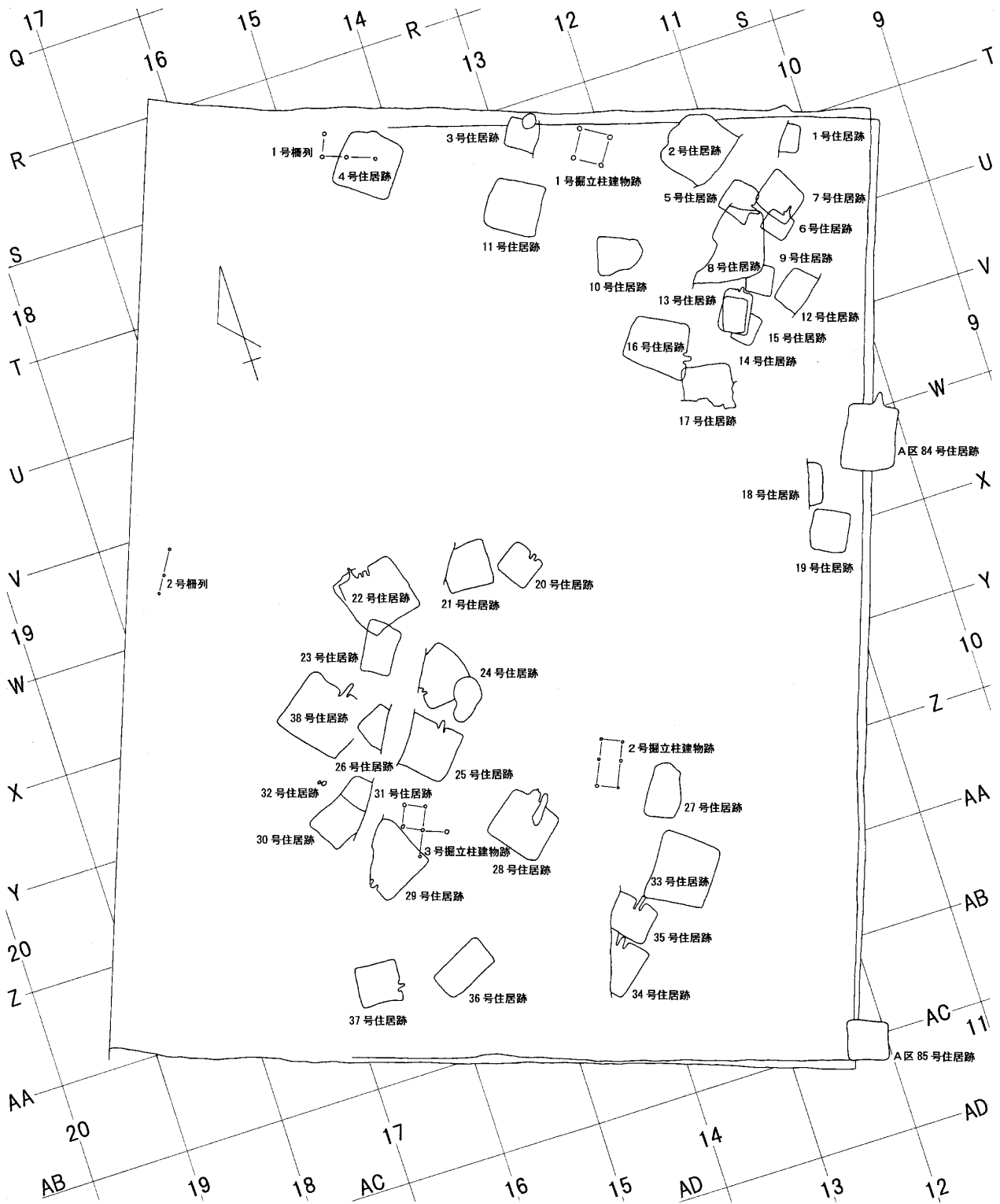
古墳時代前期に属する住居跡は、全て第2確認面(下面)から検出されており、調査区北東部に、13軒(今回報告分の4号を含む)が集中しており、4号住居跡は、その西端に位置している。後期と同様、住居跡同士で重複する例が少ないという特色を示しているが、当該期の住居跡は、B区を南北流する河川跡によって切断されている場合が多い。

4号住居跡 R-14グリッドから、S-13・14グリッドに位置している。第2確認面からの検出である(第23図) 覆土上面には、1号柵列が位置している。

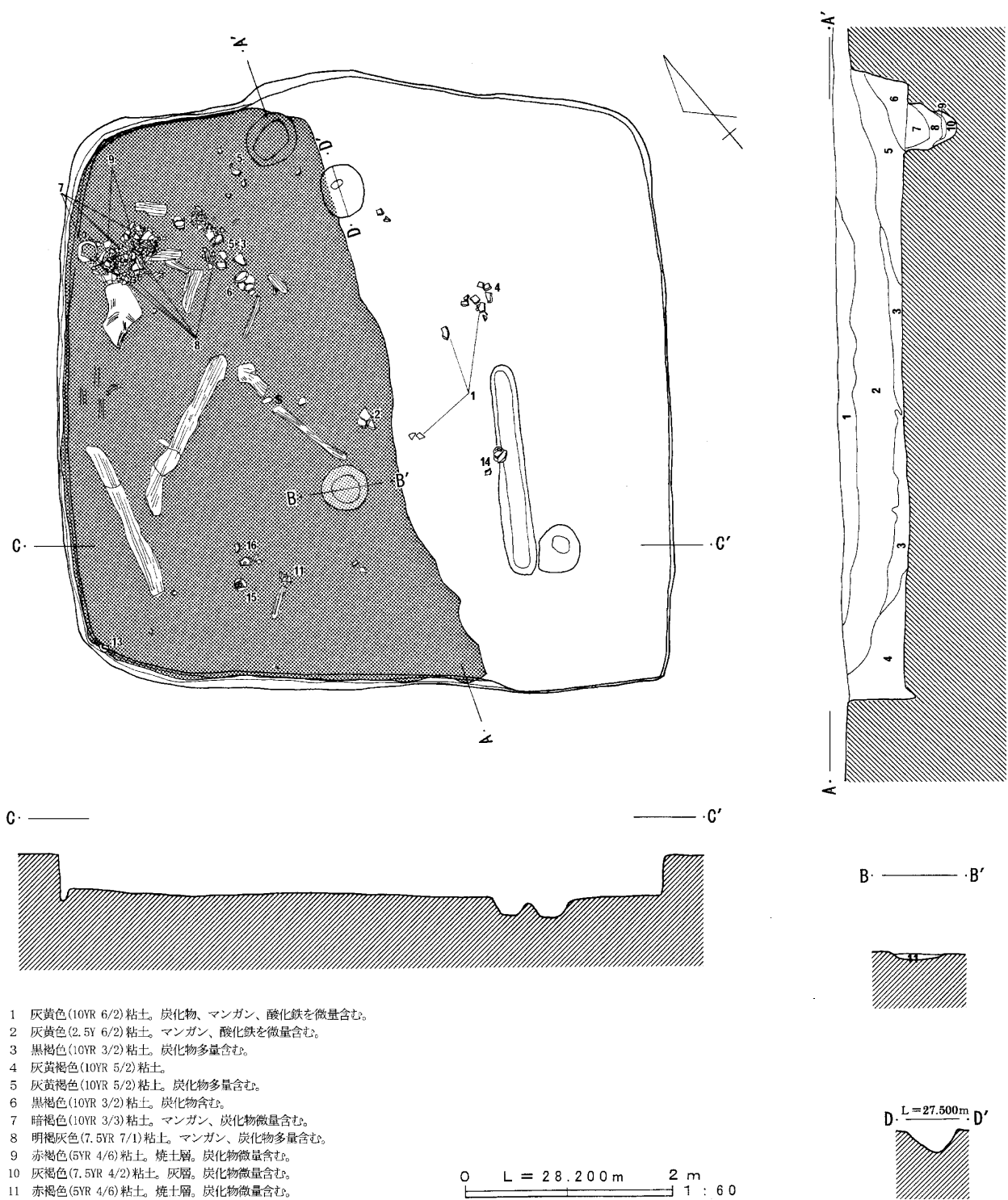
(第24図) 形態は、南東隅のみが角ばり、他の隅が丸みをもつ。また、北辺の中央部がやや張り出し、やや不整形を示すものの、規模は、北辺が5.60m、東辺が5.62m、南辺が5.80m、西辺が5.60mを計り、ほぼ方形を呈するといえる。南北軸方位は、N-39°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直を成し、掘り込み確認面から床面までの深さは、60cm前後を計る。

覆土は、上層から、炭化物・マンガン・酸化鉄を含む灰黄色粘土(第1層)、マンガン・酸化鉄を含む灰黄色粘土(第2層)であり、中央部床面上には多量の炭化物を含む黒褐色粘土(第3層)が堆積している。第3層とほとんど同一であるが、より多く炭化物を含む層(第6層)が北壁寄りに堆積している部分もある。壁際には、一般的に灰黄褐色粘土(第

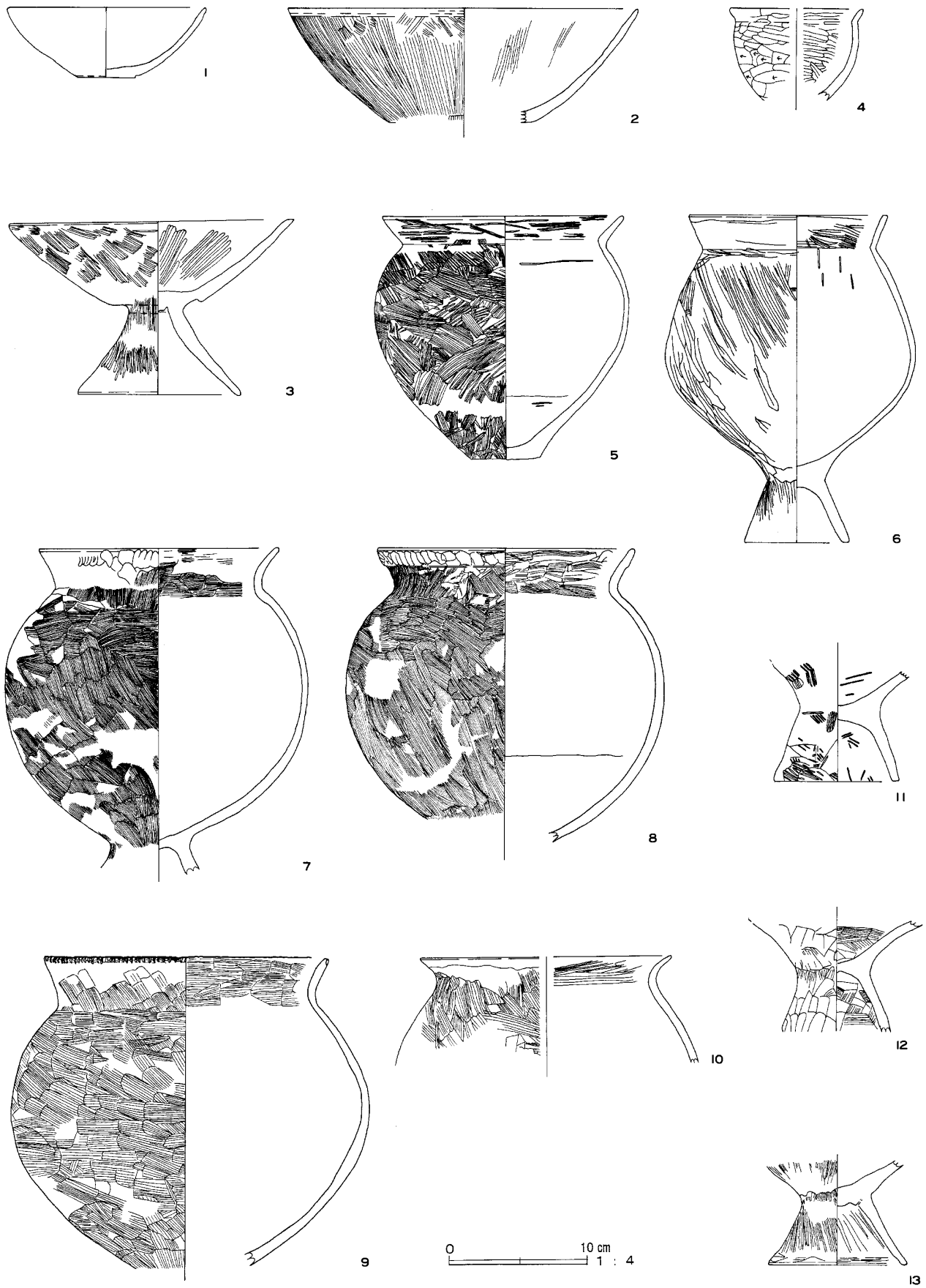


第22図 B区住居跡配置図

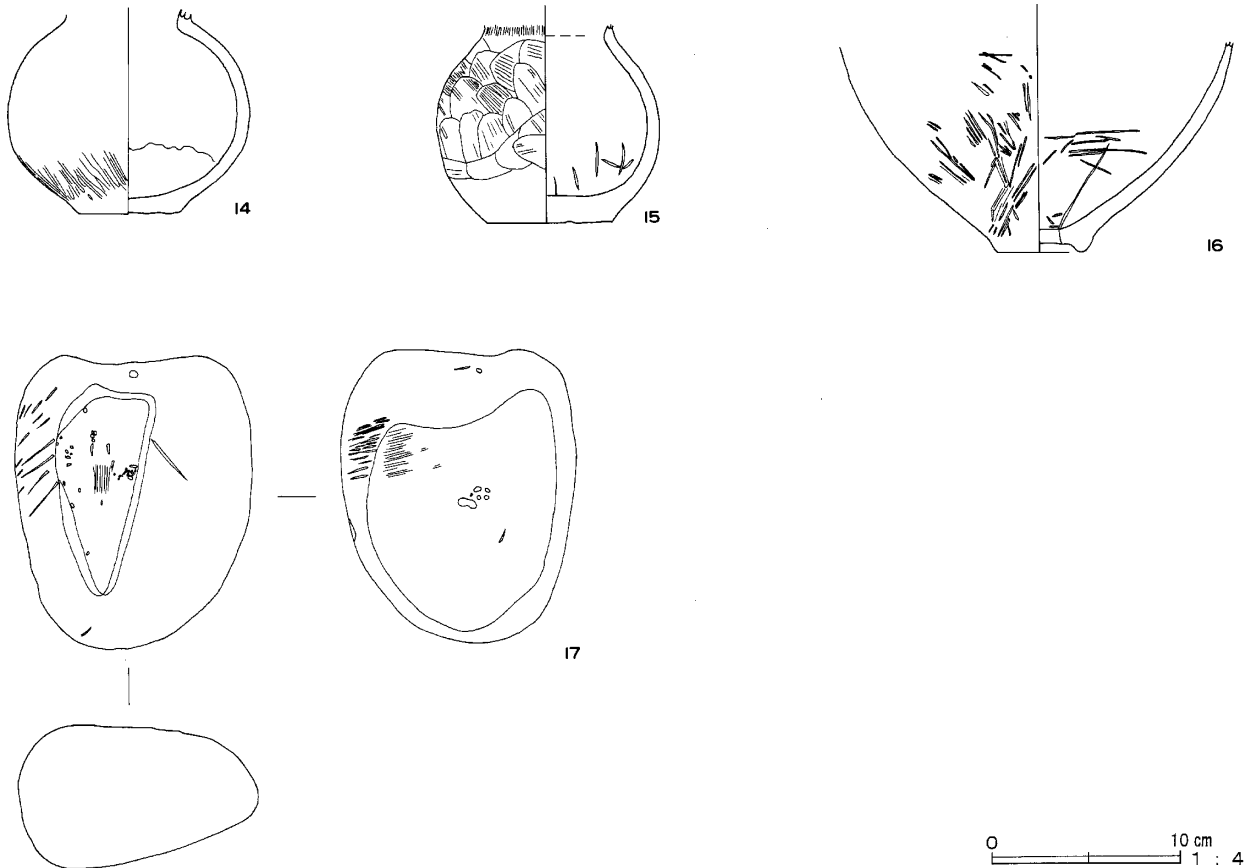


第23図 B区4号住居跡

4層・第5層)が堆積している。床面直上には、屋根材と思われる炭化材(萱・木材の混合)が一面に分布し、中には太さが16cmに達する木材も見られた(第23図中、東半分に炭化材の表示がないが、雨による攪乱のため図示できなかったもので、本来は床面全面に分布した)。床面及び、炭化材中、もしくは上に焼土が多量に検出されており、本住居跡が焼失したものであることを示している。



第24図 B区4号住居跡出土遺物(1)



第25図 B区4号住居跡出土遺物(2)

床面は、多少凹凸はみられるものの安定し、中央部は硬く締まっている。炉は、床面中央南寄りに設けられている。径45cmで円形を呈し、中央部では7cmの深さまで焼土化していた。

ピットは、北壁寄り中央部に2箇所、南東隅寄りに1箇所穿たれている。最も北壁寄りのピットは、56×47cm、深さ50cmを計り、長円形を呈する。底の断面形は、U字形を呈する。覆土には、炭化物が含まれ(特に第8層に多い)、貯蔵穴であったと思われる。北壁中央部寄りのピットは、50×40cm、深さ22cmを計り、長円形を呈する。底の断面形は、V字形を呈する。覆土は、第5層である。南東隅寄りのピットは、45×38cm、深さ15cmを計り、長円形を呈する。底の断面形は、U字形を呈する。覆土は、第3層である。このピットの内側には、住居跡の主軸に沿った方位で、210×24cm、深さ15cmを計り、長円形を呈する溝がみられる。底の断面形はU字形を呈し、覆土は、やはり第3層である。また、床面上の炭化物の範囲を図示した部分の壁下には、幅8～10cmの周溝が回っている。

遺物は、炭化物より下位と上位の2面から出土している。前者例は、坏(第24図-1)、高坏(同一-3)、盥(同一-4)、甕(同一-5)、台付甕(同一-7、8、9)、小型壺(第25図-14)、砥石(同一-17)であり、全て床面上からの出土である。このうち台付甕(7、8、9)は、北西隅やや南よりから3個体が集中し、坏(1)、盥(4)、小型壺(14)は、ほぼ中央からまとまって検出されている。後者の例は高坏(第24図-2)、台付甕(同一-6、

第6表 B区4号住居跡出土遺物観察表 (第24・25図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	14.3	5.0	4.1	③①④	③	橙	5/6	全体に表面磨滅。体部内面、底部外面の一部にナデの痕跡。一部還元化。
2	土師器・高坏	25.0	—	—	⑥①②④	②	赤褐	坏部のみ	内外面縦のミガキ。内面は大部分表面剥離。二次加熱。
3	土師器・高坏	20.5	12.6	11.8	①②④③⑥	②	明赤褐	一部欠	脚部面以外ミガキ。一部還元化。二次加熱。
4	土師器・盥	(9.4)	—	—	⑥④	②	黒褐	1/3	胎土に砂礫を多く含む。内外面吸炭、黒色化。
5	土師器・甕	17.4	17.5	5.2	①⑥②④	②	赤橙	7/8	内外面煤付着。二次加熱。
6	土師器・台付甕	14.4	23.5	7.6	①③⑥④	②	橙	完形	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	17.4	—	—	①②③⑥	②	橙	台部欠	内外面煤付着。強い二次加熱で表面剥離した部分が多い。
8	土師器・台付甕	18.5	—	—	①⑥③④②	②	にぶい橙	台部欠	口唇部外面指頭による押圧。内外面煤付着。二次加熱。
9	土師器・台付甕	10.6	—	—	①③	②	黒褐	台部欠	外面煤、内面炭付着。二次加熱。
10	土師器・台付甕	(18.1)	—	—	①④⑥③	②	黒褐	口縁部1/4	胎土にやや砂が多い。全面煤付着。二次加熱。
11	土師器・台付甕	—	—	9.0	②①③	③	橙	台部のみ	二次加熱。表面剥離した部分が多い。
12	土師器・台付甕	—	—	—	①②③	②	にぶい橙	台部のみ	内面炭化物付着。二次加熱。
13	土師器・台付甕	—	—	9.9	①②③④⑥	②	にぶい橙	台部のみ	胴部内外面吸炭。二次加熱。
14	土師器・小型壺	—	—	5.6	③④①	②	橙	口辺部欠	内外面に煤付着。胎土に砂粒多い。
15	土師器・壺	—	—	6.6	④②①⑥	②	浅黄橙	口辺部欠	表面磨滅した部分が多い。
16	土師器・甗	—	—	(4.1)	⑥④①②③	②	にぶい橙	下位1/4	残存した最上面のみ割れ口が磨滅し、この大ききで使用された可能性が高い。
17	砥石	長さ 15.5	幅 12.5	厚さ 7.5					特に刃先の研磨に使用。

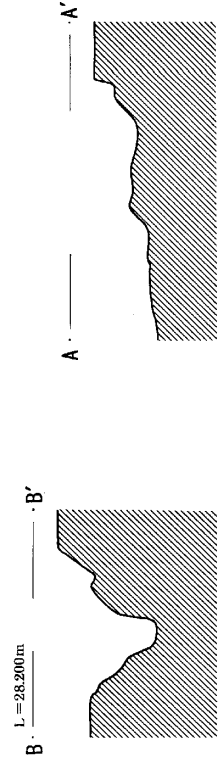
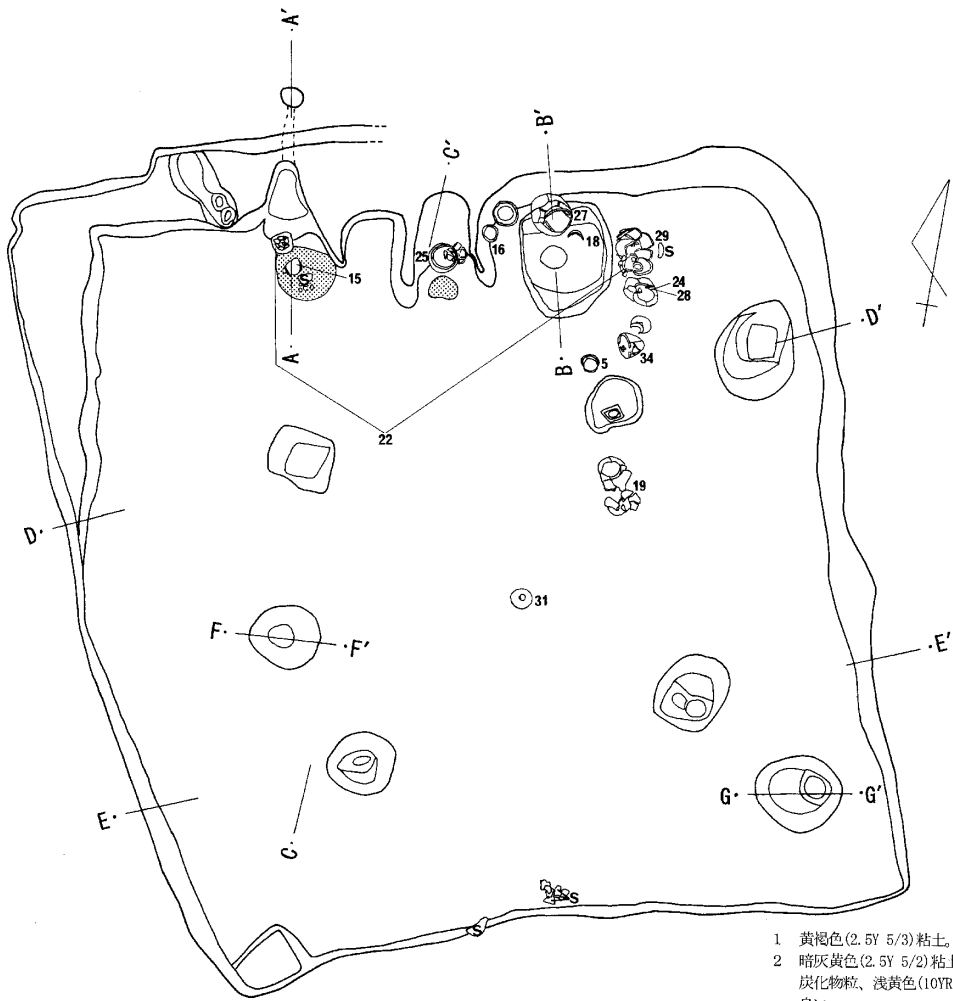
10、11、13)、壺(第25図—15)、甗(同—16)である。

坏(1)は、表面が磨滅し、一部還元化した部分もみられる。高坏(2、3)は、いずれも二次加熱を受け、(2)は内面の大部分が表面剥離し、(3)は一部が還元化している。盥(4)は、内外面に丁寧なミガキが施され、全面に吸炭して黒色化している。甕(5～13)は、全て二次加熱を受けている。壺(14、15)は、いずれも口縁部を欠いている。甗(16)は、上位を欠いているものの、残った最上位が磨滅し(整えられ)、この大ききで使用されていたと思われる。砥石(17)は、刃先の研磨に使用されている。

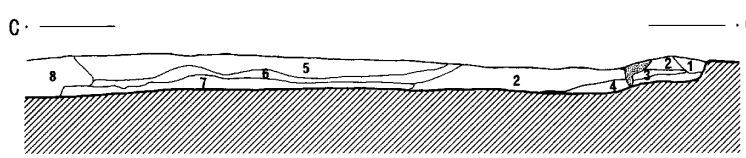
22号住居跡 V-15グリッドから、V-16グリッドに位置している。第2確認面からの検出である。(第26図) 上面に25号溝跡、32号溝跡が位置している。

(第27図) 形態は、北東隅と南西隅の角度が90度以上、他の2隅が90度以下であるため、平行四辺形を示しているといえるが、規模は、北辺が5.75m、東辺が6.22m、南辺が5.40m、西辺が6.30mを計り、全体では、不整形ながら長方形を呈するといえる。主軸方位は、N-18°-Wを示す。また、西辺中央部の屈曲する部分からは、南西隅から直線で連続する壁が存在し、北西隅に棚状の段を造り出している。この段を含めると、北辺が、6.30m、西辺が6.65mを計ることとなる。

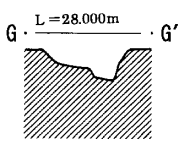
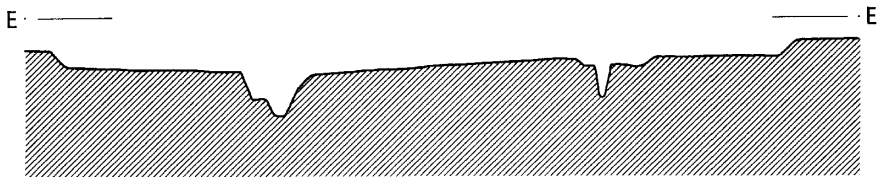
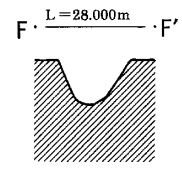
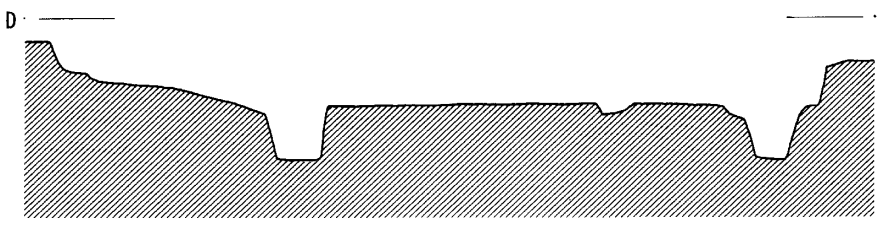
壁は、ほぼ垂直を成し、掘り込み確認面から床面までの深さは、35～40cm前後を計る。覆土は、上層から、黄灰色粘土粒・浅黄色粘質粒(火山灰か)を含む暗灰黄色粘土(第



- 1 黄褐色(2.5Y 5/3)粘土。焼土粒多量含む。しまり良い。
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。黄灰色(2.5Y 6/1)粘土粒多量、焼土粒、炭化物粒、浅黄色(10YR 7/3)粘土粒(火山灰?)若干含む。しまり良い。
- 3 明赤褐色(5YR 5/8)を主体とした焼土ブロック層。しまりやや悪い。
- 4 灰色(N 5/0)粘土。3層の焼土粒多量含む。しまりやや悪い。
- 5 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。黄灰(2.5Y 6/1)粘土粒、浅黄色(10YR 7/3)粘土粒(火山灰?)多量含む。しまり良い。
- 6 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。明黄褐色(10YR 6/6)粘土粒・ブロック少量含む。しまり良い。
- 7 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。明黄褐色(10YR 6/6)粘土粒・ブロック若干、炭化物粒微量含む。しまり良い。
- 8 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土。酸化鉄粒多量、焼土粒、炭化物粒若干含む。しまり良い。



0 L = 28.400m 2m
1 : 60

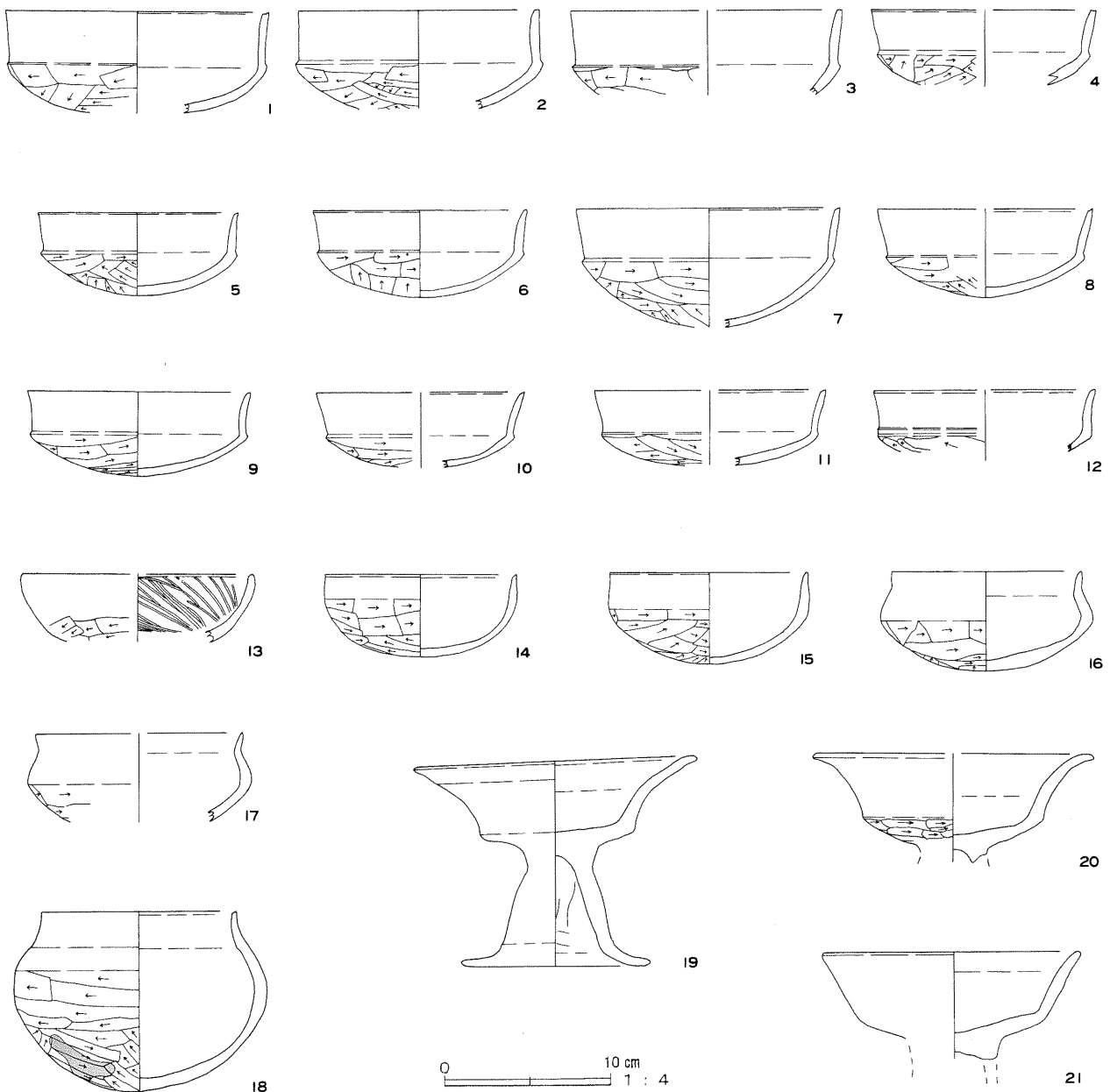


第26図 B区22号住居跡

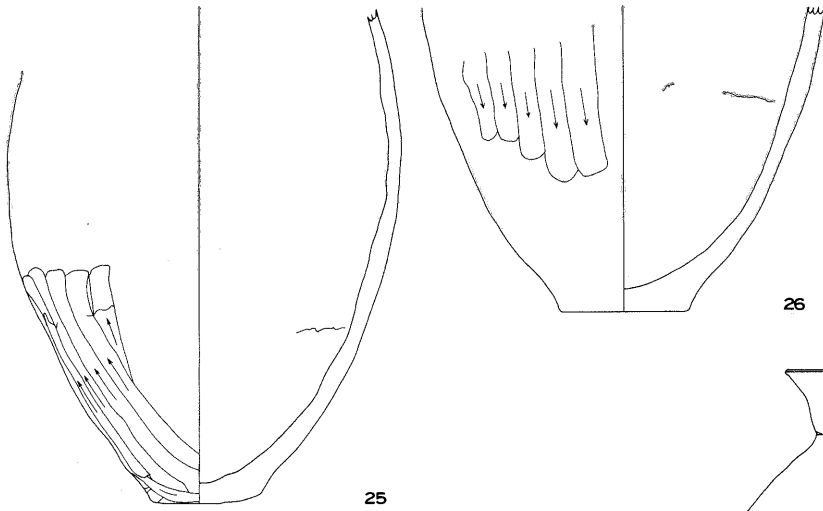
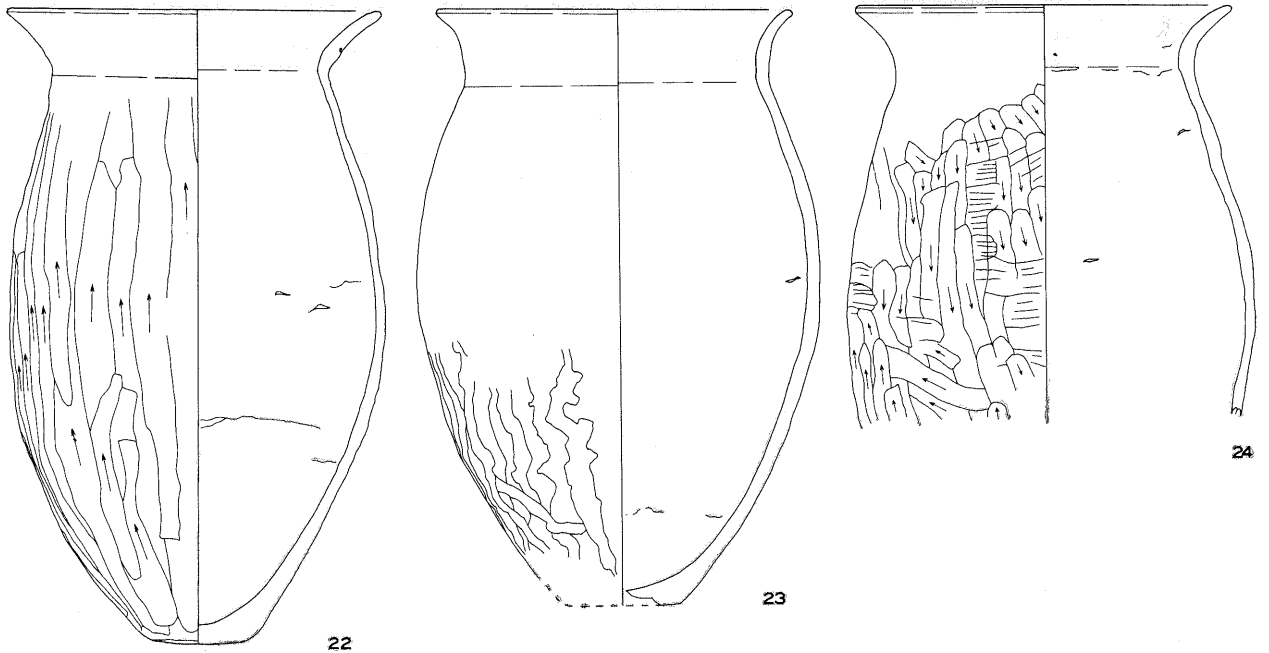
5層)、明黄褐色粘土粒・ブロックを含む黄灰色粘土(第6層)であり、中央部床面上には微量の炭化物と明黄褐色粘土粒・ブロックを含む黄灰色粘土(第7層)が堆積している。また壁際には、多量の酸化鉄、少量の焼土粒・炭化物を含む灰黄色粘土(第8層)が堆積している。

床面は、カマド前、柱穴間、東辺・南辺は硬く締まって安定しているが、西辺側は安定せず、緩傾斜をもって壁に向けて上昇している。

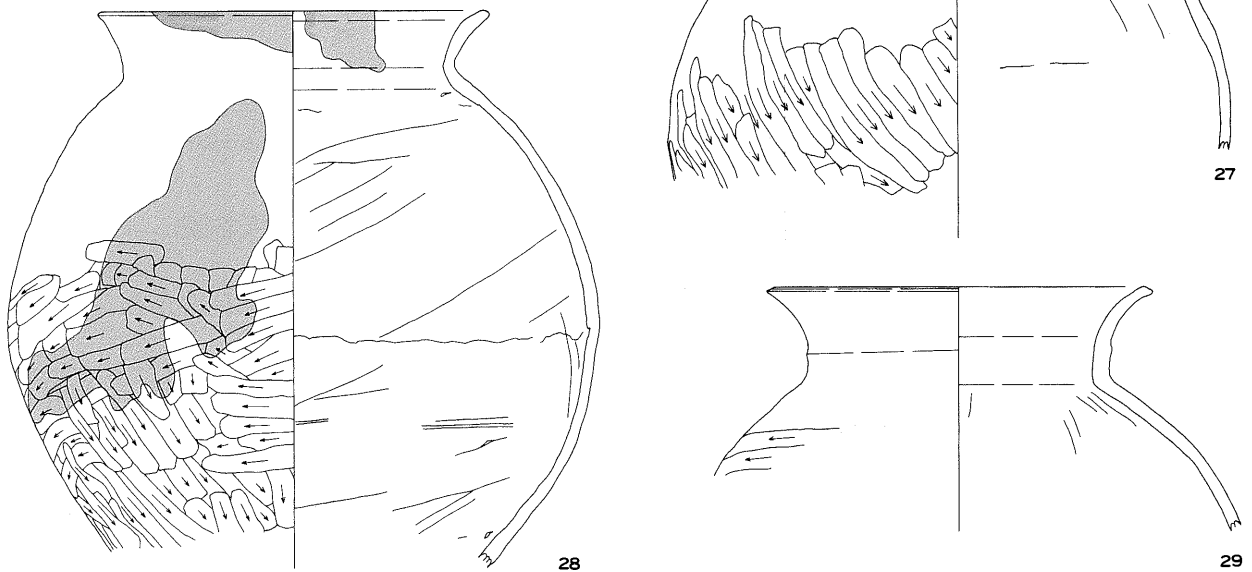
カマドは、北壁北西隅寄り(第1カマド)と北壁中央(第2カマド)の2ヶ所に設けられている。第1カマドは、袖が明確に残存していないが、火床は、全て竪穴内に位置し、奥壁を竪穴北壁ラインに合わせている。火床の径は45cmで円形を呈し、中央部では5cmの深さまで焼土化していた。僅かに窪みをもつ火床から、急傾斜で立ち上がる奥壁を経て、



第27図 B区22号住居跡出土遺物(1)



0 10 cm 1 : 4



第28图 B区22号住居跡出土遺物(2)

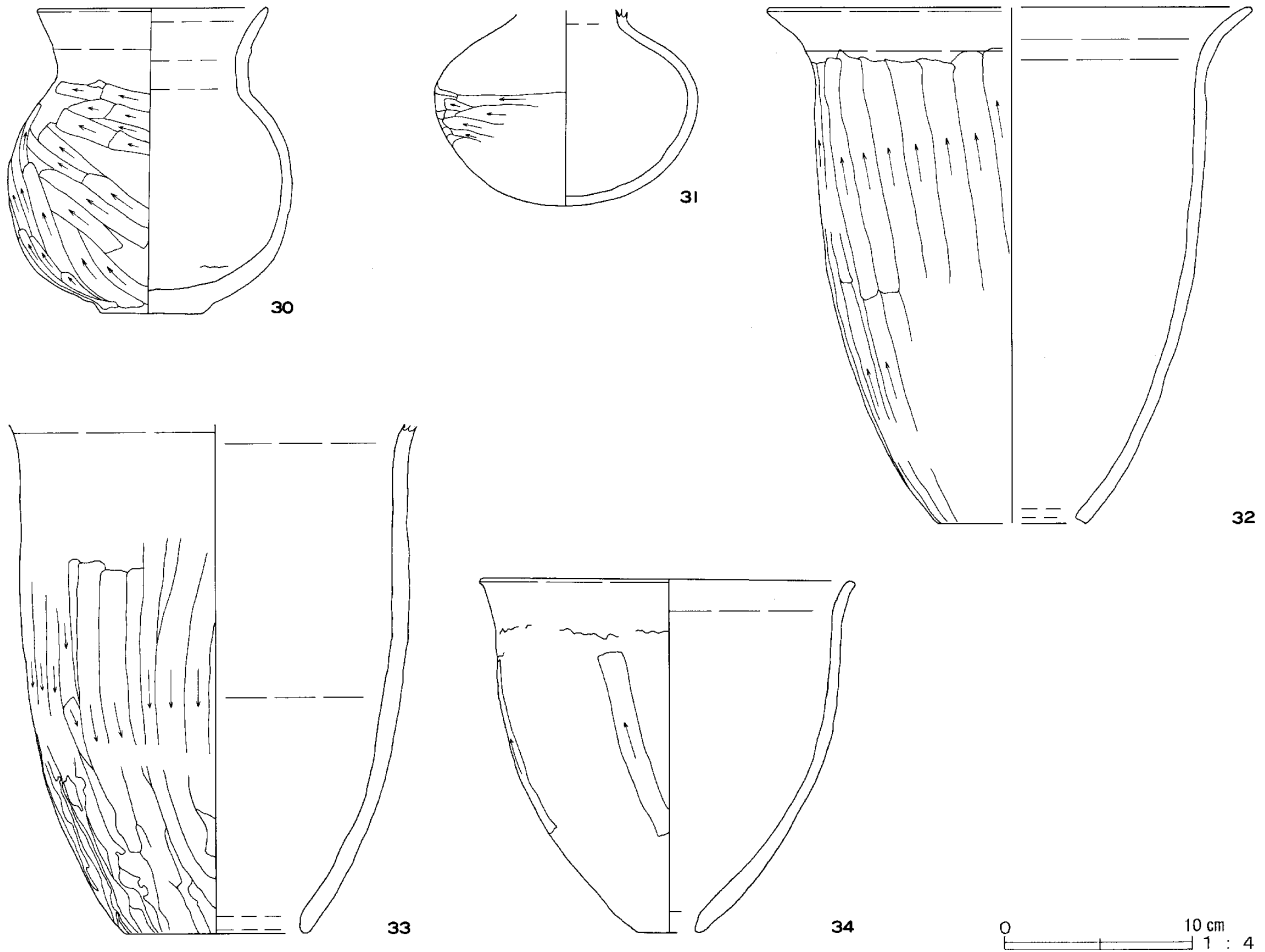
第7表 B区22号住居跡出土遺物観察表 (第27・28・29図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	16.0	—	—	③④①	②	橙	上位1/2	
2	土師器・坏	14.6	—	—	③④①	②	橙	上位1/2	外底面黒斑。
3	土師器・坏	(16.4)	—	—	③④①	②	明赤褐	上位1/4	
4	土師器・坏	(13.6)	—	—	③①④⑥	②	にぶい黄橙	上位1/4	内面全面外面一部吸炭。
5	土師器・坏	12.2	5.0	—	③④①	②	橙	完形	
6	土師器・坏	13.0	5.2	—	③①④	②	明赤褐	2/3	
7	土師器・坏	16.0	—	—	③④①	②	明赤褐	口縁部1/2欠	内面全面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
8	土師器・坏	(13.0)	5.3	—	③④①	②	橙	1/2	外底面吸炭。
9	土師器・坏	13.6	5.0	—	③①④	②	橙	2/3	
10	土師器・坏	(12.6)	—	—	③①④	②	橙	上位1/4	内外面一部炭化物付着。
11	土師器・坏	(14.0)	—	—	④③①⑥	②	橙	上位1/3	
12	土師器・坏	(13.3)	—	—	③①④②⑥	②	黄橙	口縁部1/2	外底面一部吸炭。
13	土師器・坏	(14.0)	—	—	④③①	②	橙	1/4	内外面共吸炭、炭化物付着。二次加熱。
14	土師器・坏	11.6	5.0	—	③④①	②	橙	5/6	外面一部炭化物付着。
15	土師器・坏	12.0	5.5	—	④③①	②	明赤褐	完形	内外面共炭化物付着。
16	土師器・坏	11.5	6.0	—	④①③	②	橙	2/3	
17	土師器・坏	(12.6)	—	—	③④①	②	橙	上位1/4	全面吸炭。内面口縁部炭化物付着。
18	土師器・盃	11.8	10.8	—	⑥④①③	②	橙	一部欠	外面丹彩。外底面黒斑。
19	土師器・高坏	17.1	12.4	(11.2)	③①④	②	橙	5/6	外面及び口唇内面一部吸炭。
20	土師器・高坏	(17.0)	—	—	③①④	②	橙	器受部のみ1/4	内外面共薄く吸炭。二次加熱。
21	土師器・高坏	15.6	—	—	③①⑥④⑤	②	橙	器受部のみ	外面口唇部及び内面全面吸炭、炭化物強固に付着。
22	土師器・甕	19.7	33.8	4.8	③①⑥	②	黄橙	5/6	内面炭化物、外面中位～下位煤付着。二次加熱。
23	土師器・甕	18.8	(31.6)	(6.2)	③①⑥④	②	橙	4/5	下位外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
24	土師器・甕	19.9	—	—	③④①⑥	②	橙	上位のみ	内面口唇部炭化物付着。内外面黒斑。
25	土師器・甕	—	—	5.8	③①④⑥	②	明赤褐	下位のみ	内外面黒斑。外面煤、内面中位炭化物付着。二次加熱。
26	土師器・甕	—	—	(6.9)	③①④⑥	②	浅黄橙	下位1/3	外面黒斑。一部吸炭。
27	土師器・甕	19.4	—	—	③①④⑥	②	明赤褐	上位のみ4/5	肩部内面より穿孔。内外面一部煤付着。二次加熱。
28	土師器・甕	20.7	—	—	③①⑥	②	橙	下位欠	口縁内面から外面肩部丹彩。外面黒斑。
29	土師器・甕	20.5	—	—	③①⑥④	②	橙	口縁部のみ	内外面一部煤付着。
30	土師器・壺	12.2	16.2	5.3	③①④	②	橙	一部欠	胴部中央黒斑。外面一部吸炭。
31	土師器・壺	—	—	—	③①④	②	橙	胴部のみ	
32	土師器・甗	(25.6)	27.4	(7.8)	③⑥①④	②	浅黄橙	1/3	内外面黒斑。外面一部煤付着。
33	土師器・甗	—	—	9.6	③①⑥④	②	橙	1/2	内外面黒斑。
34	土師器・甗	19.8	18.7	3.1	③①⑥	②	橙	5/6	内外面煤付着。胎土に砂礫多量含む。

底面がほぼ水平となる煙道へと移行する。煙道は奥に向けて幅を狭め、45cm行った所で10cmとなる。奥壁はやや急に立ち上がった後、一旦水平面をもち、煙出し部分の壁は直立する。煙出しは、竪穴北西部にみられる柵の外側に位置し、平面形は円形を呈し、径は16cm前後を計る。火床から煙出しまで長さ1.70mを計る。第2カマドは、前面幅48cm、奥幅40cm、長さ82cm範囲に、ほぼ平行する袖が設けられている。この範囲の最も前面に径20cm前後の火床がみられ、その奥部は一旦立ち上がり、再び平坦面となって奥壁へ移行している。中央立ち上がり部分には、土師器甕が直立して残存している。また奥壁は、竪穴北壁ラインと一致している。

カマドは、2基とも土器が使用された状況で残存すること、第1カマドの袖が不明瞭ではあるものの残存すること等から、2基が同時に使用されていた可能性が高い。

ピットは、竪穴対角線上に4ヶ所、東辺側に2ヶ所、中央西辺寄りに1ヶ所、第2カマ



第29図 B区22号住居跡出土遺物(3)

ド東脇に1ヶ所穿たれている。対角線上4ピットのうち北西ピットは、 52×45 cm、深さ46cmを計り、長方形を呈する。底面は平坦である。北東ピットは、 39×45 cm、深さ12cmを計り、隅円長方形を呈する。また中央部には、 15×15 cm、深さ12cmを計る長方形ピットが存する。底面は平坦である。南東ピットは、全体形は長円形を呈し、 60×50 cmの範囲で深さ5~10cm窪み、中央部分ではさらに、径10cm、深さ30cmの円形ピットが穿たれる。南西ピットは、全体形は隅円方形を呈し、 50×50 cmの範囲で深さ20~25cm窪み、中央部分ではさらに、径20cm、深さ18cmの円形ピットが穿たれる。東辺側2ピットのうち北ピットは、全体形は長円形を呈し、 85×65 cmの範囲で深さ10cm前後窪み、中央部分ではさらに、一辺40cm、深さ36cmの方形ピットが穿たれている。南ピットは、全体形は隅円方形を呈し、 70×60 cmの範囲で深さ15cm前後窪み、東寄り部分ではさらに、径20cm、深さ8cmの円形ピットが穿たれている。

第2カマド脇ピットは、南壁の一部が崩れているものの、 85×75 cmの規模で長方形を呈し、深さは60cmを計る。断面は、漏斗形を呈している。覆土には、炭化物が含まれ、貯蔵穴であったと思われる。

遺物は、第1カマド内火床上から土師器坏(第27図-15)、土師器甕(第28図-22)、第

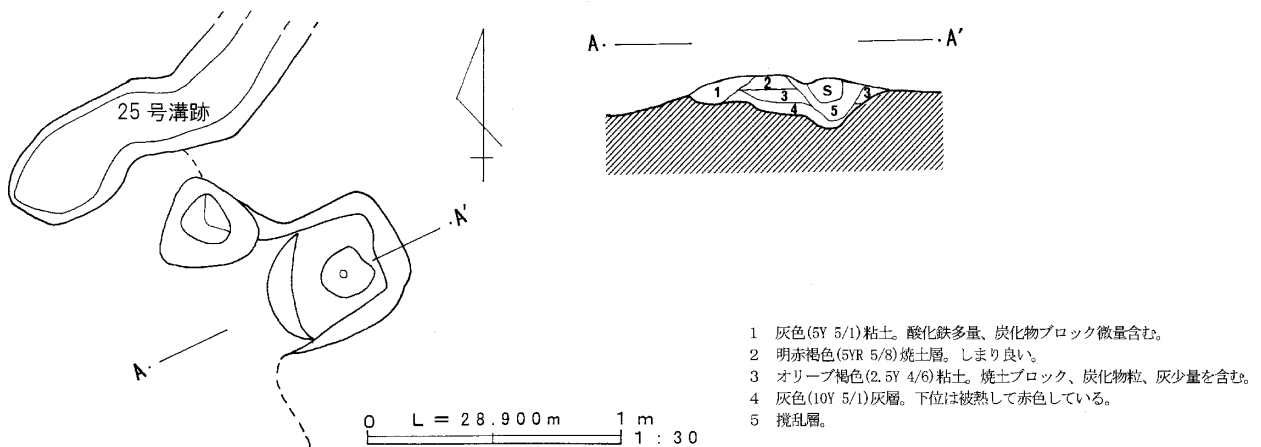
2カマド火床奥から土師器甕（同一25）、貯蔵穴周囲から土師器坏（第27図—5、16）、土師器盃（同一18）、土師器甕（第28図—24、27、28、29）、土師器甗（第29図—34）、中央部床面上から土師器高坏（第27図—19）、土師器壺（第29図—31）が出土している。また南壁直下から礫がまとまって検出されている。

32号住居跡 X-16グリッドに位置する。第2確認面からの検出である。カマド北側の上面に25号溝跡（第30図）が位置している。

カマドのみの検出であり、形態・規模共に不明である。

カマドの火床は、竪穴内外に半々に及び、奥側は矩形を呈する。矩形部分の幅55cm、奥行き75cmを計る。

遺物は、土師器甕の小片が検出されているが、図示は不可能であった。



第30図 B区32号住居跡

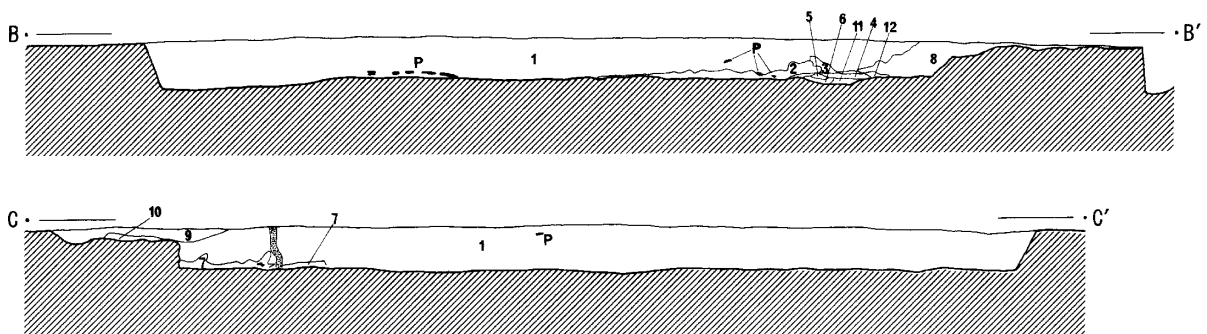
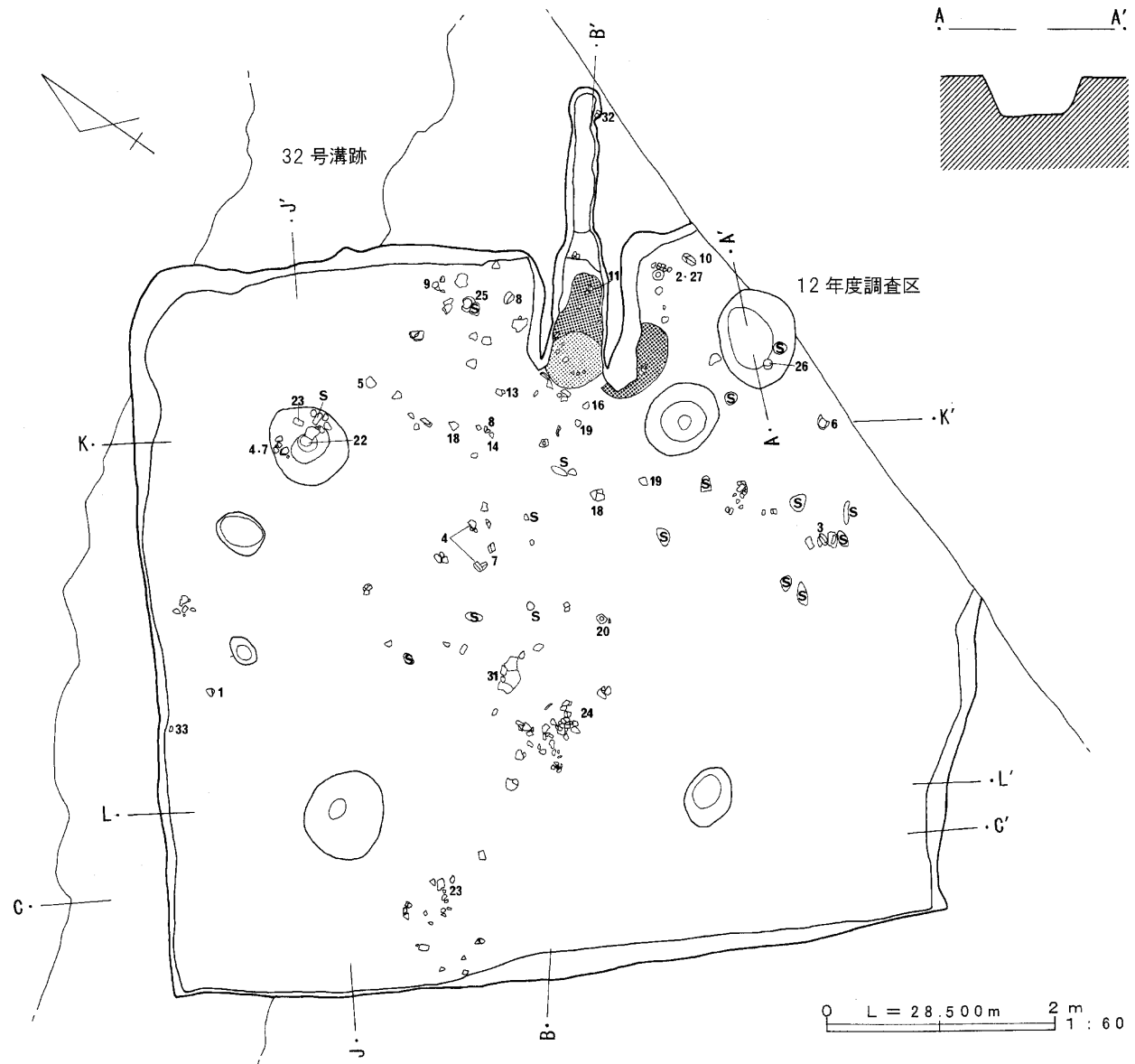
38号住居跡 W-15・16グリッドから、X-15・16グリッドにかけて位置している。西辺の上部を32号溝跡に、中央を南北に25号溝跡によって削除されている。また北東隅は、26号住居跡調査時点でプランが未確認であったため、未調査のままである。但し、両住居跡が重複する位置で26号住居跡のプランが確認されていることから、26号住居跡のほうが新しいことはわかる。第2確認面からの検出である。

北東辺及び南東辺は、東隅が未調査であるが、それぞれ7.0m、6.0m程の長さが知れる。その他南西辺は6.78m、北西辺は6.46mを計り、僅かに北西—南東方向が長く不整形であるが、ほぼ正方形を呈するといえる。主軸方位は、N-51°-Eを示す。

壁は、ほぼ垂直を成し、掘り込み確認面から床面までの深さは、38cm前後を計る。

覆土は、褐灰色粘土と橙色粘土が混在し、炭化物粒・焼土粒・FA火山灰ブロックを含む第1層が全体に堆積している。投入土である。また、床面上には炭化材・焼土ブロックの混在層（第7層）が堆積している部分が多い。

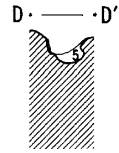
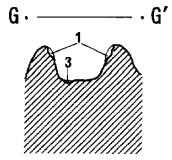
カマドは、北東壁中央僅かに東寄り（推定）に設けられている。燃焼部は、全て竪穴内に位置し、長さ113cm、前面幅45cm、奥幅40cmを計り、長方形を呈する。このうち火床は、



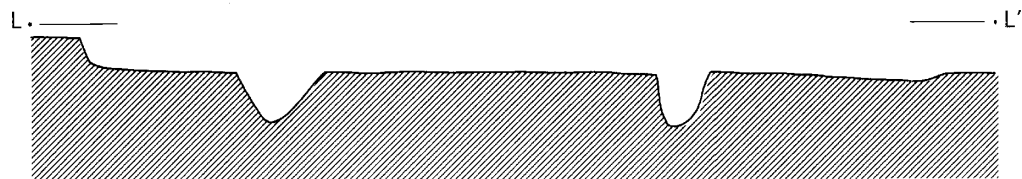
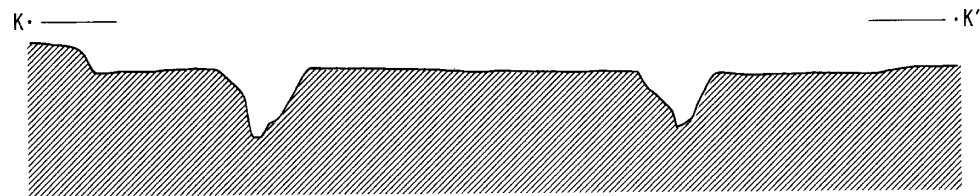
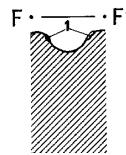
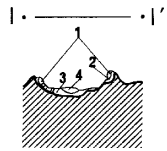
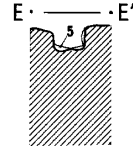
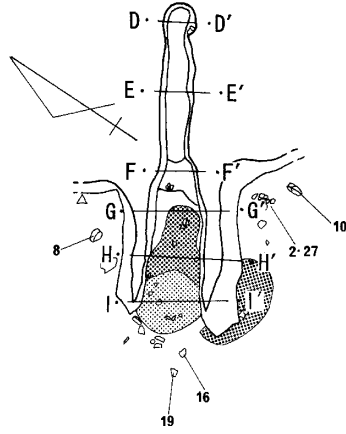
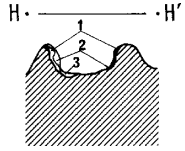
- | | |
|--|--|
| <p>1 褐灰色(7.5YR 6/1)粘土。橙色(7.5YR 6/6)粘土混在層。炭化材粒、焼土粒・ブロック、FA火山灰ブロック含む。</p> <p>2 1層と同様であるが炭化材粒、焼土ブロック含有率が高い。</p> <p>3 灰に焼土ブロックを含む。</p> <p>4 純灰層。</p> <p>5 火床。</p> <p>6 1層と同様、天井部の落下したもの。</p> | <p>7 炭化材、焼土ブロックの混在層。</p> <p>8 明黄褐色(2.5Y 7/6)シルト。マンガン粒を多量含む。</p> <p>9 灰白色(2.5Y 7/1)砂。酸化鉄を多量含む。下位に酸化鉄層を含む。</p> <p>10 黄灰色(2.5Y 5/1)砂。酸化鉄多量含む。</p> <p>11 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。酸化鉄含む。</p> <p>12 最下部に焼土粒を含む木炭層。上位は灰、木炭、焼土粒の混在層。</p> |
|--|--|

第31図 B区38号住居跡(1)

IV B区の遺構と遺物

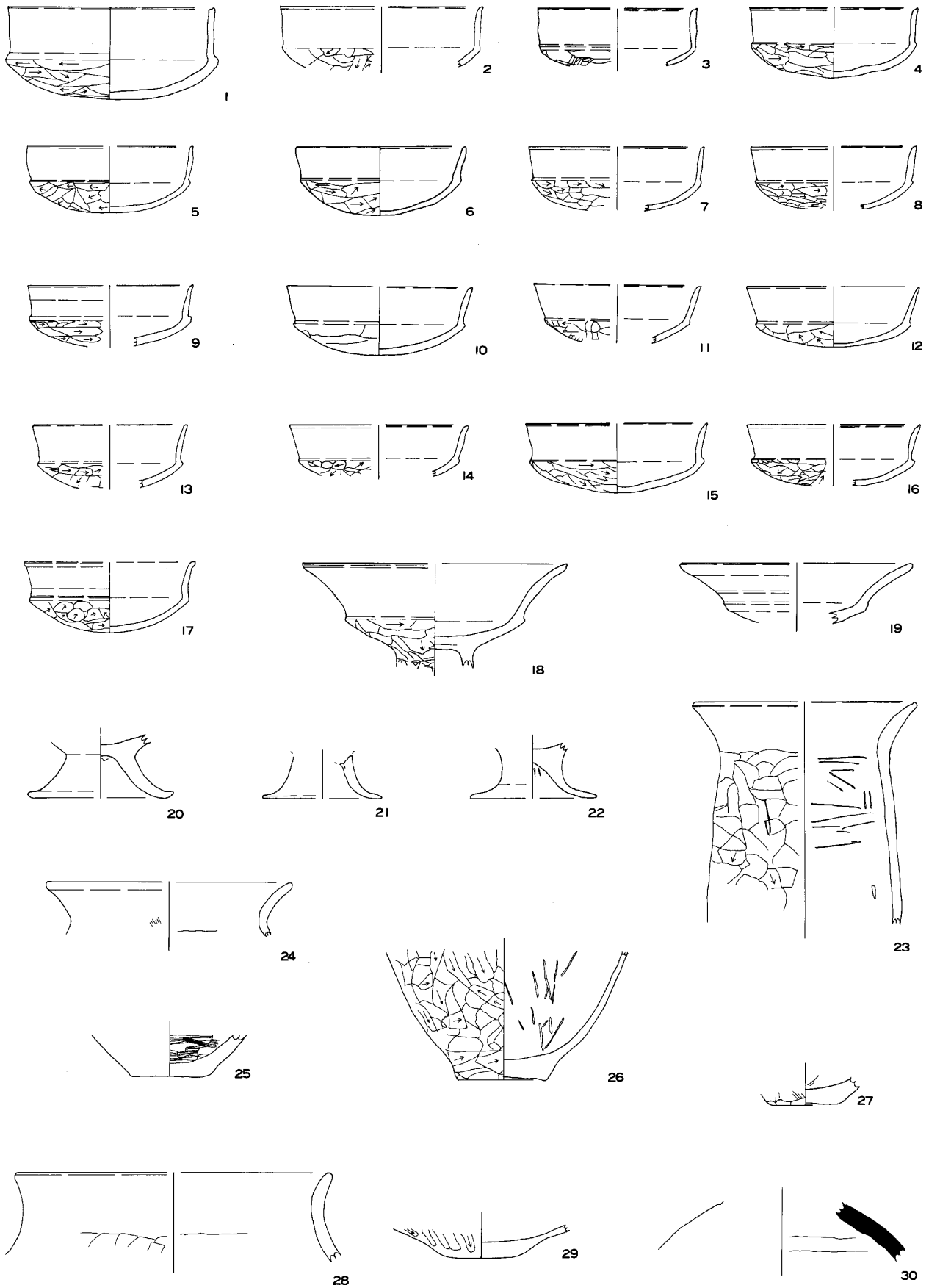


- 1 灰オリーブ色(GY 5/2)粘土。炭化物、FA火山灰を少量に含む。しまり良い。
- 2 灰オリーブ色(GY 5/2)粘土。炭化物多量、FA火山灰中量含む。しまり良い。
- 3 灰オリーブ色(GY 5/2)粘土。FA火山灰多量、炭化物少量含む。しまり良い。
- 4 灰オリーブ色(GY 5/2)粘土。炭化物、FA火山灰を中量に含む。しまり良い。
- 5 灰オリーブ色(GY 5/2)粘土。炭化物中量、FA火山灰少量含む。しまり良い。粘性弱い。

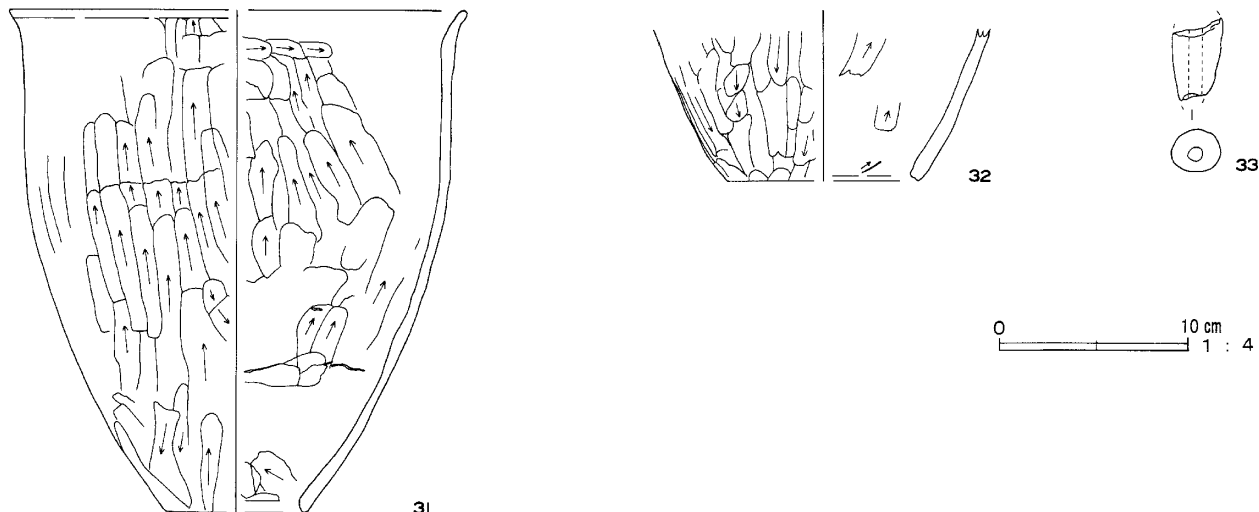


0 L = 28.500 m 2 m 1 : 60

第32図 B区38号住居跡(2)



第33图 B区38号住居跡出土遺物(1)



第34図 B区38号住居跡出土遺物(2)

第8表 B区38号住居跡出土遺物観察表 (第33・34図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	14.8	6.5	—	④②①⑥	②	明赤褐	完形	外底面煤、内底面炭化物付着。
2	土師器・坏	(14.7)	—	—	①②③⑥	②	橙	1/5	
3	土師器・坏	(11.5)	—	—	①③②④⑥	②	橙	1/5	乾燥時ケズリ畝状の段。
4	土師器・坏	(12.1)	5.0	—	③①④	②	橙	1/2	外底面吸炭。
5	土師器・坏	(11.8)	4.8	—	②④③①⑥	②	明赤褐	1/2	
6	土師器・坏	12.1	4.9	—	③②①	②	明赤褐	4/5	外底面黒斑。
7	土師器・坏	(11.6)	—	—	③④①⑥②	②	橙	1/3	内外面一部吸炭。
8	土師器・坏	(11.8)	—	—	①②③⑥	②	橙	3/7	口縁部外面一部吸炭。
9	土師器・坏	(11.9)	—	—	①②③④⑥	②	にぶい橙	1/3	内外面一部吸炭。二次加熱。
10	土師器・坏	(13.2)	4.9	—	③①⑥④	②	橙	2/5	
11	土師器・坏	(12.0)	—	—	③①④②	②	橙	1/4	
12	土師器・坏	(12.4)	4.3	—	③①⑥④	②	橙	1/4	外底面黒斑。
13	土師器・坏	(11.0)	—	—	⑥②①③④	②	黄橙	1/6	
14	土師器・坏	(12.8)	—	—	①②③⑥	②	橙	1/5	口縁部一部吸炭。
15	土師器・坏	(13.1)	4.9	—	③⑥①④	②	橙	1/4	外底面黒斑。
16	土師器・坏	(12.5)	—	—	①②③④⑥	②	明赤褐	1/5	内外面一部吸炭。
17	土師器・坏	(12.4)	5.0	—	①②③④	②	明赤褐	3/5	内外面一部吸炭。
18	土師器・高坏	(18.8)	—	—	③②①④⑥	②	橙	坏部 1/4	内外面一部吸炭。
19	土師器・高坏	(16.7)	—	—	②①③④⑥	②	橙	坏部 1/4	
20	土師器・高杯	—	—	(10.5)	①②③④⑥	②	橙	脚部 3/4	
21	土師器・高杯	—	—	(8.5)	②③①④⑥	②	橙	脚部 1/4	
22	土師器・高杯	—	—	(9.1)	④②①⑥	②	にぶい赤褐	脚部 2/5	全面吸炭。
23	土師器・甕	(16.4)	—	—	⑥②③①	②	橙	上位 1/5	砂礫多量。外面黒斑。
24	土師器・甕	(17.7)	—	—	①②③④⑥	②	にぶい橙	口縁部 1/4	砂多量。
25	土師器・甕	—	—	5.5	①②③⑥	①	橙	底部のみ	内面炭化物付着。
26	土師器・甕	—	—	6.3	①⑥④②③	②	黒褐	下位のみ	外面煤、内面にぶい褐色炭化物付着。
27	土師器・甕	—	—	4.3	①②③⑥	②	明赤褐	底部のみ	外面煤付着。
28	土師器・甕	(22.6)	—	—	①②③	②	浅黄橙	口縁部 1/8	
29	土師器・甕	—	—	(5.8)	④①②⑥③	②	明赤褐	底部 3/4	外面黒斑。
30	須恵器・短頸壺	—	—	—	①②③⑥	②	灰	一部のみ	
31	土師器・甕	24.2	26.4	7.6	①②④③	②	明褐	1/4	外面下位黒斑。
32	土師器・甕	—	—	(10.0)	③①⑥④	②	にぶい橙	孔部 1/4	孔部内外面黒斑。
33	土錘	長さ —	最大径 2.7	孔径 0.7				両端欠	外面黒斑。

48×45cm範囲で僅かに窪み、円形を呈する。奥には、灰・焼土粒・ブロックの混在層が堆積している。また灰混在層は、右袖の外側にも3～5cmの厚さで堆積している。燃焼部の壁は、3面とも垂直に近い急傾斜を示す。急傾斜の奥壁から、一旦水平面をもつものの、奥に向けては凹凸の激しい煙道が続く。水平面では幅を減じ、幅15cm前後で推移する。壁はほぼ直立し、断面矩形を呈する。煙出しの奥壁は円形を呈し、僅かに傾斜をもつ。煙道部全体の長さは152cmを計る。

床面はほぼ水平であり、安定している。竪穴中央部から南西壁中央にかけては、特に硬く締まっている。

ピットは、対角線上に4ヶ所、カマド東脇に1ヶ所穿たれている。なお、北西壁下の2ピットは、覆土に浅間A火山灰を含んでおり、近世のものである。対角線上の4ピットのうち北ピットは、74×64cm、深さ54cmを計り、楕円形を呈する。壁面上位には、編み物状(繊維)東ピットは、70×56cm、深さ46cmを計り、楕円形を呈する。南ピットは、50×40cm、深さ44cmを計り、楕円形を呈する。西ピットは、80×68cm、深さ40cmを計り、楕円形を呈する。断面形は、いずれも漏斗形を示すが、中段の屈曲は弱い。また底径は、12～15cmである。カマド東脇ピットは、96×66cm、深さ36cmを計り、楕円形を呈する。底面は、ほぼ水平であり、断面形は逆台形を示している。覆土中に炭化物が多く含まれている。貯蔵穴と思われる。

遺物は、土師器坏(第33図-1)のみが床面直上であり、他は全て、最下面を含めた覆土中からの出土である。また、坏(1)がほぼ完形であるのを除いては、全て1/2以下の復元状況である。

3 柵 列

B区においては、平成12年度調査によって、一間×一間が1棟、一間×二間が2棟、合計3棟の掘立柱建物跡が検出されているが、今回の調査において検出された柱列遺構は、立体構成を想定することに無理があるため、柵列としたものである。

1号柵列 R-14グリッドからS-14グリッドにかけて位置している。4柱穴のうち東側2柱穴は、
(第35図) 4号住居跡の覆土を掘り込んでいる。第1確認面と第2確認面の中間からの検出である。

東西に3柱穴が並び、西端柱穴から直角の北側方向に1柱穴が配されている。東西列方位は、N-70°-Wを示す。

東西の芯々間は、東3.0m、西2.4mであり、南北の芯々間は2.3mである。各柱穴は径25～35cmで、深さは20cm程である。各柱穴の芯には、径8～10cmの柱痕がみられる。

いずれの柱穴からも、遺物は検出されていない。

2号柵列 V-17グリッドに位置している。第1確認面からの検出である。
(第35図) 南北一列に3柱穴が並び、方位は、N-33°-Eを示す。芯々間は、北2.5m、南2.1mで

ある。北柱穴は円形を呈し、径15cm、深さ28cmを計る。中柱穴は長円形を呈し、22×15cm、深さ15cmを計る。南柱穴は長円形を呈し、25×16cm、深さ18cmを計る。

いずれの柱穴からも、柱痕、遺物は検出されていない。

3号柵列
(第36図)

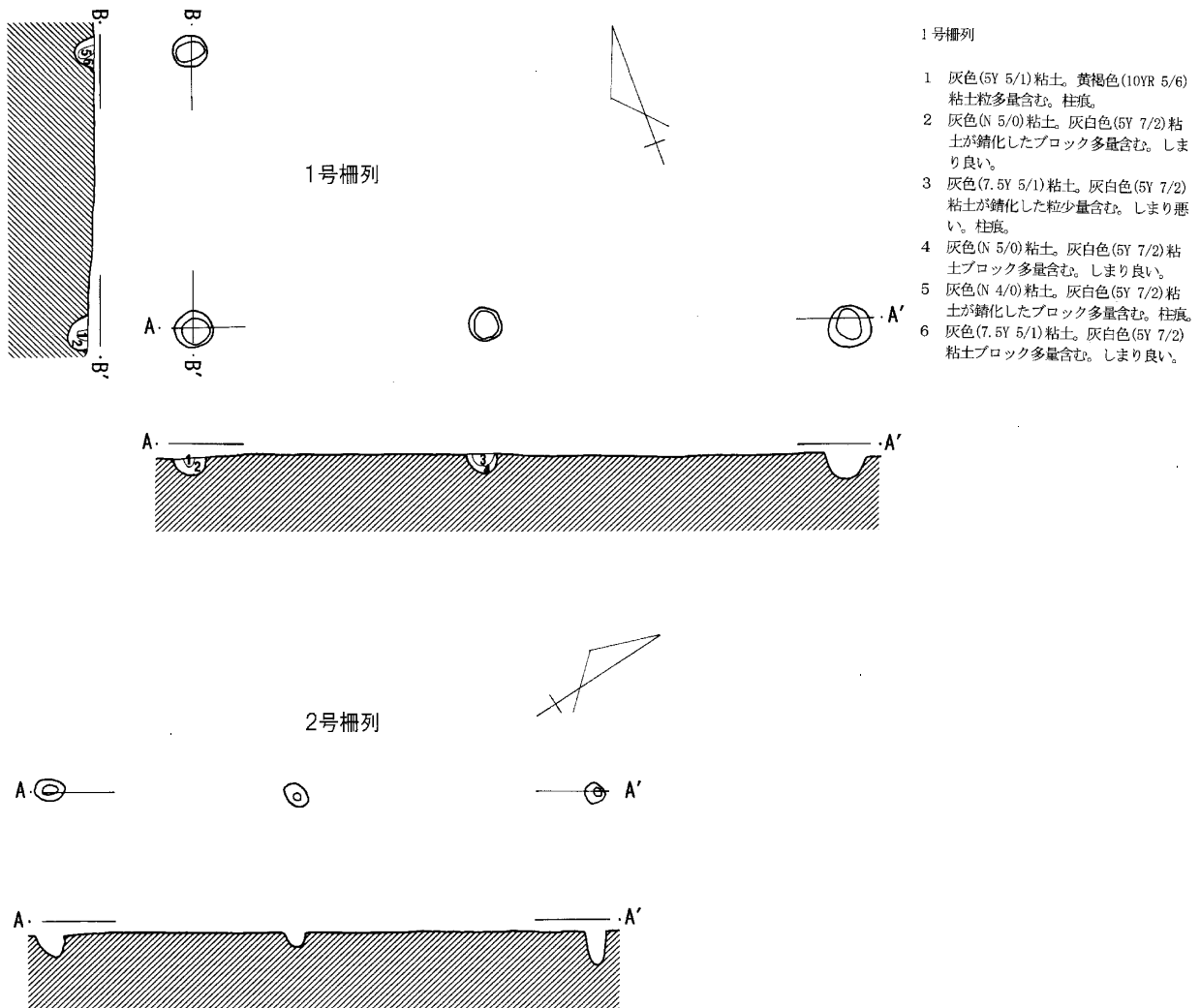
Z-18グリッドからZ-19グリッドにかけて位置している。33号溝跡覆土を掘り込んでおり、遺構確認最上面から検出されている。

幅60cm、長さ8.35mの間に25ピットが穿たれている。

ピットの平面形はいずれも長円形で、6×8cmから30×22cmの大きさのものまでさまざまである。深さも5cmから93cmのものまで様々であるが、概して深いものが多い。

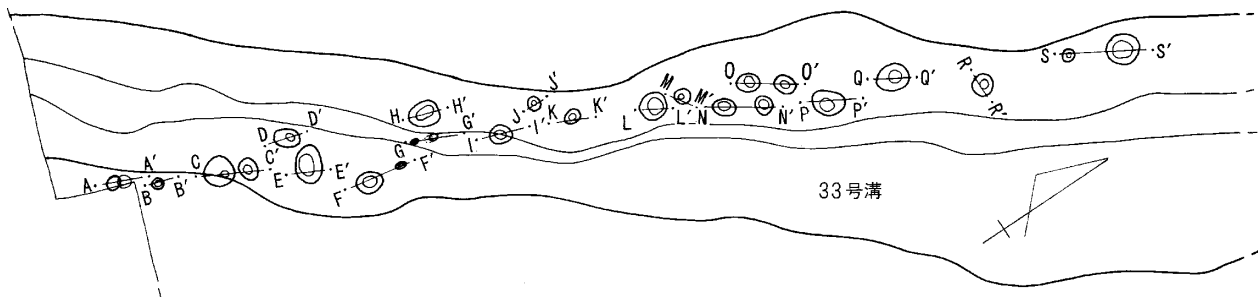
覆土は、全て少量の炭化物及び酸化鉄を含む暗灰黄色シルト（第2層）であるが、A・C・E・K・N・O・P・Q・Rの中央部には、さらにこれを掘り込んだ、径5cmから11cm、深さ11cmから52cmの杭痕（多量の酸化鉄を含む黄褐色シルトが堆積＝第1層）がみられた。なお本列は、杭の並ぶ杭列と称するほうが妥当であろう。

遺物は、近世の陶磁器小破片が検出されているが、図示し得る物はなかった。

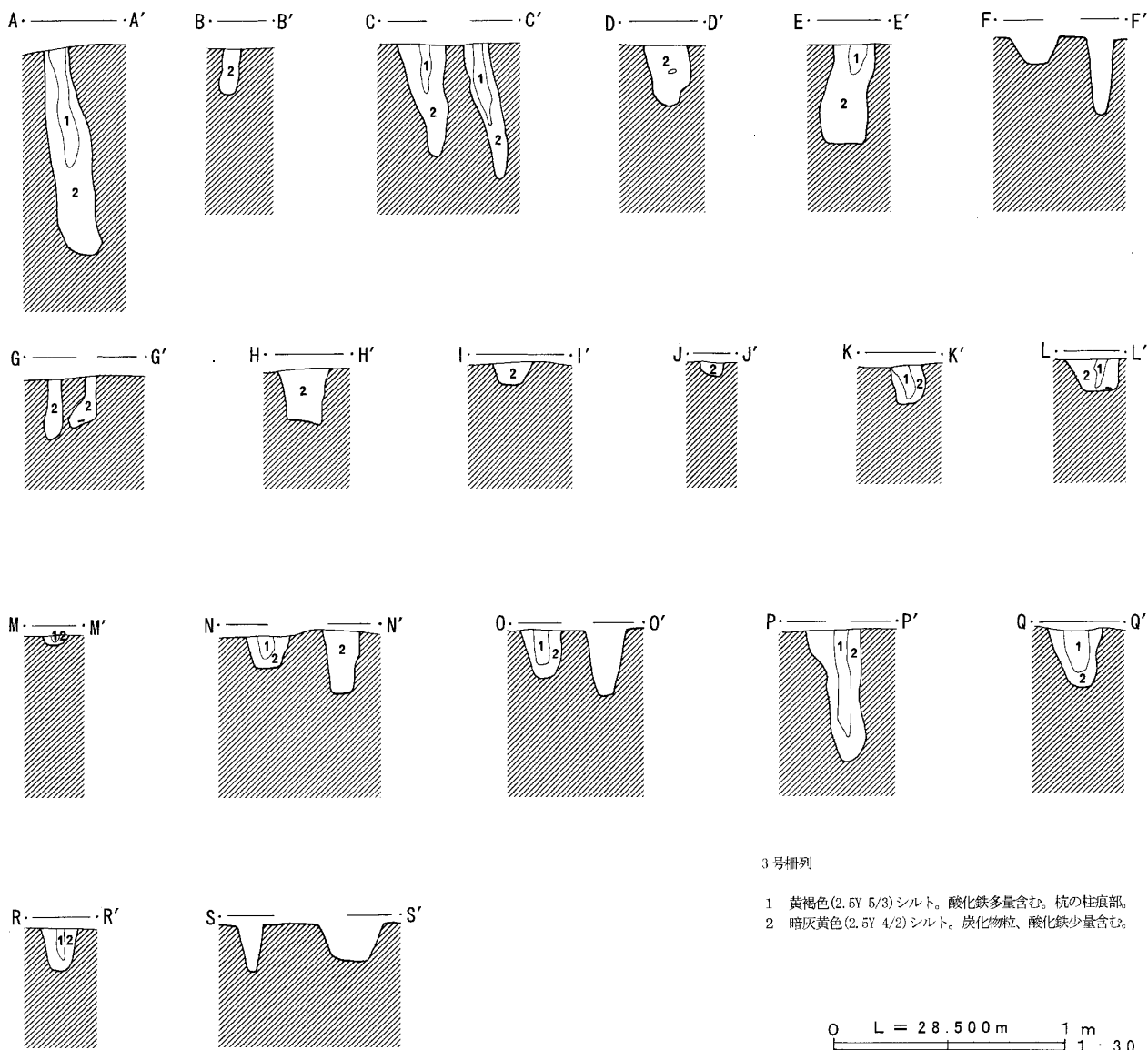


第35図 B区1号・2号柵列

0 L = 28.800m 2 m 1:60



0 2 m 1 : 60



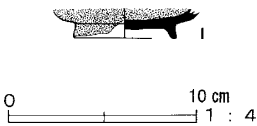
第36図 B区3号柵列

4 土 坑

B区における土坑は、平成12年度調査で44基が調査されている。13年度調査では、新たに12基が検出（第38図）され、都合56基が確認されたこととなる。全て第1確認面からの検出である。他の遺構を切断している点、河川埋没の構築である点等、12年度調査分と共通する点が多い。また、遺物の出土がほとんど見られない点、時期の不明瞭な点も共通している。

検出された土坑は、その形態から五つのタイプに分類される。

- 1 タイプ** 小型で浅く、概ね円形を呈するタイプである。45号、48号、49号、52号、54号、55号の各土坑が含まれる。45号土坑は、R-14グリッドに位置し、僅かに長円形を呈して、95×80cm、深さ26cmを計る。48号土坑は、T-15グリッドに位置し、やや不整の円形を呈して、175×151cm、深さ28cmを計る。49号土坑は、U-16グリッドに位置し、円形を呈して、72×75cm、深さ17cmを計る。貫入の入った陶器高台椀（第37図）が出土している。52号土坑は、V-15グリッド、11号畠跡の上位に位置し、ほぼ円形を呈して、113×115cm、深さ23cmを計る。54号土坑は、U-16グリッドに位置し、32号溝跡を切断している。長円形を呈して、195×154cm、深さ42cmを計る。55号土坑は、X-18グリッドに位置し、33号溝跡を切断している。円形を呈して、86×88cm、深さ30cmを計る。覆土は、灰色粘土が主体であり、酸化鉄を多く含んでいる。

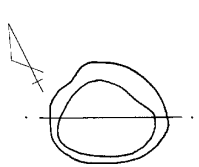


第37図 B区
49号土坑出土遺物

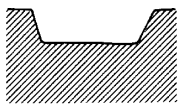
第9表 B区49号土坑出土遺物観察表（第37図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	陶器・高台椀	—	—	5.4	—	②	灰白	高台部1/2	内面貫入。灰釉。

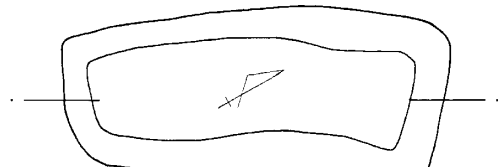
- 2 タイプ** 小型で浅く、長円形もしくは長方形を呈するタイプである。50号、53号の各土坑が含まれる。50号土坑は、T-16グリッドに位置し、長方形を呈して、215×94cm、深さ13cmを計る。53号土坑は、V-17グリッドに位置し、不整の長方形を呈して、113×58(86)cm、深さ8cmを計る。覆土は、いずれも褐色系シルトを主体としている。
- 3 タイプ** 小型で深く、円形を呈するタイプである。今回の調査では、検出されていない。
- 4 タイプ** 大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプである。46号、51号の各土坑が含まれる。46号土坑は、S-16グリッドに位置し、やや不整ながら長方形を呈して、300×126cm、深さ60cmを計る。51号土坑は、U-17グリッドに位置し、C区13号畠跡の上位に位置している。長方形を呈して、358×193cm、深さ56cmを計る。覆土には、多量の粘土ブロックが含まれ、投入土の様相を呈している。
- 5 タイプ** その他の不整形を呈するものを一括したもの。47号、56号の各土坑が含まれる。47号土坑は、T-15グリッドに位置し、不整長方形を呈して、132×115cm、深さ21cmを計る。覆



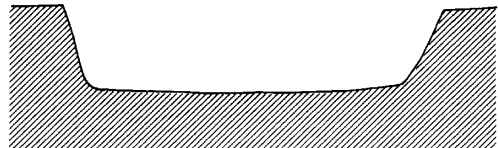
L = 29.000m



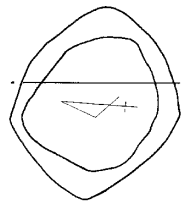
45号土坑



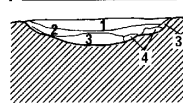
L = 28.300m



46号土坑



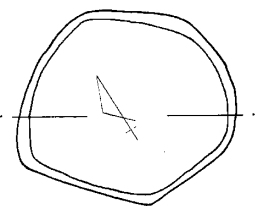
L = 28.200m



47号土坑

47号土坑土層

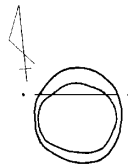
- 1 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。黒褐色(2.5Y 3/2)粘土ブロック、焼土粒を少量含む。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。下層に炭化物を層状に含む。
- 3 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物ブロック、焼土ブロックを少量含む。
- 4 焼土、炭化物の混在層。焼土を層状に炭化物粒を少量含む。



L = 28.800m



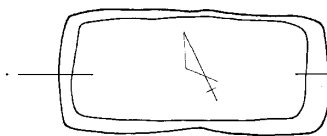
48号土坑



L = 28.100m



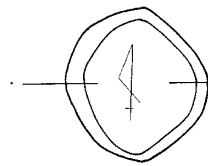
49号土坑



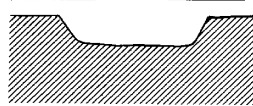
L = 28.300m



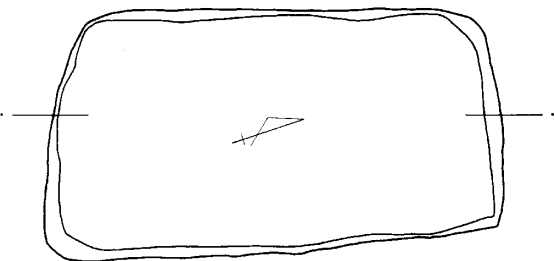
50号土坑



L = 28.800m



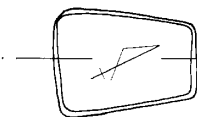
52号土坑



L = 28.800m



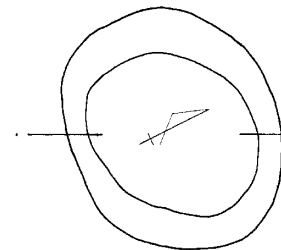
51号土坑



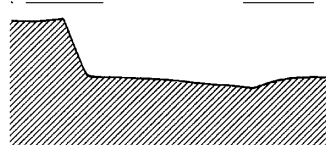
L = 28.800m



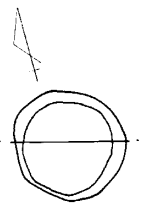
53号土坑



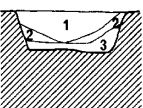
L = 28.500m



54号土坑



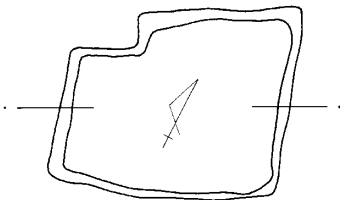
L = 28.800m



55号土坑

55号土坑土層

- 1 灰色(N 4/0)粘土。黄褐色(2.5Y 5/6)粘土ブロック多量、酸化鉄ブロック少量含む。
- 2 灰色(5Y 6/1)粘土。酸化鉄ブロック多量、灰色(N 4/0)粘土ブロック少量含む。
- 3 灰色(N 5/3)粘土。灰色(N 4/0)粘土粒、酸化鉄ブロック多量含む。



L = 28.800m



56号土坑

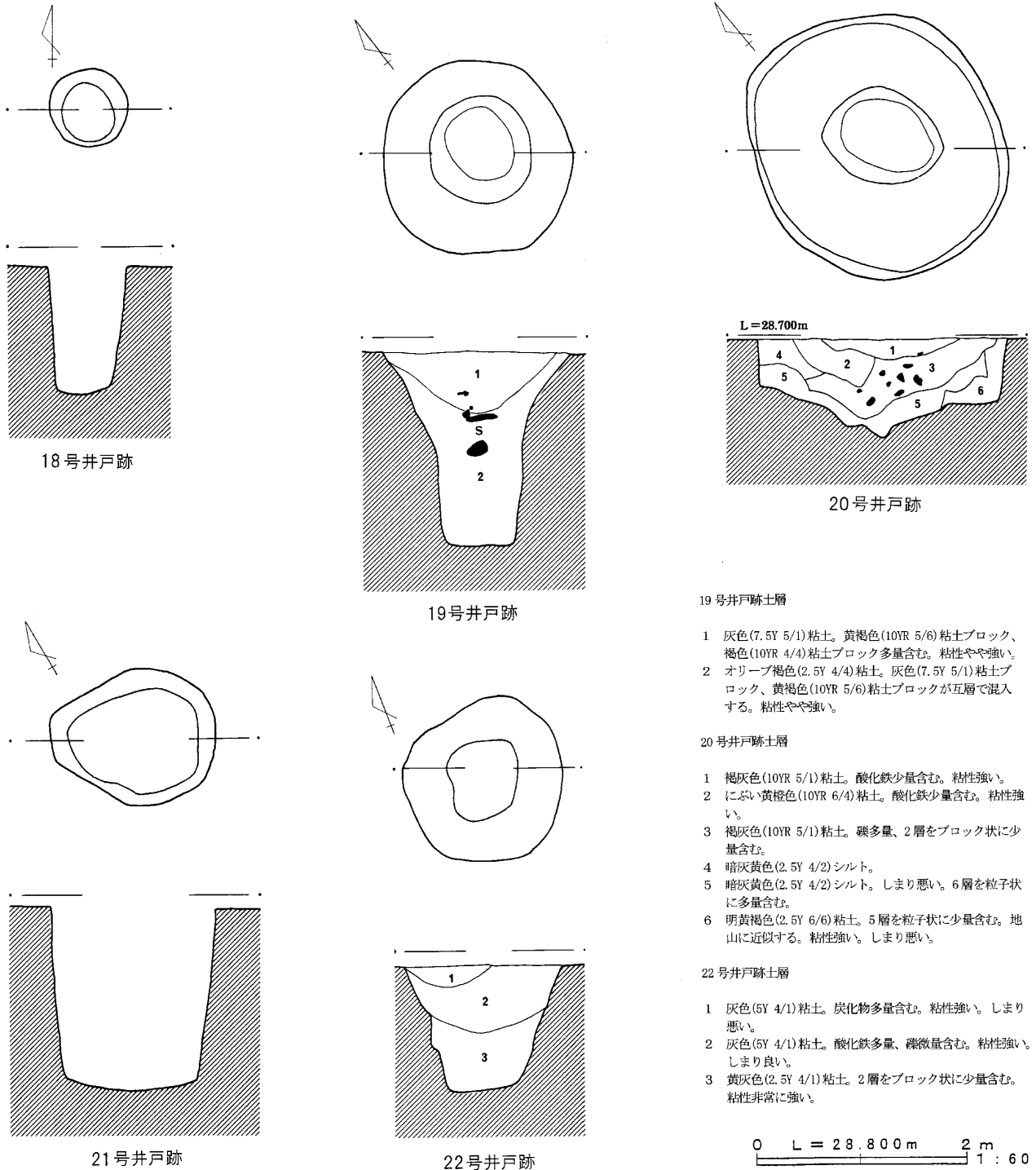
0 2 m 1 : 60

第38図 B区土坑

土は、オリーブ褐色シルトを主体とし、多量の焼土・炭化材を含んでいる。56号土坑は、Y-17~18グリッドに位置し、正方形の一部が欠けた形態を呈して、180×148cm、深さ22cmを計る。覆度は、灰色シルトである。

5 井戸跡

B区における井戸跡は、平成12年度調査で17基が調査されている。13年度調査では、新



第39図 B区井戸跡

たに5基が検出(第39図)され、都合22基が確認されたこととなる。全て第1確認面からの検出である。

検出された井戸跡も、その形態から五つのタイプに分類される。

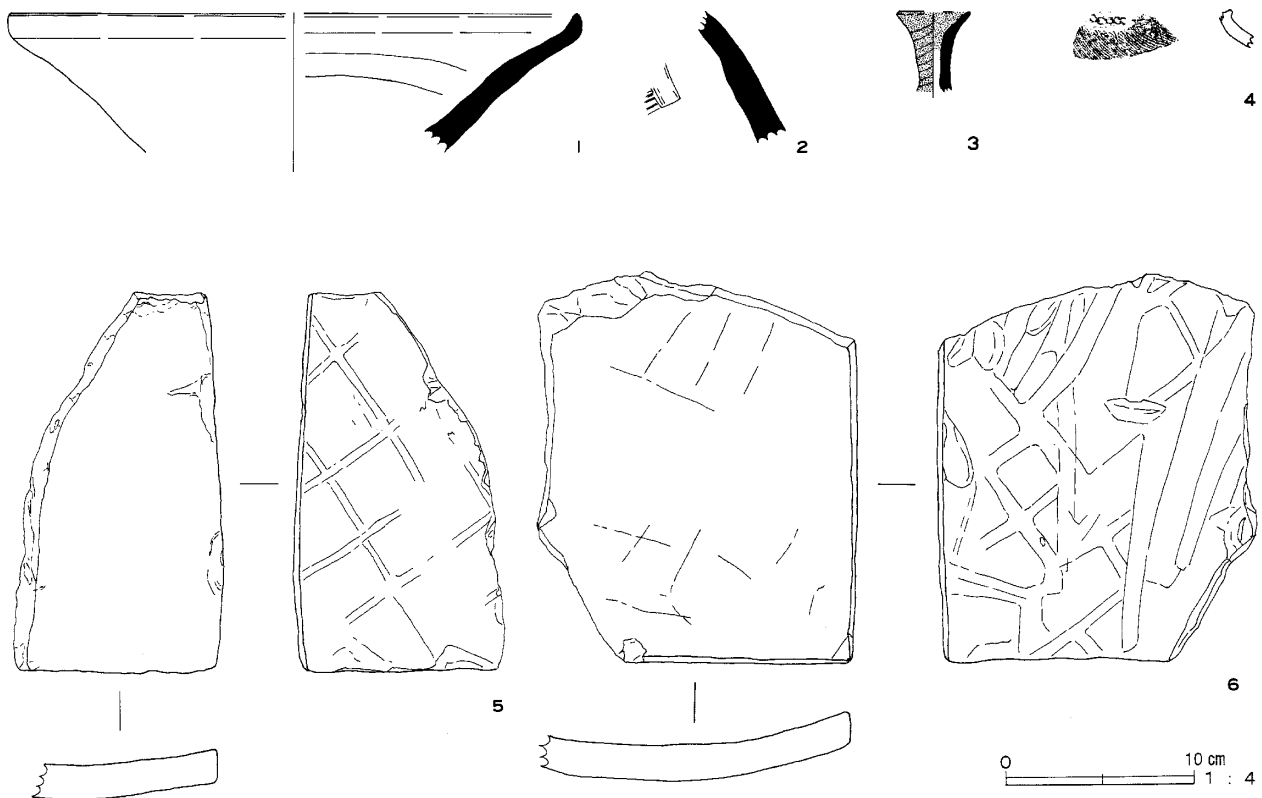
1タイプ ほぼ垂直、もしくはオーバーハング気味に掘られ、平面形は円形を呈する素掘りのタイプである。18号、21号の各井戸跡が含まれる。

18号井戸跡は、T-15グリッドに位置し、9号畠跡を切断している。円形を呈して、63×65cm、深さ102cmを計る。

21号井戸跡は、W-16グリッドに位置している。平面形は、不整の長円形を呈し、134×110cm、深さ145cmを計る。

2タイプ 中段まで斜め、それ以下はほぼ垂直に掘られ、平面形は円形を呈するタイプである。19号井戸跡が含まれる。

19号井戸跡は、U-15グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、上径158×154cmを計る。掘り込み確認面から40～80cm下位までが斜めに、それ以下は80×87cmの径で底面までほぼ垂直に掘り込まれている。底面径は60×50cmを計る。覆土は、いずれも粘土ブロックを多量に含み、投入土の様相を呈している。全体の深さは、156cmを計る。覆土中から須恵質の鉢(第40図-1)、常滑甕(同一-2)、平瓦(同一-5、6)等が出土している。



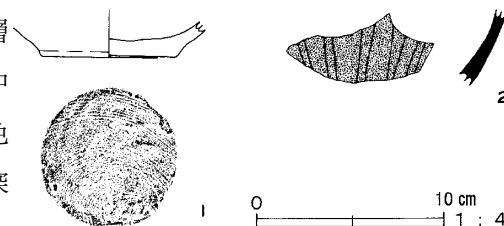
第40図 B区19号井戸跡出土遺物

第10表 B区19号井戸跡出土遺物観察表 (第40図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵質・鉢	(29.0)	—	—	⑥②①	②	灰白	口縁部 1/6	外面吸炭。
2	常滑・甕	—	—	—	—	①	暗オリーブ	一部のみ	外面釉。一部窯壁付着。内面明赤褐色。
3	とっくり	(3.8)	—	—	—	①	褐	口のみ	飴色釉。
4	土師器・壺	—	—	—	①②③④⑥	②	明黄褐	頸部一部のみ	頸部貼付凸帯に押捺文。
5	平瓦	厚さ 1.7						1/8	上下面吸炭。明緑灰色。
6	平瓦	厚さ 1.8						1/4	上下面吸炭。

3タイプ 掘り込み面からほぼ垂直に掘り込まれ、平坦な底面の中央部がさらにピット状に掘り込まれたタイプである。平面形は円形を呈する。20号井戸跡が含まれる。

20号井戸跡は、W-16グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、上径221×196cmを計る。掘り込み確認面から38～50cm下位までが垂直に掘り込まれ、平坦(一部は斜面)な底面の中央部が、102×78cmの径で浅いピット状に掘り込まれている。覆土は、下位にシルト層(第4・5層)、上位に粘土層(第1・2層)、中間に第2層粘土ブロック礫を多量に含む褐灰色粘土層(第3層)が堆積している。中央部の深さは、80cmを計る。



覆土中から土師質の椀(第41図-1)、青磁の椀(同一-2)が出土している。

第41図 B区20号井戸跡出土遺物

第11表 B区20号井戸跡出土遺物観察表 (第41図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師質・椀	—	—	7.2	③②④①⑥	②	にぶい黄橙	底部のみ	外底面吸炭。
2	青磁・椀	—	—	—	—	—	オリーブ灰	一部のみ	菊花文。

4タイプ 全体に斜めに掘り込まれ、円形を呈するタイプである。22号井戸跡が含まれる。

22号井戸跡は、AA-17グリッド・3号方形周溝墓の上位に位置し、3号方形周溝墓の北東隅を削平している河川跡が埋没した後に構築されている。平面形は、不整ながら円形を呈し、158×155cm、深さ121cmを計る。底面は不整な長方形を呈し、74×66cmを計る。覆土は、灰色粘土もしくは黄灰色粘土であり、中間層の第2層には、礫及び多量の酸化鉄を含んでいる。

5タイプ 全体がほぼ垂直に掘り込まれ、平面形が方形もしくは長方形を呈するタイプである。今回の調査では、検出されていない。

6 畠跡

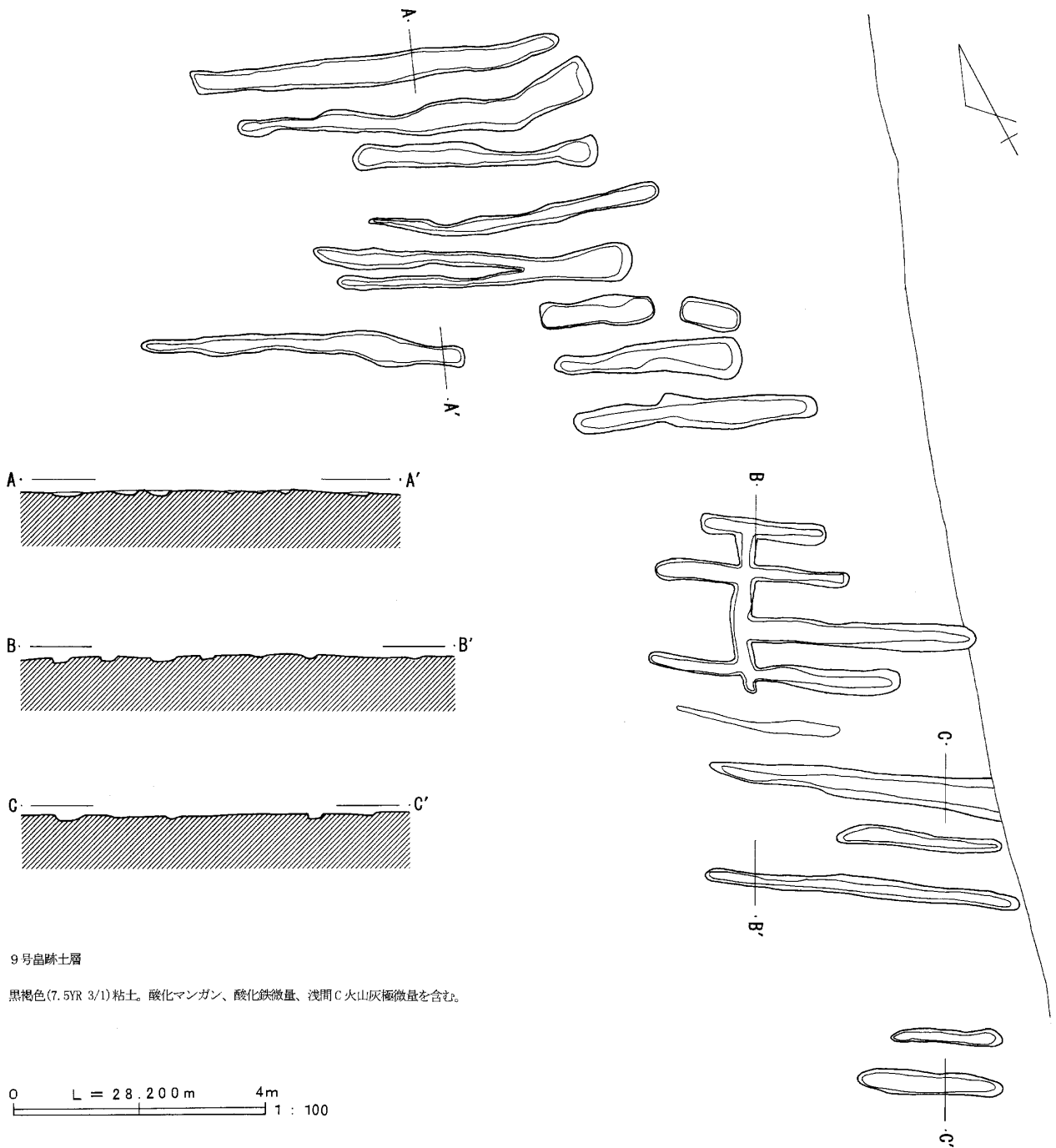
B区における畠跡は、平成12年度調査で8ブロックが調査されている。13年度調査では、新たに4ブロックが検出され、都合12ブロックが確認されたこととなる。

9号畠跡 S-14、15、T-14、15、U-14、15グリッドに位置している。第2確認面からの検出である。全体では南北15.5m、東西約6mの範囲に及ぶが、畝間と畝尻を囲うと、全体では

平行四辺形を呈する感を与える。畝の方向は、北側N-68°-W、南側N-58°-Wと10°異なり、南北二つのブロックに分離する可能性が高い。

北ブロックの畝間幅は、概ね42cm前後であるが、最小20cmから最大60cmと、幅がある。特に、西側が狭く東側が広いという形態が目立つ。長さも3mから5.8mまでがみられる。確認面からの深さは、4~8cmである。覆土は、僅かなマンガン粒・酸化鉄粒・浅間C火山灰粒を含む黒褐色粘土である。畝は、幅45cm前後であるが、直線を成さない部分が多く、最大80cmを計る。

南ブロックの畝間幅は、概ね30cm前後であるが、最小20cmから最大60cmと、幅がある。



第42図 B区9号畠跡

しかし太い畝間は2本のみであり、他は概ね30cm前後である。長さも2mから5mまでみられる。確認面からの深さは5～11cmである。畝は、幅45cm前後で安定している。

遺物は、南北両ブロック共土師器小片のみの検出であり、図示可能なものはない。

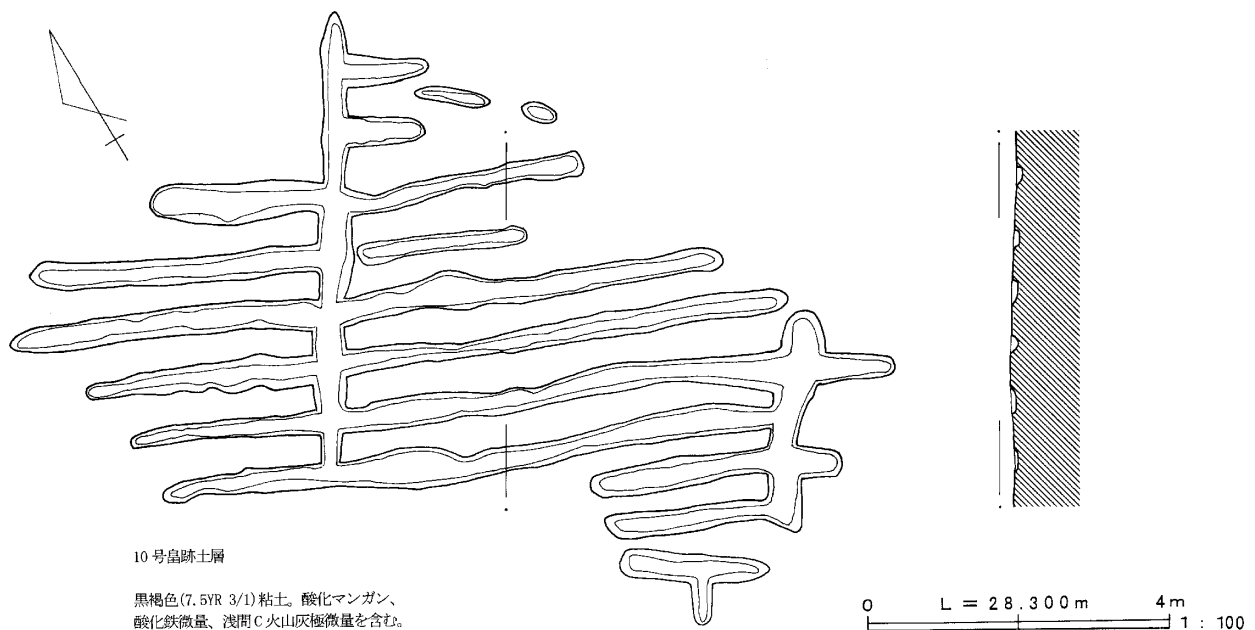
10号畝跡 U-15、16グリッドに位置している。第2確認面からの検出である。全体では南北7.5m、東西約11.8mの範囲に及ぶ。畝間と畝尻を囲うと、全体では平行四辺形を呈する。

畝の方向は、北側N-65°-Wである。畝間幅は、概ね35cm前後であるが、最小25cmから最大50cmと、幅がある。しかし太い部分は一部であって、大部分は35cm前後である。長さは、中央部が9.5m前後であるが、南北両端に移行するに従って短くなる。最短は、1.2mほどである。

確認面からの深さは、4～11cmである。覆土は、9号畝跡と同様、僅かなマンガン粒・酸化鉄粒・浅間C火山灰粒を含む黒褐色粘土である。

畝は、30～40cm前後であるが、南北両端ではその前後で増減する。

遺物は、表面の磨滅した土師器小片のみの検出であり、図示可能なものはない。



第43図 B区10号畝跡

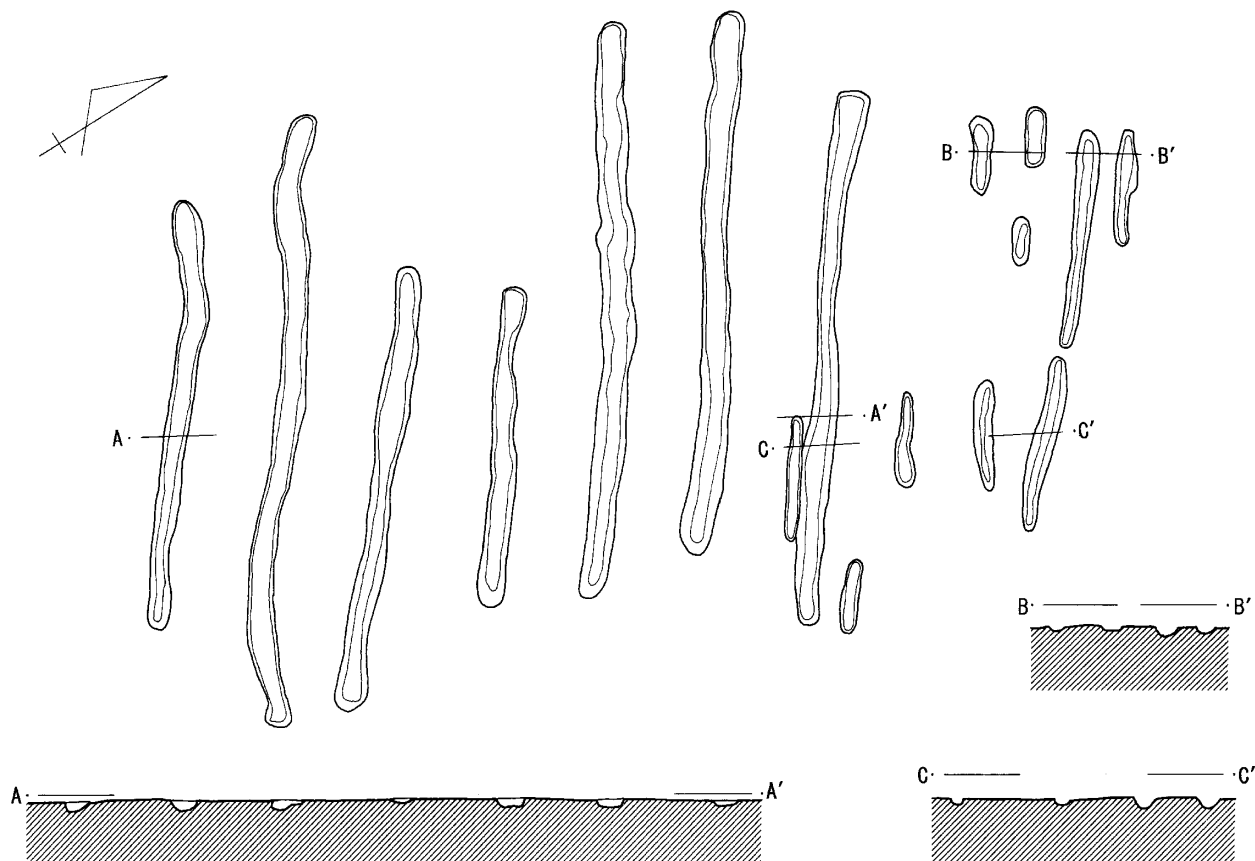
11号畝跡 U-15、16、V-15、16、W-15、16グリッドに位置している。第2確認面からの検出である。全体では南北12.6m、東西約9mの範囲に及ぶ。北側の畝の短いブロックと、南側の畝の長いブロックに分離する可能性が高い。畝の方向は、北側N-57°-Wを示す。

北ブロックの畝間幅は、大半が概ね30cm前後であるが、最小20cmを計る部分もある。長さは、1mから3mまでである。確認面からの深さは、6～16cmである。畝は、45cm前後であるが、それより狭くなる部分もある。

南ブロックの畝間幅は、概ね40cm前後であるが、最小30cmから最大50cmと、幅がある。しかし太い部分は一部であって、大部分は40cm前後である。長さは、4.3mから8.2mまで

である。確認面からの深さは、6～11cmである。覆土は、共に、多量のマンガン粒を含む黄色シルトである。畝幅は、1 m前後である。

遺物は、表面の磨滅した土師器小片のみの検出であり、図示可能なものはない



11号畝跡土層

黄色(5Y 7/6)シルト。マンガン粒を多量含む。

0 L = 28.400 m 4m 1 : 100

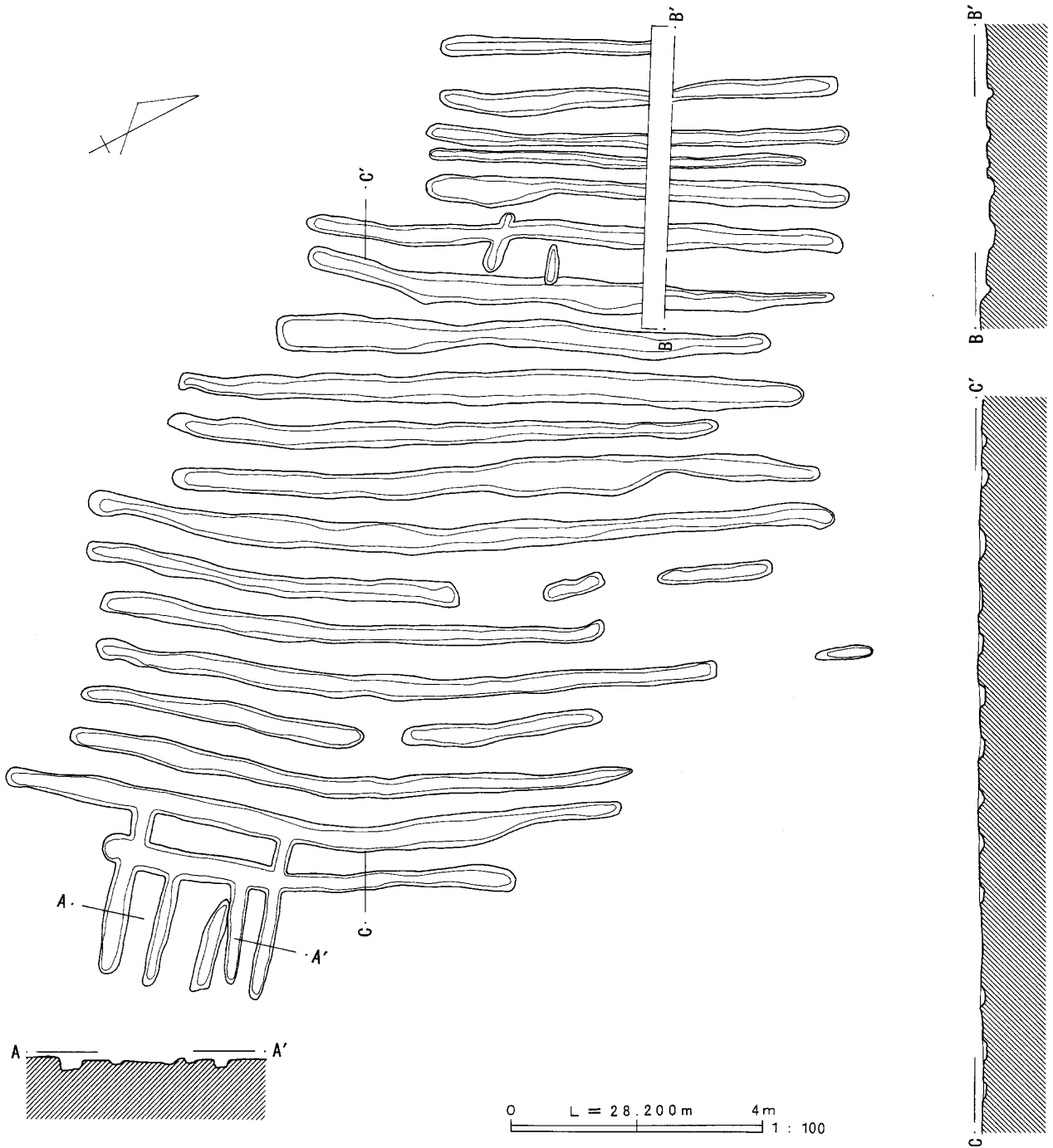
第44図 B区11号畝跡

12号畝跡 U-16、V-15、16、W-15、16グリッドに位置している。第2確認面からの検出である。(第45図) 全体では南北13.5m、東西約15.3mの範囲に及ぶ。

畝は、西半分は直線を呈するものの、東半分は南半が西に折れ、全体で緩いカーブを描いている。直線を呈する部分の方位は、N-26°-Eである。

直線を呈する畝間のうち西半分は、幅が細く概ね30cm前後であり、長さも6.5m前後である。確認面からの深さは、4～13cmを計る。また、直線を呈する畝間のうち東半分は、幅が太く概ね45cm前後であり、長さも10m前後となる。確認面からの深さは、5～16cmを計る。畝幅は、ほぼ同じで、40cm前後である。

カーブを描く畝間は、幅35cm前後で安定している。長さは、中断しているものも含めて、10～12mと、総じて長い。確認面からの深さは、10cm前後である。覆土は、マンガン粒を



第45図 B区12号畝跡

含む黄褐色シルトである。畝も安定しており、幅45cm前後である。

東端には、方位をN-55°-Wとする、畝の短いグループがみられる。畝間幅は、25~30cm前後であり、長さは1.5~2.7mである。確認面からの深さは、8~22cmを計る。畝幅は45cmを基本としている。11号畝跡北グループと同一グループを構成すると思われるが、覆土が11号畝跡より褐色味が強く、12号畝跡と共通するため、ここに掲げたものである。

遺物は、磨滅した土師器小片が僅かに検出されたのみであり、図示可能なものはない。

7 溝 跡

B区における溝跡は、東半分の大半を占め南北流する河川跡の埋没後に掘られたものがほとんどである。平成12年度調査で24条、今回の調査で9条、都合33条が検出されている(第8図、第46図)。

25号溝跡 V-15、W-15、16、X-16グリッドに亘って位置している。第1確認面からの検出である。22号住居跡、38号住居跡の上面にあって、32号溝跡に切断されている。

総延長23.45m、幅は25～30cmで推移する。走行方位はN-30°-Eを示す。断面はほぼ矩形を呈し、確認面からの深さは、7cm前後である。覆土は、黒褐色粘土が主体であり、一部褐灰色粘土が堆積している。

遺物は、磨滅した土師器小片が僅かに検出されたのみであり、図示可能なものはない。

26号溝跡 Y-16、17、Z-17、AA-17グリッドに亘って位置している。南端は、道路下未調査区に及んでいる。第1確認面からの検出である。2号方形周溝墓、3号方形周溝墓の上面にあって、32号溝跡に切断されている。

検出された部分の総延長24.25m、幅は35cm前後で推移する。走行方位は、やや西に張り出して湾曲するものの、N-22°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、確認面からの深さは、15cm前後である。覆土は、多量の酸化鉄と、少量の暗赤褐色粘土ブロックを含む灰色粘土(シルト質)である。

遺物は、磨滅した土師器小片が僅かに検出されたのみであり、図示可能なものはない。

27号溝跡 Y-17グリッド、1号方形周溝墓の上面に位置している。第1確認面からの検出である。長さ2.30m、幅28～30cmと、小さな溝跡である。走行方位はN-30°-Eを示す。断面は南東側が深いV字形を呈する。確認面からの深さは、6cm前後である。

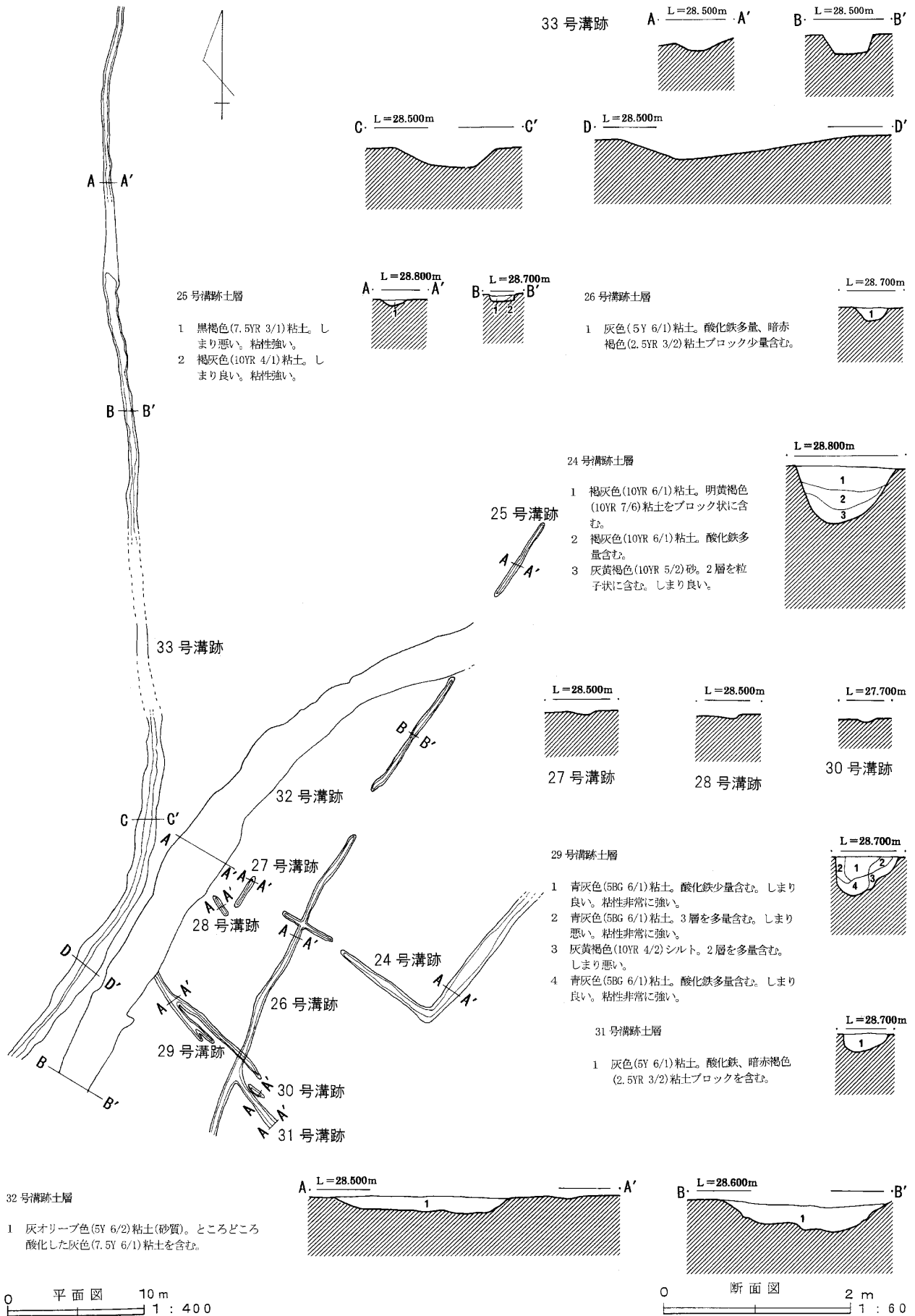
覆土は、酸化鉄粒を含む灰色シルトである。遺物は、検出されていない。

28号溝跡 Y-17グリッド、1号方形周溝墓の上面に位置している。第1確認面からの検出である。長さ1.80m、幅30cm前後と、小さな溝跡である。走行方位はN-35°-Wを示す。断面は、北東側が深いV字形を呈し、確認面からの深さは、7cm前後である。

覆土は、僅かに酸化鉄粒を含む灰褐色シルトであり、27号溝跡と共通する。遺物は、検出されていない。

29号溝跡 Z-17、18グリッド、2号方形周溝墓及び3号方形周溝墓の上面に位置している。第1確認面からの検出である。32号溝に切断されている。北東溝と南西溝が合体して一本の溝跡となっている。

北東溝は、合流点までの長さ8.95m、幅40cm前後であり、走行方位はN-47°-Wを示す。



第46図 B区溝跡

断面は、南西側が深い緩いV字形を呈し、確認面からの深さは、25～30cm前後である。覆土は、僅かに酸化鉄粒を含む青灰色粘土である。

南西溝は、32号溝跡に切断された部分までの長さ6.60m、幅50cm前後であり、走行方位はN-35°-Wを示す。断面はU字形を呈し、確認面からの深さは、40cm前後である。南東端では、幅が1/2となって、二股に分岐している。覆土は、僅かに酸化鉄粒を含む青灰色粘土及び灰黄褐色シルトである。遺物は、検出されていない。

北東溝が上位に位置するが、両者の覆土が混在する部分もみられたため、同一溝跡として扱ったものである。

30号溝跡 AA-17グリッドに位置する。3号方形周溝墓の方台部北端の一部を切断している。

第2確認面からの検出であるが、覆土に浅間A軽石粒を含んでおり、近世以降のものと思われる。長さ1.2m、幅20cm前後であり、走行方位はN-54°-Wを示す。断面は緩いU字形を呈し、確認面からの深さは5cm前後である。

遺物は、検出されていない。

31号溝跡 Z-17、AA-17グリッドに位置する。第1確認面からの検出である。3号方形周溝墓の上面にある。西端で26号溝跡に接続している。また東端は、道路下未調査区に及んでいる。

検出された部分の総延長4.5m、幅は45～50cm前後で推移する。走行方位は、N-37°-Wを示す。断面は、南西側が深くなる傾向がみられるが、概ね逆台形を呈し、確認面からの深さは、20cm前後である。覆土は、多量の酸化鉄と、少量の暗赤褐色粘土ブロックを含む灰色粘土（シルト質）であり、26号溝跡と共通している。

遺物は、検出されていない。

32号溝跡 Z-18、Y-17、18、X-16、17、W-15、16グリッドに位置する。さらに北東部は、W-14グリッドから河川跡の上面を構成することになる。南西部は、道路下未調査区に及んでいる。3号方形周溝墓、2号方形周溝墓、1号方形周溝墓の上位にあり、38号住居跡、22号住居跡の上位一部を削平している。また、54号土坑には削平されている。

検出された部分の総延長49m、幅は45～50cm前後で推移する。北西に大きく脹らんでいるが、全体の走行方位は、概ねN-45°-Eを示す。断面は、緩いU字形を呈し、下端のラインが確定できない。確認面からの深さは、18～26cm前後を計る。

覆土は、酸化した灰色粘土を含む灰オリーブ粘土（砂分が多い）であり、底面は強烈に酸化した部分が多い。

遺物は、磨滅した土師器小片が僅かに検出されたのみであり、図示可能なものはない。

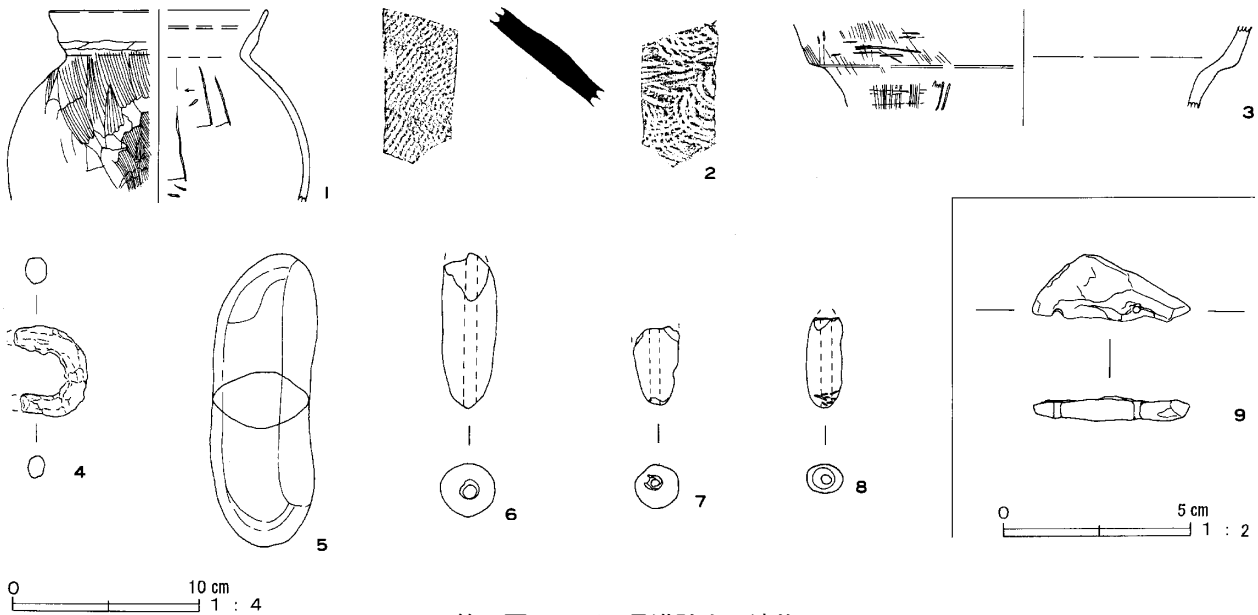
33号溝跡 S～Z-18、Z-19グリッド、B区からC区に亘って位置する。南端は、道路下未調査区に及んでいる。B区内では、2号方形周溝墓の上位にあり、55号土坑に削平されている。C区内では、8号畠跡、12号畠跡の上位にある。

南西部分ではN-34°-E方向に直線的に走行し、Y-18グリッドで北に大きく方向変換する。方向を換え北に伸びる部分の走行方位は、N-5°-Wを示す。またS-18グリッドに至って方向を僅かに北東方向(N-10°-E)に転ずる。これら検出された部分の総延長は、81mを計る。

幅は、上位から検出された南半分(B区)では2m、下位のみを検出であった北半分(C区)では55~60cm前後で推移する。断面は、総体的には緩いU字形を呈すが、場所により、最深部がどちらかの壁寄りであったり、矩形を呈する部分もある。確認面からの深さは、10~25cm前後を計る。

覆土は、少量の炭化物及び、にぶい黄褐色シルトブロックを含む褐色シルトであり、底面には酸化した部分がみられる。

遺物は、土師器台付甕(第47図-1)、同壺(同一-3)、須恵器甕(同一-2)、土錘(同一-6、7、8)の他、ビーンズ状を呈する鉄製品(同一-4)、砥石(同一-5)、円孔が2ヶ所穿けられた滑石製模造品(同一-9)等が出土している。しかし、大部分が断片で覆土中からの検出であり、唯一底面から検出された鉄製品以外、本溝に直接伴う可能性は低い。



第47図 B区33号溝跡出土遺物

第12表 B区33号溝跡出土遺物観察表 (第47図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	(11.8)	—	—	⑥④①③	②	明赤褐	上半1/5	内面吸炭、炭化物付着。二次加熱。
2	須恵器・甕	—	—	—	①③	②	灰	一部のみ	
3	土師器・壺	—	—	—	①⑥②④	②	明赤褐	頸部一部のみ	全面吸炭。内面タール状付着物。
4	鉄器	上 0.9×1.1 下 1.2×1.4 (断面は全面長円形)						1/2	形態はビーンズ状を呈すると思われる。
5	砥石	長さ 15.4 最大幅 5.4 厚さ 2.9						完形	
6	土錘	長さ — 最大径 2.9 孔径 0.7						一部欠	
7	土錘	長さ — 最大径 2.3 孔径 0.5						一部欠	
8	土錘	長さ — 最大径 2.0 孔径 0.6						一部欠	
9	滑石製・模造品	厚さ 0.4~0.6						—	円孔2個。

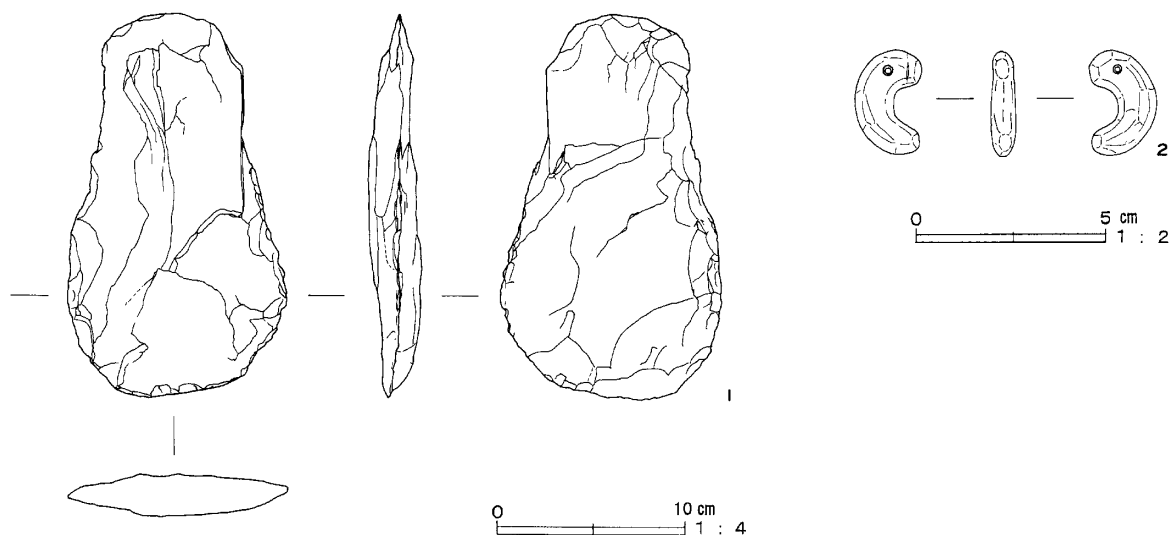
8 遺構外出土遺物

遺構を伴わない遺物が2点検出されている。

1点は、U-16グリッドにおいて、炭化物粒・マンガン粒を含む暗赤灰色粘土層中から検出された打製石斧（第48図-1）である。出土レベルは、L=27.400mである。

本包含層は、含まれている炭化物粒・マンガン粒の状況や、粘土層の色相、シルト化の状況から、平成11年度調査（第2次調査）において、D・E区AM-14、15グリッドで骨片とともに検出された、弥生時代中期の土器を包含している層（第XV層）と同一であると判断される。

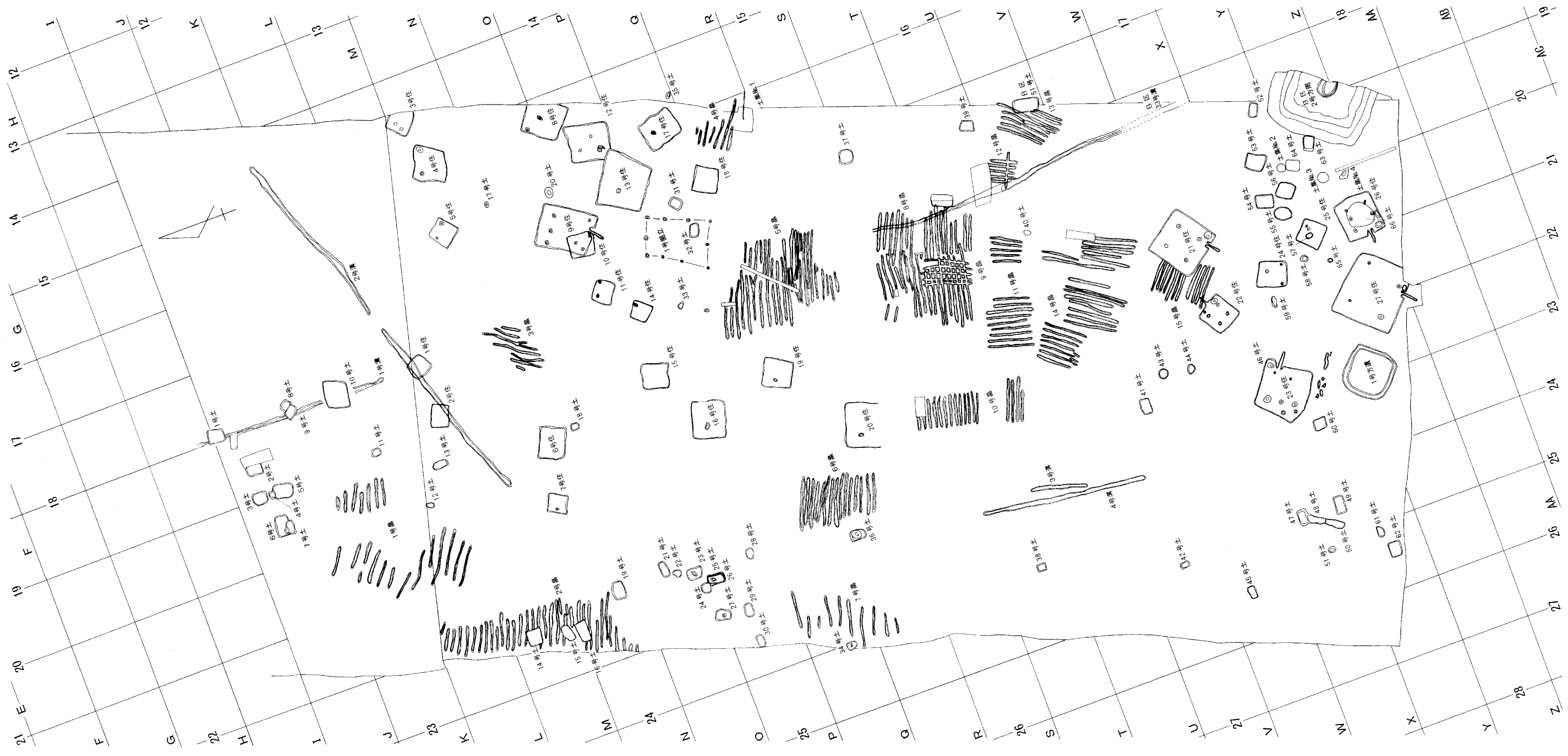
いま1点は、AC-12グリッド南端道路部分の斜面上から表採された滑石製の勾玉（同一-2）である。両面から穿孔されており、完形品である。



第48図 B区遺構外出土遺物

第13表 B区遺構外出土遺物観察表（第48図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	打製石斧	長さ 20.8	柄部幅 7.4	柄部厚さ 1.8				完形	
			刃部幅 11.6	刃部厚さ 2.1					
2	滑石製・勾玉	長さ 2.8	幅 1.1	厚さ 0.5~0.7				完形	両面穿孔。



第49图 C区遺構配置图

V C区の遺構と遺物

C区は、全調査区の北西部にあって、範囲は南北226m、東西78mに及ぶ。グリッド範囲は、南北B～Zグリッド、東西12～26グリッドである。

このうち平成13年度調査分は、南北K～Zグリッド、東西14～26グリッド範囲である。また、南北IラインからM-14グリッドとK-22グリッドを結んだ範囲、東西13～23の範囲は、第1確認面の調査分が加えられた。この部分の第2確認面及びIラインより北の部分については、平成14年度調査分である。

C区では、平成13年度調査分において、住居跡27軒、掘立柱建物跡一棟、土坑66基、溝跡4条、畠跡15ヶ所、方形周溝遺構1基、土器集中地点4ヶ所等の遺構が検出されている。なお、隣接するB区にかかる遺構も多く、それらの所属については、以下のとおり区分した。

U-17グリッドに位置する土坑(B区51号土坑)、S～W-18グリッドに位置する溝跡(B区33号溝跡)、南端に位置する方形周溝墓(B区2号方形周溝墓)は、主体がB区にあるため、B区所在遺構となっている。

逆に、Q、R-16、17グリッドに位置する土器集中地点、U、V-17、18グリッドに位置する畠跡については、主体がC区にあるため、それぞれをC区1号土器集中地点、C区13号畠跡とした。また、P-15グリッドに位置する土坑については、平面的にはB区の範囲であるが、C区から連続する斜面上に検出されたため、C区35号土坑とした。

1 住居跡

C区において、平成13年度に検出された住居跡は、27軒である。第1確認面では検出されておらず、全て第2確認面の検出である。古墳時代前期及び後期に属するもののみであり、奈良・平安時代に属する例は検出されていない。

分布には粗密がみられ、Rラインより北、22ラインより東の範囲と、Vラインより南で19から23ラインの範囲の2ブロックに分離して所在し、他の区域には検出されていない状況である。北ブロックでは、総数20軒が検出されており、9号住居跡が唯一軒古墳時代後期に属する他は、19軒全てが古墳時代前期に属している。このうち住居跡同士の重複は、分布がやや密であるN～Qライン、19ラインから東の部分でみられ、共に前期に属する12号と13号、前期の10号と後期の9号の2ヶ所で重複している。しかしながら、全体の分布は密ではない。

南ブロックでは、総数7軒が検出されているが、2軒が古墳時代前期、5軒が古墳時代後期に属している。分布状況は北ブロックのやや密な地域と同様であるが、こちらでは、住居跡同士の重複はみられない。

このように、C区においても、B区から引き続いて、北に古墳時代前期の住居跡、南に

古墳時代後期の住居跡が分布している。また、河川跡に削平された部分以外では、方形周溝墓との重複はみられず、一定の間隔を持っている点もB区と共通する特徴である。

1号住居跡 L-17、18グリッドに位置する。第(第50図) 2確認面の検出である。上面に2号溝跡(第51図) 跡が位置している。

規模は、北東辺2.60m、南東辺2.72m、南西辺2.98m、北西辺2.74mを計る。

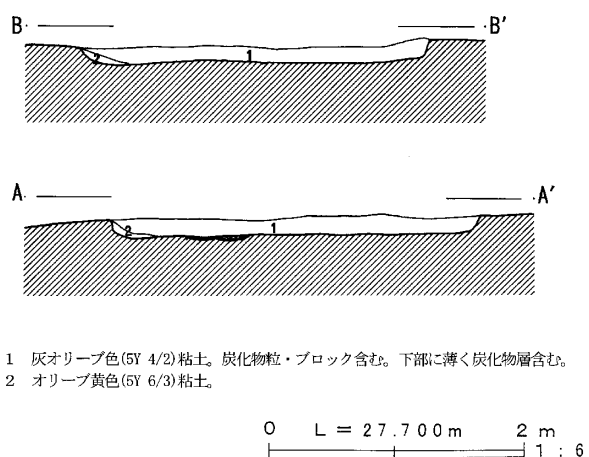
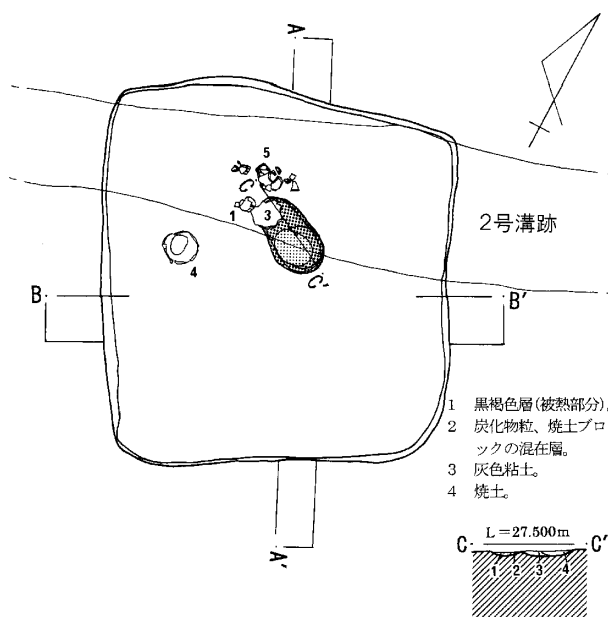
西隅がやや突き出しており、不整形であるといわざるを得ないが、形態は、正方形を主体としたものである。

主軸方位は、N-29°-Wを示す。壁は、下端がやや丸みをもつものの、ほぼ垂直であり、掘り込み確認面からの深さは、15cm前後である。

床面は、多少凹凸がみられるものの安定し、中央部(炉の南部)は硬く締まっている。ピットは、検出されていない。炉は、竪穴中央やや北西寄りに設けられている。

規模は68×40cmで、北西から南東に長軸を持つ楕円形を呈し、厚さ4cm程が焼土化している。また、南東部には灰が集中して堆積している。

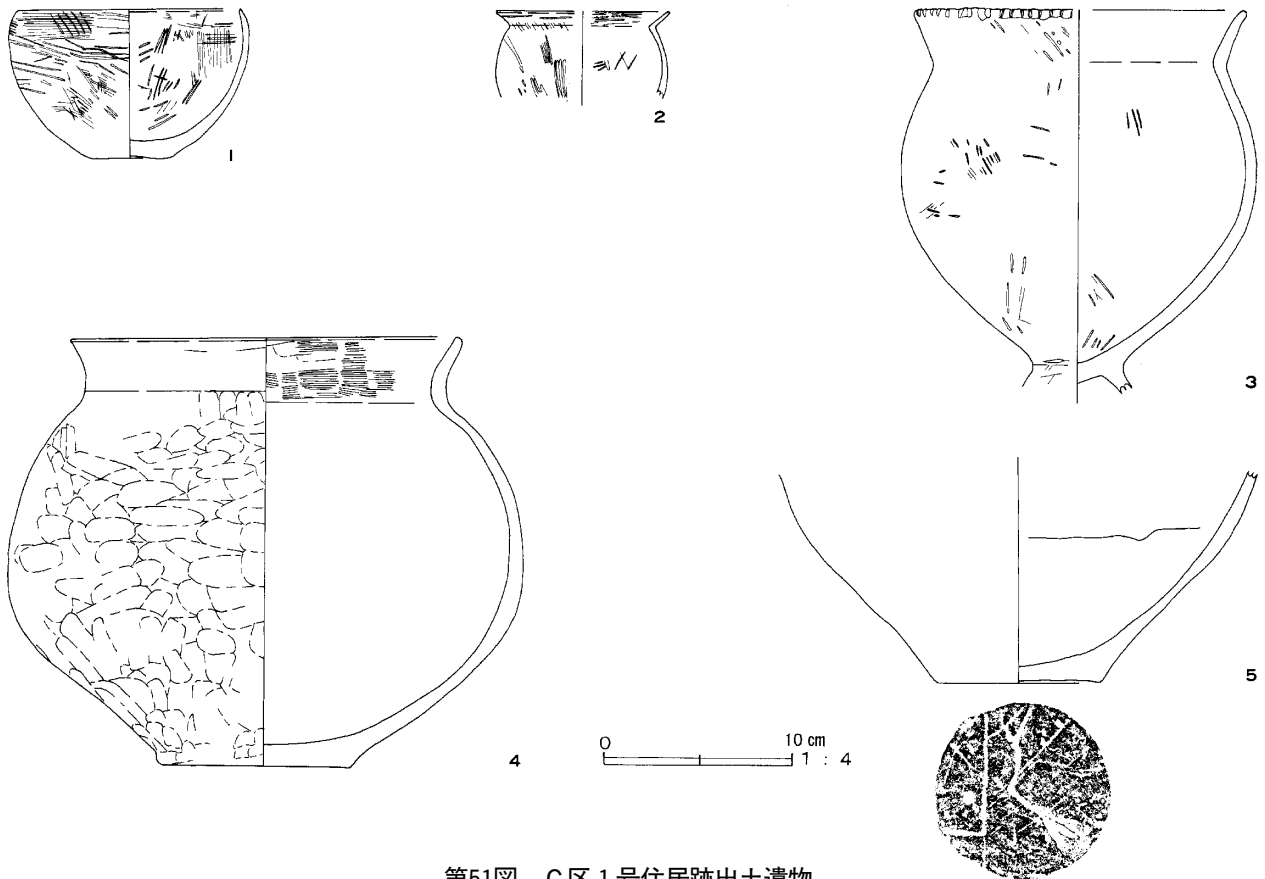
覆土は、大部分が炭化物粒・ブロックを含む灰オリーブ色粘土であり、下部に薄く炭化物層が含まれている。また、壁際及び床面上の一部には、オリーブ黄色粘土が堆積している部分もある。



第50図 C区1号住居跡

第14表 C区1号住居跡出土遺物観察表 (第51図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・椀	(11.7)	7.8	4.3	①②④⑥	②	橙	3/4	外面1/2半還元。
2	土師器・盃	(9.0)	—	—	①⑥②	②	にぶい橙	上位1/4	内外面吸炭。
3	土師器・台付甕	(17.3)	—	—	①④⑥	③	黒	上位2/3	外面全面にナデが加えられる。上位全面煤、内面下位炭化物付着。二次加熱。
4	土師器・甕	10.7	23.0	10.1	①③⑥④②	②	赤褐	3/4	内面下位炭化物、外面下位煤付着。二次加熱。
5	土師器・甕	—	—	9.2	⑥②④	②	橙	底部・胴下半部1/4	内面炭化物、外面一部煤付着。二次加熱。



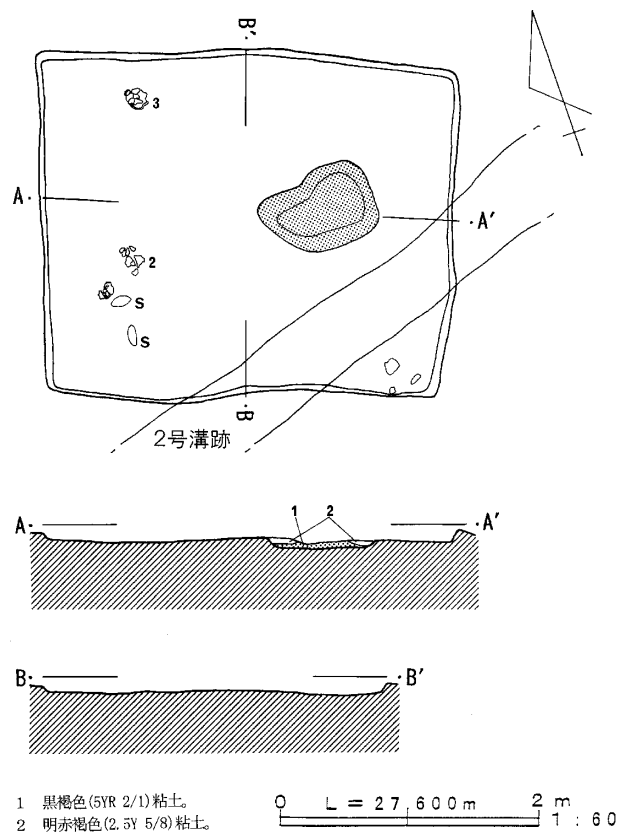
第51図 C区1号住居跡出土遺物

遺物は、炉北西側(一部炉内)、から中央南西壁寄りにかけて集中出土している。

全て土師器であり、椀(第51図一1)、盥(同一2)、台付甕(同一3)、甕(同一4、5)等が検出されている。椀は、外面の1/2が半還元化しており、甕類はいずれも、強い二次加熱を受けている。

2号住居跡 L-18グリッドに位置する。第2(第52図)確認面の検出である。上面に2号溝跡(第53図)跡が位置している。

規模は、北東辺3.12m、南東辺2.70m、南西辺3.34m、北西辺2.58mを計り、南東辺、南西辺にやや凹凸はみられるものの、長方形を呈するといえる。主軸方位は、N-112°-E



第52図 C区2号住居跡

を示す。

壁は、やや緩い傾斜をもち、掘り込み確認面からの深さは、10cm前後である。

床面は、多少凹凸がみられるものの安定し、中央部には硬く締まっている部分もある。

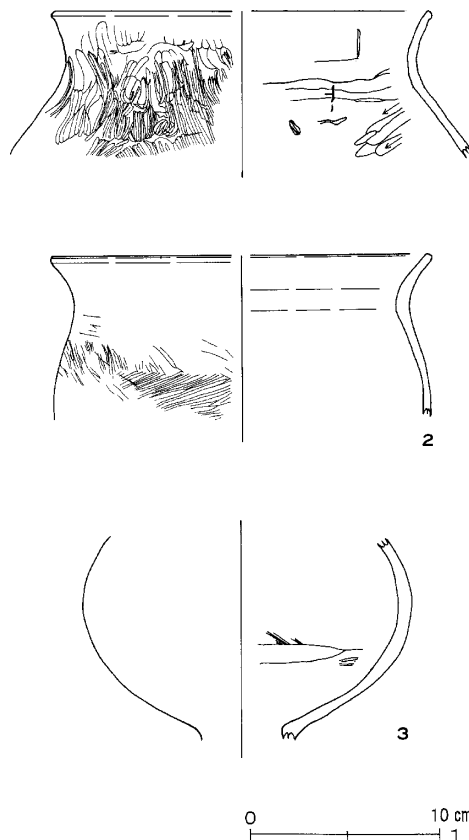
ピットは、検出されていない。

炉は、竪穴中央東寄りに設けられている。東西方向に長く、90×62cmの規模をもつ。約6cmの厚さで焼土化している。

覆土は、大部分が炭化物粒を含む灰オリープ色粘土（シルト質）である。

遺物は、床面上北西壁寄りに、土師器台付甕及び長円形の編み物石が検出されている。

土師器台付甕（第53図—1、2、3）は、いずれも一部分であり、全体が知れるものはない。また、全て二次加熱を受けている。



第53図 C区2号住居跡出土遺物

第15表 C区2号住居跡出土遺物観察表（第53図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	(19.1)	—	—	①③⑥④②	②	にぶい橙	口縁部 1/4	内面吸炭、外面煤付着。二次加熱。
2	土師器・台付甕	(19.8)	—	—	③①④②⑥	②	橙	口縁部 1/4	外面吸炭。二次加熱。
3	土師器・台付甕	—	—	—	①③⑥②	②	橙	胴部下位 1/2	胎土は細粒。内面下半に炭化物付着。二次加熱。

3号住居跡 L-14、M-14グリッドに位置している。南東部は、B区の未調査区に及んでいる。第(第54図) 2確認面の検出である。

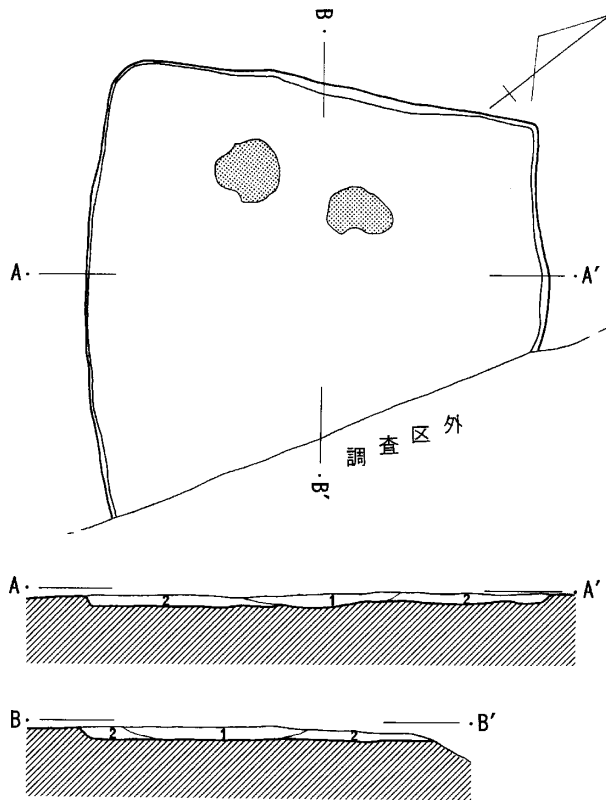
(第55図) 辺長は、北西辺が3.40mであることが知れるのみであるが、南西辺の現長が3.70mであり、さらに東南方向に延伸するところから、北西辺を短辺とする長方形を呈しているものと思われる。主軸方位は、N-52°-Wを示す。

壁は、やや緩い傾斜をもち、掘り込み確認面からの深さは、10cm前後である。

床面は、多少凹凸がみられるものの安定し、中央部から南東部にかけては、硬く締まっている部分もある。ピットは、検出されていない。

炉は、北西壁寄りに2ヶ所設けられている。南西側炉は、不整ながら円形を呈し、径50cm、北東側炉は、東西方向に長く、不整ながら長円形を呈し、52×40cmの規模をもつ。いずれも約5cmの厚さで焼土化している。

覆土は、上位に炭化物を多量に含む黄褐色シルト、下位に少量の炭化物粒を含むオリ-



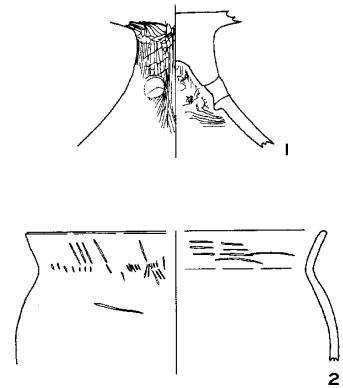
1 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化している。
2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物粒少量含む。

0 L = 27.700 m 2 m 1 : 60

第54図 C区3号住居跡

ブ褐色シルトである。

遺物は、いずれもオリーブ褐色シルト層中から、土師器高坏(第55図-1)及び台付甕(同一-2)が検出されている。



0 10 cm 1 : 4

第55図 C区3号住居跡出土遺物

第16表 C区3号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	—	③②④①	②	浅黄橙	脚部 1/5	脚部三方透し(円孔)。脚裾内面吸炭。
2	土師器・甕	(15.1)	—	—	⑥②③①	②	にぶい橙	口縁部 1/3	強烈な二次加熱により表面剥離。

4号住居跡 M-15グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

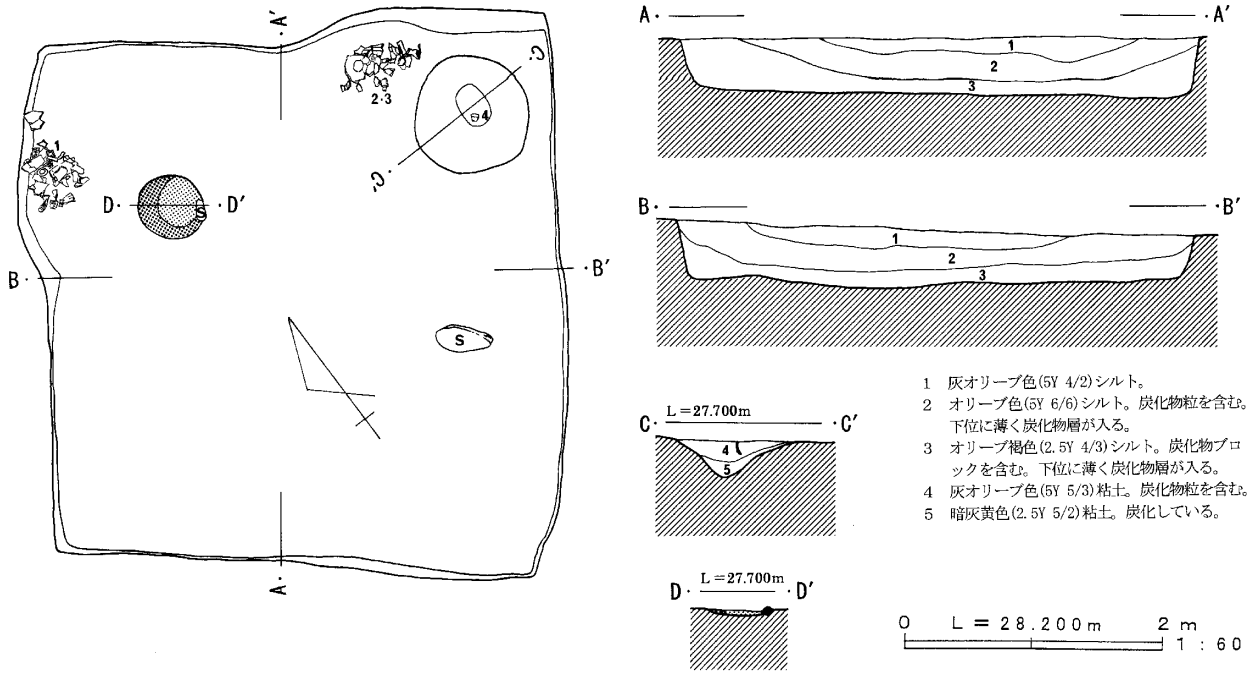
(第56図) 規模は、北東辺4.26m、南東辺4.50m、南西辺3.98m、北西辺3.96mを計る。北東辺の

(第57図) 東半、北西辺の北半分が張り出すためにやや不整形ではあるものの、正方形を基本とした形態を呈するといえる。主軸方位は、N-34°-Eを示す。

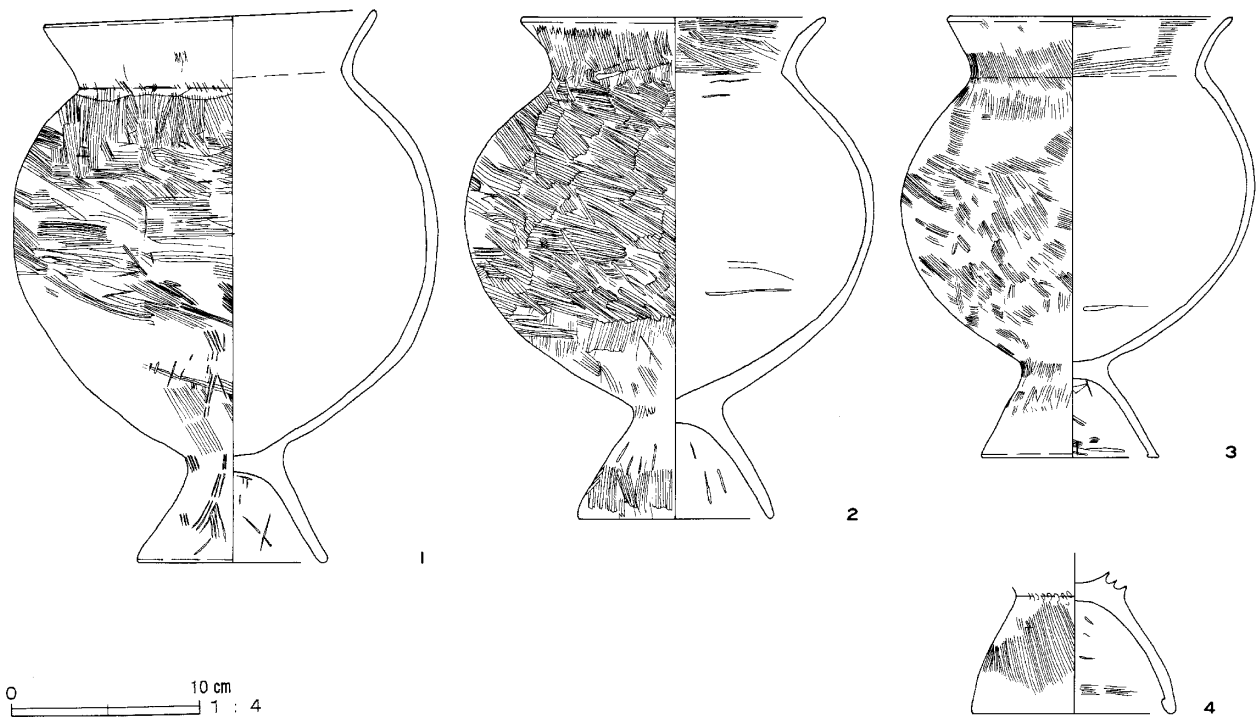
壁は、やや緩い傾斜をもち、掘込み確認面からの深さは、40cm前後である。

床面は、大きな凹凸がみられるものの安定し、硬く締まっている部分が多い。ピットは、東隅に検出されている。径95cm前後で円形を呈し、深さは30cmを計る。断面はV字形を呈し、上位に炭化物を含む灰オリーブ色粘土(第4層)、下位に炭化した位灰黄色粘土(第5層)が堆積している。貯蔵穴と思われる。

炉は、竪穴中央北隅寄りに設けられている。北西から南東方向にやや長く、55×50cmの規模をもつ。約4cmの厚さで焼土化しており、西側に炭化物が集中して堆積している。ま



第56図 C区4号住居跡



第57図 C区4号住居跡出土遺物

た、南東端には18×7cmの長円礫が埋め込まれている。

覆土は、上位が灰オリーブ色シルト(第1層)、中位が炭化物粒を含むオリーブ色シルト(第2層)、下位が炭化物ブロックを含むオリーブ褐色シルト(第3層)である。第2・第3

第17表 C区4号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	17.6	29.3	9.2	①②⑥③	②	浅黄橙	一部欠	胴部内面下半炭化物、外面煤附着。二次加熱。
2	土師器・台付甕	15.8	26.5	10.0	①②④⑥	②	にぶい橙	一部欠	胴部内面下半炭化物、外面煤附着。二次加熱。
3	土師器・台付甕	15.0	23.4	8.8	②③⑥④①	②	橙	3/4	胴部内面一部炭化物、外面煤附着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	16.0	⑥②④①	②	明赤褐	台部のみ	二次加熱。一部吸炭。

層は、いずれも下位に炭化物層を形成している。

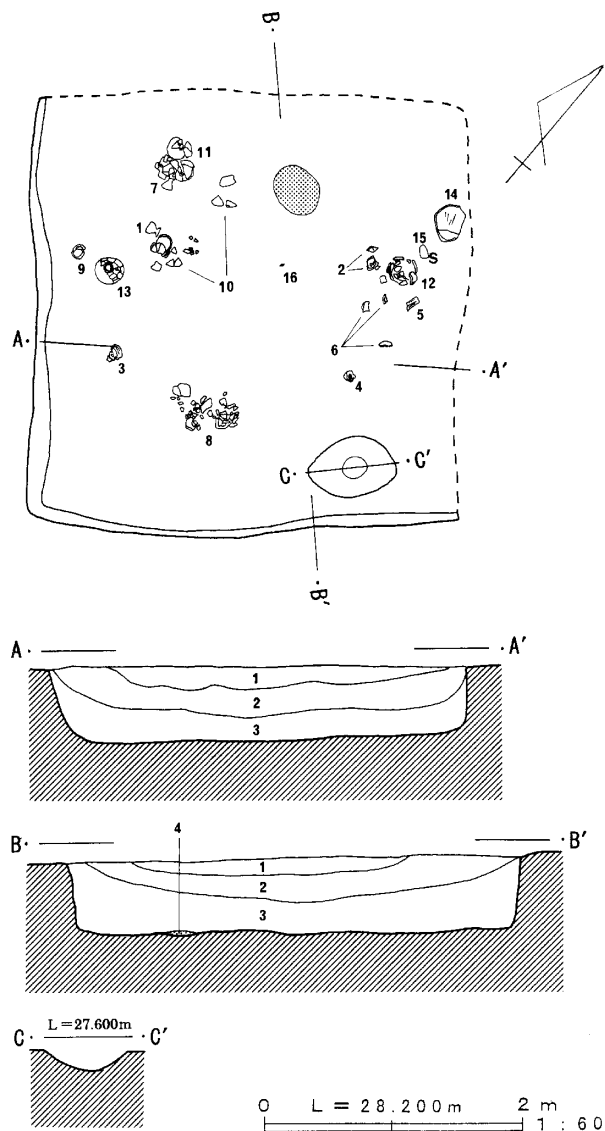
遺物は、土師器台付甕が4点検出されている。(第57図-1)は炉脇の床面上北西壁下から、(同一-2、3)はいずれも貯蔵穴脇の床面上、北東壁下から検出されている。また、貯蔵穴内からも脚台部(同一-4)が出土している。

5号住居跡 L・M-16グリッドに位置している。(第58図) 北東壁及び北西壁は、基盤層と覆土の差異が微妙であったため、発掘時に掘り過ぎてしまい、セクションベルトに残存していた土層断面による確認部分と、床面の硬度の違いから、竪穴範囲を決定したものである。

その結果、規模は、北東辺3.25m、南東辺3.42m、南西辺3.34m、北西辺3.40mを計ることが知れ、正方形を基本とした形態を呈すると思われた。主軸方位は、N-40°-Wを示す。

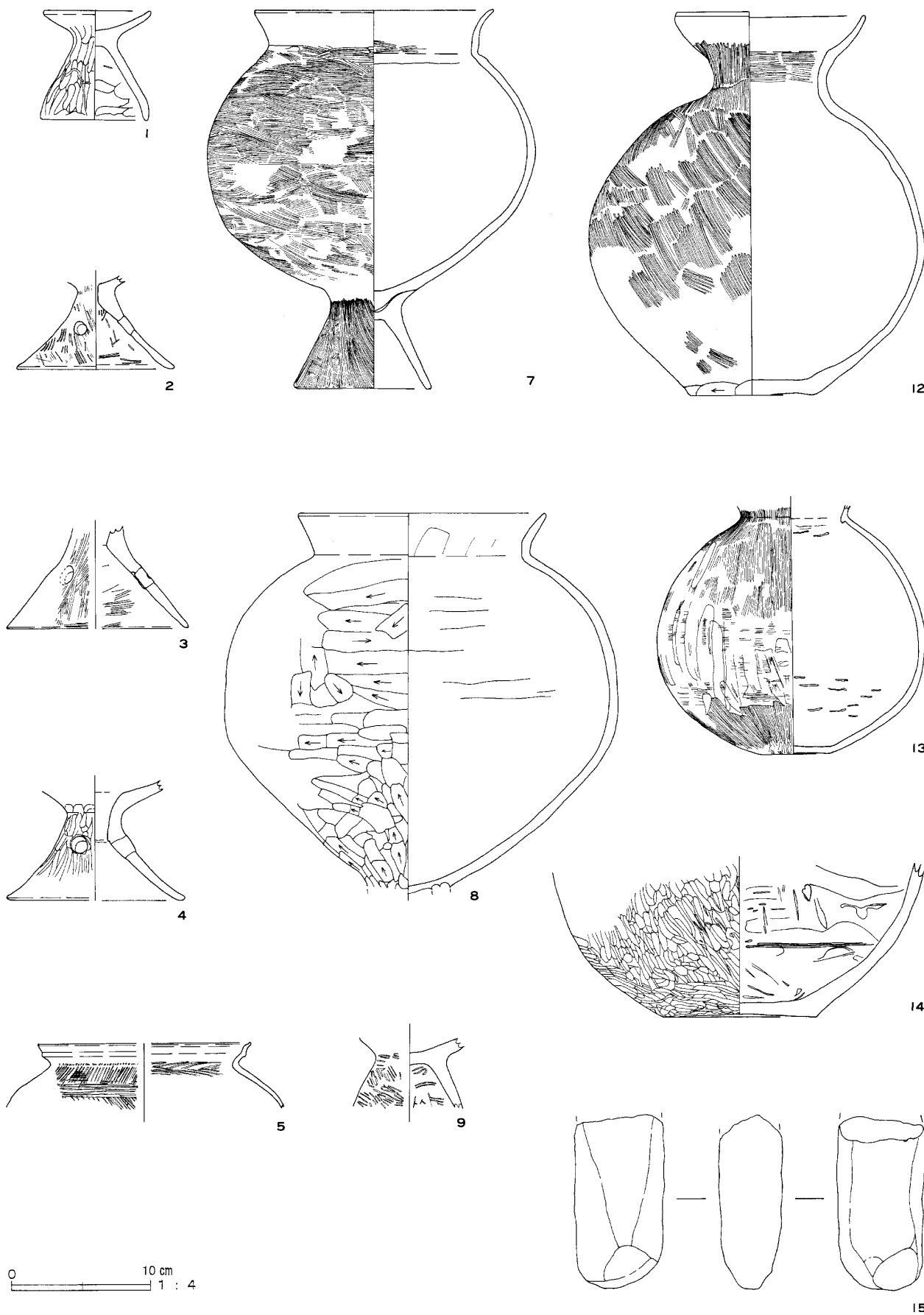
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、掘込み確認面からの深さは、60cm前後である。床面は、凹凸がほとんどみられず、硬く締まっている部分も多く、安定している。

ピットは、東隅に検出されている。上面70×45cmで円形を呈し、深さは14cmを計る。断面は緩いU字形を呈し、炭化物を含むオリブ褐色シルトが堆積している。

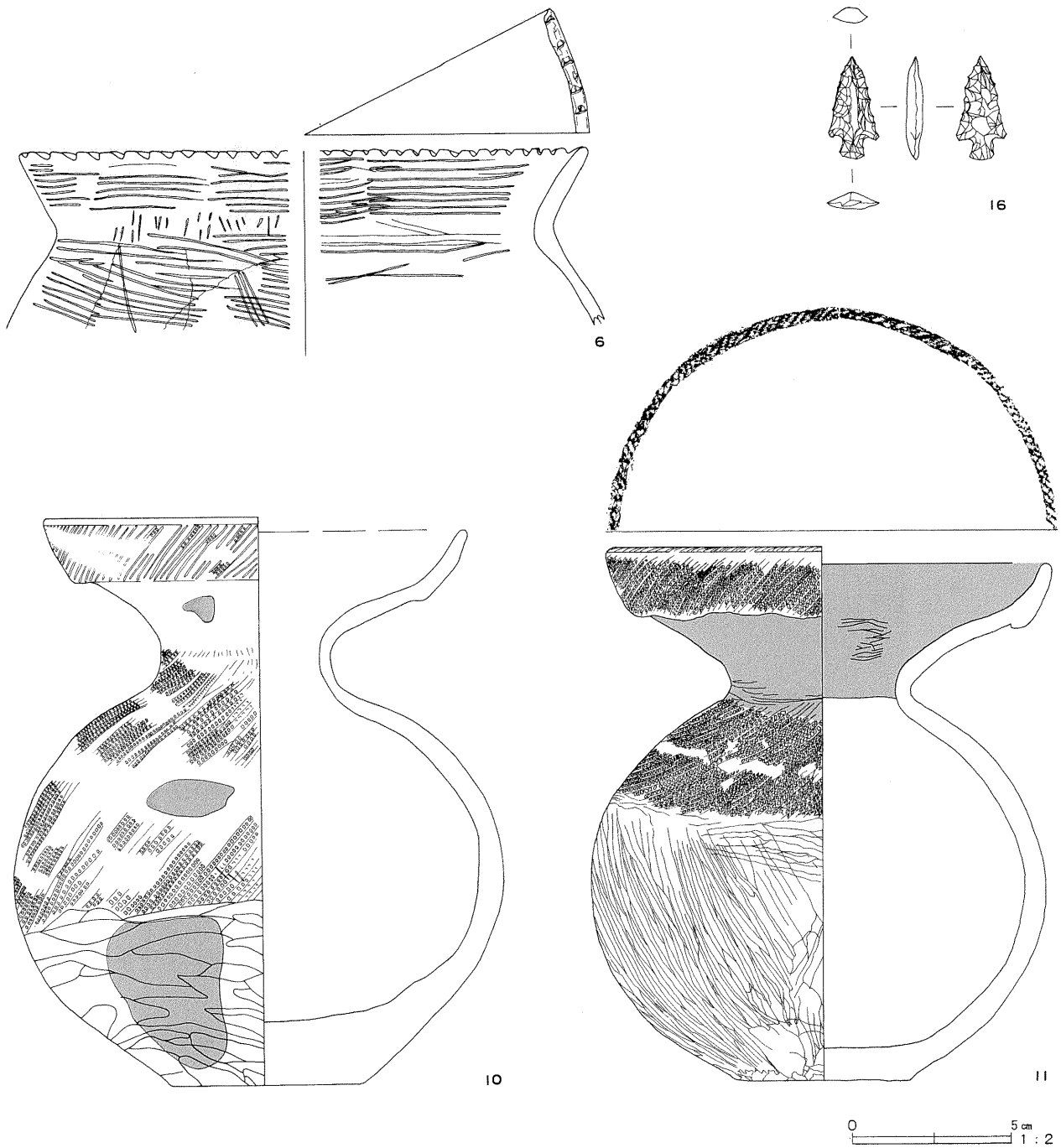


- 1 オリブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。オリブ色(5Y 5/4)粘土ブロック、炭化物粒を含む。
- 2 淡黄色(5Y 8/4)シルト。
- 3 暗褐色(10YR 3/3)シルト。炭化物ブロック含む。下位に炭化物層含む。
- 4 炉址。

第58図 C区5号住居跡



第59图 C区5号住居跡出土遺物(1)



第60図 C区5号住居跡出土遺物(2)

炉は、竪穴中央から北西壁寄りに設けられている。北西から南東方向にやや長く、40×35cmの規模をもつ。約4cmの厚さで焼土化している。覆土は、上位が炭化物粒・オリーブ色粘土ブロックを含むオリーブ褐色シルト(第1層)、中位が淡黄色シルト(第2層)、下位が炭化物ブロックを含む暗褐色シルト(第3層)である。第3層下位には炭化物層を含む。

遺物は、土師器台付甕(第59図-7) 1点がカマド南西脇の床面上から検出された以外は、いずれも第3層上面に沿って、サークル状に出土している。土器は全て土師器であり、器種には、器台(同一1、2、3、4)、甕(同一6)及び台付甕(同一5、7、8、9)、壺(第60図-10、11)(第59図-12、13、14)がみられる。これらの中心にあつて、最も低位置から検出されたのが、有茎の石鏃(第60図-16)である。

第18表 C区5号住居跡出土遺物観察表 (第59・60図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	7.7	7.8	7.7	③①②④⑥	②	橙	完形	接合部縦の円孔無し。表面磨滅した部分が多くザラつく。
2	土師器・器台	—	—	(11.0)	①④⑥②③	②	にぶい橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。内外面煤付着。
3	土師器・器台	—	—	(13.1)	②③①⑥④	②	にぶい橙	台部1/4	脚部三方透し(円孔)。全体に薄く吸炭。
4	土師器・器台	—	—	(12.2)	②①④⑥③	②	橙	脚部3/4	脚部三方透し(円孔)。受台部内面炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	(15.3)	—	—	①⑥③④	②	にぶい黄橙	口縁部1/4	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・甕	(18.0)	—	—	③①②	②	にぶい橙	口縁部1/2	口唇部刻目に一点もしくは二点の楔状の目をもつ。二次加熱。
7	土師器・台付甕	17.0	27.1	9.8	③⑥②①	②	にぶい黄橙	一部欠	表面剥離した部分多い。二次加熱。
8	土師器・台付甕	17.4	—	—	②⑥③①	②	橙	1/2・台部欠	外面の表面剥離した部分が多い。下位煤付着。二次加熱。
9	土師器・台付甕	—	—	—	①②⑥④	②	橙	脚部のみ	二次加熱。
10	土師器・壺	14.0	16.9	5.4	①②③④⑥	②	橙	ほぼ完形	外面及び口縁内面、文様帯以外朱塗。
11	土師器・壺	13.2	18.0	6.0	⑥①②③	②	浅黄橙	完形	上位表面磨滅した部分が多い。外面文様帯以外朱塗。
12	土師器・壺	13.6	27.6	8.8	④⑥②①	②	橙	4/5	脚部下位外面、口縁部内外面煤付着。
13	土師器・壺	—	—	5.0	①③④②⑥	②	橙	口縁部欠	外面下位一部煤付着。
14	土師器・壺	—	—	11.1	②①④③⑥	②	にぶい橙	下半1/2	内外面一部吸炭。
15	砥石	長さ— 幅6.3 厚さ4.4						一部欠	
16	石鏃	全体3.3 茎長さ0.7 上幅0.6 下幅0.8 刃幅1.6 刃厚さ0.5 重さ2g						完形	

6号住居跡 M-19グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第61図) 規模は、北東辺4.68m、南東辺3.90m、南西辺4.54m、北西辺3.86mを計り、北西辺に

(第62図) やや凹凸がみられるものの、ほぼ長方形を基本とした形態を呈すると思われる。

主軸方位は、N-64°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、下端は丸みをもって床面へ移行する。掘込み確認面からの深さは、65cm前後である。

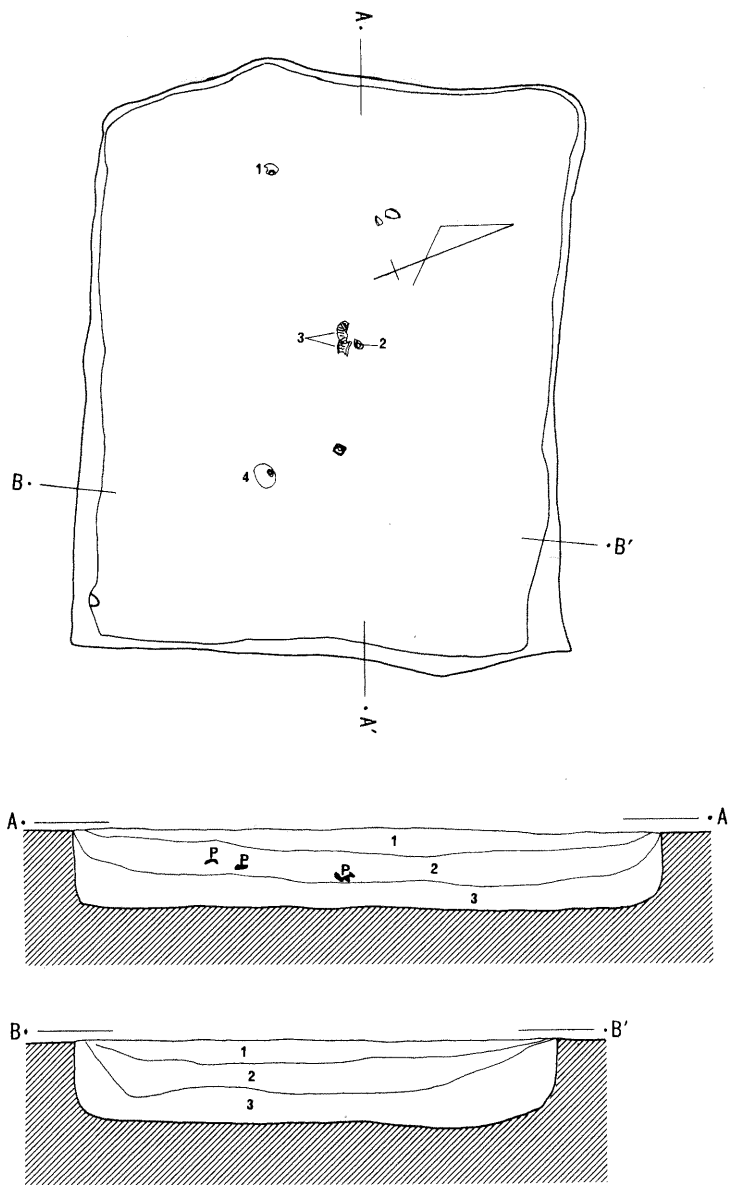
床面は、やや凹凸がみられるが、硬く締まっている部分も多く、安定している。床面上に、ピット、炉等は、検出されていない。

覆土は、上位が灰オリーブ色粘土ブロックを含むオリーブ黄色粘土(第1層)、中位がにぶい黄色粘土ブロック及び炭化物粒・ブロックを含む灰白色粘土(第2層)、下位が炭化物を含む灰オリーブ色粘土(第3層)である。第1層下位には炭化物層を含む。

遺物は全て土師器であり、全て第2層下位の出土である。器種は、椀(第62図-1)、高坏(同一-2)、台付鉢(同一-3)、壺(同一-4)等がみられる。

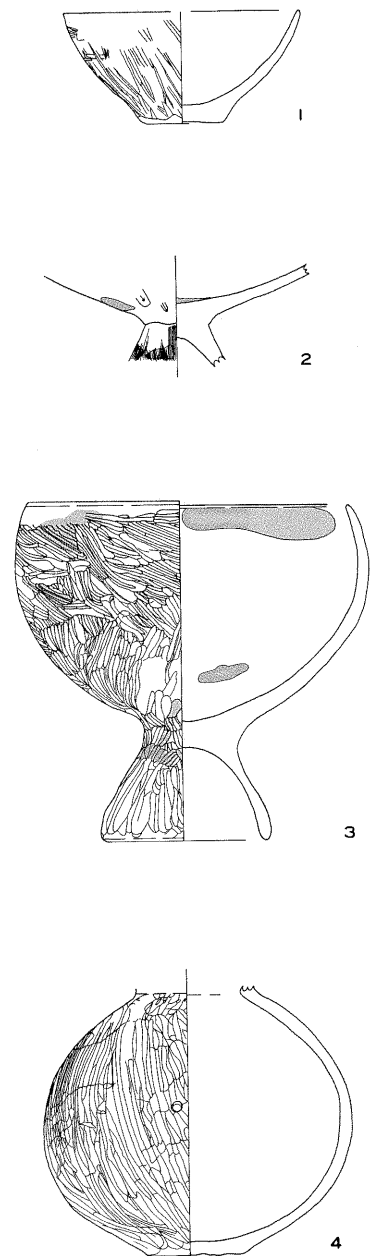
第19表 C区6号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・椀	(12.3)	5.9	4.2	①②③④	②	明赤褐	1/2	一部吸炭。
2	土師器・高坏	—	—	—	⑥①③	②	赤	1/4	表面剥離した部分が多い。一部朱塗残存。内面橙色。
3	土師器・台付鉢	16.8	18.1	7.9	②③①⑥④	②	橙	2/3	脚内面を除いて全面朱塗。
4	土師器・壺	—	—	5.0	④①②⑥	②	橙	口縁部欠	胎土中に長石多い。内面吸炭。



- 1 オリーブ黄色(5Y 6/3)粘土。灰オリーブ色粘土ブロック含む。下位が炭化している。
- 2 灰白色(7.5Y 7/1)粘土。にぶい黄色粘土ブロック、炭化物粒・ブロック含む。
- 3 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土。炭化物粒含む。

0 L = 28.100 m 2 m
1 : 60



0 10 cm
1 : 4

第61図 C区6号住居跡

第62図 C区6号住居跡出土遺物

7号住居跡

M-20グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第63図)

規模は、北東辺2.70m、南東辺2.70m、南西辺2.86m、北西辺2.96mを計り、やや不整

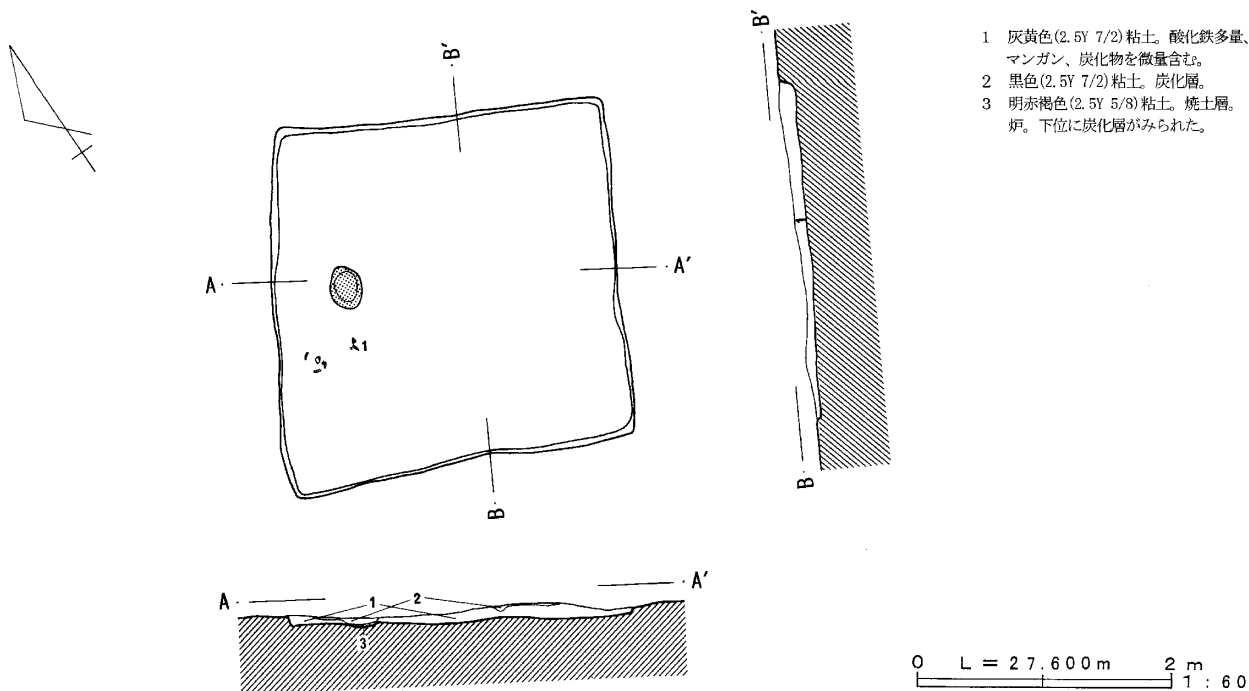
(第64図)

ではあるが、正方形を基本とした形態を呈すると思われる。

主軸方位は、N-65°-Wを示す。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。掘込み確認面からの深さは、15cm前後である。

床面は、全体に凹凸がみられ、安定しないが、炉の周囲は硬く締まっている。床面上に、ピット等は、検出されていない。

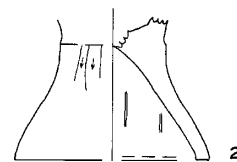
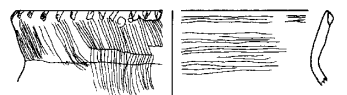


第63図 C区7号住居跡

炉は、竪穴中央と北西壁の間に設けられている。北東から南西方向にやや長く、35×25cmの規模をもつ。約7cmの厚さで焼土化している。

覆土は、多量の酸化鉄及び少量のマンガン粒・炭化物を含む灰黄色粘土（第1層）であり、上位に炭化物層（第2層）がみられる。

遺物は、土師器台付甕（第64図—1、2）が、炉脇床面上から出土している。



第64図 C区7号住居跡出土遺物

第20表 C区7号住居跡出土遺物観察表（第64図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	(16.8)	—	—	①⑥④②	②	灰褐	口縁部 1/5	煤、炭化物付着。二次加熱。
2	土師器・台付甕	—	—	(10.2)	②①⑥③④	③	赤褐	脚部 1/3	一部吸炭。二次加熱。

8号住居跡 N-15、O-15グリッドに位置し、東隅は、B調査区（未調査区）に及んでいる。第2（第65図）確認面の検出である。

北東辺・南東辺の長さは知り得ないが、南西辺5.30m、北西辺5.58mを計り、正方形を基本とした形態を呈すると思われる。主軸方位は、N-65°-Wを示す。

検出状況が悪く、壁の状態は、ほとんど知り得ない。掘込み確認面からの深さは、3cm前後である。

床面は、小さな凹凸がみられるものの比較的硬く、安定している。特に、炉の周囲は硬

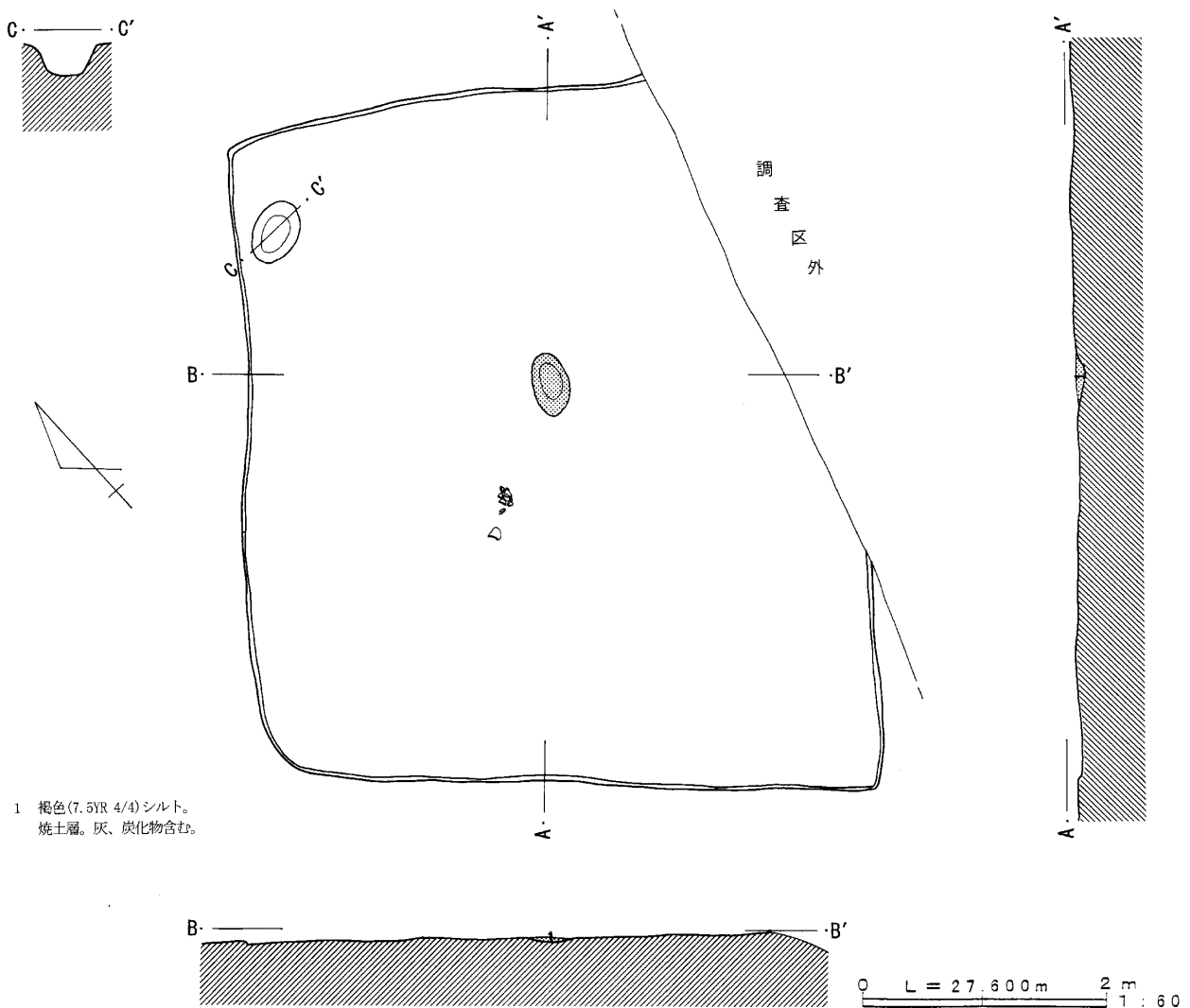
く締まっている。

炉は、中央やや北東壁寄りに設けられている。南北方向に長く、55×30cmの規模で長円形を呈する。約5cmの厚さで焼土化している。

床面上に、ピットは1ヶ所みられるのみである。北隅に位置し、東西方向に長く56×38cmの規模で、長円形を呈する。断面は概ね矩形を呈し、深さは約27cmを計る。

住居跡内及びピット内の覆土は、炭化物を含む褐色シルトである。

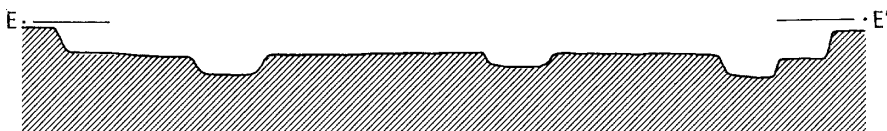
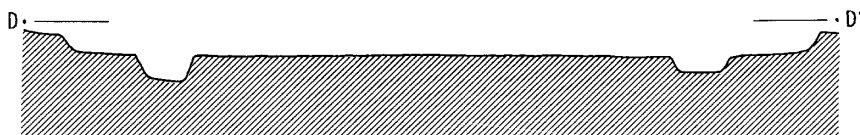
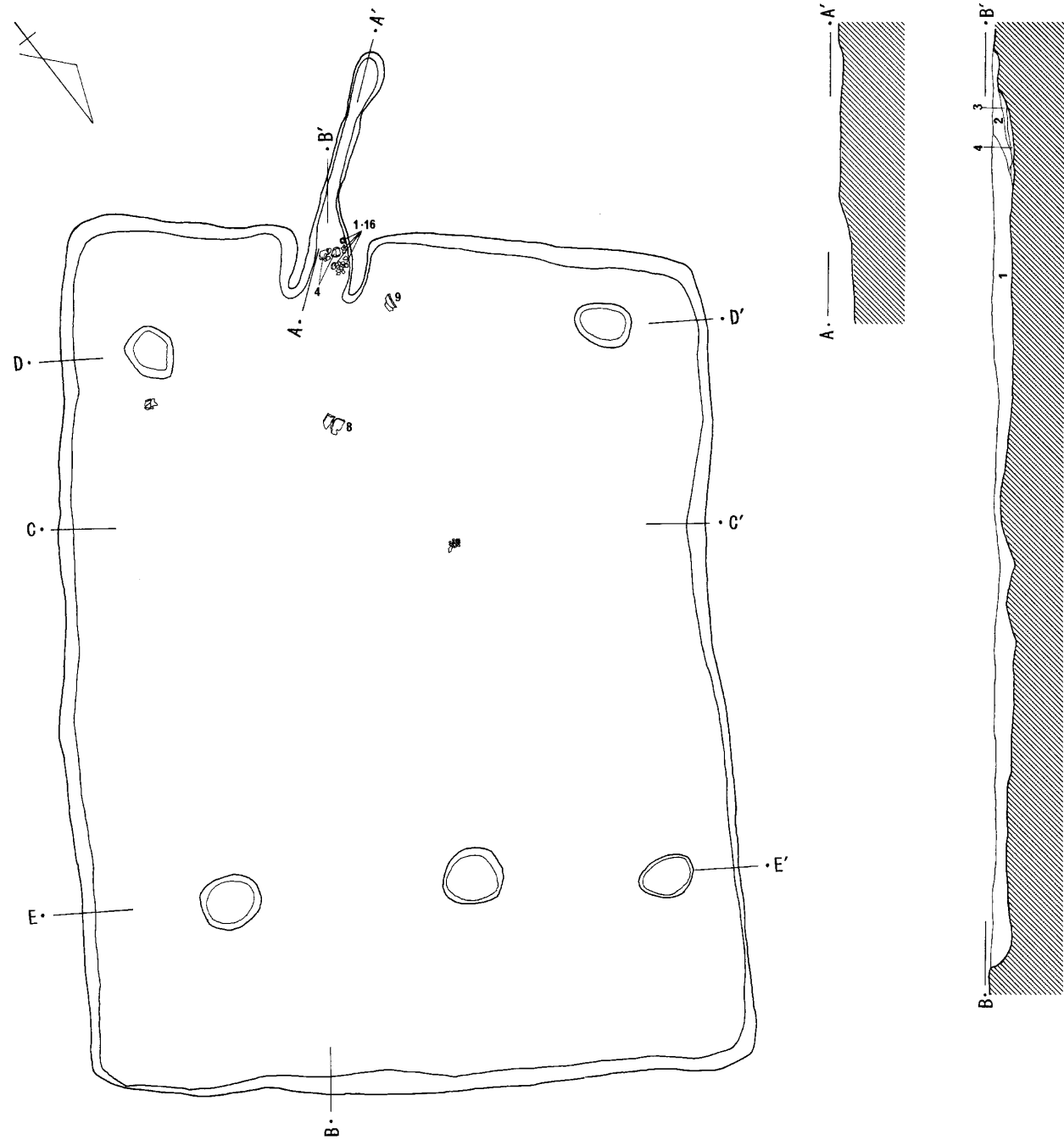
遺物は、竪穴中央・炉脇から外面に刷毛目をもつ台付甕の胴部が検出されているが、表面の剝離が激しく、図示は不可能であった。



第65図 C区8号住居跡

9号住居跡 N-16、17、O-16、17グリッドに位置する。第2確認面の検出である。西隅部では、(第66図) 10号住居跡を削平している。

(第67図) 北東辺6.24m、南東辺8.26m、南西辺6.04m、北西辺7.66mを計り、ほぼ長方形を呈する。主軸方位は、N-145°-Wである。



- 1 暗褐色(10YR 3/3)シルト。下位に炭化物層を含む。焼土粒、炭化物粒少量含む。
- 2 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。下位に焼土層を含む。焼土ブロック多量含む。
- 3 灰白色(7.5Y 7/1)灰層。焼土ブロック、炭化物ブロックを含む。
- 4 暗赤褐色(2.5YR 3/3)焼土層。燃焼部。

0 L = 28.100 m 2 m
1 : 60

第66図 C区9号住居跡

壁は、緩い傾斜をもって立ち上がり、床面へは丸みをもって移行する。確認面からの深さは、20cm前後を計る。

床面は、大きな凹凸がみられるものの、比較的硬く、安定している。

ピットは、各隅寄りに4穴、北と東の中間よりやや北ピット寄りに1穴、計5穴が確認されている。カマド左脇の南ピットは、42×52cm、深さ21cm、カマド右脇の西ピットは、42×52cm、深さ12cm、カマド対辺の北ピットは、38×52cm、深さ16cm、カマド対辺の東ピットは、50×56cm、深さ18cm、カマド対辺の中間ピットは、54×58cm、深さ12cmを計る。

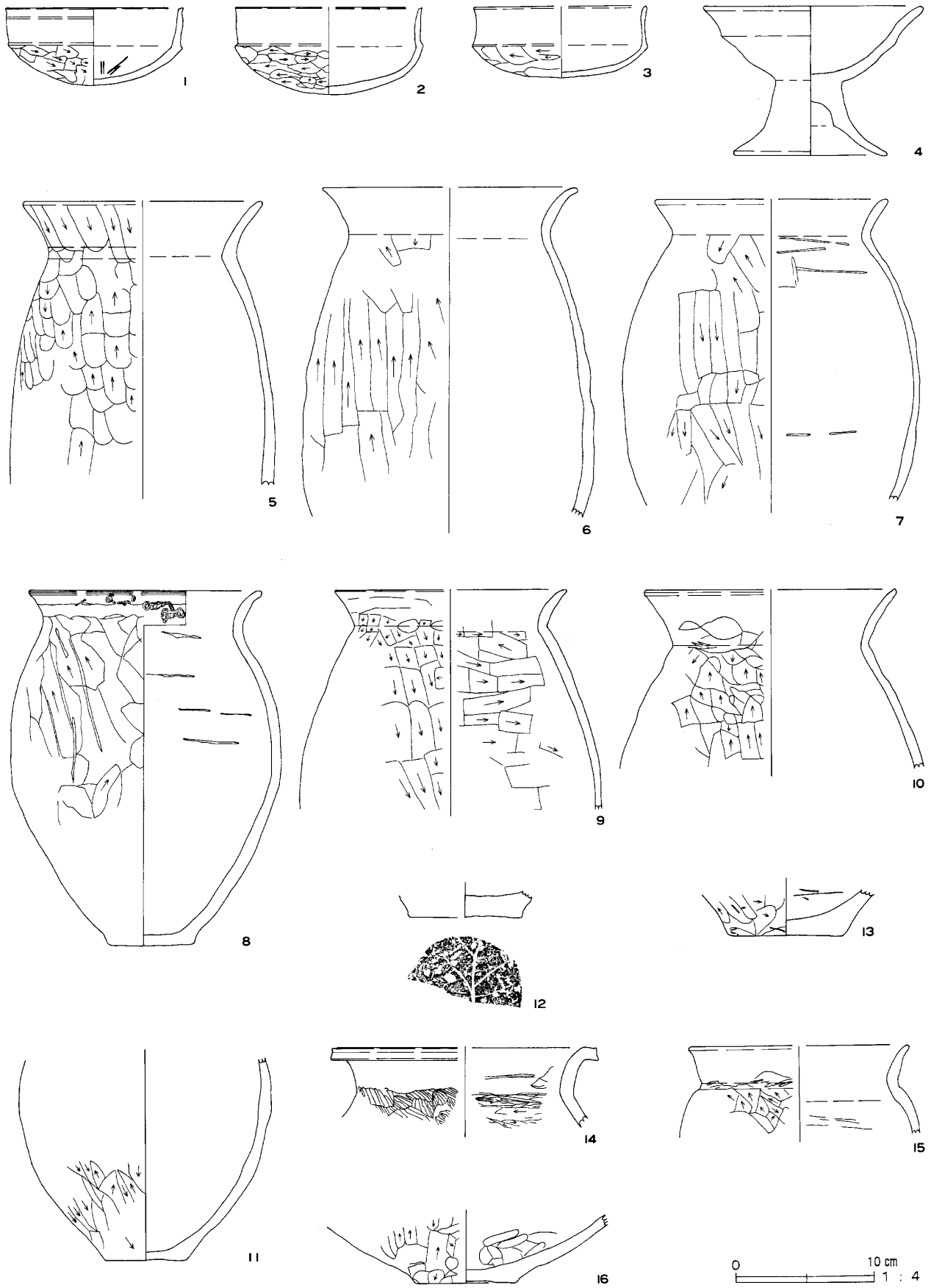
カマドは、南西壁の中央から南隅寄りの位置に設置されている。全長2.30mを計る。火床は、全て竪穴内に位置し、幅45cm、奥行き50cmを計り、箱型を呈する。奥壁の下端は、竪穴の南西壁下端ラインと一致し、40cmの長さで10cm程高くなる。斜面は、直線を成し、最奥部の幅は10cmまで減ずる。ここで角度を変換し、煙道へ移行する。煙道は幅10cmで、直線を成し、80cmの長さをもつ。煙道の主軸方位は、N-125°-Wである。煙出しは、煙道の延長上にあって僅かに窪み、長円形を呈する。幅27cm、奥行き60cmを計る。奥壁への移行は、カーブを描いて緩やかである。

覆土は、焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色シルトであり、下位には炭化物が層を成す部分もみられる。

遺物は、全て土師器であり、カマド内及びカマド前面から出土している。カマド内からは、支脚に転用された高坏（第67図-4）を中心に、坏（同一-1）、甕（同一-16）が、カマド前面からは、坏（同一-2、3）、甕（同一-5～15）が検出されている。なお甕（14）は、外面に磨きが施され、器形は須恵器を模倣したものである。

第21表 C区9号住居跡出土遺物観察表（第67図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	12.3	5.1	—	⑥②①④	②	橙	完形	内面炭化物附着。
2	土師器・坏	(13.2)	6.2	—	①②③⑥	②	明赤褐	3/5	外面黒斑。
3	土師器・坏	12.4	5.1	—	①②⑥④	②	橙	2/3	外面黒斑。
4	土師器・高坏	15.5	10.7	10.9	①②⑥③	②	橙	ほぼ完形	全面にナデが加えられている。一部吸炭。
5	土師器・甕	(17.3)	—	—	②④③⑥①	②	明赤褐	上位1/2	外面黒斑。全体に薄く吸炭。二次加熱。
6	土師器・甕	(18.0)	—	—	①⑥②④	②	橙	上位2/3	内外面吸炭。外面煤附着。二次加熱。
7	土師器・甕	(16.5)	—	—	①②⑥④	②	にぶい橙	上位1/2	内外面吸炭。胴部内面炭化物。外面煤附着。二次加熱。
8	土師器・甕	16.8	25.5	6.3	⑥①③②	②	橙	4/5	胴部内面中位下半にドーナツ状に炭化物附着。外面下半上位に煤附着。下位は二次加熱による表面剥離。口縁部外面模様状刺突痕。
9	土師器・甕	(8.3)	—	—	①②③④⑥	②	赤橙	上位1/2	全面吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	(18.1)	—	—	⑥③①②④	②	橙	上位1/4	胴部内外面吸炭。
11	土師器・甕	—	—	(5.8)	⑥①②④	②	明赤褐	下位1/6	外面煤附着。内面一部吸炭。二次加熱。
12	土師器・甕	—	—	(8.0)	⑥①②④	②	赤褐	底部1/2	吸炭。二次加熱。
13	土師器・甕	—	—	(8.2)	①②⑥④	②	橙	底部のみ	外面煤附着。内面吸炭。
14	土師器・甕	(18.9)	—	—	⑥①③	②	橙	口縁部1/4	内外面吸炭。二次加熱。
15	土師器・甕	(15.8)	—	—	①⑥③②④	②	明赤褐	口縁部1/4	内外面一部吸炭。二次加熱。
16	土師器・甕	—	—	(6.8)	⑥②①④③	②	橙	底部のみ	内外面炭化物附着。



第67图 C区9号住居跡出土遺物

10号住居跡 N-17、O-17グリッドに位置する。第2確認面の検出である。北西及び南西隅を除いて、上面の大半が9号住居跡によって削平されている。

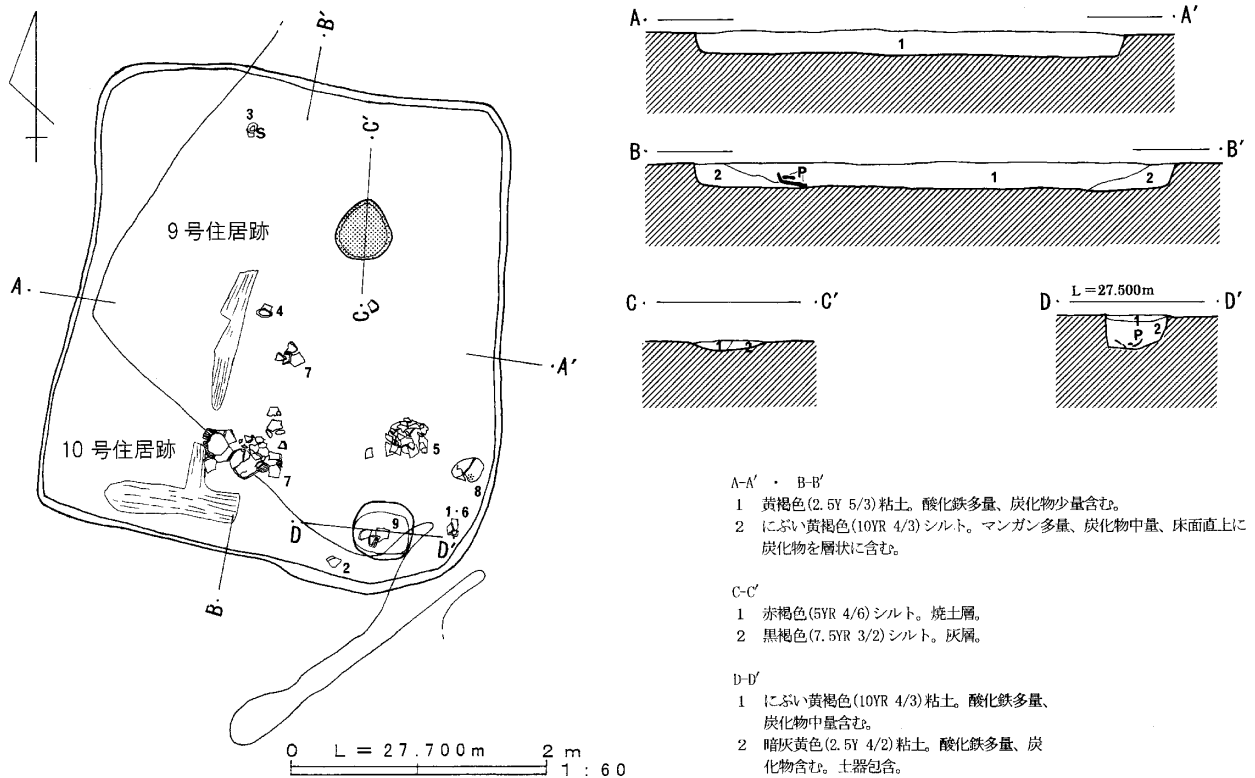
(第69図) 北辺3.26m、東辺3.80m、南辺3.40m、西辺3.62mを計る。南東隅が丸みをもつため、やや不整形であるが、長方形を基本とした形態である。主軸方位は、N-6°-Eである。壁は、緩い傾斜をもって立ち上がり、床面へは丸みをもって移行する。確認面からの深さは、20cm前後を計る。

床面は、ほぼ水平を成し比較的硬く、安定している。

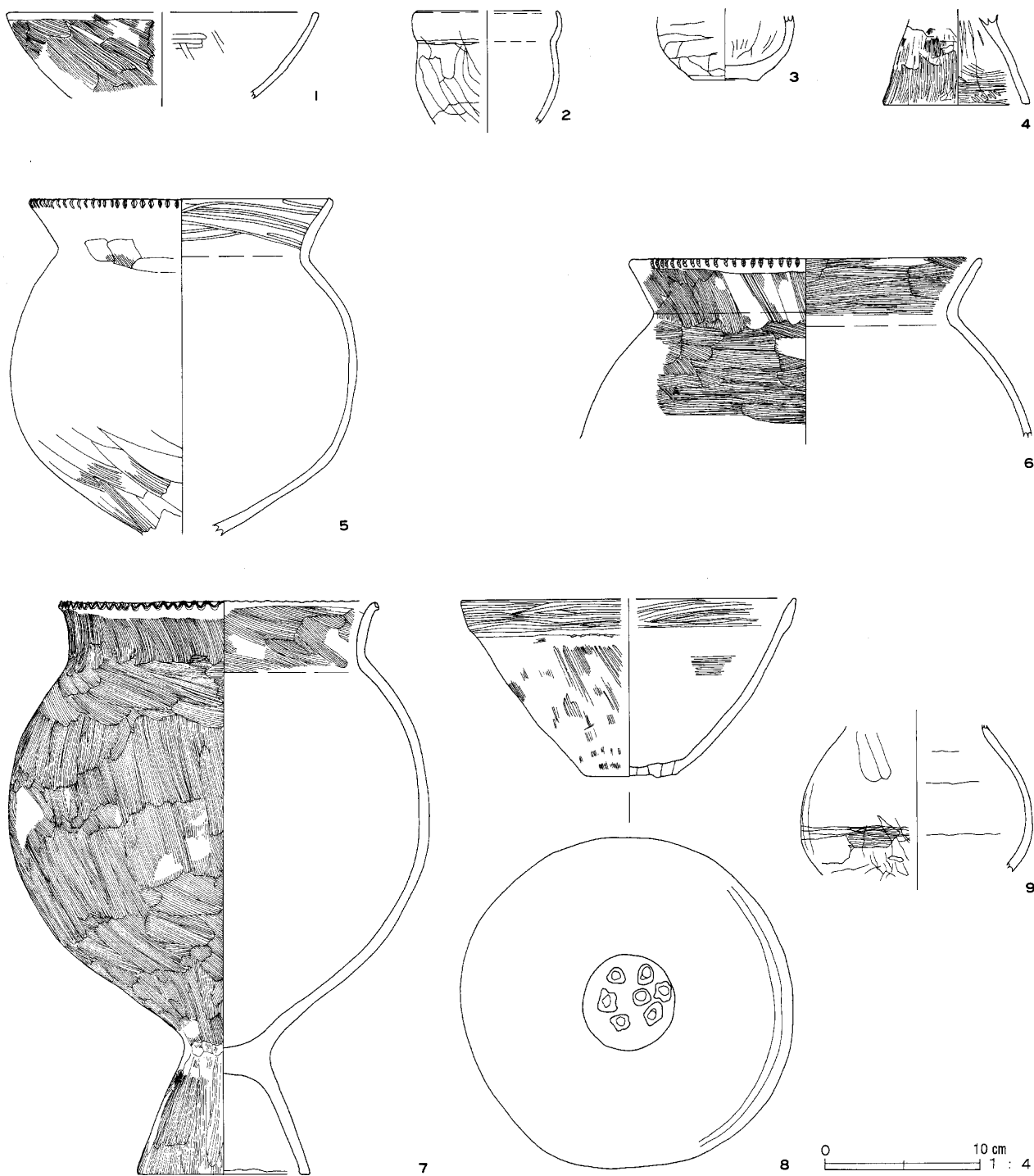
炉は、中央北東隅寄りに設置されている。48×45cmの規模をもち、7cm程掘り窪められている。底面は3cm程が焼土化している。

ピットは、南東隅の南辺寄りに穿たれている。一辺48cmで隅円方形を呈し、深さ27cmを計る。断面は、ほぼ矩形を呈する。貯蔵穴と考えられる。

覆土は、多量の酸化鉄、少量の炭化物を含む黄褐色粘土（第1層）であるが、南北の壁際から床面にかけては多量のマンガン、それよりは僅かに少ない炭化物を含むにぶい黄褐色シルト（第2層）が堆積している。第2層の最下面・床面上には、層状の炭化物及び炭化材がみられる。特に南壁下から中央部にかけては、T字状に炭化材が検出されている。これら炭化物・炭化材は、いずれも壁際が高く中央部に移行するに従って、床面に接する状態を示している。しかしながら、覆土内に焼土がほとんど検出されていないことから、火災を被ったものとは考えられない。



第68図 C区10号住居跡



第69図 C区10号住居跡出土遺物

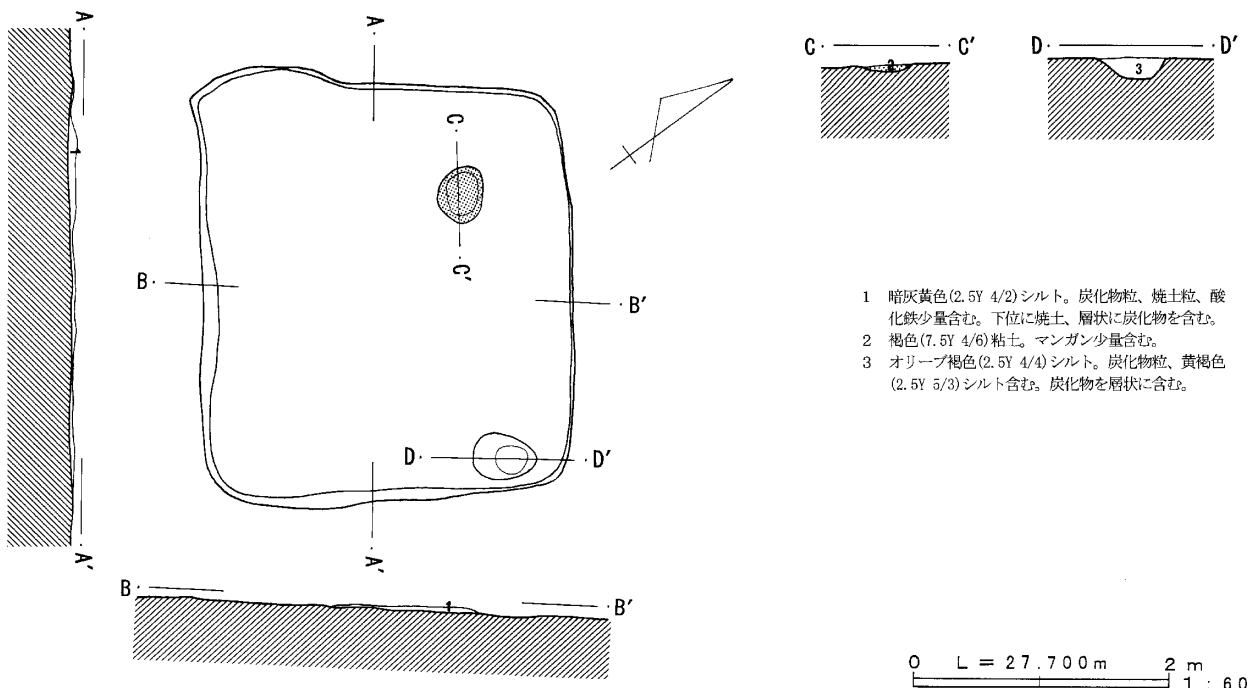
貯蔵穴覆土は、多量の酸化鉄とそれよりは僅かに少ない炭化物を含み、上位（貯蔵穴内第1層）は竪穴内覆土第2層を、下位（同第2層）は暗灰黄色粘土を基盤としている。

遺物は、主に床面上の東半分から出土しており、全て土師器である。炉と北壁の間から盥（第69図-3）、炉と貯蔵穴の間から台付甕（同-4、5、7）、貯蔵穴と東壁の間から高坏（同-1）、台付甕（同-6）、多孔型甗（同-8）、貯蔵穴と南壁の間から盥（同-2）、貯蔵穴内から壺（同-9）が検出されている。

第22表 C区10号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	(20.2)	—	—	①③②④⑥	②	明赤褐	坏部1/8	内面吸炭。半還元。
2	土師器・盃	(9.1)	—	—	①⑥④	②	橙	1/4	内面一部吸炭。
3	土師器・盃	—	—	4.1	⑥①④③	②	灰黄褐	底部のみ	全面吸炭。外面底部黒色化。
4	土師器・台付甕	—	—	8.8	①③④⑥	②	にぶい橙	脚台部のみ	内外面一部吸炭。二次加熱。
5	土師器・台付甕	19.2	—	—	①②③⑥	②	赤褐	台部欠	特に上位に丁寧なナデが加えられている。外面ほぼ全面煤付着。二次加熱。
6	土師器・台付甕	21.8	—	—	①②③⑥	②	明赤褐	頸部1/3	両面一部吸炭。煤、炭化物付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	20.2	37.0	11.1	①③②④⑥	②	灰褐	ほぼ完形	外面ほぼ全面煤、内面下半及び口縁部炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・甕	(21.2)	11.4	5.8	①⑥④③	②	にぶい橙	口縁部3/4欠	外面黒斑。多孔(7孔)式。
9	土師器・壺	—	—	—	⑥①③②	②	橙	胴部3/4	内面赤色化。二次加熱。

11号住居跡 L-17、18、O-17、18、グリッドに位置する。第2確認面の検出である。
 (第70図) 北東辺3.16m、南東辺2.94m、南西辺3.50m、北西辺3.06mを計る。北西辺の西隅部が
 脹らみをもつため、やや不整形であるが、長方形を基本とした形態であるといえる。
 主軸方位は、N-53°-Wである。壁は、数cmが検出されたのみで、状況は不明である。
 床面は、凹凸がみられるものの、硬く安定している。
 ピットは、東隅の南東辺寄りに穿たれている。北東から南西方向に長い卵形を呈し、40×
 29cm、深さ17cmを計る。断面は、逆台形を呈している。覆土は、炭化物粒・黄褐色シルト
 を含むオリブ褐色シルトであり、炭化物層を含む部分もある。
 炉は、中央と北隅の間に設けられている。竪穴の長軸方向に長く、46×34cmを計り、
 不整楕円形を呈する。厚さ7cmが焼土化している。
 遺物は、土師器小片が僅かに検出されたのみであり、図示が可能なものはない。



第70図 C区11号住居跡

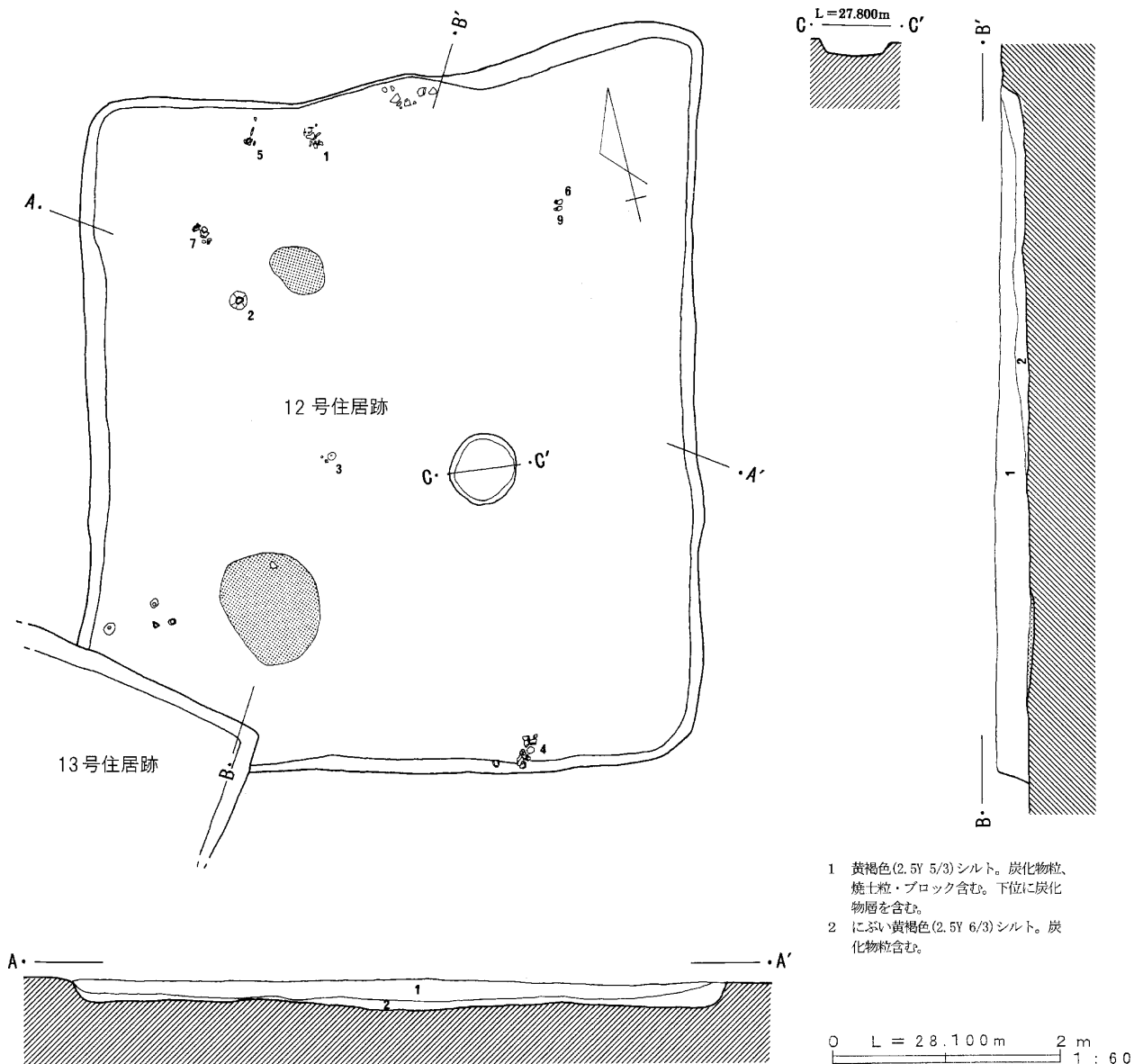
12号住居跡 O-15、16グリッドに位置する。第2確認面の検出である。南西隅を13号住居跡に切断
(第71図) されている。

(第72図) 北辺5.45m、東辺6.42mを計る。南辺及び西辺は、それぞれが5.50m、6.00mを計るものと推定される。北東隅が大きく張り出すため、かなり不整形であるが、長方形を基本とした形態であるといえる。主軸方位は、N-13°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、床面へは丸みをもって移行する。確認面からの深さは、28cm前後を計る。

床面は、凹凸がみられるものの、硬く安定している。

炉は、中央と北西隅の間に設けられている。ほぼ北西から南東方向に長く、53×40cmを計り、不整楕円形を呈する。厚さ6cmが焼土化している。また、中央と南西隅の間に、やはり北西から南東方向に長く、床面の焼土化した部分がある。92×84cmを計り、不整楕

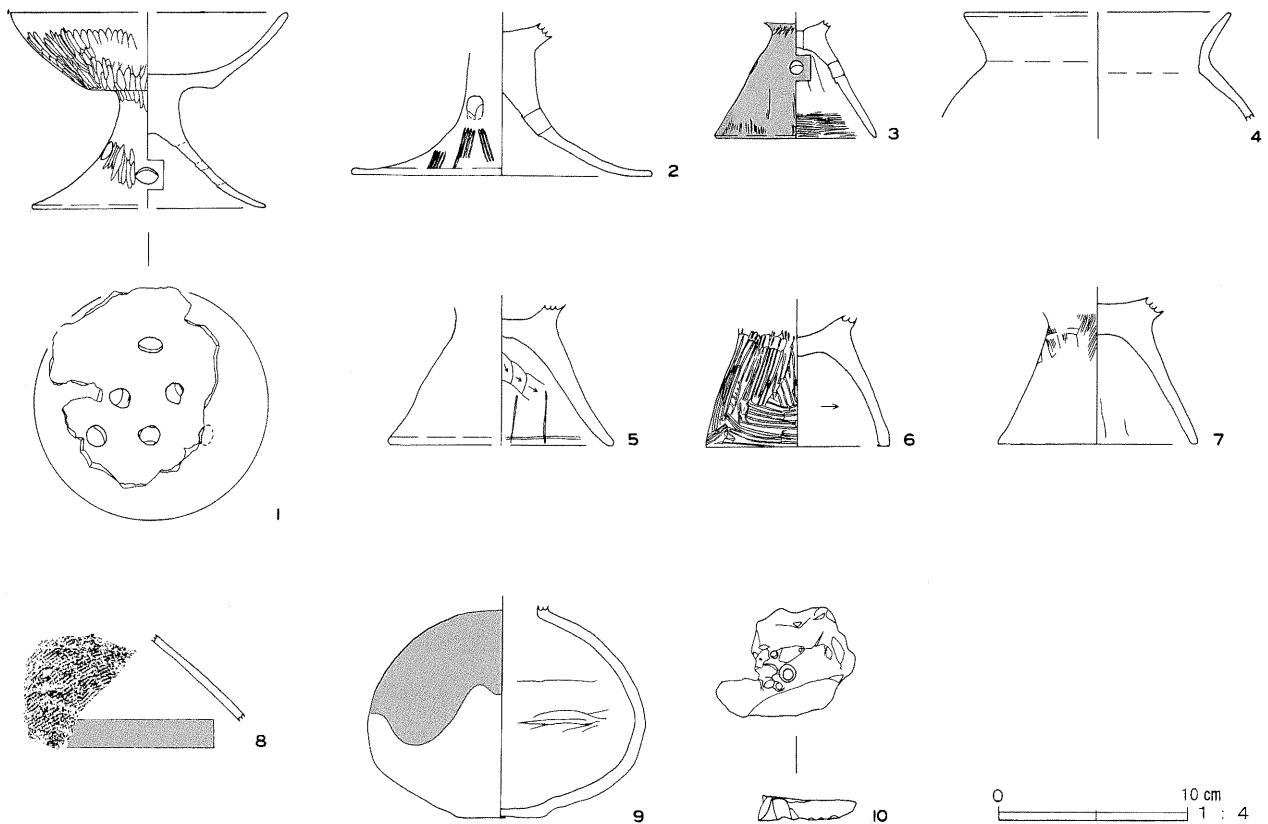


第71図 C区12号住居跡

円形を呈する。焼土化の状態は斑であり、焼土化の厚さは、数mmから3cmに達している。何らかの理由で床面が焼土化したものであり、炉ではないと判断された。

ピットは、中央わずかに東南隅寄りに穿たれている。ほぼ円形を呈し、径60cm、深さ12cm前後を計る。断面は、ほぼ矩形を呈する。

覆土は、上位に炭化物粒、焼土粒・ブロックを含む黄褐色シルト（第1層）、下位に炭化物粒を含むふい黄褐色シルト（第2層）が堆積している。第1層の下位には、炭化物層を成す部分がある。また第2層は、多くは壁際に堆積し、中央部分では第1層が床面に接する状況である。



第72図 C区12号住居跡出土遺物

第23表 C区12号住居跡出土遺物観察表（第72図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	14.6	10.4	(12.2)	①③②⑥	②	にぶい橙	4/5	脚部二段千鳥状六方透し(円孔)。内外面一部炭化物付着。二次加熱。
2	土師器・高坏	—	—	15.2	⑥③①②④	②	橙	脚部のみ	脚端部吸炭。脚部三方透し(円孔)。
3	土師器・器台	—	—	8.5	①②③⑥	②	橙	台部のみ	脚部四方透し(円孔)。外面全面朱塗。
4	土師器・甕	(14.0)	—	—	⑥②①④	②	にぶい橙	上位1/3	内外面煤付着。
5	土師器・台付甕	—	—	(11.5)	①⑥②④	②	橙	台部1/2	底部内面、台部外面吸炭。
6	土師器・台付甕	—	—	9.6	①②③④⑥	②	橙	台部のみ	台部内外面煤付着。底部内面吸炭。二次加熱。
7	土師器・台付甕	—	—	10.5	①②③⑥	②	橙	台部のみ	一部吸炭。二次加熱。
8	土師器・壺	—	—	—	②③④	②	灰	一部のみ	外面全面吸炭。一部朱塗の痕跡。
9	土師器・壺	—	—	4.2	①②③⑥	②	橙	口縁部欠	胴部中位以上全面朱塗。
10	土塊	長さ 7.5 幅 5.8 厚さ 1.3							穿孔4。

遺物は、第1層の下位(炭化物層上)から検出されている。全て土師器であり、器種は、高坏(第72図-1、2)、器台(同一-3)、甕(同一-4)、台付甕(同一-5、6、7)、壺(同一-8、9)等がみられる。このうち高坏(1)は、脚部に2段6ヶ所の円孔が穿たれている。円孔は、各段で三角形を呈し、上下で対称を成している。その他、4~9mmの円孔の穿たれた焼土化した粘土塊(同一-10)も検出されている。

13号住居跡 O-16、17、P-16、17グリッドに位置する。第2確認面の検出である。東隅部が12号(第73図)住居跡を切断している。

(第74図) 北東辺8.36m、南東辺7.10m、南西辺6.64m、北西辺6.60mを計る。北東辺が長く南西(第75図)辺が短いため、各隅が直角を成さず、台形を呈するといわざるを得ない。

主軸方位は、N-55°-Wである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、床面へは丸みをもって移行する部分が多い。確認面からの深さは、25~30cm前後を計る。

床面は、凹凸がみられるものの、硬く安定している。ピット等は、検出されていない。

炉は、中央から北東辺寄り、中央から北隅寄りの2ヶ所に設けられている。前者は、南北方向に長く60×42cmを計り、不整楕円形を呈する。後者は、ほぼ円形を呈し、径60cmを計る。焼土化は、いずれも薄く、厚さ2cm前後である。

覆土は、上位に暗オリーブ色シルトブロックを含む黄色シルト(第1層)、下位に炭化物粒を含むオリーブ褐色シルト(第2層)が堆積している。第2層の下位には、炭化物層を成す部分がある。また第2層は、多くは壁際に堆積し、中央部分では極薄い。

遺物は、第2層中、炭化物層に挟まれ、全体でレンズ状を呈する部分から、北西辺側にまとまって検出されている。全て土師器であり、器種は蓋(第74図-1)、高坏(同一-2~7)、器台(同一-8~11)、甕・台付甕(同一-12~16、第75図-17~25)、埴(同一-26、27)、壺(同一-28、29)等がみられる。このうち、器台(第74図9)が完形のほかは、全体が復元し得たものはない。また、蓋(第74図1)は、上位の欠損した器台であり、再利用土器である。

出土状況は、炉の周囲で、最も低位の位置から甕・埴・壺類が、壁際のやや高い位置から蓋・高坏・器台が検出されており、遺棄のされ方に器種による区別があった様相を呈している。

14号住居跡 O-18グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

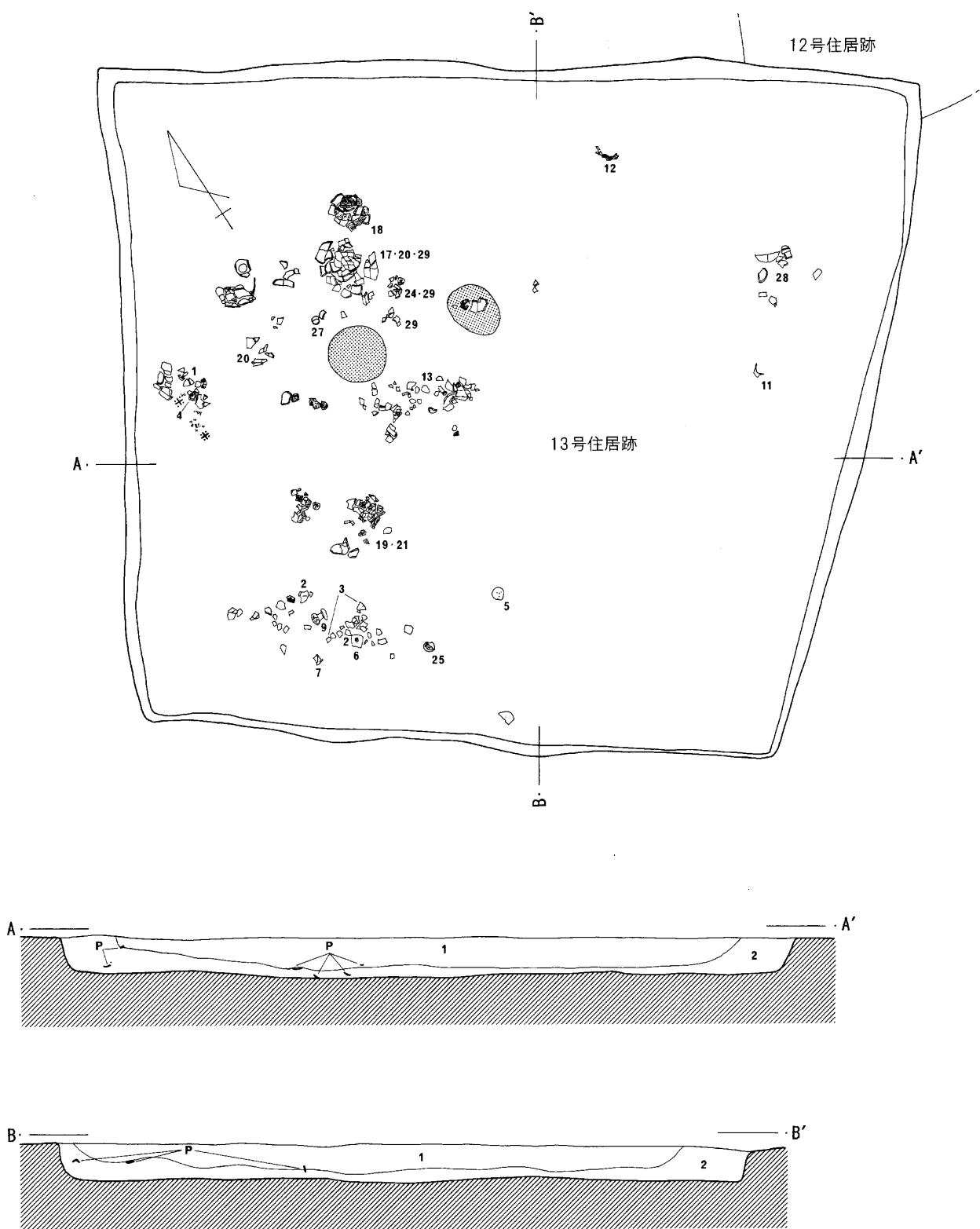
(第76図) 北東辺2.60m、南東辺3.00m、南西辺2.55m、北西辺2.38mを計る。南東辺が長く北西(第77図)辺が短いため、各隅が直角を成さず、台形を呈するといわざるを得ない。

主軸方位は、N-42°-Wである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、床面へは丸みをもって移行する部分もみられる。確認面からの深さは、23cm前後を計る。

床面は、ほぼ水平であり、硬く安定している。ピット等は、検出されていない。

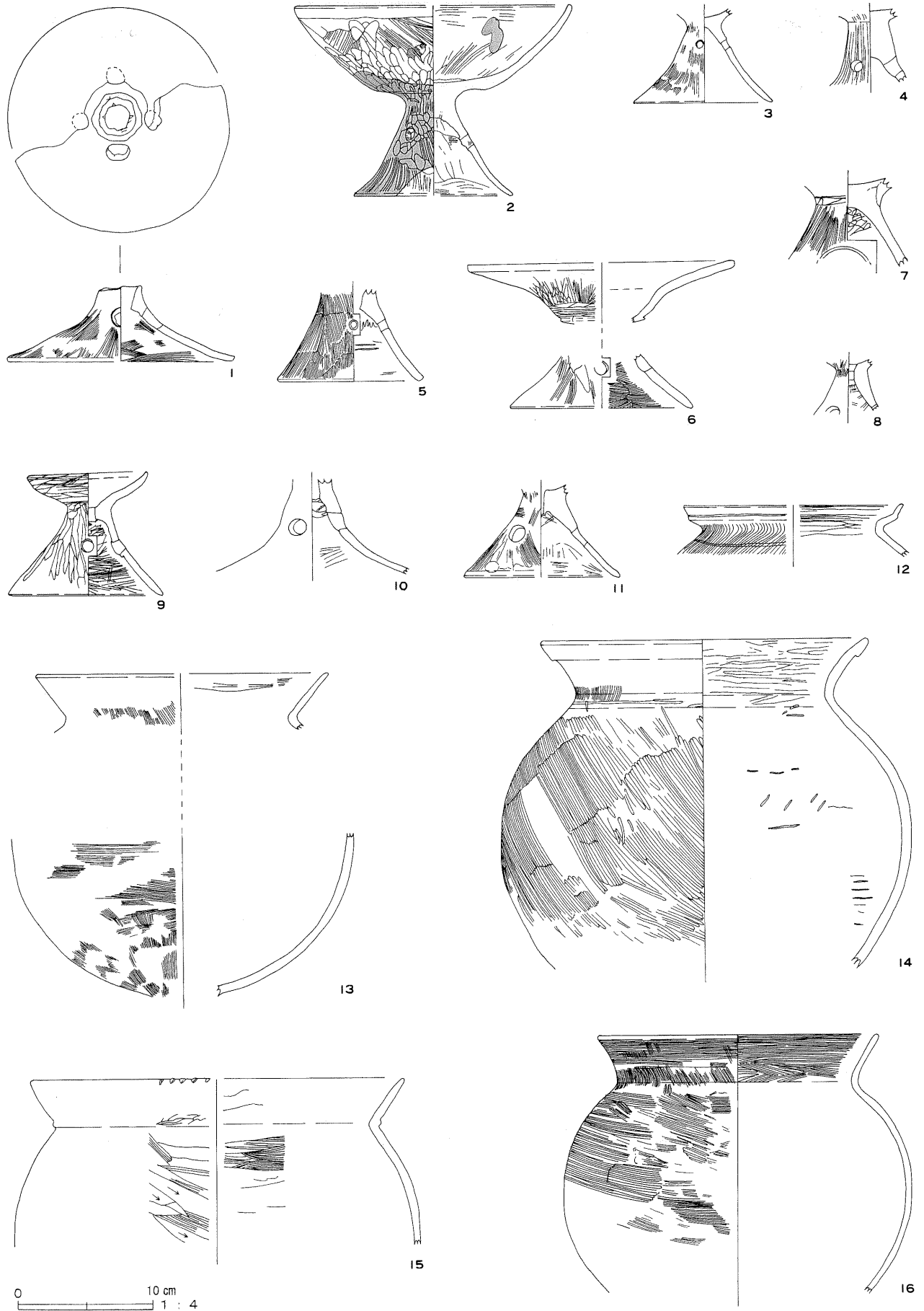
炉は、北東辺側、東隅寄りに設けられている。北東から南西方向に長く、52×36cmを計



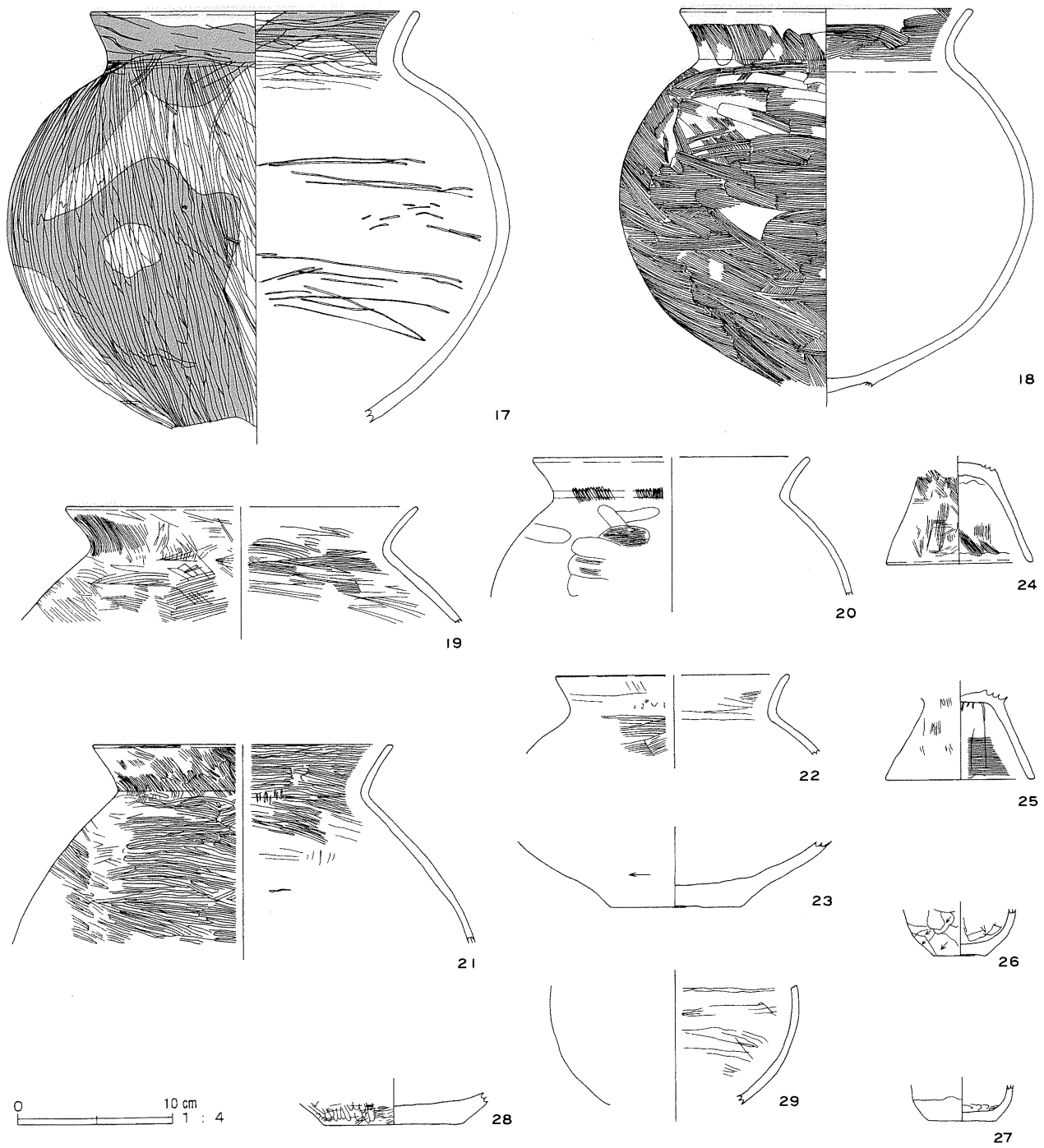
- 1 黄色(5Y 7/6)シルト。暗オリーブ色(5Y 4/3)シルトブロック含む。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。炭化物粒含む。下位に炭化物層を含む。

0 L = 28.100 m 2 m
1 : 60

第73図 C区13号住居跡



第74图 C区13号住居跡出土遺物(1)



第75図 C区13号住居跡出土遺物(2)

第24表 C区13号住居跡出土遺物観察表 (第74・75図)

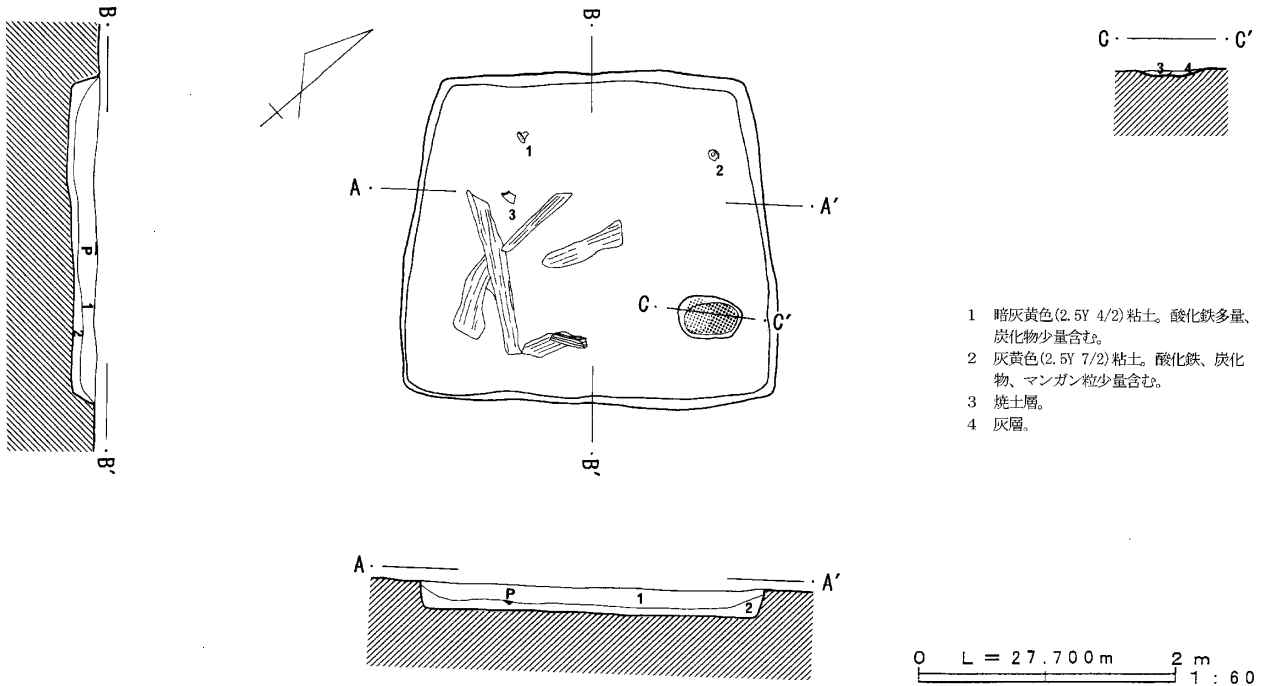
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・蓋	3.2	5.6	(16.7)	①②③⑥	②	におい黄橙	1/2	体部四方透し(円孔)。天井部は上位に継続する様相であるが割れ口整形しており、一応上端の終焉とした。内外面共煤附着。二次加熱。
2	土師器・高坏	(20.4)	14.0	(11.6)	①②③⑥	②	におい橙	2/3	全面朱塗の痕跡。ヘソ接合。脚部三方透し(円孔)。脚一部煤附着。
3	土師器・高坏	—	—	10.0	②④①⑥	②	におい褐	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。脚部内外面の一部煤附着。二次加熱。

4	土師器・高坏	—	—	—	①②③④	②	橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。内外面煤付着。二次加熱。
5	土師器・高坏	—	—	10.1	③①⑥④	②	にぶい橙	脚部のみ	へソ接合。脚部接合面吸炭し黒色化。脚部三方透し(円孔)。内外面一部煤付着。
6	土師器・高坏	(19.5)	—	(13.4)	⑥①④②	②	明赤褐	両端部1/4	脚部四方透し(円孔)。内外面煤付着。二次加熱。
7	土師器・高杯	—	—	—	①⑥②③④	②	橙	脚部のみ	脚部に大円孔。体部内面吸炭。
8	土師器・器台	—	—	—	③②⑥①④	②	浅黄橙	脚上位のみ	脚部三方透し(円孔)。二次加熱。
9	土師器・器台	8.6	9.1	11.3	②③①	②	浅黄橙	完形	受台部内面表面剥離。脚部四方透し(円孔)。
10	土師器・器台	—	—	—	③①②	②	にぶい黄橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。二次加熱により半還元。
11	土師器・器台	—	—	(11.4)	①②③⑥	②	にぶい黄橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。脚端部煤付着。
12	土師器・台付甕	—	—	—	⑥①②③④	②	橙	口縁部のみ	口縁部外面一部吸炭。
13	土師器・台付甕	(21.2)	—	—	①②③⑥	②	橙	口縁部1/2 胴部下位1/2	内外面炭化物、胴部外面底位煤付着。二次加熱により胴部下位表面剥離。
14	土師器・甕	23.6	—	—	②⑥④①③	②	橙	口縁部 胴部1/2	口縁部内外面の一部、胴部外面の一部炭化物付着。二次加熱。
15	土師器・台付甕	(27.5)	—	—	①②③⑤⑥	②	にぶい黄橙	口縁部1/8	表面密。黒斑。
16	土師器・甕	(20.4)	—	—	②⑥①	②	橙	上位1/2	黒斑。胴部外面下位、二次加熱により表面剥離。
17	土師器・台付甕	21.0	—	—	②①④⑥	②	にぶい橙	台部欠	口縁部内外面、胴部外面朱塗、胴部外面中位以下煤、内面一部炭化物付着。二次加熱。
18	土師器・台付甕	18.8	—	—	①③②④⑥	②	灰黄褐	台部欠	全面吸炭。内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
19	土師器・台付甕	(22.4)	—	—	①②③⑥	②	にぶい橙	口縁部1/4	一部吸炭。二次加熱。
20	土師器・甕	(17.7)	—	—	③④②⑥①	②	橙	口縁部のみ	内外面吸炭。二次加熱。
21	土師器・甕	(19.2)	—	—	①⑥③④	②	明赤褐	上位1/3	外面一部吸炭。内面剥離した部分が多い。
22	土師器・甕	(15.1)	—	—	①②③④⑥	②	明赤褐	口縁部1/4	内面一部炭化物付着。二次加熱。
23	土師器・甕	—	—	8.0	①④⑥②	②	明赤褐	底部のみ	内面吸炭、表面剥離、灰褐色。底面ケズリ。
24	土師器・台付甕	—	—	9.2	①②③⑤⑥	②	橙	器台のみ	一部吸炭。二次加熱。
25	土師器・台付甕	—	—	(9.4)	⑥②①④	②	明赤褐	脚台部2/3	一部吸炭。二次加熱。
26	土師器・埴	—	—	3.2	⑥①③④	②	橙	底部のみ	底面ナデ。
27	土師器・埴	—	—	4.2	⑥④	②	にぶい黄橙	底部のみ	底面ナデ、内面一部表面剥離。
28	土師器・壺	—	—	8.6	①②③⑥	②	橙	底部のみ	内外面吸炭。底面ケズリ。
29	土師器・壺	—	—	—	⑥①④③	②	にぶい褐	胴下半1/2	壺下半、上端部割れ口を整形しており鉢に転用したものか。

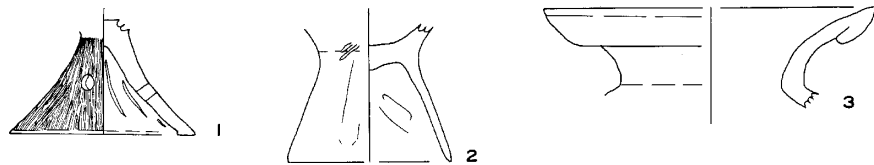
り、楕円形を呈する。南西側の径20cm範囲が厚さ5cm前後で焼土化し、北東側に灰が充填している。

覆土は、上位に多量の酸化鉄、少量の炭化物を含む暗灰黄色粘土(第1層)、下位に酸化鉄、炭化物粒、マンガン粒を含む灰黄色粘土(第2層)が堆積している。第2層の上面には、太さ10~20cmに及ぶ炭化材が検出されている。

遺物は、覆土中から検出されており、全て土師器である。器種は、高坏(第77図-1)、台付甕(同一-2)、壺(同一-3)等がみられる。いずれも破片であり、全体の知れるものはない。



第76図 C区14号住居跡



第77図 C区14号住居跡出土遺物

第25表 C区14号住居跡出土遺物観察表 (第77図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	9.8	④③①②	②	明赤褐	脚部のみ	全面煤付着。二次加熱。
2	土師器・台付甕	—	—	(8.2)	①⑥④③	②	明赤褐	台部 1/2	胴底部内面炭化物付着。二次加熱。
3	土師器・壺	(17.4)	—	—	⑥①④	②	橙	口縁部 1/5	内面半還元。

15号住居跡 O-19グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第78図) 北辺3.64m、東辺4.06m、南辺3.52m、西辺3.68mを計る。東辺が長く、東隅が大きく

(第79図) 張り出すため、不整ではあるが、正方形を基本とした形態を示すものとみられる。

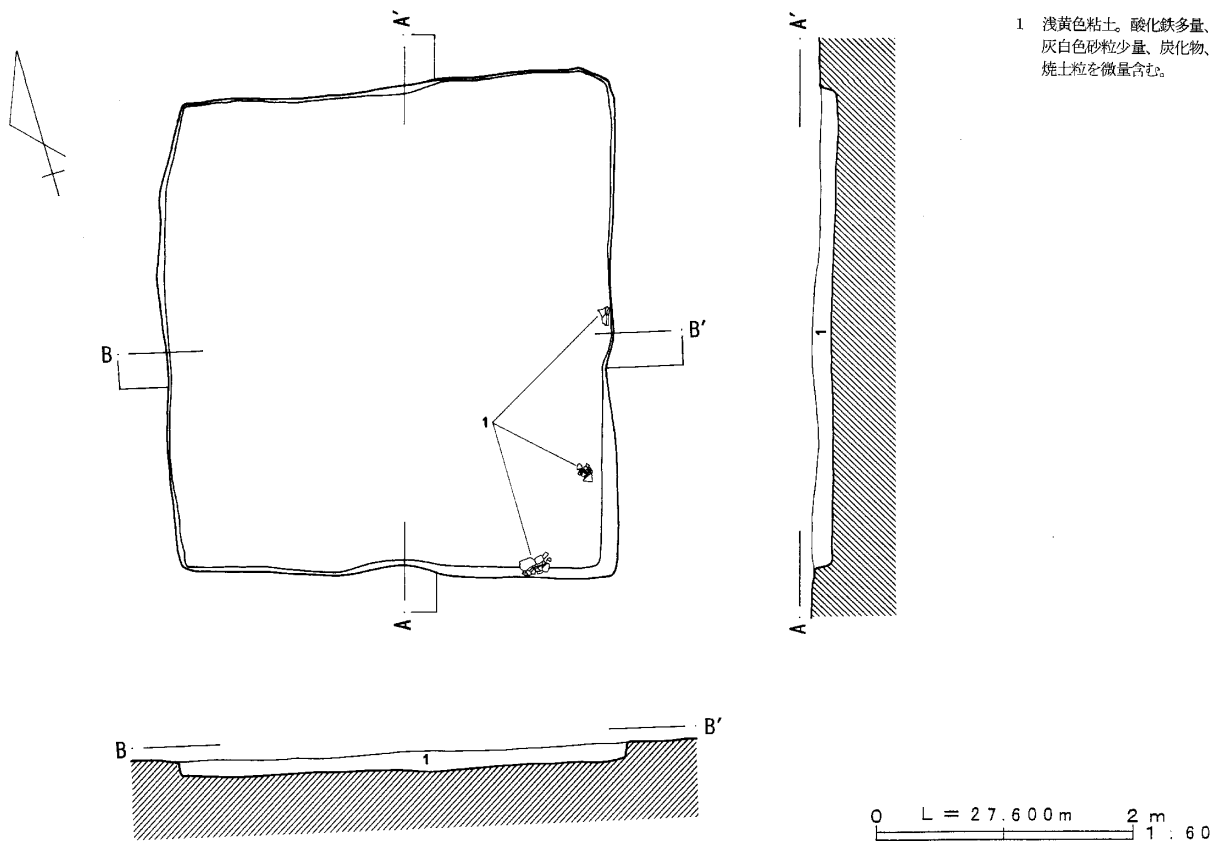
主軸方位は、N-15°-Eである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、15cm前後を計る。

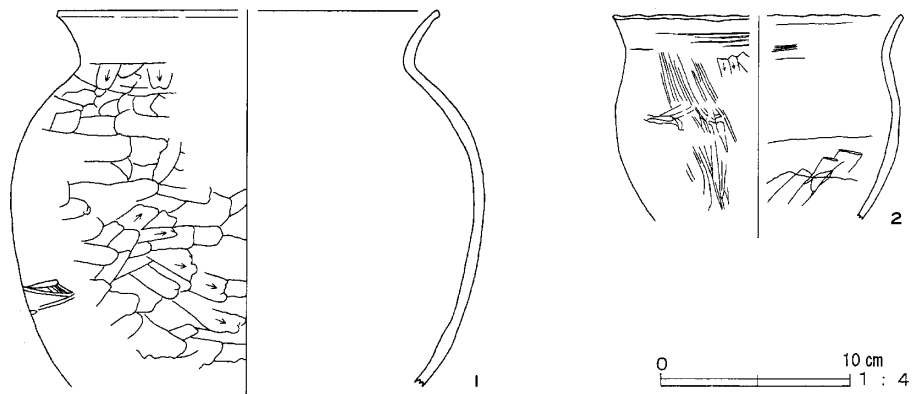
床面は、多少凹凸はみられるものの、ほぼ水平であり、硬く安定している。炉、ピット等は、検出されていない。

覆土は、多量の酸化鉄、少量の灰白色砂粒、微量の炭化物及び焼土粒を含む浅黄色粘土(第1層)が堆積している。

遺物は、覆土中から検出されており、全て土師器である。器種は、甕(第79図-1、2)等がみられる。いずれも破片であり、全体の知れるものはない。



第78図 C区15号住居跡



第79図 C区15号住居跡出土遺物

第26表 C区15号住居跡出土遺物観察表 (第79図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	(20.0)	—	—	⑥①②④③	②	暗赤褐	上位1/6	外面ナデツケ。ほぼ全面煤付着。
2	土師器・甕	(15.2)	—	—	③②④①	②	にぶい黄橙	上位1/3	外面ミガキ、内外面吸炭。二次加熱。

16号住居跡 O-19、20、P-19、20グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第80図) 北辺5.34m、東辺4.96m、南辺5.58m、西辺4.96mを計り、不整ではあるが、ほぼ長方

(第81図) 形を呈する。主軸方位は、N-72°-Wである。

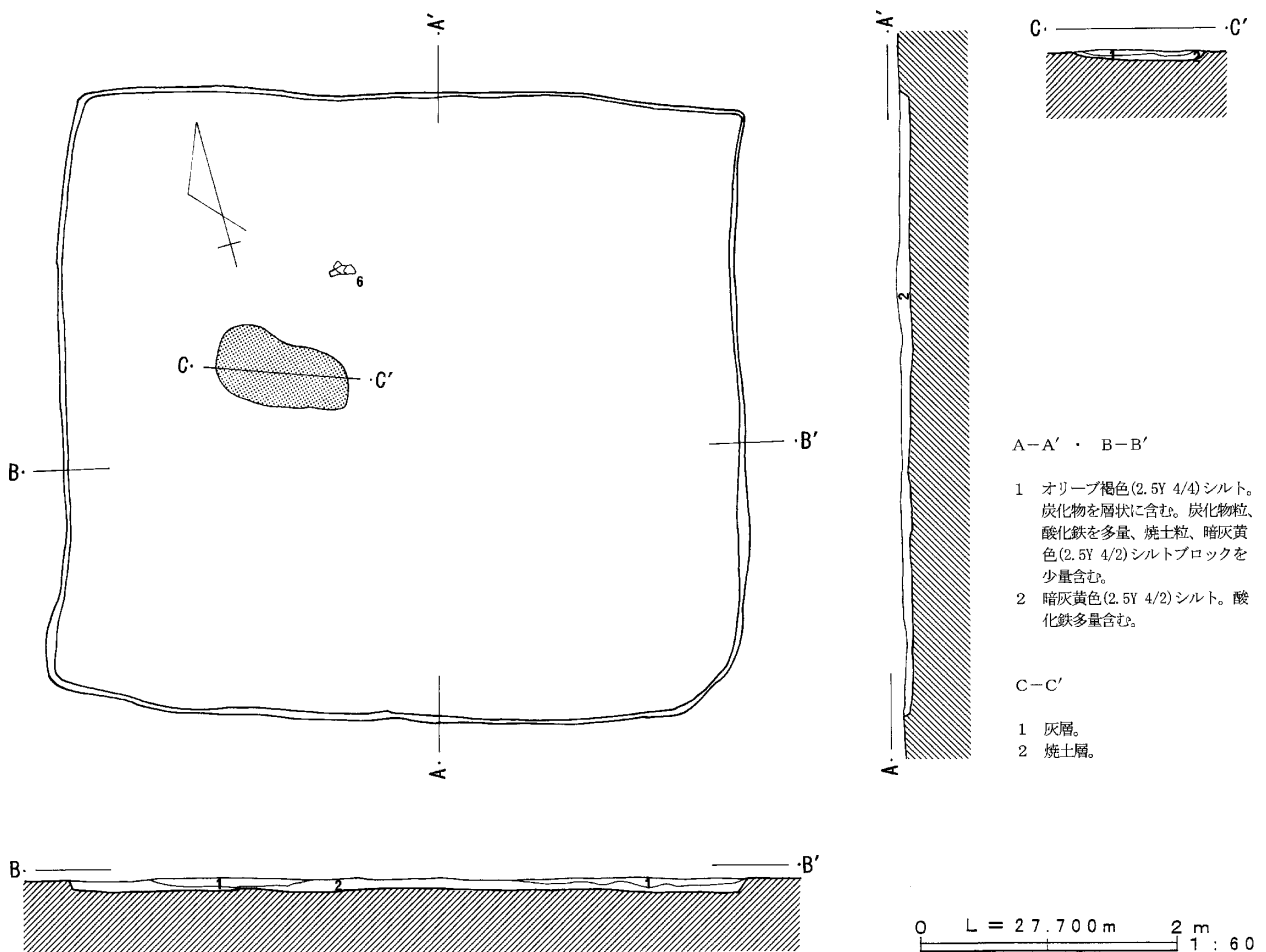
壁は、確認面からの深さが8cm前後と浅いため、詳細は知り得ないが、ほぼ垂直に立ち

上がる様相である。床面は、凹凸がみられるものの、比較的硬く、安定している。特に南西半が硬く締まっている。ピット等は、検出されていない。

炉は、中央から西壁寄りに設置されている。竪穴の長軸方向に長く、瓢箪型を呈し、規模は106×58cmを計る。約8cm程が焼土化している。

覆土は、多量の酸化鉄を含む暗灰黄色シルト（第2層）であり、上位には、多量の酸化鉄及び炭化物粒、少量の焼土粒、暗灰黄色シルトブロックを含むオリーブ褐色シルト（第1層）が堆積している。第1層中には、炭化物が層を成す部分もみられる。

遺物は、全て土師器であり、第2層中から出土している。器種は、器台（第81図—1、2）、台付甕（同一—3～6）、壺（同一—7～11）等がみられる。いずれも破片であり、全体の知れるものはない。

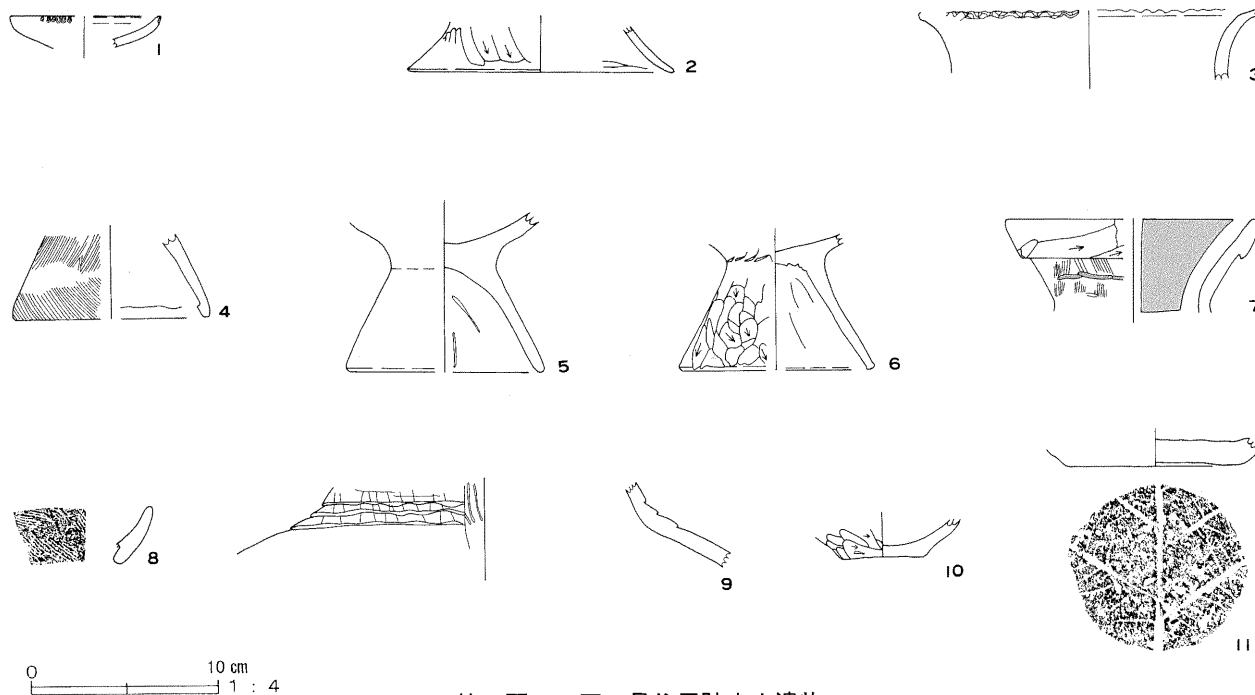


第80図 C区16号住居跡

第27表 C区16号住居跡出土遺物観察表（第81図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・器台	(8.0)	—	—	⑥①④②	②	橙	口縁部一部	
2	土師器・器台	—	—	(13.8)	②①④	②	にぶい橙	脚裾部のみ	
3	土師器・台付甕	(17.8)	—	—	①②③⑥④	②	にぶい黄褐	口縁部1/6	内面口唇部炭化物、外面煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	(10.2)	①②③④⑥	②	明赤褐	台部1/3	二次加熱。
5	土師器・台付甕	—	—	(10.4)	①⑥④	②	にぶい褐	台部1/2	胴底部内面炭化物付着。外面吸炭。二次加熱。内面明赤褐色。

6	土師器・台付甕	—	—	(9.9)	①②⑥③④	②	褐	台部 2 / 5	胴底部内面吸炭。二次加熱。
7	土師器・壺	(13.4)	—	—	②①③④	②	橙	口縁部 1 / 2	内外面全面朱塗。二次加熱。
8	土師器・壺	—	—	—	⑥②①	②	橙	口縁部 1 / 8	内面表面剥離。
9	土師器・壺	首部(16.8)			①②④⑥	②	赤褐	括れ部 1 / 5	二次加熱。
10	土師器・壺	—	—	4.3	①③④②⑥	②	にぶい橙	底部のみ	内外面一部吸炭。
11	土師器・壺	—	—	9.3	⑥①②③④	②	赤褐	底部のみ	外面黒斑。



第81図 C区16号住居跡出土遺物

17号住居跡 P-15、16グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第82図) 北辺4.50m、東辺5.26m、南辺4.28m、西辺5.60mを計る。各辺に凹凸があり不整ではあるが、長方形を呈する。

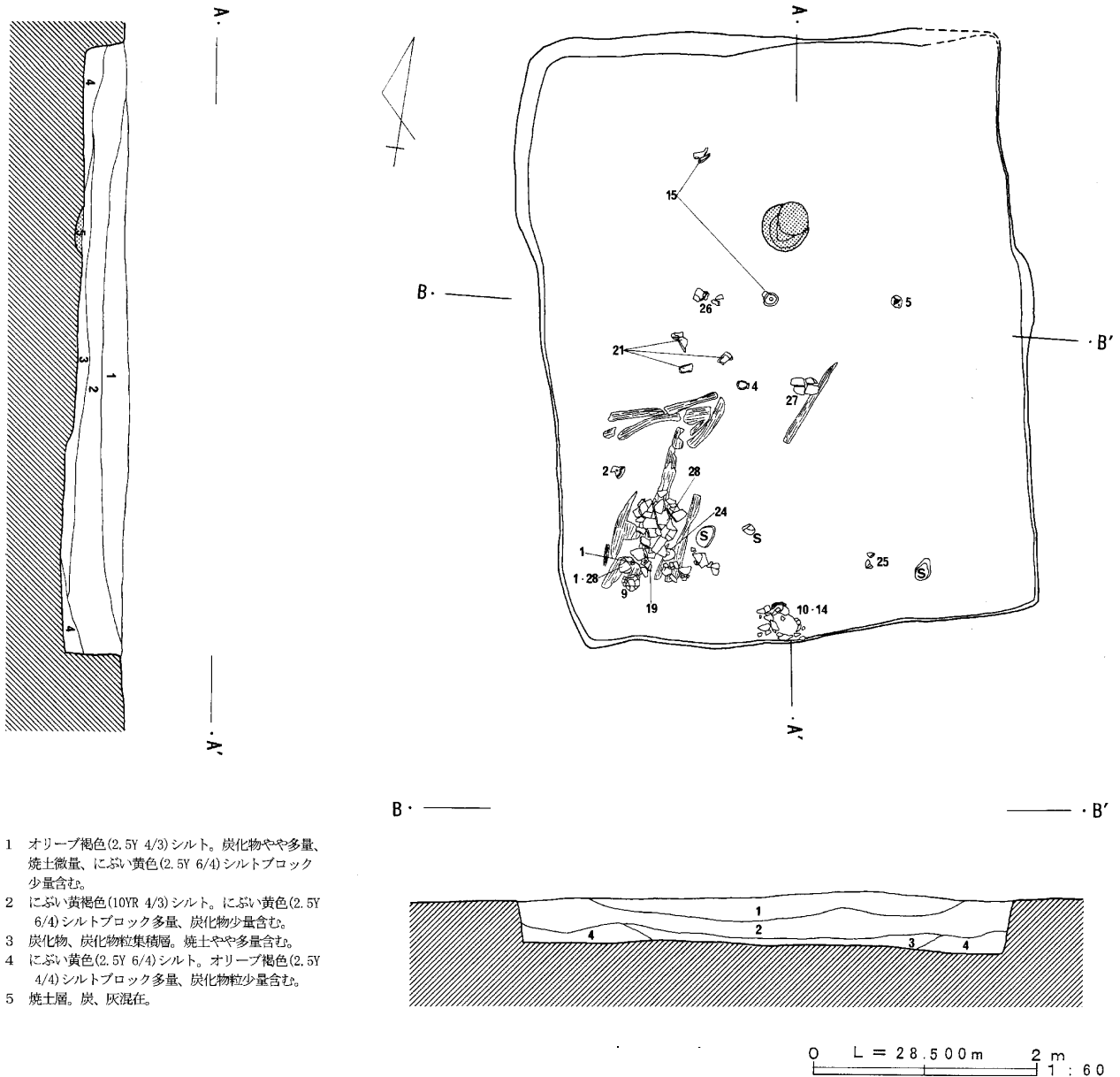
(第84図) 主軸方位は、N-15°-Wである。

壁は、ほぼ直角を成し、床面には角度をつけて、明確に括れて移行する。確認面からの深さは、40~45cmである。

床面は、凹凸がみられるものの、ほぼ全面が硬く締まっている。南半は、他と比較して一段下がり、確認面からの深さは55cmを計る。ピット等は検出されていない。

炉は、中央やや北辺寄りに設けられている。ほぼ円形を呈し、径45cmの規模をもつ。厚さ7cm程が焼土化している。

覆土は、上位に多量の炭化物、少量のにぶい黄色シルトブロック、僅かな量の焼土粒を含むオリーブ褐色シルト(第1層)、中位に多量のにぶい黄色シルトブロック、少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト(第2層)が堆積している。下位層は、2層に区分される。壁際には、多量のオリーブ褐色シルトブロック、少量の炭化物粒を含むにぶい黄色シルト(第4層)、中央部には、層位的には第4層の上位に当たる、焼土粒を多量に含む炭化物・炭化物粒の集積層(第3層)が堆積している。南西隅(全体の1/4)の第3層中には、中央から壁に向けて放射状に、幅7cm前後の炭化材が検出されている。

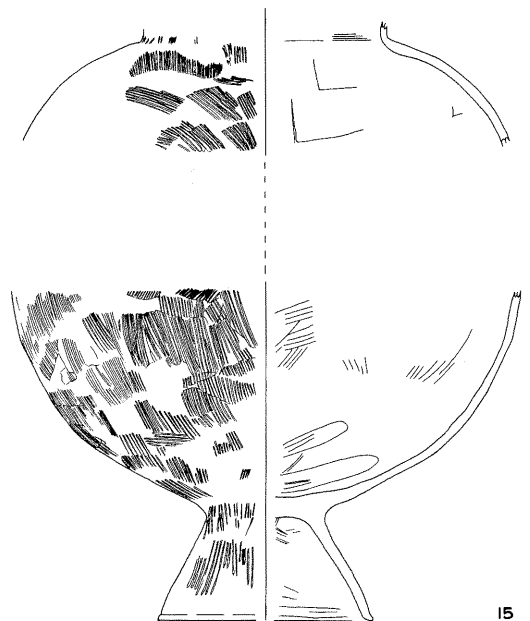
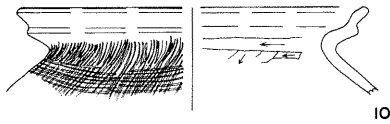
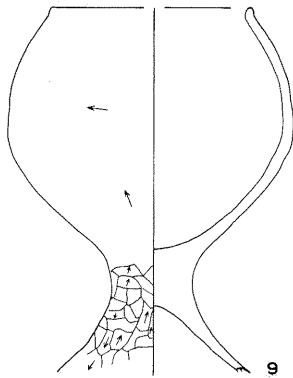
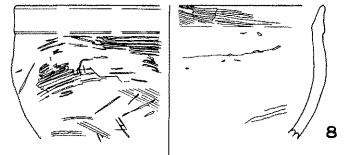
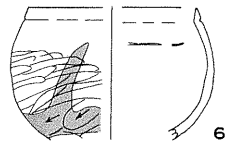
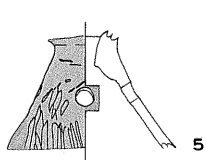
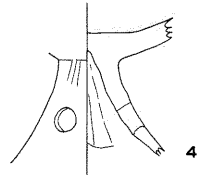
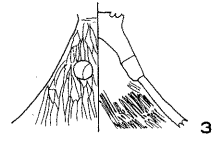
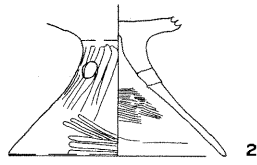
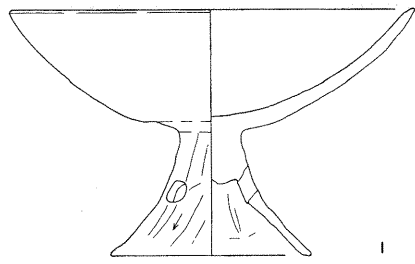


第82図 C区17号住居跡

遺物は、全て土師器であり、炉の南側の床面上あるいは、第3層上に接して検出されている。前者には、高坏（第83図-4）、器台（同-5）、甕（第84図-21）壺（同-26）等がみられる。後者には、高坏（第83図-1、2、3）、盥（同-6、7）、椀（同-8）、台付甕（同-11~13、15）（第84図-16~19）、甕（同-20~24）壺（同-25、27、28）、軽石（図版116）等がみられる。これらのうち、炭化材直上から出土したものが多く。その他、台付甕（第83図-10、14）は、第2層上面からの出土である。

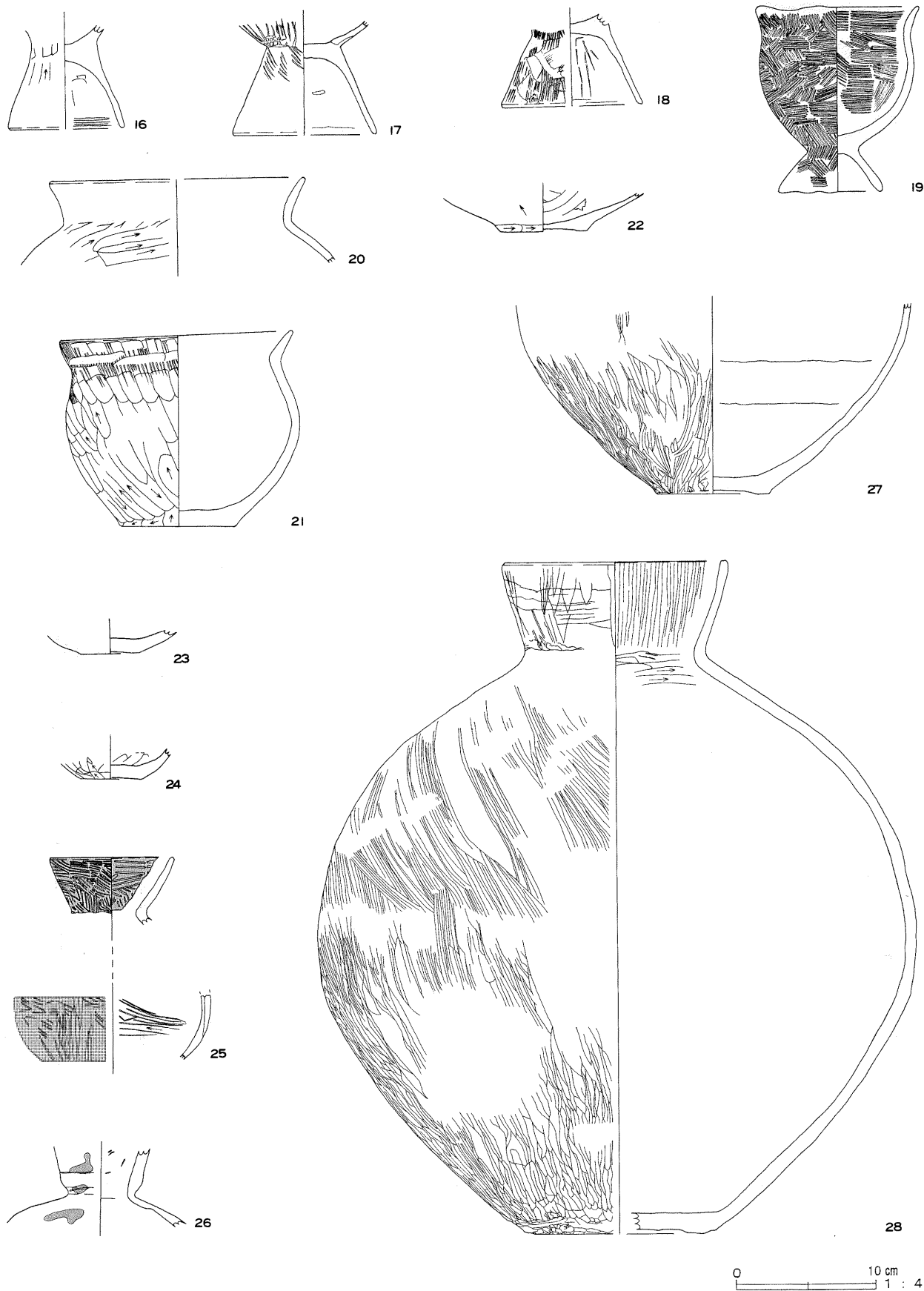
第28表 C区17号住居跡出土遺物観察表（第83・84図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	21.2	13.0	10.5	③①②⑥	②	浅黄橙	4/5	脚部三方透し(円孔)。表面剥離した部分が多い。
2	土師器・高坏	—	—	9.6	①②③④	②	浅黄橙	脚部のみ	脚部内外面一部吸炭。三方透し(円孔)。
3	土師器・高坏	—	—	—	①②⑥④	②	にぶい橙	脚部3/4	脚部三方透し(円孔)。内外面一部吸炭。



0 10 cm 1 : 4

第83图 C区17号住居跡出土遺物(1)



第84図 C区17号住居跡出土遺物(2)

4	土師器・高坏	—	—	—	①②③④⑥	②	橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。坏部内面吸炭。表面剝離した部分が多い。
5	土師器・器台	—	—	—	①②④⑥	②	橙	台部のみ	脚部四方透し(円孔)。内面煤付着。外面及び受台部朱塗。
6	土師器・盃	(8.7)	—	—	④③⑥①	②	にぶい橙	1 / 5	内外面朱塗の痕跡。一部吸炭。
7	土師器・盃	—	—	3.7	④②①	②	橙	底部のみ	底部外面吸炭。
8	土師器・椀	(16.0)	—	—	①⑥②	②	明赤褐	1 / 5	外面一部炭化物付着。
9	土師器・台付盃	(10.2)	(19.5)	(10.2)	①②③⑥	②	にぶい橙	1 / 2	胴部中位外面表面剝離した部分が多い。
10	土師器・台付甕	(18.5)	—	—	⑥①③②④	②	にぶい橙	口縁部 1 / 4	一部吸炭。
11	土師器・台付甕	(16.9)	—	—	③①②④	②	橙	口縁部 2 / 5	一部吸炭。二次加熱。
12	土師器・台付甕	(15.0)	—	—	①②⑥④③	②	にぶい橙	口縁部 1 / 4	
13	土師器・台付甕	(18.0)	—	—	②①③④	②	にぶい橙	口縁部 1 / 4	吸炭。胎土接合面での剝離が多い。二次加熱。
14	土師器・台付甕	22.0	32.6	12.0	①②③⑥④	②	浅黄	3 / 5	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
15	土師器・台付甕	—	—	11.4	⑥①②	②	明赤褐	1 / 3	全面吸炭。外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
16	土師器・台付甕	—	—	(8.0)	⑥①	②	暗赤褐	台部 2 / 3	一部吸炭。二次加熱。
17	土師器・台付甕	—	—	(10.1)	⑥①②③④	②	橙	台部 2 / 3	脚天井部、胴部内面吸炭。二次加熱。No10と同一個体である可能性が高い。
18	土師器・台付甕	—	—	(10.3)	②①⑥③	②	橙	脚部のみ	脚部外面調整時の残留胎土の付着が多い。吸炭。二次加熱。
19	土師器・台付甕	11.5	13.2	7.4	①②⑥④	②	橙	ほぼ完形	二次加熱により外面の1/2が表面剝離。
20	土師器・甕	(18.2)	—	—	③①②⑥	②	にぶい橙	口縁部 1 / 5	表面磨滅した部分が多い。
21	土師器・甕	16.7	13.65	8.4	②④⑥①	②	明赤褐	5 / 6	内面吸炭。外面タール状付着物。底面全面ケズリ。
22	土師器・甕	—	—	6.3	③①⑥	②	明赤褐	底部のみ	底面ナデ。上げ底。
23	土師器・甕	—	—	3.8	③①⑥②④	②	にぶい橙	底部のみ	底面ナデ。上げ底。内面吸炭。
24	土師器・甕	—	—	4.0	⑥①④③②	②	橙	底部のみ	底面ナデ。上げ底状。
25	土師器・壺	8.9	—	—	①②④③⑥	②	浅黄橙	口縁・胴下半	内外面朱塗。吸炭。煤付着。
26	土師器・壺	頸径 4.8			⑥①②④	②	橙	頸部のみ	全体に表面剝離した部分が多い。朱塗の痕跡。
27	土師器・壺	—	—	7.9	①②③④	②	橙	下位 1 / 2	外面黒斑。内面薄く吸炭。
28	土師器・壺	16.1	48.0	13.5	②①④③⑥	②	にぶい橙	1 / 2	外面下半炭化物付着。

18号住居跡 P-16、17、Q-16、17グリッドに位置する。第2確認面の検出である。

(第85図) 北東辺3.84m、南東辺3.58m、南西辺3.50m、北西辺3.78mを計る。各辺に凹凸があり

(第86図) 不整ではあるが、正方形を呈するといえる。

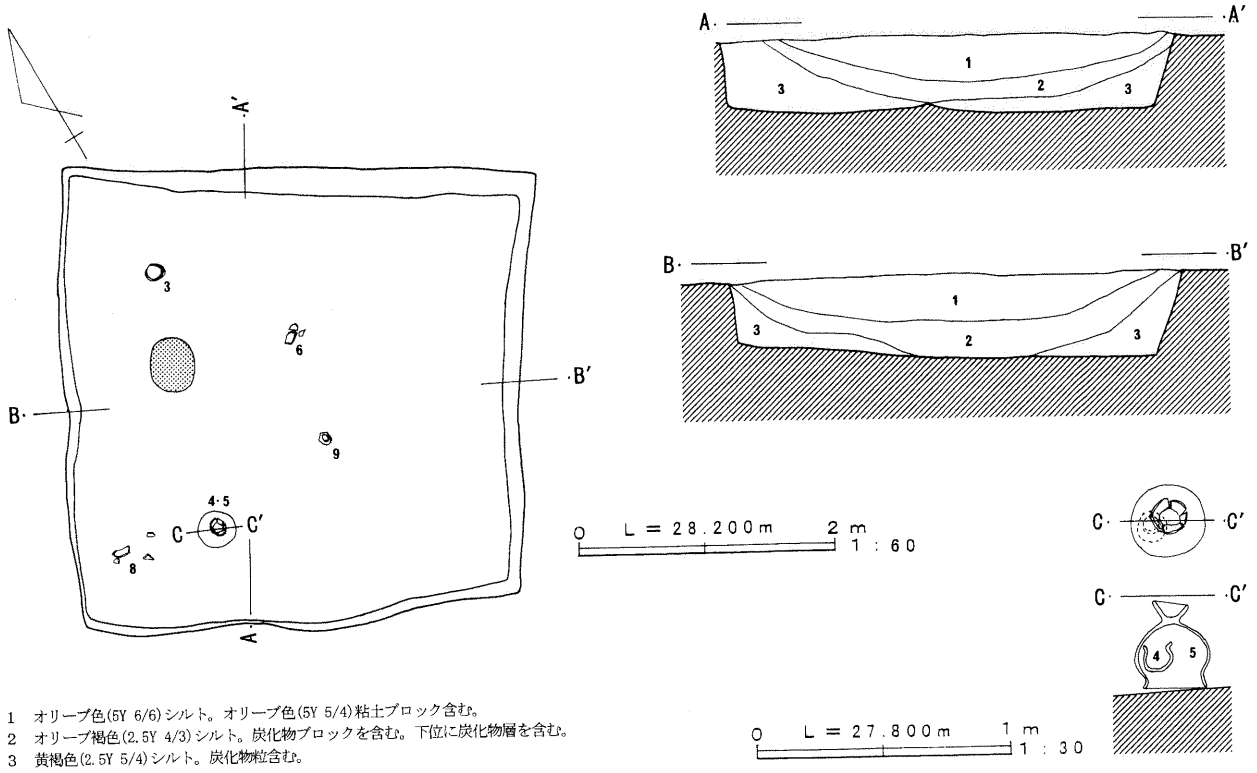
主軸方位は、N-62°-Wである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、床面には角度をつけて、明確に括れて移行する。確認面からの深さは、50~55cmである。

床面は、凹凸がみられるものの、ほぼ全面が硬く締まっている。しかしながら、中央及び北西隅部が高く、他の壁際が低くなるように傾斜している。特に、南東方向に向けては低くなり、確認面からの深さは68cm前後となる。ピットは検出されていない。

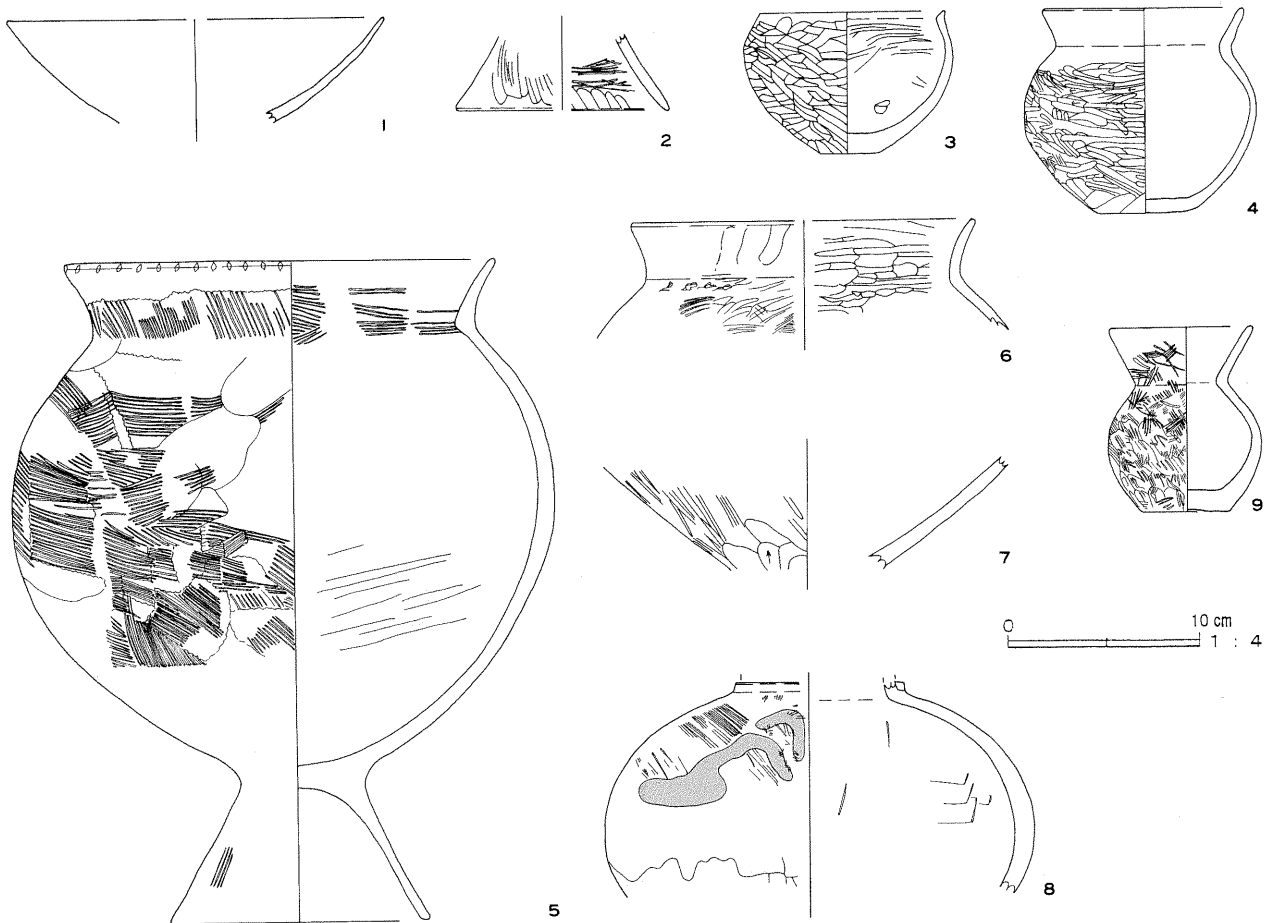
炉は、中央と北西壁の中間、やや北隅寄りに設けられている。北東から南西方向にやや長く、小判形を呈し、45×35cmの規模をもつ。厚さ6cm程が焼土化している。

覆土は、上位にオリーブ色粘土ブロックを含むオリーブ色シルト(第1層)、中位に炭化物ブロックを含むオリーブ褐色シルト(第2層)、下位に炭化物粒を含む黄褐色シルト(第3層)が堆積している。第3層は、壁際が主であり、中央部にはほとんど堆積していない。中央部は、第2層が直接堆積している部分が多い。



- 1 オリーブ色(5Y 6/6)シルト。オリーブ色(5Y 5/4)粘土ブロック含む。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。炭化物ブロックを含む。下位に炭化物層を含む。
- 3 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。炭化物粒含む。

第85図 C区18号住居跡



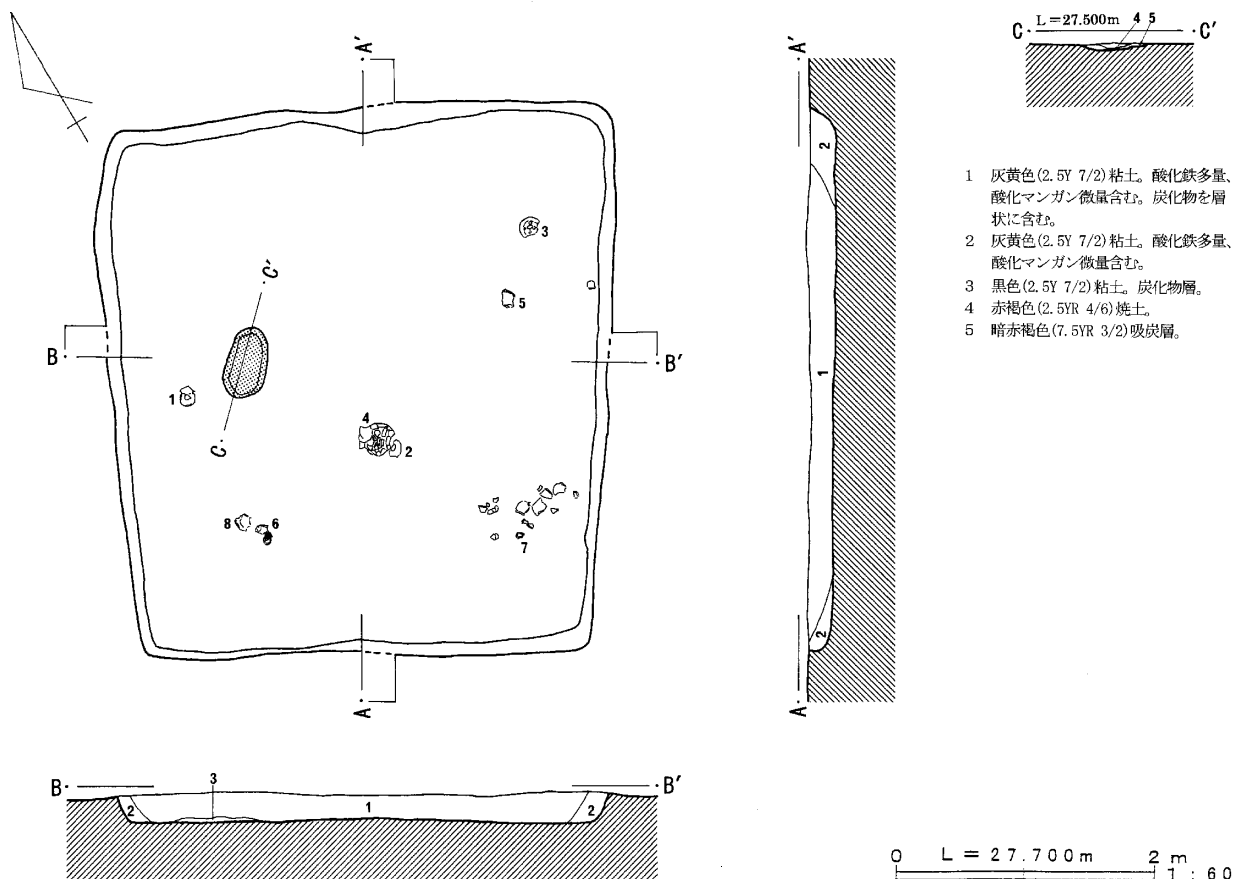
第86図 C区18号住居跡出土遺物

第29表 C区18号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	—	③①②⑥	②	橙	口縁部 1/6	表面剥離しザラつく。
2	土師器・台付甕	—	—	(11.1)	③②①⑥④	②	にぶい黄橙	台部 1/4	内外面煤付着。二次加熱。
3	土師器・盥	9.8	7.5	3.1	④②①⑥	②	浅黄橙	完形	胴部中位に焼成前穿孔(径7×4mm)。
4	土師器・甕	10.6	10.9	5.0	②③①④⑥	②	浅黄橙	完形	
5	土師器・台付甕	22.7	35.0	13.8	⑥②③①	②	橙	ほぼ完形	胴部下位煤付着。一部表面剥離。二次加熱。
6	土師器・台付甕	(17.8)	—	—	②③⑥①④	②	にぶい黄橙	口縁部 1/4	内外面一部吸炭。
7	土師器・台付甕	—	—	—	②③①	②	橙	底部周辺のみ	内面炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・壺	—	—	—	③①②④⑥	②	浅黄橙	肩部 1/4	頸部付凸帯、外面一部朱塗の痕跡。内面一部吸炭。
9	土師器・小型壺	9.6	9.8	4.6	⑥①②③④	②	橙	口縁部 1/4 欠	外面一部表面剥離。

遺物は、全て土師器であり、床面上及び第2層中から検出されている。床面上から出土した遺物には、盥(第86図-3)、甕(同一-4)、台付甕(同一-5)が、第2層中からは、高坏(同一-1)、台付甕(同一-2、6、7)、壺(同一-8)、小型壺(同一-9)等がみられる。床面上から出土した台付甕(5)は、中央と西隅の間で、完形のまま倒立している。台付甕胴部中には、床面から8cm上位に、西側に偏って完形の甕(4)が正立している。正立している甕の底面より上位の台付甕内部は、空洞となっていた。

19号住居跡 P-19、20、Q-19、20グリッドに位置する。第2確認面の検出である。
 (第87図) 北東辺4.24m、南東辺4.48m、南西辺3.56m、北西辺4.30mを計る。各隅とも直角を成
 (第88図) さず、台形を呈するといえる。主軸方位は、N-62°-Wである。



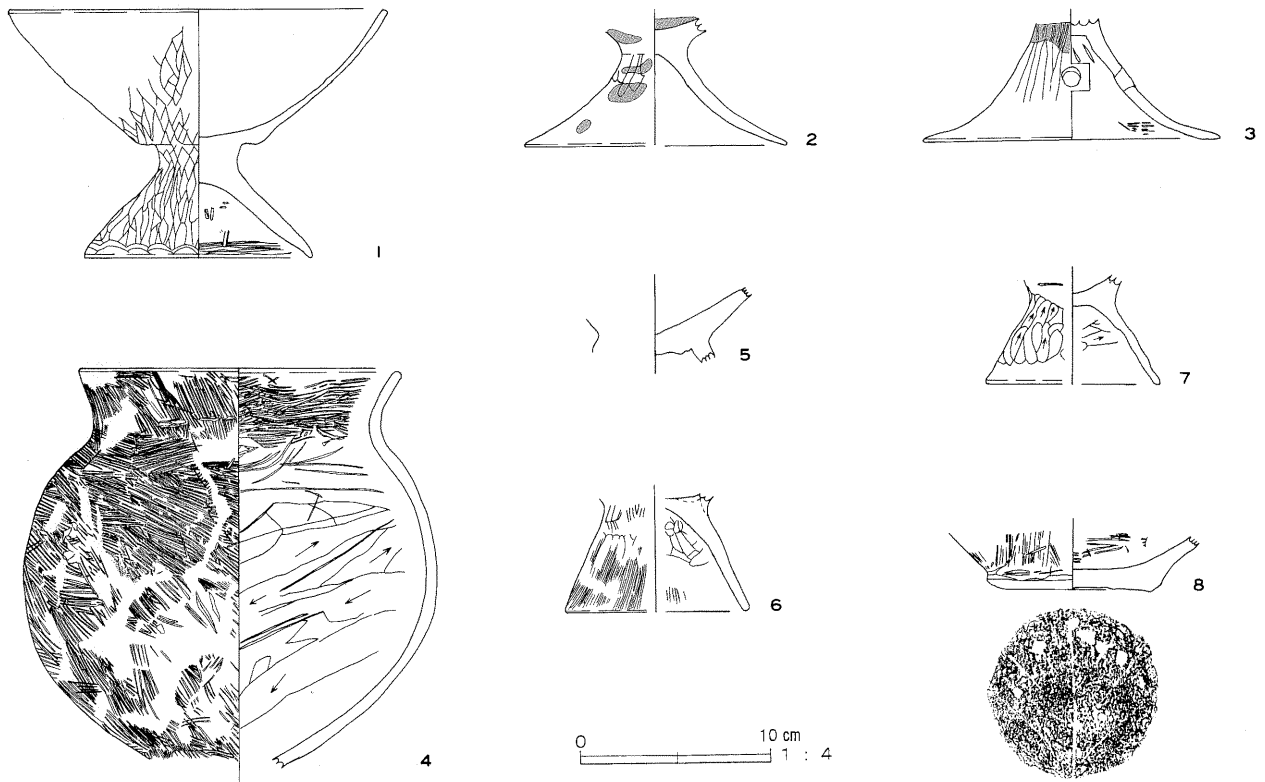
第87図 C区19号住居跡

壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、床面への移行は、緩いカーブを描く部分が多い。確認面からの深さは、20cm前後である。床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、全面が硬く締まっている。ピットは検出されていない。

炉は、中央と北西壁の中間、やや北寄りに設けられている。北東から南西方向にやや長く、長円形を呈し、58×33cmの規模をもつ。厚さ5cm程が焼土化している。

覆土は、大部分が酸化鉄とマンガン粒を多量に、また炭化物を層状に含む灰黄色粘土(第1層)であり、壁際には、第1層とほとんど同質であるが、炭化物を含まない灰黄色粘土(第2層)が堆積している。

遺物は、床面上の、炉の周囲から南東壁にかけて、分散した形で検出されている。全て土師器であり、器種には、高坏(第88図-1、2、3)、台付甕(同-4~7)、壺(同-8)等がみられる。



第88図 C区19号住居跡出土遺物

第30表 C区19号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	(19.3)	13.2	12.0	①④②⑥③	②	にぶい橙	脚部・坏部1/6	全体に吸炭。脚内面全体に煤付着。
2	土師器・高坏	—	—	(13.4)	②③①④⑥	②	にぶい橙	脚部2/3	坏部内外面、脚部外面朱塗。表面剝離した部分が多い。
3	土師器・高坏	—	—	15.6	①②③④⑥	②	浅黄橙	脚部3/4	脚部四方透し(円孔)。接合部外面朱塗残存。
4	土師器・台付甕	(17.0)	—	—	④①③②⑥	②	赤褐	台部欠	外面上位煤、内面下半及び口縁部炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	—	—	—	⑥①②④	②	橙	底部のみ	表面剝離。底部内面吸炭。二次加熱。
6	土師器・台付甕	—	—	(9.3)	②③①⑥	②	にぶい橙	台部2/5	接合前に縦のナデを施し、胴部側胎土をスリップさせた後縦の刷毛目。
7	土師器・台付甕	—	—	(9.0)	③①④②⑥	②	橙	脚部1/2	底部内面吸炭。接合部表面剝離。二次加熱。
8	土師器・壺	—	—	7.1	①②⑥④	②	にぶい橙	底部のみ	外面黒斑。

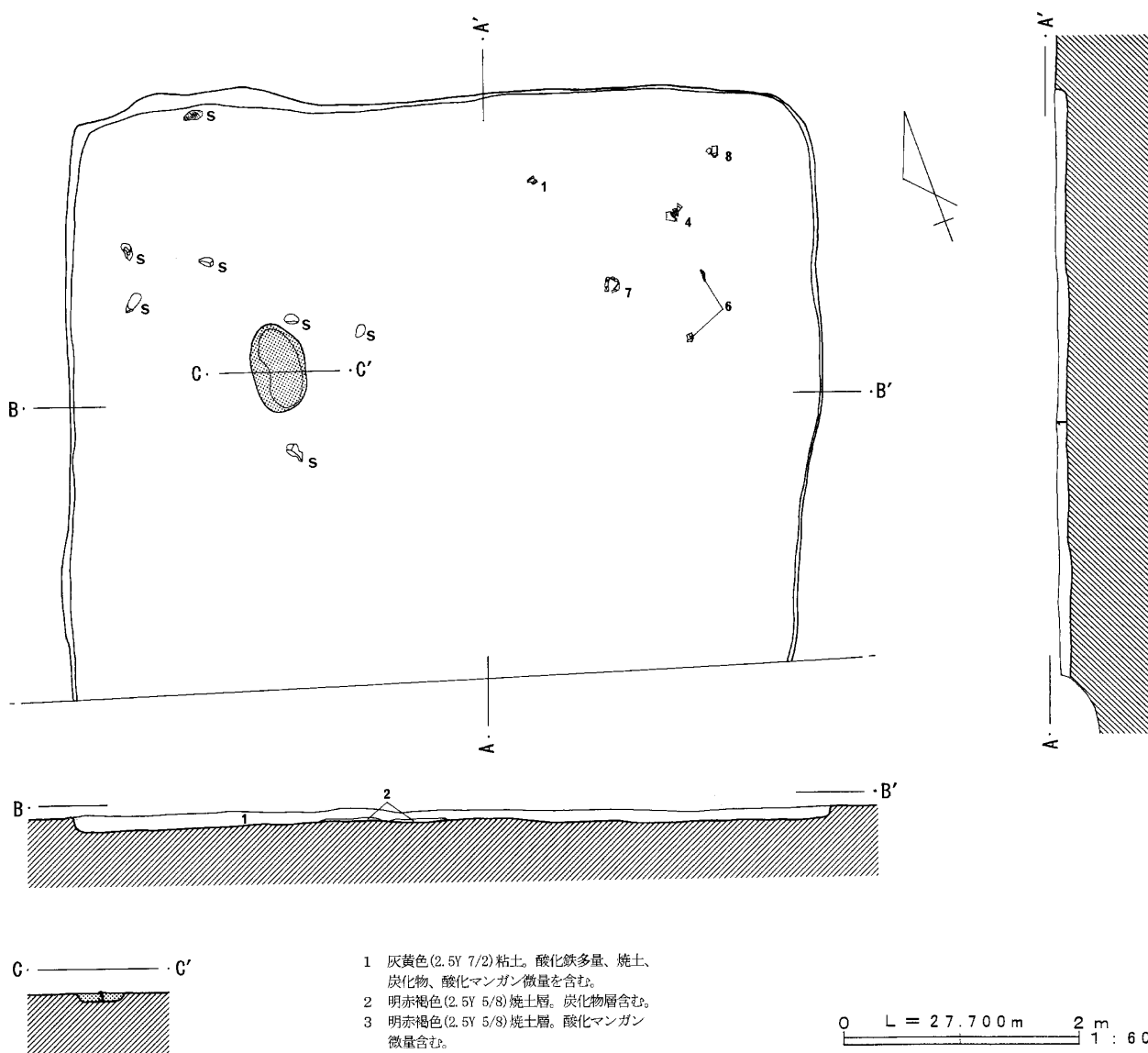
20号住居跡 Q-20、21、R-20、21グリッド、C区北側住居跡群の最南西端に位置する。第2確認面(第89図)の検出である。

(第90図) 基盤層と覆土の区別が不明瞭であり、竪穴南部を削平した時点で、断面により確認・検出されたものである。そのため、辺長の知れたのは北東辺のみである。北東辺は6.46m、南東辺と北西辺の現況は、それぞれ5.00m、5.24mを計る。恐らく、16号住居跡同様、東辺を長軸とした長方形を呈すると思われる。北東辺の長軸方位は、N-72°-Wである。

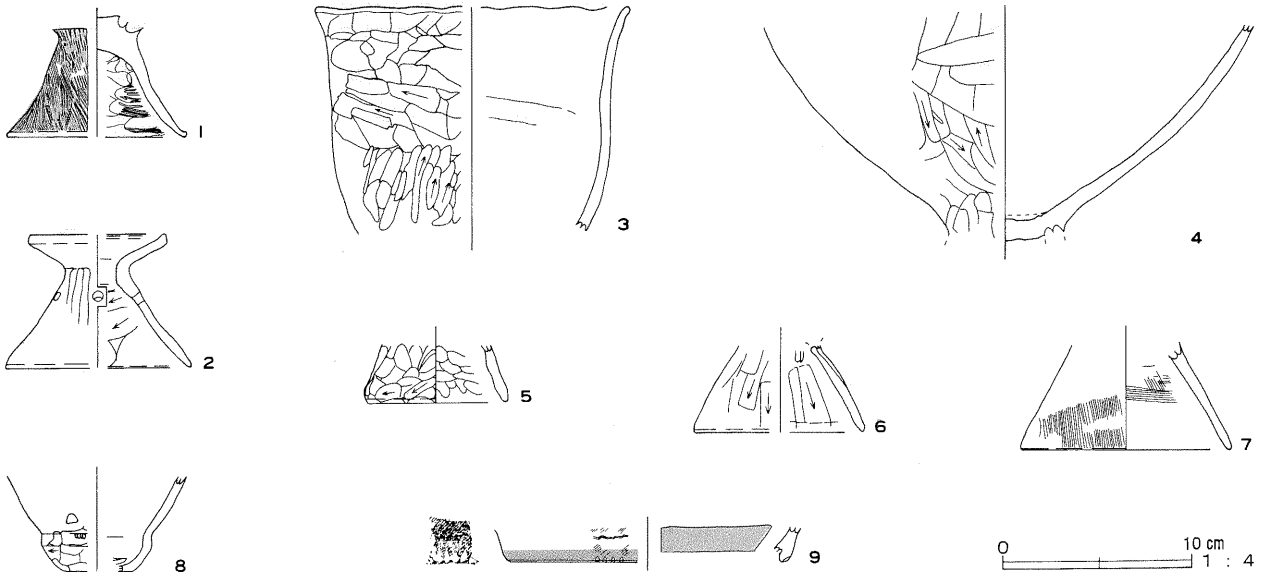
壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは、10cm前後である。

床面は、やや凹凸がみられるものの、ほぼ水平面を成し、全面が硬く締まっている。ピットは検出されていない。

炉は、中央と北西壁の中間、北隅寄りに設けられている。北から南方向に長く、長円形を呈し、78×45cmの規模をもつ。厚さ6cm程が焼土化している。また、周辺部には吸炭及び焼土化した部分が径1m範囲で広がっている。



第89図 C区20号住居跡



第90図 C区20号住居跡出土遺物

第31表 C区20号住居跡出土遺物観察表 (第90図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	(9.8)	⑥③②④①	②	にぶい橙	台部 3/5	全面朱塗。
2	土師器・器台	(7.1)	7.1	(9.8)	②③①④⑥	②	橙	1/3	表面剝離した部分が多い。
3	土師器・甕	16.3	—	—	②③①⑥	②	にぶい橙	上半 1/2	内外面吸炭。一部煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	—	②③⑥①	②	にぶい橙	底部のみ	内外面吸炭。内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	—	—	7.3	③④②①⑥	②	橙	台部 1/4	内外面吸炭。二次加熱。
6	土師器・台付甕	—	—	(8.8)	①④②③	②	明赤褐	台部 2/3	内外面煤付着。二次加熱。
7	土師器・台付甕	—	—	11.0	①⑥②④	②	にぶい橙	台部 2/3	裾部内外面吸炭。内面明褐色。
8	土師器・埴	—	—	(3.4)	①②④⑥	②	赤褐	口縁部欠・1/3	内外面吸炭。二次加熱。
9	土師器・壺	—	—	—	⑥②①④	②	橙	口縁部一部	内外面朱塗。

覆土は、大部分が酸化鉄多量に、焼土・炭化物及びマンガン粒を含む灰黄色粘土（第1層）であり、中央部床面直上には、炭化物を含む焼土層（第2層）が堆積している部分もある。

遺物は、床面上の、炉の周囲から北東壁にかけて検出されている。5×12cm前後の長円礫はカマド周囲に、土器類は東隅寄りの部分に集中している。土器は、全て土師器であり、器種には、高坏（第90図-1）、器台（同一-2）、甕（同一-3）、台付甕（同一-4～7）、埴（同一-8）、壺（同一-9）等がみられる。

21号住居跡 V-19、20、W-19、20グリッドに位置する。第2確認面の検出である。15号畠跡を切断している。（第91図）

（第92図） 北東辺7.59m、南東辺7.27m、南西辺7.53m、北西辺7.34mを計り、ほぼ正方形を呈する。（第93図）

（第94図） 壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、凹凸はみられるものの、全面に硬く締まり、安定している。壁直下には、幅8～15cmの周溝が、カマド部分を除いて圍繞する。

ピットは、豎穴対角線状に4穴、南隅に1穴がみられる。

対角線上の4穴は、柱穴であり、北70×54cm、深さ44cm、東84×72cm、深さ66cm、南76×64cm、深さ54cm、西84×72cm、深さ66cmの規模をもつ。芯々間はそれぞれ、北—東間3.60m、東—南間3.60m、南—西間3.65m、西—北間3.60mを計り、一辺3.60mの正方形に配されていたことが知れる。

南隅の1穴は、83×80cmの規模をもつ。隅は丸みをもつが、ほぼ正方形を呈する。断面は逆台形を呈するが、中央部が僅かに窪むため、逆将棋駒型というべきかもしれない。底面の形態も隅円方形を呈し、中心部の深さは60cmを計る。貯蔵穴である。

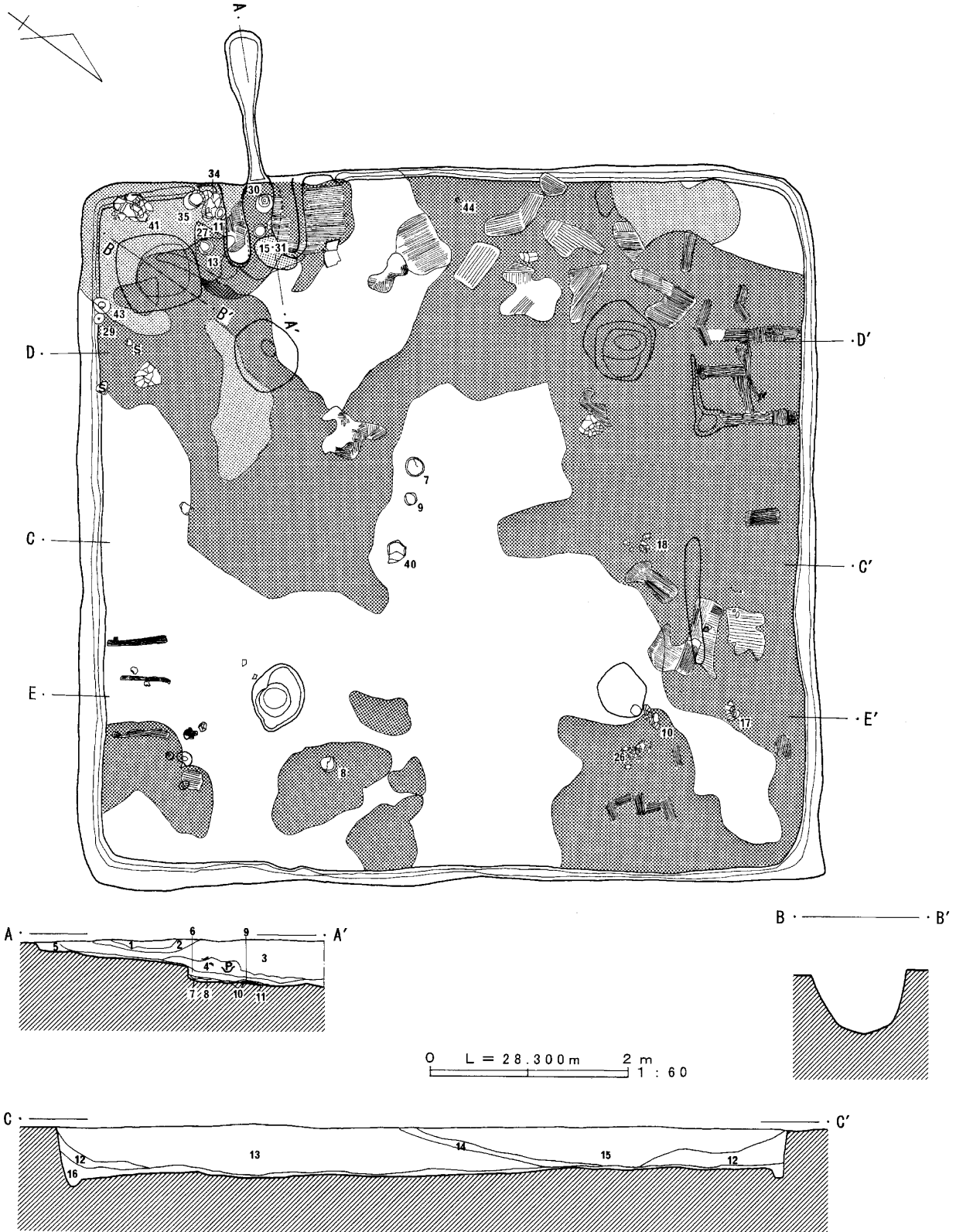
柱穴及び貯蔵穴の壁あるいは底面は、床面と共に焼土化し、炭化物（木炭）で覆われている（第16層）。炭化物は、全体に細かく破碎されているが、南西壁寄り及び北隅寄り部分では、炭化したイネ科植物が束になった状態で検出されている。また、南西壁直下・東隅寄り部分では、壁と直交して、幅32cm・52cmの間隔で、3本の炭化木材が平行して検出されている。木材の太さは、12cm前後である。イネ科植物は萱材として、また、木材の種類はコナラであり、垂木として利用されたものであろうと思われる。

北西壁直下・西隅寄り部分（西柱穴と壁の間）では、周溝から、周溝と同一幅で、漢字の『円』の字状に、溝が掘り込まれている。壁からの奥行きは100cm、幅100cmを計り、正方形を呈している。『円』の字状溝の壁は、全て焼土化しており、溝内には溝幅に合わせたコナラ材がはめ込まれている。用途は不明であるが、出入口に関する施設であろうかと思われる。

カマドは、南西壁南隅寄りに設置されている。主軸方位を住居と若干違い、N—130°—Wとしている。全体の長さは、2.50mを計る。火床は、全て豎穴内に位置し、奥壁を豎穴ラインに一致させている。箱形を呈するが、奥部が僅かに脹らむ。全面幅26cm、奥部最大幅31cm、奥行き95cmを計る。底面は、奥に向けて僅かに上昇する。奥壁はほぼ直立し、13cmの高さで、煙道へは段を成して移行する。煙道は、火床奥壁の段から、奥へ20cmの部分まで火床からの平面形が連続し、結果として幅を10cmまで減じており、その幅で段から115cmの長さまで続いていく。煙道の底面は、奥に向けて直線を呈して上昇している。段から115cmの地点に至って、底面は水平となり、煙出しへと移行する。煙出し部の平面形は、徳利型を呈するようになる。最奥幅が最も広く、36cmを計る。長さは、40cmである。

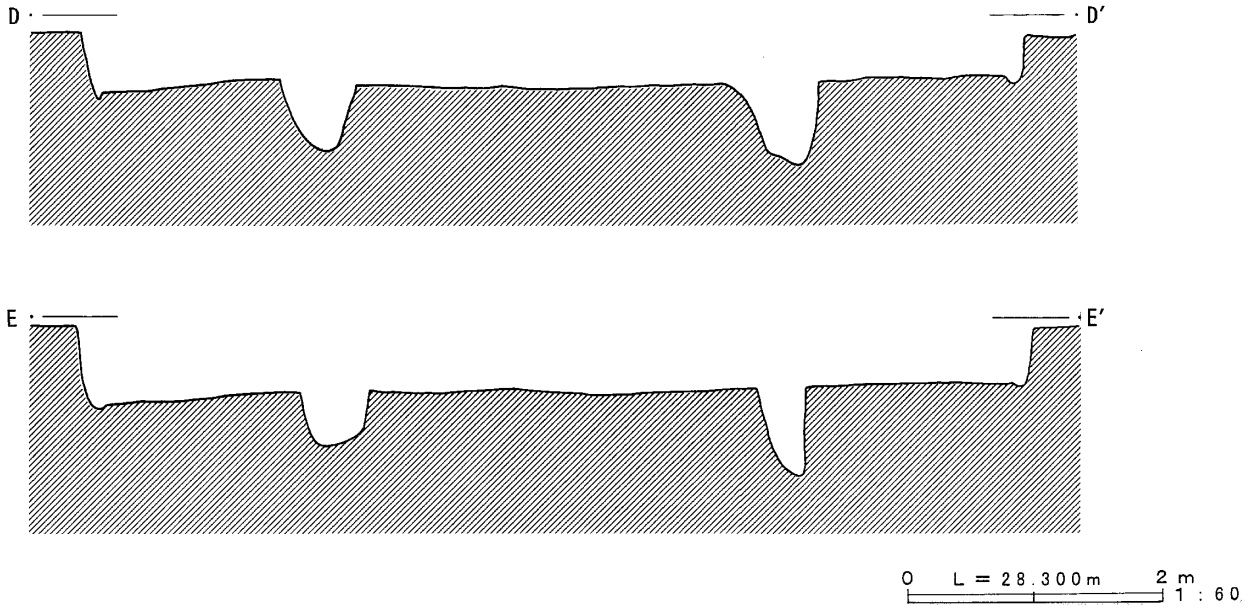
覆土は、最下層が部分的に焼土を含む木炭層（第16層）であり、壁際ににぶい黄色シルト（第12層）が載る。その上位には、南方向から黄褐色シルト（第13層）が入り込み、全体が炭化した灰オーリーブシルト（第14層）をベルト状に挟んで、最上位には、にぶい黄色シルト（第15層）が堆積している。このうち、第13層及び第15層のそれぞれの下位部分には、炭化物が薄く層を成している。

遺物は、大部分が床面上からの出土であり、一部木炭層（第16層）中に含まれていたものもある。土器は、全て土師器であり、その他滑石製紡錘車（第94図—44）、砥石（同—45）もみられる。土器の器種には、坏（第93図—1～29）、高坏（同—30～33）、甕（第94図—34～40）、甗（同—41）、短頸壺（同—42、43）等がみられる。



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗赤褐色(5Y 5/3)シルト。炭化物粒を少量含む。</p> <p>2 橙色(5YR 6/6)シルト。天井の焼土。</p> <p>3 にぶい黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。下部に炭化物層を含む。</p> <p>4 暗赤褐色(5YR 3/3)シルト。明赤褐色(5YR 5/8)ブロックを含む。焼土。</p> <p>5 暗赤褐色(5YR 3/2)シルト。下部に炭化物層を含む。焼土。</p> <p>6 にぶい赤褐色(2.5Y 5/4)シルト。灰、炭化物を含む。</p> <p>7 朱色焼土層(天井崩落土)。</p> <p>8 灰白色灰純層。</p> | <p>9 灰白色灰純層。</p> <p>10 朱色焼土層(火床)。</p> <p>11 小豆色焼土層(火床全面)。</p> <p>12 にぶい黄色(2.5Y 6/3)シルト。</p> <p>13 黄褐色(2.5Y 5/4)シルト。下位に薄く炭化物層を含む。</p> <p>14 灰オリーブ色(5Y 4/2)シルト。全体が炭化している。</p> <p>15 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。下位に薄く炭化物層を含む。</p> <p>16 部分的に焼土を含む木炭層。</p> |
|--|--|

第91図 C区21号住居跡(1)



第92図 C区21号住居跡(2)

カマド内では、火床右奥部に高坏 (30) が倒立して出土している。また、中央やや前面に寄った位置にも高坏 (31) が倒立し、その上面には坏 (15) が被せられて出土している。

カマド左袖から、貯蔵穴の上端を経て竪穴南隅へと続く一帯には、坏(11、13、27)、甕(34、35)、甗(41) が出土している。また、貯蔵穴と南東壁の間からは、坏(29)、短頸壺(43) が出土している。

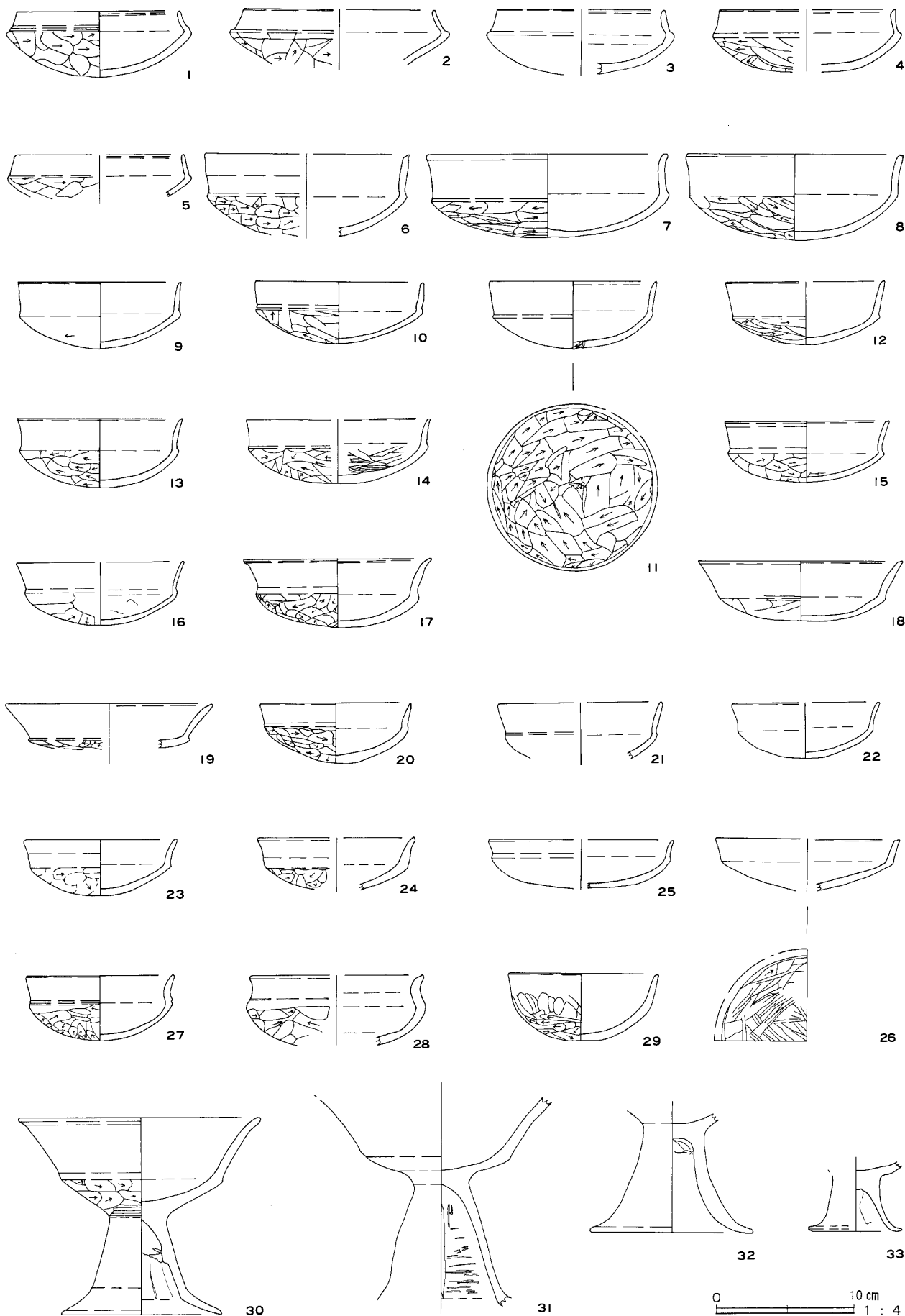
カマド右袖側は、遺物の出土がほとんどみられず、南西辺中央部の壁直下から滑石製紡錘車(44) が1点出土したのみである。

西柱穴の外周では、遺物の出土はみられない。

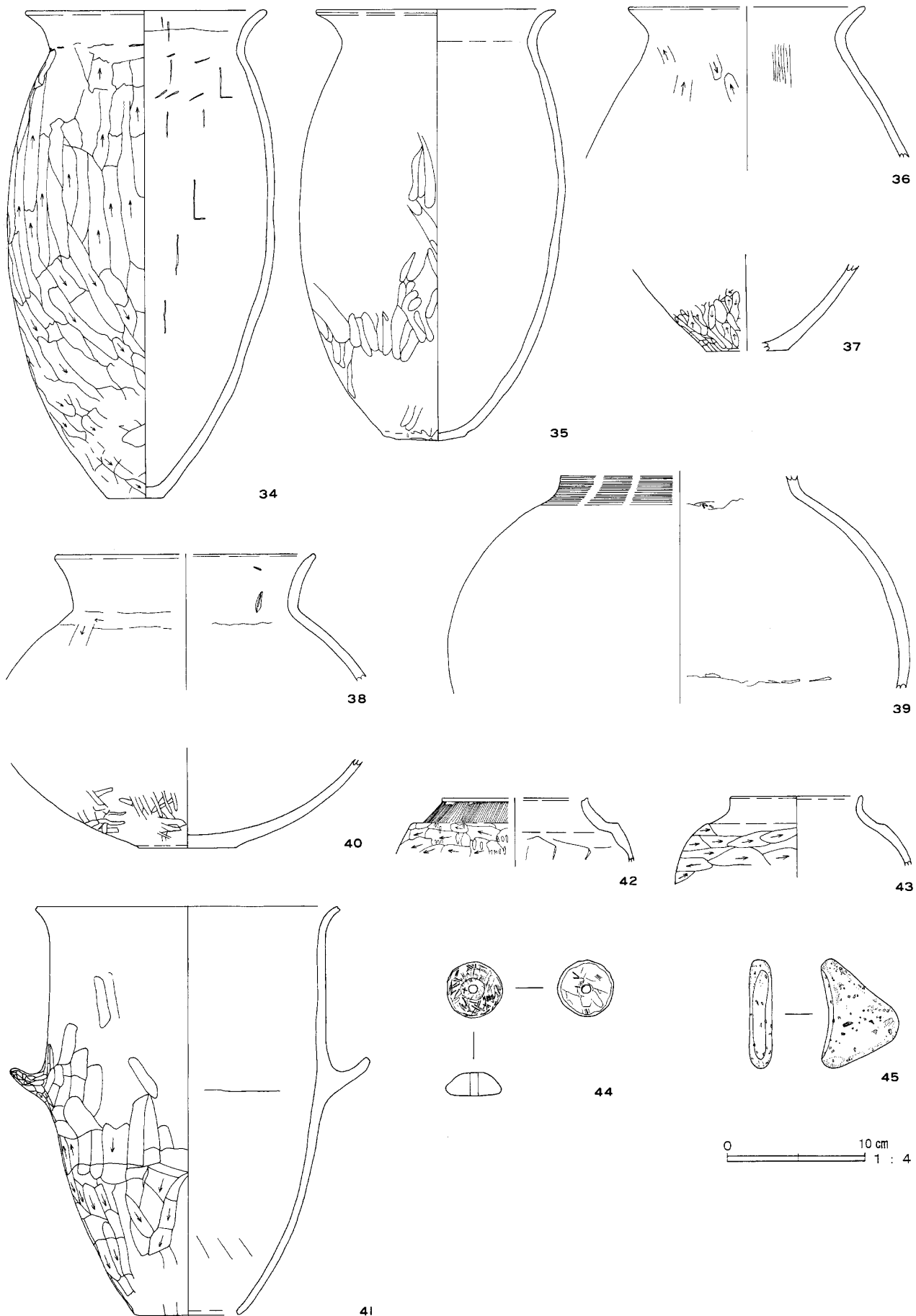
北柱穴の外周からは、坏(10、17、18、26)、東柱穴の外周からは、坏(8) が出土している。また竪穴中央部からは、坏(7、9)、甕底部(40) が出土している。

第32表 C区21号住居跡出土遺物観察表 (第93・94図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	11.8	4.8	—	①⑥②	②	明赤褐	4/5	全面吸炭。一部黒色処理。
2	土師器・坏	(13.8)	—	—	①⑥	②	褐	1/6	内外面黒色処理。
3	土師器・坏	—	(4.7)	—	⑥①②③	②	橙	1/3	内外面黒色処理。
4	土師器・坏	(13.0)	4.5	—	②④①⑥	②	にぶい赤褐	1/3	内外面黒色処理。
5	土師器・坏	(12.2)	—	—	①②④⑥	②	明赤褐	上位1/4	内外面吸炭。
6	土師器・坏	(14.9)	—	—	①③⑥②④	②	橙	1/5	内面一部表面剝離。
7	土師器・坏	17.7	6.0	—	①④②⑥	②	橙	完形	内外面一部吸炭。
8	土師器・坏	15.8	6.2	—	③①④②⑥	②	明赤褐	4/5	内外面一部吸炭。
9	土師器・坏	11.9	4.8	—	①②④	②	明赤褐	完形	内面磨き痕。表面剝離した部分が多い。外面タール状付着物。
10	土師器・坏	12.3	4.5	—	③②①	②	明赤褐	完形	内外面一部表面剝離。
11	土師器・坏	12.2	4.9	—	①③⑥②④	②	橙	一部欠	内外面吸炭。
12	土師器・坏	(11.7)	4.4	—	②④①⑥	②	明赤褐	2/5	内外面一部吸炭。
13	土師器・坏	12.0	5.0	—	②①④③	②	明赤褐	完形	内外面一部吸炭。



第93図 C区21号住居跡出土遺物(1)



第94图 C区21号住居跡出土遺物(2)

14	土師器・坏	(13.2)	4.8	—	①④②③⑥	②	明赤褐	1/2	内外面一部吸炭。
15	土師器・坏	11.0	4.5	—	①③④②⑥	②	橙	完形	内面一部吸炭。
16	土師器・坏	(12.2)	4.5	—	①③②④	②	赤褐	1/2	内面磨減した部分が多い。
17	土師器・坏	13.7	5.0	—	①④③②⑥	②	明赤褐	一部欠	内面一部表面剥離。
18	土師器・坏	15.0	4.4	—	②①③④⑥	②	明赤褐	一部欠	口縁部内外面一部吸炭。
19	土師器・坏	(15.1)	—	—	①③②⑥④	②	橙	口縁部 2/3	体部内面表面剥離。
20	土師器・坏	11.0	4.3	—	①③②④	②	明赤褐	1/3	内面一部表面剥離。
21	土師器・坏	(11.8)	—	—	①②⑥	②	橙	上位 1/3	内外面共表面剥離。
22	土師器・坏	(10.3)	(4.0)	—	①②④⑥	②	橙	1/4	内外面一部吸炭。
23	土師器・坏	11.6	4.1	—	①②④③	②	明赤褐	一部欠	口縁上位はナデ、下位は横ナデ。
24	土師器・坏	(11.4)	(3.8)	—	①②④⑥	②	明赤褐	1/4	表面剥離した部分が多い。
25	土師器・坏	(13.4)	—	—	①⑥④②	②	明赤褐	1/4	内外面一部吸炭。
26	土師器・坏	13.5	—	—	①④	②	赤褐	1/4	体部内面ナデ、外面ミガキ黒色処理。
27	土師器・坏	10.8	5.7	—	①④③②⑥	②	橙	一部欠	内外面吸炭。
28	土師器・坏	(12.5)	(5.1)	—	①②⑥④	②	明赤褐	1/3	
29	土師器・坏	11.9	5.0	—	①④③②⑥	②	赤褐	完形	内外面吸炭、一部煤付着。
30	土師器・高坏	17.6	14.4	11.8	①②④③⑥	②	明赤褐	ほぼ完形	内外面吸炭。
31	土師器・高坏	—	—	—	①②④③⑥	②	橙	口縁部・裾部欠	一部吸炭。一部表面剥離。
32	土師器・高坏	—	—	11.9	②①④⑥	②	橙	脚部のみ	外面一部煤付着。
33	土師器・高坏	—	—	(6.2)	②①	②	明赤褐	脚部のみ	脚内外面煤付着。
34	土師器・甕	17.7	35.8	(4.1)	⑥①③④	②	にぶい橙	3/5	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
35	土師器・甕	17.2	31.7	6.0	①④③②⑥	②	にぶい橙	一部欠	外面煤付着。内面吸炭。二次加熱。
36	土師器・甕	(17.4)	—	—	①②③④⑥	②	にぶい橙	上位 1/4	二次加熱により表面剥離した部分が多い。
37	土師器・甕	—	—	(6.0)	①④③②⑥	②	にぶい褐	底部 1/4	内面吸炭、外面煤付着。二次加熱。
38	土師器・甕	(19.1)	—	—	④①③②⑥	②	橙	口縁部 1/2	内外面一部吸炭。
39	土師器・甕	頸部 (18.3)			①④②⑥	②	橙	胴上半部 1/3	内外面吸炭。
40	土師器・甕	—	—	7.0	①②⑥③④	②	にぶい褐	底部のみ	内外面吸炭。
41	土師器・甕	21.4	29.9	7.6	①②⑥③④	②	にぶい橙	4/5	内外面吸炭。
42	土師器・短頸壺	(10.6)	—	—	②①④⑥	②	明赤褐	口辺部 1/2	内外面吸炭。
43	土師器・短頸壺	9.6	—	—	①③②⑥	②	橙	上位のみ	内外面吸炭。一部表面剥離。
44	滑石製・紡錘車	上端径 1.8 下端径 4.0 高さ 1.8 孔径 0.7						完形	
45	砥石	長さ 8.0 幅 1.7 厚さ 5.6						完形	側面一面使用。

22号住居跡 W-21グリッドに位置している。第2確認面の検出である。15号畠跡を切断している反面、東隅から西隅にかけての中央部を掘削により切断されている。

(第96図) 北東辺4.40m、南東辺4.45m、南西辺推定4.25m、北西辺推定4.45mを計る。北東から南西方向に僅かに長い、ほぼ正方形を呈するものと思われる。

主軸方位は、N-58°-Eである。

壁は、ほぼ直角を成し、床面には角度をつけて、明確に括れて移行する。確認面からの深さは、40cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸もみられず、ほぼ全面が硬く締まって安定している。

ピットは、竪穴の対角線上に4穴、カマド両脇に1穴ずつ、計6穴検出されている。

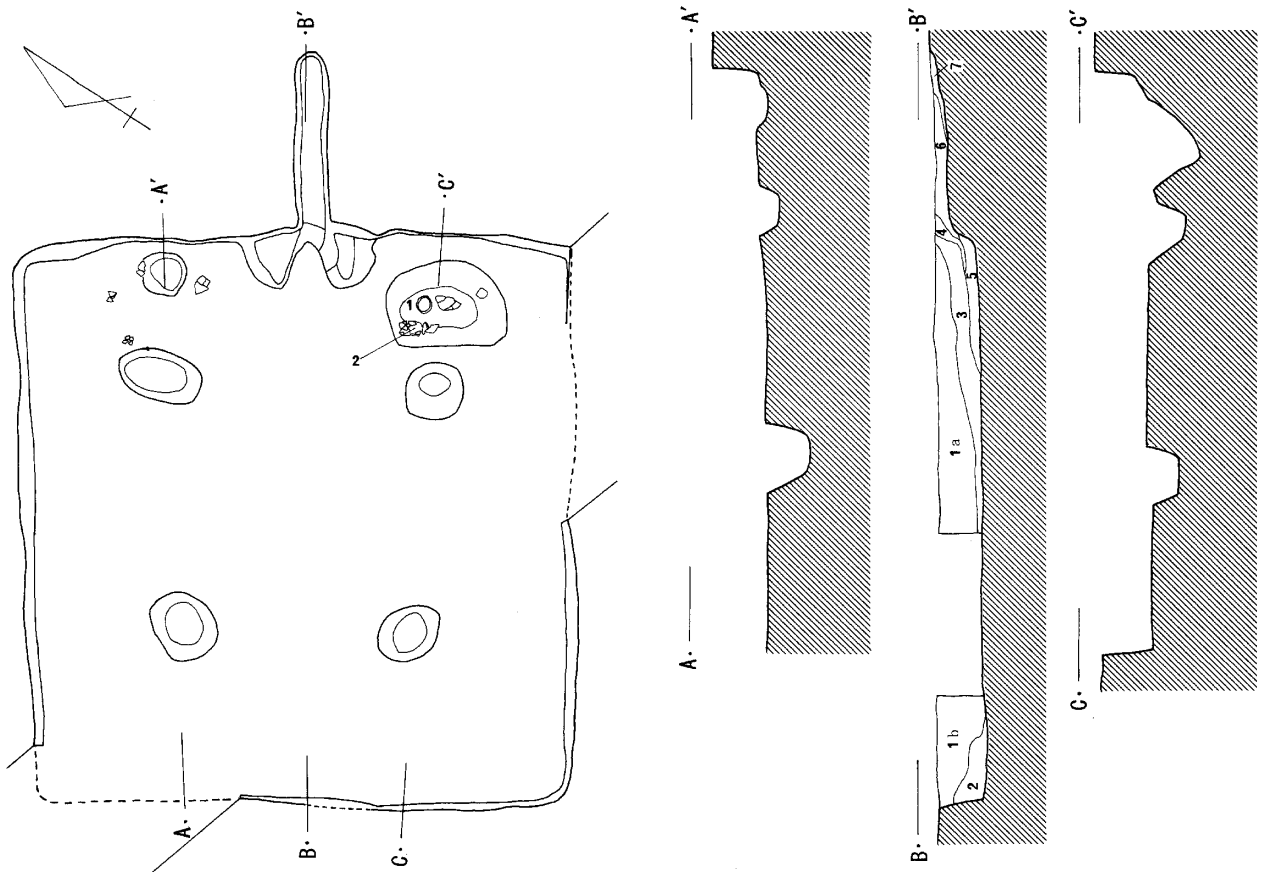
対角線上の4穴は、柱穴であり、北68×40cm、深さ16cm、東50×46cm、深さ26cm、南54×42cm、深さ24cm、西56×46cm、深さ36cmの規模をもつ。芯々間はそれぞれ、北-東間2.20m、東-南間2.00m、南-西間1.85m、西-北間2.00mを計り、一辺2.00m前後の正方形が意識されて柱穴が配されていたことが知れる。

カマド右脇の1穴は、やや丸みをもつものの、概ね長方形を呈する。95×68cm、深さ38cmの規模をもち、断面は緩いV字形を呈する。貯蔵穴であると思われる。

カマド左脇の1穴は、やや丸みをもつものの、概ね正方形を呈する。36×34cm、深さ8cmの規模をもち、断面は逆台形を呈する。

カマドは、北東壁中央に設けられている。火床は、全て竪穴内に位置し、奥壁は竪穴北東ラインに一致する。幅35cm、奥行き50cmを計り、ほぼ箱形を呈する。奥壁は、ほぼ垂直に15cm立ち上がり、ほぼ水平面を成す煙道へと移行する。水平面は75cm程継続して、僅かな傾斜をもつ煙出しへ移行する。煙道から煙出しの幅は、25cm前後である。煙出しの長さも75cm程であり、全体の長さは、2.00mとなる。

覆土は、上位に灰黄褐色シルト（第1層）が堆積しているが、東部のカマド周辺では焼



- 1a 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。焼土ブロック、炭化物を少量含む。
- b 灰黄褐色(10YR 5/2)シルト。マンガン、酸化鉄を多量、粘土ブロック中量、下位に炭化物を層状に含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。マンガン、酸化鉄、粘土ブロック多量含む。
- 3 暗灰黄色(2.5Y 4/2)シルト。マンガン多量、粘土ブロック中量、焼土、酸化鉄、炭化物を少量含む。
- 4 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン、焼土、炭化物を多量含む。
- 5 焼土、炭化物流入層。灰含む。
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン、焼土粒を多量に、炭化物微量に含む。
- 7 炭化物、焼土層。

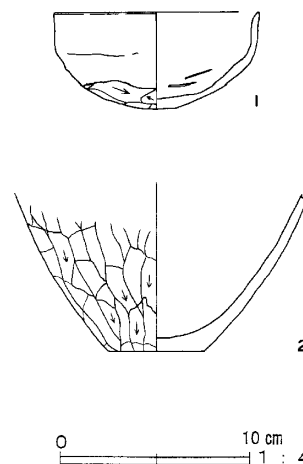
0 L = 28.300 m 2 m
1 : 60

第95図 C区22号住居跡

第33表 C区22号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・埴	10.8	5.0	—	③②⑥①	②	橙	完形	内面底部指頭による押圧。
2	土師器・甕	—	—	5.0	①⑥④②	②	にぶい橙	底部のみ	全面吸炭。二次加熱。

土ブロックや炭化物を含み(第1a層)、西部ではこの他に酸化鉄・マンガン粒を含む(第1b層)ため、基本的に同一層であるものの、2層に区分されたものである。中位には、多量のマンガン粒、中量粘土ブロック、少量の炭化物・焼土粒・酸化鉄を含む暗灰黄色シルト(第3層)、壁際を中心とした下位には、多量の酸化鉄、マンガン粒、粘土ブロックを含むにぶい黄色シルトブロック(第2層)が堆積している。しかしながら、第2層は西方部分に限られている。全体に投入土の様相を呈している。



第96図 C区22号住居跡出土遺物

遺物は、全て土師器の小片であり、床面上及び貯蔵穴壁に接して検出されている。器種は、坏(第96図—1)、甕(同一—2)等がみられるのみである。

23号住居跡 W-22、23、X-22、23グリッドに位置している。第2確認面の検出である。東隅部は、(第97図) 46号土坑によって削平されている。

(第98図) 北東辺7.12m、南東辺7.00m、南西辺7.86m、北西辺6.20mを計る。北西辺に対して南西辺が極端に長く、台形を形作っていること、また南西辺が『く』の字状に張り出していること等により、東側は矩形を呈しているものの、西側は多角形を呈する感があり、全体では不整形を呈するものといわざるを得ない。

北東辺を主体とした方位は、N-126°-Eである。

壁は、ほぼ直角を成して立ち上がる。確認面からの深さは、30cm前後である。

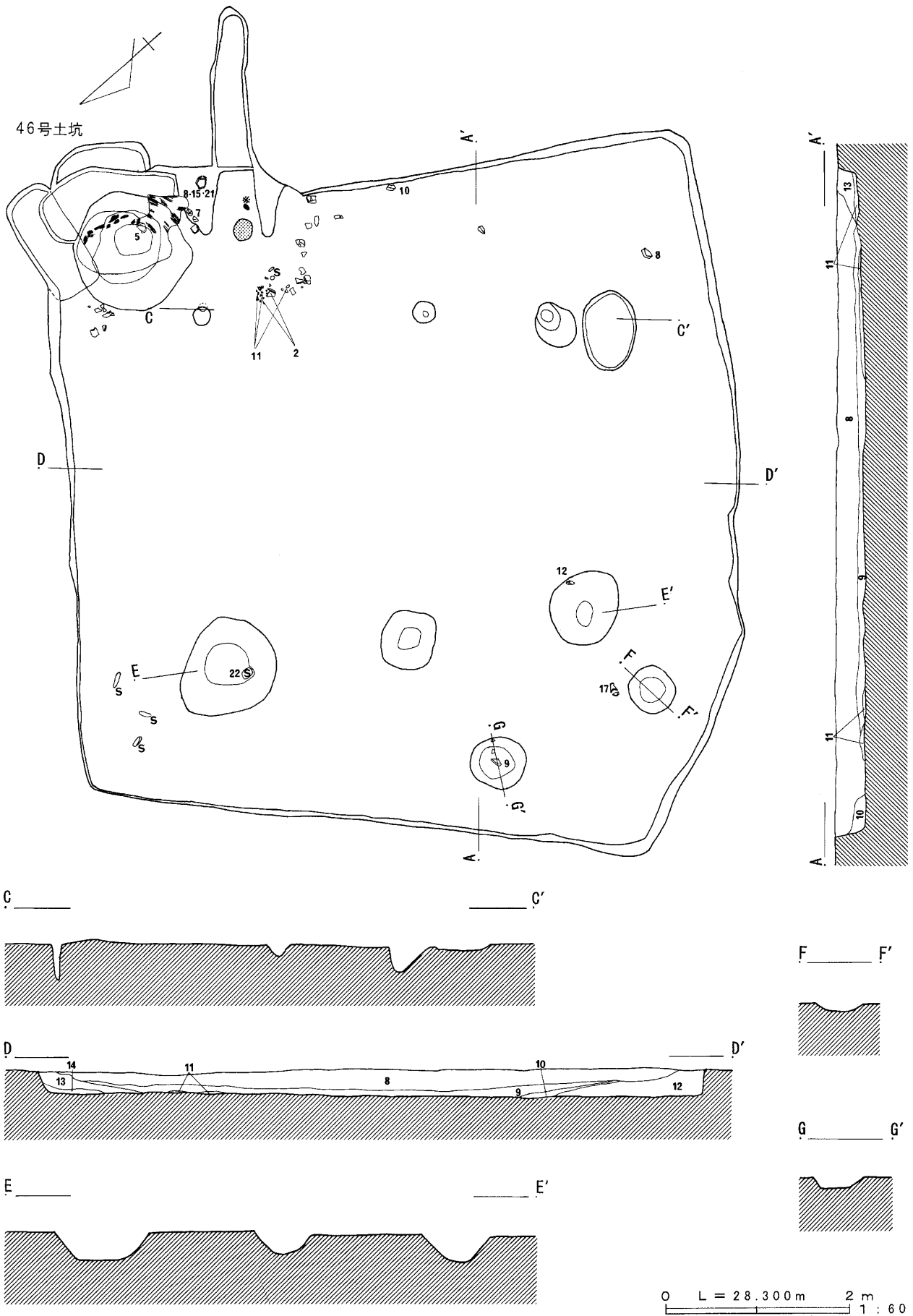
床面は、ほとんど凹凸もみられず、ほぼ全面が硬く締まって安定している。

ピットは、カマド左脇に1穴、南東壁沿い、一直線上に3穴(第97図C-C')、北西壁沿い、一直線上に3穴(同E-E')、西隅に2穴(同F-F'、G-G')、計9穴検出されているカマド左脇ピットは、上面を46号土坑によって削平されているため、形態は不明であるが、残存面の形態はほぼ円形(径105~110cm)を呈する。しかし下方に移行するに従って方形を呈するようになり、底面は、不整ながら長方形(70×55cm)を呈する。床面からの深さは、50cmを計る。

南東壁沿いの3穴は、北東側から順に、径20cm—深さ43cm、径24cm—深さ13cm、52×42cm—深さ28cmを計る。また芯々間は、北東側から順に、2.45m、1.32mを計る。

北西壁沿いの3穴は、北東側から順に、112×100cm—深さ32cm、6258cm—深さ24cm、80×75cm—深さ30cm、芯々間は、北東側から順に、2.00m、1.95mを計る。

これら6穴は、いずれも柱穴であり、それぞれ一直線上に配された柱穴は、3穴のうち中央が浅いという特徴をもつ。しかしながら両柱列は、平行線上には配されていない。両柱列の北東端の芯々間は3.85mであるのに対して南西端の芯々間は3.32mであり、縦穴の



第97图 C区23号住居迹(1)

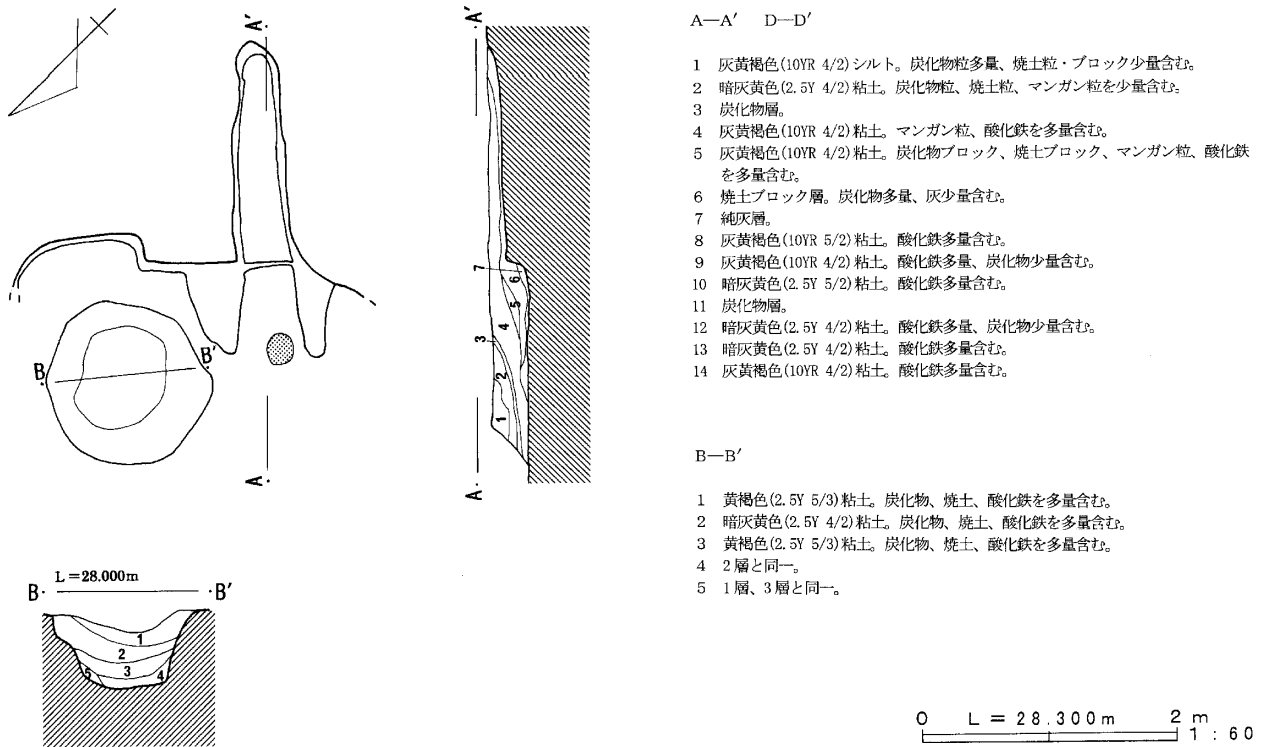
台形形態と逆の台形を呈しているものである。

西隅の2穴は、南側が径50cm、深さ6cm、北側が径60cm、深さ12cmを計り、いずれも浅く、円形を呈する。

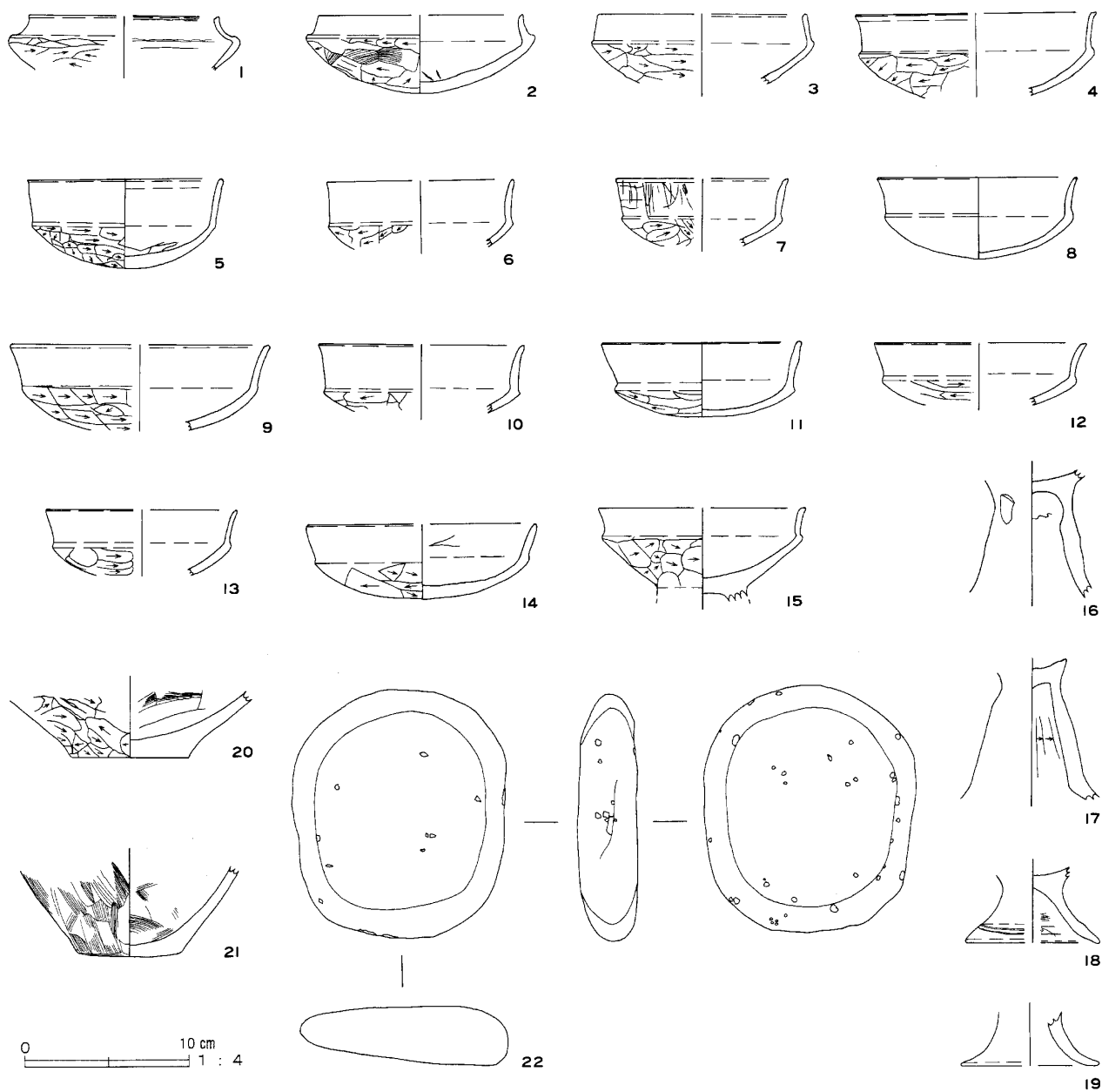
カマドは、南東壁東隅寄りに設置されている。火床を含む燃焼部は、全て竪穴内に位置し、奥壁は、竪穴ラインと一致する。火床自体は小さく、径20cm程である。燃焼部は台形を呈し、前面幅55cm、奥幅36cm、長さ85cmを計る。底面は、ほぼ水平である。奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、15cmの高さで、僅かに傾斜する煙道へと移行する。煙道は、125cmの長さの間、少しずつ上昇を続け、燃焼部奥壁上端から11cm高くなったところで煙出しの奥壁に到達している。煙道の幅は32cmであり、奥に向けて僅かに減じていく。奥壁部では22cmとなる。全体の長さは、2.10mを計る。

覆土は、上位が灰褐色粘土(第8層)、第8層の下面に少量の炭化物を含む灰黄褐色粘土(第9層)、もしくは暗灰黄色粘土(第13層)が堆積している。壁際には、少量の炭化物を含む暗灰黄色粘土(第12層)、もしくは灰黄褐色粘土(第14層)が堆積している。第12層の上面には、暗灰黄色粘土(第10層)が堆積している部分もある。また、床面上には、場所によっては炭化物層もみられる。

遺物は、カマドおよび貯蔵穴周辺、北隅柱穴周辺から出土している。前者には、土師器坏(第99図-2、5、8、11)、高坏(同一-15)、甕(同一-21)等が見られる。後者では、砥石(同一-22)を初めとして、長円礫(編み物石)が出土している。



第98図 C区23号住居跡(2)



第99図 C区23号住居跡出土遺物

第34表 C区23号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(11.5)	—	—	①④⑥③②	②	褐	口辺部 1/5	内外面一部吸炭。
2	土師器・坏	12.3	4.8	—	①②③⑥	②	にぶい褐	3/4	内面表面剥離。内外面一部吸炭。
3	土師器・坏	(12.5)	—	—	①⑥③②④	②	橙	1/4	内外面吸炭。
4	土師器・坏	(14.6)	—	—	③①②④⑥	②	にぶい橙	1/3	
5	土師器・坏	11.8	5.3	—	①②③④⑥	①	橙	一部欠	内面一部炭化物附着。
6	土師器・坏	(11.2)	—	—	②①④⑥	②	にぶい橙	1/6	表面剥離した部分が多い。外面一部吸炭。
7	土師器・坏	10.2	—	—	①②③④⑥	②	にぶい橙	1/5	内外面一部吸炭。
8	土師器・坏	(11.9)	5.0	—	③①④②	②	にぶい橙	1/2	内面半還元。一部吸炭。
9	土師器・坏	(15.6)	—	—	①③⑥	①	にぶい橙	1/4	内面表面剥離。
10	土師器・坏	(12.4)	—	—	②③④①⑥	②	にぶい橙	1/8	一部吸炭。
11	土師器・坏	12.0	4.5	—	②④①③⑥	②	橙	3/4	
12	土師器・坏	(12.8)	—	—	①④②⑥	②	橙	1/5	
13	土師器・坏	(11.5)	—	—	②④③①⑥	②	橙	1/4	内外面磨滅した部分が多い。
14	土師器・坏	12.0	4.5	—	①②③⑥	②	橙	1/3	二次加熱。

15	土師器・高環	(12.4)	—	—	②①⑥④③	②	橙	坏部 1/2	底面吸炭。
16	土師器・高環	—	—	—	⑥③①②④	②	浅黄橙	脚部 1/2	表面剥離した部分が多い。
17	土師器・高環	—	—	—	③②①④	②	橙	脚部 3/4	外面磨滅した部分が多い。
18	土師器・台付甕	—	—	(8.0)	③④①②	②	浅黄橙	脚部 1/4	全面吸炭。
19	土師器・高環	—	—	(8.4)	③①④⑥②	②	にぶい橙	脚部 1/4	外面一部吸炭。
20	土師器・甕	—	—	7.0	③①⑥④	②	明赤褐	底部のみ	内外面一部吸炭。
21	土師器・甕	—	—	6.4	①②③⑥	②	にぶい黄褐	底部のみ	内外面吸炭。
22	砥石	長さ 15.1 幅 12.9 厚さ 3.55					完形		

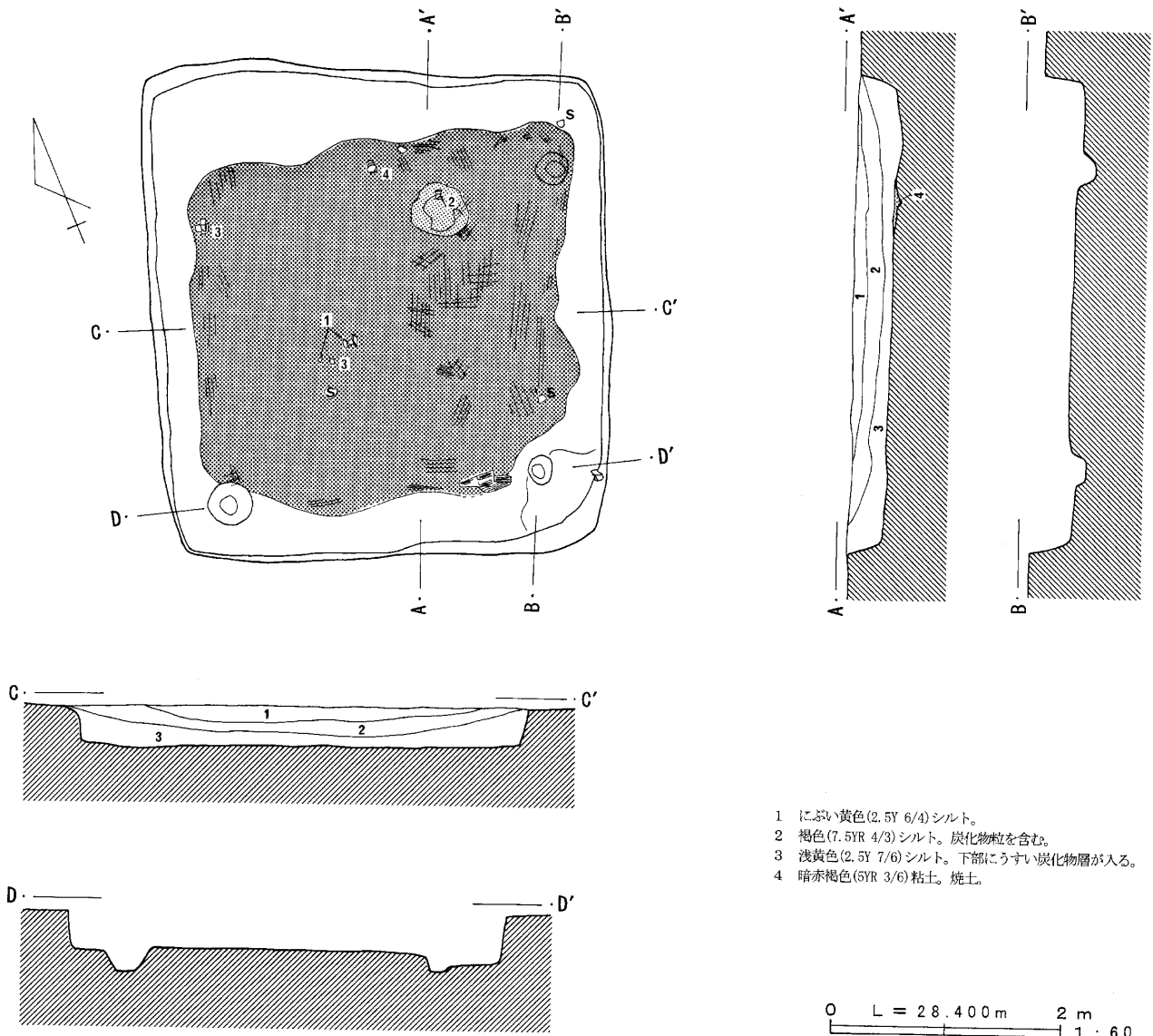
24号住居跡 W-20、X-20、21グリッドに位置している。第2確認面の検出である。

(第100図) 北東辺4.10m、南東辺4.12m、南西辺4.34m、北西辺4.40mを計る。各隅がやや丸みを

(第101図) もつが、ほぼ正方形を呈するといえる。

主軸方位は、N-19°-Eである。

壁は、ほぼ直角を成して立ち上がる。確認面からの深さは、35cm前後である。



第100図 C区24号住居跡

床面は、ほとんど凹凸もみられず、ほぼ全面が硬く締まって安定している。しかし、南隅は一段低くなり、確認面からの深さは、45cmとなる。

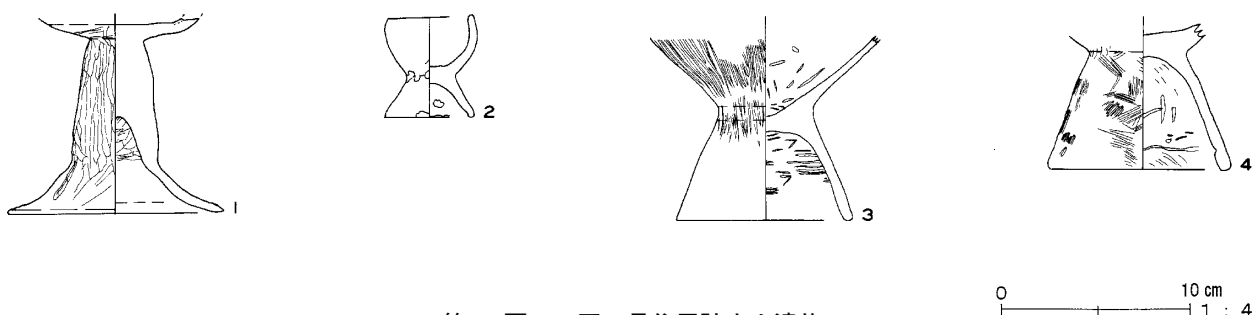
ピットは、北を除く各隅に3穴検出されている。それぞれ円形を呈し、規模は、東—28×26cm、深さ12cm、南—24×20cm、深さ10cm、西—40×37cm、深さ19cmである。柱穴であると思われ、芯々間は、東—南が2.65m、南—西が2.73mを計る。

炉は、中央と北東壁の中間、東隅寄りに設けられている。ほぼ円形を呈し、径45～50cmである。厚さ6cm程が焼土化している。

覆土は、上位ににぶい黄色シルト（第1層）、中位に炭化物を含む褐色シルト（第2層）、下位に浅黄色シルト（第3層）が堆積している。

床面上の、各柱穴で結ばれた方形区画内には、炭化物が広がっている。炭化物は、藁状のものが多く、繊維の方向は、方形の各辺と同一方向を示している。炉の南側では、一部編み物状に交差した状況も呈している。また、これら炭化物下面の床面は、薄く焼土化した部分が多い。

遺物は、炉内からミニチュア土器・台付鉢（第101図—2）、炭化物上面から土師器高坏（同一—1）、土師器台付甕（同一—3、4）が出土している。高坏及び台付甕は、いずれも脚部のみ出土である。また高坏の脇からは10×10cmに割られた自然礫も出土している。



第101図 C区24号住居跡出土遺物

第35表 C区24号住居跡出土遺物観察表（第101図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	11.4	⑥①②④	②	橙	脚部のみ	坏部内面丁寧なミガキ。全面吸炭。二次加熱。
2	土師器・小型台付鉢	4.3	5.3	4.6	①④②③	②	赤褐	一部欠	鉢部内面黒色処理。外面吸炭。内面暗赤褐色。
3	土師器・台付甕	—	—	9.8	④③①⑥	②	橙	脚台部・底部一部のみ	全面吸炭。胴部内外面煤付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	—	—	9.2	①③④⑥②	②	にぶい橙	脚部のみ	胴部底面表面剝離。二次加熱。内面褐灰色

25号住居跡 X—20、21、Y—20、21グリッドに位置している。第2確認面の検出である。

(第102図) 北東辺3.40m、南東辺3.55m、南西辺3.75m、北西辺3.60mを計る。北東辺がやや短く、

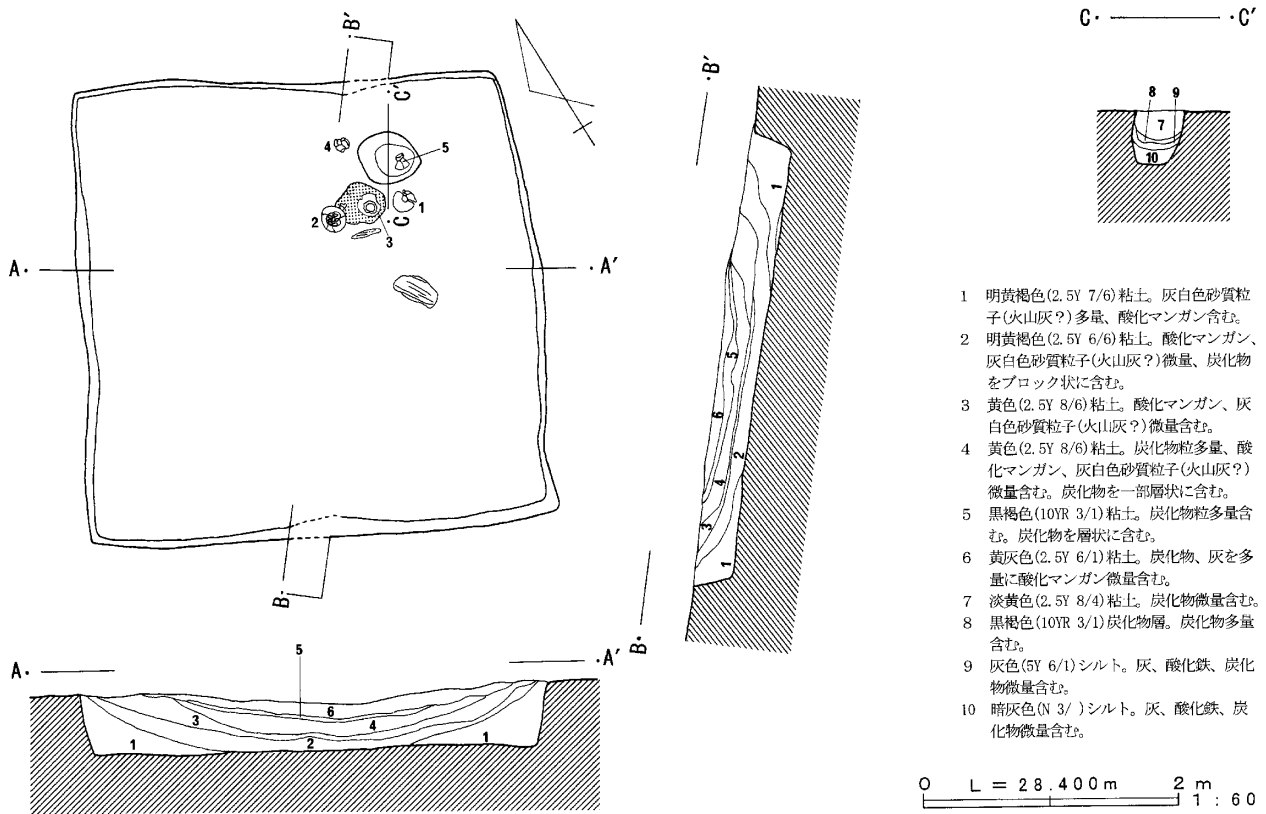
(第103図) 南西辺がやや長いいため不整ではあるが、ほぼ正方形を呈するといえる。

主軸方位は、N—27°—Eである。

壁は、ほぼ直角を成して立ち上がる。確認面からの深さは、50cm前後である。

床面は、ほとんど凹凸もみられず、ほぼ全面が硬く締まって安定している。

炉は、中央と北東壁の中間、やや東隅寄りに設けられている。不整形であるが、径40～47



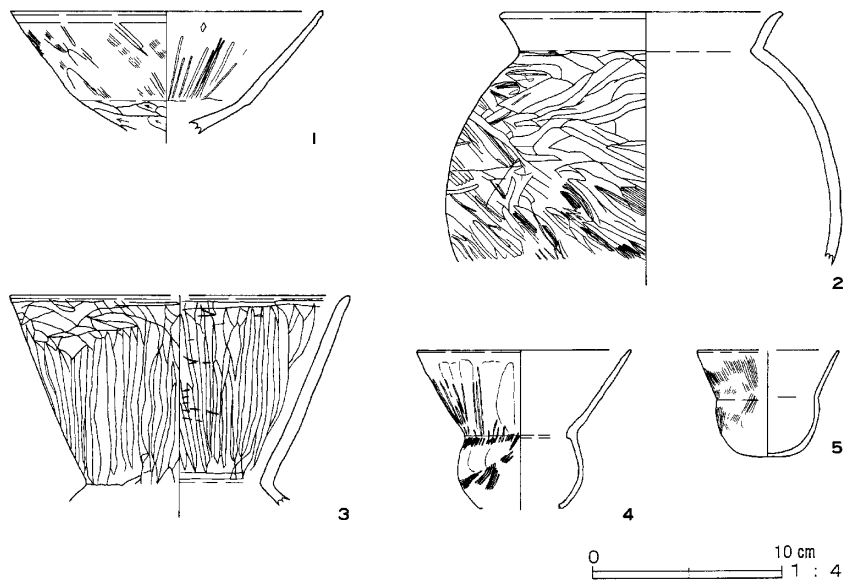
- 1 明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土。灰白色砂質粒子(火山灰?)多量、酸化マンガン含む。
- 2 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土。酸化マンガン、灰白色砂質粒子(火山灰?)微量、炭化物をブロック状に含む。
- 3 黄色(2.5Y 8/6)粘土。酸化マンガン、灰白色砂質粒子(火山灰?)微量含む。
- 4 黄色(2.5Y 8/6)粘土。炭化物粒多量、酸化マンガン、灰白色砂質粒子(火山灰?)微量含む。炭化物を一部層状に含む。
- 5 黒褐色(10YR 3/1)粘土。炭化物粒多量含む。炭化物を層状に含む。
- 6 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。炭化物、灰を多量に酸化マンガン微量含む。
- 7 淡黄色(2.5Y 8/4)粘土。炭化物微量含む。
- 8 黒褐色(10YR 3/1)炭化物層。炭化物多量含む。
- 9 灰色(5Y 6/1)シルト。灰、酸化鉄、炭化物微量含む。
- 10 暗灰色(N 3/1)シルト。灰、酸化鉄、炭化物微量含む。

第102図 C区25号住居跡

cmを計る。厚さ6cm程が焼土化しており、南端は6×26cmの長円礫が埋置されている。

ピットは、炉脇(北東壁側)に検出されている。40×40cmを計り、隅円方形を呈する。ピット内覆土は、下位2層が暗灰色シルト(第10層)及び、灰色シルト(第9層)であり、いずれも灰、炭化物、酸化鉄を含んでいる。

中位に帯状の炭化物層(第8層)を挟んで、上位には、僅かに炭化物を含む淡黄色粘土(第7層)が堆積している。炉との強い関連性が窺える。



第103図 C区25号住居跡出土遺物

第36表 C区25号住居跡出土遺物観察表 (第103図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	16.5	—	—	②①⑥③④	②	明赤褐	坏部のみ	内外面煤付着。
2	土師器・甕	14.3	—	—	①⑥②③④	②	赤褐	上位のみ	外面煤付着。二次加熱。
3	土師器・壺	(17.7)	—	—	①②④⑥	②	橙	口縁部3/4	内外面吸炭。
4	土師器・埴	11.3	—	—	⑥②①③	②	明赤褐	底部欠	
5	土師器・埴	(6.9)	5.65	—	④②①⑥	②	明赤褐	1/2	

覆土は、床上および壁際に明黄褐色粘土（第1層）から上位へは、炭化物をブロック状に含む明黄褐色粘土（第2層）、黄色粘土（第3層）、多量の炭化物を含む黄色粘土（第4層）へと続いて堆積している。これら第1～第4層には、マンガン粒、灰白色砂質粒が含まれている。また、第4層中に含まれる炭化物は、一部層を成している。この上位には、炭化物層（第5層）、最上層の灰、炭化物を多量に含む黄灰色粘土（第6層）が堆積している。第4層堆積後、土坑状の窪みを利用した可能性を示している。

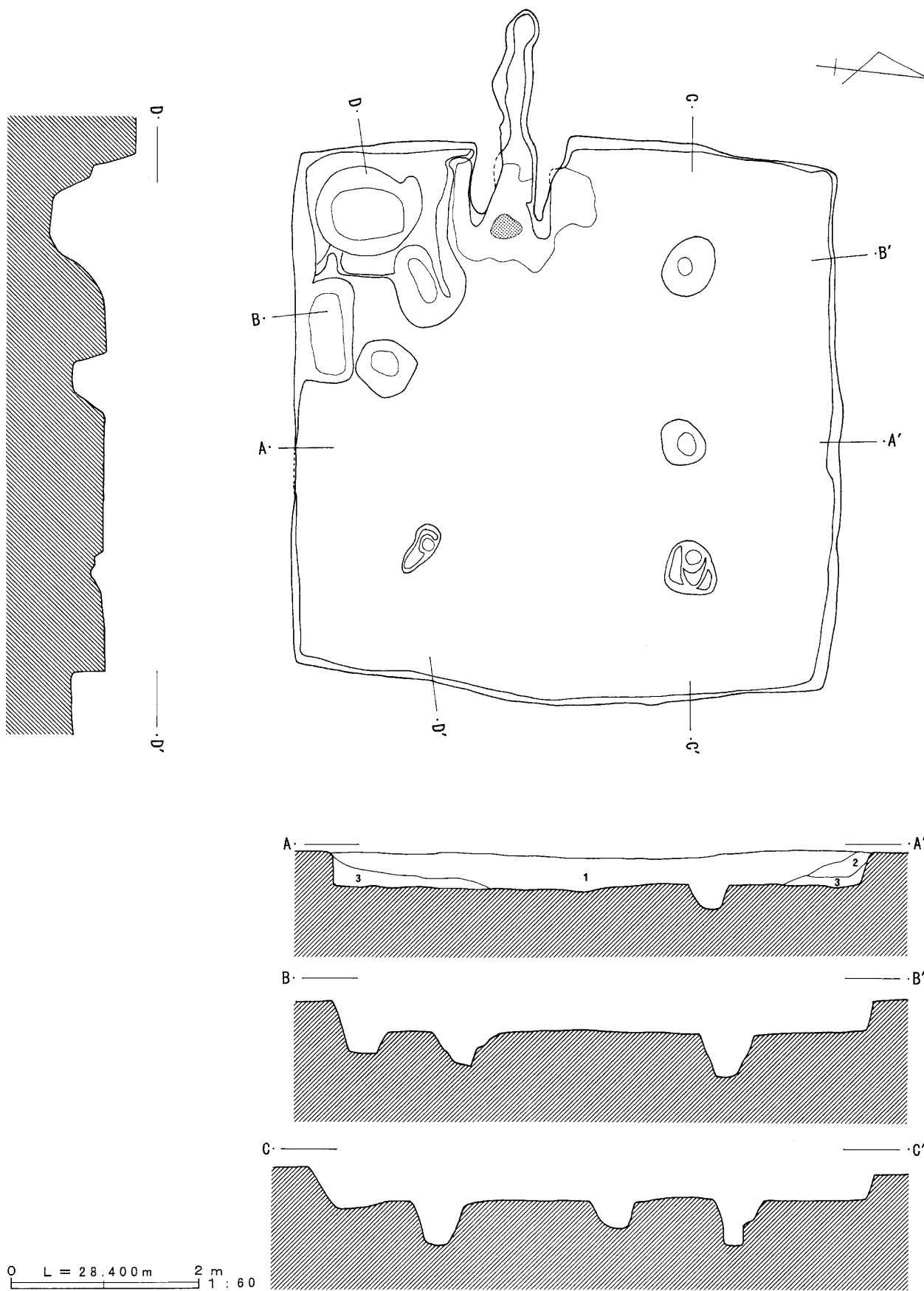
遺物は、炉とピット内に集中しており、他からは小片のみの出土である。土器は全て土師器であり、器種には、高坏（第103図—1）、甕（同一—2）、壺（同一—3）、埴（同一—4、5）がみられる。このうち壺（3）は炉内、埴（5）はピット内、他は炉の周囲からの出土である。また、炉の南側からは、20×40cm大の自然礫が出土している。

26号住居跡 Y—20、21、Z—20、21グリッドに位置している。第2確認面の検出である。覆土上面（第104図）には、66号土坑が位置している。南東部床面の一部は、掘削坑によって削除されている。（第105図）北辺5.76m、東辺5.86m、南辺5.76m、西辺5.84mを計り、正方形を呈する。（第106図）主軸方位は、N—97°—Wである。（第107図）壁は、ほぼ垂直に立ち上がる部分が多い。確認面からの深さは、35cm前後である。（第108図）床面は、ほとんど凹凸もみられず、ほぼ全面が硬く締まって安定している。（第109図）ピットは、南西隅に1穴、南壁直下南西隅寄りに1穴、北壁に平行して3穴、南壁に平行して2穴、南壁平行の2穴間で、南壁直下南西隅寄りピットに接して1穴の、計8穴が検出されている。その他、カマド右脇は、南北40cm、東西72cmの長方形範囲で、床面から深さ5cm落ち込んでいる。

南西隅ピットは、上面が、南北145cm、東西130cm、深さ15cmの長方形を呈し、この中央部やや南寄りに、さらに南北116cm、東西95cm、深さ46cmの長円形ピットが掘り込まれている。上面の長方形の落ち込みは、南東隅に、床面から連続する幅15cmほどの陸橋部をもち、先端は直接長円形ピットの掘り込み面となっている。長方形部分の底面には土器が集中しているが、土器は、長円形部分の上面でも長方形部分の底面と同レベルで出土している。長方形部分の底面に、長円形部分の蓋が存在していた可能性が高い。貯蔵穴である。

南壁直下南西隅寄りピットは、南北95cm、東西36cmの規模をもち、長方形を呈する。深さ19cmを計り、底面は水平面を成す。南壁は、竪穴南壁と共通している。

北壁に平行した3ピットは、西から順に、68×52cm—深さ56cm、50×46cm—深さ36cm、58×54cm—深さ52cmを計る。また芯々間は、西から、1.90m、1.20mを計り異なるものの、ほぼ一直線上に配されている。



第104図 C区26号住居跡(1)

南壁に平行した2ピットは、西から順に、92×46cm—深さ33cm、60×28cm—深さ22cmを計る。芯々間は、2.80mを計る。

これら5ピットは、柱穴である。北側の両端の柱穴間距離は3.10m、南側の柱穴間距離は2.80m、南北間の柱穴間距離は、西側が2.80m、東側が2.85mを計ることから、四隅のピットは、2.80～2.85mの間隔で、正方形に配されることが意識されていたと思われる。

南壁直下南西隅寄りピットに接したピットは、62×55cmを計り、隅円方形を呈する。深さは38cmを計り、断面逆台形を示す。

カマドは、西壁中央南西隅寄りに設置されている。煙道の南側壁が崩落している。火床は、全て竪穴内に位置し、『八』字型を呈する。前面幅60cm、奥幅35cm、奥行き70cmを計る。床面より8cm程窪み、断面は緩いU字型を呈する。燃焼部は緩傾斜で移行し、奥壁は急傾斜で15cm立ち上がる。幅・奥行き共に35cmで、箱形を呈する。煙道は、南側壁が崩落しているものの、燃焼部との接点から長さ30cmに至る箇所まで幅を減じ、幅10cmで、さらに80cm奥に延びている様相をみることができる。断面は、燃焼部同様の緩傾斜で移行する。煙道の全体の長さは、110cmを計る。最奥部は、一段窪み、土師器高坏（第106図—24）の坏部が上向きで置かれている。このため、坏部内面は、煤が染み込み、黒色化している。煙出し断面は、煙道と同傾斜を示している。平面形は、隅円の菱形を呈し、最大径30cm、長さ30cmを計る。煙出し部の側壁に、土師器甕の胴部破片が壁の曲線に即して貼り付けられていた。奥壁は急傾斜で立ち上がる。カマド全長は、2.45mである。

覆土は、大部分に、多量のマンガン粒、少量の炭化物・焼土粒を含むオリーブ褐色シルト（第1層）が堆積し、壁際には、灰黄褐色シルト（第3層）が堆積している。また、北東隅部には、第1層と第3層の中間に、多量の酸化鉄、少量のマンガン粒を含む褐色シルト（第2層）が堆積している部分もある。

遺物は、須恵器、土師器、砥石等が多量に出土している。器種は、須恵器が坏及び高坏、土師器は、坏、高坏、盃、甕、鉢、台付鉢、甗、壺がみられる。全て床面に接するか、ピット底面及び、側面に接している。

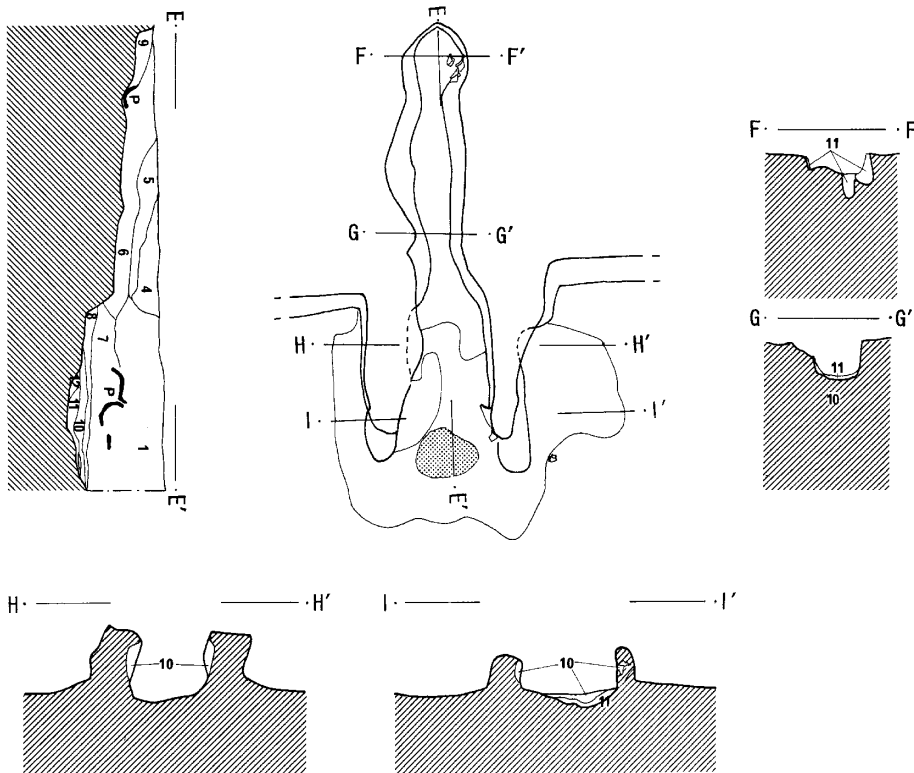
須恵器は、坏（第106図—1）が竪穴中央から、三方透かしの高坏（同一—17）杯部が、南西柱穴北脇から出土している。

出土遺物の大部分を占める土師器は、様々な位置から検出されている。

カマドの火床からは、坏（同一—9）、大型高坏（同一—19）、高坏（同一—21、22）、甕（同一—28）（第108図—35、42）（第109図—49）、鉢（同一—50）が出土している。このうち、甕（35、42）が奥・燃焼部から、他は、前面・火床上からの出土である。

カマド前面から右袖脇にかけては、坏（第106図—15）（同一—7）、砥石（第110図—61）、甗（同一—56）、坏（第106図—8）が出土している。また、カマド内から出土した鉢（50）は、甗（56）の下側から出土した破片と接合されている。

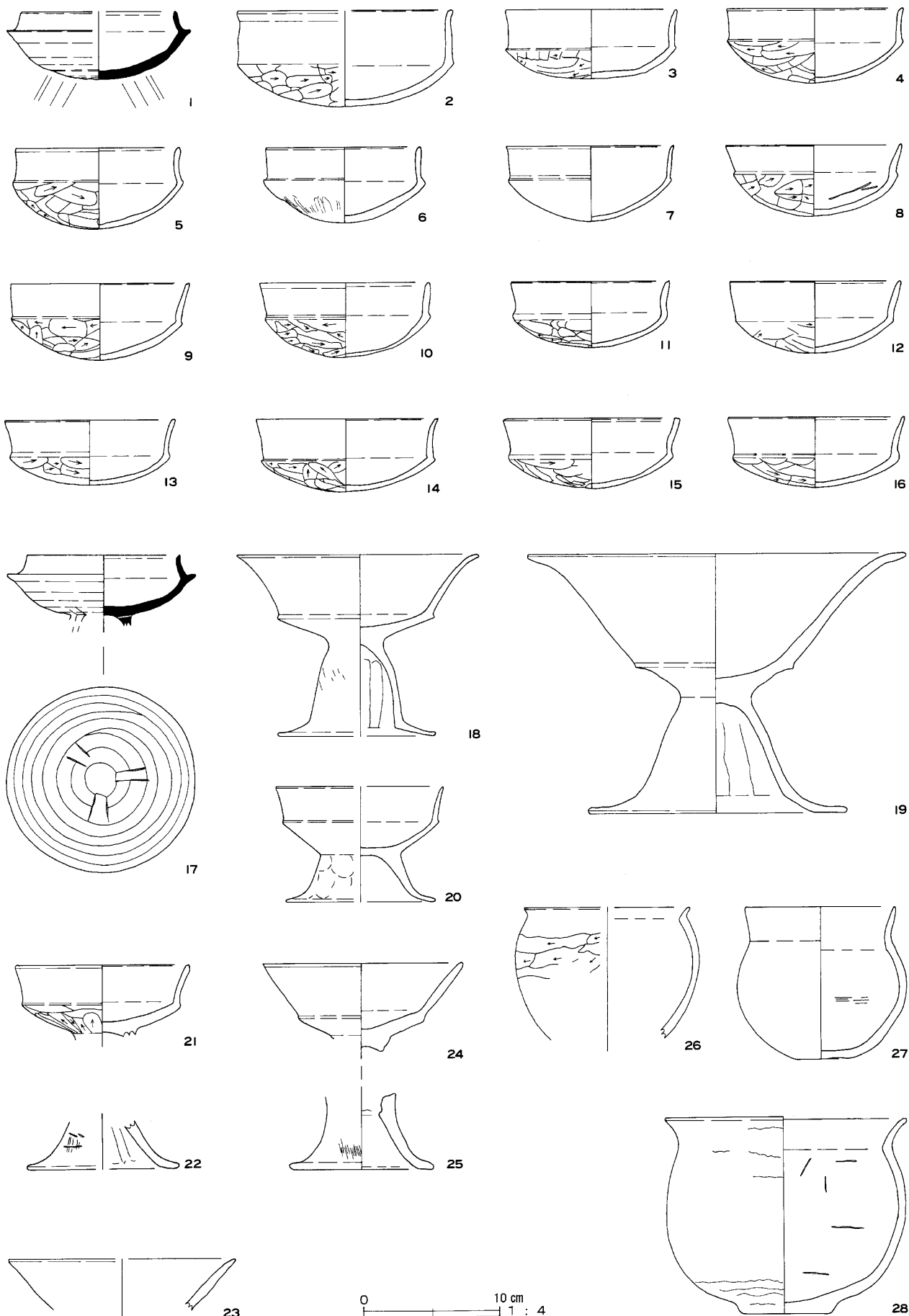
カマド左袖と南西隅・貯蔵穴の長方形掘り込みとの間に僅かにみられる床面上（幅20cm）からは、甗（第110図—58）、壺（同一—59）が、壺の口縁に甗の底部を入れ込んだ状況で出土している。



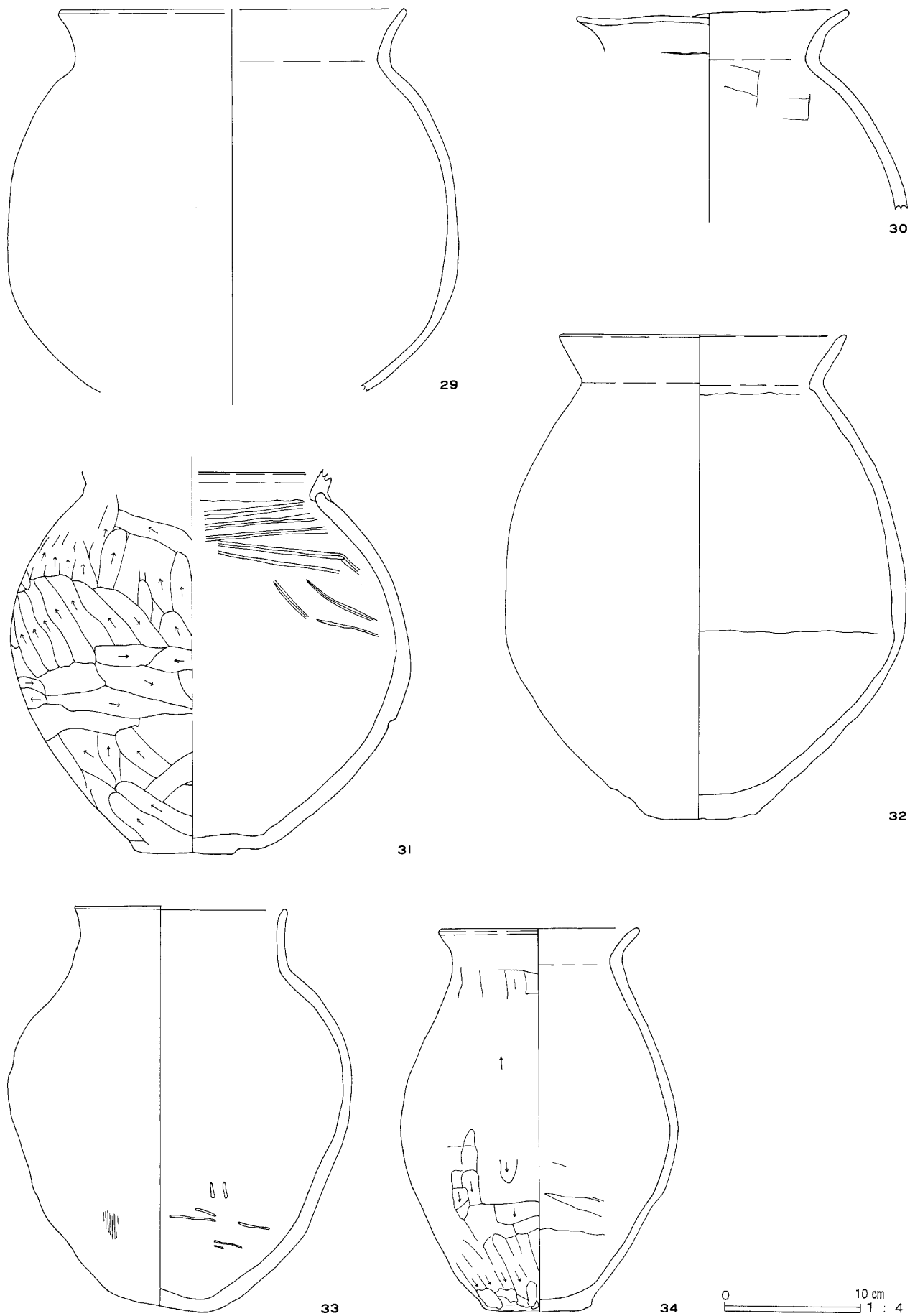
- 1 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。マンガン粒多量、炭化物、焼土粒を少量に含む。
- 2 褐色(10YR 4/4)シルト。酸化鉄多量、マンガン粒少量を含む。
- 3 灰黄褐色(10YR 4/2)シルト。
- 4 暗灰黄色(2.5Y 5/2)シルト。マンガン粒少量含む。
- 5 黄褐色(2.5Y 5/3)シルト。マンガン粒多量、焼土粒微量含む。
- 6 オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト。マンガン粒多量、焼土ブロック中量、炭化物少量含む。
- 7 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン粒多量、焼土ブロック中量含む。
- 8 灰と7層の混在層。
- 9 黒ずんだ小豆色シルト。
- 10 朱色焼土。(火床)
- 11 黒ずんだ小豆色焼土。
- 12 炭化材と焼土粒の混在層。

0 L = 28.400m 1 m
1 : 40

第105図 C区26号住居跡(2)



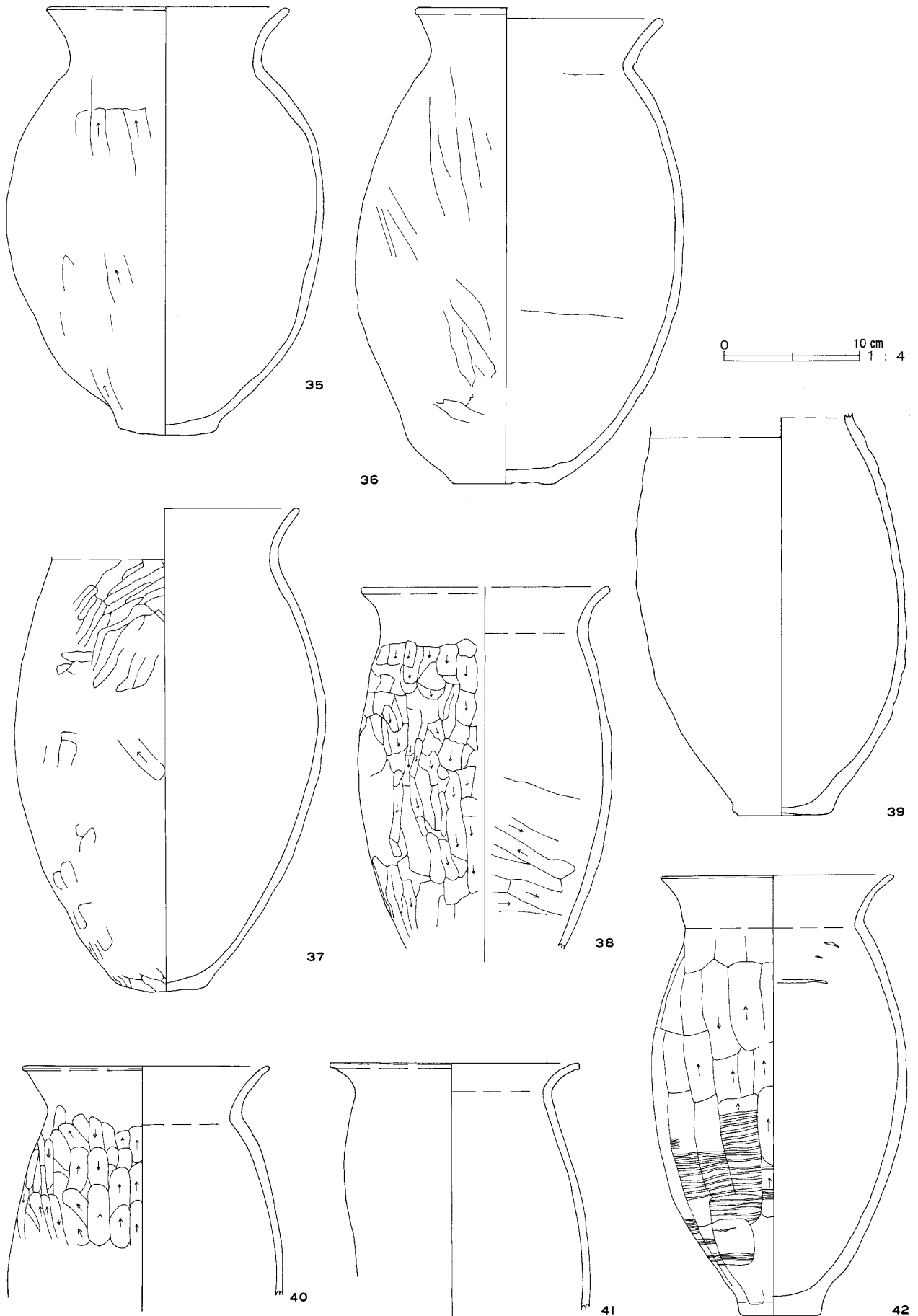
第106图 C区26号住居跡出土遺物(1)



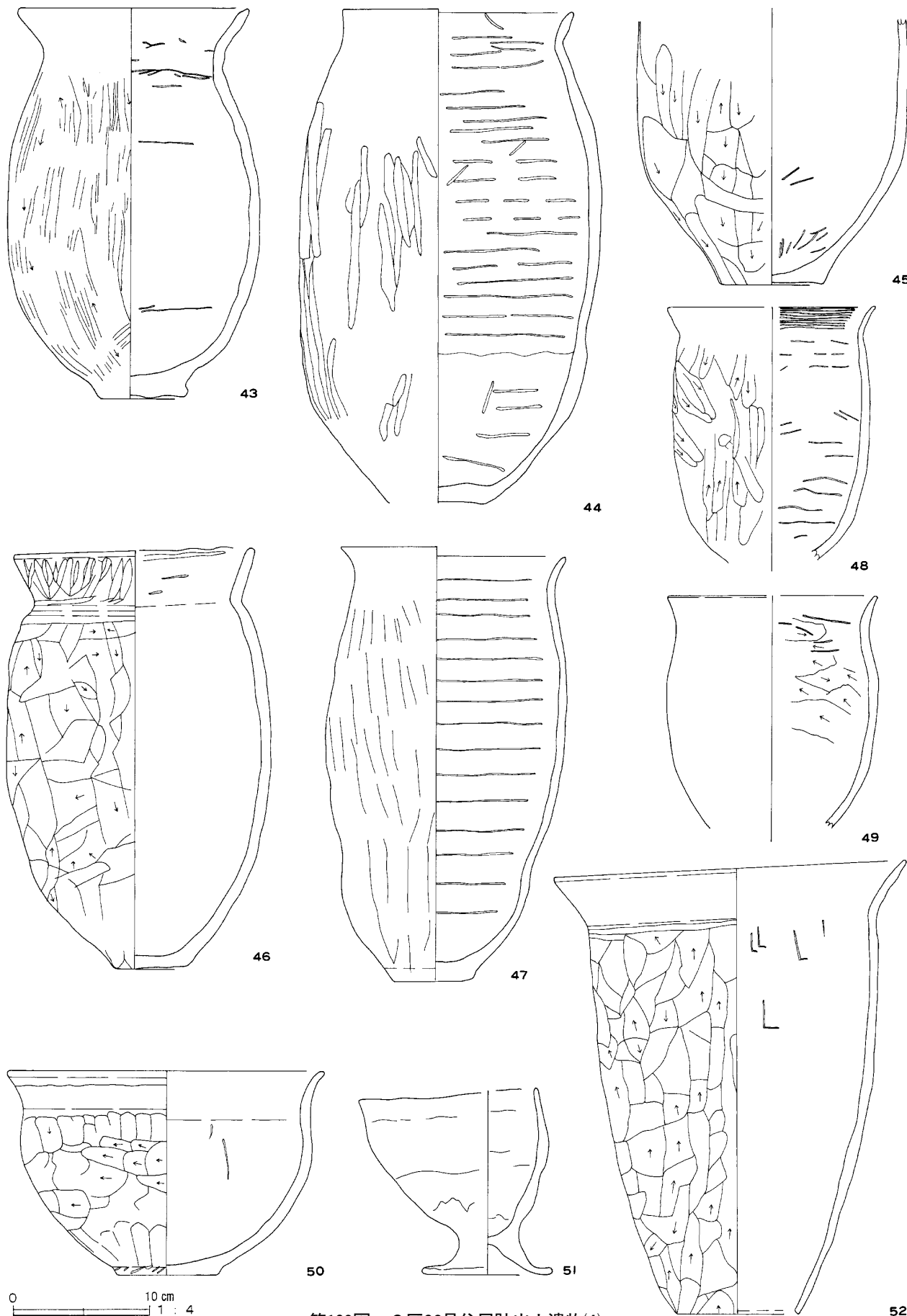
第107図 C区26号住居跡出土遺物(2)

第37表 C区26号住居跡出土遺物観察表 (第106・107・108・109・110図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・坏	(11.2)	4.9	—	①⑥	①	灰白	1/3	
2	土師器・坏	(15.7)	7.0	—	①③②⑥④	②	橙	1/3	内面黒色処理。
3	土師器・坏	12.5	5.0	—	③①④⑥	②	明赤褐	ほぼ完形	
4	土師器・坏	12.9	5.35	—	③④②①⑥	②	明赤褐	5/6	
5	土師器・坏	12.0	5.9	—	①③②	②	明赤褐	一部欠	
6	土師器・坏	11.2	5.6	—	①④②⑥	②	橙	5/6	
7	土師器・坏	12.1	5.5	—	③①④	②	橙	完形	
8	土師器・坏	13.0	5.2	—	⑥②①③	②	橙	完形	内外面表面剥離した部分が多い。
9	土師器・坏	13.0	5.6	—	①③②⑥④	②	橙	5/6	
10	土師器・坏	12.5	5.45	—	③①②④	②	橙	ほぼ完形	表面磨滅した部分が多い。
11	土師器・坏	11.5	4.8	—	③①②④⑥	②	橙	一部欠	
12	土師器・坏	12.5	5.3	—	③①④⑥	②	橙	完形	表面剥離した部分が多い。
13	土師器・坏	12.5	4.2	—	③②①⑥	②	橙	2/3	
14	土師器・坏	13.2	5.3	—	①③④②⑥	②	橙	一部欠	
15	土師器・坏	12.4	5.1	—	①③②④⑥	②	橙	完形	
16	土師器・坏	12.9	5.1	—	⑥③①②	②	明赤褐	ほぼ完形	
17	須恵器・高坏	11.0	—	—	①③②④⑥	③	明赤褐	坏部のみ	酸化炎焼成。脚部三方透し(台形)。
18	土師器・高坏	17.5	13.3	(11.5)	②①④③	②	橙	一部欠	
19	土師器・高坏	27.4	19.0	—	①④②⑥	②	橙	一部欠	一部二次加熱。
20	土師器・高坏	(12.2)	8.5	(11.0)	①②④	②	明赤褐	2/3	
21	土師器・高坏	12.7	—	—	②①③⑥④	②	明赤褐	脚部欠	
22	土師器・高坏	—	—	(11.2)	①④③⑥	②	橙	脚部1/4	表面磨滅。二次加熱。
23	土師器・高坏	(16.6)	—	—	④⑥①	②	橙	口縁部1/4	外面表面剥離。内面黒色処理。
24	土師器・高坏	14.6	—	—	①③②④	②	明赤褐	ほぼ完形	内面吸炭、黒色化。
25	土師器・高坏	—	—	10.6	①③②④	②	明赤褐	一部欠	直接接合しないが胎土、磨滅の仕方等から24と同一個体と思われる。
26	土師器・盃	(12.1)	—	—	⑥①③④	②	橙	上位1/5	内外面一部吸炭。
27	土師器・甕	16.0	16.1	3.8	⑥③①④②	②	にふい橙	完形	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
28	土師器・甕	17.8	14.5	5.4	①③④②	②	橙	ほぼ完形	下位外面煤、内面炭化物付着。
29	土師器・甕	(25.2)	—	—	①④③②⑥	②	橙	底部欠1/3	内外面吸炭。二次加熱。
30	土師器・甕	20.1	—	—	①③②④	②	赤褐	口縁部・胴部上位一部	内面炭化物付着。外面は木口状工具による縦のナデの後、横のナデ。
31	土師器・甕	—	—	5.5	③②①⑥④	②	橙	口縁部欠	
32	土師器・甕	21.2	35.5	8.1	⑥③①	②	にふい橙	一部欠	下位内外面共吸炭。
33	土師器・甕	15.1	29.7	7.5	①⑥②	②	赤	一部欠	強烈な二次加熱により表面剥離した部分が多い。外面縦方向のナデツケ。
34	土師器・甕	14.4	28.1	7.2	①⑥②③④	②	にふい橙	2/3	内外面吸炭。
35	土師器・甕	17.85	31.3	7.1	⑥①②④	②	橙	3/4	内外面吸炭。二次加熱。
36	土師器・甕	18.1	34.8	7.3	③①⑥④	②	にふい橙	一部欠	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
37	土師器・甕	—	35.3	6.2	⑥①③②	②	橙	4/5	内外面一部吸炭。二次加熱。
38	土師器・甕	(18.1)	—	—	①③⑥②④	②	にふい橙	1/4	吸炭。二次加熱。
39	土師器・甕	—	—	6.2	⑥②①④	③	橙	口縁部欠	強烈な二次加熱により表面の大部分剥離、吸炭。
40	土師器・甕	17.7	—	—	⑥①④③②	②	橙	上位のみ	吸炭。二次加熱。
41	土師器・甕	18.0	—	—	①③⑥④②	②	褐灰	上位3/4	強烈な二次加熱による還元化及び激しいゆがみ。
42	土師器・甕	17.1	32.2	5.8	⑥①④③②	②	にふい赤褐	一部欠	吸炭。二次加熱。下位ケズリの際、段を生じる。
43	土師器・甕	17.0	28.5	6.8	⑥②①③	②	明赤褐	一部欠	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
44	土師器・甕	16.5	36.2	7.0	①④⑥②	②	明赤褐	一部欠	外面木口状工具による縦にナデ、外面吸炭、内面炭化物付着。二次加熱。
45	土師器・甕	—	—	7.7	⑥②③①	②	橙	上位欠1/2	内外面吸炭。二次加熱。
46	土師器・甕	17.3	30.5	5.2	②①⑥	②	橙	完形	強烈な二次加熱。内面吸炭。
47	土師器・甕	16.4	31.3	6.0	①⑥②④	②	明赤褐	ほぼ完形	下位吸炭。二次加熱。
48	土師器・甕	(15.3)	—	—	⑥①②③	②	明赤褐	底部欠1/3	吸炭。二次加熱。

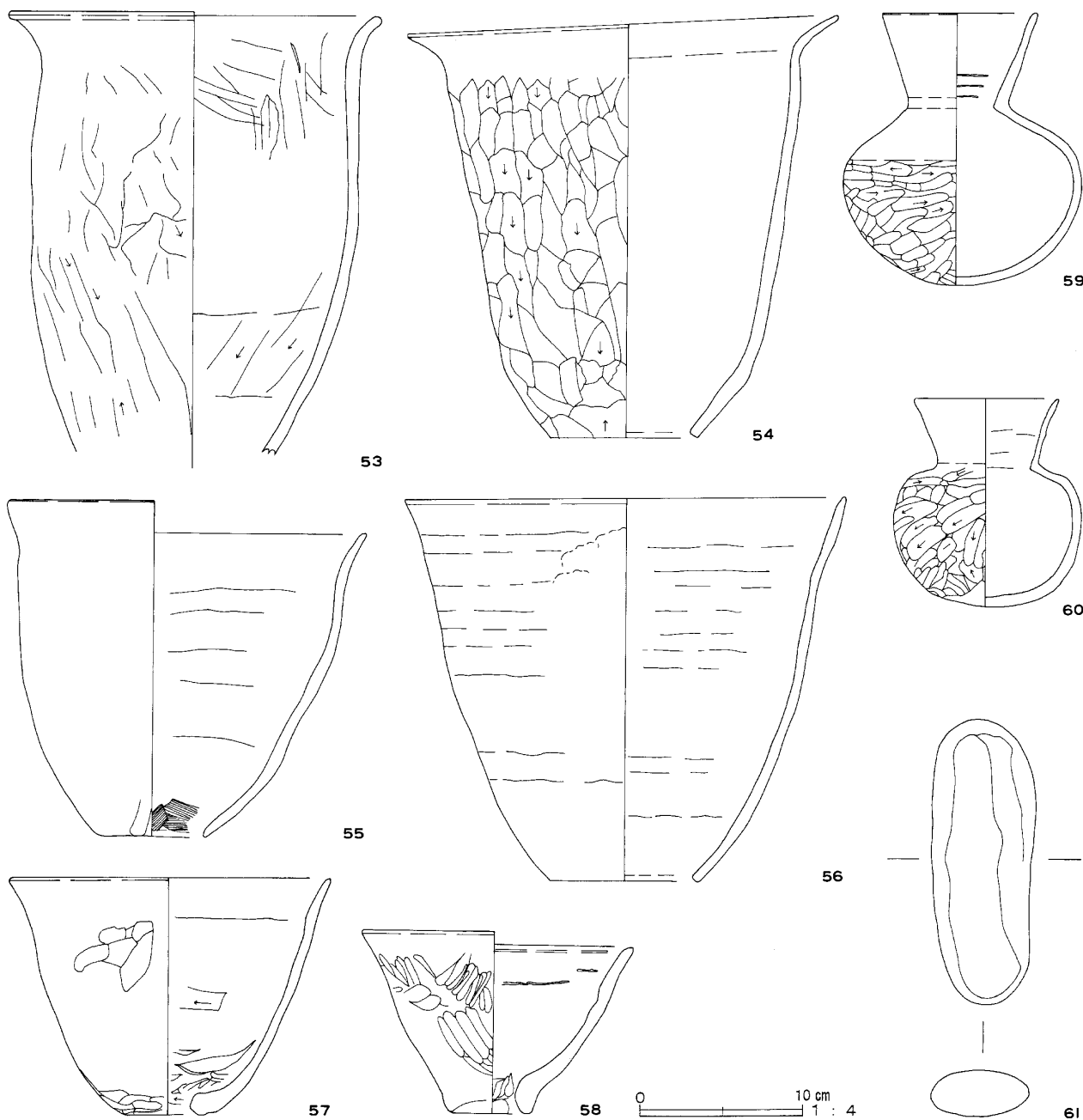


第108図 C区26号住居跡出土遺物(3)



第109图 C区26号住居跡出土遺物(4)

49	土師器・甕	(15.4)	—	—	⑥①④	②	明赤褐	底部欠 1 / 6	内面吸炭。二次加熱。
50	土師器・鉢	23.1	15.0	7.2	③②①⑥④	②	橙	ほぼ完形	内外面一部吸炭。二次加熱。
51	土師器・台付鉢	(13.0)	13.5	9.5	①④②③⑥	②	赤	2 / 3	強烈な二次加熱による激しいゆがみ。
52	土師器・甕	25.5	33.2	9.0	①②③⑥④	②	橙	4 / 5	内外面吸炭。二次加熱。
53	土師器・甕	23.0	—	—	⑥①④③	②	にぶい橙	底部欠	内外面吸炭。二次加熱。
54	土師器・甕	26.2	25.9	9.0	②⑥①④③	②	橙	一部欠	
55	土師器・甕	21.9	20.6	6.4	①⑥③②	②	にぶい褐	一部欠	内外面 1 / 2 黒斑。
56	土師器・甕	27.0	23.5	9.1	⑥①③②	②	明赤褐	一部欠	吸炭。二次加熱。
57	土師器・甕	19.8	14.6	5.3	③①⑥②④	②	橙	1 / 4	二次加熱。
58	土師器・甕	16.6	11.2	4.9	①③④②⑥	②	明赤褐	一部欠	一部吸炭。
59	土師器・壺	9.5	16.75	—	②①④⑥③	②	明赤褐	ほぼ完形	
60	土師器・壺	8.8	12.8	—	③①④②⑥	②	橙	一部欠	一部吸炭。
61	砥石	長さ 17.5 幅 6.4 厚さ 2.9						完形	一面使用。



第110図 C区26号住居跡出土遺物(5)

貯蔵穴の上段・長方形部分の底面には、北側に甕（第108図-40）、壺（第110図-60）、甕（第107図-29）（第109図-48）、盃（第106図-26）、高坏（同-23）、東側には、高坏（同-18）、甕（同-27）、さらに南側には、甕（第107図-30、31）、甗（第110図-54）が並べられた状況で検出されている。また、長円形部の底面からは、甕（第108図-36）が出土している。

南壁直下南西隅寄りピット底面からは、甕（第109図-47）、甗（第110図-55）が並べられたものが北側に倒れた状況で検出されている。さらにこの下面からは、甕（第109図-43）、坏（第106図-12）が検出されている。甕（第108図-39）は、破片が検出されており、南西柱穴から検出されている本体と復元されている。また、ピットの北側床面上からは、甕（第107図-34）が出土している。

各柱穴の周囲でも多くの土器が検出されている。

北列西端柱穴周辺では、坏（第106図-3）甕（第109図-44）（第107図-33）が、中央柱穴周辺では、甗（第109図-52）、甕（第108図-38）、甕（第109図-46）、甗（第110図-57）、坏（第106図-13）、台付鉢（第109図-51）、甕（第108図-37）、甗（第110図-53）が出土している。このうち甕（52）は、破片が北西隅方向に散っている。また、東隅柱穴周辺では、坏（第106図-5）、甕（第109図-45）（第108図-41）が出土している。

南列西端柱穴周辺では、高坏（第106図-25）、甕（第108図-39）の他、三方透かしの須恵器高坏（17）杯部が出土している。

南列東端柱穴周辺では、坏（第106図-10、14、16）が出土している。

竪穴中央部では、須恵器坏（1）の他、坏（第106図-6）、高坏（第106図-20）等が検出されている。

27号住居跡 X-21、Y-21、22、Z-21、22グリッドに位置している。第2確認面の検出である。南隅は、調査区域外に及んでいる。

北東辺8.96m、南東辺推定8.65m、南西辺推定9.20m、北西辺9.00mを計る。やや不整であるが、正方形を呈するものといえる。

主軸方位は、N-133°-Wである。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がる部分が多い。確認面からの深さは、30~35cm前後である。床面は、やや凹凸はみられるものの、ほぼ全面が硬く締まって安定している。

ピットは、南隅に1穴、竪穴対角線上に4穴の、計5穴が検出されている。

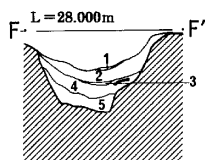
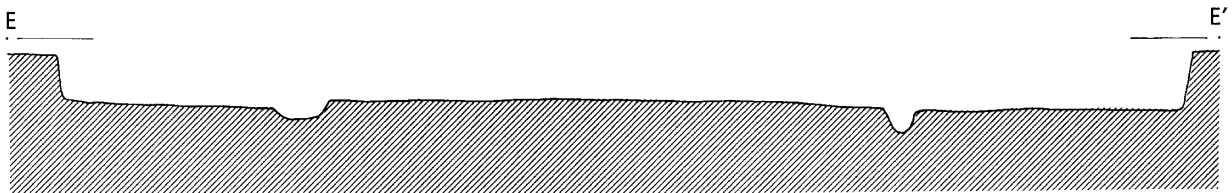
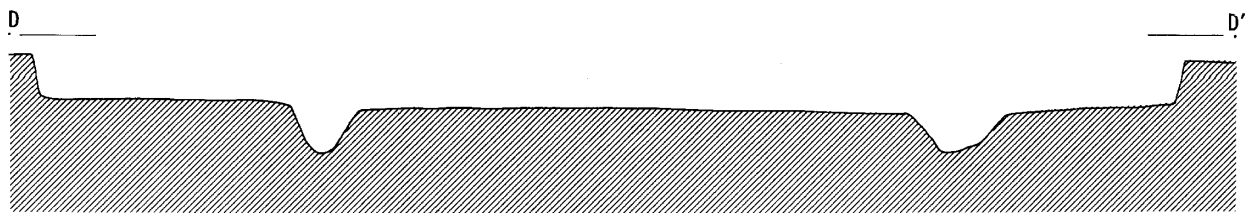
南隅ピットは、大半が調査区域外に位置するため、詳細は不明であるが、カマド左袖側の一辺は、114cmの長さをもつ。深さは、調査範囲内では底面に到達していないが、現状で60cmを計っている。断面は、逆台形を示している。貯蔵穴である。

対角線上の4穴は、柱穴であり、北40×26cm、深さ18cm、東44×43cm、深さ10cm、南60×50cm、深さ38cm、西94×76cm、深さ30cmの規模をもつ。芯々間はそれぞれ、北-東間4.80m、東-南間5.25m、南-西間5.15m、西-北間5.15mを計る。

カマドは、南西壁南隅寄りに設置されている。火床・燃焼部は、全て竪穴内に位置し、



第111図 C区27号住居跡(1)



F-F'

- 1 炭化物層。
- 2 オリーブ色粘土。炭化物、焼土粒を含む。
- 3 炭化物層。
- 4 3層と4層の混在層。
- 5 灰色粘土。灰、炭化物を含む。

A-A'

- 1 灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト。マンガン多量、焼土粒少量含む。
- 2 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト。マンガン、焼土粒を多量含む。
- 3 灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト。マンガン多量、焼土粒少量含む。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘土と3層の混在層。浅黄色(2.5Y 7/3)粘土、焼土粒、炭化物ブロック、暗灰色(2.5Y 4/2)粘土を含む。下部に灰堆積。
- 5 灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト。焼土粒多量含む。
- 6 灰と炭化物と焼土の混在層。
- 7 灰層。
- 8 にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土。炭化物、焼土含む。
- 9 灰層。
- 10 灰層。
- 11 焼土粒子。火床。

B-B'

- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。炭化物粒少量含む。西側下位に薄く炭化物層が入る。

C-C'

- 1 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト。炭化物粒少量含む。
- 2 黄灰色(2.5Y 5/1)シルト。焼土ブロック少量含む。下位に炭化物が層状に堆積。

0 L = 28.400 m 2 m 1 : 60

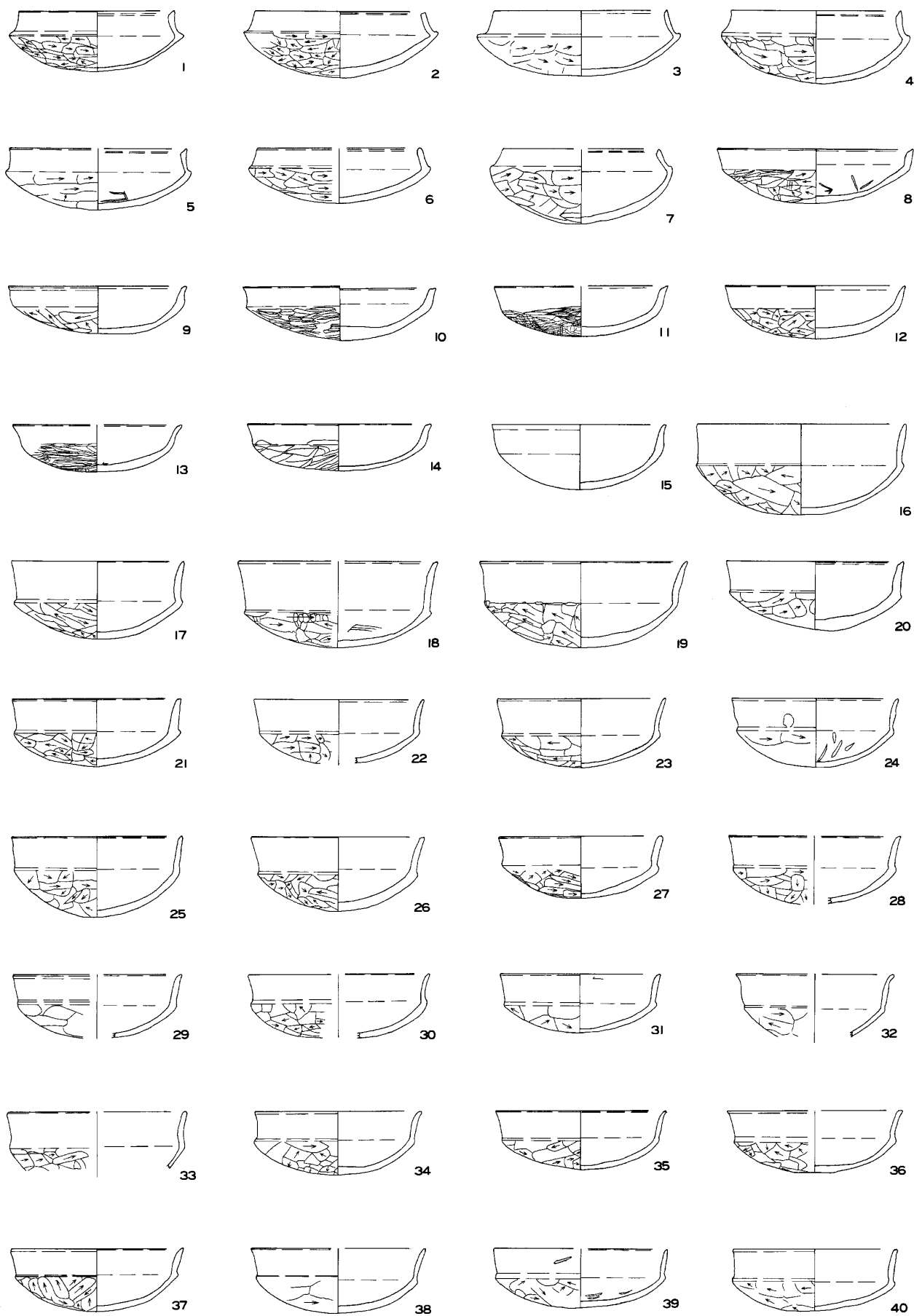
第112図 C区27号住居跡(2)

奥壁は、竪穴南西壁ラインと一致している。火床部分は箱型を呈し、幅50cmを計る。燃焼部全体では、奥行き75cmの位置で幅を狭め始め、さらに25cm移行した奥壁部では32cmとなる。奥壁は、急斜面を成して、20cm立ち上がる。煙道は、幅32cm前後のまま、180cm延びている。奥壁は、円形を呈する。煙道の断面は、直線を成し、緩い傾斜をもつ。

覆土は、大部分が少量の炭化物を含むにぶい黄褐色シルト（第1層）であり、竪穴の隅を中心とした壁際には、少量の焼土ブロック、炭化物を含む黄灰色シルト（第2層）が堆積している。また第2層中には、炭化物が層を成す部分もみられ、特に北・西隅に顕著であった。北隅の炭化物層中には、骨粉が混入していた。

遺物は、多量の土師器、手捏等が出土している。土師器の器種は、坏、高坏、甕、鉢、甗、壺がみられ、大部分が、柱穴を結ぶラインと、壁の間の出土である。また、覆土中からの出土は少なく、床面に接するか、ピット底面及び側面に接しているものが大半である。

出土遺物の大部分を占める土師器は、様々な位置から検出されている。



第113図 C区27号住居跡出土遺物(1)

カマドの火床・燃焼部からは、中心やや奥に坏（第114図-43）が置かれ、火床部分には坏（第113図-14）、甕（第114図-52、53）、左袖側から甕（同一-56）が出土している。また、これら甕類に接して、カマド前面には、坏（第114図-42）（第113図-4、40）、甕（第114図-54、55）が出土している。

カマド左袖と南隅・貯蔵穴との間に、僅かにみられる床面上からは、坏（第113図-3、9、10、16、17、37）（第114図-44）、高坏（第114図-47）、鉢（第115図-63）、甕（第115図-65）が出土している。

貯蔵穴内からは、坏（第113図-1）、貯蔵穴上端床面上から坏（同一-21）が出土している。

南東辺中央・壁直下からは、長円礫（編み物石）と共に、坏（第113図-5、7、20、30、39）、高坏（第114図-50）が出土している。

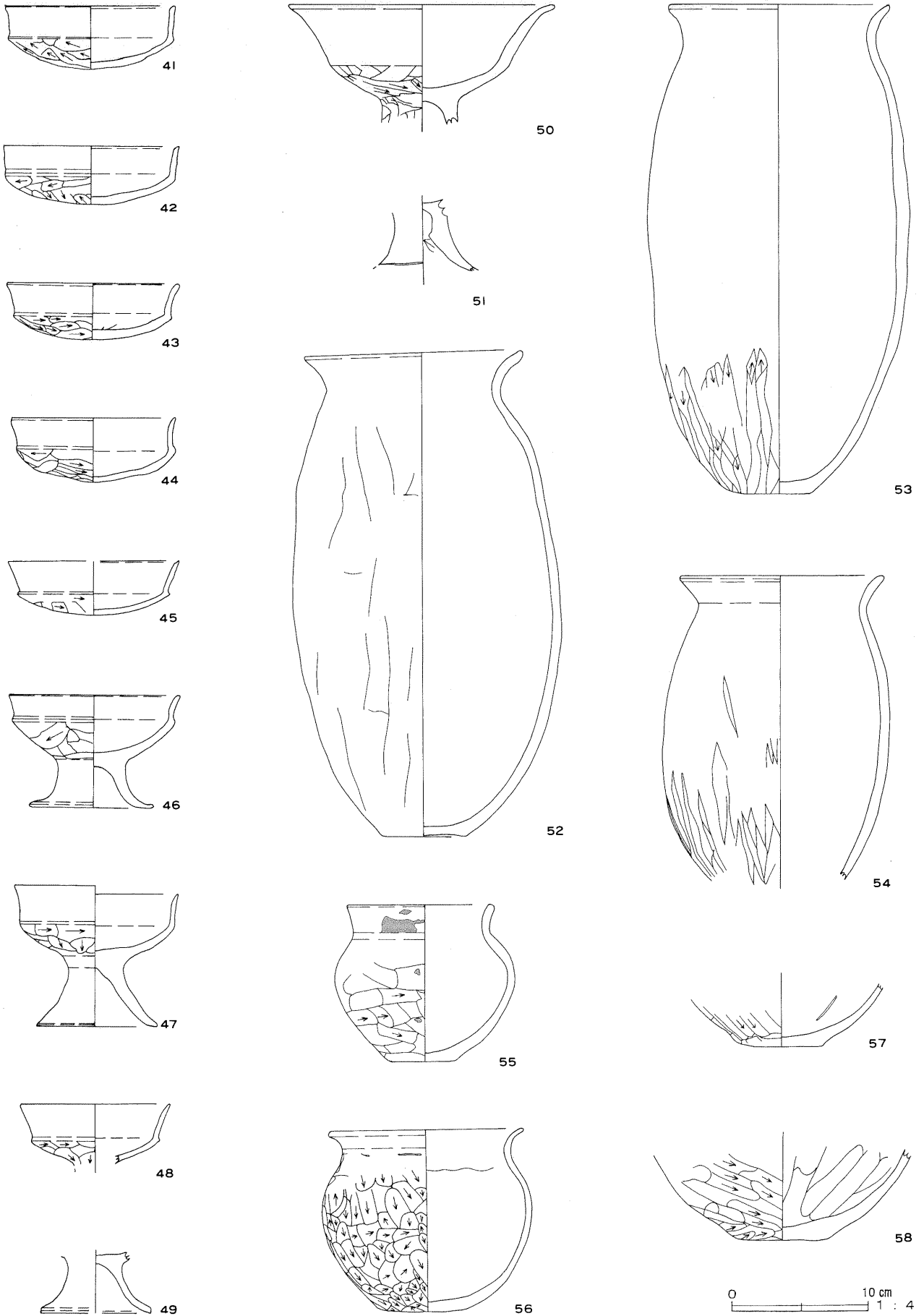
東柱穴と北東壁の間からは、坏（第113図-17、32）が出土している。

北柱穴と北隅の間からは、坏（第113図-2、15、35、36）（第114図-43）、甕（第115図-59、60）が出土しており、最も北隅寄りからは、手捏土器（第115図-66）が出土している。また、柱穴内側から出土した鉢（第115図-63）は、カマド左袖と南隅・貯蔵穴との間からの出土片と接合・復元されている。

西柱穴周辺からは、長円礫（編み物石）と共に、坏（第113図-12、18、23、24、31）（第114図-45）、高坏（第114図-46、51）が出土している。

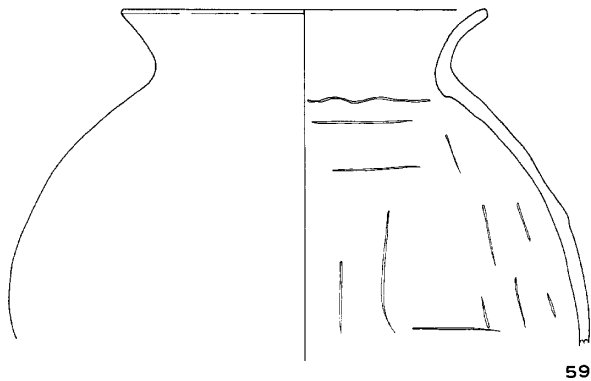
第38表 C区27号住居跡出土遺物観察表（第113・114・115図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	11.2	4.3	—	①③②⑥	②	橙	ほぼ完形	内外面黒色処理。
2	土師器・坏	11.2	4.8	—	①②③④⑥	①	橙	4 / 5	内外面黒色処理。
3	土師器・坏	12.4	4.7	—	①④⑥③	②	褐	完形	内面黒色処理。
4	土師器・坏	12.1	5.2	—	①⑥③②	②	にぶい橙	完形	外面黒色処理。
5	土師器・坏	(12.8)	4.4	—	②①③④	②	明赤褐	1 / 2	内外面一部吸炭。
6	土師器・坏	(11.8)	5.0	—	①②③④	②	赤褐	1 / 2	内外面一部吸炭。
7	土師器・坏	(11.2)	(5.4)	—	①②⑥③	②	にぶい橙	2 / 3	内外面一部吸炭。
8	土師器・坏	14.0	3.9	—	①④②⑥	②	灰褐	完形	内外面黒色処理。内面暗文様ミガキ。
9	土師器・坏	12.8	3.9	—	①④③②⑥	②	橙	一部欠	内外面吸炭。内面表面剥離した部分が多い。
10	土師器・坏	13.9	3.9	—	①④②⑥	②	赤褐	一部欠	内外面吸炭。
11	土師器・坏	(12.4)	3.6	—	①③⑥	②	褐	1 / 4	内外面吸炭。
12	土師器・坏	13.0	3.8	—	①②③④⑥	①	橙	ほぼ完形	内外面黒色処理。
13	土師器・坏	(12.2)	3.4	—	①②④③⑥	②	明赤褐	1 / 4	内外面吸炭。
14	土師器・坏	13.2	3.3	—	①②⑥④	②	黒褐	一部欠	内外面吸炭。
15	土師器・坏	12.5	4.7	—	③①④②	②	橙	ほぼ完形	内外面大部分表面磨滅。
16	土師器・坏	15.1	6.6	—	①②③⑥	②	橙	一部欠	内面吸炭、炭化物付着。
17	土師器・坏	12.4	5.6	—	③①⑥④	②	橙	一部欠	
18	土師器・坏	(14.2)	(6.2)	—	④①②⑥	②	橙	1 / 5	
19	土師器・坏	15.0	6.2	—	①③②⑥	②	橙	3 / 4	内外面吸炭、一部炭化物付着。
20	土師器・坏	12.8	4.9	—	①④⑥	②	褐灰	1 / 2	内外面黒色処理。内面一部表面剥離。
21	土師器・坏	12.0	14.9	—	①②④⑥	②	赤褐	完形	内外面一部吸炭。
22	土師器・坏	12.3	—	—	①③⑥②	②	橙	3 / 4	内面表面磨滅。
23	土師器・坏	12.2	5.0	—	②④①⑥③	②	橙	ほぼ完形	口縁部内外面一部吸炭、炭化物付着。
24	土師器・坏	11.9	5.0	—	①②④⑥③	②	橙	ほぼ完形	外面口縁部釘状粘土付着。体部表面剥離。
25	土師器・坏	12.1	5.8	—	①②④⑥	②	橙	完形	内外面表面剥離した部分が多い。
26	土師器・坏	12.4	5.4	—	①②⑥④	②	橙	4 / 5	体部内面一部磨滅。

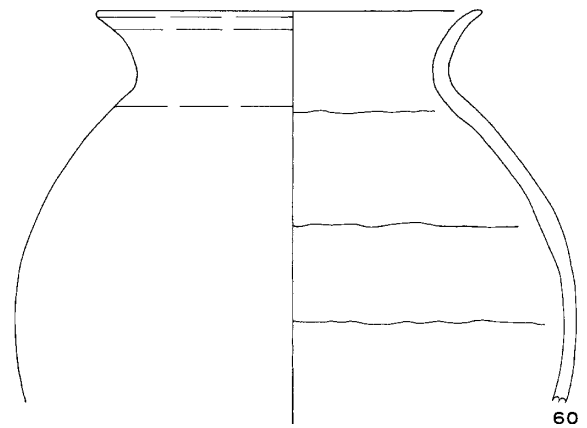


第114図 C区27号住居跡出土遺物(2)

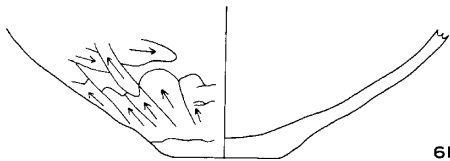
27	土師器・坏	11.6	4.5	—	①③②⑥	①	橙	ほぼ完形	
28	土師器・坏	(12.4)	(4.9)	—	①②③④	②	にぶい赤褐	1/2	内外面吸炭。
29	土師器・坏	(12.0)	—	—	①④②	②	にぶい橙	1/4	内外面吸炭、内面一部煤付着。
30	土師器・坏	(13.0)	4.6	—	①②⑥	②	橙	1/3	口縁部一部内外面吸炭。
31	土師器・坏	11.6	4.2	—	⑥②③①	②	橙	ほぼ完形	内面の大部分磨滅。
32	土師器・坏	(11.4)	4.6	—	⑥③①②	②	橙	1/4	内外面一部吸炭。
33	土師器・坏	(12.7)	—	—	①③②	②	橙	1/4	内面吸炭。
34	土師器・坏	12.0	4.6	—	②①③⑥	②	赤褐	2/3	二次加熱。
35	土師器・坏	12.3	4.2	—	⑥①②	②	橙	完形	内外面朱塗か。
36	土師器・坏	(12.8)	4.5	—	①②⑥④	②	にぶい橙	1/2	内外面吸炭、一部炭化物付着。外面一部表面剝離。
37	土師器・坏	12.4	4.5	—	③①④②⑥	②	橙	一部欠	内外面共磨滅した部分が多い。
38	土師器・坏	(12.6)	4.7	—	②①③④⑥	②	橙	口辺部1/2欠	口縁部内外面一部吸炭。
39	土師器・坏	(12.4)	4.3	—	①③④⑥②	②	明赤褐	口辺部1/2欠	内外面吸炭。
40	土師器・坏	11.9	4.5	—	②①③④⑥	②	橙	一部欠	口縁部内外面吸炭、炭化物付着。
41	土師器・坏	12.4	4.6	—	⑥②③①	②	橙	一部欠	内面薄く吸炭。
42	土師器・坏	12.8	4.3	—	②①③④⑥	②	橙	一部欠	一部吸炭。
43	土師器・坏	12.5	4.1	—	①③④②⑥	②	明赤褐	口縁部一部欠	口唇部内外面煤付着。



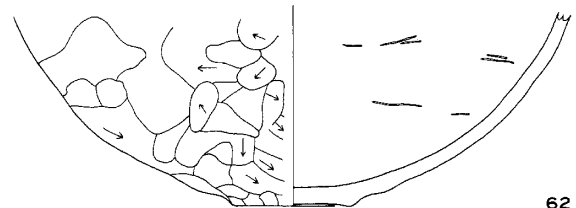
59



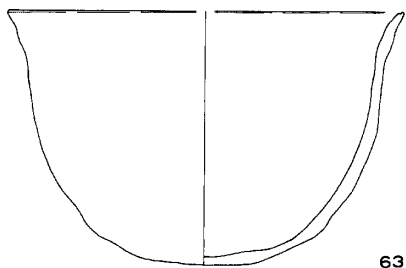
60



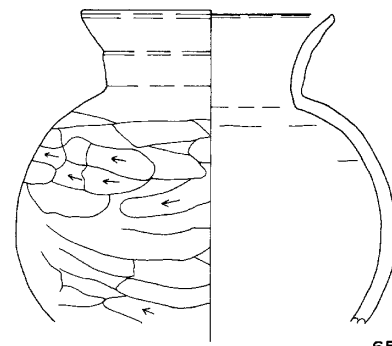
61



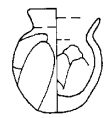
62



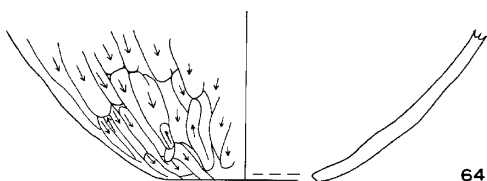
63



65



66



64



第115図 C区27号住居跡出土遺物(3)

44	土師器・坏	12.0	4.7	—	①④②⑥	②	浅黄橙	ほぼ完形	内面表面剥離した部分が多い。
45	土師器・坏	(12.4)	4.0	—	①③②⑥	②	橙	3/4	
46	土師器・高坏	12.3	8.3	8.2	①②④⑥③	②	橙	一部欠	口縁部剥離した部分が多い。
47	土師器・高坏	12.1	10.3	8.9	①④②⑥	②	明赤褐	5/6	脚部一部吸炭。
48	土師器・高坏	10.8	—	—	①②⑥④	②	明赤褐	脚部欠	内面剥離した部分が多い。
49	土師器・高坏	—	—	(8.0)	①⑥④②③	②	橙	脚部1/2	
50	土師器・高坏	19.4	—	—	①③④②⑥	②	橙	脚部欠3/4	外面吸炭した部分が多い。
51	土師器・高坏	—	—	—	①④②③⑥	②	橙	脚部のみ	
52	土師器・甕	15.5	35.5	6.2	⑥④②①	②	橙	一部欠	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
53	土師器・甕	15.8	35.9	4.6	①⑥②④	②	にぶい褐	上位1/2欠	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
54	土師器・甕	14.5	—	—	①②⑥③④	②	橙	底部欠5/6	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
55	土師器・甕	10.7	11.5	5.5	④⑥②①	②	橙	6/7	外面一部朱塗。
56	土師器・甕	14.2	13.8	6.7	①②③⑥④	②	橙	ほぼ完形	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
57	土師器・甕	—	—	6.1	②④①⑥	②	橙	底部のみ	内外面吸炭。
58	土師器・甕	—	—	5.4	①③②④⑥	②	明赤褐	底部のみ	内面リング状、外面一部炭化物付着。
59	土師器・甕	18.8	—	—	①③④②⑥	②	にぶい橙	上半のみ	内外面一部吸炭。
60	土師器・甕	20.8	—	—	①③④②⑥	②	橙	上半のみ	内外面一部吸炭。
61	土師器・甕	—	—	5.3	④③②①⑥	②	橙	底部のみ	内面一部炭化物付着。
62	土師器・甕	—	—	(6.3)	⑥②①③	②	橙	底部のみ	外面一部吸炭。
63	土師器・鉢	(20.8)	13.4	3.2	⑥①③④	②	にぶい褐	1/2	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
64	土師器・甕	—	—	(7.8)	①④③②⑥	②	にぶい橙	下位1/4	
65	土師器・甕	13.1	—	—	⑥①②④	②	橙	底部欠	
66	手捏	3.8	5.6	1.5	②①④	②	にぶい橙	ほぼ完形	

2 掘立柱建物跡

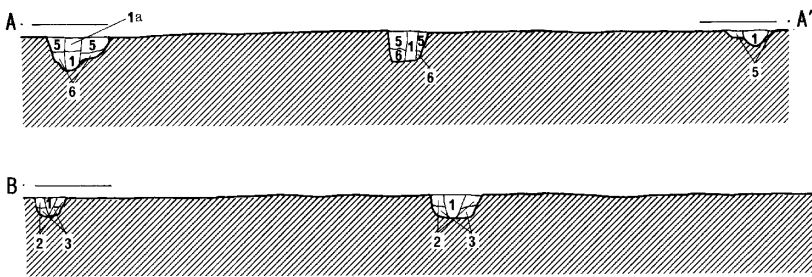
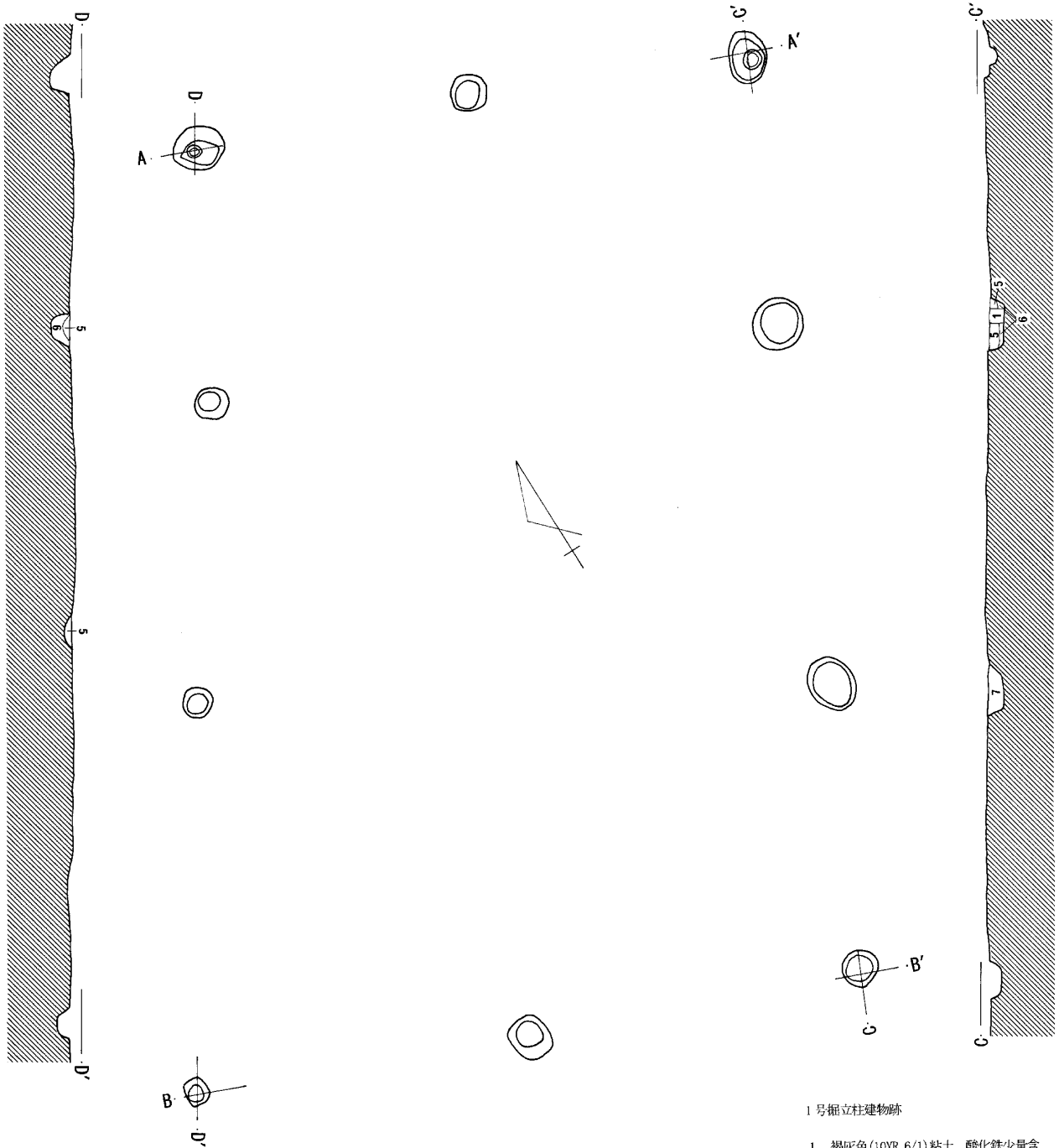
C区においては、柵列を含めて、掘立柱跡は1棟分のみの検出である。

1号掘立柱建物跡 O-17、P-17、18グリッドに位置している。第2確認面の検出である。

(第116図) 東西2間×南北3間規模をもつ。短軸側の北列方位はN-113°-E、南列方位はN-112°-Eを示し、平行するものである。長軸側の東列方位はN-25°-Eを示し、南北両列とはほぼ直交するものの、西列方位はN-31°-Eを示し、東列と平行しない上に、南北両列と直交しない。直交を成す東列の方位N-25°-Eを、本建物跡の主軸方位とする。

北列を成す各ピットは、西・45×42cm、深さ29cm、中央・35×35cm、深さ25cm、東・50×35cm、深さ15cmを計る。芯々間は、西側が2.65m、東側が2.75mである。両端のピットの中心には、西が径13cm、東が18cmの柱痕がみられ、先端の断面は三角形を呈していた。柱痕（酸化鉄を含む褐灰色粘土＝第1層）の周囲には、下位に黄灰色粘土粒、マンガンを含む暗灰黄色粘土（第6層）、上位には、黄灰色粘土粒・ブロック、マンガンを含む浅黄色粘土（第5層）が堆積している。中央ピットは、径8cmの柱痕がみられ、覆土も同一の構成であるが、柱痕の先端は平坦となっている。全体長は、5.40mである。

南列を成す各ピットは、西・26×20cm、深さ17cm、中央・41×35cm、深さ18cm、東・33×30cm、深さ10cmを計る。芯々間は、西側が3.25m、東側が3.20mであり、北列との芯々間距離が、それぞれ60～45cm長い。この差が、東西両列の角度の差を生じる原因となっているものである。西側の2ピットの中心には、西が径10cm、中央が18cmの柱痕がみられ、先端の断面はいずれも三角形を呈していた。東端ピットは、柱痕がみられず、多量の酸化鉄、



1号掘立柱建物跡

- 1 褐灰色(10YR 6/1)粘土。酸化鉄少量含む。(柱痕跡)。
- 1a 灰黄褐色(10YR 6/2)粘土。黄灰色粘土粒、マンガン粒少量含む。柱痕であるが5層の影響により変色している。
- 2 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄多量含む。しまり良い。
- 3 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。酸化鉄、マンガン粒多量含む。しまり良い。
- 4 黄灰色(2.5Y 6/1)粘土。酸化鉄多量、マンガン粒少量含む。しまり良い。
- 5 浅黄色(2.5Y 7/3)粘土。黄灰色粘土粒・ブロック、マンガン粒少量含む。しまり良い。
- 6 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土。黄灰色粘土粒、マンガン粒少量含む。しまり良い。
- 7 浅黄色(2.5Y 7/3)粘土。黄灰色粘土粒、マンガン粒多量含む。しまり良い。

0 L = 27.700m 2m 1:60

第116図 C区1号掘立柱建物跡

少量のマンガン粒を含む黄灰色粘土（第4層）が堆積している。柱痕（第1層）をもつ2ピットには、周囲の下位に酸化鉄、マンガン粒を多量に含む暗灰黄色粘土（第3層）、上位には、多量の酸化鉄を含む黄灰色粘土（第2層）が堆積している。全体長は、6.45mである。

東列を成す中央の2ピットは、北・46×46cm、深さ14cm、南・52×44cm、深さ15cmを計る。北ピットは、北列と同様、中央に径13cmの柱痕をもち、周囲には下位に第6層、上位に第5層が堆積している。柱痕先端の断面形は、北列中央ピット同様平坦である。また南ピットは、南列東ピット同様、柱痕はみられず、単一層（第5層に近似した、黄灰色粘土粒、マンガン粒を含む浅黄色粘土＝第7層）が堆積していたものである。芯々間は、北側から、2.50m、3.46m、2.70mである。全体長は、8.66mである。

西列を成す中央の2ピットは、北・30×30cm、深さ18cm、南・30×25cm、深さ7cmを計る。北ピットの覆土は、下位に第6層、上位に第5層が堆積し、柱痕はみられない。南ピットは、全面に第5層が堆積し、やはり柱痕はみられない。芯々間は、北側から、2.35m、2.85m、3.72mである。全体長は、8.92mである。

東・西、南・北それぞれ対辺の長さ、柱の芯々間距離等異なる点、柱痕の有無、西列のみ方位を違える点等、疑問点の多い遺構である。

3 土 坑

C区における土坑は、平成13年度調査で66基が調査されている。第1確認面及び第2確認面からの検出である。他の遺構を切断している点でB区調査分と共通する点が多い。また、遺物の出土が少なく、時期の不明瞭な点も共通している。

検出された土坑は、その形態から五つのタイプに分類される。

1 タイプ 小型で浅く、概ね円形を呈するタイプである。

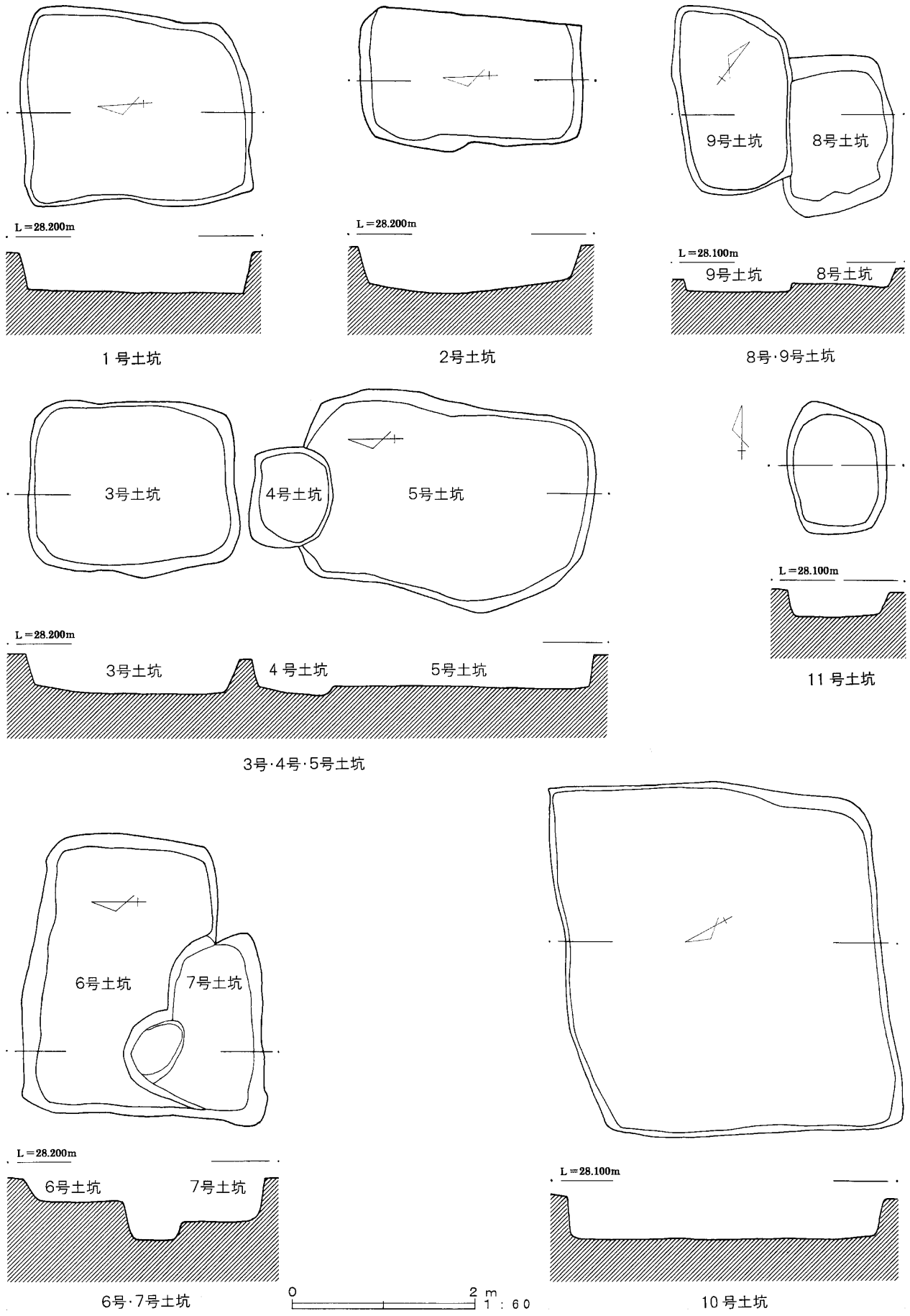
12号、17号、20号、33号、35号、37号、43号、44号、51号、55号、65号の各土坑が含まれる。全て第2確認面の検出である。51号土坑を除いて、住居跡が所在する範囲内に位置している。

12号土坑は、K-19グリッドに位置している。長円形を呈して、116×68cm、深さ8cmを計る。覆土は、灰、炭化物、焼土粒の混在層であり、土師器台付甕（第123図12-1）の台部が検出されている。

17号土坑は、M-16グリッドに位置している。長円形を呈しており、85×54cm、深さ10cmを計る。覆土は、褐色シルトである。

20号土坑は、N-16グリッドに位置している。長円形を呈しており、160×125cm、深さ32cmを計る。覆土は、多量の酸化鉄、黒褐色粘土ブロック、にぶい黄色粘土ブロック、少量の炭化物を含むオリーブ褐色粘土である。

33号土坑は、P-18グリッド位置している。円形を呈して、103×68cm、深さ15cmを計る。



第117图 C区土坑(1)

覆土は、多量の酸化鉄、マンガン粒、中量の炭化物を含む鈍い黄褐色シルトの一部に焼土・炭化物混在層を含んでいる。

35号土坑は、P-15グリッドに位置している。長円形を呈して、100×55cm、深さ32cmを計る。

37号土坑は、R-17、S-17グリッドに位置している。長円形を呈して、195×154cm、深さ42cmを計る。

43号土坑は、V-21グリッドに位置している。円形を呈して、86×88cm、深さ30cmを計る。

44号土坑は、V-21グリッドに位置している。長円形を呈して、122×96cm、深さ20cmを計る。

51号土坑は、W-25グリッドに位置している。長円形を呈して、110×90cm、深さ24cmを計る。

55号土坑は、X-20グリッドに位置している。長円形を呈して、260×191cm、深さ20cmを計る。土師器台付甕（第123図55-1）の台部が検出されている。

65号土坑は、Y-21グリッドに位置している。円形を呈して、65×58cm、深さ11cmを計る。覆土は、浅間A火山灰粒を含み、ほぼ全面が炭化した灰色粘土である。須恵器甕（第123図65-1）の口縁部が出土している。

2 タイプ

小型で浅く、長方形を呈するタイプである。

4号、8号、9号、11号、13号、18号、21号、22号、57号、61号の各土坑が含まれる。21号、22号、61号土坑は、住居跡が所在する範囲外に、4号、8号、9号、11号、13号、18号、57号の各土坑は、住居跡が所在する範囲内に位置している。

4号土坑は、I-18、19グリッドに位置している。やや隅の丸い長方形を呈して、110×84cm、深さ34cmを計る。5号土坑に切断されている。

8号土坑は、J-17グリッドに位置している。1号溝跡を切断し、9号土坑に切断されている。長方形を呈して、175×122cm、深さ20cmを計る。

9号土坑は、J-17、18グリッドに位置している。1号溝跡、8号土坑を切断している。長方形を呈して、210×132cm、深さ20cmを計る。

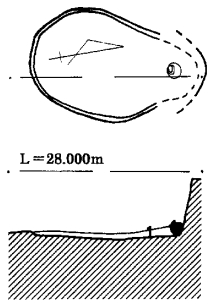
11号土坑は、K-18グリッドに位置している。長方形を呈して、140×110cm、深さ30cmを計る。

13号土坑は、K-19、L-19グリッドに位置している。やや隅の丸い長方形を呈して、215×114cm、深さ25cmを計る。土師器台付甕（第123図55-1）の台部が検出されている。

18号土坑は、M-19、N-19グリッドに位置している。長方形を呈して、112×91cm、深さ20cmを計る。

21号土坑は、N-21、22グリッドに位置している。長方形を呈して、257×117cm、深さ18cmを計る。

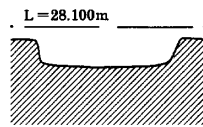
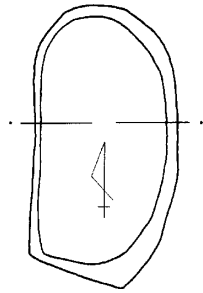
22号土坑は、N-22グリッドに位置している。長方形を呈して、135×100cm、深さ15cm



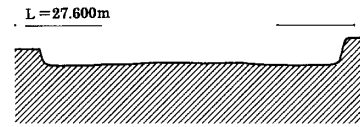
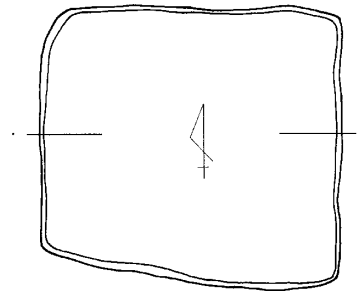
12号土坑

12号土坑土層

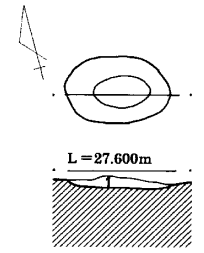
1 灰、炭化物、焼土粒の混在層。



13号土坑



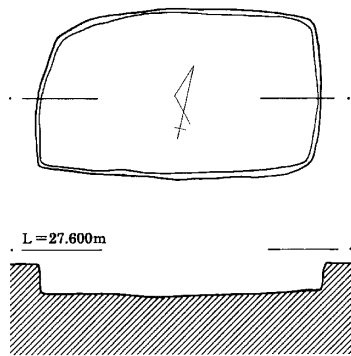
14号土坑



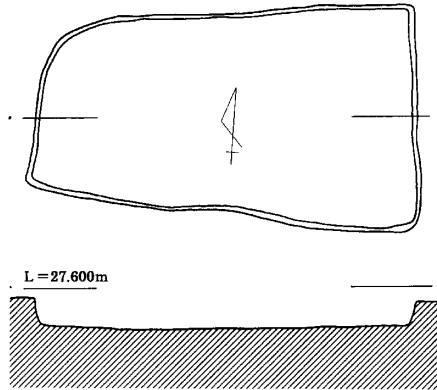
17号土坑

17号土坑土層

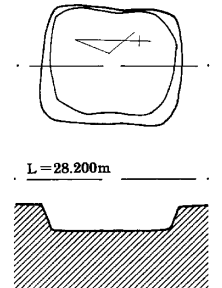
1 褐色(10YR 4/4)シルト。



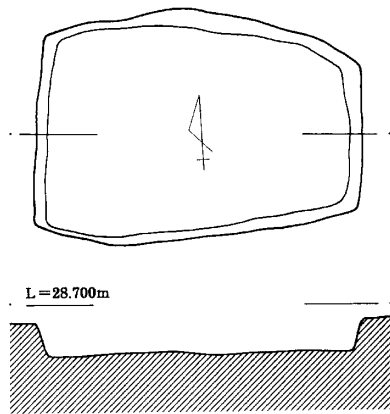
15号土坑



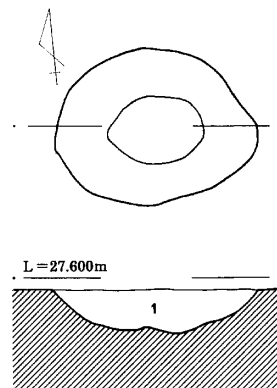
16号土坑



18号土坑



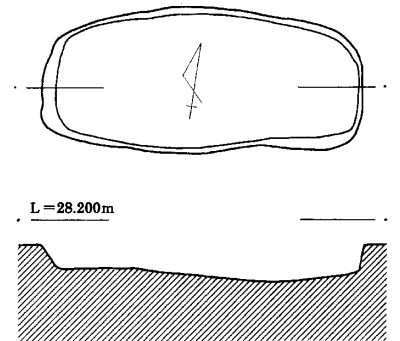
19号土坑



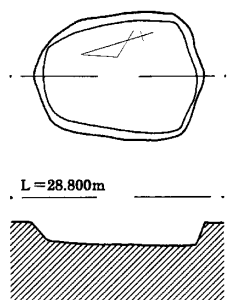
20号土坑

20号土坑土層

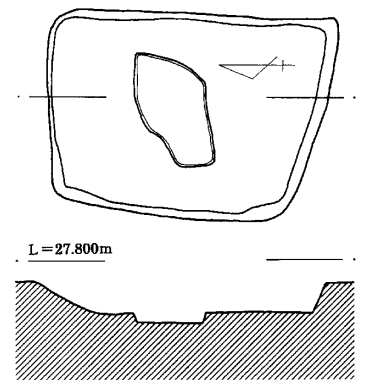
1 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土、酸化鉄多量、黒褐色(10YR 3/2)粘土ブロック、にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘土ブロック、炭化物を少量含む。



21号土坑



22号土坑



23号土坑



第118図 C区土坑(2)

を計る。

57号土坑は、X-20グリッドに位置している。長方形を呈して、110×74cm、深さ14cmを計る。南部では、燃焼により強く焼土化した部分が、底面（第7層）及び壁面（第4層）にみられ、その上面には、焼土ブロックを含むにぶい黄色シルト（第5層）、あるいは炭化物ブロックを含む黒褐色粘土（第6層）が堆積している。北部には、灰層（第2層）を中心に、灰・焼土粒を含む灰色シルト（第1・3層）が分布する。また底面は、全体に吸炭し、小豆色を呈している（第8層）。灰及び炭化物層中より、土師器甕の小片が検出されているものの、図示可能なものはみられない。

61号土坑は、X-25グリッドに位置している。不整な長方形を呈して、168×100cm、深さ20cmを計る。

3 タイプ 小型で深く、円形を呈するタイプである。58号土坑が該当する。

58号土坑は、X-21グリッドに位置している。ほぼ円形を呈し、105×95cm、深さ77cmを計る。覆土は、上位に浅間A火山灰粒・ブロックを含む灰色粘土（第1層）であり、全面炭化している。下位にはさらに炭化物が含まれる灰色粘土（第2層）が堆積している。

1タイプとした65号土坑も、同一の覆土であり、65号は、浅いものの本来は深く、3タイプに属するものと思われる。

4 タイプ 大型で深く、方形もしくは長方形を呈するタイプである。

1号、2号、3号、5号、6号、10号、14号、15号、16号、19号、23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号、30号、31号、32号、34号、36号、38号、39号、41号、42号、45号、46号、47号、49号、52号、53号、54号、56号、60号、62号、63号、64号の各土坑が含まれる。

これら各土坑は、さらに3グループに区分される。

第1のグループは、1号、3号、10号、14号、24号、53号、56号、60号、62号の9基が含まれ、大型で深く、正方形もしくは正方形に近い長方形を呈するグループである。

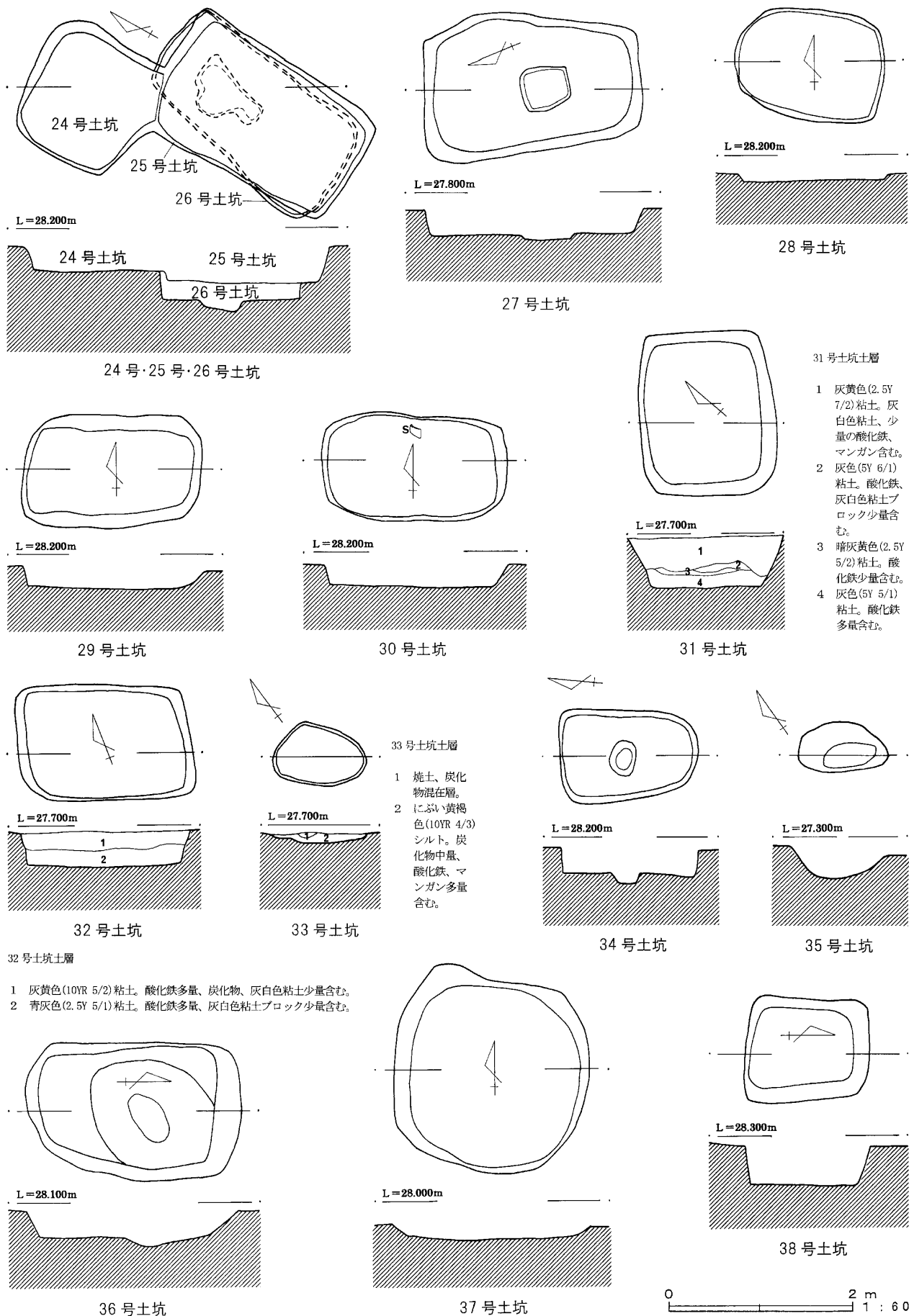
1号土坑は、H-17、18、I-17、18グリッドに位置している。1号溝跡を切断している。正方形に近い長方形を呈して、250×225cm、深さ45cmを計る。

3号土坑は、I-18、19グリッドに位置している。正方形に近い長方形を呈して、228×198cm、深さ36cmを計る。

10号土坑は、J-17、18、K-17、18グリッドに位置している。平行四辺形に近い正方形を呈しており、397×350cm、深さ41cmを計る。1号溝を切断している。土師器器台（第123図10-1）が出土している。

14号土坑は、L-22グリッドに位置している。2号畠跡を切断している。ほぼ正方形を呈して、238×225cm、深さ20cmを計る。覆土は、多量の黄色・褐灰色・灰白色粘土ブロック、少量の酸化鉄を含む灰色シルトである。本タイプの基本的な覆土である。

24号土坑は、N-22、O-22グリッドに位置している。25号・26号土坑を切断している。



第119図 C区土坑(3)

正方形を呈して、145×140cm、深さ27cmを計る。

53号土坑は、X-19グリッドに位置している。やや不整な正方形を呈して、280×260cm、深さ32cmを計る。

56号土坑は、X-19、20グリッドに位置している。正方形を呈して、230×228cm、深さ32cmを計る。

60号土坑は、X-23グリッドに位置している。正方形に近い長方形を呈して、190×170cm、深さ24cmを計る。

62号土坑は、X-25グリッドに位置している。正方形に近い長方形を呈して、225×185cm、深さ58cmを計る。

第2のグループは、23号、26号、27号、34号、36号、45号、64号の7基が含まれ、大型で深く、長方形を呈し、底面の中央もしくは中央付近に小ピットをもつグループである。なお、この小ピットは、全て、底面・側面共に酸化鉄で覆われているものである。

23号土坑は、N-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、235×163cm、深さ25cmを計る。底面中央部には、55×100cm範囲で不整形を呈し、深さ10cmのピットがみられる。

26号土坑は、O-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、246×123cm、深さ35cmを計る。底面中央北寄りには、85×50cm範囲で不整形を呈し、深さ10cmのピットがみられる。

27号土坑は、N-22、O-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、240×160cm、深さ30cmを計る。底面中央部には、55×50cmで方形を呈し、深さ9cmのピットがみられる。

34号土坑は、P-23、24グリッドに位置している。長方形を呈しており、150×103cm、深さ28cmを計る。底面中央部には、30×42cmで長円形を呈し、深さ13cmのピットがみられる。

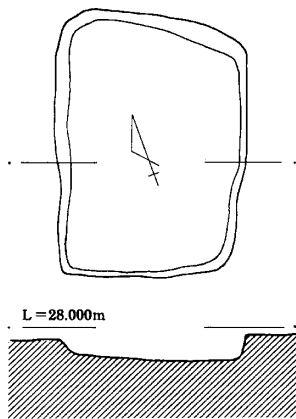
36号土坑は、Q-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、240×150cm、深さ29cmを計る。底面中央やや北寄りには、130×120cmで円形を呈し、深さ10cmのピットがみられる。

45号土坑は、V-25グリッドに位置している。長方形を呈しており、190×131cm、深さ34cmを計る。底面北西隅には、30×25cmで長方形を呈し、深さ21cmのピットがみられる。

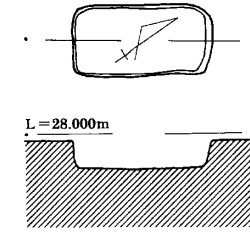
64号土坑は、X-19、Y-19グリッドに位置している。長方形を呈しており、210×167cm、深さ13cmを計る。底面中央やや北寄りには、45×55cmで長方形を呈し、深さ17cmのピットがみられる。土師器甕（第123図64-1）

第3のグループは、2号、5号、6号、15号、16号、19号、25号、28号、29号、30号、31号、32号、38号、39号、40号、41号、42号、46号、47号、49号、52号、54号、63号の23基が含まれ、大型で深く、長方形を呈するグループである。

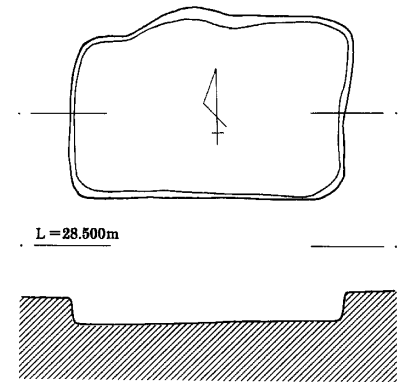
2号土坑は、I-18グリッドに位置している。長方形を呈しており、245×140cm、深さ52cmを計る。



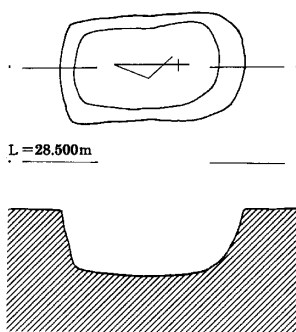
39 号土坑



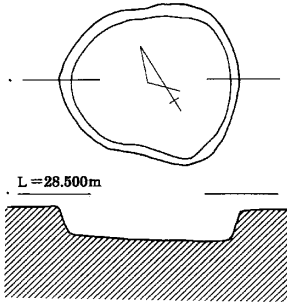
40 号土坑



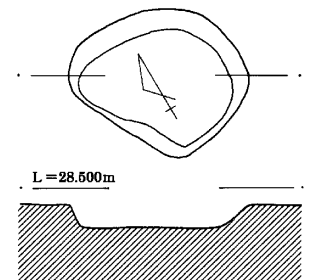
41 号土坑



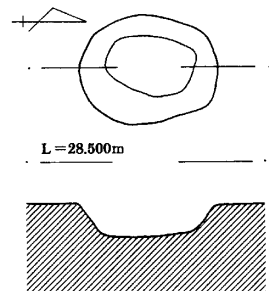
42 号土坑



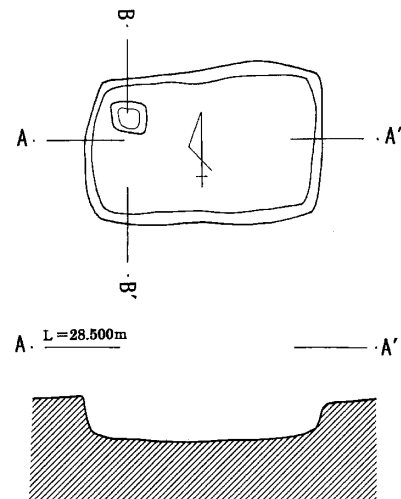
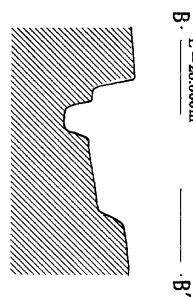
43 号土坑



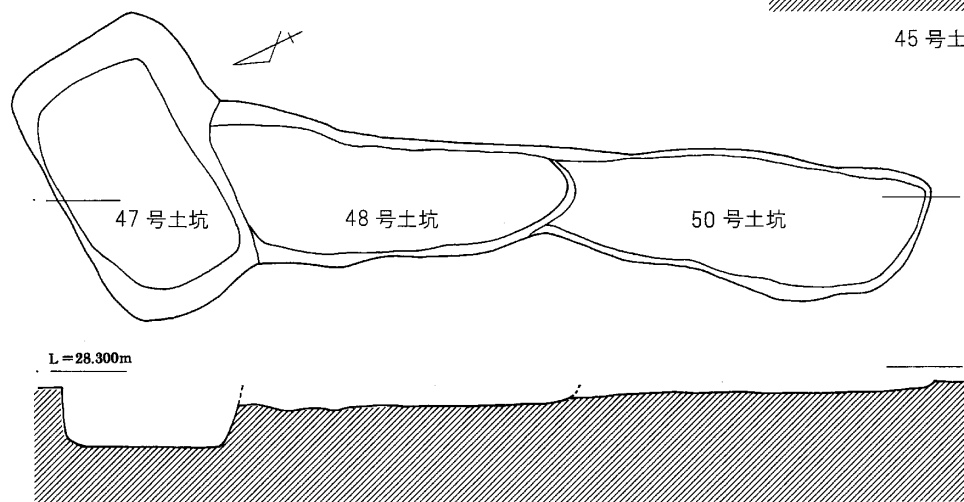
44 号土坑



51 号土坑



45 号土坑



47 号·48 号·50 号土坑



第120图 C区土坑(4)

5号土坑は、I-18、19グリッドに位置している。長方形を呈しており、327×218cm、深さ37cmを計る。4号土坑を切断している。土師器台付甕（第123図5-1）台部が出土している。

6号土坑は、I-19グリッドに位置している。長方形を呈しており、310×200cm、深さ23cmを計る。7号土坑を切断している。

15号土坑は、L-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、226×137cm、深さ27cmを計る。2号畠跡を切断している。覆土は、14号土坑と同一である。

16号土坑は、L-22、M-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、308×179cm、深さ20cmを計る。2号畠跡を切断している。覆土は、14号土坑と同一である。

19号土坑は、M-21、22グリッドに位置している。長方形を呈しており、258×186cm、深さ25cmを計る。

25号土坑は、O-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、236×142cm、深さ38cmを計る。26号土坑を削平し、24号土坑には切断されている。

28号土坑は、O-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、170×125cm、深さ10cmを計る。

29号土坑は、O-22、23グリッドに位置している。長方形を呈しており、196×128cm、深さ23cmを計る。

30号土坑は、O-23グリッドに位置している。長方形を呈しており、205×104cm、深さ23cmを計る。須恵器坏（第123図30-1）及び礫が出土している。

31号土坑は、P-17グリッドに位置している。長方形を呈しており、182×151cm、深さ56cmを計る。土師器台付甕（第123図31-1）口縁部、壺（同一2）が出土している。覆土は、上位に少量の酸化鉄、マンガン粒を含む灰黄色粘土（第1層）、下位に多量の酸化鉄を含む灰色粘土（第4層）が堆積し、両層の間には、少量の酸化鉄、灰白粘土ブロックを含む灰色粘土（第2層）、少量の酸化鉄を含む暗灰黄色粘土（第3層）のみられる部分もある。

32号土坑は、P-17グリッド、1号掘立柱建物跡内に位置している。長方形を呈しており、192×127cm、深さ38cmを計る。

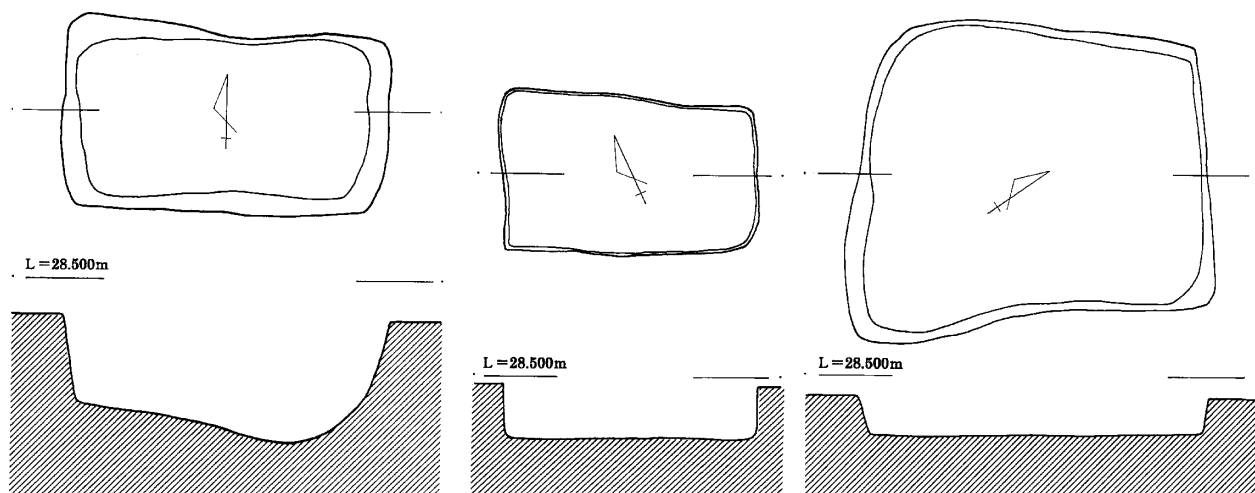
覆土は、上層が少量の炭化物、灰白色粘土を含む灰黄色粘土（第1層）、下層が少量の灰白色粘土ブロックを含む青灰色粘土（第2層）であり、いずれも酸化鉄を多量に含んでいる。本グループの基本土層を示している。

38号土坑は、S-23グリッドに位置している。長方形を呈しており、138×116cm、深さ43cmを計る。

39号土坑は、T-17グリッドに位置している。長方形を呈しており、208×140cm、深さ20cmを計る。

40号土坑は、U-19グリッドに位置している。長方形を呈しており、108×52cm、深さ20cmを計る。

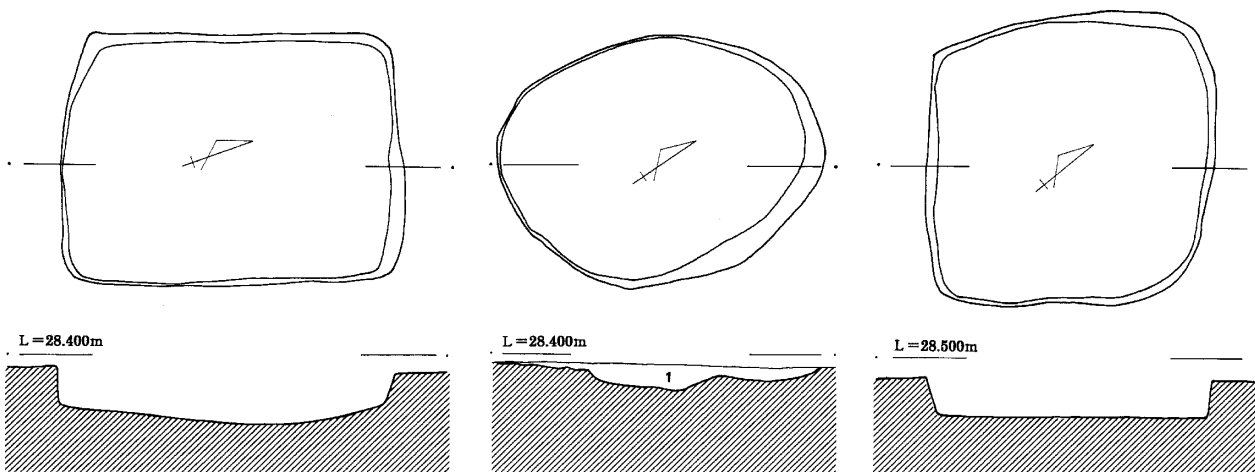
41号土坑は、U-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、220×146cm、深さ



49号土坑

52号土坑

53号土坑



54号土坑

55号土坑

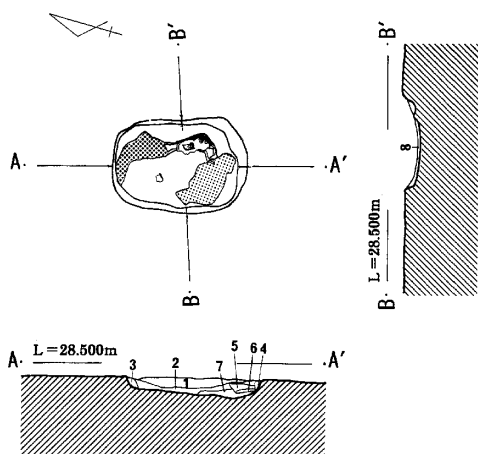
56号土坑

55号土坑土層

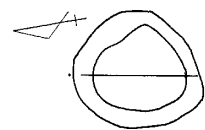
1 灰色(5Y 6/1)粘土。ところどころ酸化している。

57号土坑土層

- 1 灰色(5Y 6/1)シルト。焼土・灰ブロックが大半を占める。
- 2 灰色(5Y 5/1)灰層。
- 3 灰色(5Y 6/1)シルト。焼土粒少量含む。
- 4 暗赤褐色(5YR 3/3)焼土。
- 5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。焼土ブロックを含む。
- 6 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土。炭化物ブロック含む。
- 7 暗赤褐色(5YR 3/2)粘土。燃焼部。
- 8 吸炭部。

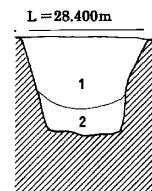


57号土坑

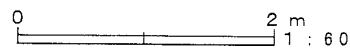


58号土坑土層

- 1 灰色(5Y 6/1)粘土。火山灰粒・ブロックを含む。ほぼ全面炭化している。
- 2 灰色(5Y 6/1)粘土。炭化物ブロック、火山灰粒を含む。



58号土坑



第121図 C区土坑(5)

25cmを計る。

42号土坑は、U-24グリッドに位置している。長方形を呈しており、149×85cm、深さ55cmを計る。

46号土坑は、W-22グリッドに位置している。長方形を呈しており、128×60cm、深さ35cmを計る。23号住居跡を切断している。

47号土坑は、W-24グリッドに位置している。長方形を呈しており、230×148cm、深さ47cmを計る。48号土坑を切断している。

49号土坑は、W-24, X-24グリッドに位置している。長方形を呈しており、261×142cm、深さ70～90cmを計る。

52号土坑は、X-18グリッドに位置している。長方形を呈しており、205×129cm、深さ40cmを計る。

54号土坑は、X-19, 20グリッドに位置している。長方形を呈しており、274×198cm、深さ38cmを計る。土師器坏（第123図54-1）、高坏（同一-2）が出土している。

63号土坑は、Y-19グリッドに位置している。長方形を呈しており、212×170cm、深さ75cmを計る。B区2号方形周溝墓の北西溝外縁の一部を切断している。

5 タイプ

その他の不整系を呈するものを一括したものである。

7号、48号、50号、59号、66号の5土坑が含まれる。

7号土坑は、I-19グリッドに位置し、ハート形を呈して、175×203cm、深さ50～72cmを計る。6号土坑に切断されている。

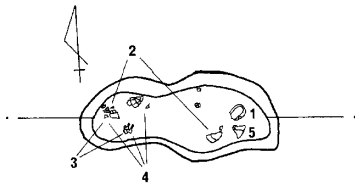
48号土坑は、W-24グリッドに位置し、溝状の形態を呈しており、現状で長さ、300cm、幅94cm、深さ18cmを計る。50号土坑を切断し、47号土坑に切断されている。

50号土坑は、W-24グリッドに位置し、溝状の形態を呈しており、現状で長さ、305cm、幅110cm、深さ8cmを計る。48号土坑に切断されている。

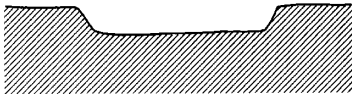
59号土坑は、X-21グリッドに位置し、瓢箪状の形態を呈しており、長さ、160cm、最大幅70cm、最小幅45cm、深さ22cmを計る。覆土は、炭化物及び焼土粒を含むにぶい黄色シルト層である。遺物は、覆土中から、土師器坏（第123図59-1、2）、土師器高坏（同一-3、4、5）が出土している。

66号土坑は、Y-20グリッドに位置し、不整円形を呈しており、410×360cm、深さ10cmを計る。

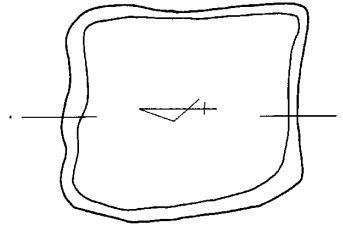
本土坑は、26号住居跡の上位覆土である、多量のマンガン粒、少量の炭化物及び焼土粒を含むオリーブ褐色シルト（26号住居跡第1層）が、竪穴中央部にレンズ状の窪みをもつが、その窪みを使用しているものである。土坑の覆土は、焼土粒を含むにぶい黄色シルトであるが、ほぼ全面が炭化している。遺物は、土坑底面から、土師器坏（第123図66-1、2）、土師器高坏（同一-3）、刀子（同一-4）が出土している。



L = 28.500m



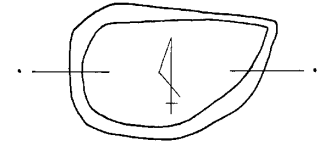
59号土坑



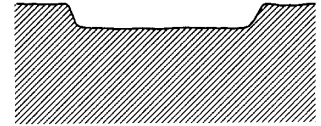
L = 28.000m



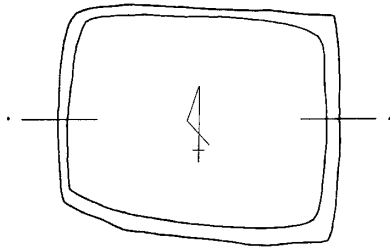
60号土坑



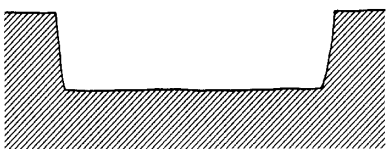
L = 28.500m



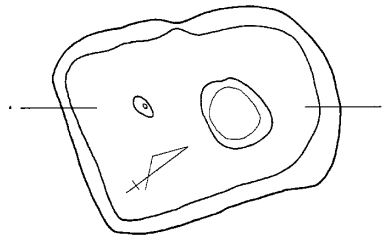
61号土坑



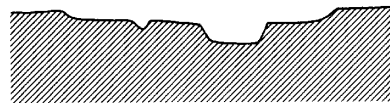
L = 28.500m



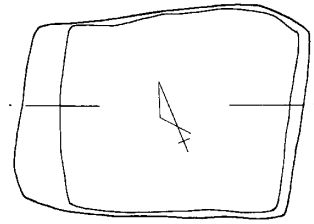
62号土坑



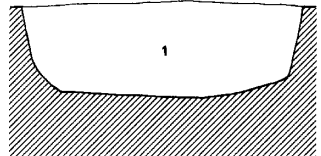
L = 28.500m



64号土坑



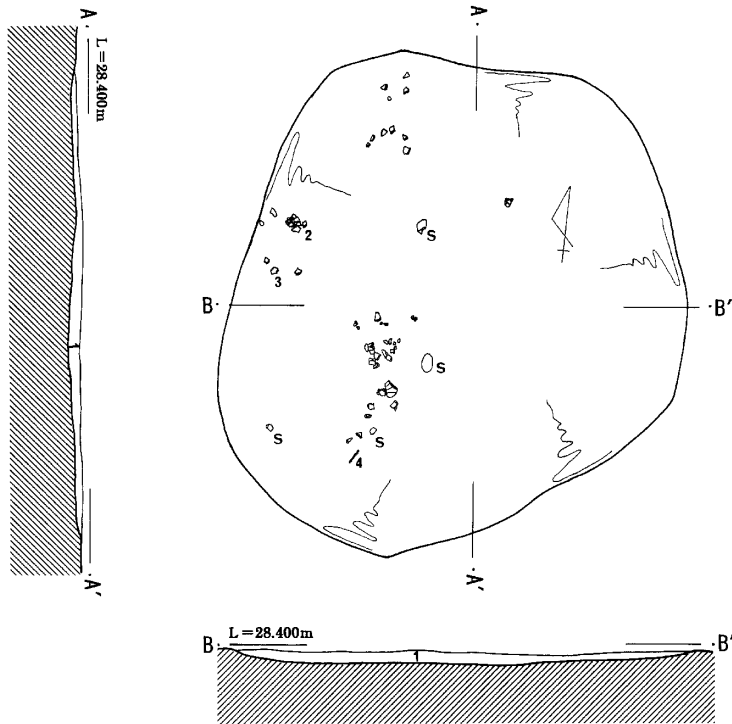
L = 28.500m



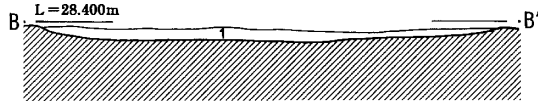
63号土坑

63号土坑土層

- 1 灰色(7.5Y 6/1)粘土。灰色(7.5Y 4/1)粘土ブロック、オリーブ黄色(5Y 6/4)粘土ブロック、にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土ブロック、火山灰を含む。



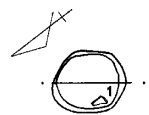
A-A' L = 28.400m



B-B' L = 28.400m

66号土坑土層

- 1 にぶい黄色(2.5Y 6/4)シルト。焼土粒含む。ほぼ炭化している。



L = 28.400m



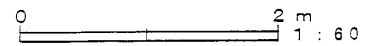
65号土坑

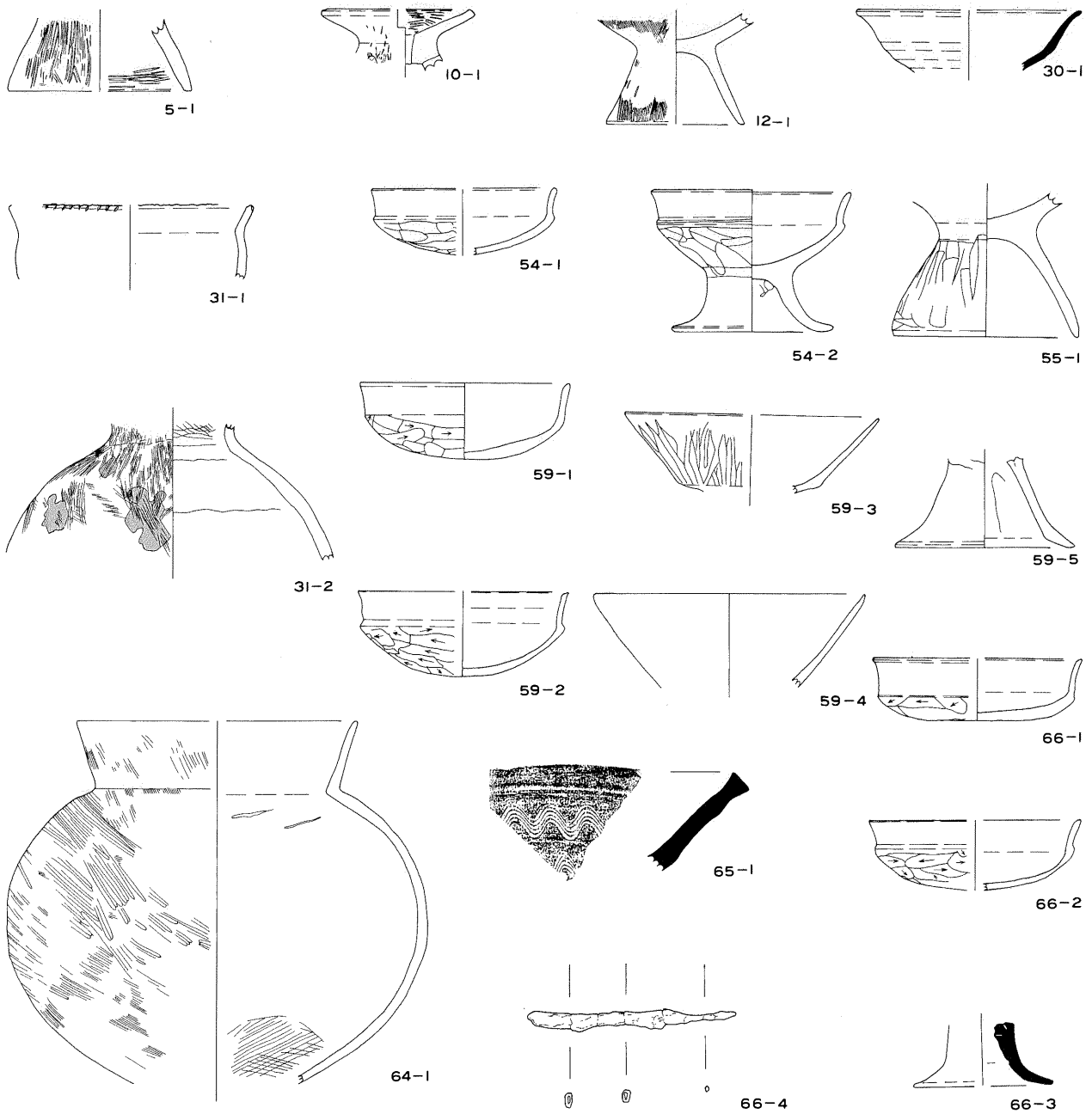
65号土坑土層

- 1 灰色(5Y 6/1)粘土。火山灰粒を含む。ほぼ炭化している。

66号土坑

第122図 C区土坑(6)





第123図 C区土坑出土遺物

第39表 C区土坑出土遺物観察表 (第123図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
5-1	土師器・台付甕	—	—	(11.2)	②③①	②	橙	台部のみ 1/5	一部吸炭。二次加熱。
10-1	土師器・器台	(8.7)	—	—	②①④	②	にぶい橙	受台部のみ	脚部三方透し(円孔)。一部吸炭。二次加熱。
12-1	土師器・台付甕	—	—	(8.5)	⑥②①③	②	明赤褐	台部 1/2	内外面炭化物付着。二次加熱。
30-1	須恵器・坏	13.4	—	—	②①③	③	にぶい黄橙	1/8	酸化焼成。
31-1	土師器・甕	(15.0)	—	—	①③④⑥	②	明赤褐	口縁部 1/6	内外面吸炭。二次加熱。
31-2	土師器・壺	—	—	—	③①②④	②	にぶい黄橙	肩部 1/2	外面一部朱塗。二次加熱。
54-1	土師器・坏	(11.0)	—	—	④①⑥②	②	橙	1/4	
54-2	土師器・高坏	12.1	8.8	(8.9)	①②④③⑥	②	橙	3/4	坏部内面一部表面剝離。
55-1	土師器・台付甕	—	—	11.4	①④②	②	明赤褐	脚台部のみ	吸炭。二次加熱。
59-1	土師器・坏	12.9	4.7	—	③①②④	②	明赤褐	一部欠	外面一部吸炭。

59-2	土師器・坏	(13.0)	5.3	—	①②④⑥	②	明赤褐	1/2	外面一部炭化物付着。
59-3	土師器・高坏	(15.6)	—	—	②⑥①④	②	明褐	坏部 1/8	
59-4	土師器・高坏	16.6	—	—	②①③	②	赤褐	坏部 3/4	全面ナデ。
59-5	土師器・高坏	—	—	11.0	①②④③⑥	②	橙	脚部のみ	
64-1	土師器・壺	(17.2)	22.5	—	①②③④	②	にぶい橙	底部欠 1/3	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
65-1	須恵器・甕	(55.7)	—	—	①②⑥	②	にぶい赤	口縁部 1/10	
66-1	土師器・坏	(12.8)	3.9	—	②①③④	②	明赤褐	1/3	
66-2	土師器・坏	(12.2)	4.4	—	①⑥②	②	橙	1/2	
66-3	須恵器・高坏	—	—	(8.5)	①⑥④	②	にぶい黄橙	脚部 1/4	脚部三方透し(長方形)。
66-4	刀子	長さ 12.7	幅 0.4	刀身 8.5	柄 4.5			完形	

4 畠跡

C区における畠跡は、平成13年度調査において、北住居跡群と南住居跡群の間、もしくは、北住居跡群の西側に集中して、15ブロックが確認されている。

1号畠跡 I-20、J-19、20、K-19、20、21グリッドに亘って位置している。第2確認面から(第124図)の検出である。

(第138図) 全体では南北21.0m、東西約17.5mの範囲に及ぶが、畝の形態・規模等から3ブロックに区分される。さらに畝の方位が、北東側N-63°-W、北西側N-47°-W、南側N-55°-Wと、それぞれ異なることから、北東・北西・南の3ブロックに分離する可能性は高い。しかしながら、畝間の覆土が、全てオリーブ色シルトで共通するため、ひとつの畠跡としたものである。

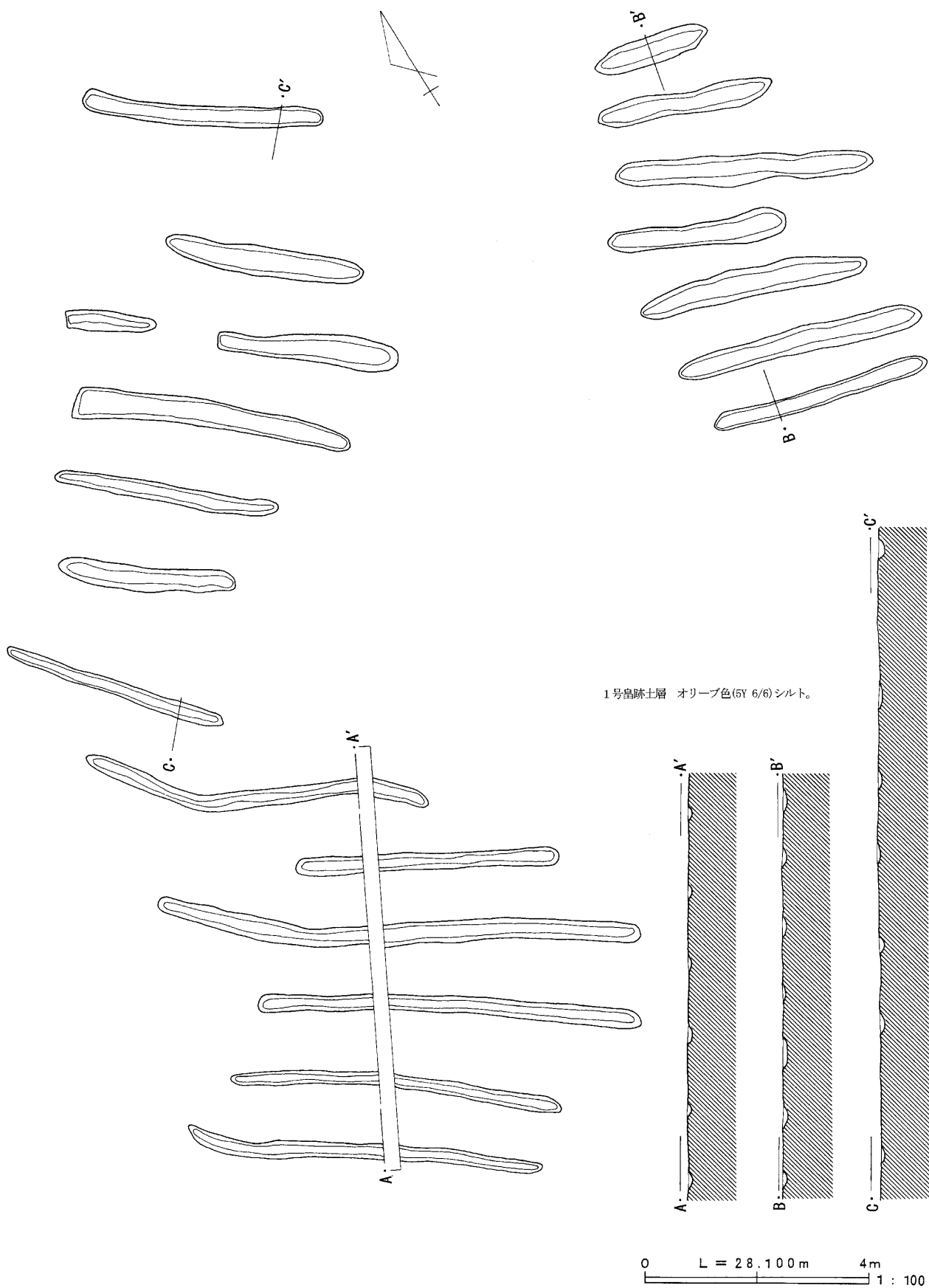
北東ブロックは、畝数6を数える。畝幅は、概ね50cm前後であるが、最小40cmから最大90cmと、幅がある。長さも3.2mから4.5mまでがみられる。畝間幅も50cm前後であり、直線を成す場合が多い。確認面からの深さは、10cm前後である。

北西ブロックも、畝数は6を数える。畝幅は、概ね100cm前後であるが、最小90cmから最大220cmと、広い幅が目立つ。長さは、4.0mから5.8mまでがみられる。畝間幅は50cm前後であり、やや曲線を成す場合が多い。確認面からの深さは、10cm前後である。

南ブロックは、畝数は5を数える。畝幅は、概ね2.00m前後であり、幅がかなり広く、ほぼ直線を呈する。しかし北西側に延びる畝は、北西方向に折れ曲がり、角度は北西ブロックと共通するようになり、両ブロックが連続する様相を呈している。北西ブロックの南端の畝間と、南ブロック北端の畝間の間に畝が存在したとすると、北西ブロックと南ブロックで畝数は、計12となる。南ブロックの畝間幅は、概ね50cm前後で安定している。長さは6mから9mまでみられる。確認面からの深さは、5～11cmである。

遺物は、北西ブロックの畝間から、土師器壺(第138図1-1)の口縁部が検出されている。口唇内面に細縄文が施されている。

2号畠跡 K-21、22、L-21、22、M-21、22グリッドに亘って位置している。第1確認面から(第125図)の検出であり、南端の西部は、西側調査区外に及んでいる。



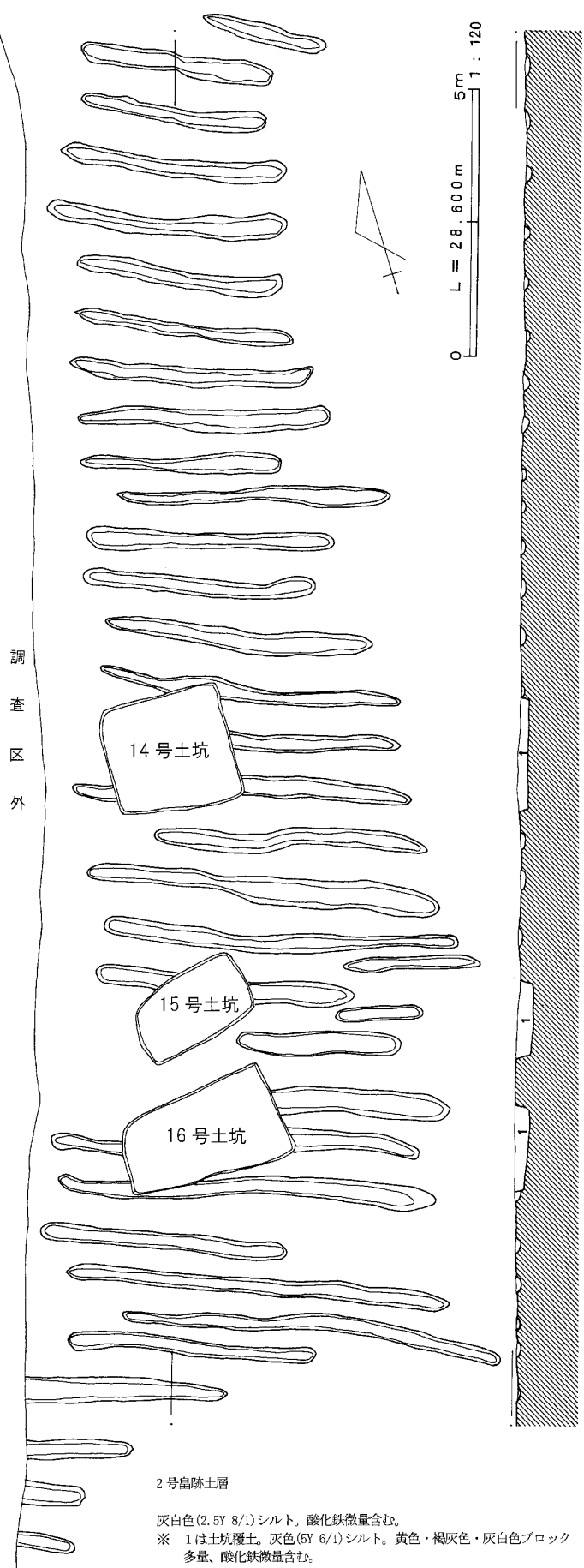
第124図 C区1号畠跡

全体では南北28.8m、東西約8mの範囲に及ぶが、南端の3畝については、別ブロックとして区分される。しかし、畝の方位は、同一のN-74°-Wを示し、畝間の覆土も、全て僅かに酸化鉄を含む灰白色シルトで共通するため、一つの畝跡とした。南半部は、14号、15号、16号の各土坑に切断されている。

北ブロックは、畝数28を数える。畝幅は、概ね60cm前後であるが、最小20cmから最大80cmと、やや異なる部分もある。長さは3.6mから7.2mまでがみられる。総じて、北側が短く、南側が長い。しかし中央南寄りでは、2.5m前後の部分もみられる。

畝間幅は35cm前後でほぼ平均し、湾曲も僅かである。確認面からの深さは、10cm前後である。

南ブロックは、畝数3を数える。畝幅は、やはり概ね60cm前後であるが、最小35cmから最大70cmと、やや異なる部分もある。長さは不明である。畝間幅は35cm前後でほぼ平均しており、確認面からの深さは、10cm前後である。北ブロック南端の畝間と南ブロック北端の畝間の間に畝が存在したとすれば、畝数は全体で32となる。



第125図 C区2号畝跡

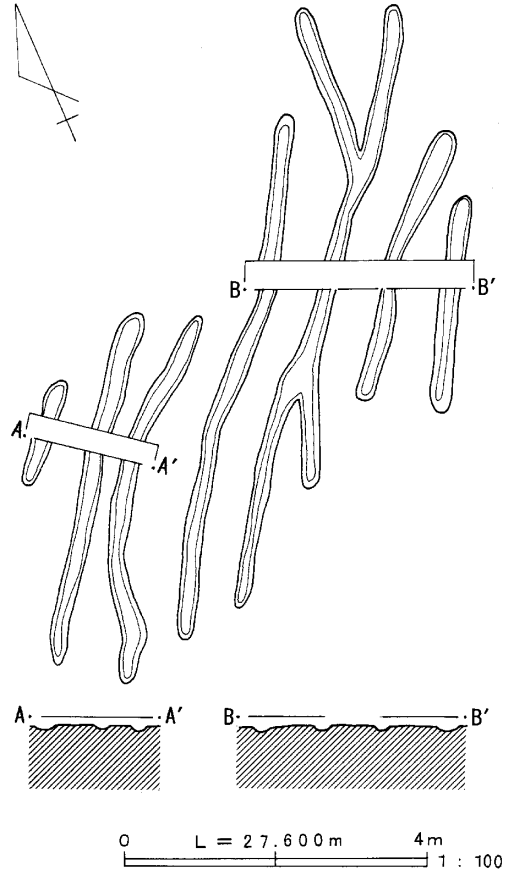
3号畝跡 M-17、18グリッドに亘って位置している。
 (第126図) 第2確認面からの検出である。
 (第138図) 全体では南北9.3m、東西約6.4mの範囲に及ぶ。

曲折した畝が多いが、畝全体の方位は、N-34°-Eを示す。

畝数は6を数えるが、畝間の中には、南北の先端部が分岐したものもあり、正確な畝数は不明である。

畝幅は、概ね50cm前後であるが、曲折した部分が多く、最小15cmから最大70cmと、やや異なる部分も多い。長さは3.8mから8.5mまでがみられ、その差が激しい。総じて、東西両端が短く、中央部が長い。畝間幅は、25~30cm前後で、ほぼ統一されている。確認面からの深さは、10cm前後である。

土師器甕(第138図3-1)底部が出土している。



第126図 C区3号畝跡

4号畝跡 Q-16グリッドに位置し、第2確認面からの検出である。

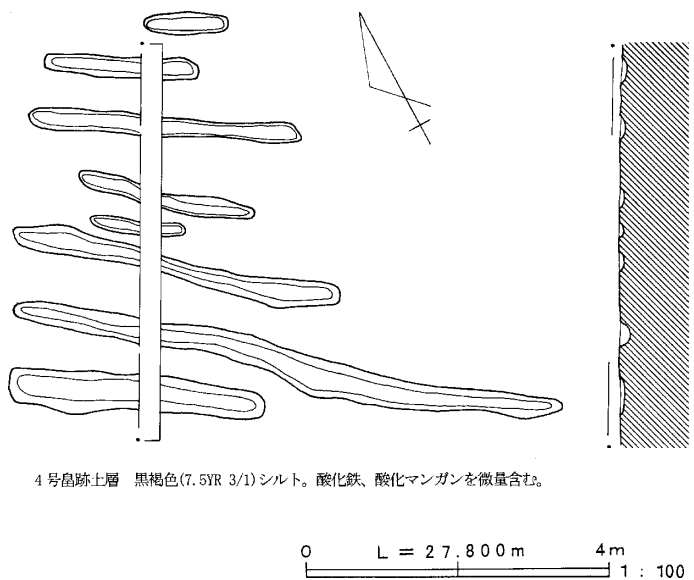
全体では南北6.2m、東西約7.5mの範囲に及ぶ。ほぼ直線を成す畝が多く、畝全体の方位は、N-58°-Wを示す。

畝数は6を数えるが、中央部では長さ1.3mの畝間が入り、7となる部分もある。畝幅は、概ね50cm前後であるが、曲折した部分もあり、最小35cmから最大80cmと、やや異なる部分もみられる。中央部の

部分的な畝間の入るところでは、畝幅20~30cmとなる。長さは2.2mから7.5mまでがみられ、その差が激しい。総じて、北側が短く、南側が長い。畝間幅は、30cm前後であるが、南側がやや広く、50cm前後となる。確認面からの深さは、10cm前後である。

覆土は、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトである。

遺物は、土師器壺(第138図4-1)口縁部(刻み目をもつ)が出土している。



4号畝跡上層 黒褐色(7.5YR 3/1)シルト。酸化鉄、酸化マンガンを微量含む。

第127図 C区4号畝跡

5号畠跡 P-18、19、Q-18、19、R-18、19、グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。
(第128図)

全体では南北17.2m、東西約15.5mの範囲に及ぶが、畝の形態・規模等から南北2ブロックに区分される。さらに、南ブロックは、2小ブロックに区分される。しかしながら、畝間同士の切り合いがみられないこと、畝間の覆土が全て、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトで共通すること等から、ひとつの畠跡としたものである。

畝の方位は、概ねN-63°-Wを示す。

北ブロックは、畝数11を数えるが、畝間が枝分かかれする部分、断続する部分があり、定かではない。畝間の断続は総じて、西側で長く、東側で短い。畝幅は、概ね50cm前後であるが、最小20cmから最大70cmと、幅がある。長さは、北2畝が短く7.2mから8.6m、それ以南では9.3mから12.8mまでがみられる。断続する東側部分を小ブロックとみた場合、畝幅は35~50cmと狭くなる様相を呈している。しかしながら、断続する中にも連続する畝間もみられ、これを別ブロックとはなし得ないところである。畝間幅は概ね40cm前後であるが、20cm前後の狭い畝間もみられる。全体的には、直線を成す畝間が多い。確認面からの深さは、10cm前後である。

南ブロックは、畝数12を数えるが、畝間が断続する部分、短い畝間が入る部分があり、定かではない。畝の幅・長さは、南北で大きく異なる。北側小ブロックでの畝幅は、総じて狭く、概ね20cm前後であり、10cm前後の部分も多い。最大は30cm前後である。長さは、9.5mから10.5mまでがみられ、ほとんど差はみられない。畝間幅は概ね35cm前後であるが、50cm前後の畝間もみられる。全体的には、直線を成す畝間が多い。

南側小ブロックでの畝幅は、総じて広く、概ね30cm前後から、最大80cm前後までみられる。長さは、3.2mから6.2mまでがみられ、差が激しい。畝間幅は概ね35cm前後であるが、20cmから50cm前後の畝間もみられる。全体的には、直線を成す畝間が多い。

南ブロックにおける畝間の確認面からの深さは、10cm前後である。

南北両ブロックの間にみられる段差部分において、南ブロック南小ブロックと北ブロックの断続する東側小ブロックが連続している可能性もみられる。

6号畠跡 P-21、22、Q-21、22グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。
(第129図)

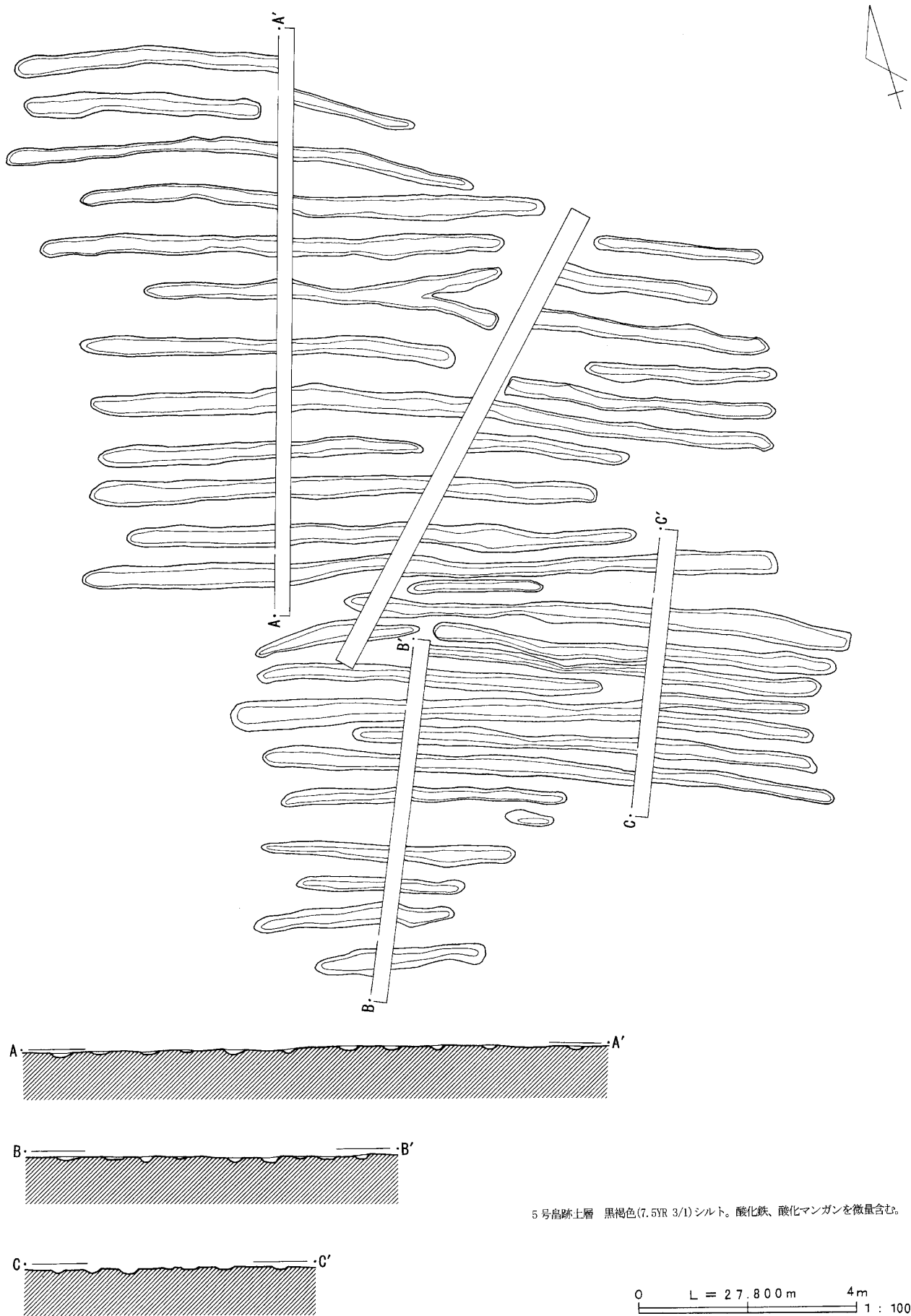
全体では南北11.0m、東西約8.2mの範囲に及ぶ。

曲折した畝が多いが、畝全体の方位は、N-65°-Wを示す。

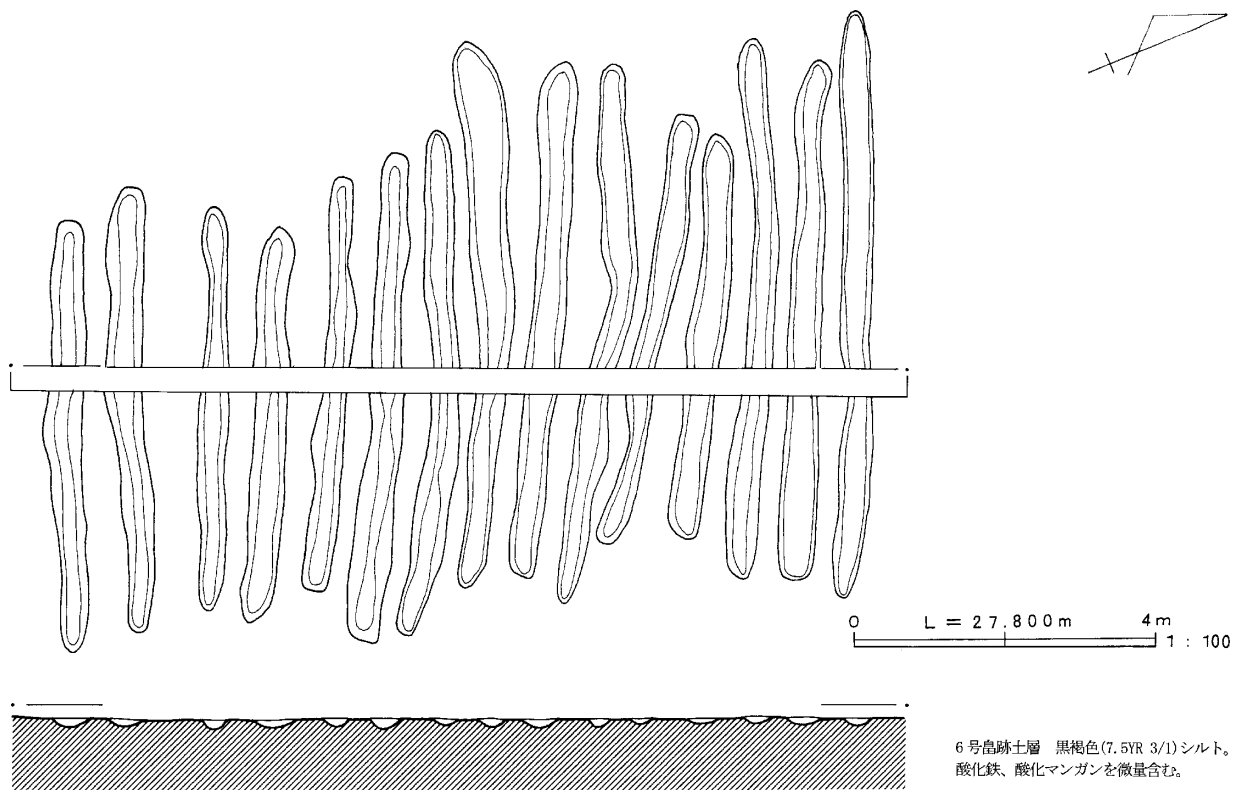
畝数は14を数える。

畝幅は、概ね30cm前後であるが、曲折した部分が多く、最小20cmから最大85cmと、やや異なる部分も多い。長さは5.0mから7.0mまでがみられ、その差はあまりみられない。総じて、南側がやや短く、北側が長い。畝間幅は、20~62cm前後が計測できるが、概ね30~35cmとなる部分が多い。確認面からの深さは、10cm前後である。

覆土は、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトである。



第128図 C区5号畝跡



第129図 C区6号畝跡

7号畝跡 P-22、23、24、Q-23、24グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出で(第130図)あり、畝間の一部は、西側調査区外に及んでいる。

全体では南北14.2m、東西約10mの範囲に及ぶ。

一部に曲折した畝もみられるが、概ね直線を呈する。方位を違える部分もあるが、全体の方位は、概ねN-75°-Wを示す。

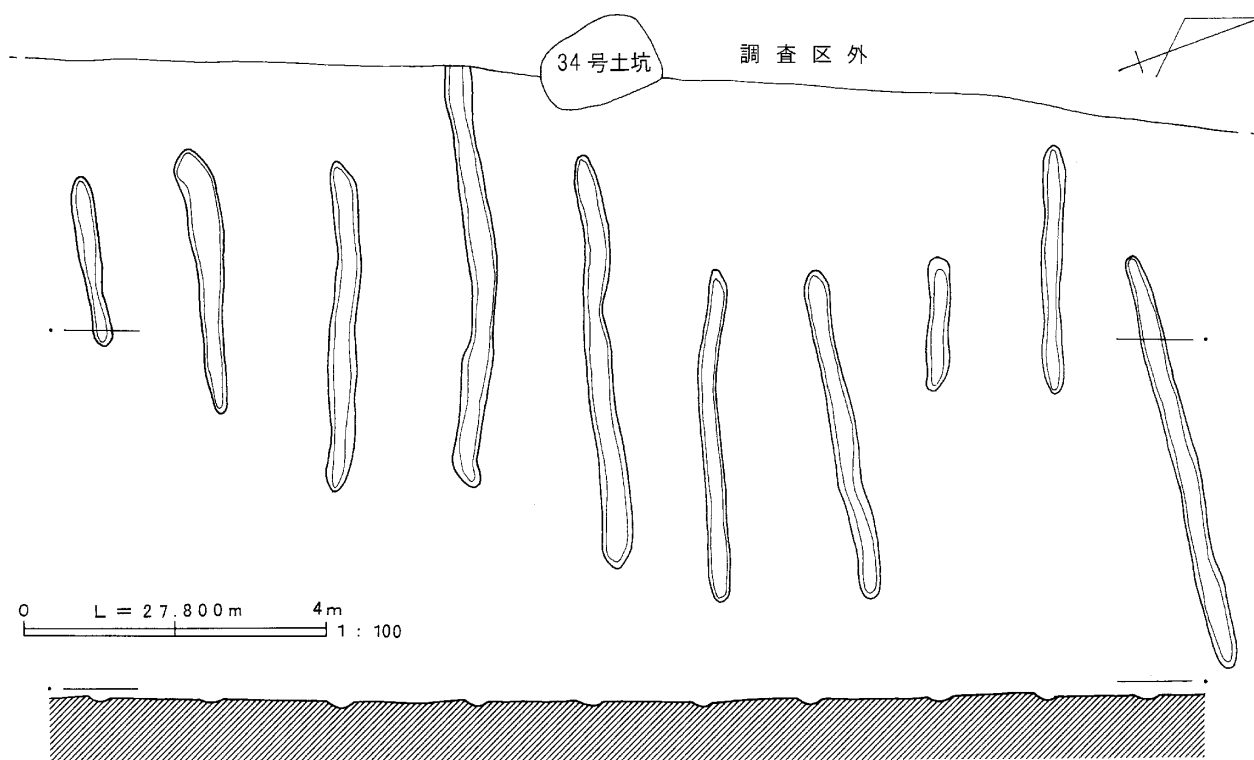
畝数は9を数える。

畝幅は、概ね140cm前後と広いが、曲折した部分では、最小100cmから最大170cmと、やや異なる部分もみられる。長さは1.8mから6.5mまでがみられ、その差は激しい。総じて、両端がやや短く、中央部が長い。畝間幅は、30~50cm前後が計測できるが、概ね35cm前後となる部分が多い。確認面からの深さは、10cm前後である。

覆土は、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトである。

8号畝跡 R-18、19、S-18、19、20、T-18、19、20グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。上面にB区33号溝跡が延伸している。また、中央南側では、9号畝跡と重複している。

全体では南北14m、東西約18mの範囲に及ぶ。東西2ブロックに区分され、さらに、それぞれのブロックが南北2小ブロックに細分される。しかしながら、東西両ブロックに延



第130図 C区7号畝跡

伸する畝間、もしくは一部が入り込んでいる畝間がみられること、覆土が、酸化鉄、マンガング粒を僅かに含む黒褐色シルトで共通していること等から、ひとつの畝跡としたものである。

西ブロックは、畝数16を数えるが、畝間が枝分かれる部分、断続する部分があり、定かではない。このうち南小ブロックは、畝数8を数え、方位をN-77°-Wにとる。畝間は、ほぼ直線を呈し、寸断されることなく連続している。畝幅は、20~45cm前後であるが、35cm前後の部分が多い。長さは、6.6mから11.6mを計り、総体的には、北に移行するに従って短くなる。最も長い南端の畝間は、東ブロックに入り込んでいる。畝間の幅は、概ね30cm前後であり、20~40cmの幅をもつ。確認面からの深さは、15cm前後である。

北小ブロックは、畝数7（南小ブロックとの間を入れると8）を数える。方位はN-90°-Wを示し、南小ブロックより一段と西に傾く。畝間は、東ブロックから連続するもの、重複するもの、枝分かれるもの、東ブロックの畝間と接合するもの、分断して方位を変えるものなど、変化に富んでいる。南側2条の畝間は、東ブロックから連続するものであり、東西両ブロックの境で、それぞれの方位を採るため、屈曲している。さらに2条目は、西端で枝分かれている。南から3条目は、2本が重複している。4条目は、南端同様、東ブロックから連続している。5・6条目は、東ブロックの畝間と接合されている。北側の2条は、一旦途切れ、方位をN-60°-Wと換えている。畝幅は、概ね40cm前後であるが、20~60cmの間で左右する。長さは、6mから9mを計り、総体的には、中央部分が短い様相を呈する。畝間の幅は、概ね35cm前後であり、25~40cmの幅をもつ。確認面からの深さ

は、20cm前後である。

東ブロックは、畝数17（西ブロックからの入り込みの畝間を入れると18）を数える。このうち南小ブロックは、畝数9（西ブロックからの入り込みの畝間を入れると10）を数え、方位をN-73°-Wにとる。畝間は、ほぼ直線を呈し、寸断されることなく連続している。畝幅は、30～45cmの部分が最も多いが、一部では15～100cmの幅をもつ。長さは、4.7mから8.0mを計り、総体的には、南半が短く、北半は長い。畝間の幅は、概ね35cm前後であり、30～60cmの幅をもつ。確認面からの深さは、20cm前後である。

北小ブロックは、畝数7（南小ブロックとの間を入れると8）を数える。方位はN-67°-Wを示し、南小ブロックより北に傾く。畝間は、西ブロックから連続するもの、西ブロックの畝間と接合するものなどがみられる。南側2条及び南から4条目の畝間は、西ブロックへ連続するものであり、東西両ブロックの境で、それぞれの方位を採るため、屈曲している。また5・6条目は、西ブロックの畝間と接合されている。畝幅は、45cm前後の部分が最も多いが、35～60cmの幅をもつ。長さは、5.5mから8.5mを計り、総体的には、中央部分が長い。畝間の幅は、概ね35cm前後であり、30～45cmの幅をもつ。確認面からの深さは、20cm前後である。

東西両ブロックの間では中断はあるものの、畝数は揃い、また両ブロックにまたがっている畝間が、角度・方位を換えて延伸している様子から、やはり一畝跡としたほうがよいように思われる。

9号畝跡 S-19、T-19グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出であり、全体が
(第131図) 8号畝跡と重複している。

全体では南北7.6m、東西約3.5mの範囲に及び、畝数は4を数える。

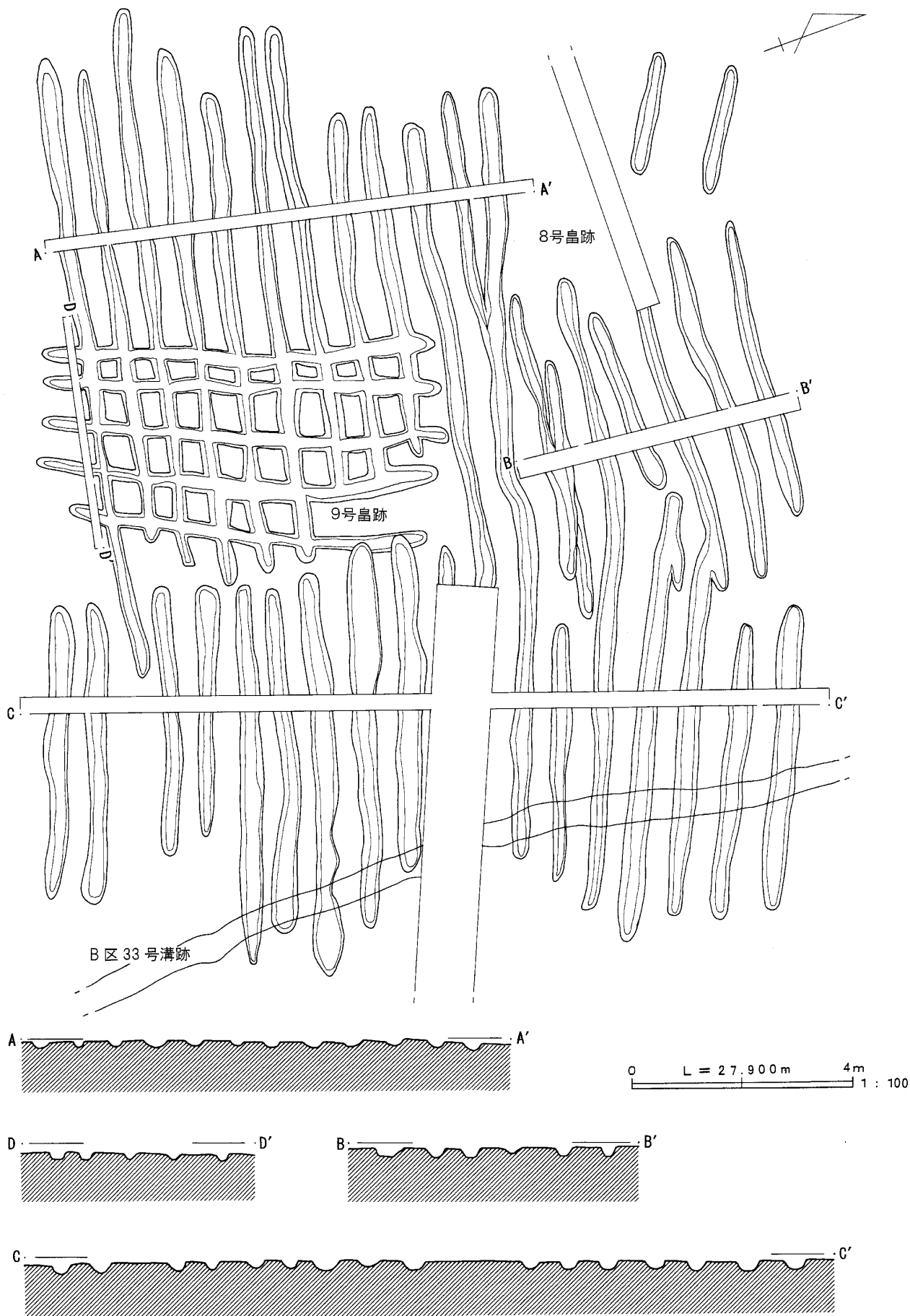
一部に曲折した畝もみられるが、概ね直線を呈するが、中央北寄りから方位を違えている。南半の方位は、概ねN-22°-E、北半の方位は概ねN-8°-Eを示す。

畝幅は、西端が35cm前後であり、やや狭いが、他は概ね55cm前後と広がる。曲折した部分より北では、70cmから80cmと、さらに太くなる。長さは7.5m前後で、ほぼ一定している。畝間幅は、一部では45cmを計測する部分もあるが、28～35cm前後となるのが大部分である。確認面からの深さは、15cm前後である。

覆土は、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトであり、8号畝跡と同一である。僅かに本畝跡畝間の覆土に褐色味が強い感を呈したが、区分できるものではなかった。また、両畝跡から、遺物は検出されていない。よって、8号畝跡との新旧関係は、不明といわざるを得ない。

10号畝跡 R-20、21、S-20、T-20グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出で
(第132図) ある。

全体では南北15.2m、東西約7.3mの範囲に及ぶ。中間に存在する南北3.6mの空隙により、南北2ブロックに区分される。



第131図 C区8号・9号畠跡

北ブロックは、畝数12を数える。

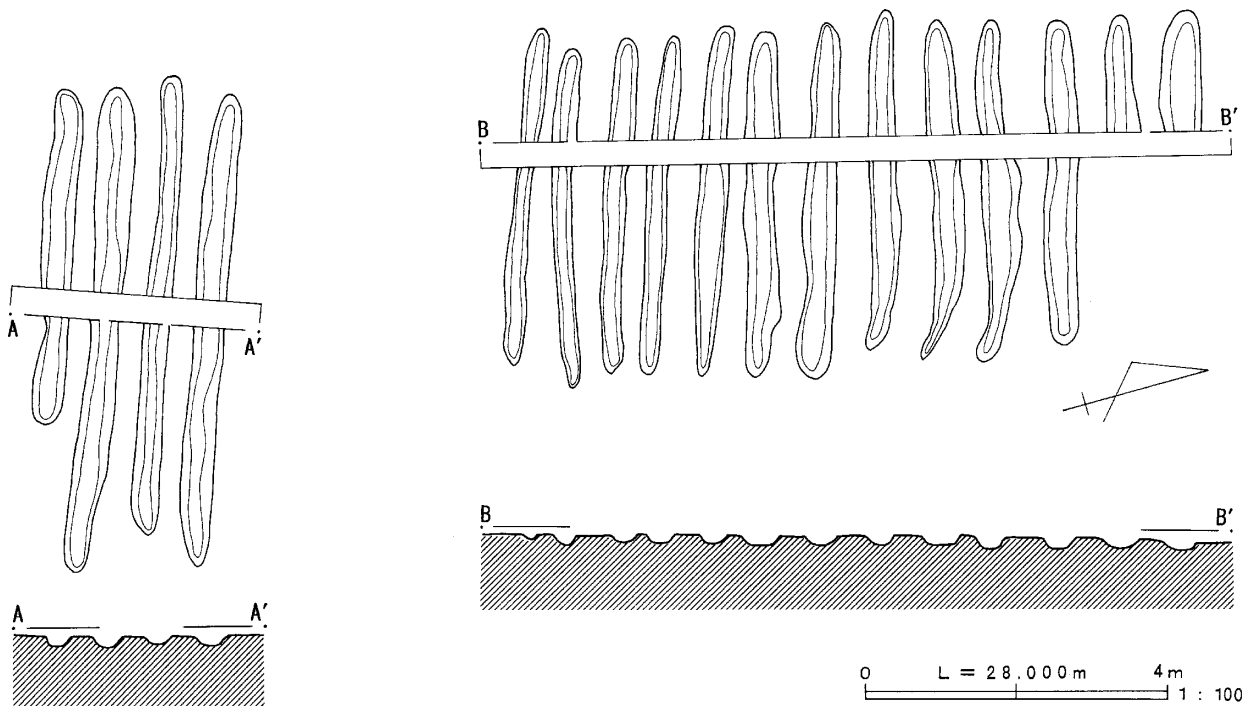
畝は、一部に曲折した部分もみられるが、概ね直線を呈する。方位は、概ねN-75°-Wを示す。

畝幅は、35~45cm前後が大部分であるが、湾曲した部分では、12cmから55cmと、変化するところもみられる。長さは4.5m前後で、ほぼ一定しているが、北端では1.7mと、極端に短くなる。畝間幅は、南4条が狭く、25cm前後であるが、北9条は45~50cm前後となるのが大部分である。確認面からの深さは、15cm前後である。

南ブロックは、畝数3を数える。畝は、概ね直線を呈する。方位は、N-72°-Wを示す。

畝幅は、25~30cm前後が大部分であり、ほぼ一定している。長さは6.4m前後で、ほぼ一定しているが、南端では4.5mと、極端に短くなる。畝間幅は、30~40cm前後となるのが大部分である。確認面からの深さは、20cm前後である。

覆土は、いずれも、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトであり、南北両ブロックとも同一である。



第132図 C区10号畝跡

11号畝跡 T-19、20、U-19グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。

(第133図) 全体では南北7.0m、東西約16.0mの範囲に及ぶ。中間に存在する東西4.8mの空隙により、東西2ブロックに区分される。

東ブロックは、畝数4を数える。

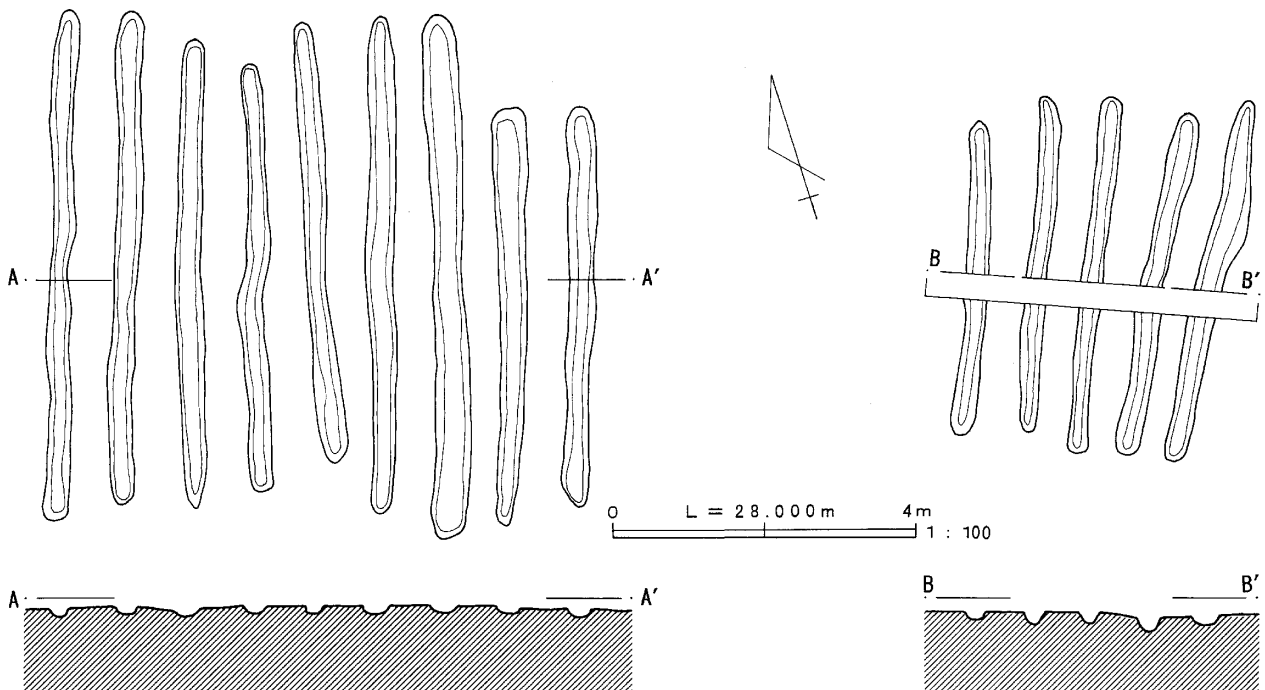
畝は、一部に曲折した部分もみられるが、概ね直線を呈する。畝が北側に広がる傾向にあるが、全体の方角は、概ねN-23°-Eを示す。

畝幅は、東端は30~40cm前後でほぼ一定であるが、他は、南側では30~40cm前後であるものの、北側では50~70cm前後と広がってくる。長さは4.7m前後で、ほぼ一定している。畝間幅も安定しており、30cm前後となるのが大部分である。確認面からの深さは、20cm前後である。

南ブロックは、畝数9を数える。畝は、中央部で曲折がみられるものの、概ね直線を呈する。方位は、N-18°-Eを示す。

畝幅は、50~60cm前後が大部分であり、ほぼ一定しているが、中央曲折部では、30cmと細くなる部分もみられる。長さは6.5~7.0m前後で、ほぼ一定しているが、北端では6.3mと、短くなる。畝間幅は、30cm前後と一定であるが、北から3条目は、50cm前後と広がる。確認面からの深さは、15cm前後である。

覆土は、いずれも、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトであり、南北両ブロックとも同一である。



第133図 C区11号畝跡

12号畝跡
(第134図)

T-18、U-18グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。

上面にB区33号溝跡が延伸している。

北部は攪乱を受けており、全体規模は不明であるが、東西範囲は約3.3mを計る。

畝数4を数える。

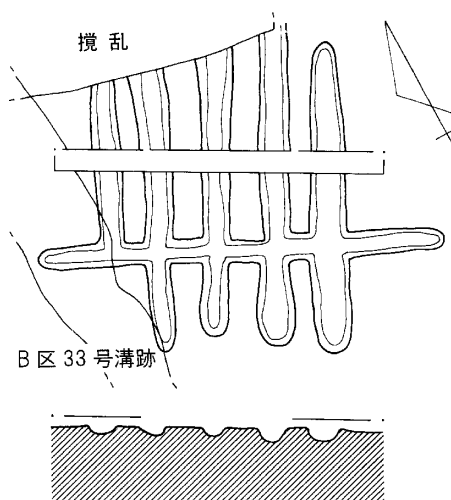
畝は、一部に湾曲した部分もみられるが、概ね直線を呈する。

方位は、概ねN-27°-Eを示す。

畝幅は、両端が20~25cm前後とやや狭く、中央は、30~40cm前後と、やや広がる。長さは不明であるが、東端が短く4.2m前後であり、他はこれより長い様相を呈している。畝

間幅は、30cm～50cm前後を計るが、東側ほど広くなる。確認面からの深さは、20cm前後である。覆土は、いずれも、酸化鉄、マンガン粒を僅かに含む黒褐色シルトである。

南端部分には、概ねN-27°-Wの方位を示す溝が1条入り、交差している。状況は、畝間状を呈している。覆土も共通しており、前後関係は判明していない。幅40cm、長さ5.36mを計る。



13号畝跡
(第135図)

U-17、18、V-17、18グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。上面には、B区51号土坑が位置している。

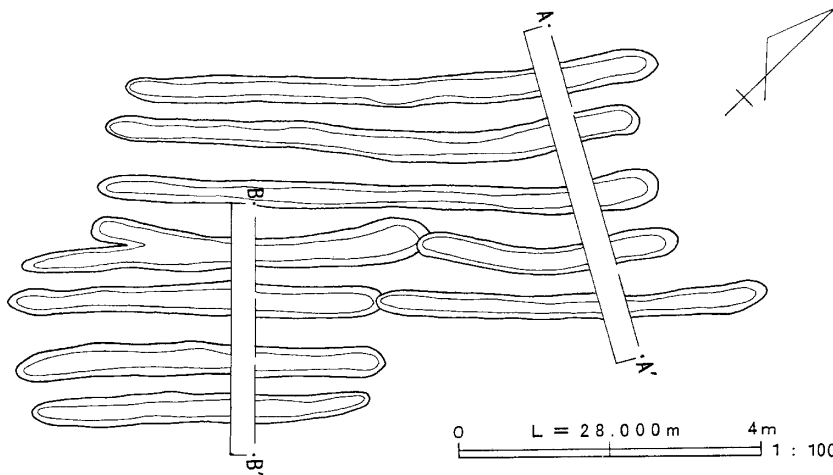
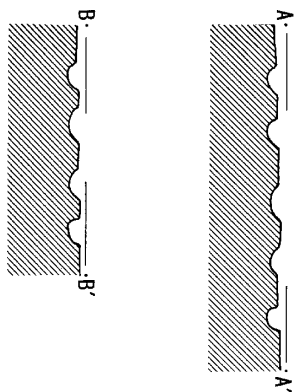
全体では南北10.0m、東西約4.7mの範囲に及び、畝数は6を数えるが、西側・中央・東側では、それぞれ異なった様相を呈している。

西側2畝は、方位をN-47°-Eにとるが、中央やや北側から湾曲し、方位をN-30°-Eへと変換する。畝幅は、湾曲に合わせて、21～45cm前後の中で、2本の畝の間で広狭が交互する様相を呈する。長さは、西端が7.0m、中央寄りが7.4mを計る。畝間幅は、30cm～45cm前後を計るが、35cm程の部分が大部分である。確認面からの深さは、12cm前後である。

中央2畝は、北に畝間を付加した状況を呈している。特に西側（全体では中央）では、直線を呈する畝間を廃し、弧状の形態に改造した後に、さらに北側にこれと一連になるように、改造した南側畝間と同様の、弧状畝間を付加している。東側は、直線を成す畝間に、これと一連となる直線状の畝間を付加している。この結果、西側の畝幅は、弧の湾曲に合わせて、25～45cm前後の中で広狭を繰り返し、東側では21～61cm前後の中で、西側とは逆の広狭が繰り返されている。北側への付加以前の長さは、西側が5.4m（改造後は4.4m）、東側が4.9m、北側へ付加した部分の長さは、西側が3.5m、東側が6.3mを計る。畝間幅は、

0 L = 28.000 m 4m 1 : 100

第134図 C区12号畝跡



第135図 C区13号畝跡

弧状部分が35cm～50cm、直線部分が30cm～45cm前後を計るが、総じて付加した北側が狭い。確認面からの深さは、南側が10cm前後、付加した北側が12cm前後である。

東側2畝は、中央の、北に畝間を付加する（改造する）以前の状況を呈し、ほぼ直線を成している。畝幅は、中央寄りが35～45cm前後、東端が18～27cm前後を計る。長さは、中央寄りが5.0m、東端が4.6mを計る。畝間幅は、35cm～45cm前後を計るが、35cm程の部分が多い。確認面からの深さは、12cm前後である。

覆土は、いずれも、酸化鉄、マンガング粒を僅かに含む黒褐色シルトである。

14号畝跡 T-20、21、U-19、20、21、V-19、20グリッドに亘って位置している。第2確認面
(第136図) からの検出である。

全体では南北14m、東西約20mの範囲に及ぶが、中間に存在する東西1m、及び2mの二つの空隙により、東西3ブロックに区分される。

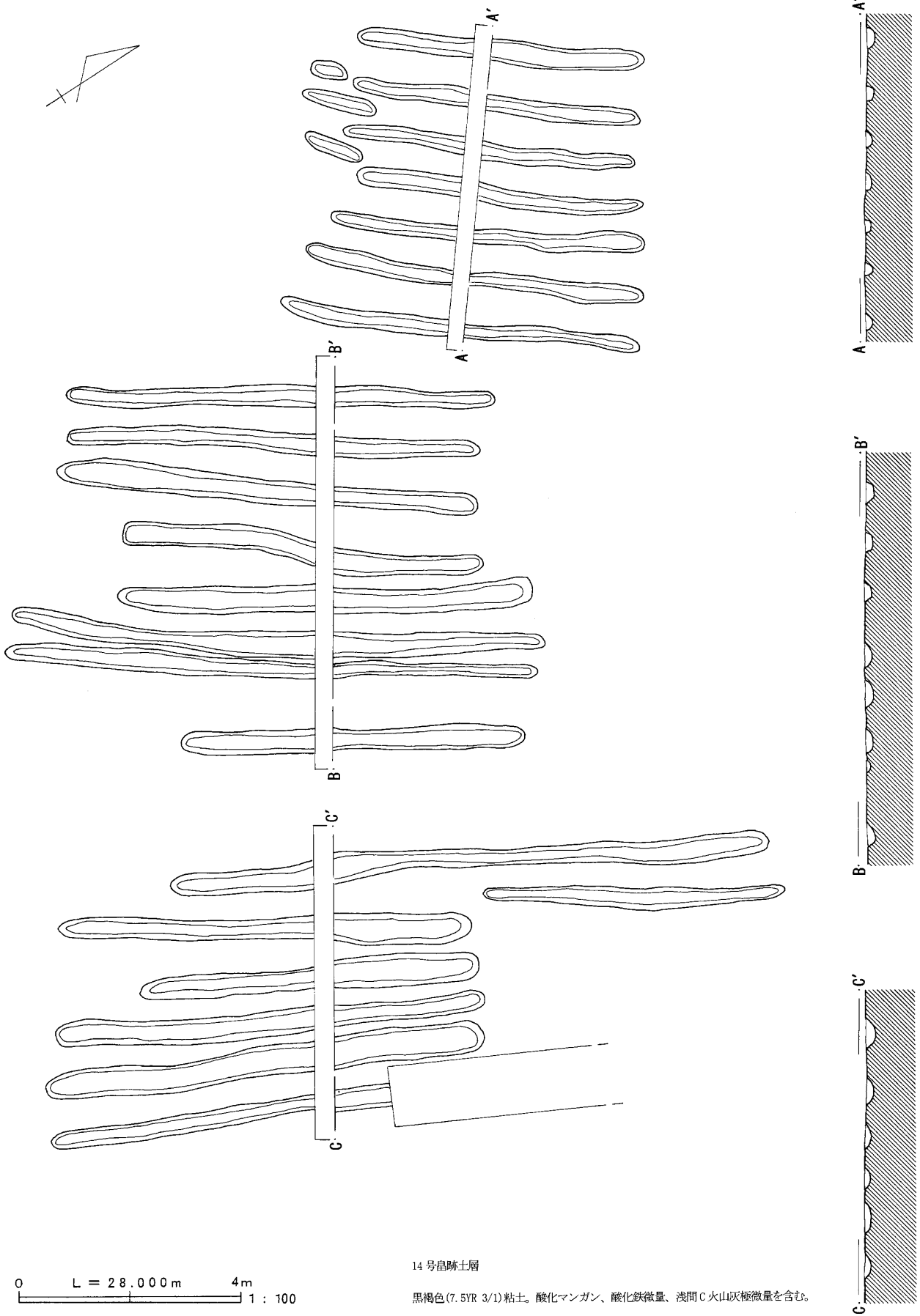
西ブロックは、畝数6を数える。畝は、湾曲する部分もあるが、概ね直線を呈する。全体の方位は、N-39°-Eを示す。畝幅は、40～70cmを計るが、大部分が40～50cmの間に含まれ、ほぼ一定している。長さは5.3～6.5mを計り、西側が短く、東に移行するに従って徐々に長さを増している。畝間幅は、60cm前後で安定するが、湾曲する部分では、30cm前後まで狭くなる。1～3本目の畝までの南端には、長さ70～140cm、幅30cm前後の短い畝間状の溝が、畝を塞ぐ状態で、3条検出されている。確認面からの深さは、いずれも12～20cm前後である。

中央ブロックは、畝数7を数える。畝は、湾曲・曲折する部分も多いが、直線を呈するものが主体である。全体の方位は、N-35°-Eを示す。畝幅は、20～97cmまでがみられ、西端が35～55cmの間、東端が85～97cm前後でそれぞれ安定している他は、1本の畝の中に広狭が激しい。長さは6.2～7.8mを計り、東側が短く、西に移行するに従って徐々に長さを増している。しかしながら、東から2本目は、9.7mと極端に長い。また、畝幅も他とは異なり、数cmから20cm前後と極端に狭い。土層上は確認できなかったものの、東から3条目の畝間は、2条目の付け替えであろうと思われる。畝間幅は、60cm前後で安定するが、湾曲する部分では、30cm前後まで狭くなる部分が多い。確認面からの深さは、12～20cm前後である。

東ブロックは、畝数5を数える。畝は、僅かに湾曲・屈曲する部分もあるが、概ね直線を呈する。各畝でバラつきがみられるものの、全体の方位は、N-28°-Eを示す。西端の畝は、10.9mの1条と、7.4m及び5.4mの2条を繋いで1条とする畝間に挟まれ、幅30～80cmの中で、南から、狭道を2度繰り返す。他の畝は、南が広く東が狭い状態であり、広い部分は35～70cmの間、狭い部分は15cmとなり、ほぼ一定している。長さは6.2～8.2mを計り、僅かに西側が短く、東に移行するに従って徐々に長さを増す傾向がみられる。

畝間幅は、30～60cm前後を計り、1条の中では、それぞれの幅で安定している。確認面からの深さは、12～20cm前後である。

覆土は、いずれも、酸化鉄及びマンガング粒を僅かに、また微量の浅間C火山灰粒と思わ



第136図 C区14号畝跡

れる粒子をも含む、黒褐色シルトである。

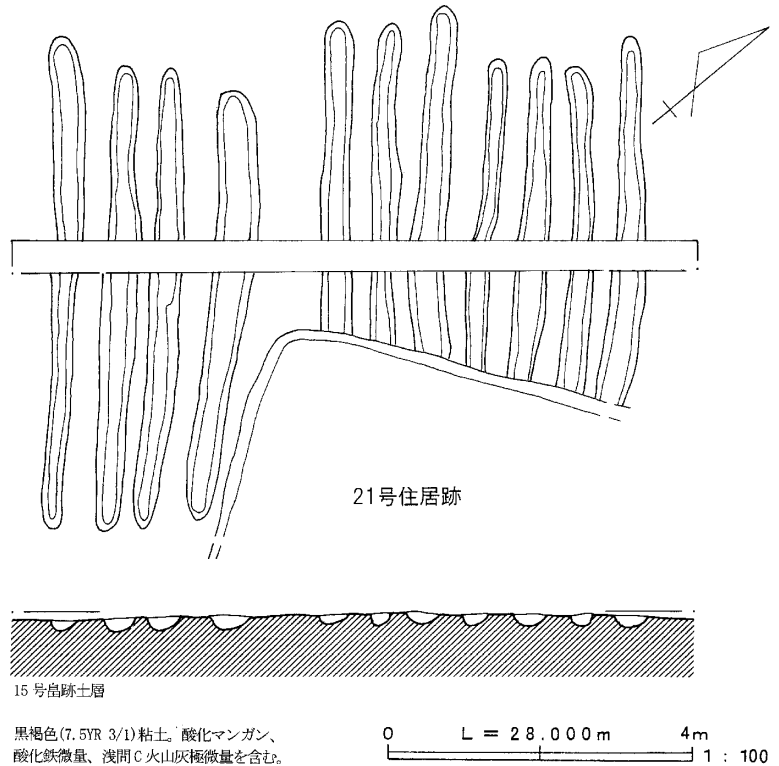
15号畠跡
(第137図)

V-20、W-20、21グリッドに亘って位置している。第2確認面からの検出である。北東部を21号住居跡に切断されている。

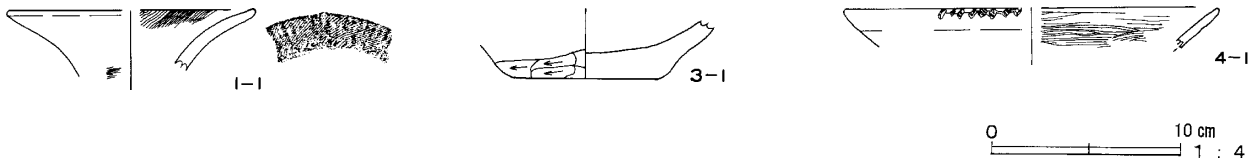
畝数10を数える。畝は、直線を呈するものが主体であるが、東半部へ移行するに連れ、湾曲する部分も多い。畝のうち、南から4本目は90~100cmと、極端に太く、あるいは空隙であった可能性も高い。南3畝の方位はN-48°-Eを示す。畝幅は、中央が10~20cmと細く、東西2本は30~45cmを計る。全体で、東側が狭くなる様相を呈している。長さは、6.0~6.5m前後を計り、北へ移行するに従って短くなる様相を呈している。畝間幅は、30~50cm前後を計り、南ほど細い。確認面からの深さは、15~20cm前後である。

北6畝の方位も、南3畝と同様N-48°-Eを示す。畝幅は、20~45cmを計り、やはり南3畝と同様、東側が狭くなる様相を呈している。長さは、東側が不明であるが、西側で計測値と同様であろうと思われ、北へ移行するに従って短くなる様相もみてとれる。畝間幅は、30~50cm前後を計り、南ほど細い。確認面からの深さは、15~20cm前後である。

覆土は、14号畠跡と同一の、微量の浅間C火山灰粒子を含む、黒褐色シルトである。



第137図 C区15号畠跡



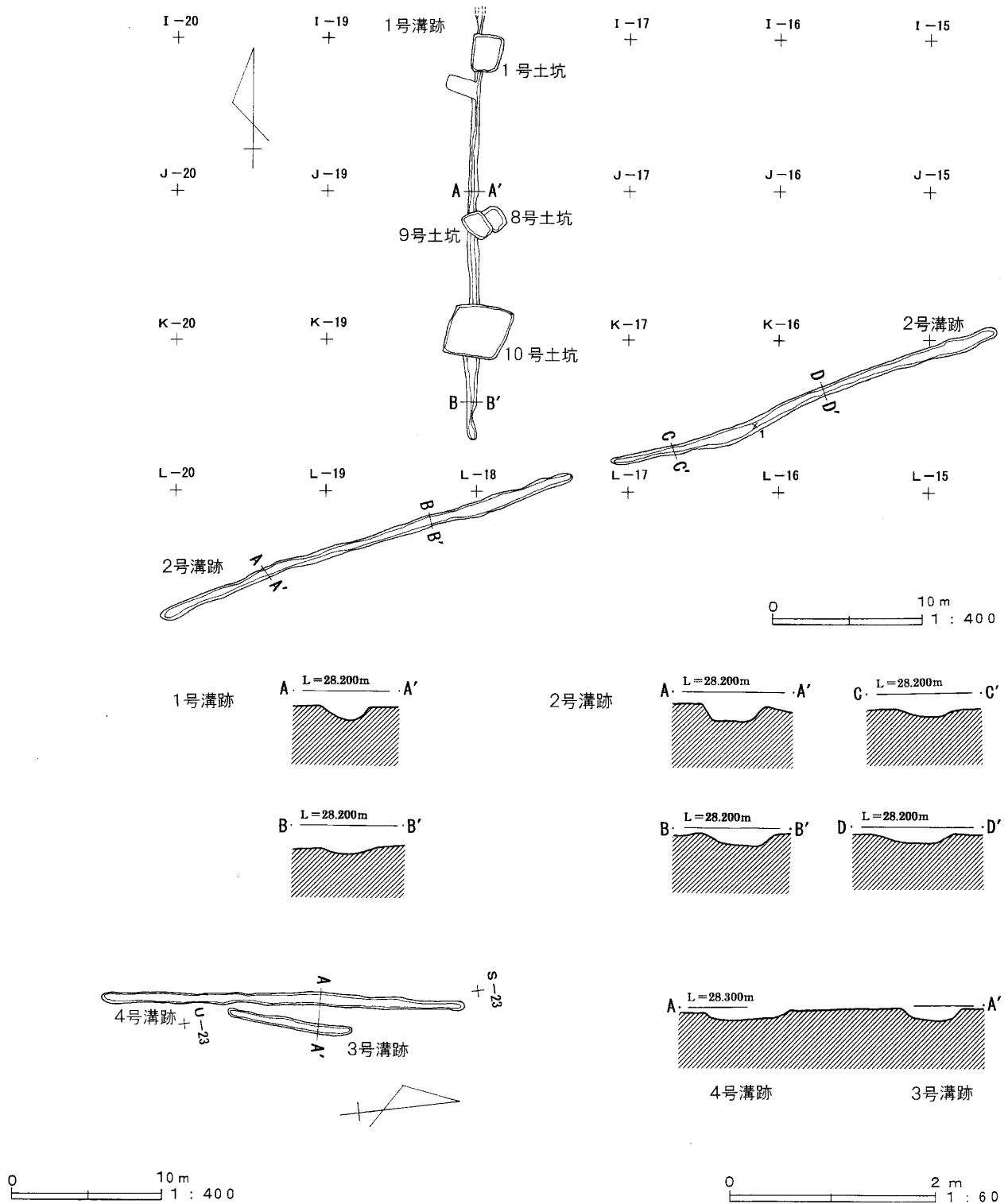
第138図 C区畠跡出土遺物

第40表 C区畠跡出土遺物観察表 (第138図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1-1	土師器・壺	(12.8)	—	—	③①②⑥	②	にぶい橙	口縁部 1/6	
3-1	土師器・甕	—	—	7.9	①⑥③②	②	橙	底部のみ	一部吸炭。
4-1	土師器・壺	(19.9)	—	—	③①②⑥④	②	にぶい黄橙	口唇部 1/8	

5 溝 跡

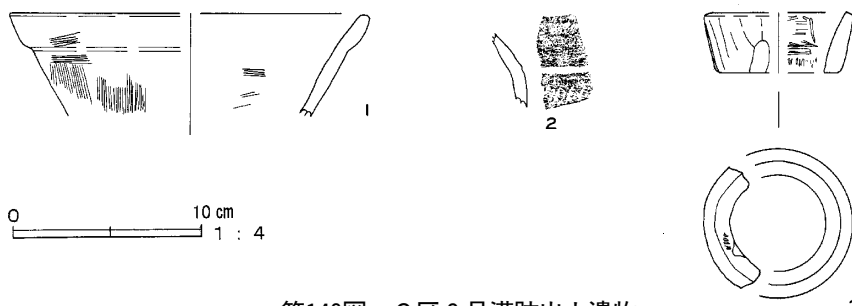
C区における溝跡は、他調査区と比較して非常に少なく、4条が検出されたのみである。グリッドI～L、14～20の範囲と、S～U、22・23の範囲の2ヶ所に集中し、それぞれ2条ずつ分布している。いずれも、第1確認面の検出である（第139図）。



第139図 C区溝跡

1号溝跡 H～K-17・18グリッドに亘って位置している。グリッド18ライン上を南北行し、方位は、ほぼN-0°-Eを示す。1号・9号・10号の各土坑に切断されている。北方は、Iラインから僅かにH区に入ったところまでの検出であり、現状の長さは26.2mを計るが、さらに北方へ延伸する様相を示している。幅は、40～100cmと広狭の差があり、凹凸もみられるが、大部分はほぼ60cm前後で推移している。深さ10～30cmを計る。断面は緩いV字形を呈し、底面はどちらかの壁に偏る傾向が強い。覆土は、酸化鉄及びにぶい黄褐色シルトブロックを含む褐色シルトであり、底面には酸化した部分もみられる。B区33号溝覆土と共通する部分が多く、また、底面の偏りをもつ形態を合わせると、あるいは、両溝の連続性も考えられる。遺物は、土師器小片検出されたのみであり、図示可能なものはない。

2号溝跡 J-14、K-14～17、L-17～20グリッドに亘って位置している。K-17グリッドで分断するものの、覆土及び方位が共通するため、同一溝跡としたものである。1号・2号各住居跡の上面に構築されている。方位はN-71°-Eを示す。長さは、西が29.2m、東が27.4m、分断部分が2.6m、都合59.2mに及ぶ。西溝は、凹凸はあるものの60～80cm幅で安定しており、ほぼ直線を成す。断面は逆台形を呈するが、東へ移行するに従って緩いU字形へと変化していく。東溝は、多少凹凸もみられ、やや蛇行している。幅は60～105cmまで計測され、直線部分では60cm幅で安定しているものの、蛇行部分や先端では広狭が激しい。



断面は、東へ移行するに従ってU字形の緩さが増す。覆土は、酸化鉄を含む灰褐色シルトである。遺物は、土師器壺(第140図-1)(同一-2)、腕輪状土製品(同一-3)が検出されている。

第140図 C区2号溝跡出土遺物

第41表 C区2号溝跡土遺物観察表 (第140図)

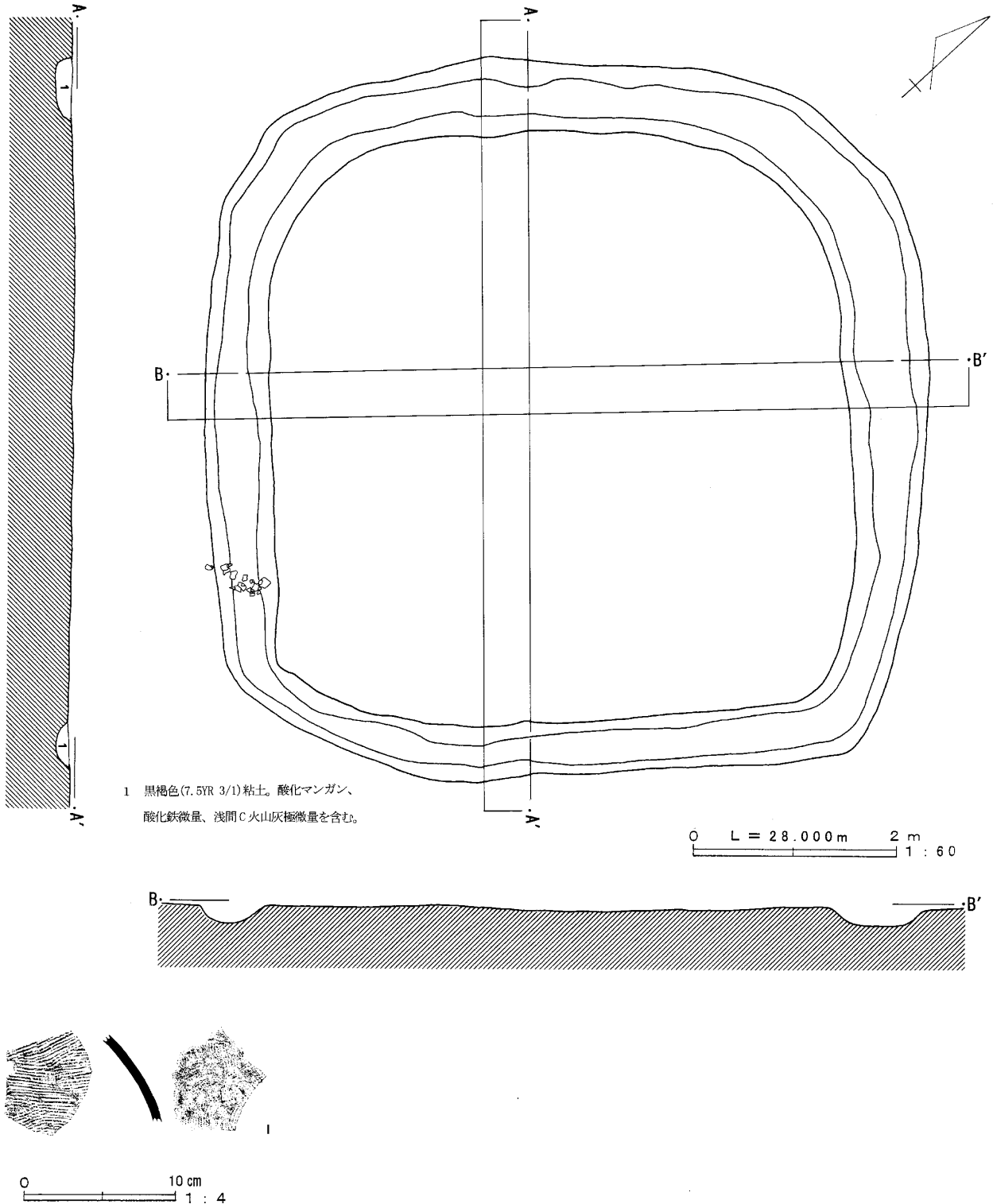
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・壺	(19.0)	—	—	④⑥①②	②	橙	口縁部一部のみ	
2	土師器・甕	—	—	—	①⑥③	②	にぶい黄橙	小片	
3	不明	(7.8)	3.2	(6.5)	③②①	②	橙	1/4	

3号溝跡 S-22、T-22、23グリッドに亘って位置している。北端部分が僅かに湾曲するものの方位はN-16°-Eを示す。長さ8.2m、幅は、多少凹凸はあるものの、55～65cmで安定している。断面は逆台形を呈するが、底面隅に丸みをもつ部分が多い。覆土は、僅かに酸化鉄を含む灰褐色シルトである。遺物は、検出されていない。

4号溝跡 S-22、23、T-22、23、U-23グリッドに亘って位置している。多少凹凸はあるものの、全体ではほぼ直線を成し、方位はN-8°-Eを示す。長さ24.2mを計る。幅は、42～80cmを計り、広狭を繰り返すが、特に北端部分が狭くなっている。断面は逆台形を呈するが、底面隅に丸みをもつ部分が多い。覆土は、僅かに酸化鉄を含む灰褐色シルトである。遺物は、検出されていない。

6 その他の遺構

C区の南住居跡群内には、その西端に、方形に溝で囲まれた遺構（1号方形周溝遺構）、東端・B区2号方形周溝墓との間に、3ヶ所の土器集中地点（土器集中地点No.2、3、4）がみられる。また、北住居跡群の南東端にも1ヶ所、土器集中地点（土器集中地点No.1）がみられる。



第141図 C区1号方形周溝遺構・出土遺物

1号方形周溝遺構 X-22、23、Y-22、23グリッドに亘って位置している。

(第141図) 外形規模は、北西-南東方向が7.11m、北東-南西方向が7.22mを計り、僅かに北東-南西方向が長いものの、ほぼ正方形を呈するといえる。長軸方位は、N-47°-Eを示す。

外形は、北及び西隅に丸みをもち、結果、北西・北東各辺が丸みをもつことになる。東隅は直線的に屈曲し、南隅は直線的に2度屈曲し、隅部を造り出している。この結果、南東・南西各辺は、直線を成している。

内側方台部は、ほぼ外形の相似形をとっており、北西-南東方向が5.80m、北東-南西方向が5.75mを計る。関連遺構は、検出されていない。

しかし、内側方台部の北東辺のみが内側に丸まり込むため、北隅の溝幅が最も広く(82~90cm)なっている。逆に、溝幅が最も狭くなるのは南隅で、42cm前後である。次いで東隅(60cm)、西隅(70cm)と広がって行く。辺部分の溝幅は、狭い方から広い方へと徐々に移行している。

溝断面は、丸みをもつ逆台形を示すが、一部では緩いU字形を呈する部分もある。

覆土は、僅かな酸化鉄粒・マンガン粒、ごく僅かな浅間C火山灰粒を含む黒褐色粘土である。

遺物は、南西溝南隅寄りの覆土中から、須恵器甕(第141図)破片が検出されている。また、同一箇所から土師器甕胴部破片が検出されているが、図示は不可能であった。

第42表 C区1号方形周溝遺構出土遺物観察表 (第141図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・甕	—	—	—	①③	①	灰	小片	

土器集中地点No.1 Q-16、R-16グリッドに及ぶレンズ状の窪みを中心に、P-15、16、Q-16、(第142図) 17、R-15、16グリッド及びB区のQ-15に亘って、土器の分布が広がっている。

(第143図) 窪み北側の下位には、4号畠跡が位置しており、北東隅はB区の未調査区に及んでいる。

(第144図) このため、全容は知り得ないが、窪みは楕円形を呈し、5.00×4.20(推定)を計ると思

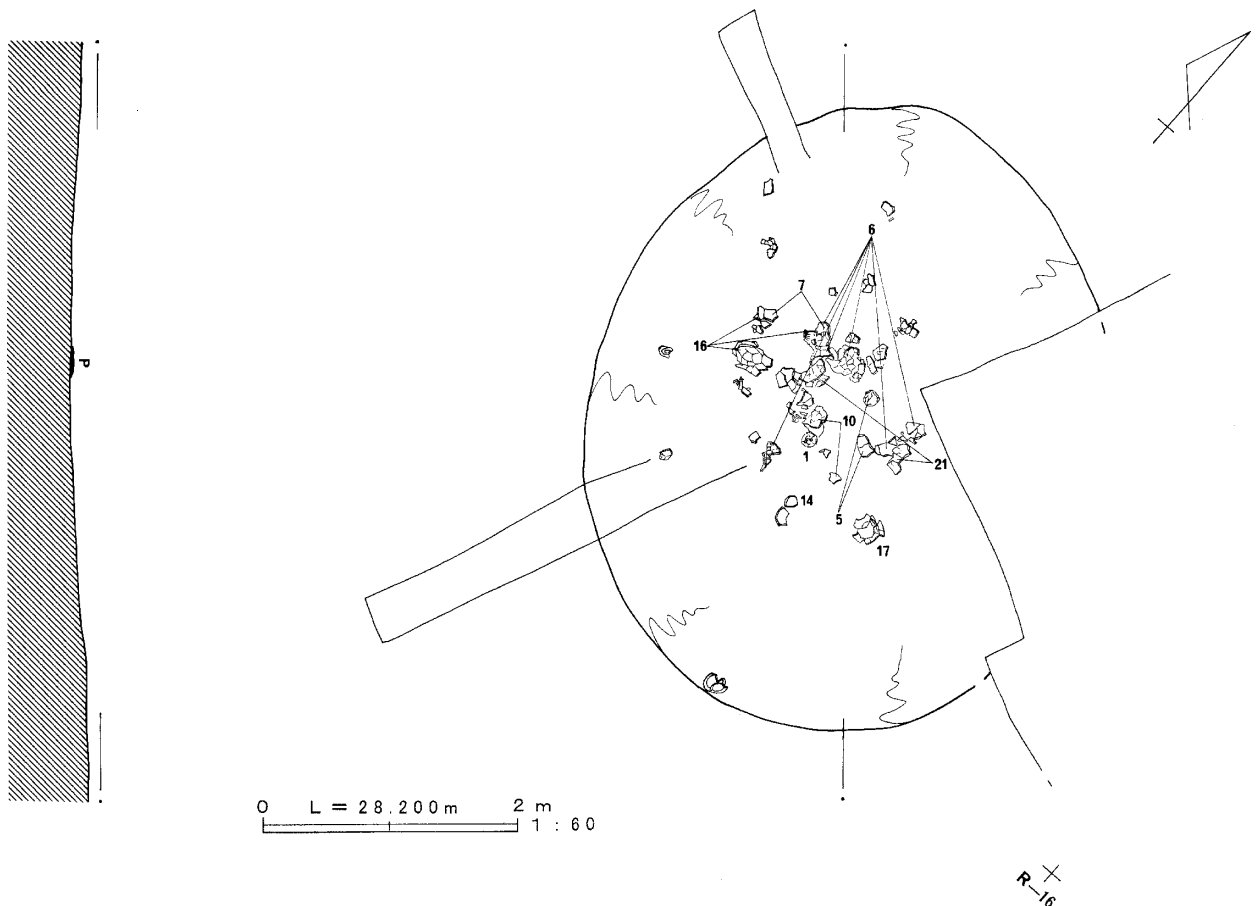
(第145図) われる。

窪みの断面は、レンズ状を呈するものの、最深部でも10cmしかなく、当初は竪穴覆土の上面に見られる窪みであるとも考えられたが、下位に竪穴の存在は確認されなかった。

検出された土器は、全て土師器であり、器種には、高坏(第143図-1)、器台(同一-2、3)、盃(同一-4)、甕もしくは台付甕(同一-5~12)、(第144図-13~17)、壺(同一-18・19)、(第145図-20~22)等がみられる。いずれも1/2もしくはそれ以下の残存率であり、全容の知れるものは無かった。このうち壺(20)は、P-15、16グリッドに位置する17号住居跡の覆土中出土の破片と、窪み中出土破片が接合・復元されたものである。

窪み中からの出土土器は、高坏(1)、甕もしくは台坏甕(5、6、7、10、14、16、17)、壺(21)であるが、出土状況も雑然としたものであり、置かれた状況ではない。

遺物の包含層及びレンズ状窪みの覆土は、炭化物粒を僅かに含むオリブ褐色シルト層である。包含層中には厚薄の差が激しく、あるいは、他にもレンズ状の窪みのあった可能性が高い。



第142図 C区土器集中No.1

土器集中地点No.2 X-19、Y-19グリッドに位置している。

(第146図) B区2号方形周溝墓の北西溝から、北西に4.50m離れた位置にある。

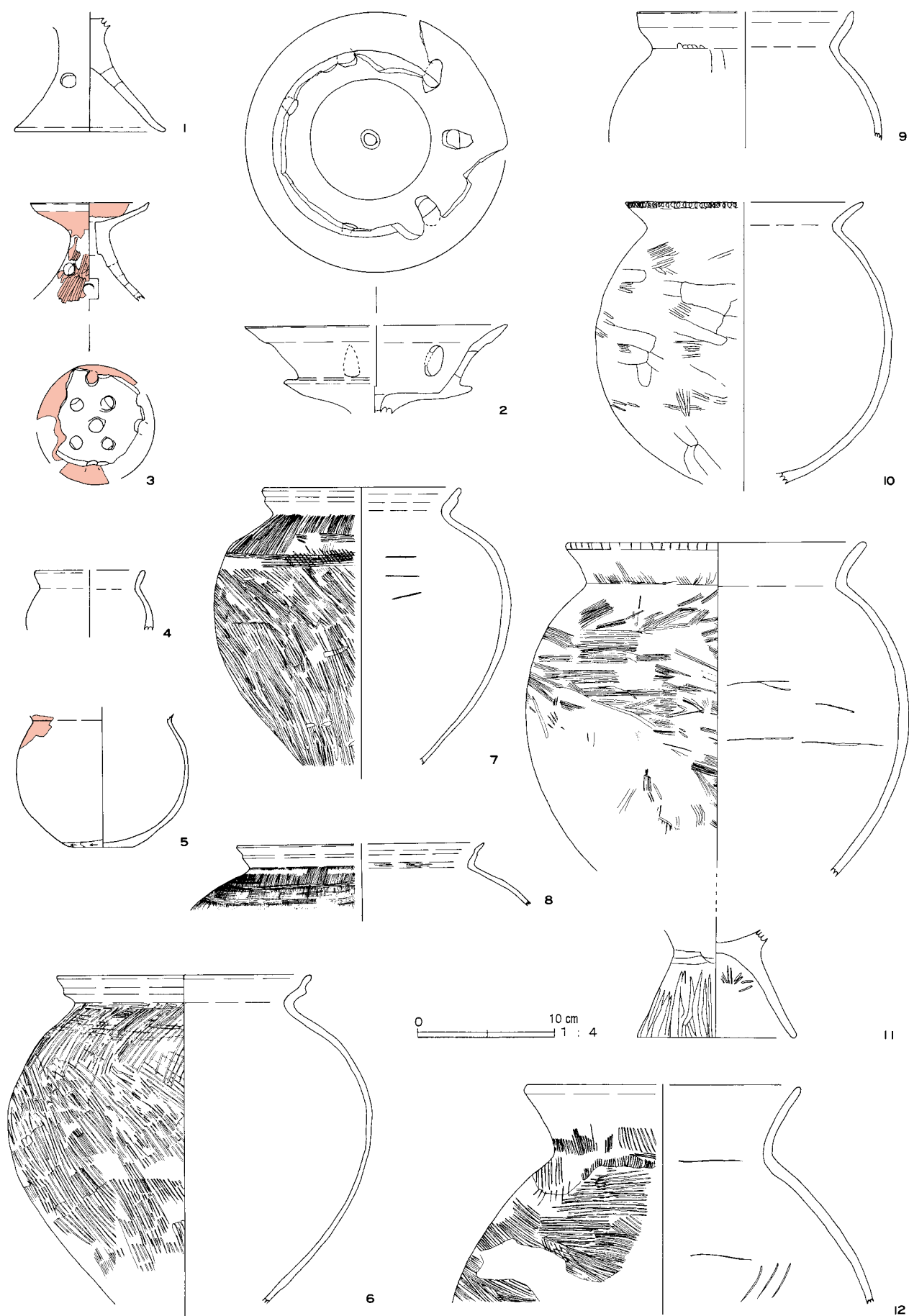
(第147図) 径1.70mほどの円形を呈する僅かな窪みに、土師器甕(第147図-1)、台付甕(同一2、3、4、5)、壺(同一6)の、6個体の土器が立てられ、並べて置かれたものである。南東部に、北東側から甕(1)、台付甕(3)、壺(6)が、南東側に僅かに膨れるような弧を描いて並べられ、北東側には、北に台付甕(2)、東に小型台坏甕(5)、西に台付甕(4)が、東方向に倒れてはいるものの、三角形を呈する状況で置かれている。

全体では、台付甕(2)、甕(1)、壺(6)をそれぞれ、北西・南東・南西の三角形の頂点位置に置き、台付甕(2)と甕(1)の間・三角形の北東辺(中心間の長さ60cm)中間に小型台付甕(5)、甕(1)と壺(6)の間・三角形の南東辺(中心間の長さ60cm)中間に台付甕(3)、壺(6)と台付甕(2)の間・三角形の北西辺(中心間の長さ60cm)中間に台付甕(4)を配したものである。

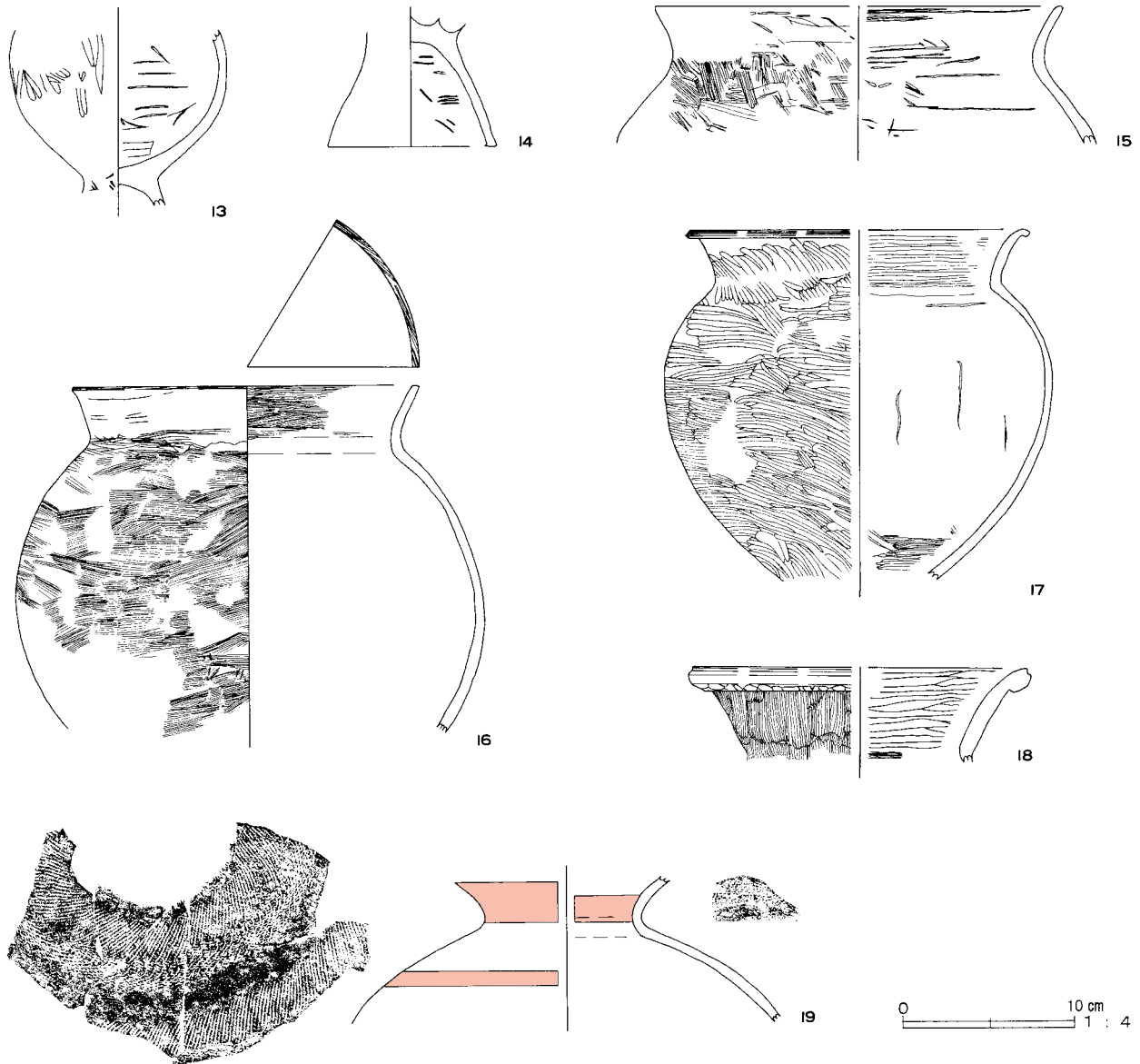
なお、三角形の頂点を成す土器の中心間の長さは、ほぼ一定であり、55cmを計る。ほぼ正三角形を呈しているといえる。ちなみに、南東辺の方位は、N-64°-Eを示す。

土器群が設置されている円形落ち込みの基盤層は、多量のマンガン粒を含む褐色シルト層であり、B区方形周溝墓群の溝基盤層A層に当たる。

覆土は、炭化物を多量に含む暗褐色シルト層である。本土層は、B区2号方形周溝墓北



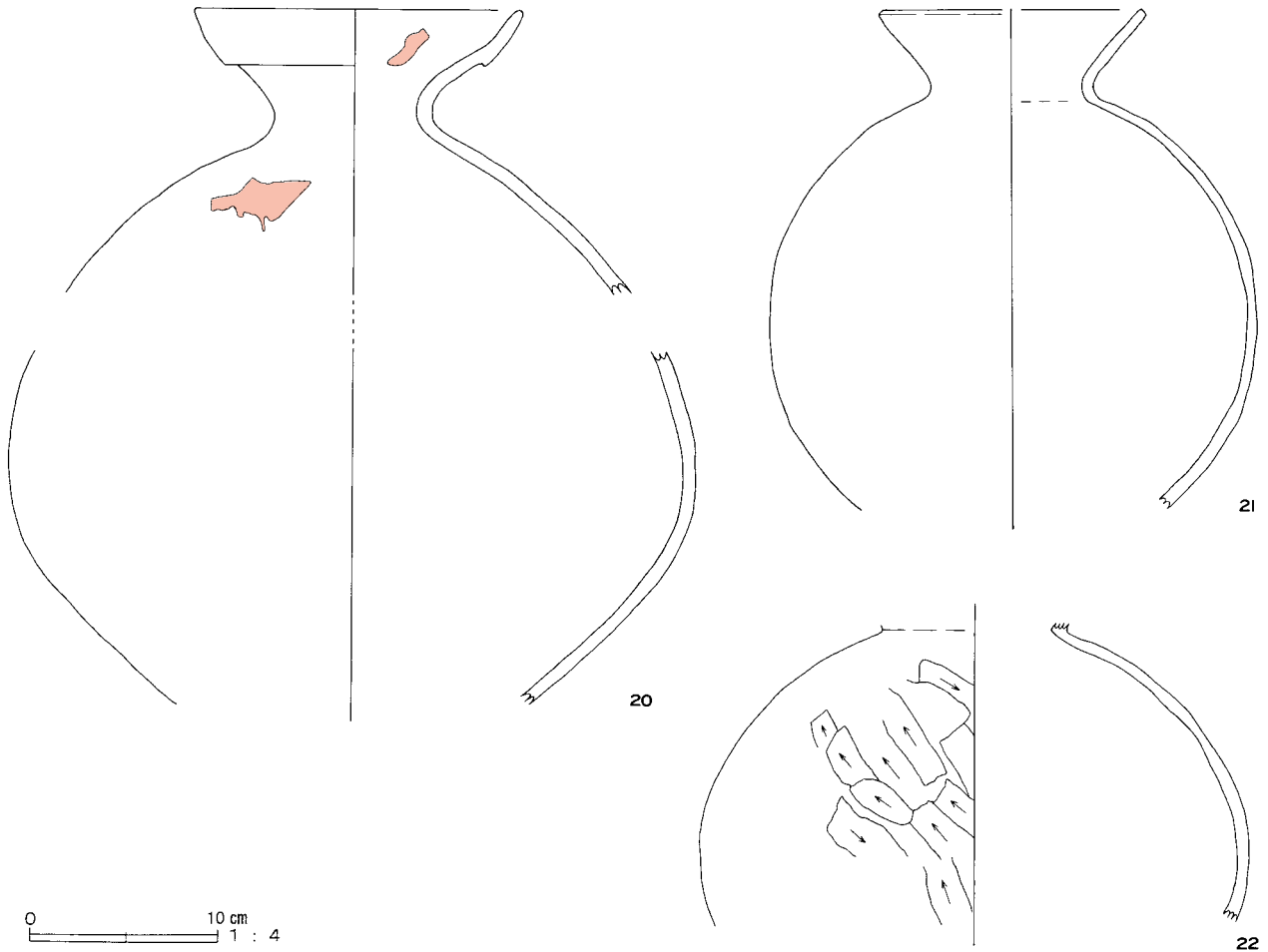
第143図 C区土器集中No.1 出土遺物(1)



第144図 C区土器集中No.1 出土遺物(2)

第43表 C区土器集中No.1 出土遺物観察表 (第143・144・145図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	—	—	10.9	⑥③①④	②	橙	脚部のみ	脚部三方透し(円孔)。表面磨滅。二次加熱。
2	土師器・器台	—	—	—	①②③⑥④	②	にぶい赤橙	受台部のみ	受台部七方透し(長円形)、吸炭した部分が多い。二次加熱。
3	土師器・器台	8.7	—	—	⑥②①④③	②	明赤褐	裾部欠	脚部八方(四方二段)透し(円孔)。
4	土師器・壺	(17.9)	—	—	②④①⑥	②	橙	上位1/8	
5	土師器・甕	10.4	—	4.5	①③②④⑥	②	にぶい橙	1/2	表面磨滅した部分が多い。一部朱塗。
6	土師器・台付甕	18.8	—	—	①②③④⑥	②	橙	底部欠	
7	土師器・甕	14.3	—	—	②①③⑥④	②	橙	1/2	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
8	土師器・台付甕	(18.15)	—	—	④①②⑥	②	灰黄褐	口縁部1/4	内面吸炭。
9	土師器・甕	(15.9)	—	—	①④②⑥	②	にぶい橙	口縁部1/4	内外面吸炭。二次加熱。
10	土師器・台付甕	(17.4)	—	—	⑥②③①	②	にぶい黄橙	3/5	中位内外外輪状に吸炭。
11	土師器・台付甕	21.6	(36.3)	11.5	①④⑥②	②	橙	1/2	内面下位炭化物、外面煤付着。二次加熱。
12	土師器・台付甕	(20.0)	—	—	⑥②①	②	にぶい橙	上位1/2	内外面吸炭、強烈な二次加熱により外面剥離した部分が多い。
13	土師器・台付甕	—	—	—	①②④⑥	②	にぶい橙	底部1/2	内外面吸炭。二次加熱。



第145図 C区土器集中No.1出土遺物(3)

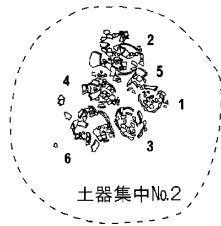
14	土師器・台付甕	—	—	10.0	⑥②①	②	明赤褐	脚部のみ	二次加熱により細片化。
15	土師器・甕	(23.5)	—	—	④②⑥	②	にぶい橙	1/8	外面吸炭。
16	土師器・甕	19.8	—	—	①③⑥②④	②	にぶい黄橙	上半7/8	外面煤付着。表面剥離した部分多い。二次加熱。
17	土師器・台付甕	(19.4)	—	—	①④②③⑥	②	にぶい褐	台部欠1/2	外面吸炭、内面炭化物付着。二次加熱。
18	土師器・壺	(19.4)	—	—	①④③②⑥	②	にぶい黄褐	口縁部1/3	内外面一部吸炭。
19	土師器・壺	—	—	—	⑥④②①③	②	橙	肩部1/3	頸部内外面、肩部無文帯朱塗。
20	土師器・壺	17.2	—	—	②⑥④①	②	浅黄橙	底部・胴部中央欠	全面ミガキ様ナデ。内外面一部朱塗。
21	土師器・甕	(14.1)	—	—	⑥③①	②	にぶい黄橙	1/3	全面ミガキ様ナデ。
22	土師器・壺	括れ部分 (9.6)	—	—	①②④⑥	②	橙	上位1/2	全面吸炭。二次加熱。

西溝の覆土上位層第3層・炭化物集積層に該当している。

土器集中地点No.3 X-19、Y-19グリッドに位置している。

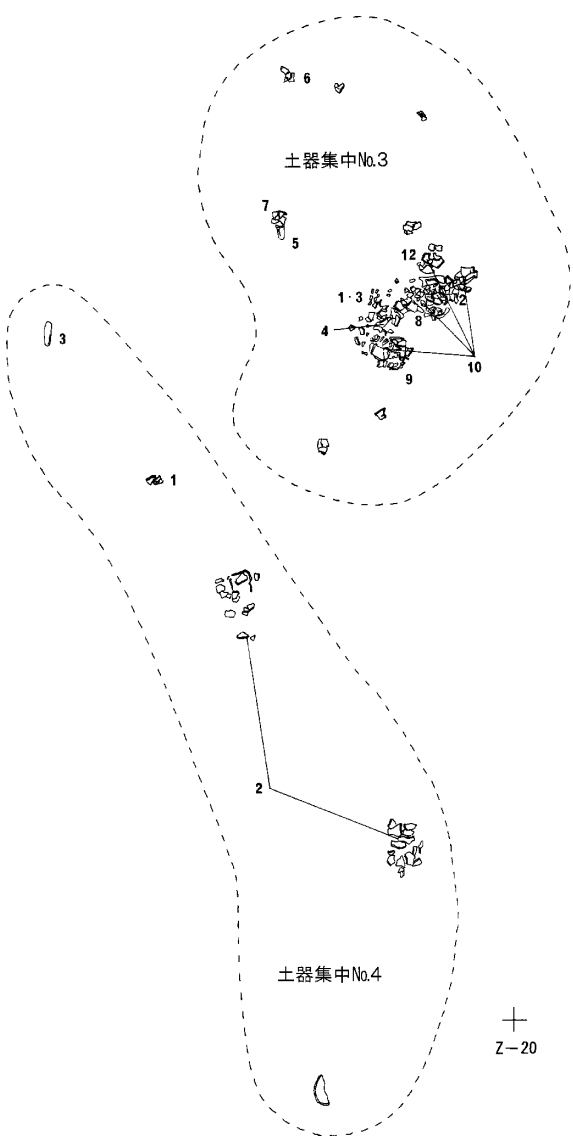
(第146図) B区2号方形周溝墓の北西溝から、北西に3.25m離れた位置にある。

(第148図) 3.20×2.05mほどの、小豆形を呈する僅かな窪みに、土師器高坏(第148図-1~7)、台付甕(同一7~11)、埴(同一12)の、12個体の土器が立てられ、並べて置かれたものである。



+

Y-20

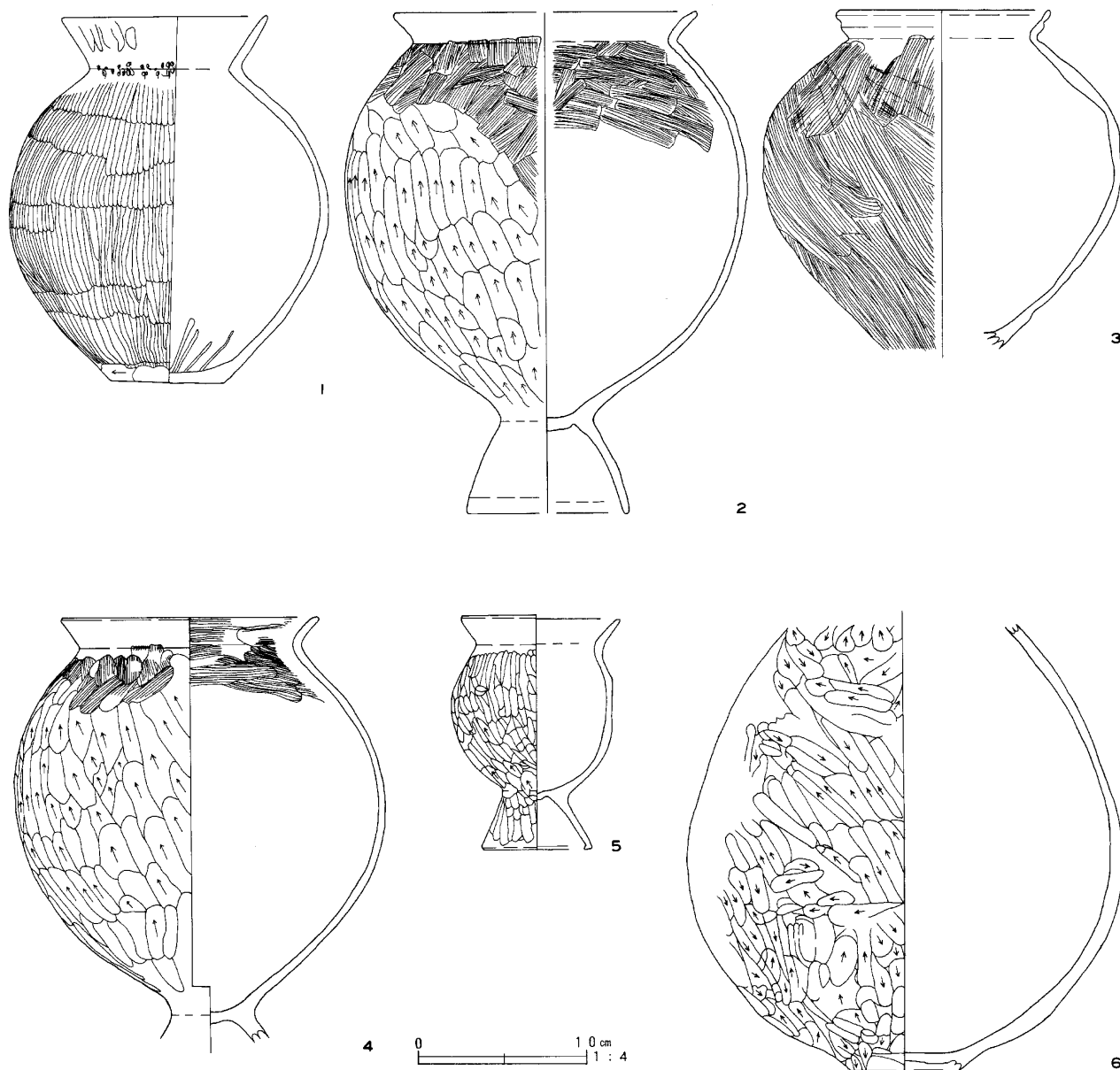


+

Z-20



第146图 C区土器集中No. 2 · No. 3 · No. 4



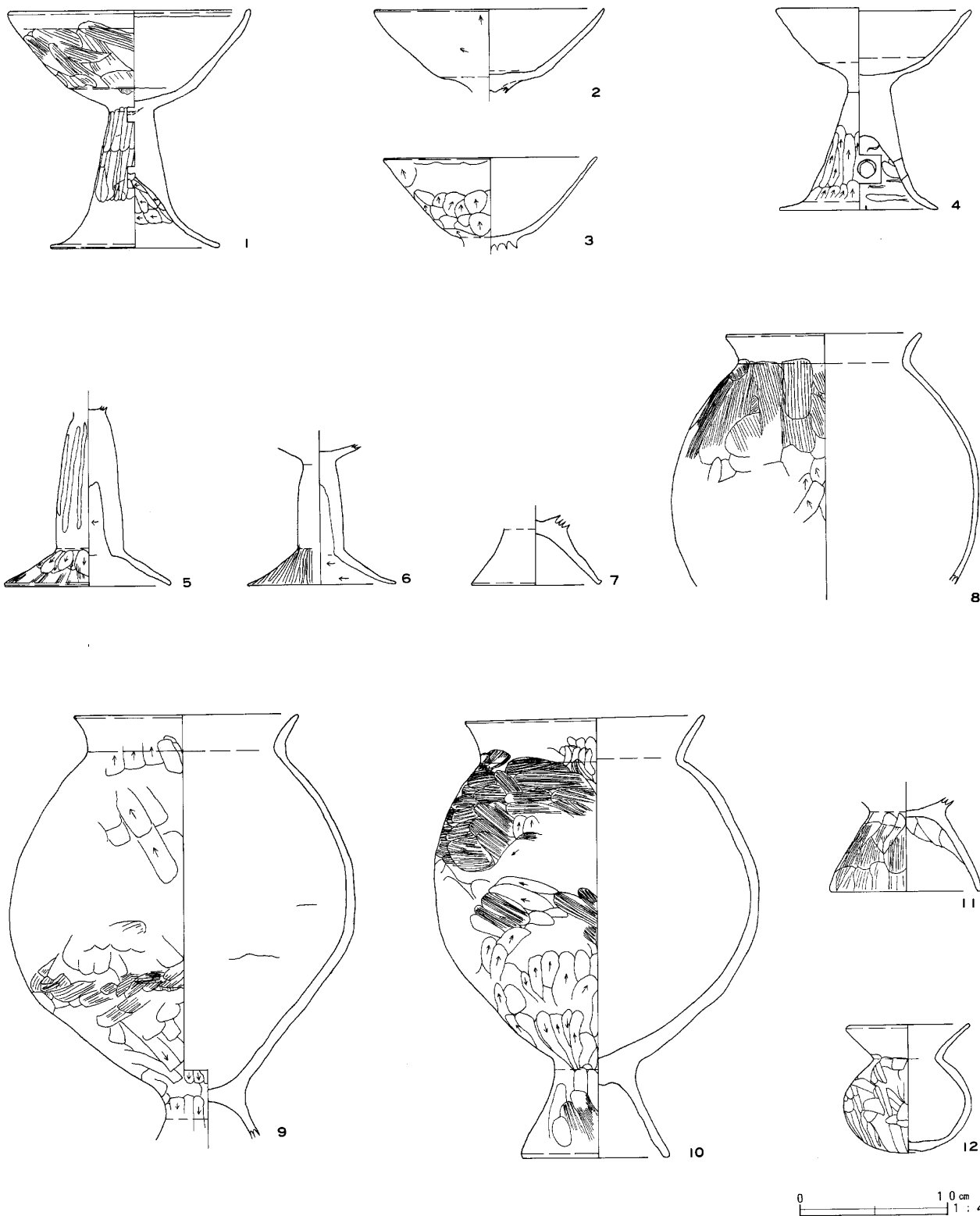
第147図 C区土器集中No. 2 出土遺物

第44表 C区土器集中No. 2 出土遺物観察表 (第147図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・甕	12.0	22.0	6.7	①②④⑥	②	明褐	1/2	下位外面薄く吸炭。
2	土師器・台付甕	(18.0)	30.0	9.6	①②④⑥	②	明赤褐	1/2	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
3	土師器・台付甕	12.8	20.3	—	①②⑥	②	明褐	台部欠	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
4	土師器・台付甕	15.3	—	—	①②③④⑥	②	褐	3/5	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
5	土師器・台付甕	9.3	14.0	6.5	④①②⑥	②	赤灰	一部欠	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。
6	土師器・壺	—	—	(6.3)	⑥③①④②	②	明赤褐	1/4	下位外面煤、内面炭化物付着。二次加熱。

出土土器は、土圧によって潰れた様相を呈するものが多く、原位置を示していると思われる。その中であって、高坏脚部（5、6）、台付甕脚台部（7）は、北西方向へ移動しており、原位置を示していない。

原位置を示す土器は、2列に配された様相を呈している。南西隅に台付甕（9）を配し、



第148図 C区土器集中No.3 出土遺物

北西方向に台付甕（8）（10）と連続する。台付甕（10）は北東の隅に当たり、（8）と（10）の間には高坏（2）が配されている。この（9）（8）（2）（10）の配置列を前面とすると、後面には、北西から、高坏が（4）（1）（3）と連続し、北東端には埴（12）が配されている。2列は平行し、方位は、N-45°-Eを示す。

落ち込みの基盤層は、多量のマンガン粒を含む褐色シルト層であり、遺物包含層は、炭

第45表 C区土器集中No.3 出土遺物観察表 (第148図)

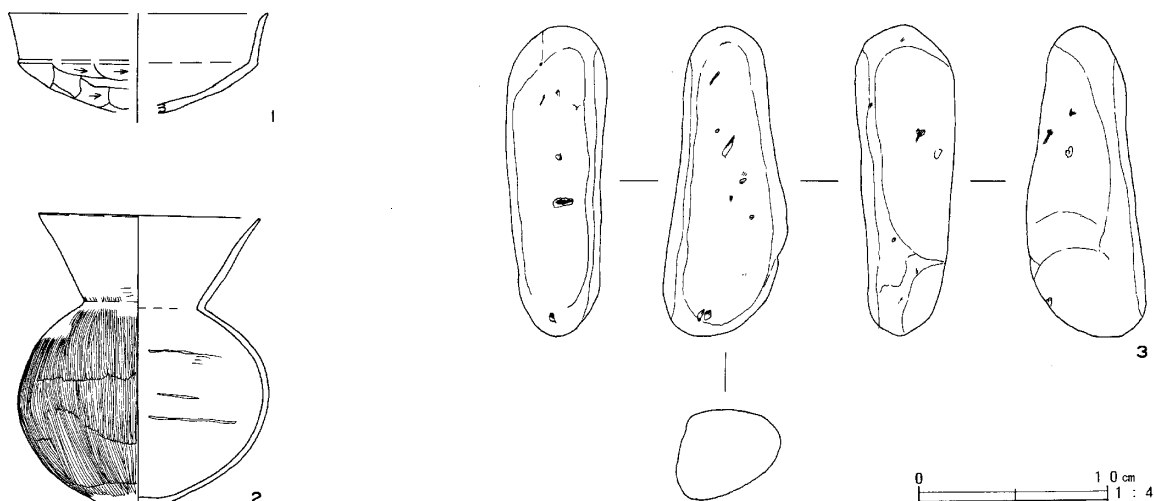
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高坏	16.3	16.0	11.3	①④②⑥	②	橙	7/8	吸炭した部分が多い。二次加熱。
2	土師器・高坏	—	—	—	②①③⑥	②	赤	坏部1/4	吸炭し表面剥離した部分が多い。二次加熱。
3	土師器・高坏	14.2	—	—	⑥①④	②	赤褐	坏部1/2	吸炭し表面剥離した部分が多い。二次加熱。
4	土師器・高坏	13.0	13.7	10.5	③①④②⑥	②	橙	一部欠	脚部三方透し(円孔)。坏部内面全面吸炭。二次加熱。
5	土師器・高坏	—	—	11.1	②①③⑥④	②	明赤褐	脚部のみ	吸炭した部分が多い。二次加熱。
6	土師器・高坏	—	—	(10.0)	①⑥②④	②	赤褐	脚部のみ	脚部全面吸炭し表面剥離した部分が多い。二次加熱。
7	土師器・高坏	—	—	8.6	③②④①	②	橙	台部のみ	表面剥離した部分が多い。
8	土師器・甕	13.2	—	—	①②③⑥	②	明赤褐	上位3/4	口縁部外面煤、内面炭化物付着。吸炭し、外面剥離した部分が多い。二次加熱。
9	土師器・台付甕	15.2	—	—	②⑥①④	②	明赤褐	2/3	内面炭化物付着。二次加熱。
10	土師器・台付甕	15.5	29.3	9.2	②③①④⑥	②	明赤褐	3/4	外面煤、内面炭化物付着。二次加熱により一部還元化。
11	土師器・台付甕	—	—	10.2	②①④⑥	②	明赤褐	台部のみ	一部吸炭。二次加熱。
12	土師器・埴	8.4	8.7	1.8	①②④⑥	③	明赤褐	3/4	外面一部吸炭、内面炭化物付着。二次加熱。

化物を多量に含む暗褐色シルト層である。共に、No.2 と共通している。

土器集中地点No.4 Y-20、Z-20グリッドに位置している。

(第146図) B区2号方形周溝墓の北西溝西隅から、西に2.45m離れた位置にある。7.20×1.75mほどの、屈曲した溝状の僅かな窪みに、土師器埴(第149図-2)、砥石(同一-3)が出土している。

土層が、No.2、3の土器集中地点と共通するため、本址にも同様の名称を付したが、土器等は薄い包含層の上位層中から、いずれも流れ込みの状況で検出されており、本址に伴うものとはいい難い。また、上位層からは、坏(同一-1)も出土しており、坏の示す年代に本址上に移動されたものと思われる。



第149図 C区土器集中No.4 出土遺物

第46表 C区土器集中No.4出土遺物観察表 (第149図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(13.4)	—	—	②①④③⑥	②	橙	1/4	外面磨滅した部分が多い。
2	土師器・壺	11.6	15.4	3.6	②③①④⑥	②	明赤褐	4/5	外面一部吸炭。
3	砥石	長さ 16.3 幅 5.4 厚さ 4.7						完形	一部煤付着。

7 遺構外出土遺物

C区において、重機による掘り下げ時に検出された遺物、遺構検索時に検出された遺物もみられる。

出土遺物(第150図)には、古墳時代前期及び後期の土器、石鏃がある。このうち帰属が想定されるものには次の遺物がある。

土師器甕(同一6、7)・台付甕(同一14)は、第2確認面検出時に、N-17グリッド南西部から出土している。後に下位から11号住居跡が検出されている。

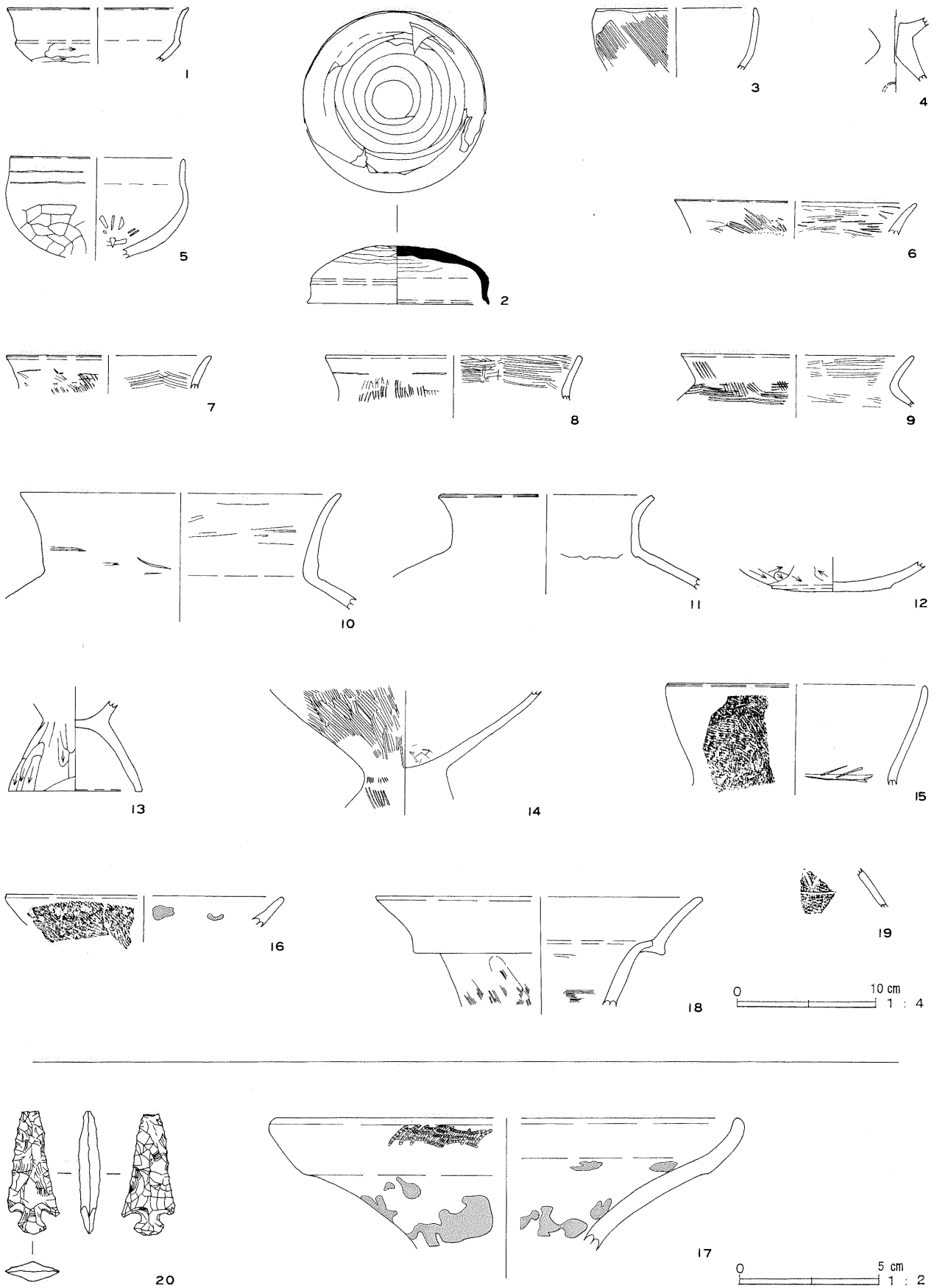
土師器壺(同一15、16)は、R-20グリッド北西部から出土している。後に下位から20号住居跡が検出されている。

土師器坏(同一1)・土師器甕(同一11、12)は、Y-23グリッド北東隅から出土している。甕(11)は、1号方形周溝遺構南西溝内出土片と接合復元されているところから、同遺構に帰属する可能性は極めて強い。

石鏃(20)は、S-19グリッド・8号畠跡範囲内から、同畠跡プラン確認時に検出されている。

第47表 C区遺構外出土遺物観察表 (第150図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・坏	(12.9)	—	—	①②⑥④	②	明赤褐	口縁部1/6	
2	須恵器・蓋坏	13.1	4.2	—	①④③⑥⑤	②	暗灰	3/4	黒色処理。
3	土師器・高坏	(12.1)	—	—	①②④⑥③	②	明赤褐	坏部1/8	
4	土師器・器台	—	—	—	②⑥①	②	橙	接合部のみ	脚部透し(円孔)。
5	土師器・盥	(12.4)	—	—	⑥②①④	②	にぶい橙	1/4	吸炭。二次加熱。
6	土師器・甕	(17.1)	—	—	①②⑥④	②	明赤褐	口縁部1/5	吸炭。二次加熱。
7	土師器・甕	(14.5)	—	—	①④⑥②	②	明赤褐	口縁部1/6	吸炭。二次加熱。
8	土師器・甕	(18.0)	—	—	①②⑥	②	橙	口縁部1/4	内外面炭化物付着。二次加熱。
9	土師器・甕	(16.7)	—	—	⑥④②①	②	橙	口縁部1/2	吸炭。二次加熱。
10	土師器・甕	(23.1)	—	—	②①③⑥	②	橙	口縁部1/3	外面吸炭。
11	土師器・甕	(15.0)	—	—	②①⑥④	②	橙	口縁部1/8	吸炭。
12	土師器・甕	—	—	8.6	⑥②①④	②	にぶい褐	底部のみ	内面吸炭。
13	土師器・台付甕	—	—	9.6	①②③	②	赤褐	台部3/4	吸炭。二次加熱。
14	土師器・台付甕	—	—	—	①②⑥④	②	明褐	底部1/4	内面炭化物、外面煤付着。二次加熱。
15	土師器・壺	(18.4)	—	—	①④③②⑥	②	橙	口縁部1/12	
16	土師器・壺	(19.8)	—	—	③①④②⑥	②	にぶい橙	口縁部1/8	内面朱塗。
17	土師器・壺	16.6	—	—	⑥①②③④	②	浅黄橙	口縁部1/3	表面剝離した部分が多い。内外面朱塗。
18	土師器・壺	(23.4)	—	—	①②③④⑥	②	赤褐	口縁部1/3	内外面一部吸炭、口縁接合部刷毛目。
19	土師器・壺	—	—	—	①②⑥	②	橙	小片	
20	石鏃	全体(4.4) 茎長さ 0.8 上幅 0.65 下幅 1.0 刃幅 1.9 刃厚さ 0.7 重さ 4.2g						一部欠	デイスイト製。



第150図 C区遺構外出土遺物

VI まとめ

一本木前遺跡における発掘調査は、平成10年度に開始され、今回・平成13年度で第4次を迎えたこととなる。これまでの調査によって、遺跡が古墳時代前期から平安時代に及ぶ大集落を形成していたことが判明している。

今回の調査をもって、調査対象面積61,280㎡のうち、約3/4が終了したことになる。

その結果、各時代ごとの様相が徐々に明らかになりつつあり、同時に、その変遷から、遺跡の全貌も知れようとしているところである。

ここでは、その中から、古墳時代前期の様相をみとめることとする。

古墳時代前期に属することが判明している遺構には、住居跡、方形周溝墓、土器集中地点、土坑墓等がある。

住居跡は、今回報告前の段階では、A区85号住居跡、DE区29号住居跡(以上『一本木前遺跡II』所収)、B区1号、2号、3号、8号、9号、10号、11号、14号、15号、17号、18号、19号住居跡、EF区29号住居跡(以上『一本木前遺跡III』所収)の、15軒が確認されていた。このうちA区85号住居跡は、西半分がB区にかけて位置して、また、DE区29号住居跡はDE区の北西端、EF区29号住居跡はEF区の北端に位置し、ともにB区に最も近く接する地点に位置しているものであった。

この結果、住居跡の配置は、B区を中心としていること、B区1号住居跡の位置するT-10グリッドから、A区85号住居跡の位置するAB-12グリッド、さらにDE区29号住居跡の位置するAF-12グリッドを結ぶラインが、本期集落の東限を示していること、DE区29号住居跡の位置するAF-12グリッドと、EF区29号住居跡の位置するAB-19グリッドを結ぶラインが、南限を示していること等が判明していたところである。

これらに加え、今回の調査において、B区で4号住居跡1軒、C区で1号～8号住居跡、10号～20号住居跡、24号住居跡、25号住居跡の21軒、計22軒が検出されたことにより、C区20号・24号住居跡から、EF区29号住居跡の位置するグリッド19ラインが、本期集落の西端を成していることが判明したものである。また西端ラインは、C区7号住居跡の位置からすると、北へ移行するに従って東へずれてくる様相を呈している。

B区で検出された13軒の住居跡は、全てB区北東部に集中し、この集中は、C区の1号～8号住居跡及び10号～20号住居跡の集中地域へと連続し、さらには、B区・C区の北端部に位置する平成14年度調査区域へも連続している。このうち、C区12号・13号の間で、初めて住居跡同士の重複がみられた。これらのことから、当初、当該期集落の中心部をB区の中央地域と考えていたものを、B区の中央地域を部からC区中央部さらには、B区・C区の北端部まで広げる必要が生じてきたものである。

住居跡群の南端に位置する、B区4号住居跡とC区20号住居跡の南側には、B区内で河川跡に削平された部分がみられ、明確ではないが、約50mの空白地域が存在しているといえる。この空白部の南側に4基の方形周溝墓が集中して検出されたのである。

4基の方形周溝墓は互いに近接し、3号方形周溝墓東隅と4号方形周溝墓西隅のように、重複している部分もみられる。一方、2号方形周溝墓南東溝と3号方形周溝墓北西溝のように、互いに他方の溝を避けて構築している部分もみられる。

形態は、3号方形周溝墓が全掘されていないため不明であるものの、1号・2号方形周溝墓は溝全周型、4号方形周溝墓は南隅部1ヶ所に陸橋をもつ型であることが判明している。しかしながら、4号方形周溝墓は、西隅を除いて河川跡によって削平され、溝底面付近のみが残存している状況であり、陸橋となっている南隅も、上位では溝が連続する全周型であった可能性が高い。また、南半部が未調査である3号方形周溝墓についても、溝の類似性から、溝全周型であった可能性が高い。

全体規模は、1号方形周溝墓が最も小さく11.72×11.22m、次いで4号方形周溝墓が13.12×13.40m、2号方形周溝墓が15.00×15.10mと拡大し、3号方形周溝墓が最も大きく17.40mを計る。方台部規模は、1号方形周溝墓が最も小さく6.00×5.00(5.60)m、3号方形周溝墓が最も大きく10.62mを計る。4号方形周溝墓は8.92×9.10mを計って2番目に大きく、2号方形周溝墓は8.42×8.57mで3番目になる。河川跡に削平された4号方形周溝墓は、2号方形周溝墓と比較して、全体規模が小さく方台部規模が大きいという現状であるが、削平された上位を復元すると、全体規模は増加し方台部規模は減少する。4号方形周溝墓は、本来、2号方形周溝墓と同規模であったと考えるのが妥当であろう。これらの結果、11.5m前後(1号方形周溝墓)、15m前後(2号・4号方形周溝墓)、17.4m前後(3号方形周溝墓)の3種の規模が存在していたとみられるものである。

各方形周溝墓の方台部軸偏差角にも共通性がみられ、1号がN-54°-W、2号がN-49°-W、3号がN-57°-W、4号がN-53°-Wと、北西方向からやや南に偏った方位でほぼ統一されている。

上面を河川跡に削平された4号方形周溝墓以外では、主体部が検出されている。このうち、2号方形周溝墓では、 $(3.80 + \alpha) \times 3.54\text{m}$ の長円形土坑の中央部に、2.08×1.02mの長方形土坑が掘り込まれている。下段・長方形土坑の北東部底面からは、頭骨の一部・歯・翡翠製勾玉1点・緑色凝灰岩製管玉2点が検出されている。1号・3号方形周溝墓では、上段土坑が長方形を呈するものの、やはり下段の長方形土坑を有する点では共通している。しかしながら、2号方形周溝墓の上段長円形土坑も、崩落の見られない北西辺は直線を呈し、下段土坑北西辺と平行線を示すことなどから、本来長方形であった可能性が高い。これらのことから各方形周溝墓主体部は、基本的には、2段の長方形土坑によって構成されていたといえる。また各主体部の主軸方位は、1号がN-54°-W、2号がN-46°-W、3号がN-72°-Wと、方台部軸偏差角同様の数値を示す。この中で、1号及び2号方形周溝墓は両者がほとんど同一であるのに対して、3号方形周溝墓主体部は大きく西に傾いており、方台部偏差角と異なる。3号方形周溝墓全体の形態がやや変形していることと連動するものであろうか。

こうした長方形2段の土坑は、今までの調査では、①一人骨と共にガラス玉の検出されたD・E区51号土坑(『一本木前遺跡II』)、②一人骨の検出されたE・F区19・20号(『一

本木前遺跡Ⅲ』)の他、③-E・F区15・16号(『同』)が該当する。②・③は、ともに上下2段の一連土坑であり、『一本木前遺跡Ⅲ』での、別土坑との見解を修正するものである。合わせて、③が12・13号住居跡より「新」との表記は誤植であり、「古」と修正しておきたい。

これら3基の土坑は、①がAD-12グリッド、②・③がAD-15グリッドに位置し、当該期遺構の範囲、且つ方形周溝墓群に南接すること、ともに古墳時代後期の河川跡及び住居跡に削平されていること等から、直接年代を示す遺物は検出されていないものの、当該期に属するとみて差し支えは無いといえる。また、2段の長方形土坑で構成されていること、人骨の検出された①・②では頭位を西にもち、2号方形周溝墓と同一であること、下段長方形土坑の方位が、①N-73°-W、②N-70°-W、③N-76°-Wを示し、3号方形周溝墓主体部方位と近似していること、①の下段長方形土坑では木棺の存在を示し、②・③土坑、さらには1号～3号方形周溝墓主体部でも同一の様相を呈していること等から、①・②・③土坑は、全て方形周溝墓主体部であった可能性は非常に高い。これらを方形周溝墓主体部と考えると、現状に倍する数の方形周溝墓が存在していたとすることができよう。

しかしながら、河川跡・住居跡・溝跡等の重複・削平状況が激しいこと、調査範囲が狭かったことを勘案しても、土坑に伴う溝が検出されなかったこと、①と③は27m前後離れているものの、②と③は2m前後しか離れておらず、現状では複数の主体部はみられないこと等から、①・②・③土坑を方形周溝墓主体部とするには、不安定な要素もあることを付言しておかなければならない。

方形周溝墓からの出土土器は、主として周溝内から検出されている。溝内出土土器は、個である場合は隅部からの検出が多く、また特定の溝に集中する傾向も示している。さらに、一周溝墓内において、近接して出土した土器群は、同一土層内から検出されるという、共通性がみられる。

しかし、1号方形周溝墓北西溝外側2mから甕、2号方形周溝墓北東溝外側45cmから埴、同南西溝外側32～100cmの範囲から埴2点、西隅外側140cmから埴等、一部は周溝外面の基盤層上面からも検出されている。そして、2号方形周溝墓南西溝中央部、外面から埴2点の検出された地点に隣接した溝外壁最上面から、椀が、埴の検出地点から溝に正に落ちかけた状況で検出されており、溝内出土土器の原位置を物語っている。同一の様相は、2号方形周溝墓北東溝内検出の埴、同南西溝中央部検出の埴3点・台付甕、同西隅検出の高坏・台付甕・壺等でもみられる。

2号方形周溝墓西側に接してみられた2ヶ所の土器集中地点(C区土器集中地点No.2及びNo.3)も、周溝墓の墓前祭祀跡であったと考えられる。しかしながら、2号方形周溝墓周溝内外出土の土器群と時期差がみられることから、あるいは、墓前祭祀に時期的な段階が存在したものかもしれない。

今後、当該期遺構分布地域の南端に位置する住居跡の性格も考え合わせ、集落内における墓域と住居跡群の関連性について考えていきたい。

写真図版

図版1 一本木前遺跡全景



北西より



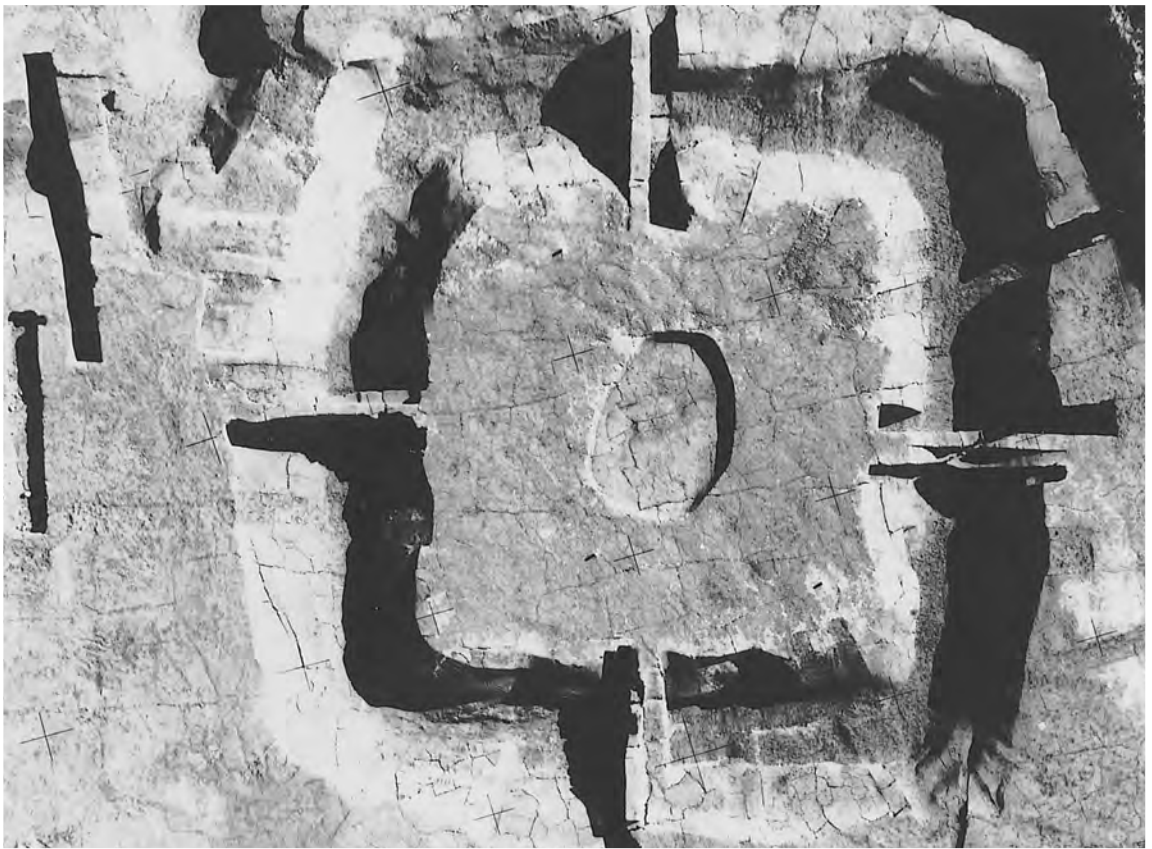
南東より

図版2 発掘調査風景





1号方形周溝墓



2号方形周溝墓

图版4 B区方形周溝墓 (2)



3号方形周溝墓



4号方形周溝墓

图版5 B区1号方形周溝墓（1）



全景（検出時）



全景



北溝土層断面

图版6 B区1号方形周溝墓(2)



東溝土層断面



西溝土層断面



西溝隅土層断面

图版7 B区1号方形周溝墓(3)



遺物出土狀況1



遺物出土狀況2



遺物出土狀況3

图版8 B区2号方形周溝墓(1)



全景1



全景2



全景3



北東溝



南西溝



南東溝

图版10 B区2号方形周溝墓 (3)



北溝土層断面



北東溝土層断面



東溝土層断面

图版11 B区2号方形周溝墓（4）



東溝土層断面



南溝土層断面



西溝土層断面

图版12 B区2号方形周溝墓 (5)



主体部



主体部内管玉
齒出土状况 (1)



主体部内管玉
勾玉、齒出土状况 (2)



溝内烧土出土状况



溝内炭化物出土状况



遺物出土状况

图版14 B区2号方形周溝墓 (7)

遺物出土狀況 1



遺物出土狀況 2



遺物出土狀況 3





全景(北より)



全景(南より)



北西溝及び2号南東溝

图版16 B区3号方形周溝墓 (2)



周溝 (北東隅部)



北溝土層断面



北東部遺物出土狀況

图版17 B区3号方形周溝墓 (3)



東溝土層断面

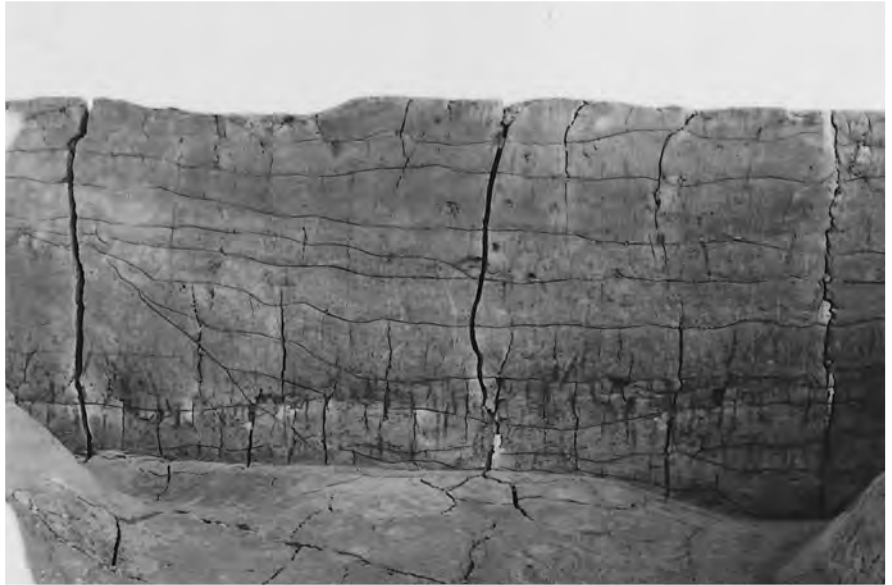


西溝土層断面



北東溝隅土層断面

图版18 B区3号方形周溝墓（4）



北西溝隅土层断面



主体部検出状況



周溝内焼土、灰出土状況

图版19 B区3号方形周溝墓 (5)



周溝 (北西) 内烧土出土状况



遺物出土状况 1



遺物出土状况 2

図版20 B区4号方形周溝墓（1）



全景（南西より）



東溝



西溝



北溝土層断面



南溝土層断面



南西溝土層断面

图版22 B区4号方形周溝墓 (3)



遺物出土狀況 1



遺物出土狀況 2



遺物出土狀況 3



遺物出土狀況4



遺物出土狀況5



遺物出土狀況6

图版24 B区4号住居跡



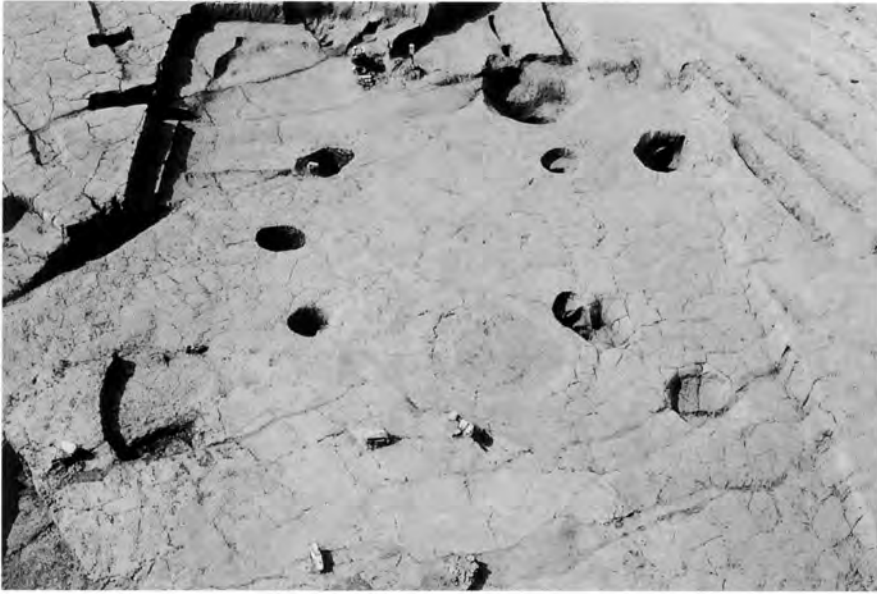
全景



炭化物出土状況



炭化物出土状況拡大



全景

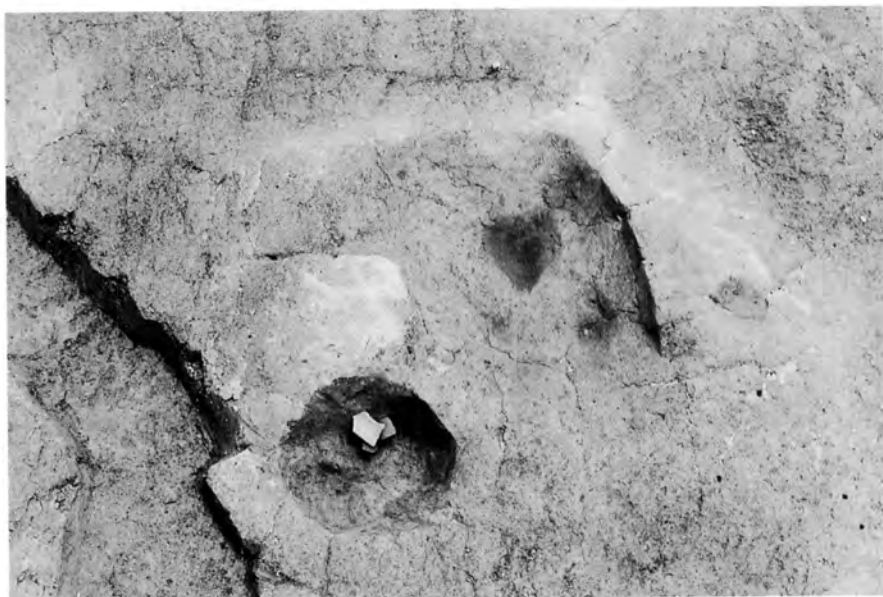


貯蔵穴周辺遺物出土状況



カマド周辺遺物出土状況

図版26 B区32号・38号住居跡（1）



32号カマド



38号全景（南より）



38号全景（北より）



カマド周辺遺物出土状況

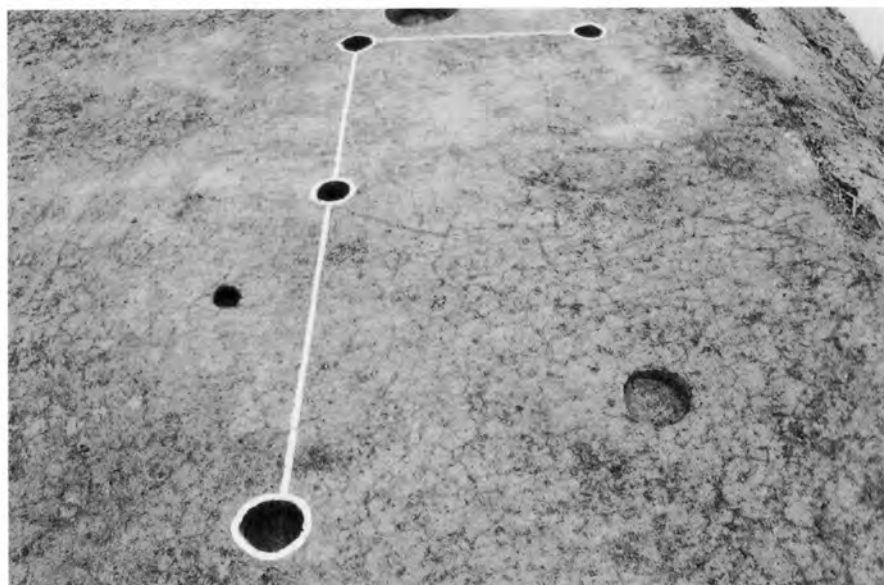


カマド

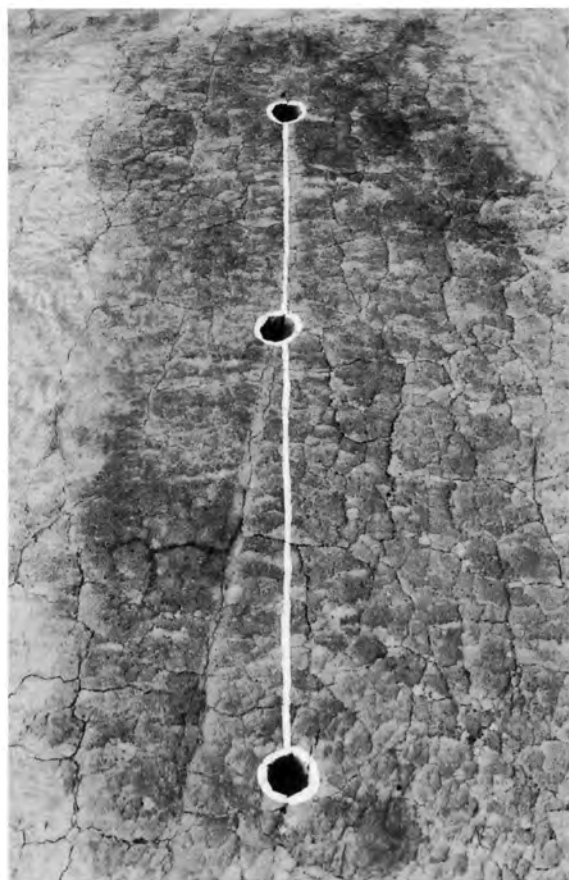


柱穴内炭化物出土状況

图版28 B区柵列



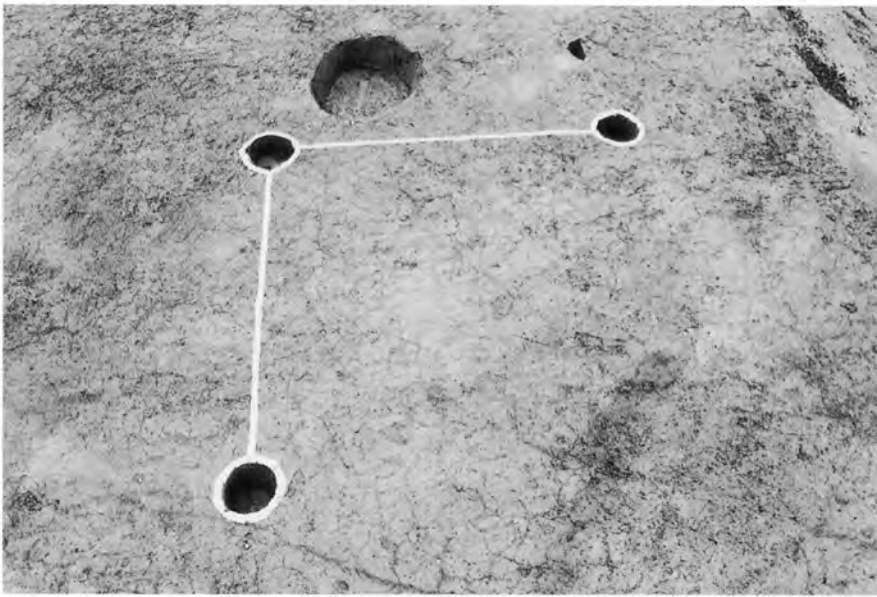
1号全景



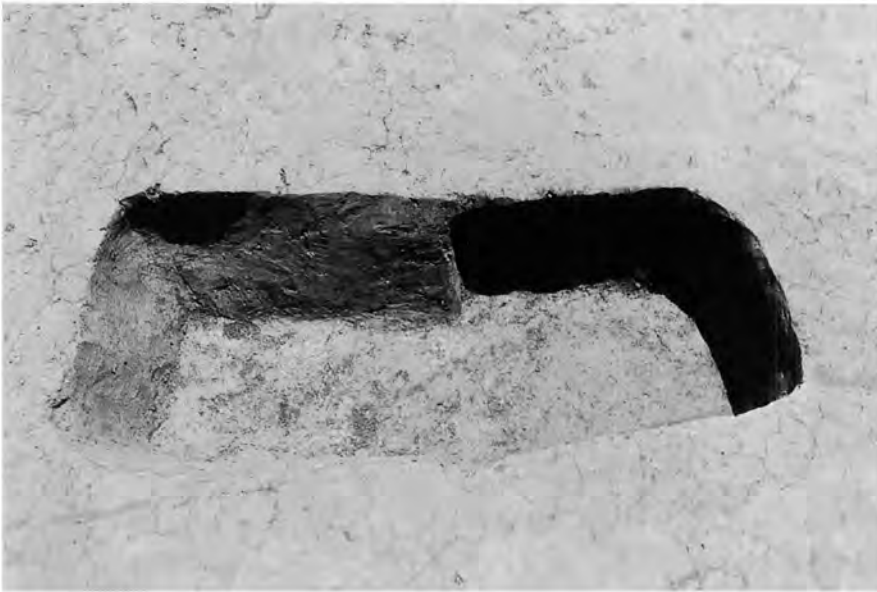
2号全景



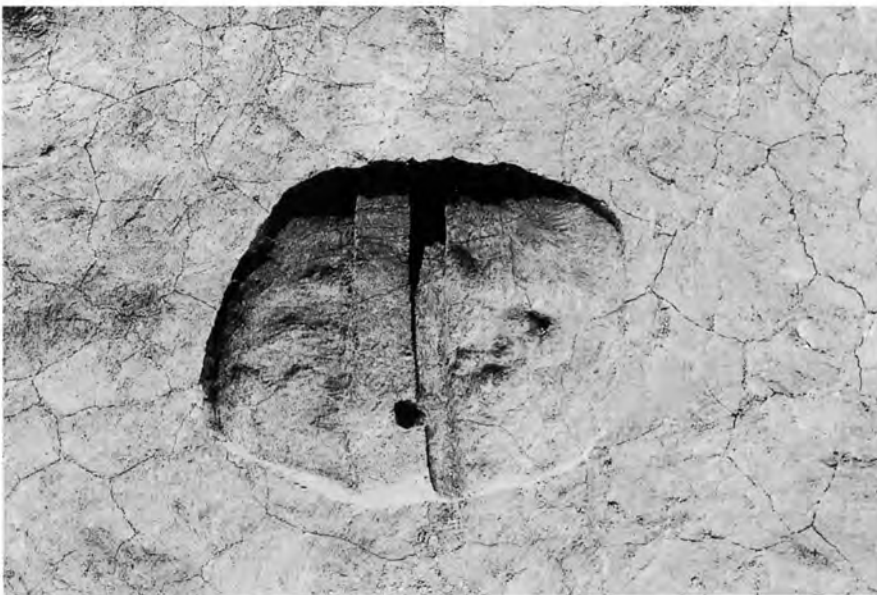
3号全景



45号



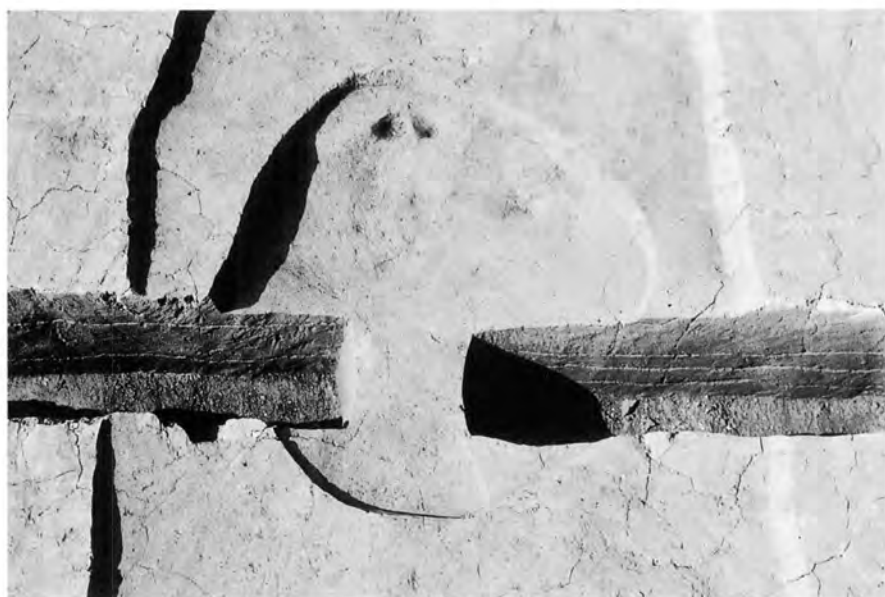
46号



47号

图版30 B区土坑 (2)

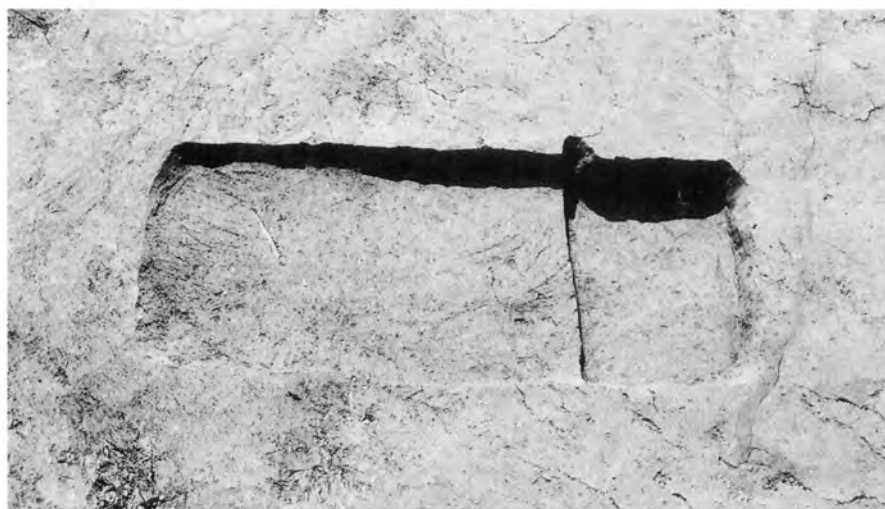
48号



49号

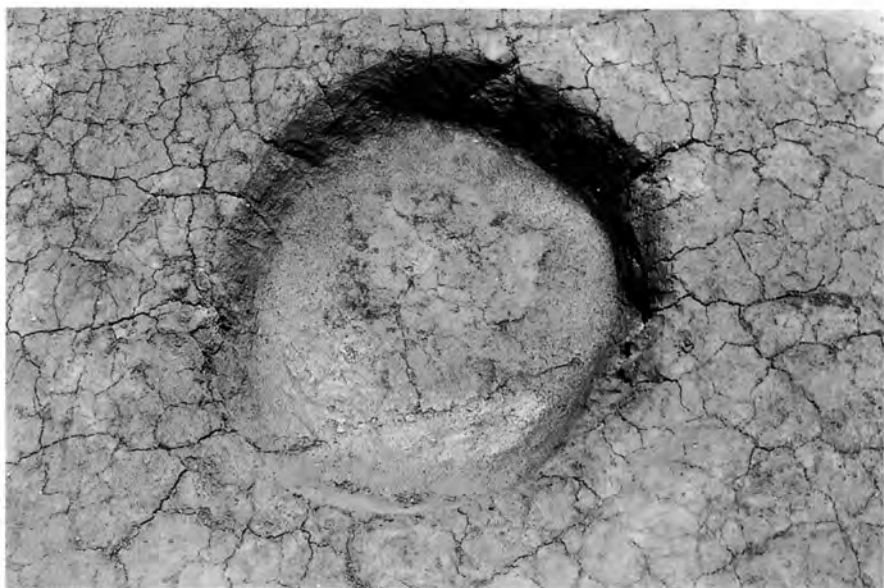


50号

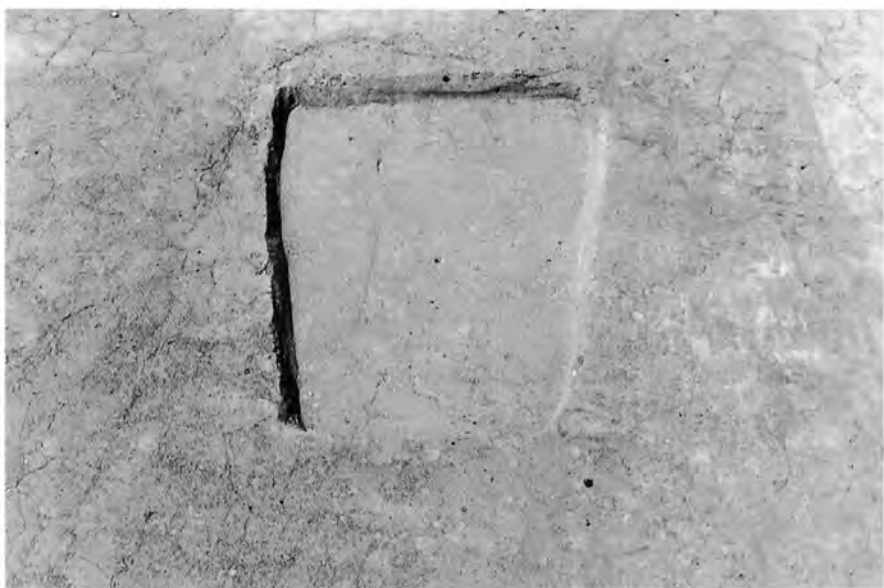




51号



52号



53号

图版32 B区土坑(4)



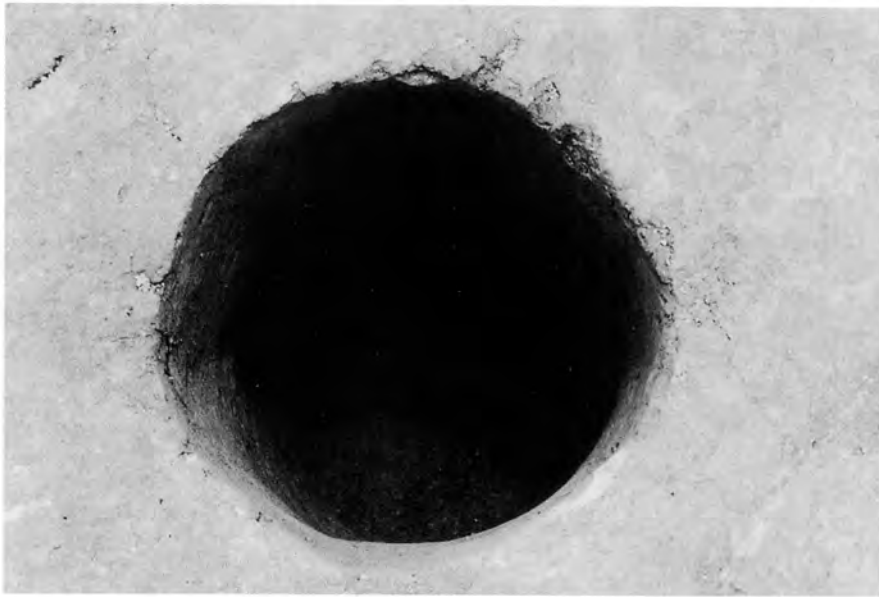
54号



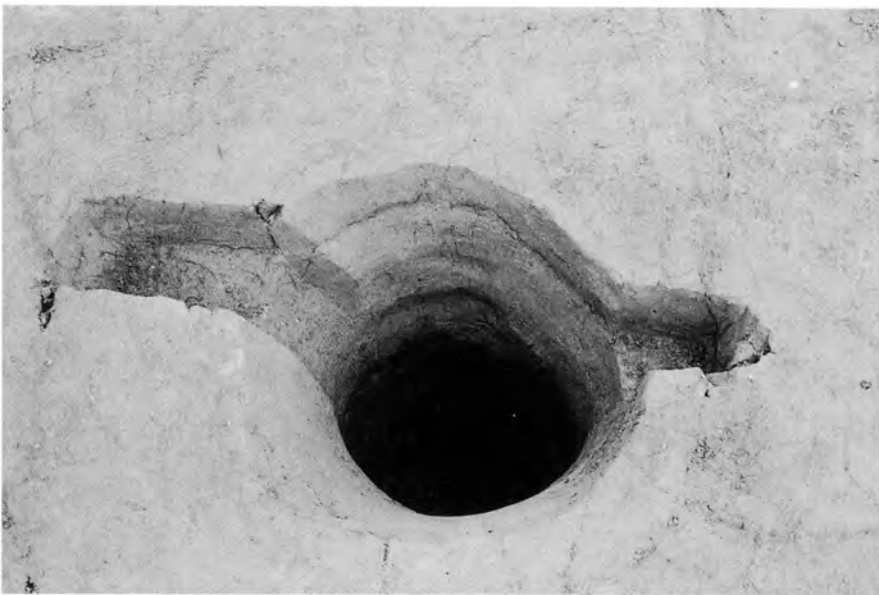
55号



56号



18号



19号



19号 (拡大)

图版34 B区井戸跡 (2)

20号



21号

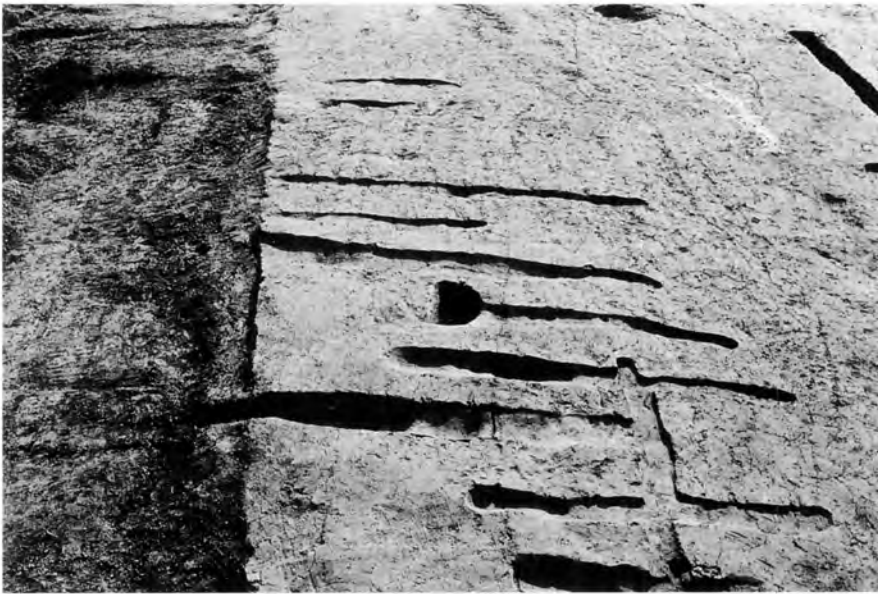


22号





9号北群



9号南群



10号

图版36 B区畝跡 (2)



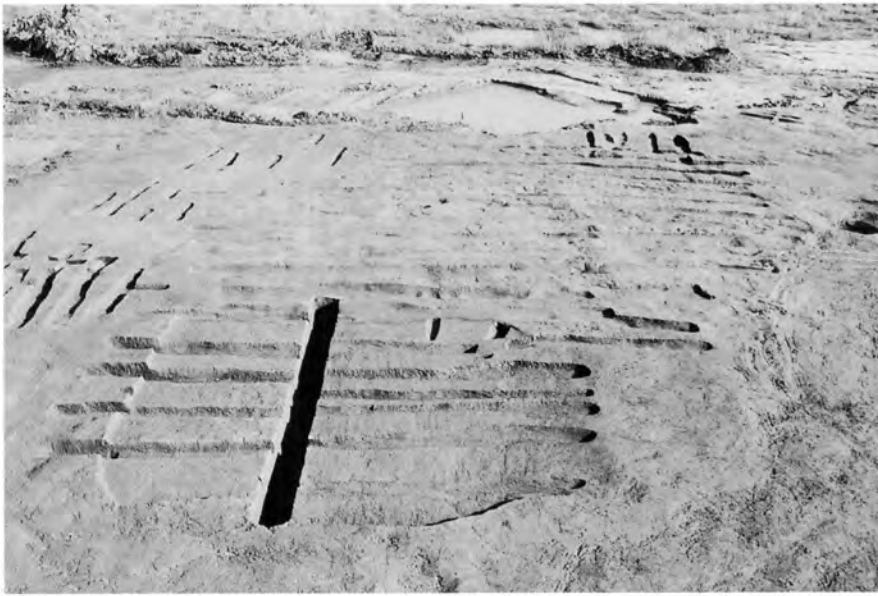
11号南部



11号北部



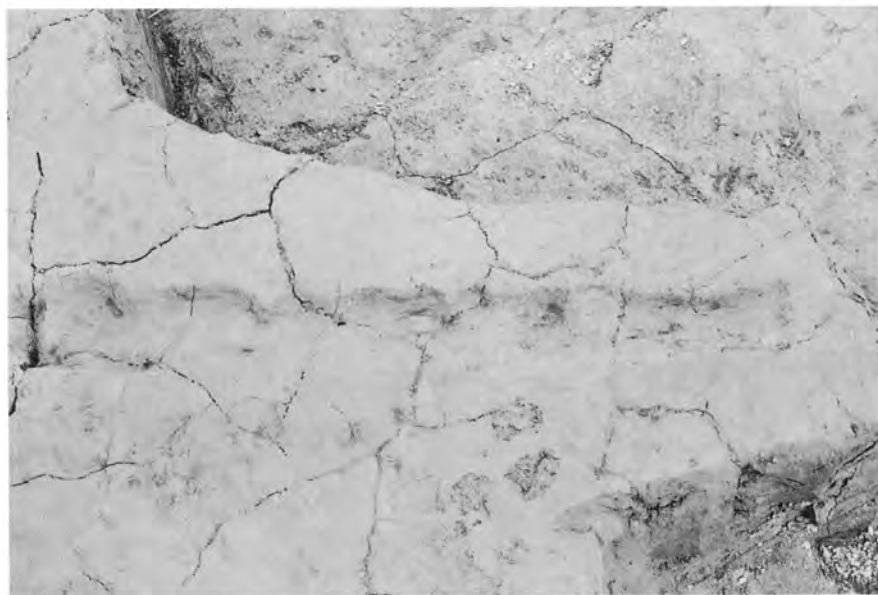
12号東部



12号畝跡全景



27号溝跡



28号溝跡

图版38 B区沟迹 (2)



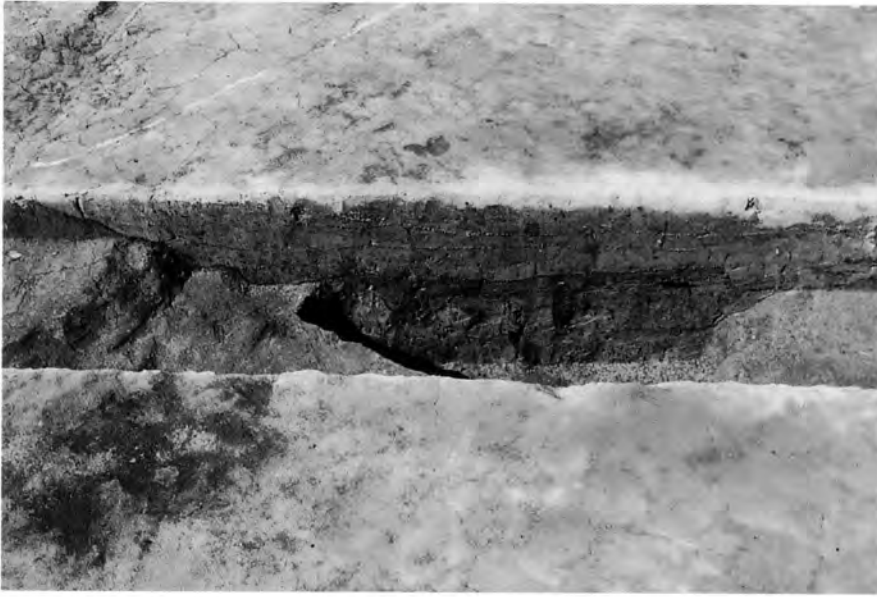
29号



30号



溝発掘風景



32号1



32号2

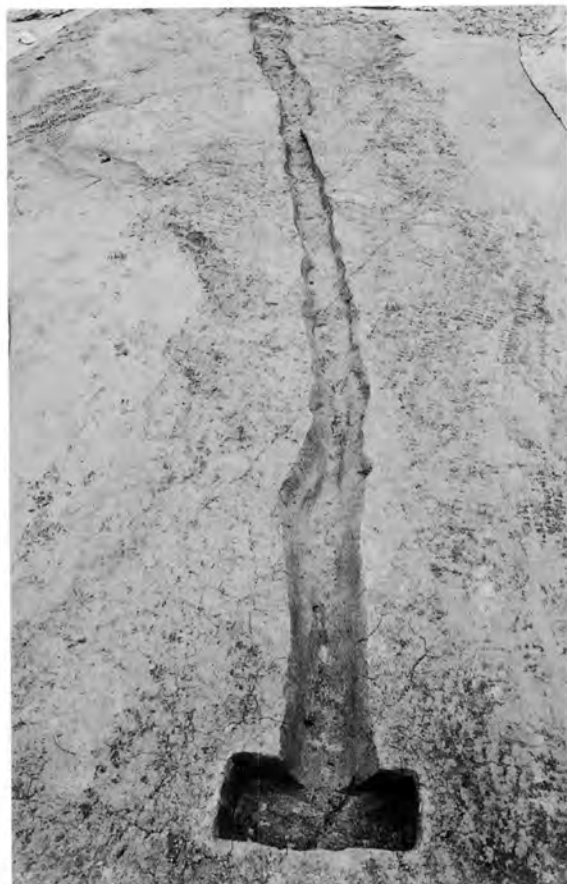


32号遺物出土状況

图版40 B区沟迹(4)·遺構外



33号 1



33号 2



33号遺物出土状況



石斧出土状況



1



2



3



6穿孔部



4



5



6

图版42 B区2号方形周溝墓出土遺物 ①



1



2



3



4



5



6



7



8



11



9



12

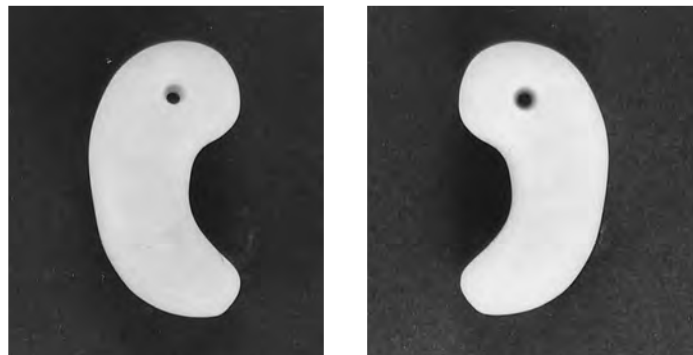


10

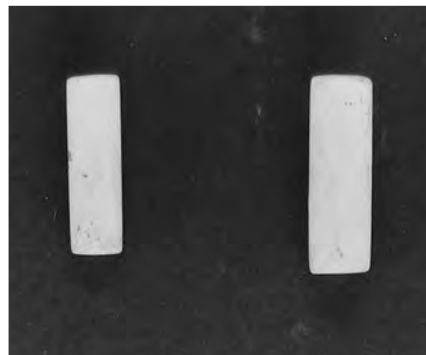


13

图版44 B区2号③·3号方形周溝墓出土遺物



2-14



2-15

2-16



3-1



3-2



3-3



1



3



2



4

图版46 B区4号住居跡出土遺物 ①



1



2



3



4



5



6



7



8



15



9 (口縁部)



9



16



14



17

图版48 B区22号住居跡出土遺物 ①



1



8



5



9



6



13



7



14



15



21



16



22



18



23



19



27



31



28



32



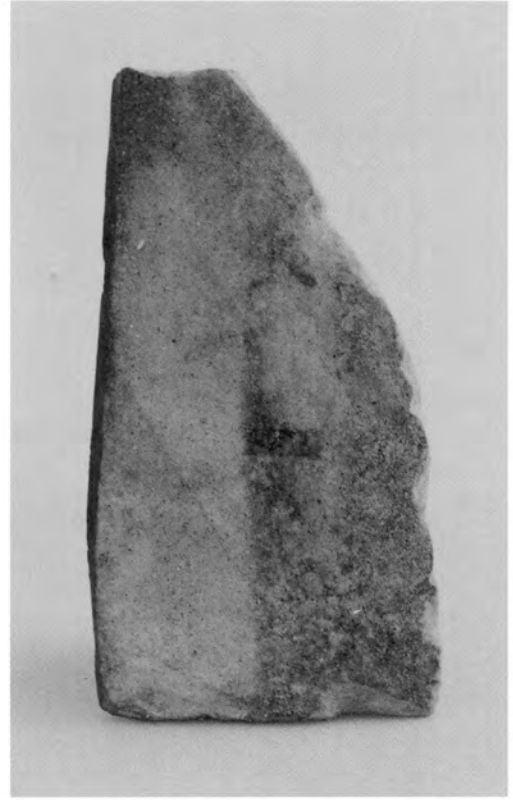
30



34



38-1



19-5



4



6



6

图版52 B区33号沟迹·遺構外出土遺物



33-4



6



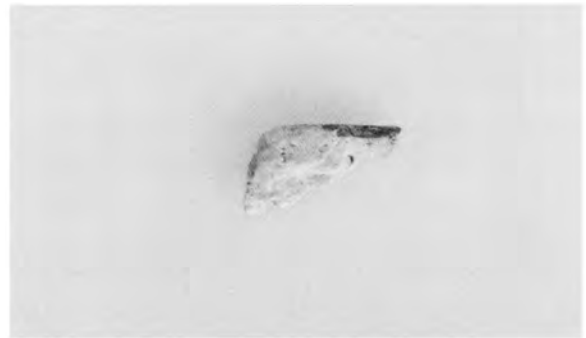
7



8



5



9



遺構外-1



遺構外-2



1号全景



1号炉址



2号全景

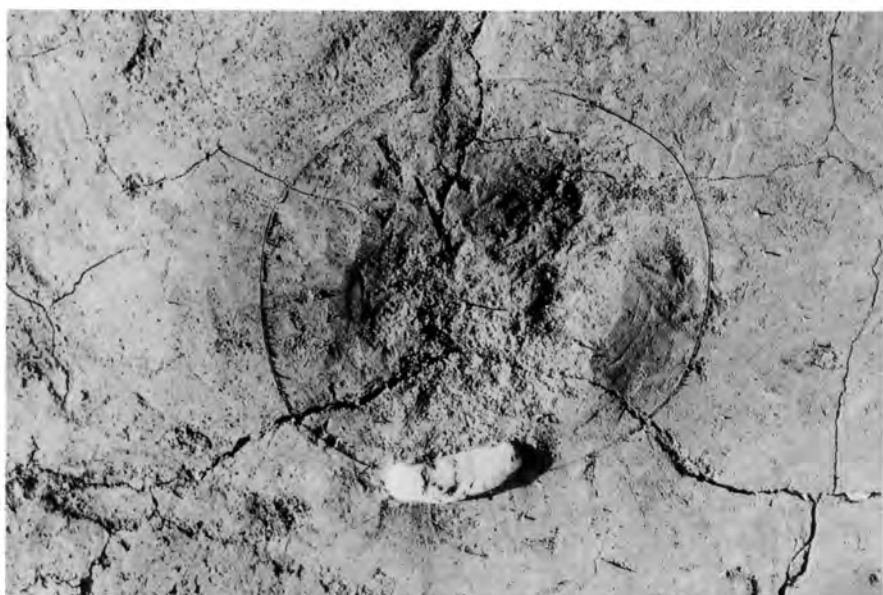
图版54 C区3号·4号住居迹



3号全景



4号全景



4号炉址



全景(北西より)



全景(南東より)



炉址

图版56 C区5号(2)·6号·7号住居跡

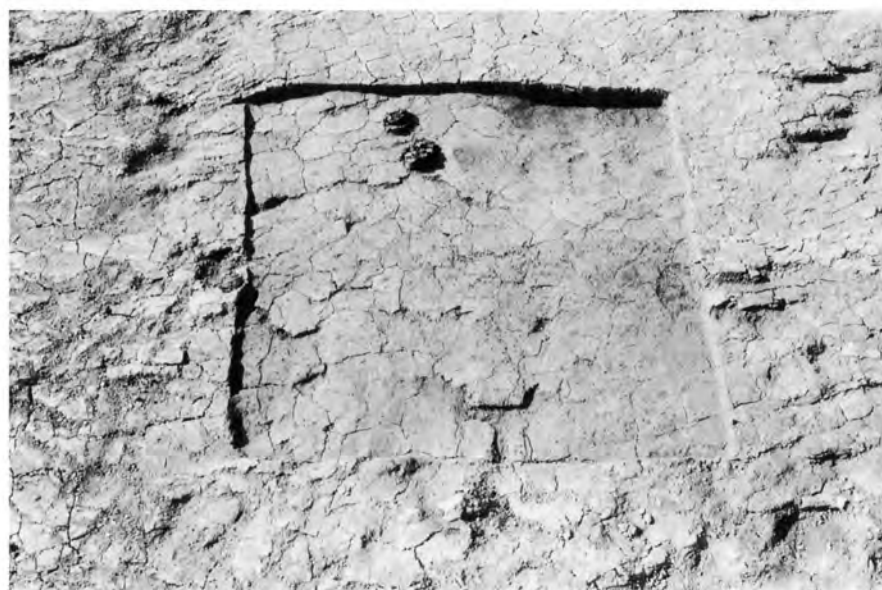
5号遺物出土状況



6号全景



7号全景





8号全景



9号全景



10号全景

图版58 C区10号住居跡 (2)

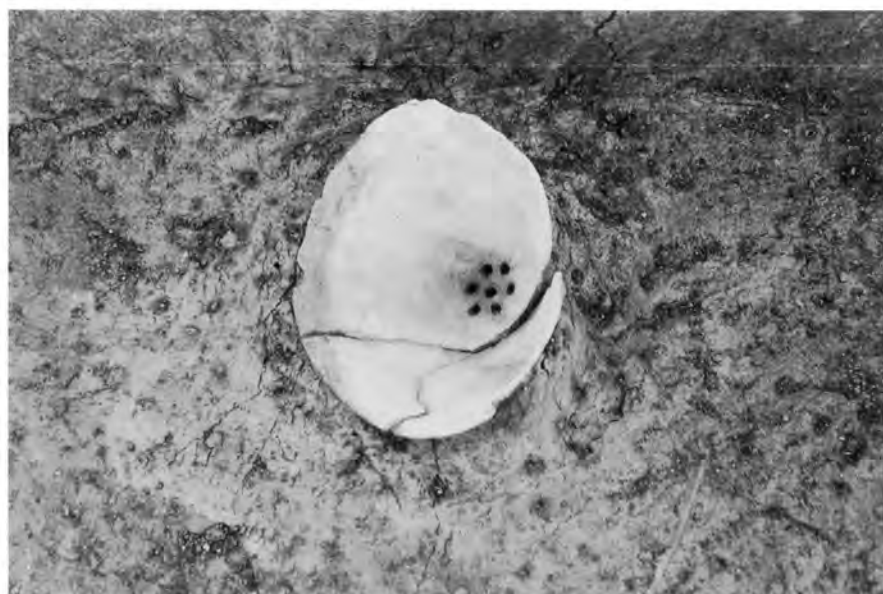
炉址

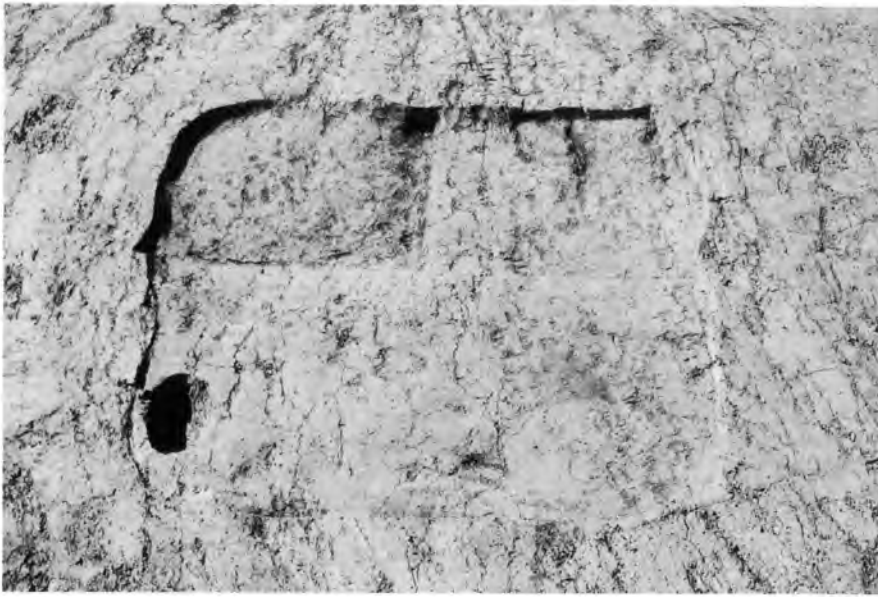


貯蔵穴

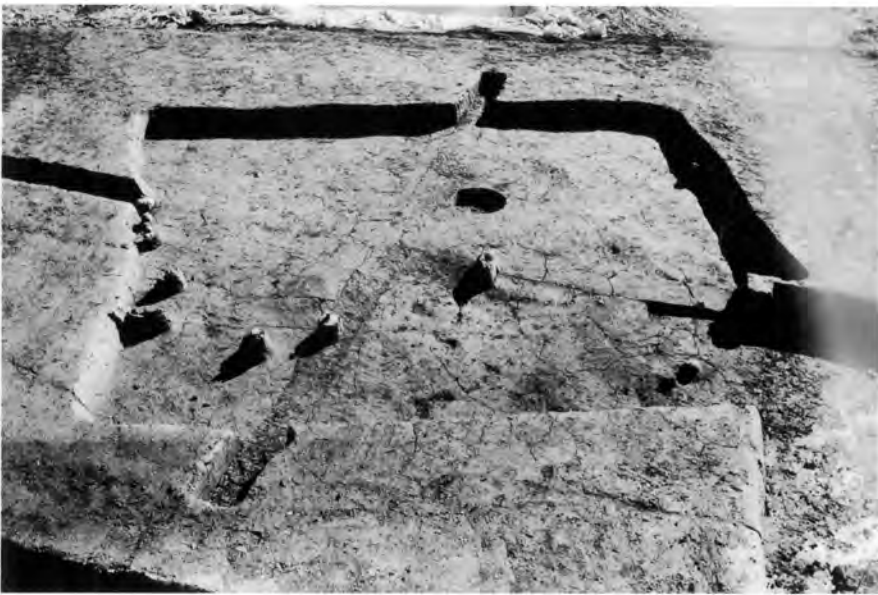


遺物出土状況





11号全景



12号全景

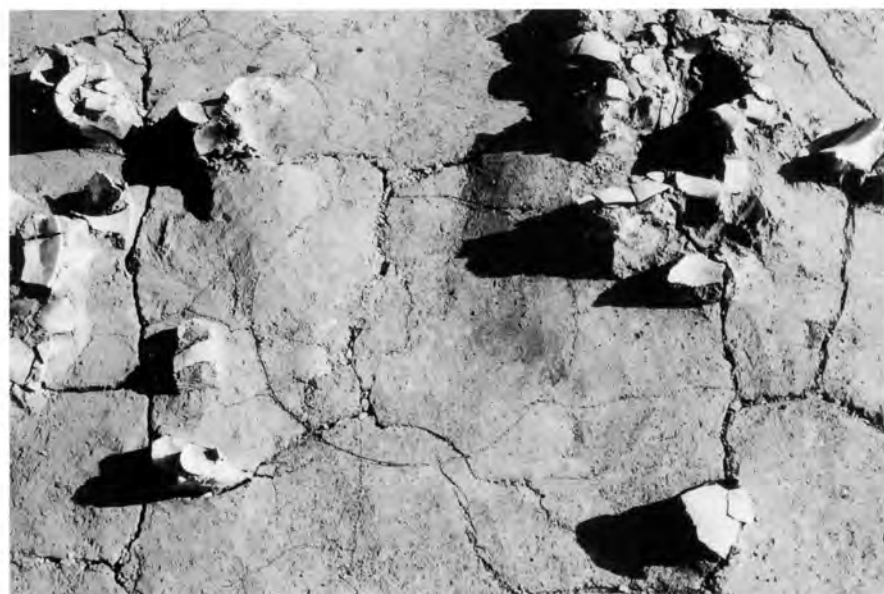


12号炉址

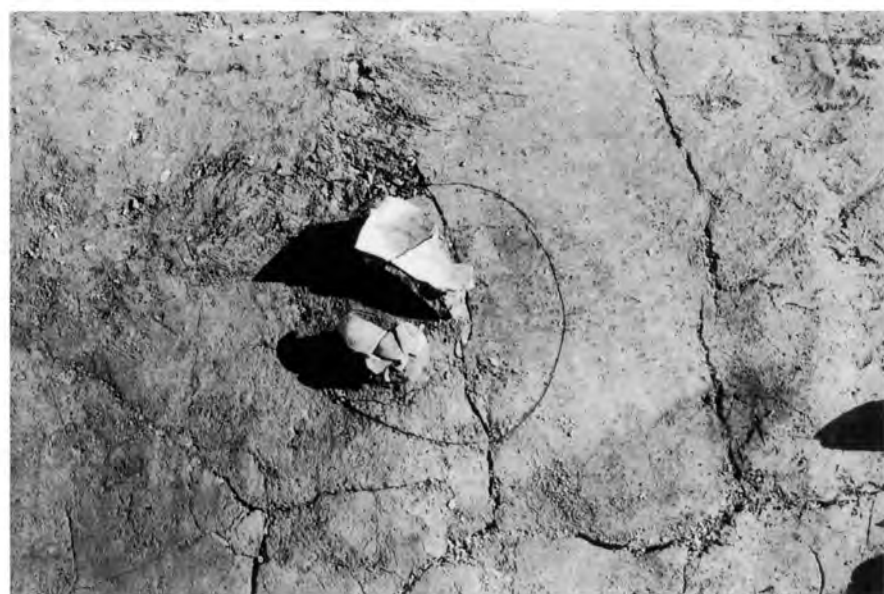
图版60 C区13号住居跡



全景



西側炉址



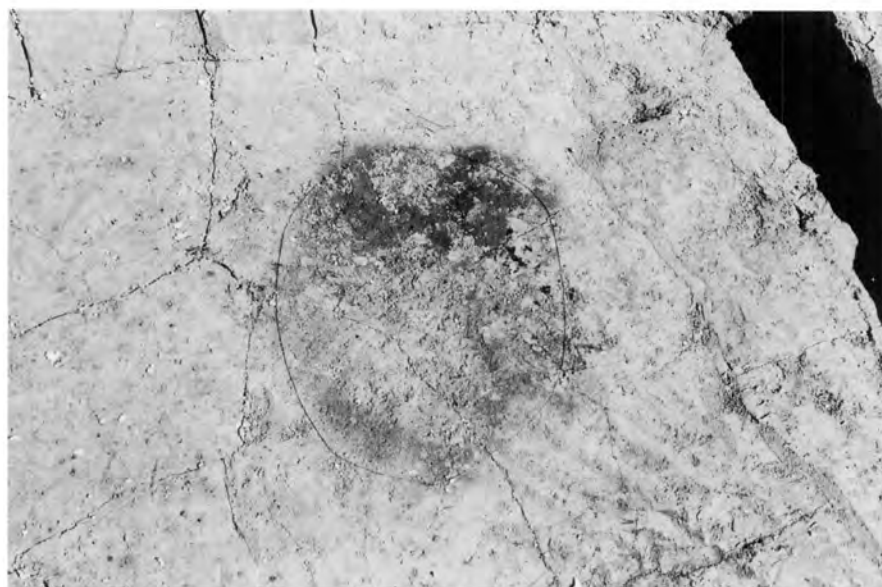
東側炉址



全景

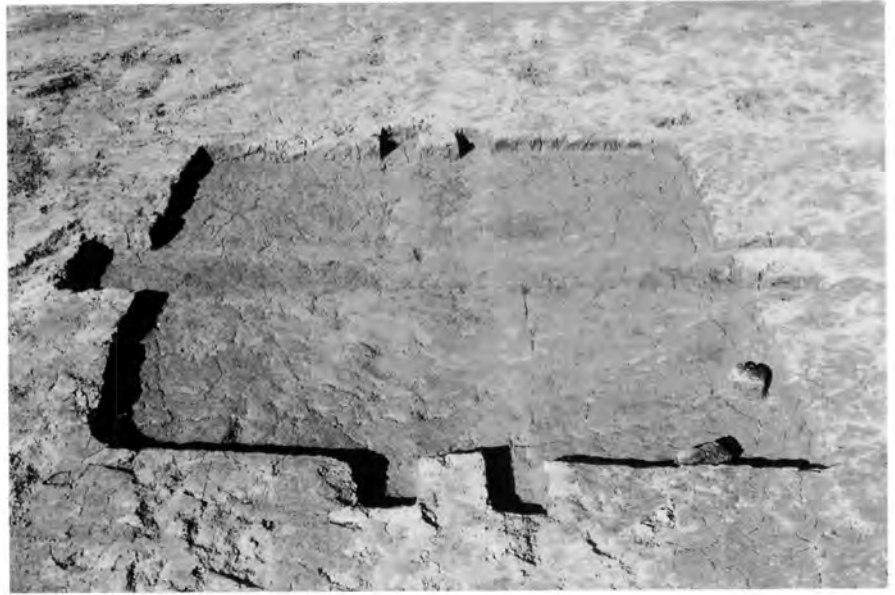


炭化材出土状況



炉址

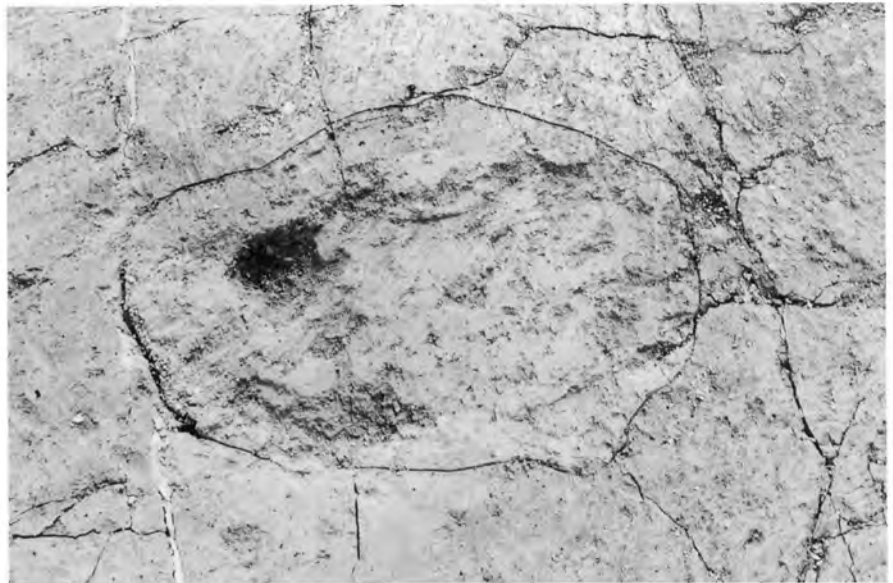
图版62 C区15号·16号住居跡



15号全景



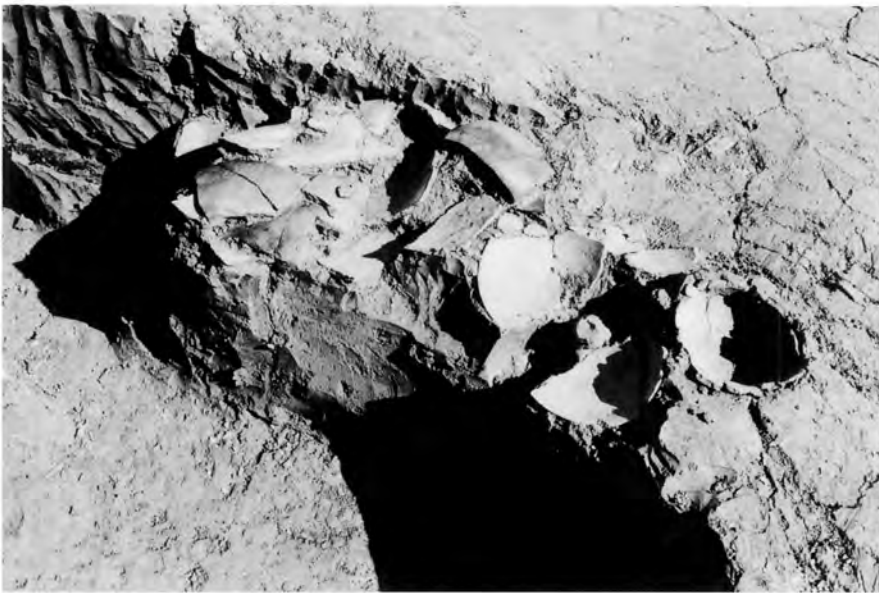
16号全景



16号炉址



全景



遺物出土状況1



遺物出土状況2

图版64 C区18号住居跡 (1)

全景



炉址



倒立台付甕出土状況

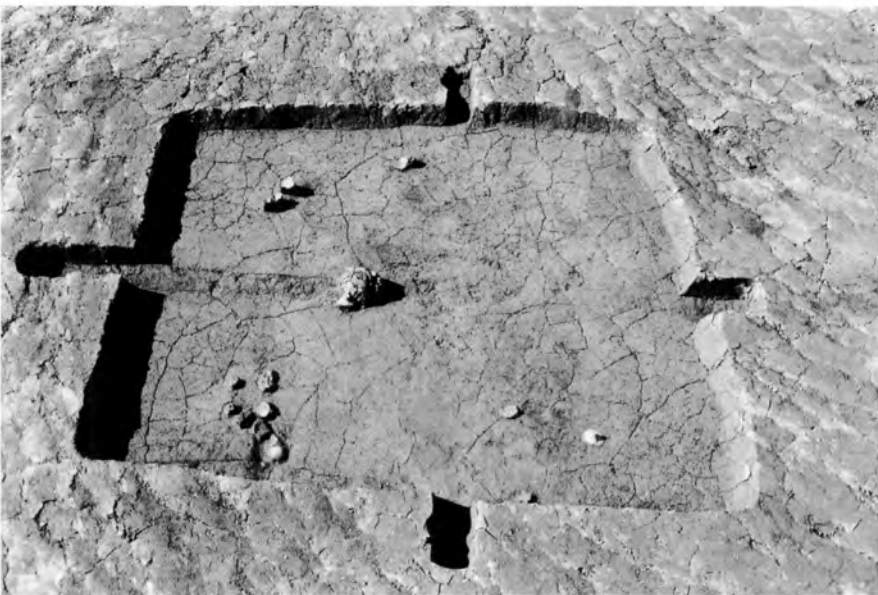




18号·倒立台付墓内部1



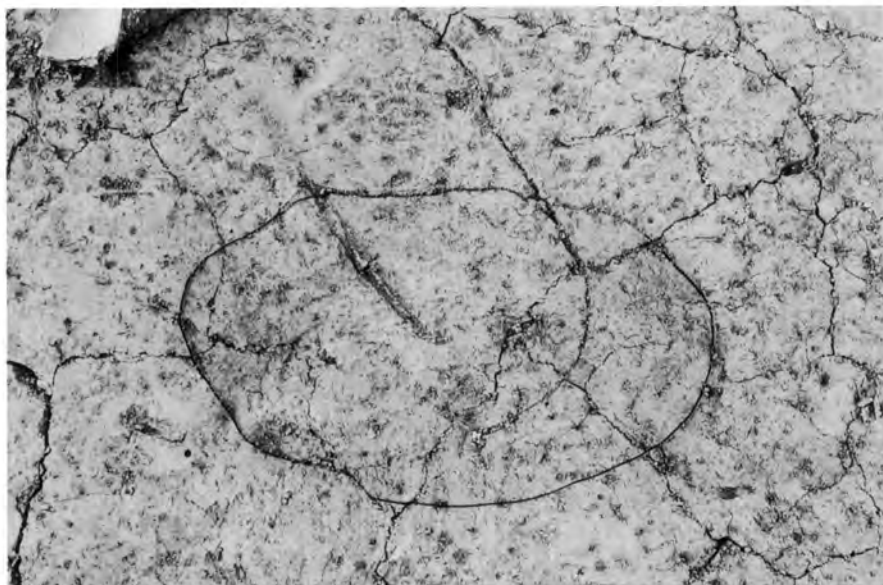
18号·倒立台付墓内部2



19号全景

图版66 C区19号(2)·20号住居跡

19号炉址

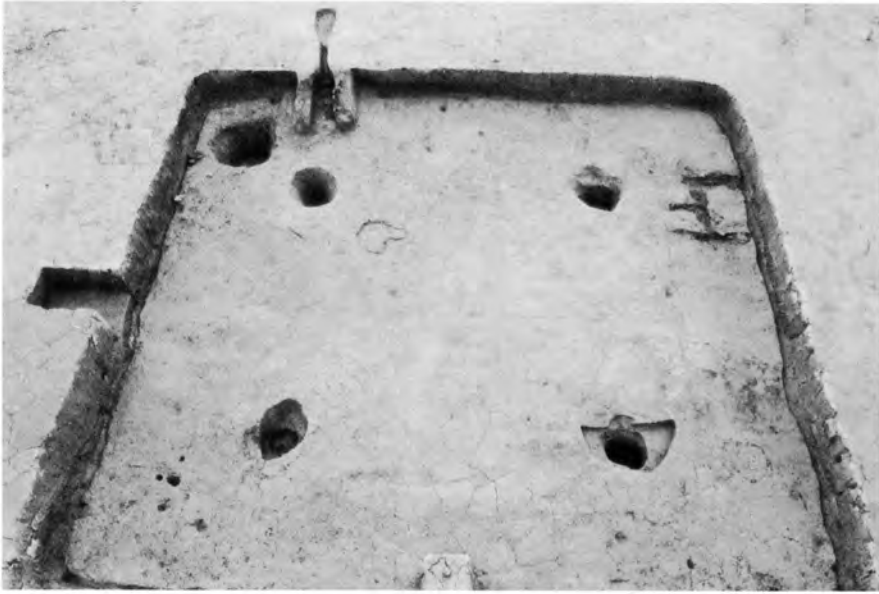


20号全景



20号炉址





全景



炭化材検出状況



炭化材検出状況 (東隅部)

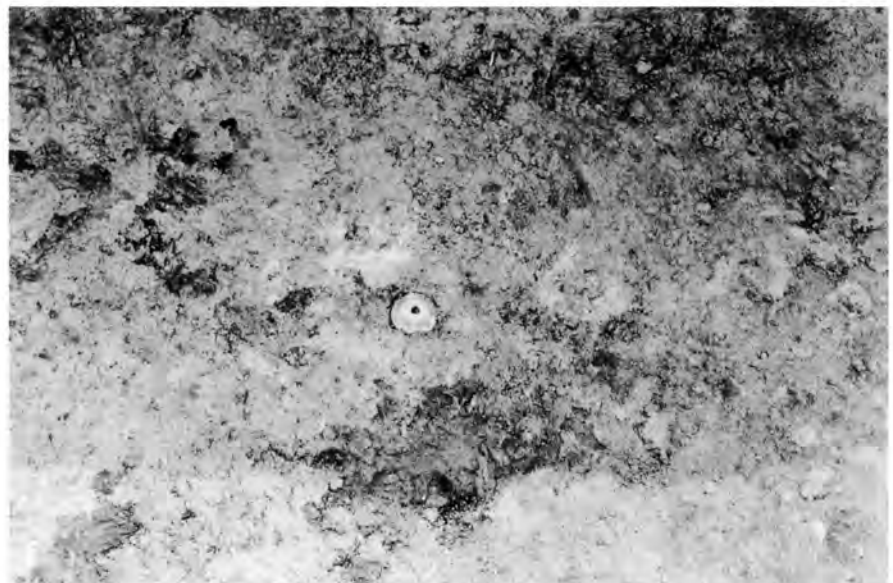
图版68 C区21号住居跡 (2)



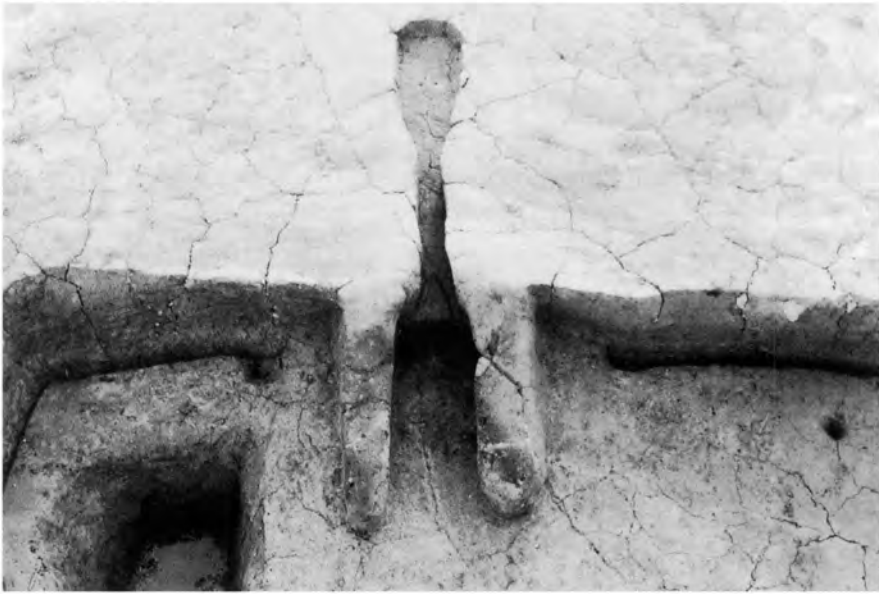
炭化材検出状況 (西隅部)



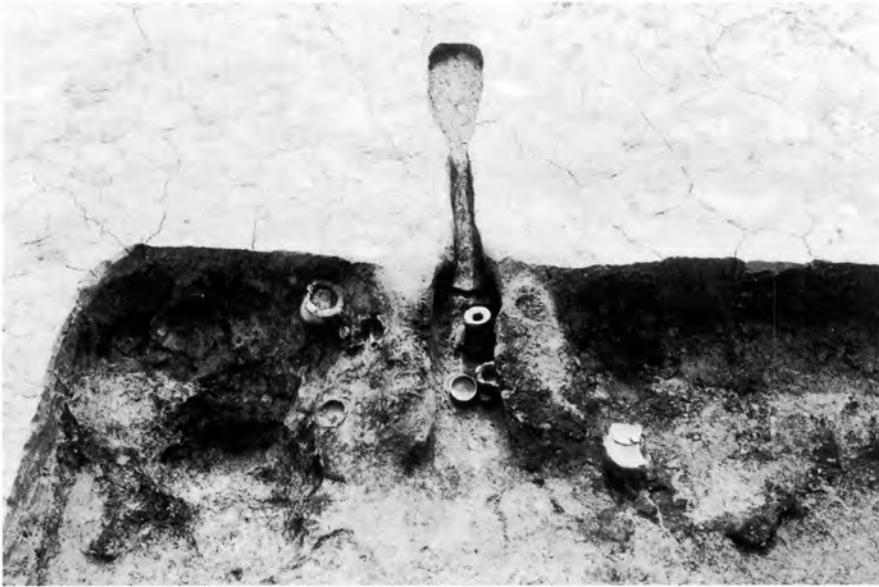
遺物出土状況1



遺物出土状況2



21号カマド



21号カマド周辺遺物出土状況

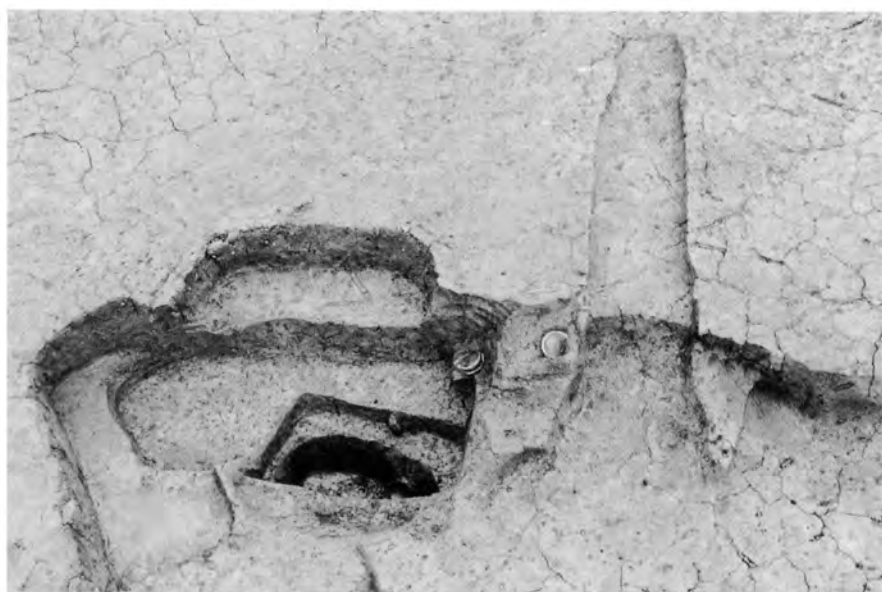


22号全景

図版70 C区23号住居跡



全景



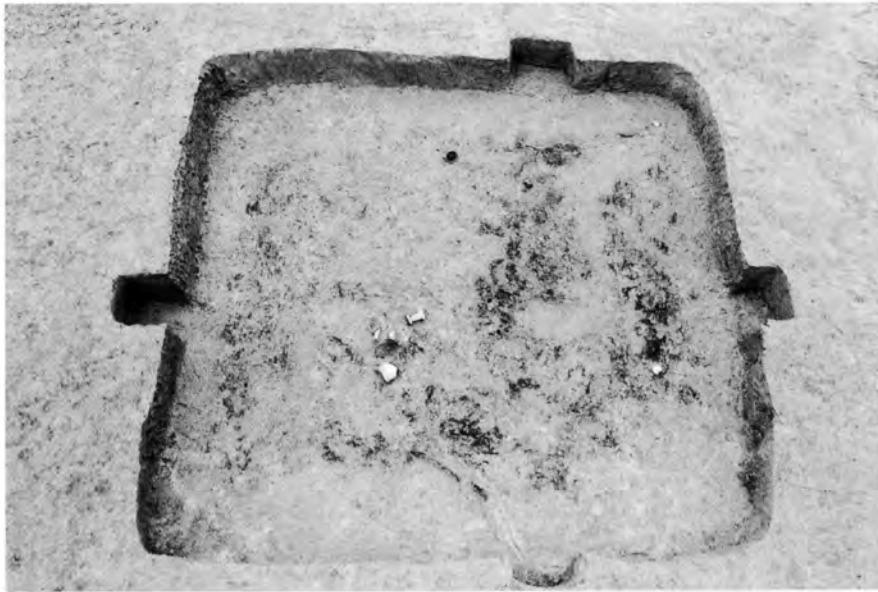
カマド周辺遺物出土状況



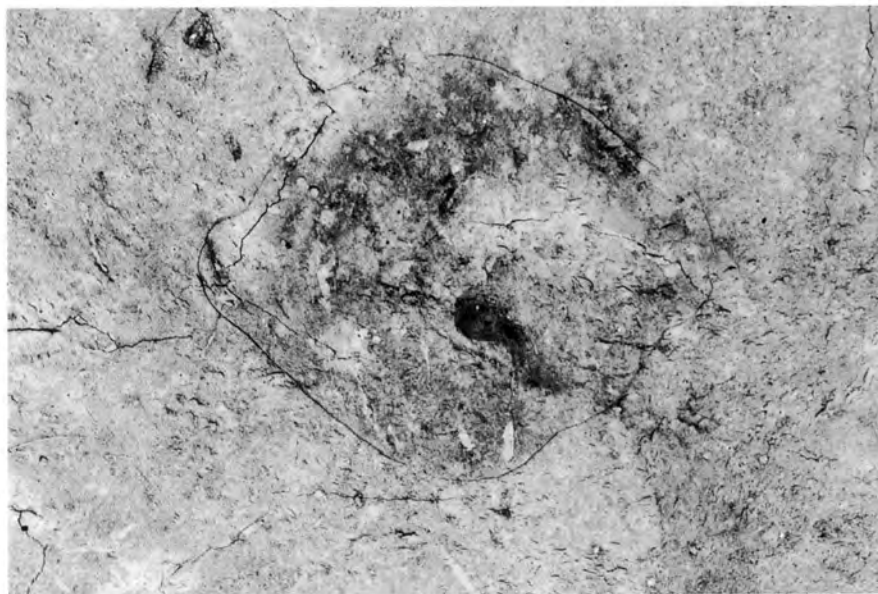
貯蔵穴周辺遺物出土状況



全景



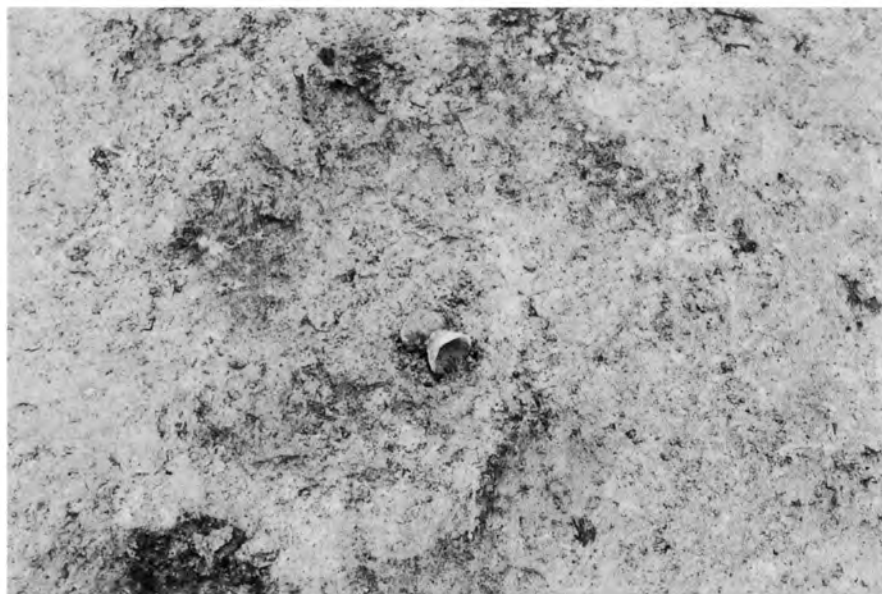
炭化材検出状況



炉址

图版72 C区24号(2)·25号(1)住居跡

24号遺物出土状況

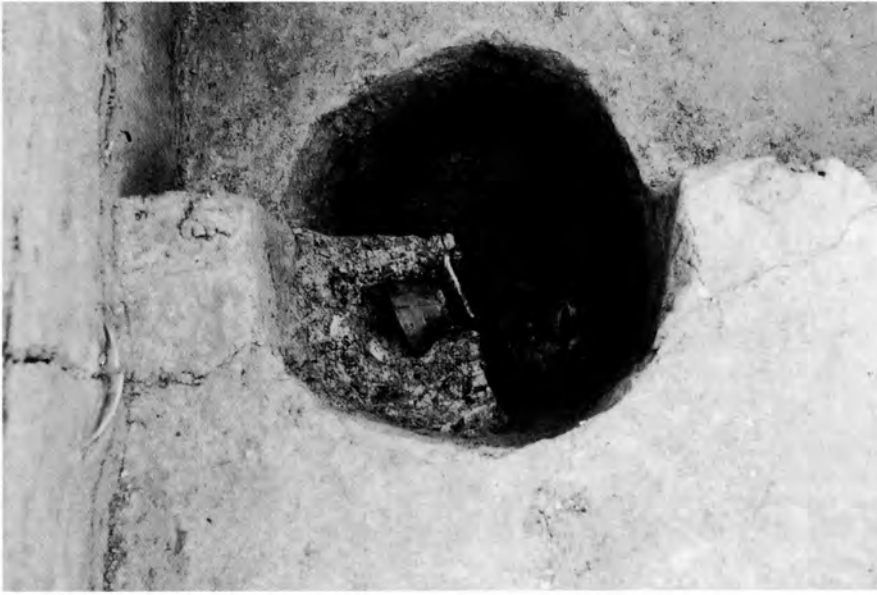


25号全景



25号遺物出土状況





25号貯蔵穴



26号全景



26号遺物出土状況

図版74 C区26号住居跡 (2)

カマド・貯蔵穴周辺
遺物出土状況



カマド周辺遺物出土状況



カマド前面遺物出土状況

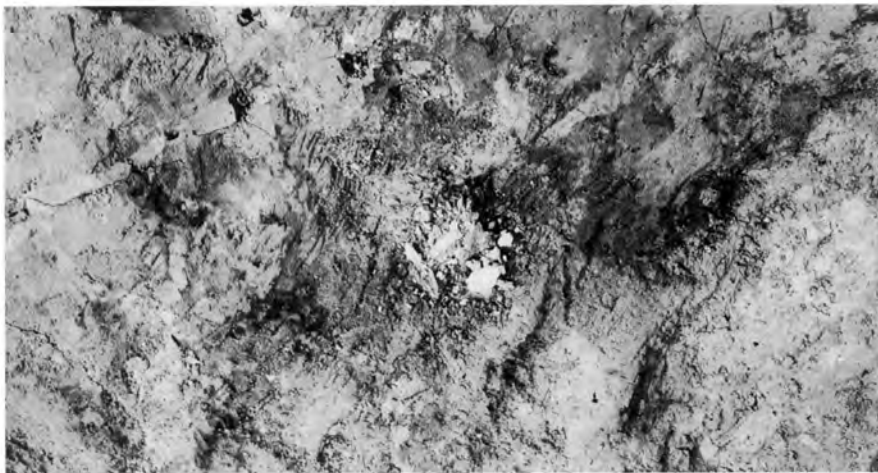




26号カマド



27号全景



27号骨片出土状況



カマド周辺遺物出土状況1



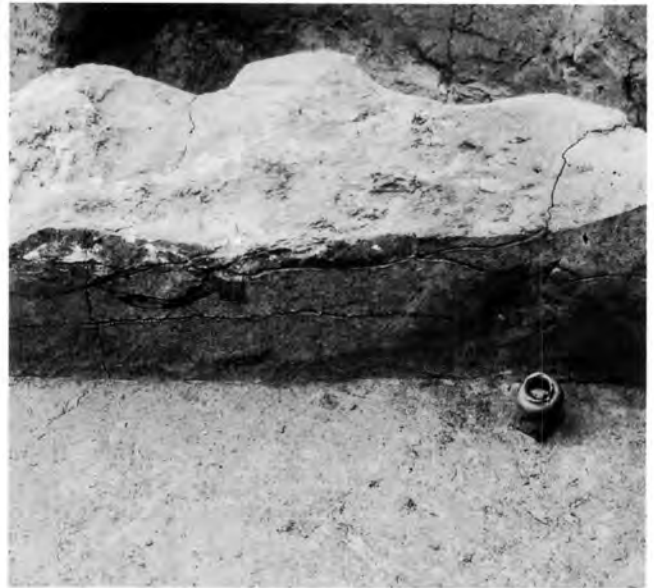
カマド



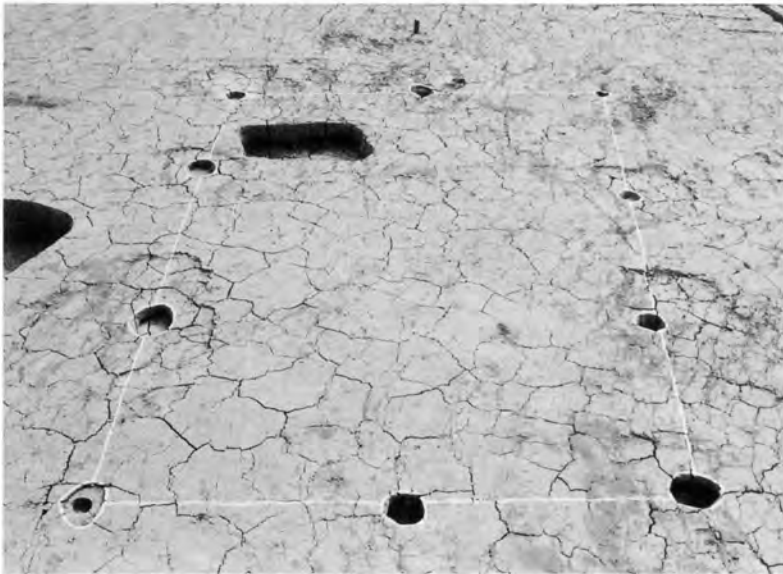
カマド周辺遺物出土状況2



右拡大



27号住居跡遺物出土状況

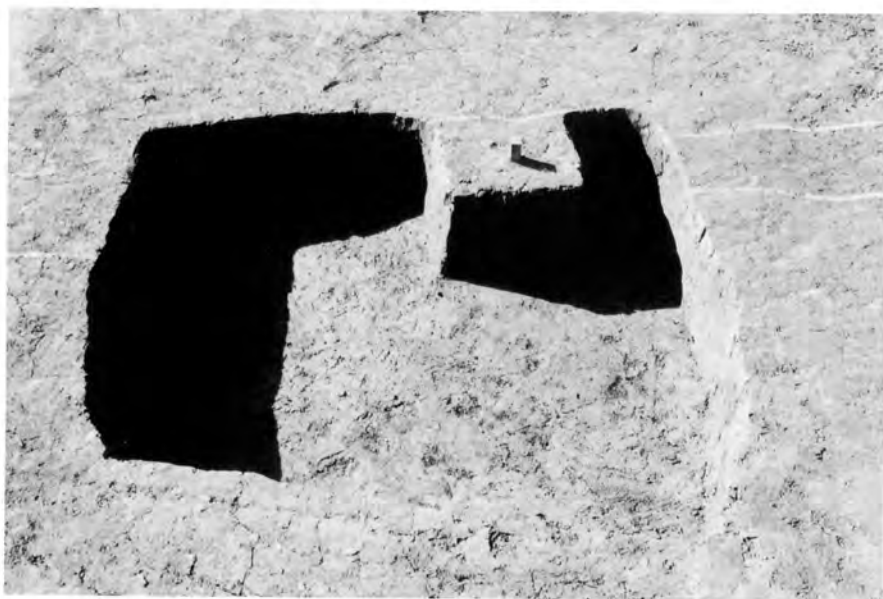


1号掘立全景(北東より)



1号掘立全景(南西より)

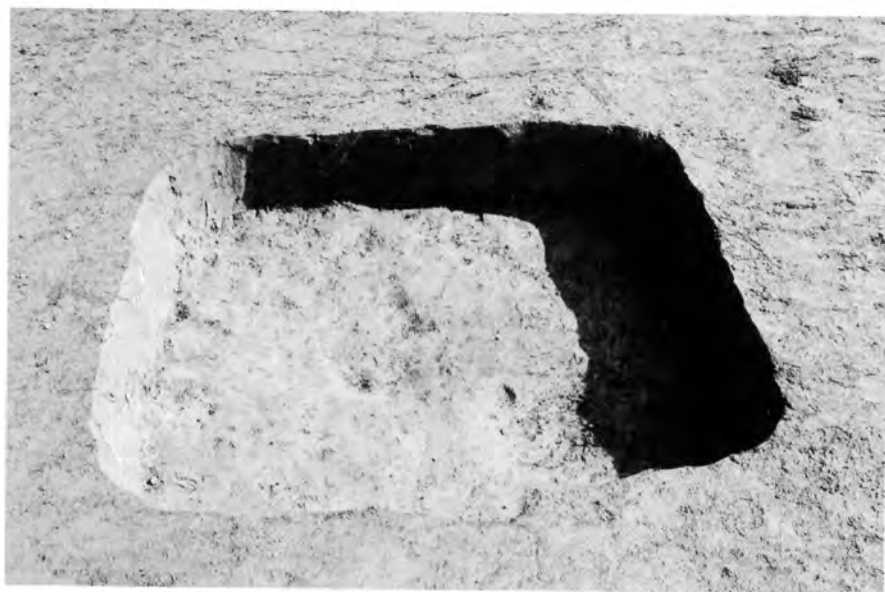
图版78 C区土坑(1)



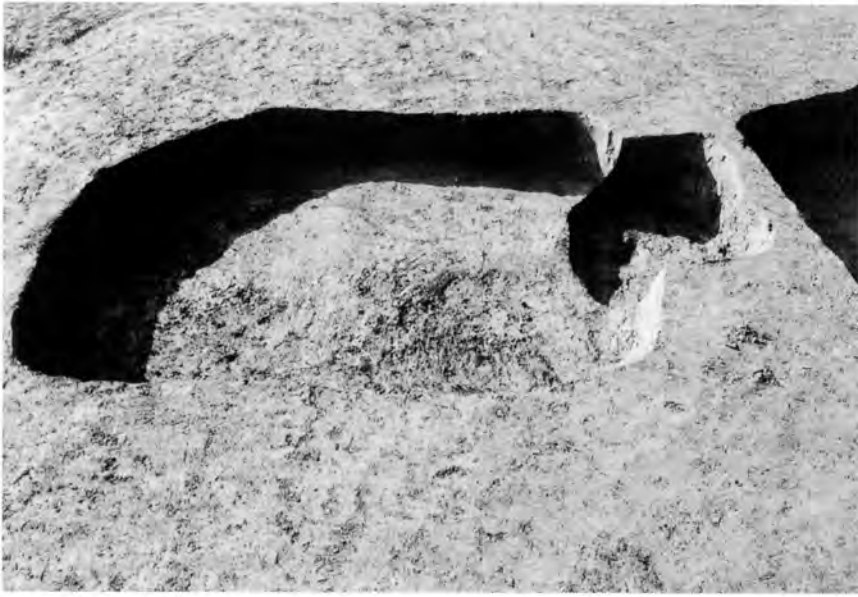
1号



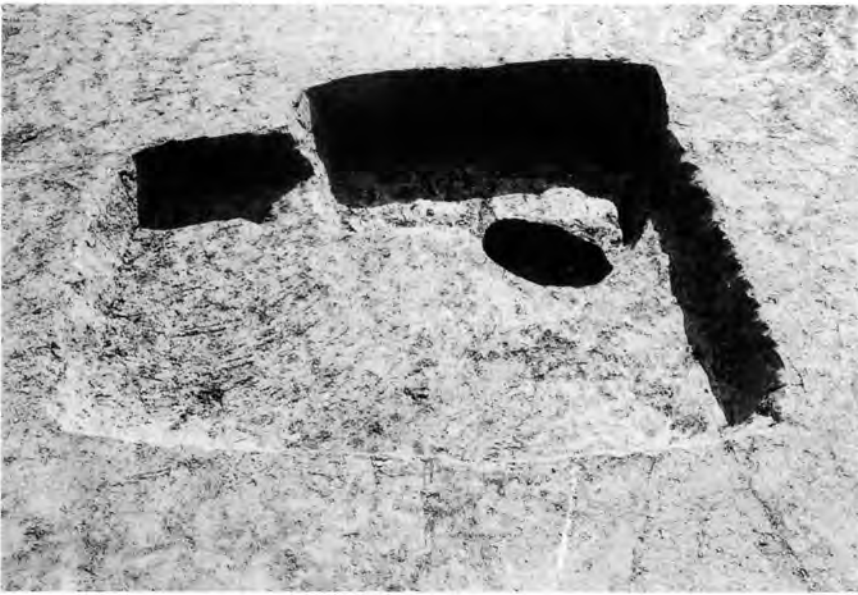
2号



3号



4号·5号



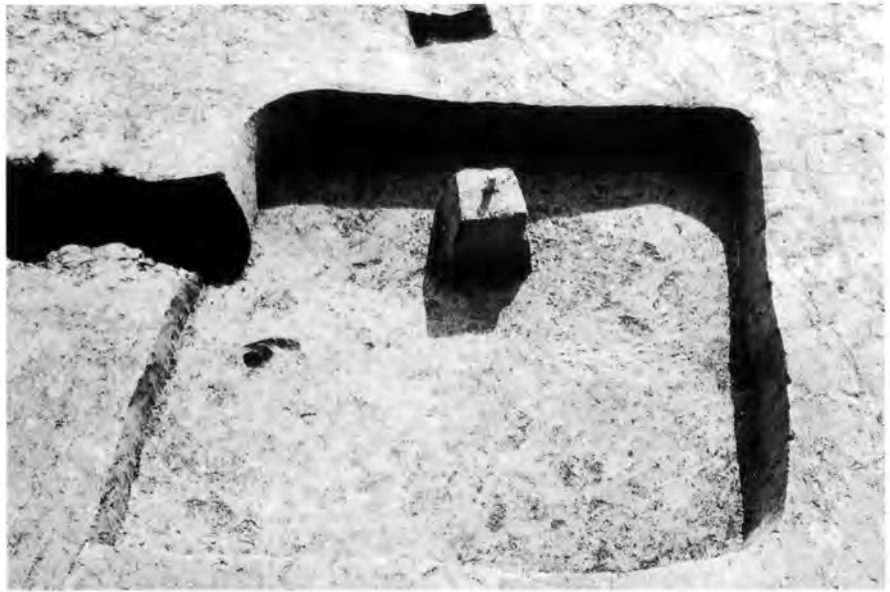
6号·7号



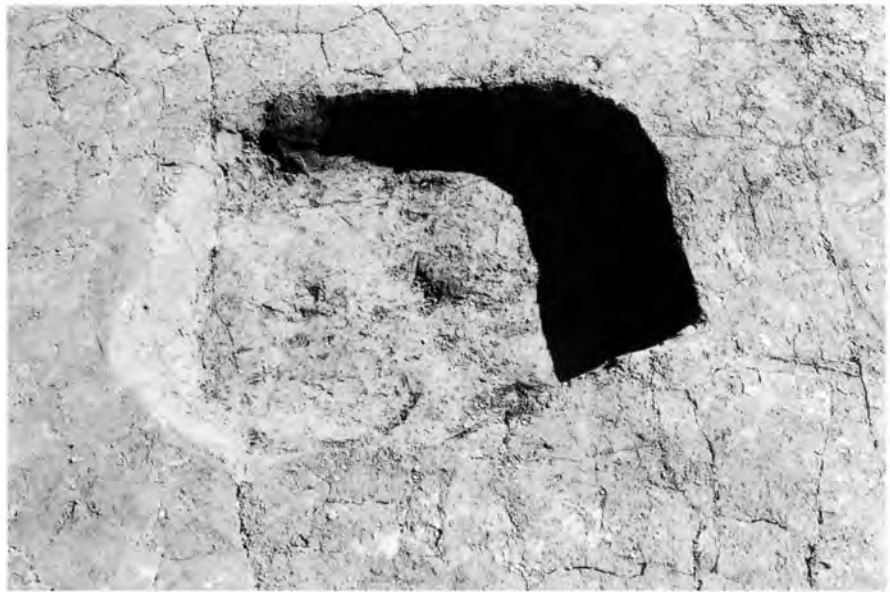
8号·9号

图版80 C区土坑(3)

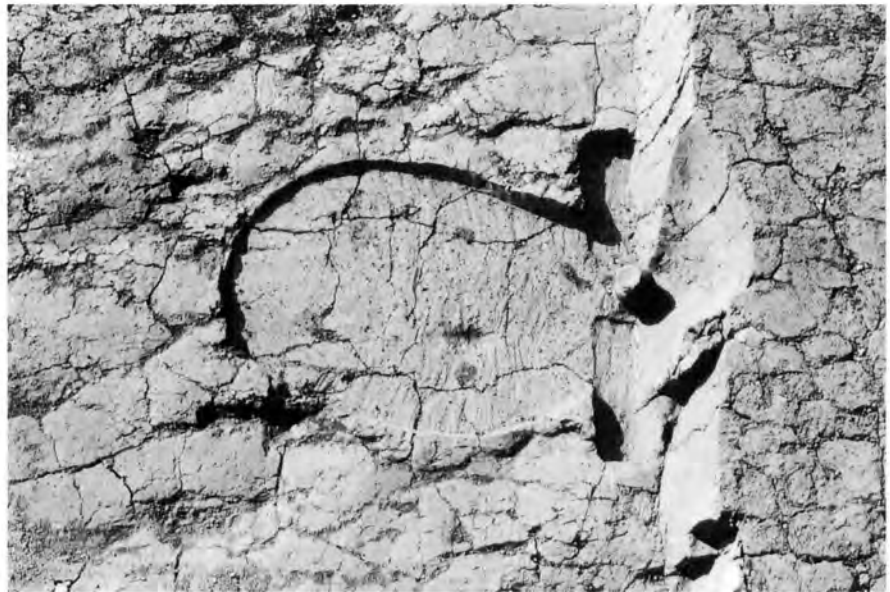
10号

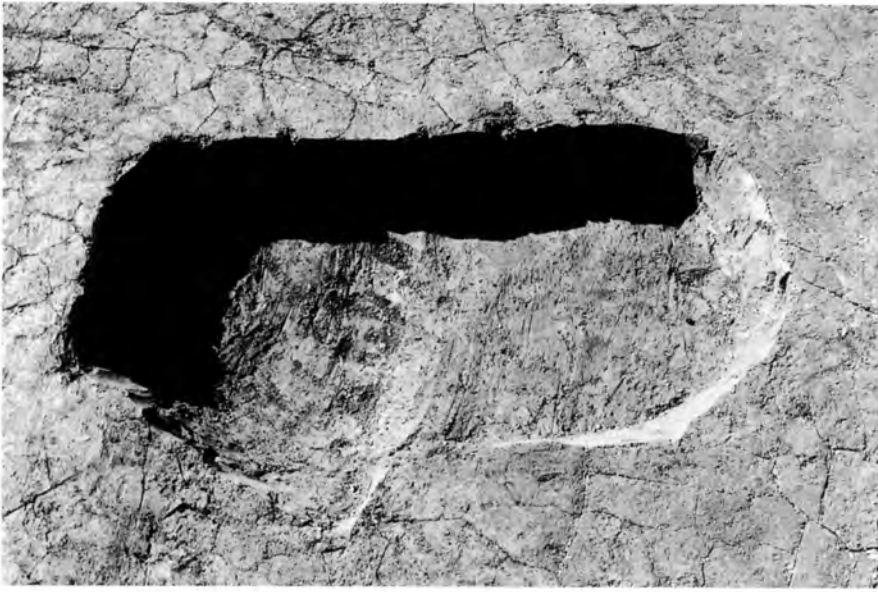


11号



12号





13号



14号



15号·16号

图版82 C区土坑(5)

17号



19号

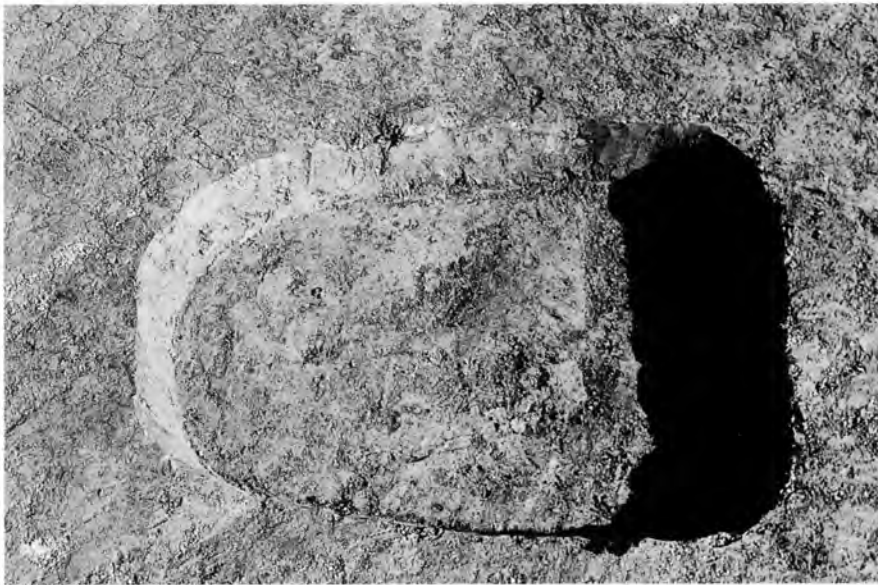


20号





21号



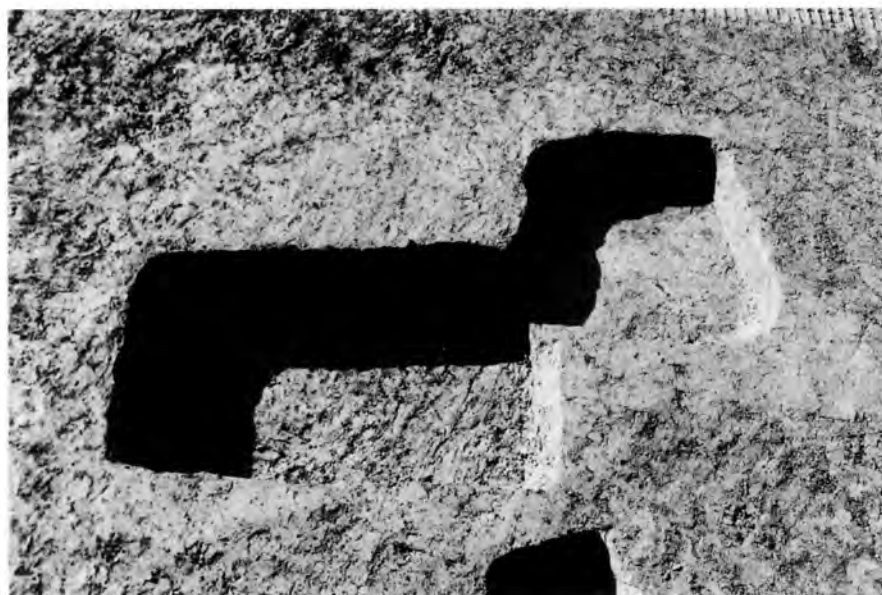
22号



23号·26号

图版84 C区土坑(7)

24号·25号

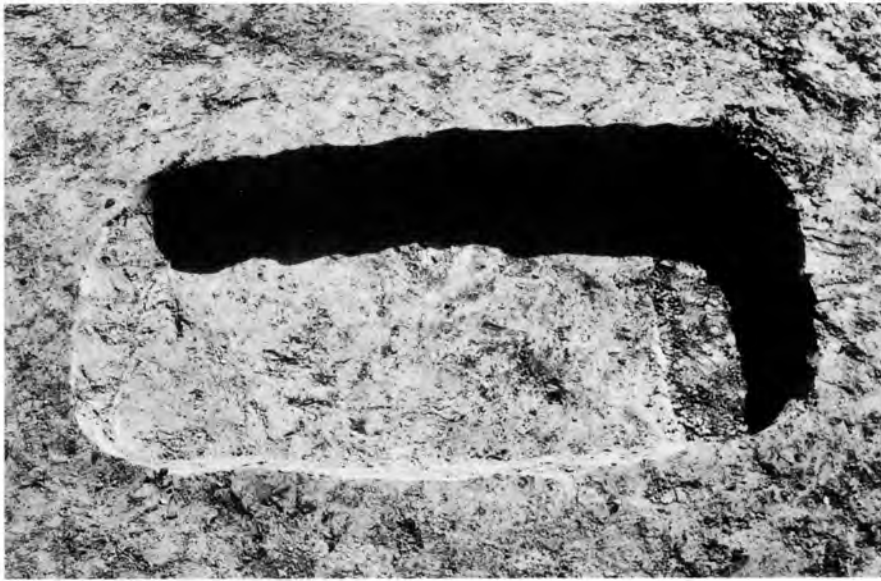


27号

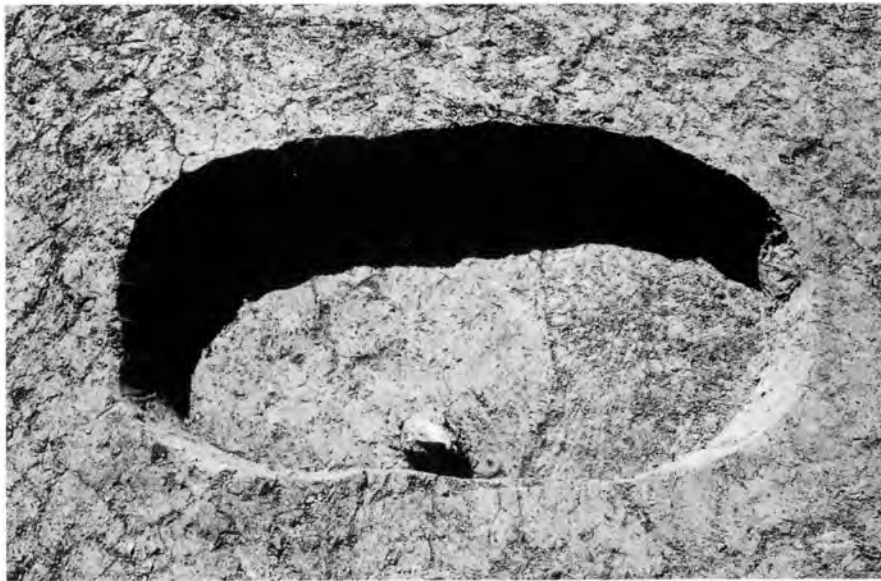


28号

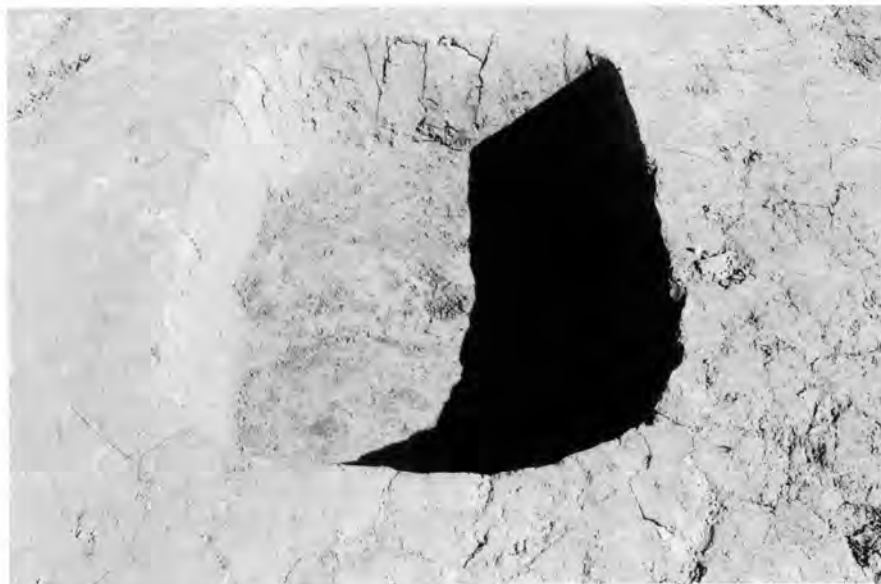




29号



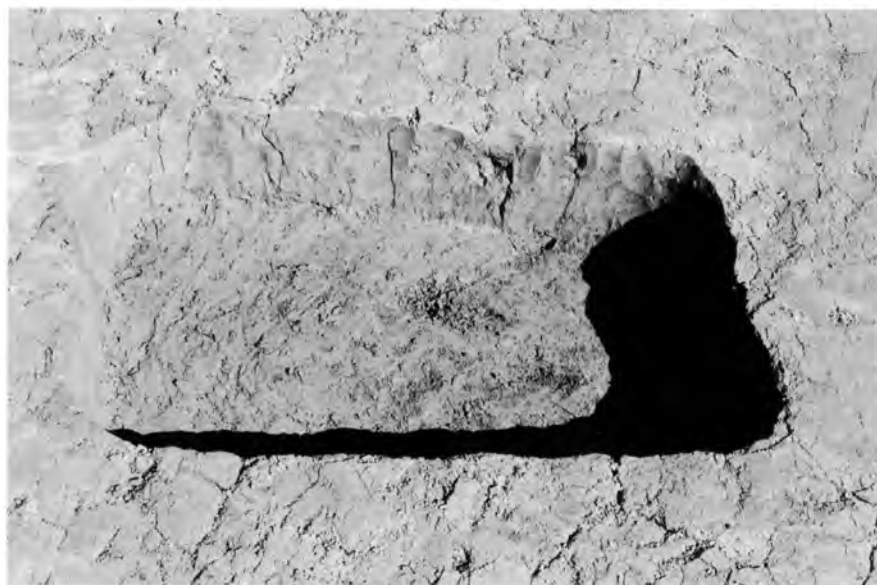
30号



31号

图版86 C区土坑(9)

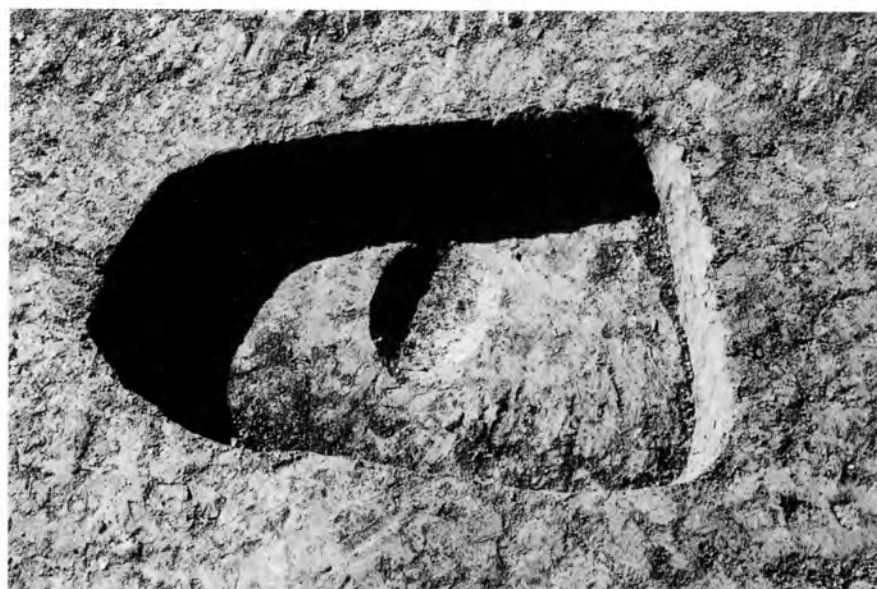
32号



33号



34号

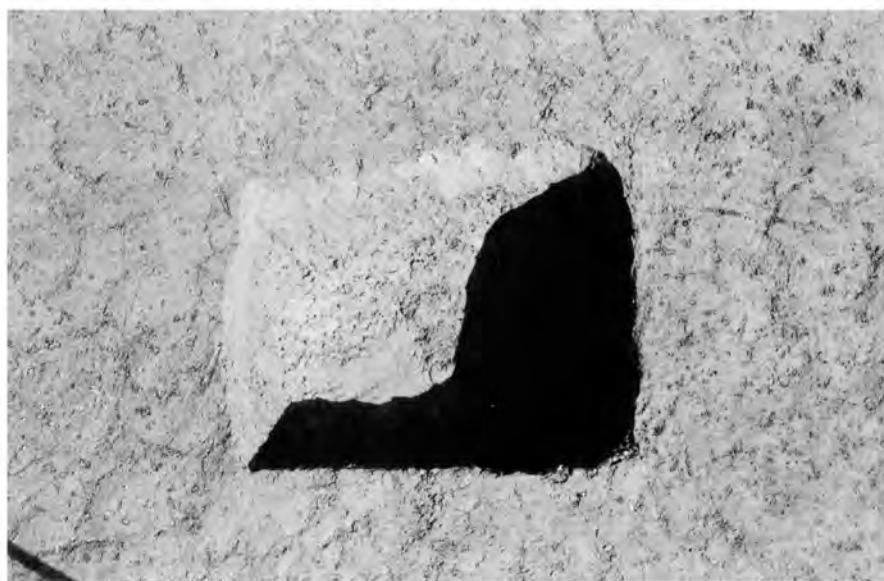




35号



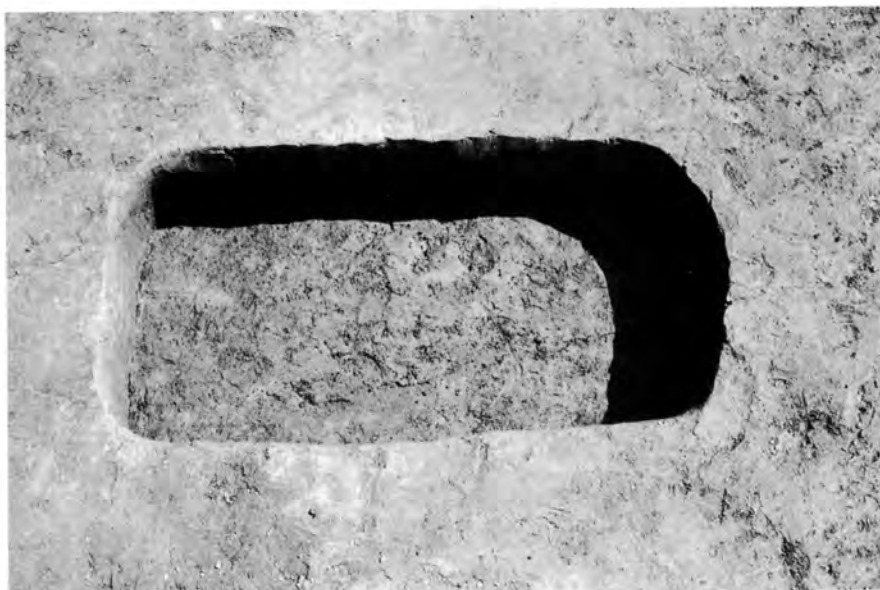
37号



38号

图版88 C区土坑(11)

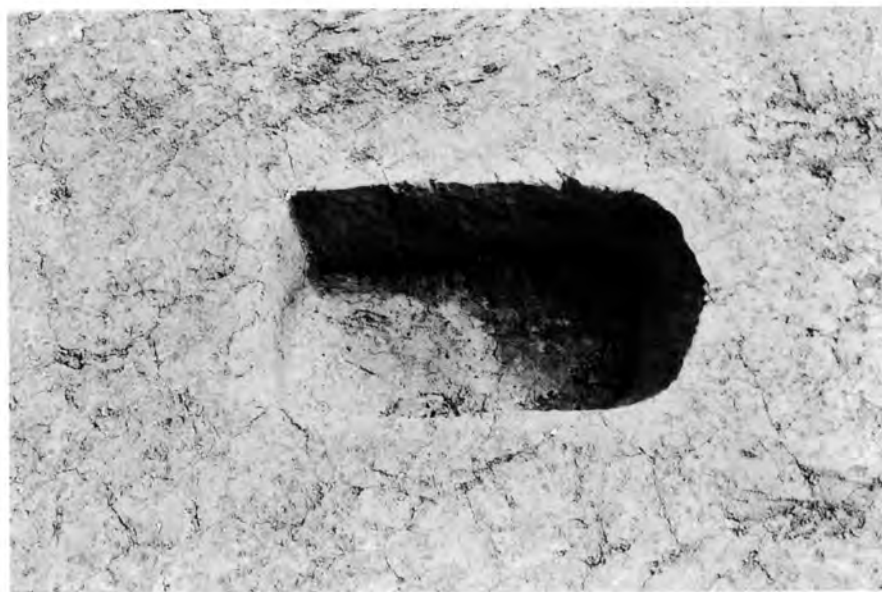
40号



41号



42号





43号



44号



45号

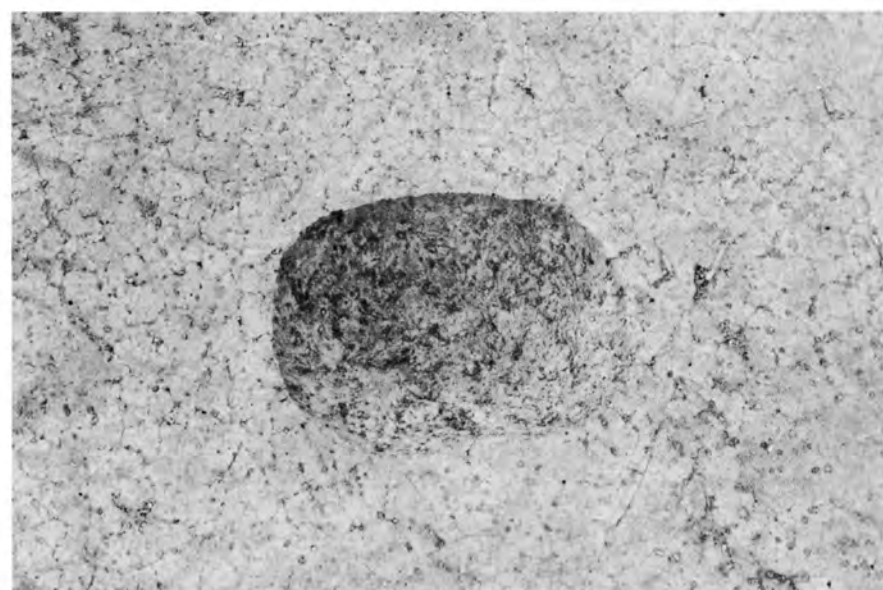
图版90 C区土坑(13)



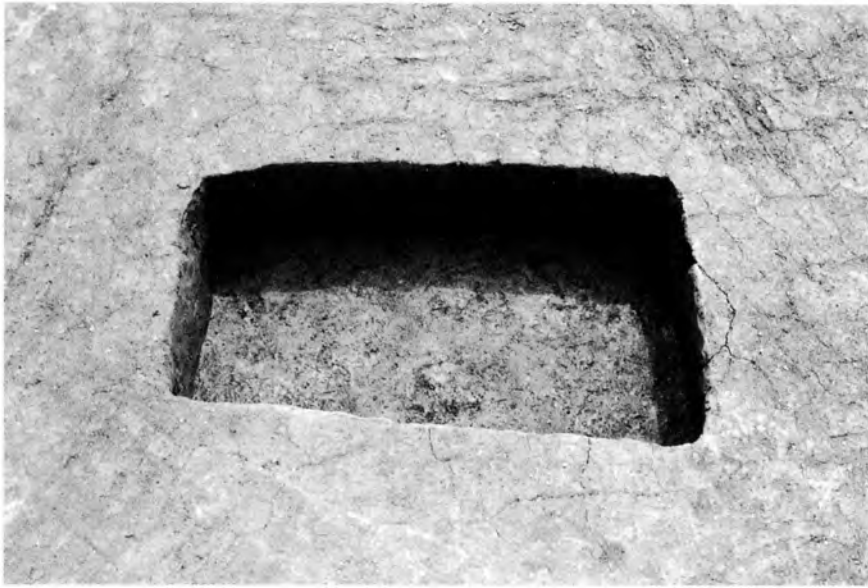
47号·48号·50号



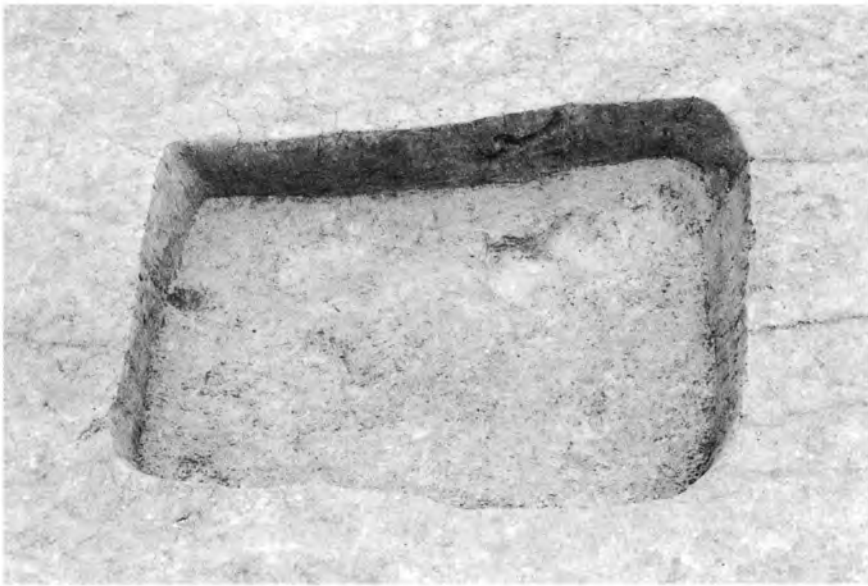
49号



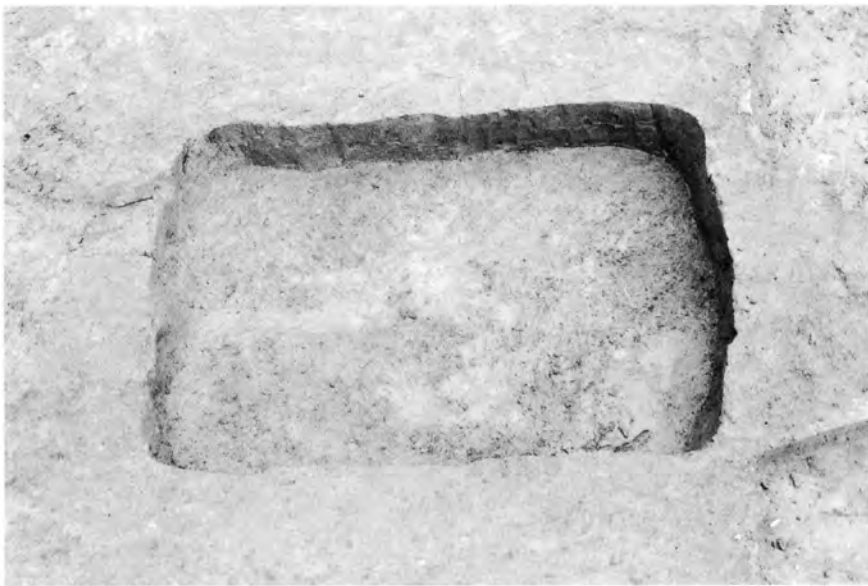
51号



52号



53号



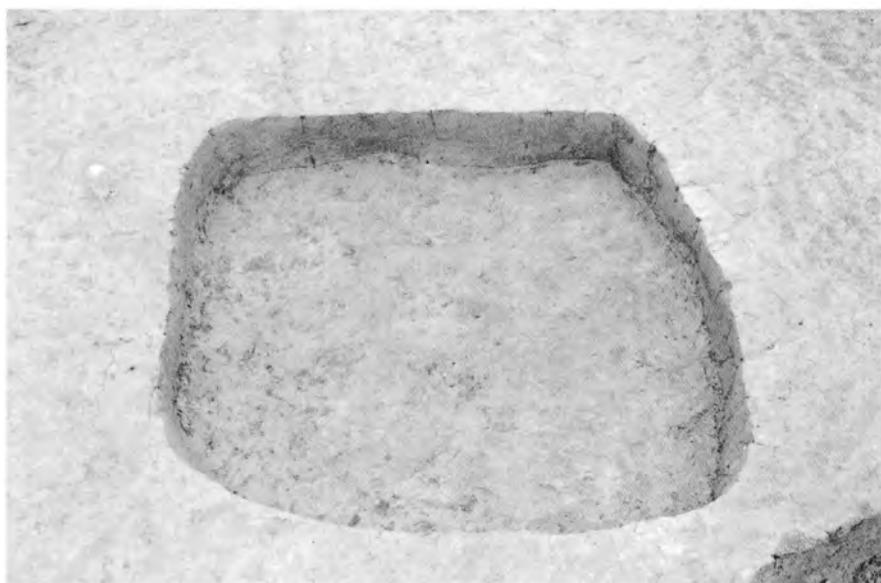
54号

图版92 C区土坑 (15)

55号

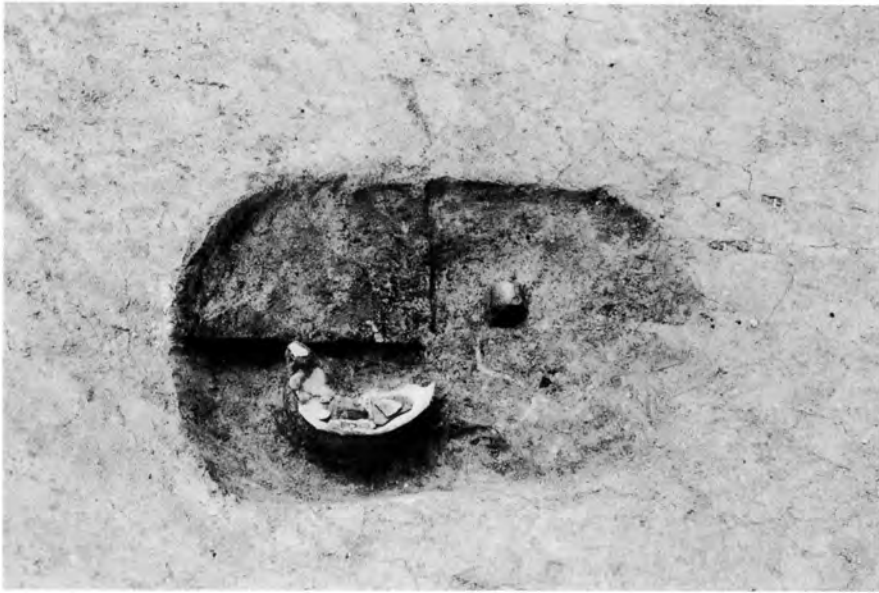


56号



58号

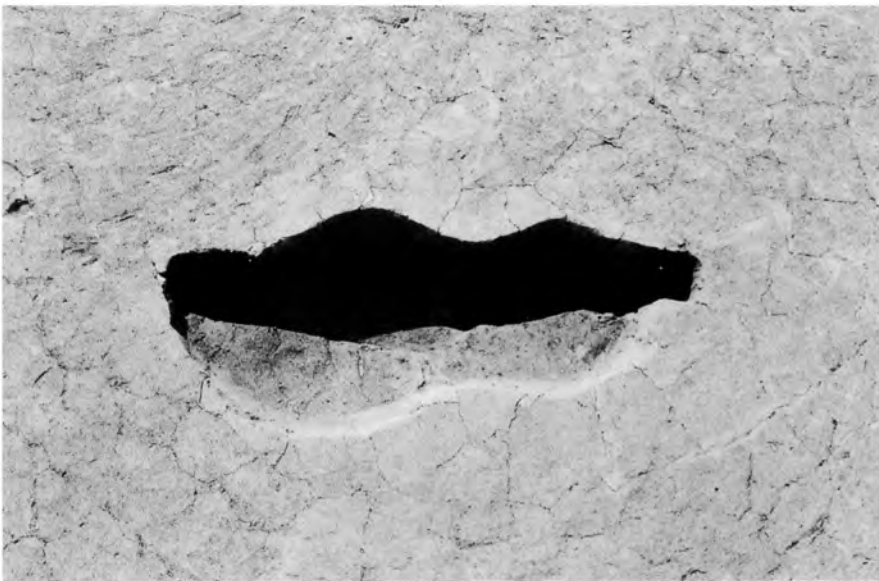




57号遺物・炭化物検出状況



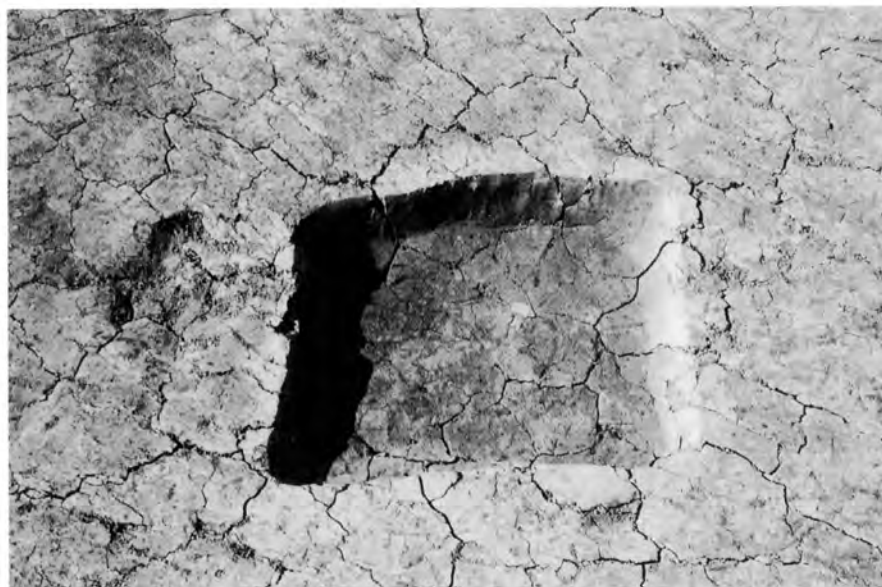
57号最終面



59号

图版94 C区土坑(17)

60号

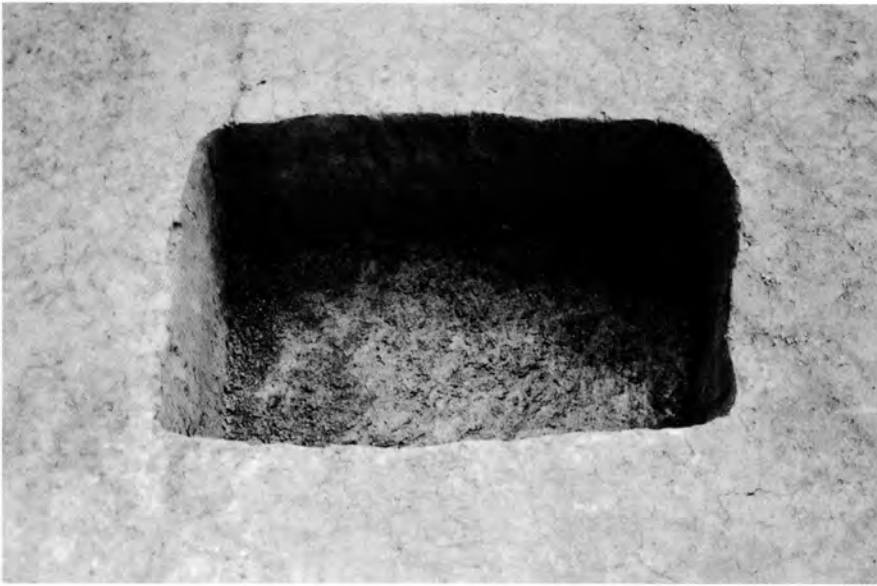


61号

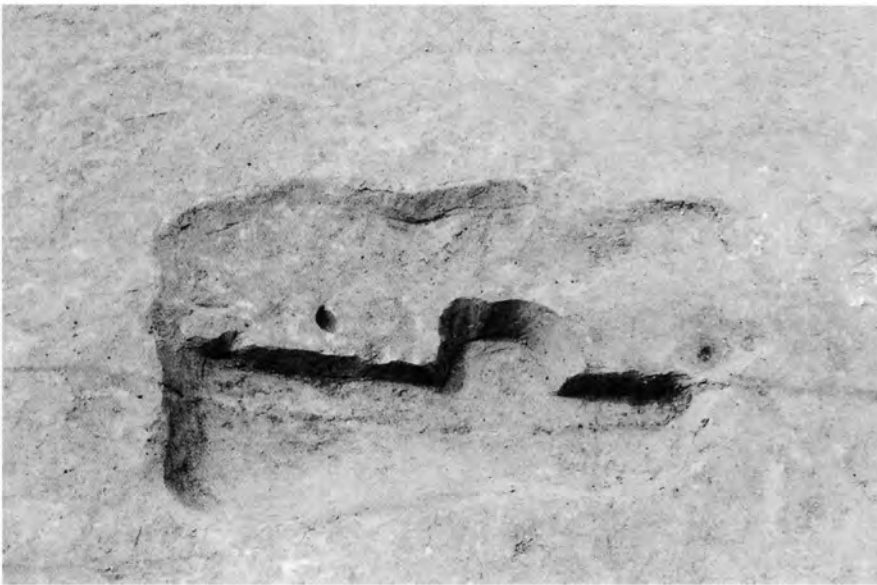


62号

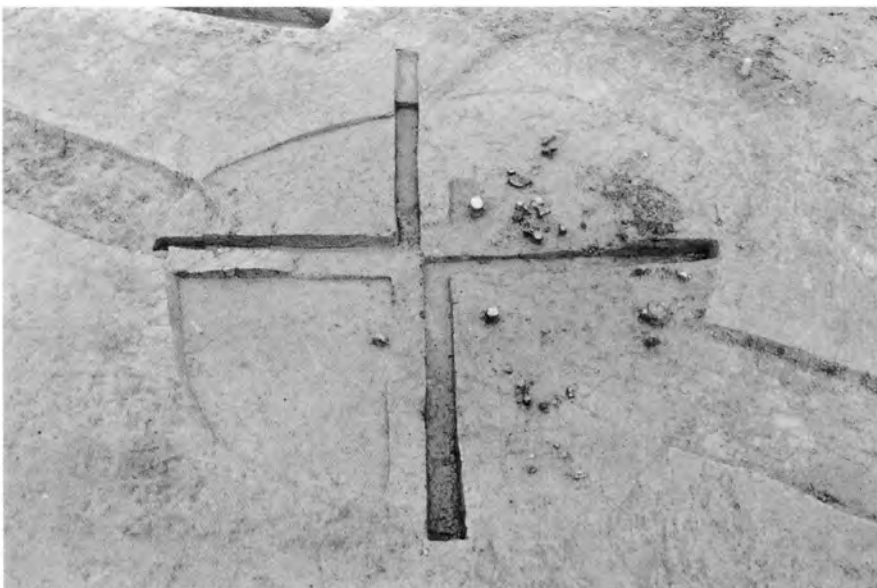




63号



64号



66号

图版96 C区畝跡 (1)



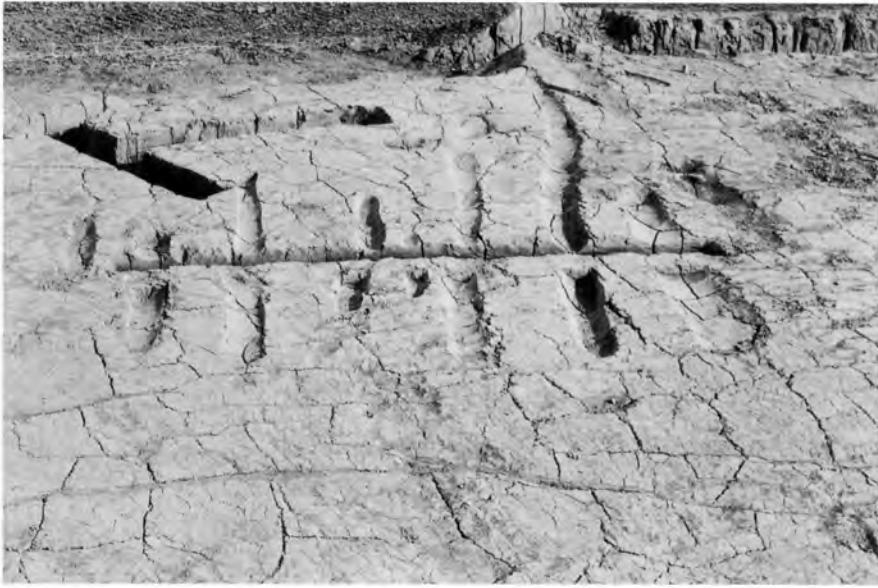
1号



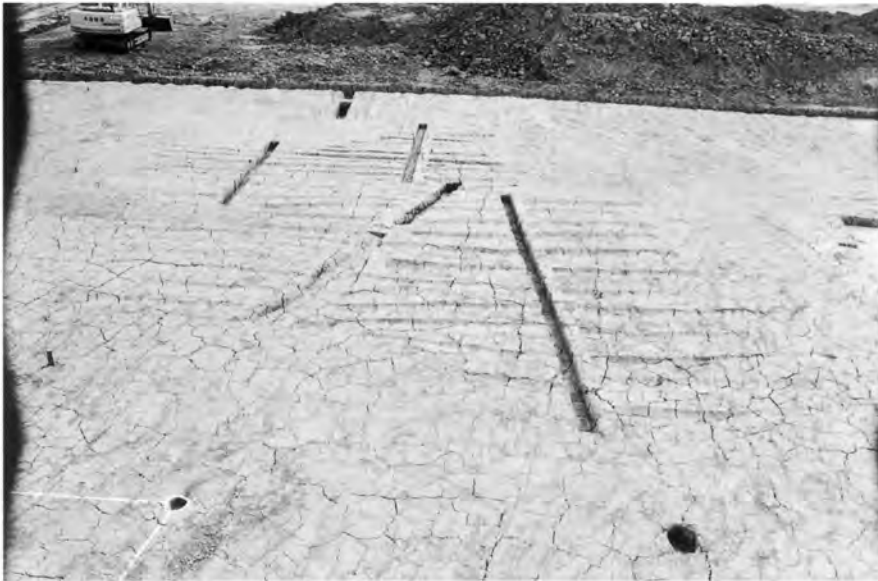
2号



3号



4号



5号



6号

図版98 C区畠跡 (3)



7号



8号・9号 (東より)



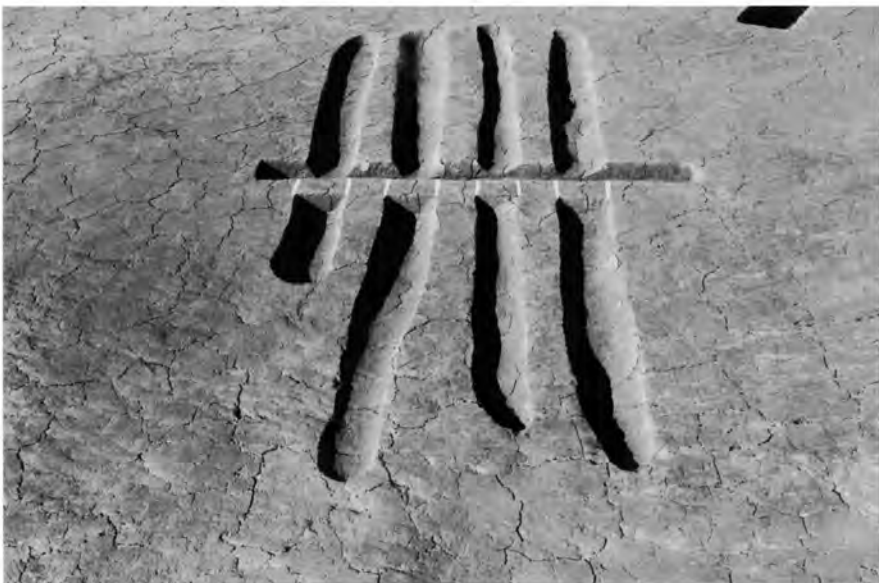
8号・9号拡大



8号西北端部石鏃検出状況



10号北群



10号南群

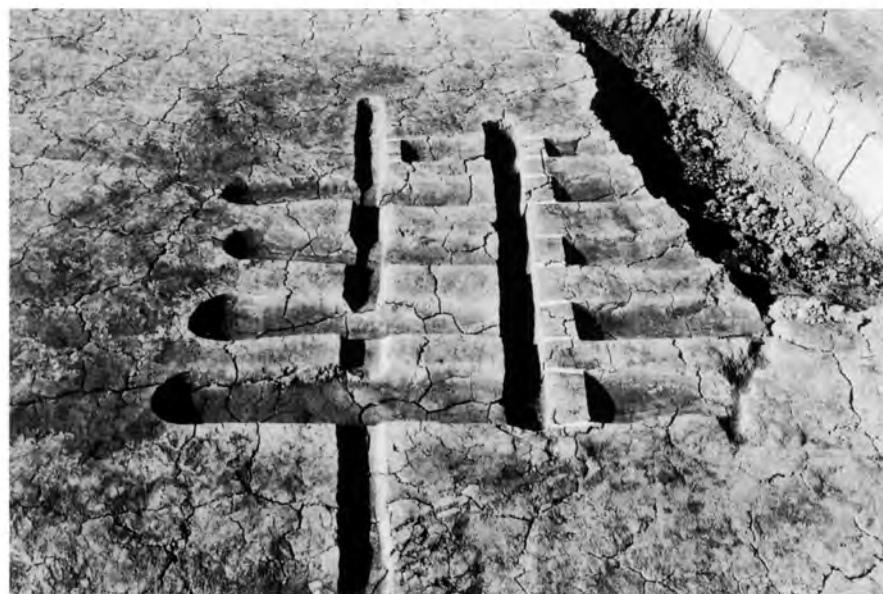
图版100 C区畝跡 (5)



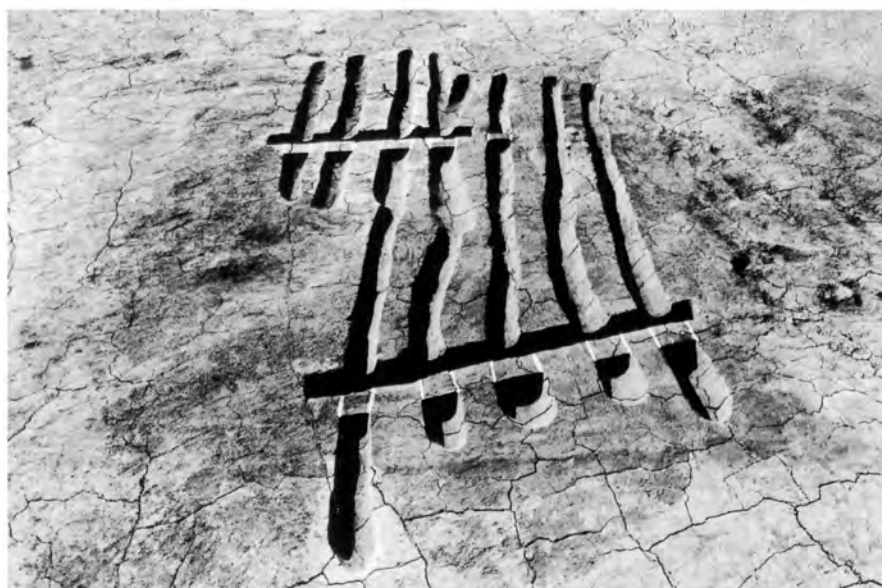
11号東群



11号西群 · 14号西群



12号



13号



14号中群



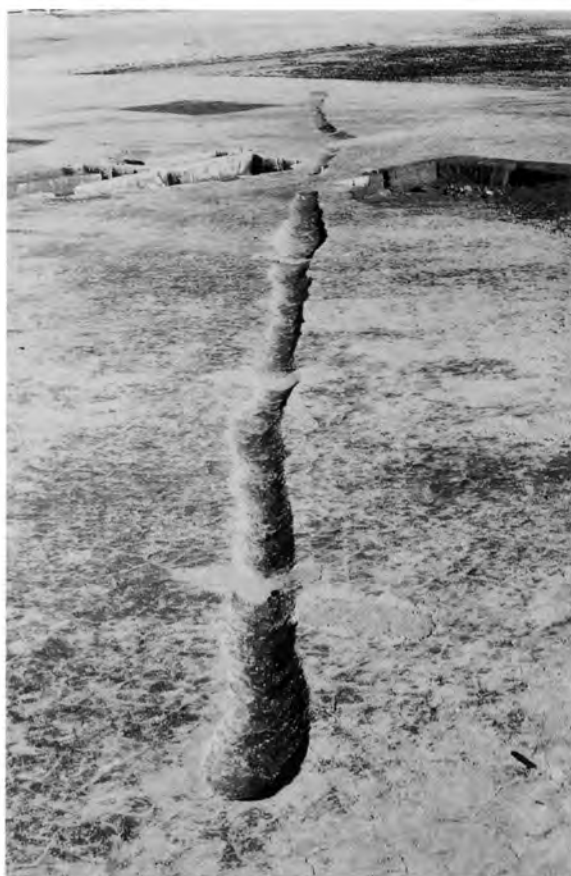
14号東群



15号畝跡



1号溝跡

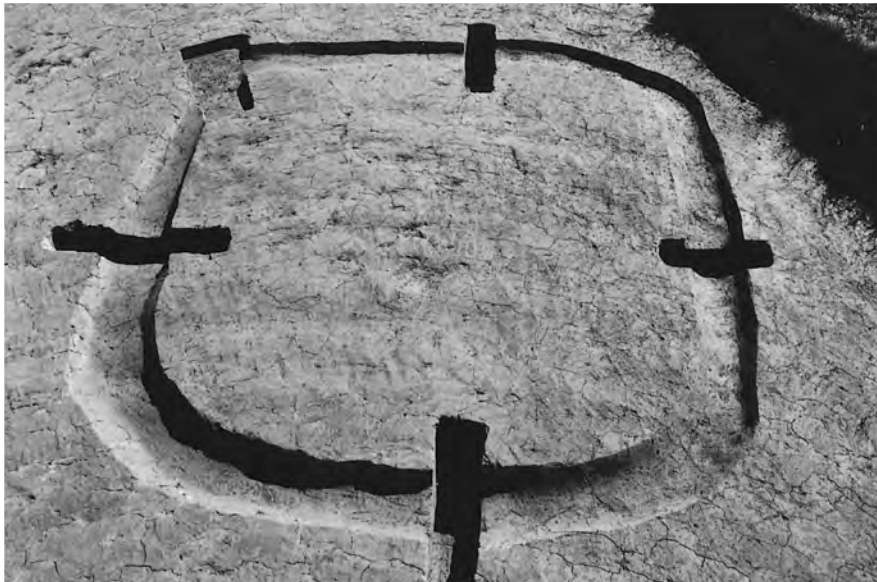


2号溝跡

图版103 C区沟迹（2）· 1号方形周溝遺構



3号· 4号溝跡



1号方形周溝遺構



同遺物出土狀況

图版104 C区土器集中 (1)



No. 1 全景



No. 1 遺物出土状況 1



No. 1 遺物出土状況 2



No.1 遺物出土状況



No.2 全景



No.2 遺物出土状況

图版106 C区土器集中 (3)

No.3 全景



No.3 遺物出土狀況



No.4 全景





1-1



3 (口縁部)



4-1



3



2



4



3

图版108 C区5号住居跡出土遺物 ①



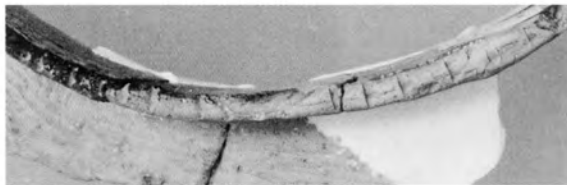
1



2



4



6



7



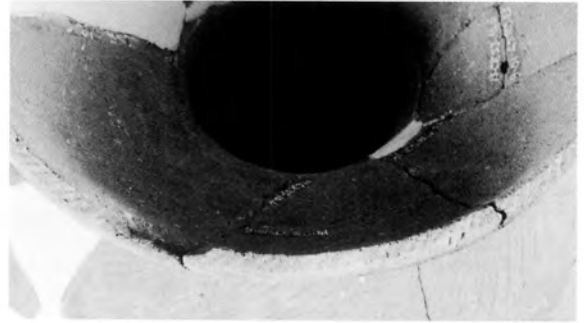
8



12



10 (口縁部)



11 (口縁部)



10



11



13



16

图版110 C区6号·7号·9号 ① 住居跡出土遺物



6-1



7-1



3



9-1



4



2



3



4



5



6



7



8

図版112 C区10号住居跡出土遺物



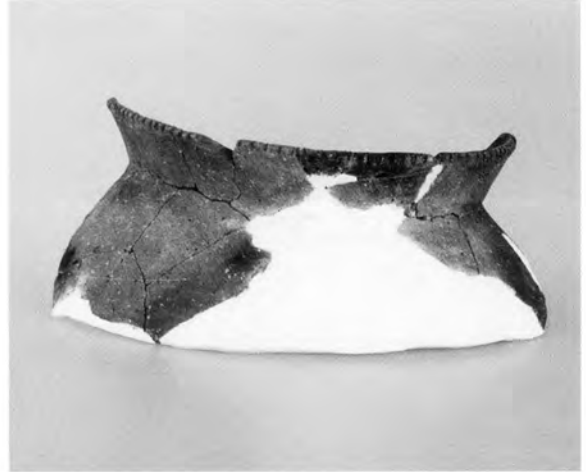
5 (口縁部)



6 (口縁部)



5



6



7 (口縁部)



8



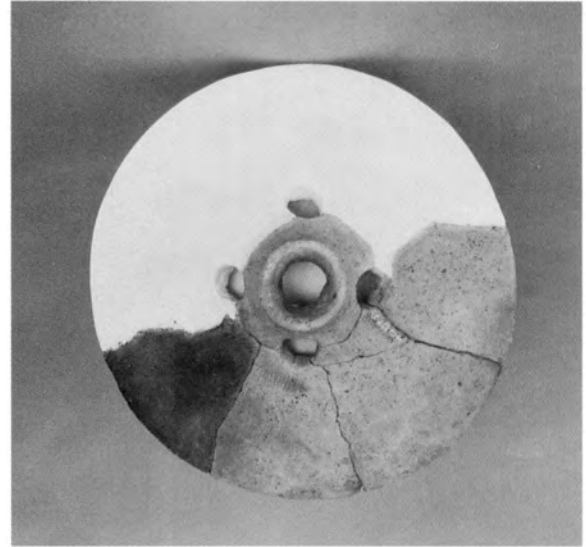
7



8 (底面)



12-1



13-1 (上面部)



2



1



3



10



2

图版114 C区13号住居迹出土遗物 ②



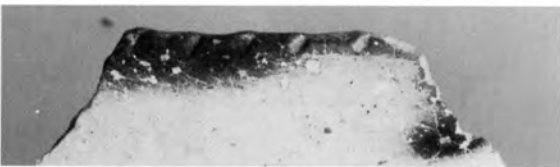
9



11



14



15



16



17



18



13-29



16-9



14-1



17-1



15-1



16-3



17-2



9



19



14



21



軽石



28



3



4



5 (口縁部)



9



5

图版118 C区19号·20号住居跡出土遺物



19-1



20-2



3



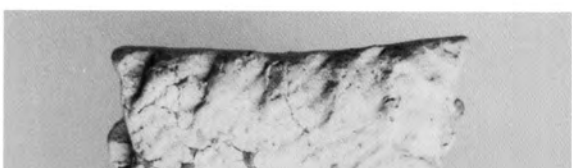
3



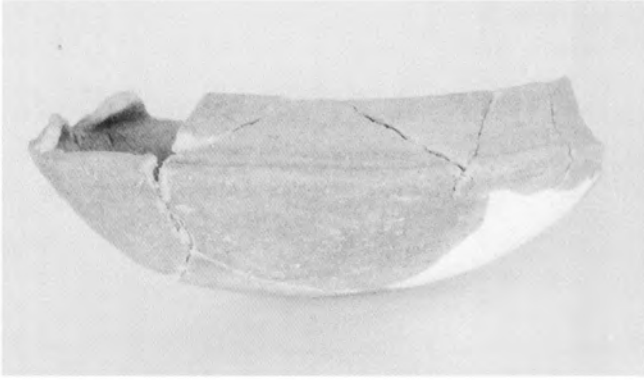
4



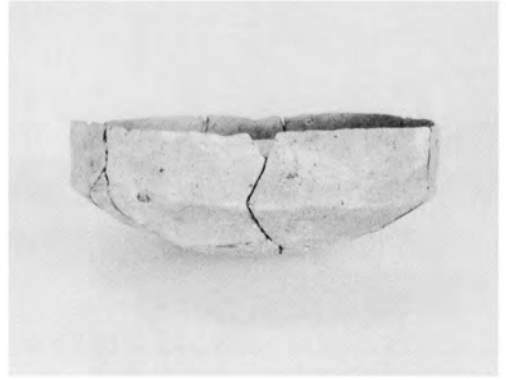
8



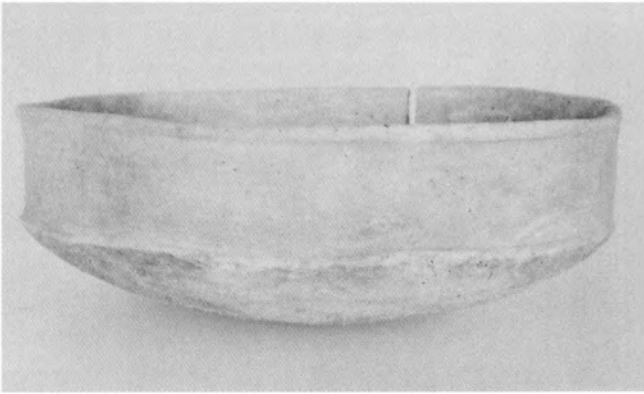
9



1



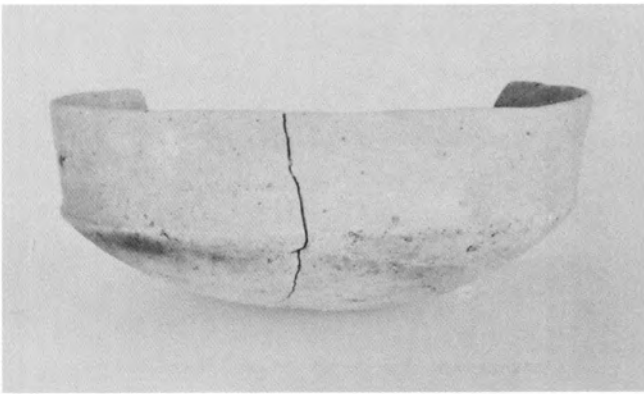
10



7



11



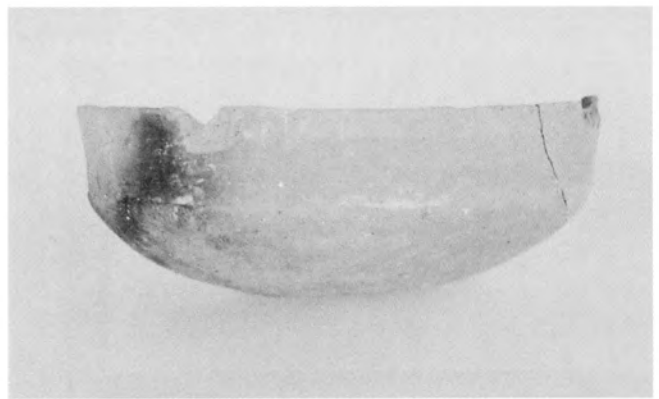
8



13



9



14

图版120 C区21号住居跡出土遺物 ②



15



23



17



27



18



29



20



30



31



34



35



41



42



43



21-44



5



45



11



22-1



24-1



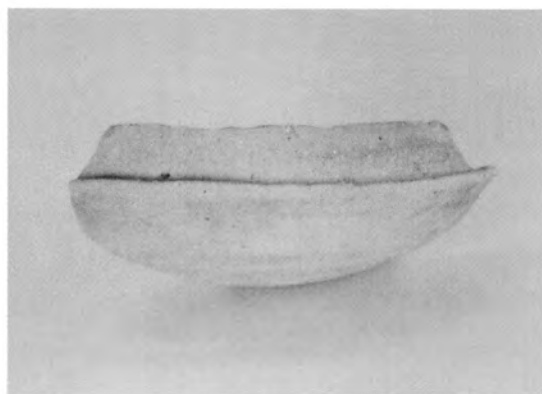
23-2



2



25-2



26-1



4



3



4



5



5

图版124 C区26号住居跡出土遺物 ②



6



10



7



11



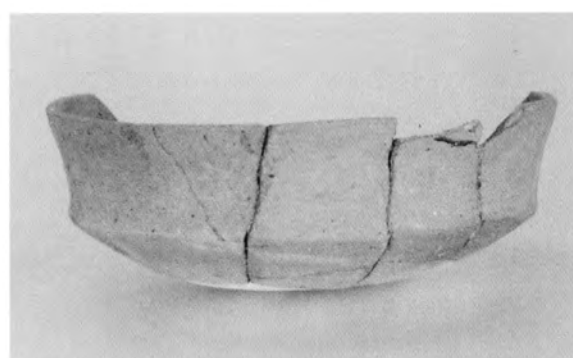
8



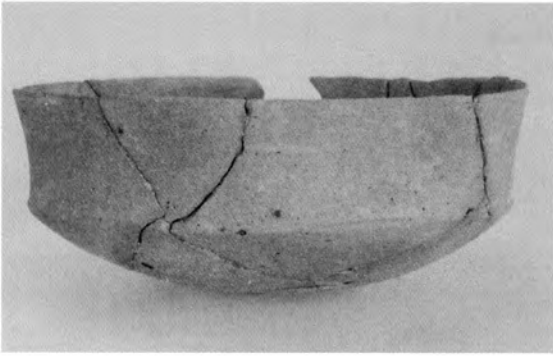
12



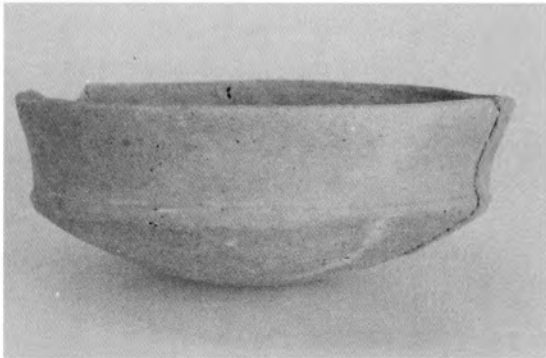
9



13



14



15



16



17



18



19



20

图版126 C区26号住居跡出土遺物 ④



21



28



24



29



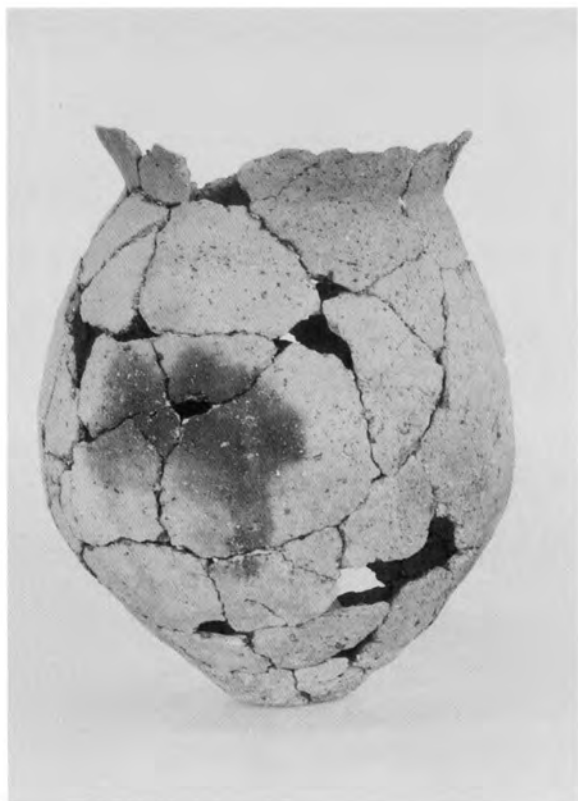
25



27



31



32



34



33



35



36



39



37



41



42



44



43



46

图版130 C区26号住居跡出土遺物 ⑧



47



52



50



53



51



54



55



58



56



59



60



57

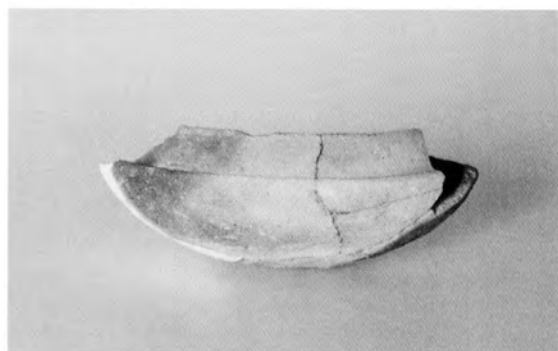


61

图版132 C区27号住居跡出土遺物 ①



1



7



2



8



3



9



4



10



12



17



14



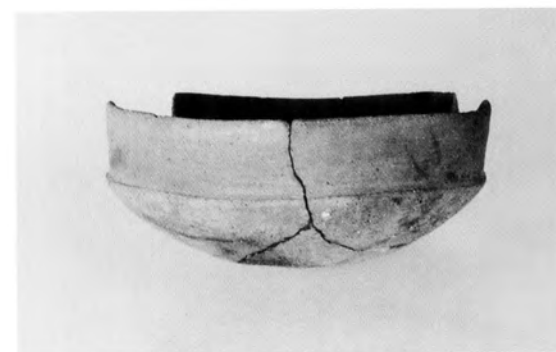
19



15



20



16



21

图版134 C区27号住居跡出土遺物 ③



22



26



23



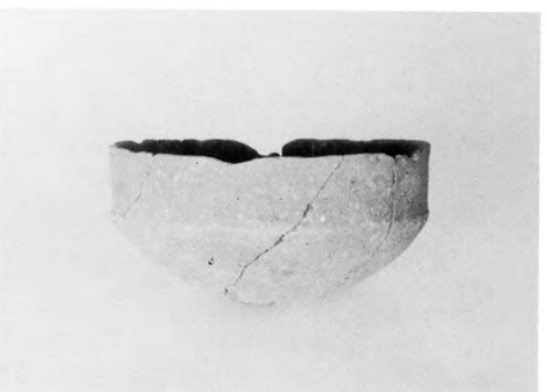
27



24



31



25



35



36



41



37



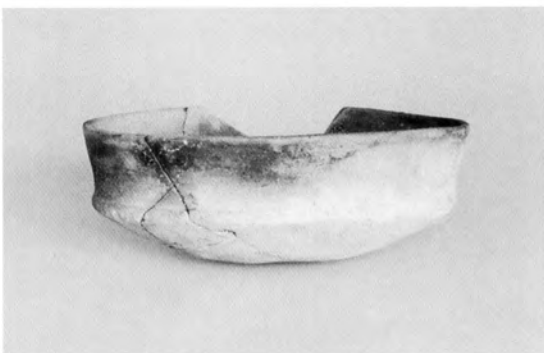
42



38



43



40

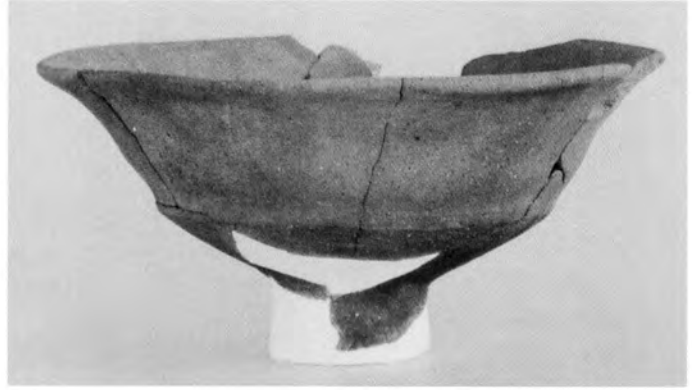


44

图版136 C区27号住居迹出土遺物 ⑤



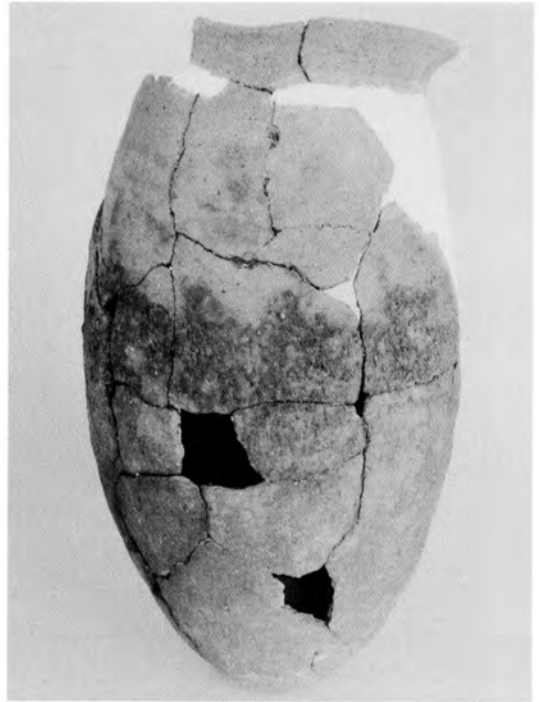
46



50



47



53



52



54



55



56



63



66



59



60

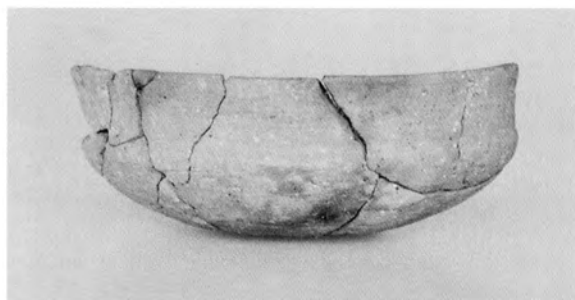


65

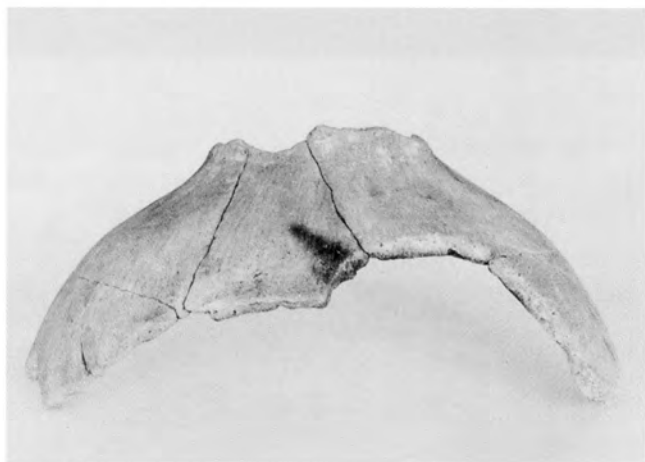
图版138 C区土坑·2号沟出土遗物



土坑10-1



66-2



31-2



66-4



54-2



59-1



沟2-3



1



2



3



5



6



7

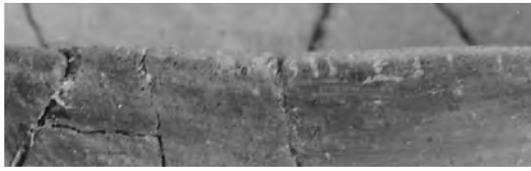
図版140 C区土器集中No.1 出土遺物 ②



8



10 (口縁部)



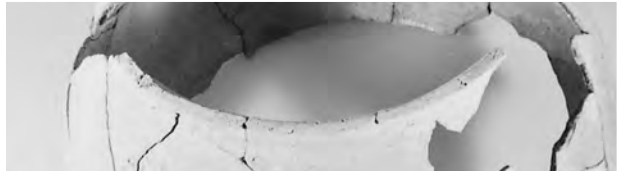
11 (口縁部)



10



11



16 (口縁部)



16



12



19



13



20



17



21

图版142 C区土器集中No.2 出土遺物



1



4



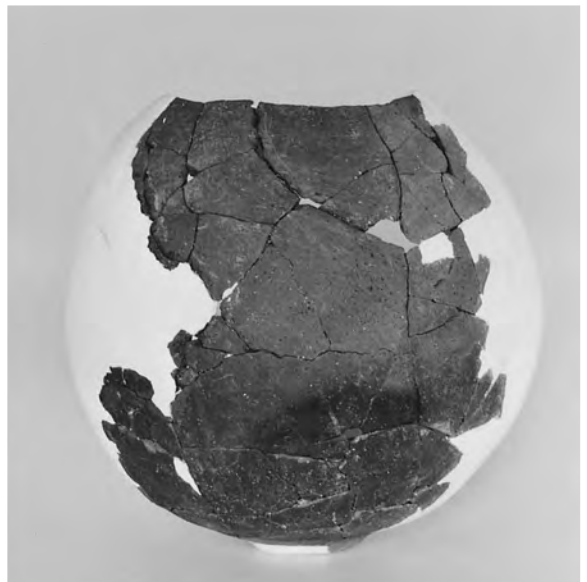
2



5



3



6



1



4



2



5



3



6

图版144 C区土器集中No.3出土遺物 ②



7



8



9



10



11



12



土器集中No.4-2



遺構外-2



18



3



20

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いっぽんぎまえいせき							
書 名	一本木前遺跡IV							
副 書 名	平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	—							
シ リ ー ズ 名	—							
シ リ ー ズ 番 号	—							
編 集 者 名	寺社下 博							
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所 在 地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発 行 年 月 日	西暦2003 (平成15) 年 3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯 (°′″)	東緯 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一本木前遺跡	熊谷市大字東別府 1390番地他	11202	105	36°11′17″	139°21′39″	20010601 ～ 20020329	17,100	調節池掘削
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
一本木前遺跡 B区	墳 墓	古墳時代 前期	方形周溝墓	4基	土師器 石製品 (砥石) (勾玉、管玉) その他 (骨片)	古墳時代前期の集落内に 4基の方形周溝墓が 検出され、そのうち2 号方形周溝墓の主体部 から翡翠製の勾玉が検 出された。		
		集落跡	古墳時代 前期	住居跡	1軒		土師器	
	古墳時代 後期		住居跡 畠跡	3軒 4ヶ所	土師器 石製品 (砥石) 土製品 (土錘)			
	奈良・平 安時代		柵列 溝跡 土坑 井戸跡	2列 9条 6基 3基	土師器 須恵器 石製品 (砥石、石製模造品) 鉄製品 土製品 (土錘)			
	中世以降		柵列 溝跡 土坑 井戸跡	1列 1条 6基 2基	土師器 陶磁器			
	時期不明				打製石斧 滑石製勾玉			
一本木前遺跡 C区	集落跡	古墳時代 前期	住居跡 土器集中地点	21軒 4ヶ所	土師器 ミニチュア土器 石製品 (石鏃、砥石)	B区2号方形周溝墓の 西に隣接して、2ヶ所 の土器集中地点が検出 され、方形周溝墓の、 周溝埋没後の土器祭祀 のあり方を示すものと して注目される。		
		古墳時代 後期	住居跡 方形周溝遺構 土坑 畠跡	6軒 1基 6基 15ヶ所	土師器 須恵器 ミニチュア土器 石製品 (紡錘車、砥石) 鉄製品 (刀子)			
		奈良・平 安時代	掘立柱建物跡 溝跡 土坑	1棟 4条 60基				
		時期不明			土師器 石鏃			

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

一本木前遺跡Ⅳ

平成15年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社



さくらのまち“熊谷”